

転生したら柱の女だった件

ひさなほびー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づいたら紀元前だった。

何を言ってるかわからねーと思うが、つまりは転生だ。

おまけにどうもわたしは人間じゃないらしい。よりにもよって柱の男の一族に転生って、ちよつとそれってどうなんですかね！

でも下手するとカーズ様に殺されちゃう。それは嫌だ！

てな感じで、生きるためにカーズ様の仲間にならざるを得なかった転生者が、それでも人としてジョジョの世界でなるべく原作より人が死なないようにがんばるお話。

あわよくば世界を一巡させない勇氣！

※更新は不定期です。

目次

Part. 1 いまだ星なき世界の転生者

1.	転生したら柱の女だった件	1
2.	師曰く「滅びよ」	11
3.	任務は子育て	18
4.	それは福音か災厄か	26
5.	目覚めた力	33
6.	カーズ様「私にいい考えがある」	39
7.	初スタンドバトル	47
8.	第二の矢	59
9.	波紋登場	68
10.	伝説との邂逅	76
11.	波紋戦士・太公望	84
12.	幽波紋戦士・太公望	90
13.	おしおき	101
14.	悟れ！ アルフィー	109
15.	第三の矢	120
16.	合法ロリVS脱法ロリ	130
17.	旅は道連れ	139
18.	ローマ、その力の源	145
19.	あっちこっち	153
20.	帰省	159
21.	バタフライエフェクトLv100 上	165
22.	バタフライエフェクトLv100 下	172
23.	サンタナの吸血鬼レポート	179

24.	神が住む山	185
25.	嫌な予感は大体当たる	192
26.	新しい門出	203
27.	スーパーエイジャ争奪戦 序	210
28.	スーパーエイジャ争奪戦 破	217
29.	スーパーエイジャ争奪戦 急	224
30.	ペル・アスペラ・アド・アストラ 1	234
31.	ペル・アスペラ・アド・アストラ 2	241
32.	ペル・アスペラ・アド・アストラ 3	248
33.	ペル・アスペラ・アド・アストラ 4	255
34.	ペル・アスペラ・アド・アストラ 5	262
35.	アンケ・セ・モリラ・ドマーニ	273
	Part1終了時点のキャラ紹介	280
	Part. 2 エピソード：ルベルクラク	
1.	覚醒のとき	288
2.	今はいっつ？	296
3.	二十世紀の世界	303
4.	イギリス貴族ルベルクラク伯爵家	311
5.	第四の矢	323
6.	あれえ!?	332
7.	この世界のジョースター家	342
8.	そうだイタリア行こう	350
9.	そのとき何があったのか	357
10.	Knight at the Museum(ナイトミュージアム)	365

11.	アヌビス神	374
12.	同盟結成	386
13.	蝶はどこでもはばたく	396
14.	三步進んで二歩下がる	406
15.	先攻、ルベルクラク	415
16.	スピード解決	423
17.	後攻、ルージュフィシユー。それと	430
18.	ロンドンのジョセフ・ジョースター 上	438
19.	ロンドンのジョセフ・ジョースター 中	450
20.	ロンドンのジョセフ・ジョースター 下	459
21.	洋上く日本上陸	468
22.	お前は誰だ	475
23.	ルージュフィシユーと昭和10年の東京	485
24.	死神のいる街 1	492
25.	刀鍛冶の刀語 上	498
26.	刀鍛冶の刀語 下	508
27.	杜王村へようこそ	515
28.	ホーリー&ブライトとザ・パヴァート 上	523
29.	ホーリー&ブライトとザ・パヴァート 中	533
30.	ホーリー&ブライトとザ・パヴァート 下	540
31.	冥刀・神狼姫	553
32.	死神のいる街 2	560
33.	アルフィーちゃんのスタンド講座	567
34.	JORGE JOESTAR 1	575
35.	JORGE JOESTAR 2	584

36.	JORGE	JOESTAR	3
37.	JORGE	JOESTAR	4
38.	JORGE	JOESTAR	5
39.	JORGE	JOESTAR	6
40.	JORGE	JOESTAR	7
41.	JORGE	JOESTAR	8
42.	ルベルクラクとルージュフィシュー		
43.	その輝きを手に		
	Part2終了時点のキャラ紹介く原作キャラ編く		655
	Part2終了時点のキャラ紹介くオリキャラ編く		663
Part. 3 戦鬪潮流			
1.	かくして叛逆の旗が翻る		677
2.	押し寄せる潮流		683
3.	始まりの戦い		691
4.	ストレイツオVSシーザー 上		701
5.	ストレイツオVSシーザー 下		709
6.	テノチティトランのジョセフ・ジョースター 上		717
7.	テノチティトランのジョセフ・ジョースター 中		723
8.	テノチティトランのジョセフ・ジョースター 下		731
9.	中米の神・サンタナ 1		738
10.	中米の神・サンタナ 2		745
11.	中米の神・サンタナ 3		752
12.	中米の神・サンタナ 4		760
13.	中米の神・サンタナ 5		770
14.	合流		778

15.	罪ありき、ゆえに	—	787
16.	結果と反省と再会と	—	797
17.	打ち合わせ	—	807
18.	風の武神・ワムウ	1	815
19.	風の武神・ワムウ	2	822
20.	風の武神・ワムウ	3	829
21.	風雲急を告げる	—	836
22.	光の邪神・カーズ	1	844
23.	光の邪神・カーズ	2	852
24.	光の邪神・カーズ	3	862
25.	光の邪神・カーズ	4	872
26.	光の邪神・カーズ	5	881
27.	ペロニカ	—	890

Part. 1 いまだ星なき世界の転生者

1. 転生したら柱の女だった件

ヤバい死ぬ。

この世界の真実を知ってしまったわたしが最初に思ったのはそれだった。

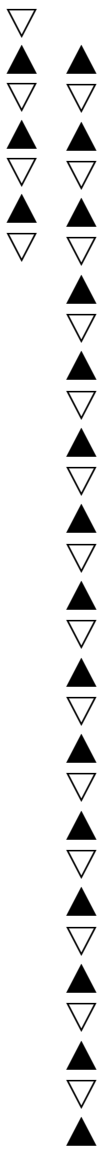
間違いない、確実に死ぬ。コーラを飲んだらゲップが出るくらいには確実ツ。

なんでつて？

そんなの！

今わたしをあやしてる妖しげな色気漂うイケメンが！

カーズ様だからだよ!!



なんてことはない。よくある……いやそんなよくあっても困るんだけど、ともあれ二十一世紀も四半世紀近く経った昨今の日本ではよくある、死んで生まれ変わって、という話だ。

わたしの場合は、ちよつと友達のために身体張ったんですよ。なんか薬キメちゃってるみたいなの半目で、ガソリン振りまいてるやつからかばう感じで。クツソ熱かったですファイヤー。

で、まあもちろん死にましたね。死なないはずがない。ところが気づいたら暗いところで赤ん坊になってて。

ピーン！ と来たよね。いわゆる転生ものだ！ って。

こいつあ主人公来ちまったんじゃあねーの、ってワクワクしたりしちゃったんですよ。切った張ったの痛いのは好きじゃあないけど、かといってあからさまに転生ものムーブキメちゃったとなれば、一オタクとしてはそれなりに期待しちゃうのは仕方ないじゃあないか。

でね。まあね、最初は異世界転生ものだと思ってたんですよ。なん

かあんまり文明的な暮らししてないし、そもそも両親はおろか周りにいる人が全員頭にツノ生やしてたからね。少なくとも地球じゃあないなって、思ってたんですよ。

だから異世界の人外転生系かー、なんてのんきしてたんですよ。

ちよつと赤ん坊の期間長くない？ とか、やけに暗いわりにやたら見えることない？ とか、なんかまったく眠くならないし寝なくても平気っぽいぞ？ とか、思っただけのこと。とりあえず異世界なんだろうなーって思ってたの。

ところがどっこい。ついさつき、カーズ様が石仮面片手にご機嫌で現れたものだから、一気に世界の真実を知ってしまったよね。

うん。

ここ、ジョジョの世界だ。しかも一巡する前の。

その何が問題かって、今が最低でも原作第一部の一万年……いや、ワムウとサンタナがまだいないから一万二千年は前ってことで、わたしが柱の男の一族ってことよ。

二部を読んだことのある人ならここで察してもらえと思うんだけど、彼らは皆殺しの憂き目に遭ってる。

主犯は何を隠そうカーズ様。自分の思想を理解しない仲間を全員殺しちゃうの。そこに痺れる憧れるウ。

いや痺れも憧れもしないからこそ、思わず泣いてしまったわけなんだけど。そこで何を思ったか、カーズ様が優しげにわたしをあやしてくれてるところです。

さてどうしたものか。

わたし、女に生まれてるから少なくともワムウやサンタナじゃないのよね。だからカーズ様が皆殺しを敢行する前には、ある程度成長するのはほぼ間違いない。はず。

だってあの皆殺しを生き残ったのは、当時赤ん坊だったワムウとサンタナだけだったわけだし。となれば、殺されるのもほぼ間違いないわけ……。

かといって、せつかく転生できたんだからすぐにまた死ぬのは嫌だなあ。それにもし今が二十一世紀から見て万年単位の過去なら、知り

たいことがたくさんある。

柱の男……いや、闇の一族と言うべきか。いずれ絶滅する彼らの生態とか文化とか知りたいし、二十一世紀に至るまでの世界の歴史の、謎になってるところとか特に知りたい！ 万年単位を平気で生きるうえに、知能も記憶力もいい闇の一族の身体なら、そういう埋もれた歴史も記録できずとも記憶できるはずだし！

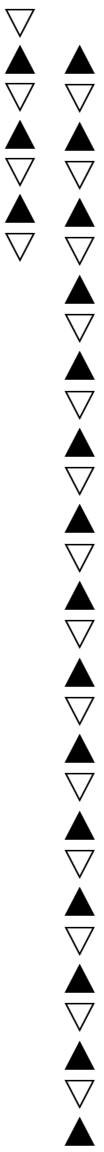
元歴史学専攻の大学院生としては、やっぱりそこはとつても気になるの！ 猫型ロボットのひみつ道具で一番欲しいのはタイムテレビですつて即答するくらいだしね！

じゃあどうするか？

となれば、なんとかしてカーズ様に取り入るしかないよねっという。今可愛がってくれてる両親や仲間にはとても申し訳ないけど、しよせん黄金の精神を持たないわたしには自分の命が一番かわいいのだ。

……親を直接この手にかけてくはないから、もうあと数百年程度でカーズ様動いてくれないかな、なんて後ろ向きに考えながら。

どうしたらカーズ様に仲間認定されるか、わたしはとにかくそれだけを考えることにした。



はい、というわけで大体五百年が経ちました。

すごい。びっくりするくらいなんともない。普通に生きてる。わかつてはいたけどさすが闇の一族、やたら長寿。

この間に、わたしは赤ん坊から幼女に無事成長した。外見年齢で言えば、人間の三歳児くらいかな。

ただ中身が大人だから、他の同年代よりは明らかに精神が成熟してて、色んなことに首を突っ込んで怒られたり呆れられたり、なんやかんやで可愛がられたりしてる。いや、同年代二人しかいないんだけどね。

この五百年ほどでわたしが何をしていたかといえば、積極的に昼間に外に出て日光を浴びていた。

もちろん太陽の光に極端に弱い闇の一族にとって、それは自殺行為。普通に何度も死にかけた。

親はもちろん一族総出で止められたし、なんならわたしもそんな泳げないのに海に潜るような真似はあんまりしたくなかったんだけど、将来のためには必要だったから仕方ないじゃあないか。

だって、カーズ様が仲間を皆殺しにしたその根っここのところには、「太陽を克服したい」という願望が特に大きかったはずだから。

カーズ様はそのあとに何ものをも支配したいとは思わないのかとも言っただけど、それはそれとして、カーズ様にとって何よりもまず太陽を克服して昼の大地に打って出ることが直近の目的なのだ。

そんなカーズ様が、好奇心たっぷりに太陽の下に行こうと繰り返す子供を見たらどう思うだろうか？ 少なくとも、興味くらいは持つてくれるだろう。

そしてその子供がある程度成長したあと、弟子にして欲しいとか言ったらきつと信じてくれるんじゃないかなって。

以上がわたしの考えた生き残る方策だ。

もちろん、一族最高の頭脳を誇るカーズ様には見抜かれる可能性が高いけど、それはそれとして太陽を克服したいというのはわたしの偽らざる本音でもある。わたしは本気で昼の外に出たいし、日光であり死にたくはないのだ。

だから、最終目標はさておき今は全面的にカーズ様の味方というのは本当なのよ。なので信じてくださいお願いします。

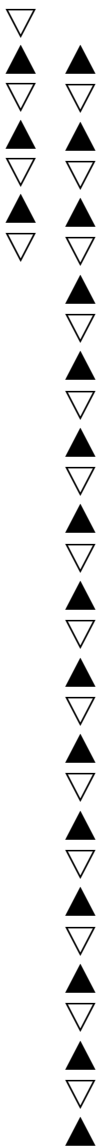
なおそのカーズ様は、この五百年ほどの間に仲間のエシデイシと一緒に石仮面をかぶって、ある程度の日光耐性を獲得している。日光を浴びても死なずに石化だけで済む程度の耐性だ。

同時にこれではいかんとしますます研究に打ち込みつつも、どれほどの変化が自身に起きたのかを調べるために並行して試行錯誤した結果、見事に光の流法^{モード}、輝彩滑刀^{きさいかっとう}に目覚めておられた。早い。さすが天才。なおエシデイシはまだな模様。

彼らの生命体としてヤバすぎる体質とか能力は、半端とは言え石仮面の力で引き出されたものだっただな。確かに、二部の回想シーンで輝彩滑刀を振るうカーズ様と戦ってた闇の一族は、普通の剣とかを使ってた。そういう意味では、闇の一族におけるカーズ様は人間で言うところのD I O様みたいなポジションなのかもしれない。

とかなんとか思ってた二人を見てただけど、たぶんこれも石仮面の効果なんだろう。二人は石仮面をかぶったその日を境に急に燃費が悪くなって、めっちゃ食事の量が増えて周りから白い目で見られている。闇の一族、大人しすぎて名前負けがすぎる。このままだと、二人が一族から完全に孤立するのもそう遠くはなさそうだ。

とくれば、これは結構近い将来にエックスデーは来そうだなあ、と今から戦々恐々なわたしです。



てなわけで、またしてもおよそ五百年が経過。早い。月日早い。

約千歳になったわたしは、推定六歳児程度の幼女に成長した。

……同年代の子を見る限り、どうにもわたしの身体の生育はすこぶる遅いらしい。

どう考えても、毎日日光を浴びてるせいですわかりません。あんな身体が灰になるような劇物を毎日浴びてたら、そりゃあ生育にも悪影響が出るつてものだ。

でもこれも生き残るため。我慢しよう。身長もスリーサイズもグンバツな美女に育つ代わりに理不尽な最期を迎えるくらいなら、わたしは合法ロリになってでも生き延びたい。死ぬよりはマシだ。

それはさておき、わたしは無事カーズ様に弟子入りすることに成功した。太陽を克服したいという熱意を伝えて、実際に少しとは言えそれを成したカーズ様に熱烈なラブコールを送ってどうにか庇護下に転がり込んだのである。

渋い顔で「子供の面倒など見切れん」とうめくカーズ様と、カラカ

ラと笑いながら「いいじやあねーか少しくらい。息抜きだと思えよ」と彼の肩を叩くエシデイシの対比がなかなか面白かった。

で、最初はそんな感じで渋ったカーズ様だったけど、子供にしてはなかなかに聡明ということ、最近はずよこちよこ手伝いに駆り出される。彼が内心でどう思ってるかはわからないけど、とりあえずそれなりに構ってもらってる感じだ。

なんなら石仮面作りを手伝ったりもしてるぞ。おかげで石仮面のほとんどを一人で作れるようにもなったけど、肝心要の骨針の仕組みは触らせてもらえてない。あそこはやっぱり、カーズ様的にも下手に他人に知られたくはないみたい。

でもせっかくならそこらへんは知っておきたい。理論がわかってる人が目の前にいるのに、それを教えてもらえないのは理不尽だと思うの！

わたし！ 気になります!!

というわけで、カーズ様が教えてもいいと思ってくれるように、色々小細工を考えるのが最近の日課。

直近だと、石仮面を他の生き物に使ったらどうなるの？ って無邪気して聞いて、実験してみると言われてそっちがメインって感じた。

とりあえず近場のところで、ほ乳類を中心に片っ端から石仮面をかぶせて吸血鬼化して経過を観察、その様子を余すことなく記憶してる。

本当なら彼らの素の生態を見てみたいんだけど。だってまだダイアウルフ（推定）とかいるんだよこの世界！ 気になるに決まってるじゃん絶滅種だよ!?

……こほん、閑話休題。

このとき、メモはしない。何せ闇の一族は人間と違って知能と記憶力が段違いに飛びぬけてるから、メモなんて取らなくても全部覚えてられる。思い出そうとすれば前世のことだって克明に思い出せるから、原作の時代に突入してもすっかり忘れてるなんてことはなさそうでちよつと安心してる。この辺は、人外に転生した特典みたいなもんだね。

ただ、石仮面で吸血鬼化した生き物はその大半が凶暴化して、こつちに襲い掛かってくるからメモしてる余裕なんてないとも言おう。

幼児とはいえ、一応わたしも闇の一族。小動物が吸血鬼化したくらいじゃ負けやしないけど、負けたくないからといって怪我しないわけじゃないから……。痛いものは痛い。

あ、ちなみにわたし、石仮面はまだかぶってない。だからかわからないけど、肌から他の物質を取り込んで即消化、なんて芸当はできない。できたらそこまで怪我也気にせず観察とかできるんだろうけど、精神に影響出そうだなあとか、生育に悪そうだなあとか、色々思うところがあつて。

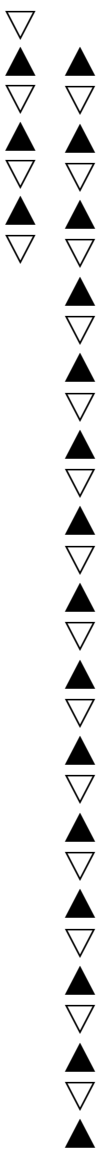
カーズ様はさっさとわたしにかぶせてサンプルを増やそうと考えるつぽいけど、そこはもうちよつと待ってほしい。

ありがとうエシディシおじさん、あなたがカーズ様のストッパーです。まああの人も「やるときはやるッ！」んだけど。

この状態が、一体どれだけ持つことやら。

既にカーズ様たちの食費がかさみすぎて、闇の一族全体のエンゲル係数がヤバいことになってるのはなんとなくわかってる。

このまま行くと、近い将来原作通りに皆殺しが起こりそうなんだよなあ……。



そしてまた五百年ほど。時間の価値ってなんだろうね。

というか、近い将来って思ってたのに何普通に五百年経過させてるの？ いくらなんでも闇の一族気が長すぎない？

で、まあわたしも約千五百歳になって、無事に外見年齢九歳児くらいになった。ここまで来れば、さすがに幼女は卒業だと思う。いまだに百三十センチあるかないかってところで、ぺったんこの寸胴体型のイカ腹だけ。受け入れてるからいいんだけどね、うん。

で、まあこの歳になってようやくというか、ついにわたしも石仮面

をかぶった。

最初は後頭部に野太い骨の針が刺さるのが怖くてハラハラしてたけど、やってみれば特に痛みもなくなつてあつさりしたものだつた。しつかり麻酔して抜く親不知つて感じ。

危惧してた精神への変調は今のところ感じてない。……と思う。変わつてはいない、と思うんだけど、自分で自分を客観視できない以上本当に変わつてないのかどうかはわかんない。

まあそれはそれとして、肌からものを取り込めるようになったり日光に耐性がついたり、明確な変化もしつかりあつたよ。ちゃんとね。

カーズ様やエシデイシとの違いとして、わたしは二人よりもさらに日光耐性が強い。二人が石化するレベルの日光でも、最終的には石化するにしてもするまでにかかる時間が倍以上違つたのだ。

これはあれかな？　まだよちよち歩きのところから日光を毎日浴びてて耐性が既にできてたからかな？

おかげでカーズ様からは見事にモルモット扱いで、最近はや々と身体を調べられることが多い。

それは別に嫌じゃないんだよ？　ただ触診のとき、たまに「ウインウインウインウイン」とか言いながら肌を撫でてくるのがなければなあ……。傍目から見たら完全にただのやべーロリコン野郎ですよ……。

いやカーズ様、将来グラマラスな美女に対しても同じことやるからたぶん彼なりのジョークなんだと思うけど。ちよつとそつちのセンスは足りてないんじゃないかなあ。

まあそれがなければ、昼でも明け方や日暮れくらいなら普通に外で活動できるようになつたから、最近はやは独自に色々調べものをして古代ライフをエンジョイしてる。

二十世紀だと絶滅した生き物もいるから、普通に超楽しい。できればそうやって、学者みたいな生活をずっとしていたいんだけど……。

「よおし、いいぞ。どこからでもかかつてこいッ」

「とあーっー」

「ほいっと」

「むきゅー！」

最近、カーズ様の命令で昼は主に戦闘訓練を受けている。エシディシから。受けさせられている、が正しいんだけど。

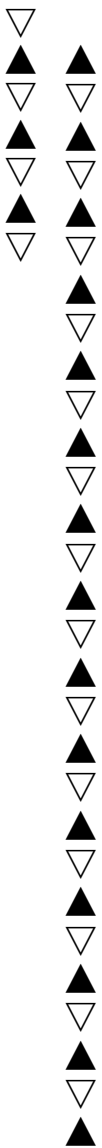
このロリ体型で、身長二メートルはありそうなエシディシとまともに戦えるわけがないんだよなあ！ 今とかメダカ師匠のお家芸みたいになってるぞ！ くそう、ぐるぐるパンチをくらえ！ くらわないけど！

とはいえ、こうやって手加減をしてくれるのは最初の数分だけ。そこから先は情け無用のスパルタ教育で、普通にボッコボコにされる。おかげでそうなるまいと必死にくらいついてるけど、正直永遠に勝てる気がしない。これに競り勝ったジョセフの頭どうなってるんだ。

ただなあ。

いきなりカーズ様が備えろ、って言って戦いも覚えろって言ってきたのは、今度こそ近い将来同族を皆殺しにすることになるからなんだろうなあ。予期してるんだだろうなあ。だってカーズ様、天才だもの。そして戦闘訓練を受けさせられてるってことは、わたしは一応カーズ様から身内認定を受けてるんだろう。そりや確かに、ここ千年ほどですっかり両親始め仲間とは疎遠になってるけど。

それでも、彼らを殺せって言われたらわたしは躊躇するんだろうなあ……。



そしてさらに約五百年。わたしおよそ二千歳になって、遂にそのときが……。

……来なかった。来たのはわたしの休眠期。

そういえば、闇の一族って二千年周期で眠りに就く種族でしたね！

二千年間一睡もしなかったから普通に意識してなかったけど！

というわけで、おやすみなさい。

わたし、これから二千年ほど石になります。
寝てる間にイベントが進まないことを祈るよ……！

2. 師曰く「滅びよ」

おはようございます。人間から闇の一族に転生した女ことアルフィーちゃんほぼ四千歳です。

あ、そういえば初めて名乗りました？ そう、わたし今の名前はアルフィーと言います。わりとかわいい名前だと思うので、気に入ります。

それはさておき、いやー、眠りに落ちていくと同時に身体が石化していく感覚は結構怖いものがあるよ。これは確かに、克服したいと思っても不思議じゃないね。

とはいえ、眠りから覚めて身体に血が通っていく感じは独特の高揚感もあつただけど。

さて目が覚めたところ、カーズ様とエシデイシも休眠中だった。残っていたメモから、どうもわたしが休眠した少しあとに二人もほぼ同時に休眠期に入ったみたいだった。

とりあえず寝てから起きるまでの間に何があつたのか、情報収集をしようと思つただけど……いやー、すっかり一族からつまはじきにされてますわ。

気持ちにはわからなくはないんだけどね。わたし一人でも結構な量食べるし。きつとわたしたちが寝てる間、一族は平和に過ごしてたんだろうなあ。

というわけで、年齢的にもほぼ独り立ちを余儀なくされるところではあるから、食料探しを兼ねて情報収集に向かった。

見つけた生き物に、持参した石仮面をかぶせて吸血鬼化。しかるのちにズムムつと吸収するお食事だ。

正直、食べてる気がしなくてわたしはこれがあんまり好きじゃない。味をしっかりと感じられる口からの摂取がいいんだけど……かといつて、闇の一族は味付けや調理の概念があまり普及していない。生物として強すぎて、料理の概念を発達させる余地がなかったんだろうなあ。必要は発明の母とはよく言ったものだよな。

でもそういう学者的な感傷はさておき、二十一世紀から来た身とし

ては、日々の食事が本当に味気なくて……。

それに、生肉をかじったり火で焼いただけのタイプ：ワイルドな食事は、さすがに遠慮したいし……。

というわけで、仕方ないのだ。ジョジョの本編が始まる時期まで行けばそこらへんは改善するだろうから、待つしかない。

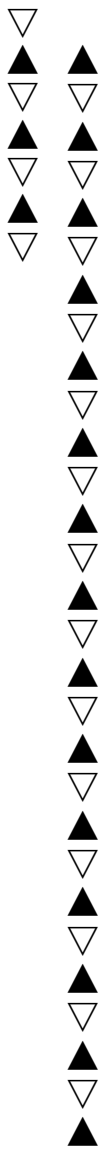
……あ、人間。迂回しよう。

人間は……人間はやっぱり、食べたくないね。元人間だもの。み〇を。

カーズ様たちが見たら、不思議に思うんだろうなあ。一番エネルギー効率がいい食べ物を食べないなんて、って。

でもこればかりは、ね。どうしようもない。

いつか慣れる日が来るのだろうか。そんな日が……来てほしいよ
うな、来てほしくないような。



そこからおよそ五十年。やっとカーズ様とエシデイシが復活した。

目覚めた二人に、食べ物渡しながらついでに眠っている間にどう
なったのか、報告する。

と言っても、目立った変化はさほどない。わたしたちが寝たことで
食物連鎖が正常に戻ったみたいで、外は平穩そのものどころか食料に
は困らないありさまだったし、闇の一族も寝てる間特に何も対策を講
じていなかった。

正直言つて、彼らはのんきすぎだと思う。

こちらにおわすお方をどなたと心得る。合理主義の塊、目的のため
には手段を選ばないラスボスの鑑、カーズ様にあらせられるぞ。彼な
ら寝込みを襲うくらい平気でするだろう。

「ふん、所詮やつらはそこまでの生き物ということよ」
ほらね。

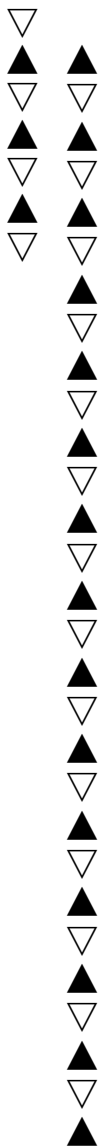
「どうすんだ？」

「……どうもしないさ。やつらが何かしない限りは、だがな」

一見良心があるように見えるでしょ？ これ別に専守防衛じゃないんだ。まだ目的達成のために必要なものがはつきりしてない段階だから、単に今行動を起こすのが割に合わないだけなんだ。

そしてわたしは知っている。先にしびれを切らすのは、一族のほうだ。

今度こそ、本当に今度こそ、そのときは近いはずだ。



それからたった数年が経ったある日、久しぶりに一族に新しい命が誕生した。

彼に与えられた名は、ワムウ。

さらに、もう一人子供を身ごもっている人がいる。こちらの出産も、もう間もなくだろう。

それを聞いて、わたしはようやく今がいつかを確信できた。

設定上、ワムウとサンタナの年齢は2部の西暦1938年の段階でおよそ一万二千歳。つまり今は、およそ紀元前一万年とちよつとつてことになる。

そして同時に思う。遂にそのときが来た、ってね。

……まあ、実際はそんなにすぐには来なかつただけだよ。

だからあ！ 闇の一族のんきがすぎるよ！ 危険視してるなら早く動こう!?! なんでそんなに傍観続けてるわけ!?!

ほら、そうこうしてるうちにわたしの戦闘訓練もそこそこ進んじやつたじゃあないかッ！

あんまりにも何もなさすぎて、本当にアレは起こるのか……もしかしてこの世界は原作通りに進まないのか……。

そうやってわたしはやきもきしつつも、ワムウとそれからサンタナが育つのを遠目に眺めていた。

それでわかったのは、どうも闇の一族、生まれてしばらくは二千年

周期の睡眠をしないっぽいぞ、つてことだ。さすがに赤ん坊のころは成体ほど頑丈でもないからなのか、人間とそこまで変わらない周期で寝て起きてを繰り返してたんだよね。

ただし身体の成長もその分ゆっくりで……その辺と照らし合わせて考えるに、記憶にないからそんな感じしないけど、わたしたぶん自分で思ってるよりさらに何千年か歳行ってるな……？

長生きしすぎて年齢の概念が曖昧過ぎるなこの生物……。まあいいや、自分で認識してない時間を加算するのも面倒だし当初思ってた通りに名乗ろう。

そんなわりとどうでもいいことを考えながら過ごすこと、約二千年。ワムウとサンタナも赤ん坊から少し脱却してきたかなってくらい時間が経った。

またかよ。本当にもう、闇の一族危機感なさすぎるよ。

わたしがもはや呆れの境地に至ったところ。ようやくそのときがやってきた。遂に一族が重い腰を上げたのだ。

わたしを含めた三人を、剣や斧、槍などの武器を持った一族がぐるりと取り囲む。その様子は、漫画やアニメで見ていたそれとまったく変わりがなくて……。

「やつが存在するのは危険だ」

「あいつをこの地球から消してしまわなくてはならない……！」

「やつを殺してしまわなくては！」

「バカ者どもがッ！ 太陽を克服したいと思わないのかッ！ 何者をも支配したいと思わないのかッ！ あらゆる恐怖をなくしたいと思わないのかッ！」

けれど、誰もその言葉に耳を貸さない。同意するものは、エシディシとわたしだけだ。

それを確認したカーズ様は、一瞬だけ無言で目を細める。この一瞬に、彼が何を考えたのか。わたしにはわからない。

ただすぐに呼吸を整えると、殺到する彼らに一切動じることなく、自身の前腕から輝く刃を生じさせて。

「では——滅びよ」

淡々と、静かに。だけどはつきりと、別れの言葉を突き付けた。それに応じて、エシデイシが。そしてわたしも、遅れて前が出る。かくして、虐殺が始まった。

それは戦いじゃあなかった。まさに、虐殺としか言えない一方的なものだった。

石仮面の効果でもそもそも地力が違いすぎるって言うのに、それに加えて流法モードという特殊能力まで持つてるんだから、カーズ様たちに勝てるはずがないよね。

闇の一族たちに勝ちの目があるとしたら、それはわたしに対してのみだっただろう。わたしはまだ流法モードに開眼してないし、初めての实战でビビりまくってたからね。

けど、そうはならなかった。わたしは普通に生き延びた。わたしだって、伊達に石仮面をかぶってない。こうなると見越したカーズ様に色々教えられたんだからね。良くも悪くも、あのボッコボコにされまくった日々は間違いなくわたしを強くしてたわけだ。

まあ、それでもすぐには動けなかったんだけど……。

「アルフィーー！ 何をばさつとしているツ！ 殺せツ！ 一人残らずだッ！」

カーズ様の輝彩滑刀が（恐らくは意図的に）わたしの眼前を走った瞬間、そんなことは考えられなくなった。

ここで彼に従わないと、わたしもこの場で殺されるだろう、って。そう思って、どうにかこうにか理性を抑え込んで、無我夢中で手刀を前に突き出した。

すると、目の前に迫ってきていた男性の身体に腕が貫通した。

あまり抵抗はなくて、結構あっさり。それはもう、あつためたナイフをバターに突き立てるみたいだ。

その事実と、飛び散る血しぶきにわたしの思考は止まった。

え。そんなバカな。だって、こんな単純で非力な少女の貫手なんて、エシデイシもカーズ様も全然効かないどころか、そもそも当たり前じゃないのに。

そこに、斧が叩きつけられた。わたしの頭はそれでトマトみたいに

つぶれ……ることなく、普通に刺さったままで止まった。ついでに、その勢いでかなり大きく吹っ飛んで壁に激突する。

痛い！ 肺から空気が一気に抜けて、一瞬息がつかまる。

けど、それだけだった。頭の傷が、見る見るうちに治っていくのが感触でわかる。

ああ。

そうかあ。そうだよねえ。

だって、わたし石仮面かぶっちゃったんだもんなあ。

そりやそうだ。

うん……わたし、もうとつくにバケモノなんだなあ。

そう思ったとき。

かちり、と頭の中で何かが切り替わったような気がした。

オンとオフが切り替わるようなものじゃあない。生卵が鍋の中でゆで卵になっていくような、不可逆的な切り替わり。

そしたら、目の前が真っ赤になった気がして……。

「あは……あはははははっ！」

気がついたらわたしは、けたけたと高笑いしながらサルかヨーダかみたいに飛び回りながら、カーズ様たちみたいに殺す側に回っていた。

心の中では非道だなんて言いながらも、身体はまるで本能に突き動かされているみたいに止まらない。

そんな、頭と身体が乖離したみたいな状態だったからか、そのときわたしは不思議なくらい冷静に自分の行動を見ていた。

そして思う。ああ、やっぱり石仮面は精神を悪に傾けるんだなあ、つて。

「これで全部か」

カーズ様のその声を聞いたとき、わたしの全身はすっかり血に染まっていた。

あぜんとして、けれどなんだか右手が何かを持っていて、重くて。不思議に思っただけを眼前に持ち上げて……。

「ひっ」

それを。

今世のお父さんの首を、思わず投げ捨ててしまった。

すぐにいけないことをしたと思いなおして、そちらに目を向けたけど……。

わたしを見つめるお父さんの目は、恐怖と絶望に染まっています。

それから逃げるように周りを見渡してみれば、同じような顔で絶命した仲間がそこら中に転がっています。

わたしの心は良心の呵責に耐えられなくなって、その瞬間ぶつりと意識が途切れた。

3. 任務は子育て

はい、というわけで人間改め、闇の一族改め、柱の男……じゃない、柱の女ことアルフィーちゃん大体八千歳です。紀元前六千年くらいかな？

え？ 一気に時間が飛んだって？ そりゃああの大虐殺のあと、みんなで揃っておねむの時間でしたからね！

それはともかく、起きて思ったことはなんというか、やってしまったなあ、って感じた。

うん、完全に人間をやめてしまったよ。もう後戻りはできない。わたしは、自分だけ生き残るために仲間全員を売ったんだ。

後悔は……あんまりない。少なくとも、普通に生活できるくらいには。

この辺りも、石仮面の副作用なのかなあ。あの瞬間は確かに、ものすごいショックがあったはずなんだけど。

でも確かに、わたしはあの瞬間に変わってしまったんだと思う。何せあのあと、普通に人間を食べられるようになってしまったから……。前はあんなに避けてたのに……。

そんな風にわたしが一人葛藤しながらも、複雑な心境で人間を食べる日々を過ごしていたある日、ふと思いついたようにエシデイシが言った。

「ところでカーズよお。こいつらのことはなんて呼べばいいんだ？」
「名前か……考えたこともなかったなあ……」

ネグレクト全開なカーズ様の発言に、思わずジト目を向けてしまったのは悪くないと思う。この人は本当に、自分ファーストだなあ。

いや、気持ちはわからなくはないんだよ。わたしも、自分の好きな研究やってるときは周りが見えなくなってる自覚はある。楽しいからね、仕方ないね。オタクってそういうところある。

でもそれはそれとして、子育てのほうが優先度が高いことは理解してるつもりだよ。だって放っておいたら死んじゃうんだもの。

というか、そもそも彼ら生まれてから二千年の間、あなたたちも同

じ場所で生活してたはずでしょーが！

なんてことを言ってしまったわたしを殴りたい。なんなら【バイツアダスト】でも構わない。

「そうか。ならばお前が育てるといい」

なんて丸投げされたんだもん！

エシデイシも何笑ってるんだよ！　かくなる上は、お前がパパになるんだよ！

というわけで、まさかの八千歳にして未婚の母になってしまった。種族的には、姉って感じなんだけど。

でもあのワムウとサンタナを育てる羽目になるとは、誰が予想したことやら……。

「で、名前は？」

「あ、はい。先に生まれたこの子がワムウで、こつちの子がサンタナです」

「そうか。覚えておく」

簡潔に答えて、頷くカーズ様。

うん、知ってた。優先すべきはそこじゃないもんね。

「あれ？　あとに生まれたガキの名前、そんなだったかあ？」
あ。

しまった、普通にジョジョラーの観点で答えちゃったけど、サンタナって本名じゃないや。シュトロハイムのつけた人間側のコードネームだった。

……い、いや、でももう言っちゃったし。それに違う名前だったとしても困らないよね誰も！

「そ、そうです。そういう名前でした」

「そうか？　まあ、別にどうでもいいか」

どうでもよくはないと思いますけどね！

ま、まあ、かと言って今さら撤回して疑いをかけられたくない。

だから末っ子くん、君はサンタナなのだ。誰がなんと言おうと、君の名前はサンタナなのだ！

このアルファイが名づけ親であるぞッ！



さて、そんなわけで子育てをすることになってしまったわたしだけ
ど。これが思ってたより楽だった。

というのも、そもそもわたしたちは人間より普通にハイスペックな
ので……。色んな意味で成長が早くて、手がかかったのは最初のうち
くらいだった。

というか、そうでもなきや原作でカーズ様とエシデイシに子育てが
できたとは思えない。

この時期は、まだ石仮面の完成に必要なものをつきとめられていな
い。だから研究と子育てを並行してたはずで……。これが人間と同レ
ベルの苦労が必要なら、あの人普通に殺してたんじゃないかな。

「ふんっ！」

「ぎゃあー！」

そして五百年ほどが経った今、サンタナがワムウにぶっ飛ばされる
のをわたしはため息混じりに眺めている。

なんていうか、あれね。原作でカーズ様から直々に「戦闘の天才」と
言われるだけあって、ワムウが強すぎる。

それに対して、原作でカーズ様から直々に「青っちろいガキ」と言
われるだけあって、サンタナが弱すぎる。

二人ともほぼ同い年のはずなのに、なんだろうこの差。いや、階級
に差があるのは知ってるけど、だとしてもこれじゃあ戦闘訓練になら
ないよ。

カーズ様からは戦闘力も伸ばせと言う育児方針を与えられてる以
上、成果を出さないとわたしの首が物理的に危ないのに。

ちなみにそれがなんでかって言うと、どうも石仮面の効果向上は掛
け算っぽくて、素の能力が高ければ高いほどあとよりすぐくなれ
るっぽい……。という研究結果が出たからだ。

それで行くと、あまり訓練がないまま石仮面をかぶったわたしは戦

力としてはかなり低いんだろう。わたしが他の面子に勝る能力と言え、日光耐性くらいじゃあないだろうか。

それにわたしの最大の目的は歴史や文化の観察と研究だから、極論そこまで強さは必要ない。人間相手なら今のままでも十分オーバーキルだし、スタンド相手だと肉体的なスペックはあんまり意味がなかったりするしね。

ただわたしとしては、そっち方面じゃなくて平和的な子たちに育てほしいんだけど、命令とあれば仕方ない。まあ、ワムウは戦い方を教えないと逆に歪んでしまいそうな気もするけど、サンタナはもうちよつとあるんじゃないのと思う。

そんなことを考えながら、わたしはサンタナに近寄る。

ああ、これ完全に気絶してますね。そりやまあ、頭にクリーンヒツトだったから仕方ないか……。

「うーん、今日はここまでかなあ」

思わずそうつぶやいたら、残心し続けていたワムウが心底つまらなさそうにため息をついた。

「サンタナは弱すぎる。これでは鍛錬にならない！」

原作では戦うことに生きる意味を見出してただけあって、ワムウは既にそういう気質を見せている。一方的な、戦いとも呼ばないようなやり取りは本当につまらないんだろうなあ。

でもサンタナの名誉のために擁護しておく、手先が器用なのは断然サンタナのほうなんだよね。道具を作ったり料理したり……そういう細かい作業をさせたら既にわたしよりできるまでである。

カーズ様たちはそういうところ評価対象にしてないみたいなんだけど、わたしはそうは思わない。サンタナに作ってもらった紙とか、かなりの逸品ですよ？ 細かいところにも結構気が利くし、研究の助手としてはかなり向いてるんじゃないかなあ。

もっと彼のことを認めてあげてほしいよ、まったくもう。だから代わりにわたしがめいっぱい褒めてあげよう。

とはいえ、ワムウの気持ちはわからなくはない。スポーツでもなんでも、ある程度実力の近い人とやるのが一番楽しいもんね。

お前どつちの味方だよって言われれば反論の余地はないけどね！
だって二人ともほとんどわたしが育ててるんだもん、それぞれの
いところは褒めたくなるでしょ。

まあそれはともかく、仕方ないからわたしが続きを引き受けよう。
ホラ、わたしもせめて流法モルドには開眼しておきたいしね。原作を見る
限り、たぶんあれは戦いの中で目覚めるものだろうし。

「じゃあ、少しわたしとやろうか」
「ぜひッ！」

そしたらワムウつてば、一転して楽しそうにそう言ってきた。まだ
変声期を迎えてない声はどこからどう聞いても真綾さんだし、目なん
かもうキラツキラしてとてもかわいい。

いやはや、このイケシヨタがのちのち明夫ボイスの超マッチョにな
るなんてとても思えないな……。

「じゃあ、いつも通り投げた石が地面に落ちたら始めつてことで」
「はいッ！」

同意を得たわたしは、そこらへんに転がっていた小石を拾い、手の
ひらに乗せてしっかりワムウに見せる。で、それをぼーんと軽く真上
に放り投げて……。

「ふッ！」
「甘い！」

地面に落ちた瞬間、すごい勢いでワムウが突進してきた。

けど、わたしはそれをなんなく回避する。動体視力や反射神経は、
人間の頃とは比べ物にならないくらい良くなってるのだ。二元が一般
人でも、スペックの暴力でこれくらいはできる。

そして回避と同時に、まずは軽くパンチで攻撃だ。

ワムウはこれをあっさり見切つて回避……しようとしたけど、そう
は問屋がおろさない。これは人間同士の戦いじゃあないッ！
「!?」

ワムウの目が見開かれる。彼の目には、わたしの腕がいきなり伸び
たように見えたはずだ。

それもそのはず、腕の中の骨を外して実際に腕を伸ばしているから

ね。強引に。いわゆるズームパンチだ。

今回はさらにその先に行く、回転も加えたドリルズームパンチだ！

速いぞ！ 強いぞ！

痛み？ そんなもの、ウチにはないよ……。伊達にバケモノはやつてない。

けど、ワムウはさすが天才だ。彼には初めて見せた技だったんだけど、基本は普通のズームパンチと同じだからか対応が早い。回避しきれないと見るや、自らぶつかりに来て打点をずらされた。これで狙った場所には当たらず、ミスヒットとでも言うべき軽い打撃にしかならなかった。

「ふんぬッ！」

そして彼は、そのままわたしに肉薄して投げに持ち込んでくる。

最近のいつもの流れだ。最近の訓練で、ワムウはよくわたしに投げをかけてくるんだよね。どうも力だけでは済まないこの技術が、最近のお気に入りらしくって。習得しようとして躍起になってるんだろう。実に彼らしい。

ただし、わたしも素直に投げられるつもりなんて毛頭ない。四千歳も歳下の、しかもまだ石仮面もかぶってない相手には負けたくないし、第一ワムウは手加減されることをことさら嫌うしね。

というわけで、くらうがよい！

「ちえすとーっ！」

「ぐぬう!？」

相手の力を利用して、大外刈り！ 決まったッ！

……でもこれだけでは絶対に終わらないのがわたしたち。ここから普通に逆転しにかかってくるのも当たり前なので、わたしは技の途中でさらに力をかける。

「くっ！」

ほらね。ワムウってば、わたしにつかまれてるところを起点にして、人間なら絶対できない体勢に身体を変形させて倒されるのを回避してきた。

けどまだ甘い！

「よいしょ、っとー！」

「ぬう！ またしても！」

わたしは既に全身の関節をすべて外して、タコよろしくワムウの身体にまとわりついている！ 触手みたいになったこの状態、意図的にしがみついている以上簡単には外されないうぞう。

まあ、カーズ様やエシデイシ相手だと不利にしかならないけどね！

「せいっー！」

「ぐっ!?!」

このままわたしは一気に落としかかる。

生態は違えど、わたしたちも酸素で肺呼吸する生物。首を絞められたらいずれ失神してしまうのは避けられないさだめなのだ！

ワムウはすぐにわたしを外そうとするものの、起点がなかなかつかめず四苦八苦している。

ジョセフたちと戦ったときのワムウなら風を操って対応してくるんだろうし、そうでなくとも何かしら手を打ってくるだろうけど、今のワムウはまだ自身の流法モードに目覚めていないうえに子供。圧倒的に経験が足りてない。

これでわたしの勝ち、だと思っけど……カーズ様からは容赦するなって言われてるから、さらに一発行くとしよう。

全身でワムウの身体にしがみついているこの状態から、さらに骨を操って体内から射出。ちょうど原作のサンタナがやった露骨リップス・アップ・レイドな肋骨と同じ形で、全方位からワムウの身体を骨で串刺しだ。

「ぐはあっ!?!」

さらにその骨を地面に突き刺し、完全なる固定を実現する。

ついでに、少しだけ肌伝いの吸収もかけようか。憎き肉片ミート・インペイドの再現だ！ じわじわと肌を削られる痛みを味わうがよい！

「ぐぬ……ぬう……いー ぐふ……っー！」

ふっ、勝ったな。

……石仮面をかぶったことによる恩恵を全振りして、全力で歳下をハメにかかるとか大人気ない、なんて言わないでほしい。わたし決定的に攻撃力に欠けるんだよ。こうでもしないと千日手になるんだよ

⋮
○

4. それは福音か災厄か

はい、というわけでいつものようにおおまかに五百年カッ飛びました。推定九千歳くらいになりましたアルフィーちゃんです。紀元前五千年くらいですね。たぶん。

ここ千年ほど、まったく身長が伸びてないんですがどうなってるんでしょう。それどころか骨格とか肉付きもどう控えめに見ても完全なる子供体型なんだけど、なんで？ ガイアがわたしに合法ロリになれとささやいてるの？

「肉体が全盛期を迎える前に石仮面を被った副作用かもしれないな。あれは全盛期を保つようになるが、正しくはその状態に戻すものだ。その状態になったことがない以上、お前の肉体はその姿が全盛期と認識しているのだろう」

「……だから実証実験もなしに石仮面被るのイヤだったんですよお!!」

ええまあ、なんとなくそんな気はしてたからいいんですけどね……。一応覚悟はしてたんで、別に……うん……。

……それはともかく。

この五百年で何をしてたかというところ、石仮面にさらなる力を持たせるための素材を探してみんなで大陸中を旅しました。

その結果わかったことは、わたしたちのいる大陸が北米大陸ってことですかね！そこはなんていうか、だろうなって感じだけど！

素材？ダメですね。南米大陸も回ったけど全部ダメ！どれもこれも石仮面に合わなかったですね！

まあ、わたしとしては二十一世紀には絶滅したと思われる生き物が色々見れたから結構楽しい旅だったんだけどね！いや、わたしが知ってるのは骨だけで生きてるときの姿はわからないから、あれが本当にそうだったかは知らないけど！

ともあれそんなわけで、一旦この大陸の搜索は打ち切ることになった。さすがのカーズ様も、こうカスリもしないと堪えたんだと思う。

なので、今は海を渡って違う大陸に行く途中。計画としては、極夜

を利用して凍りついた北極を渡ることになっている。

とはいえそこは人外の集団だから、わりと近所を散歩するくらいのノリだ。この時代、わたしたちは真正銘地球生態系の頂点だからね。グリズリーだって怖くない。

そんなある日のことだ。

「……カーズ様、あれ……」

最初にそれに気づいたのは、サンタナだった。彼が空に指を向けるのにつられて、わたしたちも顔を上げてそれを認識する。

「おいおい、ありやあ……」

「隕石か。でかいな」

そう、そこには空から降りそそぐ赤い玉があった。赤熱して、轟音をあげながら落ちてくるそれは、見ようによつては世界の終わりに見えなくもない。

「どうする?」

「少しルート変更といこう。もしかしたら、この地球上には存在しない物質が見つかるかもしれん」

「あつ、確かにそうですね! えへへ、楽しみですねカーズ様!」

「うむ。……まあ、期待しすぎて肩透かしを食らう可能性のほうが高い。今から落ち込む準備はしておくのだな、アルフィーよ」

「いえ、ワクワクしすぎてそんなの無理ですね!」

「……姉上のそういうところは、このワムウには理解しがたいです」

何を言うんだワムウ! 地球外の物質とかロマンじゃあないかッ

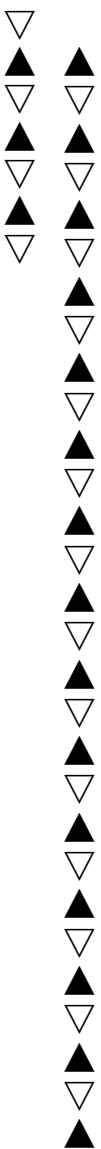
! 何がなんだかわからない謎の物質とか、気にならない!?

……ならない? そつか……ならないかあ。

「……俺はちよつとわかるかもしれない」

ふふん、それに比べてサンタナは見どころがあるね! いっそわたしと一緒に研究者になろうよ!

……ならない? そつか……ならないかあ。



いつものように約五百年があつという間に過ぎた。

いや我ながらびっくりする時間の流れだよ。なんかもう人間だった頃の時間感覚には戻れそうにない。

この五百年は、こないだの隕石の調査に没頭してほとんど動くことがなかった。食事のために場所を変えることはあつたけどね。

そう、結果的にわたしたちはユーラシア大陸への渡航を中止した。わたしとしては、ユーラシア大陸の絶滅種……ホラアナライオンとかオーロックスとかを見てみたんだけど、カーズ様がそう決めただから仕方ない。

じゃあそのカーズ様はこの五百年間何をしてたかって言うと、さつきも言ったようにこないだの隕石の調査だ。ほとんどそれしかしていない。

わたしでもちよつと驚く集中力は、さすがって感じかな。カーズ様ももしかしたら本質は研究者なのかもしれない。戦闘すら人並み以上でできる天才なだけで。

で、今はそれもだいぶ落ち着いてきた。そのまま実験をする段階に入ってる。

どんな実験かと言えば、隕石を使って石仮面にうまいこと影響を与えられないかという感じだね。

うん、あの隕石ただの石じゃなかったんだ。わたしはよくわかんなかったけど、なんかカーズ様も見たことのない物質が入ってたみたいで発見した直後はわりとテンション高かったよ。

それを調べてみたら、正確には物質って言うより生き物っぽいとかで。地球の生態系に照らし合わせて無理に分類するなら、金属元素的な特徴を強く持ったウイルスの集合体、とかに分類できるらしいんだけど……。

説明聞いた瞬間、思ったよね。

それ、絶対スタンドの鑢の材料じゃん！

思い返してみれば確かに、飛呂彦先生の原作には出てこないけど、小説版ではスタンドを目覚めさせる弓と矢、その鑢を作ったのはカー

ズ様って設定になってるやつがあった。だとしたら、これから実験の過程であの鍬ができる可能性はすごく高いわけで。

もしスタンドに目覚められたらそれは一ジョジョラーとしては嬉しい限りッ！

というわけで、今回の実験はわたしもかなり積極的にお手伝いした。おかげでカーズ様から少しはお褒めの言葉をいただくという快挙を成し遂げてしまったね！

……まあ、その実験で何をしたかって、人間を対象にした人体実験なんだけどね。

そしてさすがカーズ様、人間を殺すのにまったく躊躇がない。彼にしてみれば、人間にとつての鶏とか豚みたいな存在なわけだから、それもわからなくはないんだけど……元人間としては、ね。思うところはもちろんあるよ。

あるんだけど、わたしが止めたってカーズ様が聞き入れるわけないし、止めたら最悪殺されるかもしれない。それもわたしにはできないんだよねえ。

だからわたしにできることと言えば、彼らの死を無駄にしないよう少しでも情報を多く集めてカーズ様がたくさん殺さないようにすることしかない。だからいつもよりもがんばったってのもある。

さてその実験だけど……ウイルス的なものとわかつたらやることと言えば、そりゃあ感染させてみるに尽きるでしょ。誰だってそーする、わたしだってそーする。

そしてカーズ様もそーした。まずは隕石を少し切り出して、破片を人間の体内に埋め込んでみた。

そしたら、うん……なんていうか、即死だったね……。

正直なところ、そんな気はしてた。だってジョジョにおけるキーアイテム、スタンドを目覚めさせる矢は、デッドオアアライブだ。その原料と思われるものを直に体内に入れたら、まあその、うん。ね。

でも、わたしは原作知識でそれを知ってるけど、カーズ様は知らない。それを実際に結果を起こさずに止めるなんてできるわけない。仮説として提言することはできたけど、それで済みだった。ごめ

んね犠牲になったおじさん……。

もちろんカーズ様がそれで止まるはずはなくて、その次は血液感染だーってことで隕石を加工し始めた。

てなわけで、本人曰く「ちよいと片手間の遊びみたいなもの」でこさえられたこちら、こちらをご覧下さい。

デザインは特に何も無いシンプルなやつだけど、この形状わたしとても既視感がありますねえ！

そう、どこからどう見ても、例の鏝ッ！

なんだかジョジョの世界に一步近づいた気がして、悶え苦しんだよ！ 喜びでなッ！

……さてそんなこんなで遂に出てきた鏝。これで人間を順番に斬りつけていったところ、なんとまあ九割以上がお亡くなりになってしまつてわたしはドン引いた。体内に埋め込むのとはほとんど変わらなはいじゃあないか！

でもよくよく考えればこれも当然の結果だったかもしれない。原作だとわりと大勢のスタンド使いがこの鏝から生まれてるけど、四部とかこれが原因で死んだ人が大勢いたことはほのめかされてたわけだし……。

とはいえ、全員が死んじやつたわけでもない。

そしてこの鏝の傷から生還した生き物は、スタンド使いになる。実際、その全員が不思議な力に目覚めた。スタンドだ。

わたし大興奮！ ……とはいかない。

なんてつたつて、スタンドはスタンド使いにしか見えない。だからわたしたちにはそれがどういいうものか見えないし、その能力も結果しか認識できないんだよねえ。

おまけに、スタンド使いになった彼らは一様にわたしたちに牙を剥いた。観察とかしてる暇はなかったよ。

気持ちはわかる。理不尽に拉致られて実験台にされて、いつ死ぬかわからない中で圧倒的な力にさらされる状況。そんな中わたしたちも知らない力に目覚めれば、人間って立ち向かうよね。

いやまあ、そういうことができる人だからこそスタンドに目覚めた

のかもしれないけど。

ただ……ねえ……。確かにわたしたちは全員、スタンド使いじゃないんだけど。それでも、残念ながら普通の人間でもないんだよね……。

何が起きたかつて？ そりゃあもう、いつぞやの再演みたいな一方的虐殺だよ。

確かにね、スタンドを持ってればわたしたちにも対抗できる。実際、戦闘経験が少ないわたしたち年少組は何度か危ないことがあった。サンタナとか、たぶんわたしがかばわなかったら三回くらい死んでたと思う。

でもカーズ様やエシデイシ相手となると、ね……。

そもそもスタンドって、全部が全部戦闘に向いてるわけでもないし、そうでなくとも初手を取って奇襲してこそってやつも結構多い。本体が認識できるより速く、強く動ける相手には、どうにもならないこともあるわけで……。

全部終わって血まみれになりながら、わたしはため息しか出なかったね。

これは間違いなく石仮面の完成に寄与すると、最高にハイ！ ってやつになって高笑いするカーズ様とか。

複数との戦いを経験して楽しかったのか、やたら名残惜しそうなワムウとか。

人間に殺されかけたことがショックで凹んでるサンタナとか見るともうなんか、こう、ね……。

エシデイシ？ あのおっさんは「こういうやつが増えればもっと楽しく戦えるんじゃないか？」ってワムウを焼きつけてるよ。

「二通り情報は手に入った、実験は終わりだ。アルフィー、石仮面を完成させるぞ！」

「は、はいっ！」

こうして真なる石仮面づくりが始まった。

今までのものと違うのは、骨針のところ。ここが、例の隕石から削り出されたものに差し替えられた。

はからずもその過程で石仮面の作り方を教えてもらっちゃったんだけど、喜んでいいのか悪いのか。

でもね、カーズ様。わたし知ってるんだ、残念だけどここの隕石じゃあわたしたちを究極生命体にはできないって。

5. 目覚めた力

はい、いつも通り大体五百年くらいが経ちましたそろそろ休眠期な約一万歳、アルフィーちゃんです。紀元前四千年前後だと思われ。

こないだ自信たっぷりに隕石から石仮面を作り上げて、テンション大マックスにそれをかぶったカーズ様は、やはりというかなんというか、特に何も変化することなく骨針が刺さっただけに終わった。

あのときのカーズ様の顔は、申し訳ないけど永久保存版だった。カメラがあつたらぜひ残しておきたかった。それくらい、愕然としててひどい顔だったよ。

そこから百年くらいは、手を替え品を替えて色々試してたんだけど……結局全部ダメ。最後は隕石の中核の一番ウイルスがたくさん集まってる部分からデザインまで凝りに凝った特別な鏝を作ってたけど、それもダメだった。

あわよくばスタンドに目覚めようと思ってたみたいんだけど、それも残念ながら目覚めず。

そりゃ、原作のカーズ様たちはスタンド持ってなかったしね。スタンドの矢を作ったのがカーズ様なのにその当人がスタンドに目覚めてなかったんだから、残念ながらもあそくなるわな。

これに関しては、

「あの奇妙な力は、ウイルスに対する抗体のようなものだ。細胞が死の危険を感じ、それに対抗すべく変異を起こすからこそ生まれるものだろう。しかも全身どころか個人の能力に及ぶほど劇的で強大なものというわけだな。

しかしであればこそ、究極の生命に限りなく近い我々がそれに目覚めることはないだろう。何せ我々の身体はあらゆる害をはねのける。抗体を必要としていないのだ」

という結論を出しておられた。

つまり、あの隕石が持ち込んだウイルスは地球上の生物にとっては即死の危険があるほどの厄モノで、その感染に打ち勝った人だけがスタンドに目覚める。

ところがそんな地球外物質であっても、わたしたち柱の一族は別に命の危険を感じるほどのものではないから、抗体をわざわざ体内に作ることもなく対処できてしまう。

だからこそスタンドの発現は起こりえない、ってことみたい。

推測止まりだけどね。さすがのカーズ様も、自分はともかく身内であるワムウやサンタナで実験しようという気にはならなかったみたい。

……その優しさを向ける範囲をもうちよつと広げてほしいなってわたしは思うんだけど、十万年以上生きてるカーズ様がそこを改めることはないんだろうな。三つ子の魂百までって言うし。

ともあれそんなわけで、カーズ様の目論見は実に見事な空振りで終わった。

そして今回は、期待が高かっただけにカーズ様も結構ショックだったんだろう。自ら休眠期に入ってふて寝してしまわれた。昔わたしにそんなこと言っときながら、自分がそこにハマっちゃうカーズ様ったらお茶目よね。

そしてカーズ様が寝ちやったら、わたしたちはやることがほとんどなくなる。仕方ないから休眠期に入るまでそれぞれが好きに動くことになったわけだけど……わたしは普段やつてる観察とか文化調査以上にやってみたいことがある。

それは、ずばりこの鎌を自分に使ってみること！

だってだって！ ジョジョラーならスタンド使ってみたいってみんな思うでしょ！ 一回や二回や三回や四回くらいはさあ！

それに、わたしは知りたい。スタンドを使う、ということがどういう感覚なのかをね。

確かにドジこいたら死ぬかもだけど、好奇心があればわたしは少しだけ戦える。それだけが、元一般人のわたしに振り絞れるたった一つの勇気だもの。

……まあ、決意してから行動に移すまで五十年くらいかかったんだけど。それはなんていうか、大目に見てほしいなって……。

だって生きるか死ぬかなんだもん、躊躇くらいするでしょ。まった

く何も問題が起きない可能性も十分あるけど、それはそれとして、
ねえ？

というわけで、みんなの目を盗んでこっそり鏝を持ち出して誰もいないところへ移動（これ自体は五十年くらい毎日やってた。ヘタレでごめんよ）。そこで手首に刺してみた。けど、特に何も起こらず。

これはなんとなくわかってた。カーズ様の推測は、やっぱり正しいんだと思う。その辺りについては、わたしかなりカーズ様を信じてるのだ。

だから次にわたしは、カーズ様が最後に作った一番ウイルスが多く含まれた特別製を使うことにした。

これは、最初にも言ったけど中身だけじゃなくて見た目も他と違う。この鏝には、甲虫をモチーフにしたデザインが施されてるのだ。ヤケを起こしたカーズ様が、無駄に凝りまくって作った逸品だろう。

原作五部を読んだことがあれば、きつとピンと来るはず。

そう、ポルナレフとジョルノのスタンドを、レクイエムに進化させたあの鏝だ！

これはまさに特別製。他の鏝に比べて効果は高い可能性は高い。

なんだったら、わたしたちと同じく人間以上の肉体を持つ吸血鬼のDIO様がスタンドに目覚めることができたのは、これを使ったからなんじゃないかってわたしは思ってるくらいだ。

そんな特別製を使ってもなお、残念ながらカーズ様には今後ますますのご活躍をお祈りすることしかできなかつたけど……ろくに鍛えることもないまま石仮面をかぶったわたしの究極生命体度は、カーズ様よりかなり低いはず！

とくれば、そう！ ワンチャン行けるかもしれない！

いくぞ！

……い、いくぞ！

……ハアー、ハアー、い、行くぞう！

い……行くつたら行くんだ！

せ、せーの！

……せーの！！

「痛ったあ!?!」

うわ痛い! びっくりするくらい痛い! 痛みじゃなくて死ぬかどうかでビビってたのに、これはちょっと不意打ちが過ぎる!

というか、何千年もエシデイシとかからボコされまくって痛みには慣れてたはずなのに、我慢できないくらい痛いつてヤバくない!!? なんなら石仮面かぶってから感じた痛みの中で一番じゃあないかこれツ!?

……あ、いや、でもこの痛みなんとなく覚えがあるぞ。あれだ、夏の強烈な日光を浴びたときの痛みがこれくらいな気がする!

え? だとしたらこれ、マジでヤバイやつでは?

もしかしてオラオラですかーツ!?

……いや冗談言ってる場合じゃない、本当に意識が遠のいてきた。ま、待つて待つて、嘘でしょ? こんな半端なところでわたし死ぬの? の?

や、やだな、まだ死にたくないんですけど!

あ、あ、ダメだ、眠くなってきた……も、もうダメだ……。



おはようございます。

大きさに死ぬとか言ってたけど、単に久々の痛みがきつかけになつてちよつとだけ早く休眠期に入っただけだったアルフィーちゃんおよそ一万二千歳です。紀元前二千年くらい? そろそろ各地ではつきりと文明が興つてる時期ですね。

いやうん、なんか、あれだよ。笑えよベジータ。

ふふ……自分でもびっくりするくらいバカだったね……。

でもホラ、一万二千年ぶりに感じた死の恐怖だったんだし、これくらい大目に見て……っというかみんな忘れて! お願いだから!

何もなかった! いいね!?

忘れた? ならよしツ!!

というわけで、休眠期から明けたわけだけど、まだわたし以外みんな寝てる件。

いやね、わたしよりあとに寝ただろうみんなはともかく、わたしより先に寝たカーズ様はまだ寝てるんですね……ちよつとふて寝長くないですかね……。

でもまあ、逆に考えよう。これは色々試すチャンスだ、そう考えるんだ。

そう思いながら、わたしは一人意識を自分の中に集中させる。そして……。

「……出た」

いつのまにか、わたしの手には弓が握られていた。オーラをまとった、ルビーのような美しい寶石状の弓。

そしてそれを認識すると同時に、わたしは理解した。

これがわたしのスタンド。わたしの超能力の像^{サイジョン}。

頭ではなく、魂でそれを理解できた。

もちろん、使い方も。

何気なく、弓をそのまま引いてみる。すると、そこにどこからともなく矢が現れた。

うーん、どう見ても原作に出てくるあの矢と同じ形してますすね、これ。そういう深層心理なのかな？

とりあえずそれを、少し離れたところにいたウサギに向けて放ってみる。

矢は、まっすぐ飛んで行った。でも、わたしに弓道の心得がないからかな。残念ながら狙いは全然的外れ。これじゃ当たるはずがない。

……んだけど。

「……うわ、曲がっちゃったよ」

物理法則を無視して、矢は「グーン！」と曲がって狙った獲物の身体を貫いた。わたしの意思通りに。

「……【エンペラー】と同じタイプのスタンド、かな？」

地面に倒れたウサギを見やりながらつぶやく。

タロットカードの四番目、皇帝の暗示を持つスタンド【エンペラー】。三部の中盤から登場する、銃の形をしたスタンドだ。射程範囲内で、本体の視界の中にある限りは、本体の好きなように軌道を操れる暗殺向けのスタンドでもある。

使ってみて、最初に頭に浮かんだのはそれだった。

「これはあれかな。遠近両方に対応できるようになったってことかな？」

だとしたら……え、結構強くない？

欲を言えば人型のやつとか、会話が成立するやつとかがよかったけど、単純に戦力として考えたとき結構バランスよくない？

だって近距離の戦いなら、石仮面の恩恵あふれるスペックで大体ゴリ押せる。何せ柱の男一味って、生身のまま下手な近距離パワー型スタンダードよりも力出せるし。わたしだってその足元に及ぶくらいの力はあるもん。

にも拘らず距離を離れたら離れたで対応できるやつとか、敵に回したらはつきり言つて厄介の極みでは？

……ふふ、ふふふ、もしかしてこれは来てしまったかな……わたしの時代が……！

いやまあ、だからといってカーズ様に勝てる気はまったくしないんだけどね。ラスボスの貫禄ですよ。

でもとりあえず、思ってた通りにスタンドが手に入ってよかったよ。細かい確認は追々やってこう。みんなが目覚めるまで、まだ年単位はかかるだろうしね。

なので差し当たってやるべきことは、

「……うへへ、なんて名前にしようかなあ！」

うなれわたしの厨二力……！

6. カーズ様「私にいい考えがある」

どうも、どうもどうも。スタンドに目覚めた合法ロリこと、一部の市場を席卷するアルフィーちゃんとおおむね一万二千五百歳です。紀元前千五百年くらい？ エジプトがともホットな時期ですね！

この五百年がどうだったかと言えば、日常的にカーズ様の機嫌が良くなって馬車の空気が最悪ですって感じでしたね！

あ、馬車は比喻だよ。そんなものないよ。だって、この時代の南北アメリカ大陸に馬はいないからね。

それ以外で何をしていたかって言えば、まずはアメリカ大陸の再調査だ。二千年も経てば環境も変わるからね

一度調査した場所を調べるのはかなり精神的にしんどいものがあったんだけど、これが意外や意外、ちゃんと成果はあったんですよ。

なんと、遂にカーズ様が見つけたんですよ、エイジャの赤石を！

もちろん石仮面の力を最大まで引き上げる、通称スーパーエイジャには程遠い屑石程度のものだけど。それは確かに石仮面の力を引き上げて、今まで以上の効果を発揮した。

原作で挿入された、赤石の効果を試すカーズ様とエシデイシのやり取りはなかったけどね。

代わりにそのやり取りをやったのがわたしでしてねえ！

炎の明かりを増幅して赤石から放たれたレーザーとか、ただの研究者のわたしが回避できるわけないでしょーがッ！

おまけにエシデイシときたら、爆笑してくれたからいつかどこかで仕返ししてやる。やるったらやるッ！

「しかしそうになると、どうするっ？」

ひとしきり笑ってから、エシデイシがカーズ様に問いかけた。

答えはもう決まっていたんだろう、カーズ様はほとんど秒でそれに回答してくれた。

「基本は変わらない。……が、今まで何千年もあちこちを調べて回って、やっと見つけたのがこれだけだ。方法は変える必要があるだろう」

彼の回答は、わたしにとっても頷けるものだった。今のやり方がダ

メなら変えてみる。研究者としてその姿勢は至極当然だ。

「ほーん。で、どうする？」

「人間を使おうと思う」

エシデイシの再度の質問に、これまた即答したカーズ様にわたしたちは揃って首をひねった。

カーズ様は確かに天才なんだけど、天才特有の発想の飛躍がたまに見られるのがなんていうか欠点って言えば欠点かなあ。もうちよつと順を追って説明してほしいよ。

「えつと、その心は？」

「いかに我々が優れた生物であっても、この地球全体を調べるには数が少なすぎる。海の中も調べねばならない可能性もあるというのに、これでは時間がいくらあっても足らん」

「確かにそうですねえ。でもそれって、カーズ様が一族のみんなを殺しちゃったからじゃ……」

「何か言ったか、アルフィー？」

「ひえつ、ご、ごめんなさい！」

ぎろりと睨まれて、縮こまるわたし。うう、何千年も一緒にいるのにいまだに慣れない。

とうにかわたし、一族で唯一生き残った女なんだから、カーズ様はもうちよつと大事にしてくれていいと思うんですけど！

そんな思いが通じたのか、カーズ様は珍しいことのためにため息をついてわたしの頭をなでてきた。

……えつ、なに、もしかしてわたし今から死ぬの？

「……だが確かに、お前の言わんとしたことも一理ある。あのととき私は、私を理解できぬものなど平等に生きている価値がないと判断した。しかし人手が必要な今になって思い返せば、少々軽率だったと言わざるを得んだろうな……」

「カーズ様……」

カーズ様が……反省している……!?

あの、退かぬ媚びぬ省みぬを地で行くようなカーズ様が……!?

こ、これは天変地異の前触れか……!?

「……何をしている？」

「いえその、カーズ様の口から滅多に出ない類の御言葉が出たので、もしや熱があるのかと」

「ほう……もしかすると私は、バカにされているのか？」

「ひえっ、め、滅相もないです！ わ、わたしは純粹にカーズ様のことを想ってですぬ！」

「お前に心配されるほど耄碌はしておらん。話を戻すぞ」

「アッハイ、どうぞ」

また睨まれたけど、額に手を当ててもそれだけで終わるあたりカーズ様もさすがに参ってるみたいだ。

わたしに気を許してるってわけじゃあないだろう。彼にしてみれば、しよせんわたしは小娘だ。

……エシデイシ、お前また爆笑してるな。覚えてろよ、ホント。

「問題は、手が足りんことだ。そして我々は繁殖力が低い。加えて、女ももはやお前一人だ。これ以上増えることは難しいだろう。その点、人間はどうだ？ 我々には及ばないが、知恵がある。繁殖力が高く、すぐに増える。これを使わない手はなからう」

「ははあ、なんとなくわかってきたぞ。増えた人間に、それとなくこいつを教えて探させるわけだ」

「わたしもわかりました。見た目は人間が好きそうな宝石ですもんね、人間が増えて文明が各地に興ればわたしたちの手の届かない範囲にも進出して見つける可能性がある、ってこと………ですよね？」

「そういうことだ」

名案だろう？ と言いたげにカーズ様が鼻を鳴らす。

「いいんじゃないかねーか？ 俺にはこれ以上の方法は思いつきそうにな
い」

「わたしもいい案だと思います。これから先人間はどんどん増えると思いますし。でも、それだどうやって教えてもらいます？ 仮に人間が見つけたとしても、もしわたしたちが地球の裏側にいたりしたらどうにもならないんじゃないか」

ドヤ顔のままのカーズ様にそう返したら、見越していたんだろう。

さらなるドヤ顔を見せてくれた。

「吸血鬼を養殖する」

「はい？」

「あん？」

いきなり何を言いだすんだこの人は。やっぱり発想の飛躍がすぎるんですけど。

もうちよつとわかりやすくよろしくプリーズ。

「つまりだ。吸血鬼ならば人間より頑丈だろう。連絡係として各地に放つのだ」

「あー……それでもし何か見つけたら、カーズ様に知らせるってことですか」

「吸血鬼になりやあ、普通の人間よりも長生きするもんな」

「あ、そっちのメリットもありましたね。……でも吸血鬼って、命令聞かせられるくらい理性が残るやつ少ないですよ？」

「そこは数をこなすしかあるまい。どうせ人間など掃いて捨てるほどいよう」

「……仮に残ったとしても、みんな大体自分の欲に忠実っていうか、自分勝手な感じになりますけど……」

「家畜の扱いは心得ている」

「アツハイ」

うまくいくかなあ……。

いや意味は理解はできるし、確かに遠距離の連絡手段がないこの時代で取れる方法の中でもいいほうだとは思っただけ。

吸血鬼が従うかなあ……そりゃカーズ様の目の届くところなら従うだろうけど、離れたら……それこそDIO様みたいなことになってもわたし驚かないよ。

でもカーズ様は自信満々だ。彼がやるって言うなら、わたしに拒否権はないしお付き合いますよ。わたしはカーズ様の助手ですからね、わたしの罪悪感はこの際封印しておかないと。

で、その日からカーズ様主導の下で人間を吸血鬼にする作業が進められた。

見どころのありそうな人間を捕まえてきては、石仮面をかぶせて血を一滴。するとあら不思議、その人は吸血鬼になっちやうつて寸法だ。

一応、過去のデータから見て吸血鬼化しても理性を保ちそうな人を選んでは、それでも三割くらいはただ暴れるだけの怪物になっちやうのが色んな意味で申し訳ない。

理性を保ったまま吸血鬼になった人も、その三分の二くらいは人間よりワンランク上の存在になったことに気を大きくして、イキりにイキった挙句みんなのご飯になりました。

そうやって選別された数少ない吸血鬼が、南北アメリカ大陸の各地に配置されていく。集落の規模や人口密集度によつては複数置いたりもして。

一度吸血鬼を設置したあとは、それぞれの場所を巡って報告を受けつつ次に向かう、というルーティンで各地を回り続けることになる。一応そこでわたしたちも調査はするけど、あんまり報告を信じないよ。うなことするのもあれだし、手間は大幅に減ると思う。

吸血鬼たちは与えられた使命を遂行するに当たって、手段は問わなれないことになっている。赤石の情報収集と報告業務がちゃんとできていれば、わたしたちは一切彼らを咎めない。

つまり言うことをちゃんと聞いてれば、不老不死の身体で好き放題できますよつていう内容だね。

カーズ様もなかなかエグいことをするよ。不老不死なんて餌をぶら下げられて、飛びつかない人間なんてそうそういるもんじゃあない。特にこの時代は。

この作戦は、結構うまくいった。層石程度ではあるけど、百年程度の間エイジャの赤石が複数見つかったから、やっぱり数は力だよ。ね。

カーズ様はこの成功を見て、いよいよユーラシア大陸に目を向けるようになった。元々視野には入れてたんだけど、ここにきてようやく感じてんだ。

そしてユーラシア大陸に移動するに当たって、サンタナが残される

ことになった。アメリカ大陸の南北を結ぶテワンテペク地峡からパナマ地峡にかけての地域で情報が集まるように整理して、彼をそこに配置。彼はそこで吸血鬼と情報の統括に専念するってわけだ。

そこはカーズ様がいるべきじゃないのかとは言ったんだけど、正直まだ見たことのないユーラシア大陸をその目で見たいって理由が強いんじゃないかってわたしは密かに思ってる。

それにしても、なるほどなあ……サンタナはこうやってアメリカ大陸に放置されたんだなあ……。

原作で言われてたほどかわいそうな感じではないけど、それでも一人きりになっちゃうのは寂しいだろう。時間も持て余すだろうし。

というわけで、暇潰しになればと思っただけで吸血鬼の生態調査をお願いしといた。あの子、研究者とか職人としてはかなりできるんだが、それを活かさない手はない。

まあ、本当に暇なときに片手間程度でやってくれればいい。他にやりたいことが見つかるなら、別にやらなくてもいいしね。

「サンタナ、こっちはお願いね。気をつけるんだよ」

「わかっているとも姉さん。そっちこそ気をつけるんだぞ」

「うん、ありがとう。あ、そうそう。これ、今までわたしが書いた吸血鬼に関するのメモね。調べようと思っただけでたわけじゃないから取っ散らかってるけど、ちよつとは助けになるかもだから」

「ありがとう。姉さんはいつも優しいな」

「当たり前でしょ、誰が育てたと思ってるの。お姉ちゃんは弟を守るものなのだよ」

えっへん！

「……そういうことをするから、カーズ様にいつまでも子供扱いされるんじゃないか？」

「いやいや、カーズ様からすればみんな子供でしょ。あの人十万年以上生きてるんだから」

「いやそういうことではなく……まあいいか。姉さんが誰かと愛し合っていると、俺には想像がつかん」

「むきーっ、サンタナまでそういうこと言うの！」

「だから、そういうところだぞ姉さん……」

なんて会話があっただけけど、そのときのサンタナはなんだか疲れ
た顔をしていた。解せぬ。

まあそれはともかく。

こつちの大陸はサンタナに任せておけば大丈夫だろう。まあ、原作
通りならこれだけやってても石仮面を完成させるだけのエイジャの赤
石は見つからないんだけどね。

というわけで、本命はユーラシア大陸のほう。わたしとしても、文
明のるつぼともいえるユーラシア大陸の、それも紀元前十世紀以前の
様子を見る機会がようやく巡ってきてとつてもワクワクしてる！

何より、この五百年の間に色々あつて持ち運びと保管の手段が手に
入ったのでね。最近はスケッチを残す余裕ができたんですよ！ そ
れでユーラシア大陸の古代文明を見られるんだから、そりやもう心が
躍るつてもんですよ！

え、どうせ下手くそだつて？ ふふーん、柱の男一味をなめないで
もらいたいね！

わたしたちは、地球の生態系の頂点に立つ生き物ですよ？ たとえ
わたしがその中ではみそっかすでも、そもそも生き物としてのスペツ
クが高いのだ。

おまけに練習時間は腐るほどある。それを無駄にハイスペックな
身体と組み合わせれば、写真顔負けのきれいなスケッチができるつて
寸法さ！

なんなら塗料も自前で用意して、彩色までしてるんだぞ。お絵かき
楽しい！

まあこの辺りまで行くと、さすがに生物としての能力だけでゴリ押
せなくなつてくるみたいで、今はまだ練習中つて感じだけどね。

ちなみにこのスケッチ、カーズ様もわりと気にしてくれてて、やめ
ろとは言われてない。彼はやっぱり根が研究者なのか、こういう知識
の蓄積にはむしろ賛同すらされてるくらいだ。

だからなのか、最近は昔に比べたらわりとカーズ様と行動する機会
も増えた。たまにいい絵ができるつと、褒めてくれる。

最近は、それで撫でられるのを普通に喜んでるあたり、わたしもいよいよ心の上でも随分人間から遠ざかったなとは思うけど。元々カーズ様は好きなキャラでも上位にいた人だから、ある意味当然かなって開き直ってる。

そうそう、そんな風に接触が増えたこともあつてかスタンドはとつくにバレてます。

隠し通せなくなったから申告したんだけど、特に怒られたりとかそういうのは今のところない。たぶん、わたしのスタンドじゃどうあがいてもカーズ様に致命傷は与えられないってことと、使い勝手は悪いけど便利ってことが大きいんだと思う。

実際便利だしね、わたしのスタンド。矢で攻撃するのが主だったはずなんだけど、五百年もの間ずっと修行してたら、最近になって収納能力が目覚めまして。

うん、なんかわたしのスタンド、四次元ポケットみたいな機能がついたんだ……。おかげでスケッチとかを保存できるようになったわけだけど、成長しない身体といいなんでわたしってこうも戦闘向きにならないかなー？

そんな風に思いながらも、いよいよユーラシア大陸に渡るべく移動を始めたんですけどね。

「オマエ……まさかワタシの守護霊が見えるのか!？」

ここでスタンド使いと鉢合わせる羽目になるとは思ってたなかったよ。

7. 初スタンドバトル

発端はユーラシア行きの道中で村に立ち寄ったことだ。わたしたちがいくら不眠不休で活動できるとはいっても、体質の関係で昼間は移動ができない。だから夜が明けるころには太陽を避けなきゃいけない。今回はたまたまそのタイミングで村に入れたってわけ。

とはいえ、わたしの日光耐性は仲間でも随一だ。これは今もなお変わらない。ノーダメージとはいかないけど、大体平均して四十分くらい。調子のいいときは一時間近く日光の下で石化することなく活動できる。天気が悪いともっと行ける。おまけに、今も少しずつだけでも活動可能時間は増えている。限界はいつか来るだろうけど、この耐性はこれからも鍛え続けていきたい。

だから屋内で休憩するカーズ様たちを尻目に、村に繰り出して人間の暮らしぶりを眺めたりスケッチしたり、ときには噂話に耳を傾けたりしてたんですよ。何度か休憩を挟みながら、ツノを隠して人間に擬態しつつね。

今まで何度か言ってきたけど、わたしは歴史や文化に強い関心を持っているからね。柱の男の一味ということに思うところはあんだけど、こういう瞬間がわたしにとってはとっても楽しいひとときなわけですよ。

で、そろそろ日も暮れてきたし戻るかー、って思ってたカーズ様たちのある家に戻ったんですよけどね。

そしたらですね……なんとこの辺を任せてる吸血鬼、死んじやつてまして。壁に空いた穴から差し込んできた日光に焼かれて。

その壁の近くに立って、死んだ吸血鬼の灰を見下ろす屈強な男が一人。周りには明らかに戦いの痕跡。

ところがそんな中、部屋の隅で椅子に座って優雅にわたしのスケッチ集を眺めてるカーズ様と、彼と一緒に談笑しているみんなの場違い感と言ったらッ！

「……ええと、え？ ああ、なんですこの状況？」

「見ての通りだ。あの人間が、仲間を取り戻しに来たとか言いながら

乗り込んできてな」

「ええ……だからって普通吸血鬼が人間に負けます？」

「ふふふ……どうやら例の力を使うようだぞ」

「え、マジですか？」

例の力……まさか、スタンド使い？

恐る恐る男に目を向ける。いかにも先史時代っぽい雰囲気のパフェイスペイント……入れ墨……？ どっちはわからないけど、そういう模様が顔に描かれている。

それと目を引くのは、両手にそれぞれ握られたマカナ（刀身に黒曜石を挟んで殺傷力を上げた木剣）だ。あれはわりと未来の、アステカで使われていたものだったかと思うけど……そうか、この時代でも既にあるにはあったのか。地域も近いし納得はできる。

「オマエたちも……あのバケモノの仲間か？」

まじまじと観察していたら、男が口を開いた。思ったより高い声だ……じゃなくって。

声質は問題じゃあない。そこには明らかに怒りの気配が漂っていた。仲間を取り戻しに来た、ってのは真実っぽいねこれ……。

ってことはこれ、あれじゃないの？ もしかしなくても、悪役はわたしたちなのでは？

そんなことを考えながらカーズ様に視線を戻したところ、

「ふん、仲間とは失礼だな人間。あれはただの手駒にすぎん」

「カーズ様ー!？」

なんでそんな煽るようなことを！

「そうか……じゃあ、オマエたちが一番悪いやつか！ 許さないぞ……オマエたちのせいで、オマエたちのせいでワタシの村はッ！」

完全にまつとうな動機のある復讐じゃあないですかやだー！

しかも今ので感情が高ぶったのか、男の身体からもう一つ、別のヒトガタが湧き上がってきた。大柄な男の分身と言われても納得する、筋骨隆々な立ち姿。その顔には、男のものと同じ模様が描かれているッ！

——人型のスタンド！

やっぱりこの男、スタンド使いだ！ まさかこんなところで顔を合わせる羽目になるなんて！

というわけで、前回のラストシーンに戻る。明らかに目の色を変えて動揺したわたしを見て、男ははつきりとわたしも同じ力が使えると察してしまったんだ。

「オマエ……まさかワタシの守護霊が見えるのか!?!」

これなんて答えればいいですかカーズ様!?!

せめて方針！ 方針だけでもください！ そしたらわたし何とかしてみせますから!!

「なるほど、その反応……やはりアレの使い手か。それではただの吸血鬼程度では苦戦してもおかしくはないか」

くっそう、完全に面白がってるなこの人!?!

そして、今回ばかりはわたしもジョセフの気持ちがわかるぞ！

次にカーズ様は、「お前に任せる」と言うッ！

「面白い……アルフィー、ここはお前に任せてみよう」

ほらやっぱりなー!!

くっそう、こうなったらワムウ！ ワムウだけが頼りだ！ こういう

未知との戦いは君が一番楽しめるやつでしょ!?!

「カーズ様、ここは私が!」

ほら！ さすがはワムウだ！ さすがは生まれついで戦士！

「いやワムウ、今回は控えよ。能力者同士の戦いがどういうものになるのか、確認しておきたいのだ」

「ム……なるほど。わかりました、それでは今回は、私も見に徹しさせていただきます」

ワムウーッ!!

「ふんっ!」

そして動揺する間も与えず突っ込んでくる男！ 勘弁してよもー

！ わたし、非戦闘員ですよ基本的に！

「……………」

あつ、今やれって意味で顎しゃくりましたね!?!

もー！ もう、本当に仕方ないですねこのカーズ様は！

わかりましたよやりますよ、やればいいんですよ!! そうですよわたしはカーズ様の助手ですからねッ!!

「うひっ、とお、ちよ、まつ、待って待って、ちよつと待ってっば!」
「待てと言われて、待つやつがいるか!」

「まったくもってその通りですねごめんなさい!!」

男の前に出た人型のスタンドが、猛烈な勢いでラッシュを放つてくる。明らかに人間の動きを超えたその速度、間違いない。このスタンド、近距離パワー型!

あつ、でも意外とイケる!? 散々戦闘訓練をさせられたからか、動体視力も反射神経もついてこれる! 全部を回避できてるわけでもないけど、これくらいなら!

なんだ、わたし強くなってるじゃん! いや、種族としての能力が高すぎるだけか!?! どっちだ!?

「姉上は相変わらず、強いのか弱いのかよくわかりません……間違いない防御や回避は一級品ですが」

「はっはっは、確かに。あいつ避けることだけはやけにうまいもんなあ」

「敵の能力が見えているのだ、ならば回避自体は容易だろう」
「なるほど」

君たち! 何をのんきに実況解説してるのかね!! わたしやいつばいいっぱいですよ!

ま、まあ? 「スタープラチナ」とか「クレイジーダイヤモンド」のラッシュがどれほどのものかわかんないけど、確かにこのレベルのスピードなら正面からなら普通に対処できそうだけどさあ!

というわけで、

「ていつー!」
「!?!」

右手を腕からぐねりと伸ばして操作して、鞭のように変形。それを振るって相手本体を打ち据える!

「んえっ!?!」

ところがどっこい、その瞬間わたしの腕ははじかれていた。

「むう、今のは」

「どうやら何らかの能力が発動したようだ」

人間の動体視力じゃ見切れないとは思ったけど、カーズ様の言った通りとつさにスタンドを戻して防御したんだろう。その判断は正解だ、鞭と同じようなものだと思って腕とかで防御したら、そこから腕一本食べへに行つてただろうから。

ただ、男の防御は正確に言うとは防御じゃなかった。スタンドがあらさつての方向を殴つたと思つたら、そこから先の腕が消えて、まったく関係のないところにあつた私の腕を殴り飛ばしたのだ！

何それ、どこでもドア的なやつ!? 攻撃を遠距離に飛ばせるって、それずるくない!? あのパワーを相手の予期してないところに叩き込めるわけじゃん!?

「はあっ!」

「うべっ!」

と思つていたら、今度は後頭部に一撃を食らつた。男のスタンドは明らかに虚空を殴つた体勢なのに、ある地点から先の腕が奇妙なもやに包まれて消えている。

「つで、いったあ!?! くっそお!」

殴られた反動を利用して前に跳び込んで片手での側転を決めながら殴られた辺りを垣間見たところ、空中に奇妙なもやが浮かんでいて、そこからスタンドの腕が伸びていた。

「……どうだワムウ、わかるか?」

「ただの遠距離攻撃では断じてないかと。恐らく、攻撃を別の場所に忽然と飛ばす、か……あるいは攻撃そのものを設置する……そのようなものではないでしょうか」

「ほーう、そいつあなかなか面白い技じゃあねーか」

はい実況解説ありがとうございます!

しっかしこれ、吸血鬼のパンチと同じくらいの威力だな! 波紋がないからそこまで脅威ではないけど、それなりに来るものがあるぞ! 波紋なしで攻撃を受けるとゴムみたいに包み込んで威力を吸収するのがわたしたちの体質なのに、純粹にパワーでそれを超えて来ると

かおつそろしいよ！

「い、今のが痛いので済むのか……!? くっ、まだだ、まだ行くぞッ！」
男がおののきながらも一步前に踏み込む。それに応じる形で、スタンドも腕を振るう。

その腕先が、また消える。今度の出現地点は……わたしの横っ腹か！ いいよ、これは回避できそうにない。それなら下手に避けるより、覚悟の上でもらっておこう！

殴られた反動を利用して、横に吹き飛ばわたし。けどこれ以上はさせないぞ。種はわかった。それにもしかしたら何かまだ能力があるかもしれないし、これ以上は！

というわけで、吹き飛ばされながらの空中で、わたしは自身のスタンドを呼び出す。

「【コンフィデンス】！」

それはあえて文字で言うなら、「ギユパン！」って感じ。そんな感じの雰囲気、わたしの手の中に弓が出現する。ルビーのような輝きを放つ、かなり大きめの弓。

これこそわたしのスタンド、【コンフィデンス】！

「！」

「いくよー！」

いまだ空中を吹き飛ばされながらも何も無いはずの弓を引けば、そこにどこからともなく矢が現れた。鏃はもちろん。スタンドを呼び起こす鏃と同じデザインだ。

わたしはそれを放つ！ 単発じゃあない、連続発射だ！ ふっふっふ、何百年も訓練したからねえ！ 速射もできるようになったんですよ！

けど、男は見事にそれに対応してみせた。ほとんど間を置かずに連射したのに、華麗な体さばきでギリギリのところを回避していく。

嘘でしょ。どんな動物視力してるの。それともこの時代の人間ってみんなそんななの？

「ほっ」

「やるじゃあねーか」

「そうですね。……ですが、人間ではここらが限界でしょう」

また実況解説組が何か言ってる。

でもその通りだ。「コンフィデンス」の矢が直線にしか飛ばないと思っただけ大間違いだ！

というわけで、おかわりと行こう！

わたしはもう一度、矢を連射する。数は七本。射程距離内で同時に出せる矢が七本までなんだよね。

と、ここまでならさつきまでと同じ。だけど今度は違う。野に放たれた七本の矢は空間を走り、広範囲へと拡散した。

そして、多方面から同時に男へ殺到する！

「な……っ!?」

ふっふっふ、なんてったって「コンフィデンス」の矢は自由自在！

わたしの意思に従って、その使命をまっとうするまでいつまでも（誇張）どこまでも（誇張）飛び続けるんだよォー！

だからたとえば、直角にだって曲がるのさ！

「く……っ、くそっ、くそおっ！」

さすがにこれは避けられないと判断したんだろう。男は即座にスタンドで攻撃を防ごうとした。自分の身体ごと横に回転しながらラッシュを放ち、それで矢を叩き落そうとする。

実に見覚えのある光景……と思ったけど、ん？ わざわざ回転してまでラッシュするってことは、あの空間飛び越えパンチは見えないところには出せないのかな？

でも、どれだけラッシュを放つても回りながらである以上、タイムラグがどうしても発生する。前後左右、さらには上下からも飛んでくる大量の矢に対応するには、それだけじゃあ難しいだろう。

何せあの無敵の「スタープラチナ」でさえ、ただ全方位から飛んでくるだけのナイフ（ただし吸血鬼が投げたもの）を防ぎきれなかったのだ。意思を持って動き回る矢を防げる道理はないね！

まあ実を言うとわたしと同時に制御できるのは今のところ二本が限界で、あとはわりと適当に飛んでるんだけどね。状況を見て適度にコントロールする矢を入れ替えることでごまかしてるだけだ。

それに矢は射程範囲外に出るだけじゃなくて運動エネルギーを喪つても消えるんだけど、物理法則を無視した挙動を何度もさせると普通よりその減少が早い。命中するころには普通の矢程度になつてるのはよくあるし、調子こいてたらすぐ消える。

そんなだから、コントロール下にならないやつとか動かしすぎたやつはちよくちよく横に逸れたりあっさりはじかれたりして消えてるんだけど、その間に次の矢を放てば問題ない。ふっふっふ、これぞ我が必殺の布陣！

「あれが出たようだな」

「みてーだな。あれは実際ちいーつとばかり厄介よ」

「はい、どの方向からも絶え間なく攻撃が続くというのは、なかなかに対応しづらいものです」

「ま、俺たちにはチョビつとしか効かんけどな」

「面倒なだけで、威力が低いからな」

「おう。だったらどうにでもならーな」

「同感です」

……なおカーズ様はもちろん、エシディシやワムウにも普通に負ける模様。

必殺じゃないとか言わないで……あの人たち見えない矢の雨に構わず普通に突っ込んできて強制的に本体での接近戦になるから、わたしとは相性が悪いんだよ……。それというのも柱の男が生物的に強すぎるのがいけない……！

ちなみに今回戦つて初めて気づいたんだけど、「コンフィデンス」の矢はスタンドエネルギーだから矢自体をスタンドで攻撃されると普通にダメージになって返ってくるっぽい。今みたいなラッシュでの攻撃的防御でも同様。

だから今、わたしの身体には少しずつ傷ができて、なんなら内臓もさつき殴られたのもあってそれなりに痛む。

つまり、この広範囲攻撃はスタンド使い相手には諸刃の剣。ちい覚えた。

覚えたところでそろそろ決めよう。わたしは飛び回る矢と共に、一

気に距離を詰める。

「……ッ！」

男はそれに備えようとするけど、スタンドは矢の対処で手一杯。それはわたしも似たようなものだけど、本体の戦闘力には大きな差がある。わたしは戦士ではないけど、柱の男の一味。吸血鬼を上回る身体能力を持っている。

だからこそ、本体同士の戦いに持ち込めばスタンド使いとの戦いで、もそうそうは負けない。はず。

一気に踏み込んで、男を殴り飛ばす！

「く……っ！ させない、仮にワタシが死ぬことになっても……！」

それを見て、もうさばききれないと悟ったんだろう。男は覚悟を決めた顔をして、矢の雨の中前に踏み出した。

完全に、刺し違えてでもわたしを倒す気だ。スタンドも同様で、今まで一番のエネルギーを感じるパンチがわたしに向かって飛んでくる。

でもね、残念だけどそれは予測済みだ。これくらいのこととは、まだ小さかったころのワムウも普通にしてきたからね。追い詰めたからってそこで気を抜かない癖はついている！

わたしは前に踏み込みながら、迫りくるパンチを冷静に正面から見つめながら、少し前から硬化させていた右手を繰り出す。

身体の治療ももう慣れたもので、これくらいはかなりの短時間でやってのけることができるようになった。モース硬度で言えば、8くらいだッ！

すぐ目の前で、男のスタンドの拳とわたしの拳がすれ違う。速度はほぼ互角！ 距離はわたしのほうが少し遠い！

このままじゃあ攻撃を食らってしまう……けど！ わたしの！ 腕は！ めっちゃ伸ばせる！

ズームパンチもかくやの速さでぐいんと伸びたわたしの拳が、男の腹部に突き刺さる。捨て身で攻撃に集中していた彼はその直撃を受けて、文字通り腹に穴が開いた。

「ぐがッ、がはあっ!？」

血反吐を吐きながら吹き飛ばす男。勝負あったな。そう思った瞬間。わたしのすぐ横で、壁が吹き飛んだ。

穴が開いたとか、崩れたとかじゃない。文字通りに吹き飛んだんだ。どれだけの衝撃が加わったかは、察して余りある壊れ方だ。

だけど、それで何ができるっていうんだろう？ 男が、自分の命も捨てて放った最後の一撃があさっての場所を破壊しただけ？ そんな意味のない行動をするなんて、とても思えないんだけど――。

「――うえっ!?!」

そこでようやく、わたしは男の意図を悟った。吹き飛んだ壁の向こうにあったものを見て、初めて。

「そういう、ことか……ッ!」

ぐつと歯をかみしめて、これから襲ってくる痛みを覚悟する。

太陽。壁の向こうに、それがあつた。わたしたち闇に生きる一族の天敵にして、唯一の弱点。山の彼方に向かいつつあるそれは、赤く暮れなずんではいるものの確かにまだそこにあつた。

そして遮るものがなくなったこの場所にその赤い光が一直線に差し込んできて、わたしを襲う。

「……ッ!!」

うへー、痛い！ しんどい!!

そりゃあ確かにわたし一族で一番太陽耐性あるし、なんなら歴史上もっとも太陽に強い女と言っても過言じゃあないと自負してるけど!!

我慢できるだけで！ 別に痛くないわけじゃないの!!

夕日は南天してるときよりは痛くないけど！ 痛いものは痛いです!!

「うぐう……いや、やってくれたなあ……!」

なるほど、とつきの機転としては十分すぎる成果だよ。これがわたしじゃなかったら、十分相討ちになってたと思う。

……いや、わたしたちは吸血鬼と違って石化するだけだし、わたしでなくともみんな即座に石化するほどやわな身体でもないから、どっちにしても勝ち揺るぎなかったと思うけど。

それでも、あの土壇場で一矢報いた男は間違いなくひとかどの戦士だよ。

「……………く、くそ……………う……………し、死ななかつた、か……………」

「うん……………ごめんね、わたし太陽にはちよつと強い体質なんだ」

そしてわたしは、男の前に立つ。それからそこに片膝をついて、彼の上半身を起こした。

「……………ワタシの……………負け、だ……………」

「うん……………わたしの勝ちだね」

「……………殺、せ……………」

「……………できればしたくないなあ」

しなくつちやあいけないのは、わかっている。だからそう言いほしても、手を止めることはないんだけど。

それでもやつぱり、わたしはできるだけ人を殺したくない。

今のわたしがそれを言っても、偽善でしかないことはわかってるんだけどね。でも、この気持ちはきつと、忘れちゃあいけないものだとも思うんだ。

「……………最後に何か言い残すことは？」

「……………聖、地に……………埋、そ、う……………を……………」

そこから先は、聞き取れなかつた。でも、言わんとしていることはわかつた。

だからわたしはまっすぐ男の目を見て、静かに頷く。

そうして、男の身体から力が抜けて。彼の野太い腕が、ごとりと床に落ちた。

「……………さよなら、名前も知らない戦士さん」

もう答えを返さない男に、わたしは声をかける。同時に彼の目を閉じてやりながら。

「よくやった、アルフィー」

そこに、みんなが後ろから声をかけてきた。その中で、カーズ様がゆっくりと拍手をしているのがわかる。

振り返れば彼は、差し込んでくる夕日を避けながらこちらに近づいてきていた。

「お疲れさまでした、姉上」

「ああ、アルフィーにしちやあがんばったんじやねーか？」

「ふん、まあまあだな」

「……ありがとうございます」

答えながらも思わず目を伏せたわたしの横に、カーズ様が同じように片膝をついた。そして今まさに息を引き取った男に手を伸ばす。

意外だな……カーズ様が立ち向かってきた相手に手を伸ばすなんて……。

「……って、カーズ様？　なんで石仮面を持つてるんです？」

「知れたこと。この地に置いた吸血鬼は死んでしまったからな。この男に代わりを務めてもらうのだよ」

「ええ……あの、この人もう死んでるんですけど」

「私の見立てではまだ間に合う。なに、人間が意外としぶといことはお前も承知しているだろう？　完全な死が全身を覆うまで、魂を喪うまで、多少だが猶予がある」

「だからって戦士として死んだ人を吸血鬼にするとか……相変わらずやり方がエグいですよカーズ様……」

「はあ、とため息をつくわたしをよそに、カーズ様は手際よくやることを終わらせてしまった。」

止める間なんてなかったけど、どっちみちわたしが止めてもカーズ様は強行しただろうし、なあ……。

「ごめんなさい戦士さん……あなたをあるべきところに戻せそうにありません……。」

8. 第二の矢

カーズ様の見立て通り吸血鬼として蘇った男は、カーズ様に説明されてすぐに死のうとした。そりやあさうだろうなあ。

でもカーズ様が、

「お前が自ら死ぬのは自由だが、そうしたところで代わりの吸血鬼はすぐに用意できる。そいつがこの地でどう振舞うかは私にもわからんぞ？ もしかしたら、この辺りの人間を根こそぎ食ってしまうかもしれないなあ。」

その点、お前が私の命令とその身体を受け入れていれば、少なくともこれ以上吸血鬼がこの地に増えることはないのだが……ま、私にはどちらでもいいことだがね」

なんて言ったものだから、比喻ではなくてマジで血の涙を流しながらしばらく葛藤した結果、しぶしぶ傘下に入ることを承諾した。

汚い……さすがカーズ様汚い……。

あれ、本当にどっちでもいいんだらうなあ……。

わたしとしては、最期に約束したこともあつて非常に気まずい。

「あの……」

だから、タイミングを見計らつて声をかけた。

そしたら殺意満々の鋭い目で睨まれたので、めちやくちや怖かったです。

「あ、あの、すいません本当に……！ 約束したのに叶えてあげられな

くて……！」

「……オマエがそうしたくてしたわけでは、ないのだろうか？」

「それは、まあ、そうなんですけど……でも、破ってしまったことには変わりないですし……なので、代わりと言ってはなんですけど、吸血鬼について教えようかと……」

そこで言葉を切つて様子を窺えば、殺気が引いた。どうやら、話は聞いてくれるみたいだ。

カーズ様がいつ来るかわからないから、わたしはひやひやしなながら話を続ける。吸血鬼という存在について、今わかっていることをでき

るだけ。

「……というわけなので、他人の血を吸うことで理論上は永遠に生きていけます。ただ、日光を浴びたらほぼ即死なので気をつけてください」

「……よくわかった。教えてくれて、礼を言う」

「いえ……感謝されるほどじゃあないです。約束、守れなかったですから……」

説明しておいてなんだけど、この人吸血鬼になったのにめっちゃ思考がまともだな。そんな人もいるのか……びっくりだ。

ただ言うまでもなくこの人は例外なんだろうなあ。精神的な要素も重要なファクターになるジョジョの世界だからこそ、高潔に生き抜いた人に正常な思考を残したのかもしれない。

でも、生前の意識がはつきりしてよかったのかどうかはわたしにはわからない。いっそのこと狂っちゃったほうがよかつたんじゃないかって思ってしまうよね……。

「……オマエは、きつとそこまで悪いバケモノじゃないのだろう。短い間だが、戦ったからこそわかる。今も、オマエは誠実だ。だから、ワタシはオマエのことは許そう」

「……でも」

「それでもオマエが自分を許せないなら、……そうだな、これを」

ためらうわたしに言いながら男が差し出したのは、戦いでも彼が使っていたマカナだった。しっかり二本だ。

思わず受け取ってしまったから、彼の意図がわからなくて視線で問いかける。

「もう、ワタシは一族の戦士ではない。だからそれは、ワタシが持っているいいいものではない」

「はあ……えっと、つまり？」

「それはワタシの、戦士の魂だ。だからワタシの代わりに、それを聖地に埋葬してほしい」

「……なるほど。わかりました、約束します。今度はちゃんと守ります」

「場所はわかるか？」

「わかりません。でも、この辺りで聖地って呼ばれてる場所があるらしいことは知ってます」

「ああ、そこで間違いないだろう。では、頼んだぞ」

「はい、任されました！」

それだけ交わして、わたしは彼と別れた。

……どうやってカーズ様に寄り道を進言しよう。約束したはいいものの、正直殺される気しかなないんだけど。

でもなあ、約束しちゃったしなあ……。一回は破っちゃってるし、今回ばかりはわたしの命が脅かされようともがんばらないとだよね……。

はあ、とため息をついて、託された二本のマカナを何気なく眺める。大きい。わたしが飛びぬけて小さいのもあるけど、それにしたって大きい。このまま腰に提げたら地面を引きずっちゃうぞ。

仕方ない、急いで収納しちやおう。

「【コンフィデンス】第二の矢、【スターシップ】！」

わたしはマカナを二本左手に抱えて、右手に矢だけを出現させた。その鏃には、星のデザインが施されている。

それからくると矢を逆手に持ったわたしは、その鏃を自分の腕に向けて……。突き刺した！

痛い！ でも別にリスカとかそういうんじゃないからねこれ！

だって……。ほら、いつの間にか周りの景色が変わってる。夜の帳が下りた壊れかけの家から、色んなものが雑多に並べられた広い部屋に。

これこそ、わたしのスタンド【コンフィデンス】のもう一つの能力。この星の模様が施された矢で貫いたもの（と、条件はあるけどそれが接触してるもの）を、この部屋に収納する能力だ。大元は変わることなく別の能力を保持している【キラークイーン】にならって、第二の矢【スターシップ】と呼んでいる。

たどり着いたこの部屋は、十メートル四方くらいの広さ。窓はなくって、ドアとかもない。だけどなぜか一定の明るさに保たれてい

る。

そしてここに並んでいるのは、今までわたしが記録したメモとか、描いたスケッチとか、あるいはなんとなくほしくなって手に入れたお土産とか、そういうものだ。ついでに例の矢もね。

原理はまったくわかんないけど、たぶんどこにもないどころでもない、現実から隔離された空間って感じかな。わたしはスタンド空間って呼んでる。

「カーズ様を説得できるかどうかわかんないけど、とりあえずすぐに取り出せる位置に置いておこう」

このスタンド空間に最初にたどり着くのは、ちょうど中央だ。その近くには仮置き用の棚を置いてあるから、ここにぽんとマカナを載せておく。

でもって外に出る。そう思った瞬間に、元いたところに戻っていた。もう慣れはしたけど、相変わらずスタンドって不思議だ。

ただ便利は便利なんだけど、対象に一定以上突き刺さらないと発動しないのが欠点なんだよねえ。

突き刺さないといけないってことは、つまり傷をつけなくちゃあならないってことだ。おかげで最初の頃は本当に困ったよ。ちょうど初期の「ハーミットプール」が、念写のためにわざわざポラロイドカメラを破壊する必要があったのと同じようなものだ。

接触してるものも収納するから今のままでもいいと言えればいいけど、そのたびに自分を刺さなきゃいけないのはちよつとしんどい。

だから絶賛訓練中で、少しずつマシンになってきてはいるんだけど……それでも現状だと絶対に傷をつける必要がある。抜け道を使うにしてもワントンポ遅れる。

さらにこの「スターシップ」。五部に出てきた「ミスター・プレジデント」と違ってスタンド空間から出られるのはわたしが出そうと思っただけで、しかも一旦中に入ってももの確認しないといけない。ゲームみたいに一覧が表示されればいいのと思うけど、そう都合よくいかないのが現実なんだろう。

おかげでカーズ様からは便利アイテム扱いされつつも、ちよくちよ

く愚痴を言われてましてね。使い勝手は悪いけど便利ってわけです。訓練は続けてるし、スタンドはできると思い込むことで本当にできるようになったりするから、いずれはと思ってるんだけどね……どうなることやら。

威力をゼロにする、でも矢は貫通させる。両方やらなくつちやあならないところが幹部の辛いところだな。覚悟はいいか？ わたしはできる。

……っていうか、どっちにしても種族柄練習する時間は文字通り腐るほどあるから、そのうちなんとかなるだろうって思ってもいるけどね。

「カーズ様、お待たせしました」

「遅いぞアルフィー」

あ、カーズ様待っててくれたんだ。少し前までは置いてかれるか強引に連れていかれるかだったと思うんだけど。最近結構待ってくださいね？

もしかして、ちよびつとは気を許してくれてるんだろうか。それなら寄り道したいって言っても許されるかな。

「行くぞ」

「は、はい。……あの、遅いって言われたうえでこれ言うのは、とつても申し訳ないんですけど」

「なんだ、言ってみろ」

「この辺りに、色んな人が聖地と呼ぶ場所があるみたいなんです。そこに寄りたいんです」

「……そこは私の時間を使うだけの価値のある場所か？」

「わかりません。わかりませんが……実はその聖地の周りには、不思議な力を使える人が何人かいるみたいなんですよ」

「ほう……？ それは本当か？」

あ、なんか行ける気がする。疑ってる感じに見えて、ちよつとだけ目が好奇心で光ってる。

「それもわかりません。……でも、この村も、他の村でもそういう噂を聞きました」

残っていたのだろうか。その影響で、この近辺では例の能力に目覚めるものが他の地域より多いのではないか？

あるいは、ここに赴いた人間がそれに目覚める儀式か何かがあるのかもしれない。だからこそ聖地というわけだ」

「はあー、なるほど。名推理ですね」

わたしが持ち上げると、ふふんと得意げに笑うカーズ様である。

うーん、つまりこの場所は、七部の悪魔の手のひらみたいなき感じになってるのかな。あれは入った人間は死ぬわ、方位磁石効かないわ、流砂になって場所が変わるわで、本気でやべーところだったはずだけど。ここはそんな雰囲気もなく、落ち着いた平原って感じ。

もしかして、カーズ様が隕石をまるっと回収しなかったらそうなったのかもしれない。あれが及ぼす効果は悪魔の手のひらのものに近いし。もしかして、七部以降の世界はまずそこで分岐した世界なのかも？

「……あの隕石の影響はあっても、それそのものがないならこのまま放っておいてもいいですかね？」

「そうだな。もしあれがそのままここに残っていたとしたら、どうなっていたのかという好奇心もなくはないが……」

「あれはもう全部鑛に加工しちゃいましたからねえ」

「そしてそのほとんどはもう私には用のないものだ」

「そう言いつつ、今回は捨てずに持ってますよね？」

「ふん、一族を皆殺しにした結果人手不足になった教訓だ。これはいずれ、何かに使えるかもしれないからな」

とか言っておきながら、当の鑛はわたしが管理してるんですけどね。

「謎は解けた。行くぞアルフィー、もうここに用はない」

「あつ、すいませんちよつとだけ、ちよつとだけ時間をください！」

やることやっつてはいおしまい、とばかりに背中を向けたカーズ様にわたしは慌てて声をかける。

そして彼が返事をするより早く、【スターシップ】の矢で自分の手に刺した。

で、スタンド空間からマカナ二本をつかんですぐ外へ。

「どういうつもりだ？」

もちろん、すぐにカーズ様から声が飛んでくる。

「すいません、彼の誇りを腐らせたくなかったんです。どうしてもちやんと、眠らせてあげたくて」

「さすが姉上、よくわかっておられる」

「まったく、お前はたまにワムウのようなことを言う。……ああいや、ワムウを育てたのはお前だったか」

「うーん……ワムウはわたしが育てなくってもたぶんこんな感じになっただけだと思いますけど」

実際わたしのいない原作の彼は気高い戦士だけど、そのありようはこの世界の彼と大差ないし。

そんな風にとりとめのない会話をしながら、わたしはマカナを平原……隕石でできたクレーターの中央付近に埋める。

地面は手をスコップ状に変形させて掘った。なんだかこういうところだけ器用になっていくなあ……。

「これでよし、と……。どうか安らかにお眠りください」

「……用は済んだか？」

「はい。すいませんでした、わたしのわがままで」

「構わん。お前は他の連中と違って、普段は滅多に自分の意思を出さないからな。たまにはこういうのもいいだろう」

「カーズ様……ありがとうございます」

なんだどうした、カーズ様がデレたぞ。

ああでも、原作でも目的達成の直前までは結構紳士っぽい行動してたか。花とか犬とかを、巻き込まないように動いたこともあったね。

なんていうか、仲間にいるうちはわりと仲間の行動を目立って否定しようとはしないんだよね、カーズ様。貫くべき自分の意思が関わらないところだと、わりと寛大っていうか……。

上手く言えないけど、落差の激しい性格な気がする。でもそういう差がはつきりしてる人は人間にもいるし、敵対しない限りは話通じるから、なんだかんだでわたしもカーズ様のこと嫌いにならないのか

も。殺されたくないっていう打算ありきだけど、そういうところがあるから一緒に何千年もいられるのかもなあ。

「……なんだその顔は？」

「んふふ、いーえなんでも。それじゃ行きましようカーズ様！」

「はしやぐなやかましい。それだからお前はいつまでもガキなのだ」

「んまー失礼な！ わたしだってもう一万年以上生きてるんですよ、もう立派な大人ですとも！」

「お前が言っても説得力がまるでないぞ」

「むーっ！」

超上から目線で頭をぼんぼんされるとか、なんたる屈辱！

まったくもう、カーズ様はこのロリボディの魅力をご理解いただけないようで残念だよ！

……ご理解いただけでも、それはそれでとも思うけど。

うーん、もしカーズ様がロリコンだったら、わたしはカーズ様とそういう関係になってたりしたんだろうか？

それは……まあ、それはそれで。

そんな風に思う辺り、わたしはすっかり馴染んでしまったみたいだ……。人生色々……。

9. 波紋登場

色々ありましたが、何はともあれユーラシア大陸にやってきました。

いやー、大陸が変わると景色もだいぶ変わってきますね！ 動植物の生態系もかなり差があるから、スケッチとかしててとつても楽しい！

もちろん浮かれてるだけじゃなくって、やることはやってるよ。むしろ浮かれてたのは最初だけでしたね。だってまずやったことって、吸血鬼による情報収集のための準備だもん。

しかもアメリカ大陸と違って足掛かりがない分、かなり短期間でかなりの数の人を犠牲にすることになりました。

ふふ、さすが文明のるつぼユーラシア大陸、広さも人口もアメリカ大陸の比じゃない。おかげで精神的負担の最大瞬間風速がわたし史上最高を記録しましたよ。

ただ、血なまぐさいスタートを切ったユーラシア大陸での活動も、すぐにとん挫することになった。

「何だど？」

「あの、ですので……この辺りに配置してた吸血鬼が、全員死んでました」

そう、吸血鬼すぐ死ぬ。あちこちに配置したのにわりと短時間で全滅しちゃってて、ちつとも網が広がらないのだ。

大量の犠牲者を出したのにその甲斐もない展開に胃が痛いよ（比喻。残念ながらこの頑丈すぎる身体でそれは起きない）。いや、彼らが長く生きててもそれはそれで犠牲者がたくさん出るんだけど……うう。

わたしの心についてはこの際考えないようにするとして、さすがにこれはちよつとおかしい。

なんたって吸血鬼は、他者の生命エネルギーを吸い取って生き続ける生き物。元は人間だし、生物学的には人間なんだけど、はつきり言つてその枠を超えたバケモノだ。殺されてもほとんど死なないわ

けだし。

「うーむ……まさかとは思うが、こちらの大陸には吸血鬼の天敵か何かいるのかもしれない」

「あ……そ、そうですね。考えたことなかったですけど、元は人間ですしね」

天敵と言われて、そういえばと思う。うん、これたぶん波紋案件だ。原作で波紋の修行場として整備されてる描写があったのはチベツトとイタリア。距離はあってもどちらもユーラシア大陸だ。いつからあつたかははっきりしてないけど、確か波紋の歴史は四千年くらいって言及があつたはずだから、わたしの計算が間違つてなければもうあるはずだ。

「ああ、これは早急に調べなければなるまい。あちらでは吸血鬼を使った人海戦術は比較的うまく行っていたが、それがこちらで通じぬとなれば計画の見直しも必要だ」

「はい、お供します」

うーん、いよいよ波紋戦士との戦いが始まるのか……。遂に波紋をこの目で見れるつていう、ファンとしての心理はあるけどやっぱりこの身体がなあ……。

日光に耐性があるわたしだから、そこまで致命傷にはならないんじゃないやあないかって予想はあるんだけど、実際どうかは神のみぞ知る。うう、怖いなあ。

とはいえそれを知っておかないとあとあと困るのも間違いないだろうから、知識としてはちゃんと覚えておきたいところではあるよね。

というわけでカーズ様と一緒に調査だけ……彼が何をしたかと言えば、ずばりシンプルな囃作戦。少し大きめの街で、わりと強めかつ派手に暴れそうな悪漢を吸血鬼にして解き放つたのだ。そして舞台の外から観察する、つていう。

相変わらず、人を人と思わないやり方はさすがカーズ様。わたしにはとても思いつかない。まあ、止めてない時点でわたしも同罪ですけどね。

そして数週間が経って、今わたしたちは小高い丘からその下を眺めている。

視線の先にあるのは、戦闘の様子だ。一对一の、決闘とかそういう類のじゃあない。大勢の人間が、束になって一人に立ち向かっている……普通なら蹂躪と呼ばれる類のだ。

けど蹂躪されているのは大勢いるほう。当たり前だ、だって襲われる側は吸血鬼なんだから。

それなのに吸血鬼を襲っている人間たちはどれだけやられようとひるむことなく、吸血鬼を襲い続けている。一人がやられても後ろに続く人間が、それでもダメならその後ろの人間が、さらに、さらに、さらに……という具合で、人海戦術で吸血鬼を圧倒しているのだ。

雷雨という悪天候の中とはいえ、昼は昼だ。あそこまで命を投げ捨てられる人間がこんなにたくさんいるなんて思わなかった。

何より目を引くのは、彼らは明らかに波紋と思われる技を使っていること。太陽と同じエネルギーを持った、吸血鬼を滅する黄金の技。

あれを食らってしまったえば、たとえ吸血鬼だろうと死に至る。彼らは数で力の差を補い、誰か一人でもいいから吸血鬼に波紋をたたき込もうとしているのだ。

吸血鬼側も波紋の危険性は既に理解しているようで、必死に近づけさせないように立ち回っているけど時間の問題だろう。何せ片腕がない。既に一発腕に食らってしまい、自切した結果だ。

原作を知っていると気化冷凍法とか空裂^{スペースリパー}眼刺^{ステインキアーズ}驚を使えばいいのにつて思っちゃうけど、あれは悪のエリートであるD I O様だからこそすぐに使えるようになっただけなのかもしれない。

「まるで一つのエサに群がる蟻だな」

「差し出がましいことを申すようですがカーズ様、虫の蛮勇もそうバカにできたものではないかと」

「……彼らはすごいですよ、わたしにはあんな風に勇気をもって立ち向かうなんてできないです……」

「すんげえなあ。ああまでして吸血鬼を倒してえつてのかわよ？」

「それだけ吸血鬼が脅威なんだと思います。彼らにしてみれば、生き

物としての存続を賭けた戦いなんじゃあないかと」

「……そういうもんかねえ」

「まあ、わたしたちは天敵って呼べる生き物がいないですからね……」
実感なさそうに首を傾げてるエシデイシだけど、気持ちはわからなくはない。

でもわたしとしては、元人間としては、やっぱりああして戦える人々に深い共感を覚える。わたしがそれを実行できるかはさておいて、だけど。

それでも、いやだからこそ。

ああやって立ち向かう勇氣は。闇雲じゃない、一人一人が工夫と思考をその一瞬一瞬で続々と繰り出す人々の姿は、まさしく恐怖を克服して、わがものとした人間だからこそその勇氣の賛歌を高らかに歌い上げてるようにも見える。

……そうだね、ツエペリさん。きつと、あれが人間賛歌なんだよね……。一万年以上生きててもなお、わたしにはたどり着けない境地だ……。

「……各地の吸血鬼も、ああしてやられたということか」

「人間は一応知恵があるからなあ。何かしらの形で弱点が伝わって、そこから崩されたってどこか」

「そしてあの技術ですな。吸血鬼を滅ぼす見たことのない技術……身のこなしもなかなかのものだ。ぜひ戦ってみたいものです」

マイペースな締めをするワムウは相変わらずだなあ。

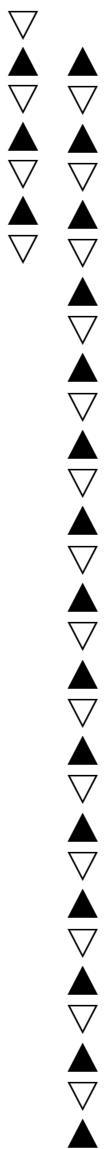
とはいえ、カーズ様たちも理解しただろう。あの技……波紋こそが自分たちの前に立ちふさがる壁だってことを。

「……作戦を練り直す必要があるな。我々にも効果を及ぼしかねないあれへの対策を、まずは考えねばなるまい。しかしエイジャの赤石のための情報収集も疎かにはできん……これは吸血鬼どもに潜んで調べるように指示すればよいとして……ううむ」

さすがにカーズ様の表情が渋い。

今までうまくいったやり方ができないってなると、誰だっけそうなるよね。思わぬ天敵も出たこともあって、かなり機嫌も悪そうだ。

あとで慰めてあげよう。



それから数百年。わたしも一万三千歳くらいになりましたが。

前世で謎とされていた中東近辺の「前千二百年のカタストロフ」の原因の一つが柱の男だったなんて思わなくて、またしてもゴリゴリ精神を削られもしましたがなんとか生きて紀元前十一世紀くらいを迎えました。

わたしが今どうしてるかと言うと、情報収集のため各地に潜む吸血鬼との連絡役みたいなポジションに落ち着いて、あちこちを巡ってる。

カーズ様たちとも一緒に行動はもちろんでるんだけど、最近はず接殺しに関わる頻度はかなり減ってたりする。

というのもどうもカーズ様、最近はず虐殺シーンをなるべくわたしに見せないようにしてくれてる節があるんだよね。優しいんだか厳しいんだかわからない。

でもそれは素直にありがたいので、わたしは今連絡係として各地の吸血鬼とカーズ様の間で情報のやり取りを取り持つお仕事をメインに活動してるってわけ。

なんでそんな仕事があるのかといえば、もはやユーラシア大陸はあちこちで文明が根付きつつあるわけで。特にいわゆる四大文明の地域はそれが顕著で、そろそろ派手に動きづらくなってきてるんだよね。

だから昼間でもある程度活動できるわたしが、伝令役としてうってつけだったので。

そしてこれまた最近のカーズ様の妙に優しいところなんだけど、最低限仕事をこなしたらあとはわりと好きにしていっていいと言われてるんですよ。

なのでわたしはこれ幸いと、あちこちでこの時代の人々の暮らしを

詳細にスケッチしたり、記録に書き起こしたりして過ごしてる。おかげでここ百年くらいはようやく素直にフィールドワークを楽しめる余裕が戻ってきた。

うんうん、歴史を学んだ人間が一度は夢見るタイムスリップ（厳密には違うけど）をしたんなら、これはやつとかないかね！

……薄々これもカーズ様の策なんじゃないかって思ったりもするんだけど、藪蛇になるのも嫌だしなるべく考えないようにしてる。

まあそれはともかくですね。実はわたし、最近になって遂に自分の流法^{モード}に目覚めたんですよ。

「……今回はこんな感じでいいかな？」

水面に映り込んだ自分の顔を確かめながら、一人頷く。

その顔は、いつものわたしの顔とは違ってる。ツノは完全に頭の中に納まつてるし、顔は幼さ全開じゃなくって大人の女性感あふれる美しさになっている。

さらに言えば身体も五十センチくらい伸びてるし、スリーサイズもボンキュッボンなダイナマイトボディ（死語）だ。わたしの身体がもしも順当に成長してたら、こうなってたんじゃないかって感じの姿だね。誰がなんと言おうと、わたしはきつとこんな感じになってたはずなのだ。そうしたらそうなのだ！

……で、これは一体何事か、って言えばざぱりわたしの流法^{モード}が変身能力だったんだよね。そう、わたしはカーズ様の命令で連絡係をやってるうちに変装の必要に駆られてあれこれやってたら、変装どころか変身能力に開眼してしまったのだ。

……いやいや流法^{モード}って戦闘技術じゃなかったんかい、って自分で自分にツッコんだのはいい思い出。これは完全に魂レベルで戦うことを拒否してますね……。

いや戦いで使えないわけじゃあないんだよ。究極生命体になったカーズ様のような凶悪さや万能さはないけど、それでもかなり幅広い変身が可能だ。

いい例としては、翼を生やして空中戦ができる。そこから「コンフィデンス」を使えば、一方的に攻撃ができるわけで。やったらやつ

たで吐きそうになるけど……っていうかなったけど。身体が頑丈すぎてそんな気分になっただけで済んじゃったけど。

そんなわけだから、今は完全に変装用だ。何せ素の姿で人間社会をうろついていると、色々不都合があるんだもん。良い人は親はどうしたとか言ってくるし、悪い人はさらって売り飛ばそうとするし。ろくな目に遭わない。

その点この流法モードは、男にも擬態できる。声も変えられる。おかげでルパンもびつくりの仕上がりよ。

なんなら他の動物にだって変身できるから、本当に便利で便利で仕方ない。中身はそのままだから長時間は無理だし、ある程度ダメージ受けたりすると元に戻っちゃうけどね。

「……やー、賑やかだなあ。やっぱり中国はすごいところだ。さすが、四千年の歴史だねえ」

そうやって大人モードになったわたしが今いるのは、ちようと易姓革命が起った直後の中国。その覇者たる周王朝の都、豊邑ほうゆうだ。……おっと、今は川を挟んで移動してて、鎬京こうけいって呼ぶんだっけ。

いやーまさかわたしが歴史に興味を持ったきっかけのマンガにも出てきたあの街を、実際に歩けるとは思ってたからね！ 憂鬱な気分も吹き飛ぶつてものですよ！ 生きてればいいことあるつてホントだね！

え？ いやいや、さすがにフィールドワークは仕事が終わってからにするよ！

そんなフアンのうんちくはともかく、実際はそんな簡単に王朝が切り替わるなんてことはない。内政をしっかりと充実させる必要があるのはもちろん、軍事的にもやらなきゃいけないことがたくさんあって、この街どころか各地が賑やか……って言うよりは騒がしい。

カーズ様にしてみればそうやって荒れてる時代のほうが暗躍しやすいんだけど、内乱の時代はろくにエイジヤの赤石を探せないから一長一短って言った。

ただ、どつちにしても吸血鬼が表通りを堂々と歩けるわけもないから、大体はスラム街に落ち着くことになる。

……というわけではつちり変身と変装を決めたわたしは、今日も鎧京の街並みを歩き回ってその奥のほう、スラムにやってきた。

「えーつと……あ、ここだここだ。すいませーん」

その中にある家の一つで、わたしは声を上げる。

……んー？ 返事がないなあ。

「すいませーん？ 留守ですかー？」

もう一度呼び掛けてみたけど、やっぱり返事がない。

おかしいなあ、どうしたんだろう。二十一世紀なら、ここから推理もののドラマが始まるんだろうけどここ紀元前十一世紀ですよ？

そんな事態、そうそう……いやあり得るのか。スラムだもんなあ。

ここら辺の住人に吸血鬼が負けるとは思えないけど、一応確認するか……と思つて中に入つてみたところ。

「……これは」

そこには、不自然な形で落ちた服があつた。まるで、着ていた人間だけが忽然と消滅したときのような、そんな。

「どなたかのう？」

思わずそれに近寄つたわたしに、聞き覚えのない声が飛んできた。ここに置いてた吸血鬼の声じゃない。

侵入者……かどうかはわからないけど、それは正直問題じゃあない。そんなことよりも、もっと大事なことがある。

なぜなら、警戒して見せたわたしの目の前に現れたおじいさんは。

コオオオオオ……という、特徴的な呼吸をしていたのだから。その拳に、見覚えのある黄金の輝きを宿して。

10. 伝説との邂逅

アツ、これダメなやつだ。直感でそう思った。

だって、どこからどう見ても波紋使いじゃあないですかやだー!!
下手しなくともうつかり握手とかしただけでめちやくちや痛いやつですよこれは!

「……ここに住んでたものの友人なんです、そういうあなたは？」
それでも、下手なことはできない。わたしはできるだけ堂々と聞き返したけど……どうかなあ、できてる自信ないなあ。

「そうであったか……それは、災難であったのう」
さてどう来るかなって思ってたたら、意外にもおじいさんは小さくため息をつきながらそう答えた。

意味するところはなんとなくわかる。だけど本当に心からそう言ったのかは、まだわからない。

だってまだ波紋がスパークしてる。彼はまだ、警戒を緩めていないのだ。

「お嬢さんに言っただけ信じてもらえるかはわからんが……ここに住んでいた男はな、妖怪だったのだ」

「……………」

とりあえず、語るに任せて首を傾げてみせる。

妖怪……なるほど妖怪ね。言い得て妙な表現だ。

「少しずつだが確実に被害が広がっておつてな。ここいらじゃあもうこの一年で五十人近くが行方不明になっておる」

「それは……かなり異常事態ですね」

「うむ……ゆえに、な。わしが赴くことになったのだ」

な……にやってんのあのバカーっ!!

あれだけ目立つことは慎めつて口酸っぱくして言ったのに、カーズ様だって散々釘刺してたのに!!

これだから吸血鬼ってやつは! やっぱり急に大きすぎる力を手にしたら人間ダメになるね!!

「……残念です。この辺りには久しぶりに来たので、顔を見ようと

思ったんですけど」

「災難であつたのう。いや、お嬢さんに怪我がなくてよかつた、そう思つておくべきやもしれんのう」

「そう、ですね……」

本当に災難だよお!!

……まあ、嘆いていても仕方ない。カーズ様に報告しないと。そんなでもつてこのあとのことを考えないと。

「時にお嬢さんや」

「はい、なんででしょうか？」

「今日の宿はどうするつもりなのだ？ もしここに泊まる予定だったのなら、残念ながら遠慮してもらわねばならん。他に仲間がおらんか調べねばならんし、そやつが来るやもしれんからのう」

「あー……確かにそう、ですね……」

いや、帰ります。もうおうち帰りますんで……宿とかいいんで……本当に……。

つていうかここにいた吸血鬼、下手な証拠とか残してないだろうな……それだけは困るぞ……。

「ふむ。であれば、今日のところはわしの家に来るとよい。年寄りに年頃のお嬢さんをうまく持て成せる自信はないが、設備だけは整つておるゆえ」

出たよ良い人！ そこまでみんな親切にしてくれなくてもいいのよ？ もうちよつと他人に関心薄くていいんだよ!?

「……いえ、せつかくのお言葉ですがあまりお世話になるわけには。ひとまず自分で宿を探してみますよ」

「欲のないお嬢さんだのう。ならばわしがあまり引き留めるのも失礼というもの。これ以上は言うまい」

「すいません、親切にしていたのに」

「よいよい。歳を取るとどうも世話を焼きたくなって困る。……だからのう、これもそのじじいの世話焼きと思つてくれて良いのだがな」
「？ これは？」

わあ、竹筒ちくかんだ！ 巻物状にはなつてない、一本だけだから札つて

言ったほうが正しそうだけど。

それはそれとして、甲骨文字が書かれていますね。呂子牙……？

……え？ それって。まさか、え？ 嘘でしょ？

信じられない気持ちを全開に、目の前のおじいさんの顔を凝視する。

すると彼は、いたずらに成功した子供みたいにつこりと笑みを浮かべた。

「許可証みたいなもんだのう。それを持ってわしの家まで来てくれれば、家人が部屋を用意してくれるというな」

「わお……それはまた。なんていうか、本当にありがとうございます」
脈が早くなるのを感じながらぺこりと頭を下げれば、おじいさんは好々爺の見本みたいな笑い声を上げる。

波紋の輝きは、いつの間にか消えていた。

「では、わたしはこれで」

「うむ、ここいらは治安もちとよろしくないからのう、気をつけてな。

……おおそうだ、お嬢さん」

「はいっ。」

呼び止められて振り向けば、おじいさんはぱちりとウインクをしながらこう付け加えた。

「名乗っておらなんだのう。わしの名は尚しやうという。もし宿が見つからんくてわしの家に来るのであれば、その名で場所を訪ねてくれればよいからのう」

「ツ!? ……わ、わかりました。本当に何から何までありがとうございます」

なんとかそう口にして、わたしはそこを後にしたけども。

うん。

なんていうか、うん。

この時代の！

周の都にいる!!

呂尚子牙さんとか!!!

要するに太公望じゃあねーかふぎけんばーかばーか!!!!

わたしは色んな意味でバクバク高鳴る胸を押さえながら、足早にならないよう努めて普段のペースで街並みを抜けていく。

太公望！ 古代中国において、商から周へ易姓革命がなされるに当たってその功績大として歴史に名を刻む、稀代の名軍師だ！

まあ時代が時代だけにどこまで本当かはわからない点多々あるし、なんなら彼の出自とか経歴はほとんど残ってないわけなんだけど。それでも周の中で一つの国の祖として名を残す以上、明確な功績があつたのは間違いないだろう。

そしてわたしにとつては、歴史に興味を持つきっかけになつた憧れの人物でもある！

わたしが憧れた人は漫画のキャラクターで、歴史上の太公望とは決して同じではないのはわかつてる。それでも太公望という人物は、確かに偉業を成し遂げ歴史に名を刻む人物。そんな彼に惹かれないはずがなかった。

どちらも知恵を絞って仲間を勝利に導く人。勝てない戦いをひっくり返す鮮やかな手腕。その姿はわたしにとつて、まごうことなきヒーローだつたのだ！

そんな人と顔を合わす機会に恵まれた。これほど幸福なことかあるうか！ いや、ない！

いやもう、嬉しすぎて顔がとろけそう！

ていうか、え？ そんな人からサイン入りの竹簡とかもらつちやつていいんですか!? マジで!?

ひやつほおう!! 太公望からもらつた竹簡とか、世界遺産級ですよ!!

もうこれは使わない！ 絶対使わない！ ずっと保管して、お守りにしよう!!

えへへ、早速「スターシップ」で収納だー！

……でも喜んでばかりはいられないのも事実だ。まさか周の軍師が波紋使いだつたなんて、歴史とはまた面白いことをしてくれる。

でもよくよく思い返してみればジョジョのごく初期のころ、波紋という概念が初めて登場したそのときに、ツエペリさんは波紋のことを

「東洋人は仙道と呼ぶ」って言っていた。

そして太公望という人物は、後世（それでもジョジョ一部の舞台である十九世紀よりはかなり前の時代）に書かれた物語において、人間から長じて仙道に精通し周に力を貸した仙人に描かれる。これが偶然とは思えない。

だとしてももしかして、この辺りには波紋使いが結構な人数いるのかもしれない。神仙思想の元祖とも言える中国だから可能性はある。そしてそんな仙人を組織的に育む場所があるとしたら、カーズ様にとって非常に面倒なことになる。そうなるか……どうなる？

うん……たぶん、とっても血生臭いことになる可能性が……。

「……それは、嫌だなあ」

原作においては、カーズ様がこの時代どこで何をしていたかは一切明らかになっていない。だから何もしていなかった可能性もあるけど……自身に敵対する存在を許さないカーズ様だ、その手の組織は見つけ次第潰してたと考えたほうが自然だよな。実際、原作でも波紋の一族は滅ぼしたって言ってたし。

とりあえずカーズ様には太公望はともかく、波紋の修行場みたいなものがあるかもしれないという懸念は言わないでおこう。これは確定。それでももし別のところからそういう話が挙がったら……どうしよう？ わたしはそのとき、どうするんだろう。

わからない。自分がどうするのか、わからない。いつもならどんなに嫌なことでもカーズ様にやれって言われれば従うのに。今回ばかりはやれる気がしない。

憧れの人と明確に敵対するようなことなんて、できるわけがないじゃないか。ましてや憧れの人を殺すことになったとしたら？ 無理無理無理、そんなのできるわけない。

どうかそんなことにはなりませんように。そう思いながらも、街を歩く足は止まらない。我ながらこんな自分が嫌になる。

それでも、ここにずっといるわけにもいかない。気は重いけど、報告のために戻らないと。

そう思ってたんだけど。

「やれやれ……どうしてこう嫌な予感は当たるかのう」

彼は気だるそうな態度を隠すこともなく、けれど残念そうに肩をすくめて正面からわたしに向き合った。

そう、街を出たわたしを待っていたのはきつき顔を合わせた太公望その人だった。

いやいや、なんで国の要人がこんなところに一人でいるんですか先生!?

「あまり手荒な真似はしたくない。素直に捕まってはくれんかのう、お嬢さん?」

ところが色んな疑問が頭の中で飛び交うわたしをよそに、太公望は確信に満ちた声でそう言った。

ますます思考が真っ白になりそうになるのをこらえて、なんとか意識を集中させる。

くっ、どういう方法かはわからないけど、どうやら彼にはバレてるらしい。さすがは歴史に名を残す名軍師か……。

「……わたしもできるならそうしたいんですけどね。そうもいかない事情があるんですよ」

「ふむ……人のお前さんが妖怪に関わっているところを見るに、何やら脅されて、とかかのう? であれば、わしの下におればその危険はなくなるが」

あ、さすがにわたしが人外ってことは彼でもわかんないか。まあそうか、今の見た目はどこから見ても人と変わらないもんね。

「いえその、そうじゃないとは言わないですけど……普通の人がどうにかできるものでもないの……」

「妖怪を恐れる気持ちはわかるがのう。あれは決してどうにもできぬものでもないぞ? 事実、わしは退治できる」

「いや、あの人たちは吸血鬼とか目じゃないくらいヤバいんで……」

「ほう吸血鬼。あれはそう呼ぶのか。そしてその口ぶり、どうやらまだ裏に潜むものがありそうだのう。そしてお前さんは、思った通りわしの知らんことをたーくさん知ってそうだな?」

「……アツ!? カマかけてたんですか!?!」

しまったあ!! 完全に引つかかった!!

え、じゃあさっきのあの自信満々な態度はなんだったの!? さも全部お見通しみたいな感じだったじゃん! おかげですっかり騙された!

軍師って怖い!!

「それでもあるが、根拠がなかったわけではないぞ? 宿を探すと言うておったのに、その手の施設があるところをまるで無視してふらふらした挙句、外に出ようとする輩などまっとうな手合いではなからう
ダアホめ」

「ウツ!？」

確かに!!

まったくもってその通りですネ!!

「く……っ、さすが天下の太公望と言ったところですか……!」

「いや、わしでなくとも気にかかると思うが……まあよいか」

「ていうか、あれだけ好々爺みたく振舞っておきながら尾行つけてたんですか!? だましてたんですか! ずるい!」

「ケケケ、褒め言葉だのう。詐欺に恫喝、誘導ハツタリ……
エトセトラ他エトセトラ他。いずれも策を練る際には必要になるものだぞ?」

「ですよネ!! くそう、これだから軍師ってやつは! でも悔しい、そんなあなたが嫌いじゃない!!」

あのニヨホホと笑う主人公とわりと被って見えちゃう! 自分が憎い!!

「ふむ、お嬢さんのような美人さんにそう言われるのは悪い気はせん
のう。どうであろう、ここは大人しく捕まってはくれんかのう。先の言葉は本音なのだ、手荒な真似はしたくない」

「……残念ですけど、それとこれとはまた別の問題です。正直わたしもあなたとはもっとお話ししたいんですけど、色々あってそうもいきません。なので……押し通ります!」

「そうか……残念だ。ならば、少々痛い目を見てもらわねばならんが……あんまり泣いてくれるでないぞ、お嬢さん?」

どうやら問答はここらで打ち切りらしい。太公望がゆるりと構えを取った。その両拳で、黄金の輝きがスパークする。やる気だ。

いやー……。

いつたい！ どこの誰が！

転生した拳句憧れの人と戦う羽目になるなんて想像できますか！！

なんとか逃げるだけで手打ちにしたい！！

ああもう、今こそ切実に「バイツァ・ダスト」がほしいよ！！

11. 波紋戦士・太公望

太公望の構えに応じる形で、我流だけどわたしも構える。逃げる気満々なので、初手は譲る。

色んな効果がある波紋だけど、遠距離攻撃手段に乏しいことは欠点の一つだ。接触しないと相手に流せないからね。

波紋で遠距離攻撃をしようと思ったら、何かしらの工夫が絶対に必要になる。少なくとも、スタンドみたいにノーモーションで弾丸が飛んできたりとかはないはずだから、ここは様子見だ。そして動いたのを見計らって逃げよう。

そこに、太公望がゆらりゆらりと近づいてきた。ぱつと見はものすごく遅くて、全然近寄ってきてない気もするけどこれは違うと思う。仮にそうだとしても、迂闊に波紋使いには近づけないからまだまだ様子見。

するとある程度近づいたところで、太公望の姿が急にブレて増えた。もちろんそんなことは現実には起きてなくて、特殊な歩法か何かかな。思考の間を縫う位置を常に取ることで錯覚を呼び起こしてるとか、そんな感じ？

そしてさらに近づいたところで、彼はふわりとジャンプ。そのまま近寄って来たときと同じような緩やかな動きで、両足の蹴りを向けてくる。

こっ、これは……ッ！

「ゼミでやった問題だ！

じゃない！」

間違いない、これはダイアーさんのサンダースパリットアタック稲妻空烈刃、その布石ツ！この時代既にあつたのかッ！

ダイアーさんも放つこの攻撃、原作一部を知ってる人ならここからどう来るかわからないはずがない。この攻撃を、手で受けてはいけない！

……受けたくなっちゃうのはジョジョラーの悲しいサガかなあ。でもだからって命に関わるところで試してみるほどわたしの神経は

ずぶとくないので、素直に回避させてもらおう。

ついでに言うなら、相手が空中にいるのはチャンスだ。空中では自由に動けない。

よし。ぐつと下半身に力を入れて、ほとんど四つん這いになるくらいの勢いで今空中にいる太公望……の、真下をくぐり抜ける形でダーツシュ！

そしてそのまま逃走だあーツ！

「むう、ある意味潔い！」

残念だけどわたしあなたと戦う気ゼロですから！ この戦いのわたしの勝利条件は、倒すことじゃなくて逃げ切ることだもんね！ そう決めたから！

よってこれは戦いから逃げてるわけじゃあない！ 勝利への転進なのだ！

そして一度走り始めれば、人外のわたしはかなりの速度で走れる。しかも長時間だ。百メートル走の速度でフルマラソンくらいよーよゆー。逃げ切ってみせるツ！

「うーん、年寄りに走るのはつらいんだが……のう！」

「……そんな気はしてた！ してましたとも！」

なんで同じ速度で走れるのかとか、そういうことは聞かない。波紋は色々な面のある技術だけど、特に肉体操作や治療などに顕著な効果のあるもの。折れた腕が治るくらいの効果があるんだから、走る疲労を極限まで軽減してもわたしは驚かないね！

さすがにフルマラソンしたら多少は響いてくると思うけど、数キロくらいならそんなに影響は出ないだろう。そもそも普通のマラソンなら何十キロ走っても呼吸が乱れないのが波紋使いだしね！

そのまま並走する形になるけど……さすがにここから攻撃する余裕はあまりないみたいで、しばらくは追いかけて……。

「そいやー！」

「やだこの人、なんの躊躇いもなく目潰しを!?!」

いつの間に手に砂を！ しかも結構な量だぞこれ！

おまけになんかい具合に風が吹いて的確に目に飛んでくるんで

すけど!? 幸い生物じゃないから波紋は流れてないけど……いや流れてるな、ちよつぴりだけど流れてるな。

一族最高の日光耐性があるわたしにはこの程度の波紋は効かないみたいだけど、向こうもこれで倒そうとは考えてないだろう。

となるとこれは単純に目潰し。その手には乗らないぞ!

片腕で砂を振り払い、目に入るのを防ぐ!

「うむ、これくらいは対処できて当然と言った様子だのう。ならばこれはどうかのう?」

「ゲエーッ!? そつ、それはまさか!」

走りながら太公望が懐から取り出したのは、鞭だった。もしかしてあるかもとは思ってたけど、本当に出てくるとは思わなかったよ!

ヤバい、あれはヤバいぞ。そんなに長い鞭ではないけど、それでも離れたところに攻撃ができることには変わりない。

そして波紋使いが武器を使うとき、それに波紋が乗っていないなんてことはないと見るべきで。

「疾ーっ!」

「うひゃあつ!」

慌てて横に飛びのけば、直後にその場を鞭が打ち据える。

同時に、鞭の胴体全体を覆う黄金の輝きが見えた。間違いない、波紋たつぷりの劇物ですよあれは!

波紋の性質から考えれば、電撃鞭みたいなものじゃあないか! タチ悪いぞ!?

もしも打神鞭だしんべんって名前だったらぜひ触ってみたいところではあるけど!

「疾! ちつちつ、ちーッ!」

「だっ、もう、やめてやめて! わたしあなたとだけは戦いたくないんです!」

「ほっほっほ、残念ながらそれはできんのう!」

振るわれる鞭を、なんとか紙一重のところまで避けていく。聞こえる音が、鞭の風切り音じゃなくて波紋の音つてのが何より恐ろしいわ!

一応全身厚着してるけど、天然素材しかないこの時代、服は当然の

ように波紋をよく流すものしかない。一発足りとも食らうわけには
いかない！

「げっ……！ やばい、河だ……！」

視線の先に現れた河を見て、思わず舌打ちしてしまう。

跳んで渡ればいいかもだけど、どう見ても川じゃあなくて河なんだ
よあ！ さすが大陸、河幅が広い！ さすがにこれは飛ばないと無理
！

かといって何も考えず跳び込んだら即死しかねない。いや、泳げな
いわけじゃあないよ。

じゃあなんでもって、波紋は水によく通る。太公望はどう見てもかな
りの使い手なんだから、河岸から波紋を流すくらいいけないだろう。
普通に泳ぐくらいの速度だと、それで追いつかれる可能性が高い。

となると、普通じゃない手段しかないか……！

「おっと、手癖の悪いお嬢さんのう」

「あなたには言われたくないですねえ！」

そこらに転がっていた岩にすれ違いざま手を突っ込んで砕き、掴ん
だ石をさらに手の中で砕いて小石の山にする。

それらを散弾みたいにぶん投げて牽制したけど、なんで鞭で全部は
たき落せるんですかね？ わけがわからないよッ！

そうこうしているうちに河にたどり着いてしまった。

くそう、仕方ない。できればこの前に対処したかったけど、もう四
の五は言ってられないな！

「むうっ！」

太公望がやつと驚いた声を出した。

これはさすがに無理もないだろう。なにせ、河に飛び込むべく地面
を蹴ったわたしの身体が、見る見るうちにイルカへと変わっていった
のだから。

着水は、河の中ほど。そしてそのとき既に、わたしの身体は完全に
イルカに変じていた。

ふっふっふ、これこそわたしの流法^{モード}！ 「如意転変^{にょいてんぺん}」の流法^{モード}ツ！ わ
たしの身体を自由自在に変えて、ありとあらゆるものへの変身を可能

にする技なのだ！

そう、我が流法は「^{モールド}転」！

水の中を高速で泳ぎながら、そうドヤ顔を試してみる。もちろん見る人は誰もいないけど。

まあ実際にはありとあらゆるものだなんて不可能で、制約は色々ある。一定以上のサイズ変更はできないとか、相当量の知識が必要とか、色々ね。

それでもやれることは大幅に増える。部分的な変身もできる。それはカーズ様の指示に従って人間社会に入り込むためには必要なことだった。

なにより、それとは別にわたしはきつと、人間社会に本当の意味で溶け込みたいんだろう。だからこそ、たどり着いたのがこの境地なんだと思う。

ちなみに服はわたしの身体じゃないから、今回みたいに劇的に身体を変えると普通に脱げる。場合によっては膨張に耐え切れなくて破れる。それはスムーズじゃないので、変身時はそのまま身体の中に取り込んで収納してる。

つまり元の姿に戻ったとき、わたしは全裸になるんだけど今はそんなこと言ってる場合じゃあない。

わたしの後ろから、波紋が伝わる音が聞こえてきた。やっぱり撃ってくるか。そりやそうだよね。

でも、だからこそイルカに変身したのだよ！

とーう！ イルカジャンプ！

「波紋は電気みたいに跳躍したりはしない！ それなら媒体から離れればいいってことだよね！」

さらにさらに、ジャンプと同時にわたしは身体を変化させる。今度は鳥だ。それも、速度の出せるツバメ！

まあ技の制約上、ツバメとは到底かけ離れたサイズになっちゃうんだけど。それでもかなりの速度が出るのには変わりない。高さも稼げる。いいことづくめだ。このまま一気に突き放させてもらおうッ！

ちらりと鳥の視界で見れば、さすがの太公望もこれには手が出

せないらしい。

ふっふっふ、どうやらこの勝負、わたしの勝ち……。

「ぴゃあ!」

慌てて軌道を変えて、飛んできたそれを回避する。

目標を見失って飛び去っていくそれは……風の刃だった。

「……ええ……う？　嘘でしょう……う？」

恐る恐る下を見てみれば。

なんと太公望の背後に、龍の姿が浮かんでいた。

えっと。

まさかとは思いますが。

太公望さんあなた、波紋使いでありながらスタンド使いでもあらせられる？

12. 幽波紋戦士・太公望

あかんやつ。これ絶対あかんやつ！

波紋使いでスタンド使いとかが、そんなのわたしたちの天敵じゃあないか！　なんかわたしが、運悪くない!?

原作じゃあジョセフしか出てこないのに！　ここぞつてところで引き当てるなんて全然嬉しくない！

いやあの漫画も好きな身としては、太公望が風を操ってるの見るのはライブで推しのアイドルと目が合ったくらい嬉しいけど！

えへへ、風を操るスタンドとか、太公望の能力としてはピッタリだよね！　これまた不思議な一致もあつたもんだ！

「ぴいーっ!？」

なんてこと言ってる場合じゃないや！　そうこうしてるうちにも、どンドン風の刃が飛んでくる！

なんとか全部かわしてるけど、おかげでなかなか距離を稼げない。こちらら板野サーカスじゃあないんだぞ！

というか、わたしは距離を取るべく飛び続けているのに飛んでくるとかどういふ見だ！　スタンドの射程距離の概念はどこに行った！

あの龍の姿をしたスタンドの射程距離が長いのか、単に能力によって生じたものからさらに生じた自然現象にその範囲は適用されないからなのか……。

いやそんなことより、なんとかしないと撃墜される！

ええと、風……風というと、空気の流れ。つてことは、たぶん空気のないところでは使えないだろうから……。

「土に……潜る……!？」

たぶん、今はこれが最適解だろう。土の中なら波紋からも風からも、あまり影響は受けないはずだ。

あとそれとは別に、そろそろ太陽の光を浴びすぎてヤバイ。このままだといい加減石化しちゃう！　我慢してたけど正直普通に全身が痛いし、もう限界です！

というわけで、一気に急降下。そしてそれに合わせてモグラに変身

する。

そのまま地面に突っ込み、血と肉の塊に……もちろんなることはなく、激しい音とともに地面が悲鳴を上げた。

同時に大急ぎで地面を掘って、地下へ避難。

「ふう……これで少しはマシなはず」

もちろんそれで安心することはなく、ひたすらこの場から離れるべく地中を掘り進めていく。

そして予想通り、地面の下までは干渉できないみたいで劇的に静かになった。入った穴から風を突っ込まれたらヤバかったけど、それは来なかった。たぶん飛んでる間に結構距離を稼げたから、そこに着いたときにはもう射程距離外だったんだろう。

はあー、なんとかなったあー。でもこのままここにるのは得策じゃないんだろうな。普通に追いかけてきてもわたしは驚かない。

というわけで、少しでも太公望から距離を取るために移動は続ける。

そのままさらに掘り進めることしばし。地上のことは音と気配でしかわからないけど、明らかに何か大きめの物体がまっすぐわたしを追いかけてきてるのがわかる。

うーん、なんかもうここまで来ると「でしようね」って感じ。たぶんだけど、あのスタンドは風を操るだけじゃなくて追跡、もしくは対象を感知する能力が備わってるんだろうな。

さてどうしようか。さすがの太公望でもここまで攻撃はできないにしても、こうもべったり張りつかれたら上がるに上がれない。出て行っただ瞬間殴られて終わりだろうし。

となると……んー。

「こうしてみるか」

とりあえず元の姿に戻って、「コンフィデンス」発動。「スターシツプ」で自分を刺して、スタンド空間に転移する。

これならどうだろう。いくらスタンドでも、この世のどこにも存在しないこの空間の中までは探知できないんじゃないだろうか。むしろ見失っちゃうのでは？

あまりにも消極的な対応かもしれないけど、そもそもわたしは太公望と戦いたくないのだ。逃げきれればそれでいいって思ってるんだから、これだって立派な戦術でしょうよ。

……まあこのスタンド空間、生物は一日経過で強制的に外に放り出されるっていう面倒な制約もあるから長居はできないんだけど。今はそれで十分でしょ。

放り出されるのはわたしも例外じゃないけど、そうなくてもわたしが最後にいた場所に出るだけだ。一日で地形が変わるなんてことはそうそう滅多にないし、どうにでもなる。

「よし、となれば適当に整理して時間を潰そう」

この空間は大体十メートル四方の立方体で、単体の部屋としてはかなり広い。だから全部埋まつてるなんてことはないんだけど、それでも気に入ったのはぽんぽん入れてるから整理が行き届いてないんだよ。

「あ、そうだこれこれ、これは額縁に入れて飾っておかなきゃ！」

まず、仮置き用の棚に置いといた竹簡を手にしてわたしは声を上げる。

せつかく太公望からもらった直筆サインの竹簡だ、これは他とは区別してちゃんと飾っておこう。永久保存だ！

あ、ちなみにこの空間、言った通り生物は一日で弾かれる。これはデメリットなんだけど、どうも微生物とかそういうのも全部弾いてるみたいで、この中にあるものは生物由来の腐敗や劣化はほぼ起きないメリットがあつたりする。何事も長所と短所は表裏一体だ。

……なんていうか、あからさまにわたしの深層心理が反映されてるんだらうねこれ。そんなに文物を保管したいかわたし。

でもまあ、実古代ギリシャとかマケドニア、あるいはローマの文物が手に入ったらしつかり陳列して眺めて悦に入りたいなと思うから、そのものズバリなんだろうけど。

惜しいのは、ローマが終わる前に休眠期に入ってそこから二千年くらい眠らなきゃいけないことだね。それがなければもつと色んな歴史に触れられるんだけど。

まあ、そこまで求めるのは欲張りが過ぎるかもしれない。人間、欲張り始めたらしきがないもんね。人間じゃないけど。ほどほどのところで満足しとくのが平和なんだろうね。

とまあ、そんな感じで整理を進めることしばらく。そろそろほとぼりも冷めたかなと思つて外に出ることにしたんだけど。

「……なんでまだいるんですかねえ!!」

普通に頭上から気配を感じる!!

ねえ待つて、おかしくない？　なんでそんな確信めいた待機ができるの？　わたしにはとてもできないよ!

もしかして、スタンド空間に入つて姿が消えても、わたしがここにいるつていう証拠が何かが残留してるとか？

となると……憧れの人と戦うのは嫌だけど、ある程度本格的に干戈を交える覚悟はしないとダメそうだ。できる限りは避ける方針は変えないけど。

とりあえず、もう一度モグラに変身して上に向けて掘り進める。ここまで来たら、地中で距離を取ろうとするのは悪手だろうから。

そして地表に近くなつたらそのタイミングで、元に戻つて（ついでに服を着てから）下から思い切り殴り抜けた。爆発音にも似た轟音とともに、「グワシヤア」つと吹き飛ぶ地面。巻き上がる大量の土砂。

それに紛れて外に出て、最低限の確認のあと大急ぎで太公望から距離を取るべく走り出す。

そこは森だった。わりと開けた感じの森で、あちこちに人の手によると思われる伐採の痕跡が見える。

「やれやれ、ようやくと出てきたのう!　……うん?　なんというかお主……縮んだのう?」

「ほつといてください!　どうせ永遠の少女ですよ!」

「ふーむ、あの変化といいやはり、そういう宝貝パオベエの使い手か。見たところ仙術の基礎もできておらんというのに。基礎を経ることなくあれに開眼できるとは、この歳にして新たな知見を得たわい」

うーん、もしかして彼は波紋の修行の果てにスタンドに目覚めたタイプなのか?　確かに、原作で波紋はスタンドという才能に至るため

の技術の一つって説明があったような気はするけど……本当にそういう人がいるとは思わなかった。原作で言及はされてても実際にそれを成し遂げたキャラが出てこなかったことを考えると、ますます感慨深いものがあるがあるなあ。

いやそれも気にはなるんだけど、寶貝って。まさかスタンドのことそう呼んでるの？ マジか……マジかあ。じゃあわたしもあの世界に行ったら仙人名乗れるのかな？ それはちよつと嬉しい。

「いやそういうこと考えてる場合じゃなくって！　なんでそんなわたしの場所がはつきりわかるんですか！　その……隠れるのには自信あったのに！　おかしいですよ！」

「うむ、実を言うとなんともちよいと驚いておる」

この間、わたし目がけて放たれた風の刃は八本。そのいずれもがわたしには当たらなかつたけど、大半が木や草を切り倒すことになってわたしの逃走経路を絞ってくる。

これ、間違いなく誘導されてるよねえ……。

「あなたが想定外とかわたし超びっくりなんですけど!?!」

「うむ、なんでかろう？　見たところお主は既に目印を持っておらんはずなのだが……」

「……目印？」

「なんだ、気づいておらんのか？　渡したではないか、しっかりと手渡しで」

「？……手渡し……、……ハッ!?　ま、まさかあの竹筒……!?!」

数秒考えて答えたわたしに、太公望がケケケと笑った。

「うむ、いかにも。つまり、お主は最初からわしの描いた絵の中におつたということだのう」

「そんなー!?!」

じゃ、じゃあわたしが彼から逃げきるためには、あの歴史的に超貴重な太公望の直筆サインを捨てるしかないってこと!?!

そ、そんな……そんなこと……、そ、それをすてるなんてとんでもない!!

「まあそういうわけでのう。逃げられるとは思わんほうがよい。それ

にこの距離ならもう……こんな、ことも、できる!」

「ぴゃあああ!」

振るわれた鞭に合わせて飛び出た風の刃が、ホーミングしてきたあー!?

「そしてもちろん、こういうこともな」

「うっひいひい!」

今度放たれた刃は、円月輪みたいな輪っか状になっていた。若干光って見えるのはもしかして波紋ですか? なんだか八つ裂き光輪って感じだけど……それらが複雑な軌道でわたしを追いかけてくる!

慌てて回避したけど、これあれだな!? 遠隔操作で軌道を操るタイプか!

ホーミングする刃だけにとどまらず、自前で好きに動かせる刃で前後左右からの確に追い詰められて、もうなんていうか完全に逃げきれず大半を食らって血が噴き出た。

これわたしの技の完全上位互換じゃあないですかやだー!!それでも致命的なところに飛んでこなかったあたり、まだ捕まえる気であるってことなんだろうけど!

「さあて、ここからどうする?」

「むきー! 逃げ切れない!」

逃げるどころか避けるのももう厳しい!

仕方がない、こうなったら迎え撃つしか! そのためには武器……何か武器はないか!

「……! これだ!」

風の刃で切られ、わたしに向かって倒れてきた大木を正面から受け止める!

そしてそのまま掴み寄せて、振り回す!

「彼岸島直伝! 丸太はどうだあーっ!」

「なんと!」

正確には切り倒されたばかりの生木だし、加工もまったくされてないけど!

でもさすがに太公望もこれは予想できてなかったのか、ここにきてようやくあちらから距離を取らせることに成功した。

けど、どうやらこれであちらを完全にその気にさせてしまったっばい。

「その身体でその怪力……薄々そんな気はしておったが、どうやらお主も人ではないようなの？」

「……まあ、そうですね。バケモノなのは認めますよ。なりたくてなったわけじゃあないですが」

「であれば、ますます逃すわけにはいかなくなつたのう……」

そう言う太公望の背後から、龍が前に這い出てきた。と同時に、太公望の周囲に風が集まり始める。

大技が来る！ そう確信したわたしは、完成する前になんとかすべくとりあえず手にしていた木を全力で振り下ろす。

直撃したら即死もやむなしだけど、なんだか彼が相手ならそうはならないだろうっていう奇妙な信頼があった。

そして実際、そうだった。巻き上がる豪風の前に振り下ろしきれず、数秒ほど拮抗したのち逆に木を持っていかれてしまった。そして目の前に現れる竜巻……。

ヘクトパスカルう！ もう災害ですよこんなの！

「……う、うーん、これは。どうしよう、ちよつと勝てない……」

「いかに強力な存在であろうと、所詮はこの大地に生きとし生けるもの。であれば、大地からほとばしるその息吹に打ち勝てる道理などないというわけだ」

「そうですね！」

ヤケクソ気味に答えるわたしだけど、確かにこれはどうにもならないだろう。

というかこれ、下手したら究極カーズ様すら手が出せないのでは？
だって竜巻を越えて行動できる地球上の生物なんてそうそういないでしょ？

いや、太公望のほうも致命打は放てないとは思っけどさ。

「さて。見ての通り次は殺す気で撃つが、気は変わつたらんかのう？」

「ごんなの見せられてはいそうですかかって言えるわけないじゃあないですか！」

「ほっほっほ、確かにそうかもしれないが。一応言っておくのが礼儀というものであろうか？」

「ううう、もういいですから！　いつそ一思いにやっちゃってくださいよお！」

「そうかのう？　では遠慮なく……疾！」

太公望の掛け声とともに、竜巻が襲いかかってきた。

もちろんそこら辺の木や石、あるいは土なんかも含んだ破壊力抜群の竜巻だ。はつきり言って、これに対抗するのは並みのスタンドには不可能だろう。

しかもただまっすぐ向かってくるだけじゃなくって、その頂点があぎとのようにしてわたしを飲み込まんぞ放たれたんだからたまらな
い！

まさに文字通り竜って感じですねハハッ！　本当に遠慮なく来たなこの人！

でも……でも！　ここで諦めてたまるもんか！

ここでわたしが捕まったら、高確率でカーズ様が出てくる！　あの人究極生命体になって戦う意義がなくなつたのにエシデイシたちのためにジョセフと戦い続けるくらいには、身内に甘いところあるんだもん！　そうなつたらきつと太公望も殺されかねない！

彼なら大丈夫のような気もするけど……それでも、もしも本当に彼が殺されるとしたら？

それは、それは嫌だ！

それだけは避けないといけない！

それだけはッ！　わたし見たくないッ！

「……ここだッ！」

だからわたしは、竜巻から逃げない！

竜巻が目前に迫つたそのタイミングで、今まで彼に当てるのが怖くてずつと使う気になれなかつた「コンフィデンス」を出した。そして今できる最高の力でもって七本の矢すべてを地面スレスレに放つ！

「なんと、まだ力を隠し持っていたか！ 基本的に宝貝は一人一つしか覚わらんはずだがのう……が、その矢で我が【四不象】^{スリーシヤン}を貫けるかのう？」

えっ、そのスタンド【四不象】^{スリーシヤン}って言うんですか!? 宝貝の名前としてはちよつとアレな気はするけど、でもそれはそれでタイムリーですな！ 龍だし！

……じゃなくて！

太公望がわたしの矢を認識したときには、既にわたしは竜巻に呑み込まれて空中でもみくちやにされていた。

一応翼を生やして対抗はしてるんだけど、ないよりはマシ程度ではない。漫画だとこういうところを泳いで乗り切るみたいなシーンがあつたりするけど、現実でそんなことできるはずもない。

で、当たり前だけど竜巻の中つてめちやくちや痛いね。全身バラバラになりそう。

ていうか一部なってる。あ、あの辺でミキサーかけられてるみたいになってるの、わたしの左手ですね？

でも瞬間的にはワムウの神砂嵐のほうが断然痛いから、なんとか我慢できる。断続的に続いているから人間ならもうこの段階で死んでるだろうし、吸血鬼もたぶんアウトだろうけど。

ただ、この竜巻の中からなら太公望とそのスタンドの位置もなんとか見えた。感じられた。

よかった。たぶん竜巻から逃げてたら、この状況にはならなかったと思う。

そして認識できるなら！ わたしの矢は追跡ができるッ！

ごめんなさい太公望！ 当てさせてもらいますッ！

竜巻の外から太公望に向けて、六本の矢が四方八方から殺到する！

「甘いー」

そしてそれは、あつさりと風の刃で蹴散らされる。わたしの身体にさらに裂傷が走り、痛みが全身を駆け巡るけど、構うもんか！ 大体、ここまできたらもうどんな傷も大差ないね！

それにその迎撃の瞬間こそわたしの狙い！ 竜巻の制御に加えて

迎撃までスタンドでこなしたことで、一瞬だけ明らかに、スタンドにスキが生じた！

「今!!」

「むっ!?」

殺到させた六本とは別行動させていた最後の一本……鏃に星の模様が刻印された「スターシップ」が、そのスキをついて【四不象】スリーフィッシュマンの右腕に突き刺さった。

それに連動して太公望の左腕にも傷が生じて血が噴き出す。

けれど彼はそれにはまったく目もくれず、いずこかへ吸い込まれていく龍を驚きの面持ちで眺めていた。

「……やった! もしかしてそうなるんじゃないかと思ってたけど、やっぱりだ!」

本体から完全に出ているスタンドに「スターシップ」を刺すと、スタンドだけが収納される!

そしてスタンドが急に消えた衝撃でよほど動揺したのか、あるいはスタンドが消えたことで制御ができなくなったのか。ともあれ一気に竜巻が崩れ始めた。

「ぬっ、待てえい!」

よしここだ! わたしはきしむ身体に鞭打ってツバメに変身すると、一気に太公望から離れる!

スタンドが使えないなら、彼はもう遠距離攻撃はできないはず。これで逃げ切るんだい!

予想通り、太公望はもう追ってくる気配がなかった。一瞬見えた彼の悔しそうな顔に、わたしは追手はないと確信してホツとする。

どうやら逃げるといふ目的はなんとか達成できそうだ。彼に大きなケガをさせることもなく済んだみたいだし。

「やれやれ、今回はわしの負けだ。だが次に会ったときはとつちめてやるゆえ、覚えておれよ!」

「忘れてください! ていうか、あなたが生きてる間は絶対ぜーったいこの辺には来ませんからねッ!」

そしてわたしはそう捨てゼリフを残して、この場を後にした。

いや危なかった。全身ズタボロの血まみれだし、骨とかいくつか足らないぞ。過去最高の大怪我だ。

なのに意識は結構しっかりしてる辺り、相変わらずフィジカルオバケだな柱の一族。でも吸血鬼になったスト様だって全身吹っ飛んでも復活してたし、わたしも時間さえあればここから普通に回復するんだろうなあ……。

それにしても、「スターシップ」でのスタンド収納は前々からできるんじゃないかとは思ってたけど、成功するとは。今まで試す機会がなかったからぶつちやけ最後の賭けだった。完全に出たとこ勝負だったけど、うまく行ってよかった。

まあ、なんでうまくいったのか正直よくわかんないんだけど、そもそも太公望が最初から殺すつもりでいたら試すまでもなくそのずっと前に死んでただろうし、そのおかげかな。人間のふりしててよかった。捕まえて情報を引き出そうって判断は、軍師としては正しいんだろうけどね。

それにしても疲れた。今日はもうまっすぐ帰るとして、差し当たったの問題は……。

「……スタンド空間に収納した【スリープシヤン四不象】、どうしよう？」
ってことである。

先述した通り、あの空間は一日経つと生き物は全部強制退去させられるんだけど……。

スタンドって……生き物……かなあ……？

かといってここで出すわけにはいかないし、今から中に入るのもなんか怖い気も……。

……うん、とりあえず一日様子を見よう！　そうしよう！

13. おしおき

どうにかこうにかみんなのところに戻ったら、ものすごく怒られた件。

なお内容は「心配させるな」ではなく「人間に苦戦しすぎ」である。解せ……解せるなあ。まったく申し開きようもない。

「どれ、俺が少し喝を入れてやろう」

「えっ」

で。平謝りし続けてやっと解放されると思ってたら、エシデイシがそう言った。

にまりと笑いながら近寄ってくる彼の手には、試験管っぽい管が。材料はガラスじゃあないみたいで、中身は見えないけど。

それを見たワムウは小さく首を傾げ、カーズ様は面白そうに笑う。

え、何？ 嫌な予感しかしないんですけど？

「今、空いた時間にカーズとちよいと工作をやってなあ。波紋使用と遊ぶためのものなんだが」

「はあ……？」

「人間の体内で一定時間が経過したら溶けだす入れ物に、こいつを入れて連中に押し込もうと思ってる。そうすりゃあ、いつ死ぬかわからない恐怖に怯えながら過ごすしかなくなるってえ寸法よ」

「え……、えげつないですね……」

ごくりと生唾を飲み込む。

うん……つまり「工作」ってのは毒薬作りで。その入れ物はまだないみたいけど、いずれ死のウエディング^結・リング^婚・リング^指になるってことですね？ 原作だとジョセフがワムウとの再戦から逃げないため打った楔扱いだっただけど、本来はそういう使い方だったと？

いや、ワムウがまっとうな方向に使っただけってことなのかな……。致死毒にまっとうも何もないとは思うけど……。

「で……あの、つまりそれをどうしよう」と

「おう、つまりだアルフィー。お前、今からこいつを飲め」

「わたしに死ねと?! 人間相手に苦戦したのってそんな重罪ですか

!？」

「安心しろ死にやあしねえーよ。ま、ちよいと苦しいかもしれんが、そんなもんだ。効果が切れるまでの間、反省すりやあいいんだよ」

「……………」

ど、どこにも安心できない！

あれでしょ、あなたたちの「死にはしない」ってのは翻訳すると、「死ぬほど苦しむ」ってことでしょ!？」

「お、そうだ。いきなり飲めって言われても納得できんだろうから、一分の間逃げきれたら飲まなくていいってことにしようか。うーん、俺ってば優しいねエ」

「い、いいんです？ わ、わたし逃げるのは得意ですよっ？」

「くつくつく、安心しろよ。それくらいハンデがないとすぐに終わっちまうからなあ〜」

「い、言いましたねっ？ 約束ですよ！ 一分！ 一分逃げきれたらわたしの勝ちー！」

「おう…………つと、例の能力で隠れるのだけはナシな。あれやられるとさすがにどうにもならねえーからな」

「…………わ、わかりました」

ちっ、開幕【スターシップ】で逃げ切ろうと思ったのに。さすがにダメだったか。

「ルールはわかったな？ それじゃあスタートだ」

エシデイシの宣言と同時に、わたしは全力で後ろに逃げた。身体を反転させる余裕なんて絶対ないだろうから、小さな跳躍に合わせて下半身をぎゅるんつと百八十度反転させて走る。上半身を合わせるのは逃げながらでいい！

と思つてたら、一歩目でいきなり地面から火が上がった。それをほとんど真正面からかぶつてしまう。

「うあつっう!？」

よく見たら、そこには血管が横たわっていた。火に見えたのは、高温の血液だったのだ。くそう、いつの間にも！

高温と言つてもエシデイシのそれは五百度くらいがマックスで、火

に比べて決して高すぎる温度ってわけでもない。わたしも普段ならそこまで反応しなかったと思う。

でも！ 今はちよつと無理だよ！ だってわたし、太公望との戦いのキズ、まだ全然癒えてないんだよ!? 左手なんて修復中でまだないままだし！ なのにここまでできるかな普通！

「さすがにこれくらいはかわすかア。だがそうでなくつちやあなあ〜！」

そうこうしているうちに、エシデイシが横に回っていた。そりやそうだ、このくらいのスキを見逃すほど生易しい性格はしてないもんね。

ぐわつと、勢いよく彼の手がわたしに向かって伸びてくる。腕力差がある上にわたしは負傷してるんだ、あれに捕まったらおしまいだ。

かといって、普通に避けたら絶対何か追撃が来るはずだ。となるとここは……！！

「【コンフィデンス】！」

「おっ?。」

その手を、【コンフィデンス】の正面部分……和弓で言うところの鳥打で殴って受け止めてやる！

使い方がおかしい？ そんなことない、前世の特撮オタクの友達が言ってたもん！ 弓は近接武器だって！

そう思っただけ。気合いを入れすぎたのか、それとも友達の語る弓のイメージが斬撃だったからか。

ザクリ、と音が響いた。

エシデイシの手のひらに【コンフィデンス】が当たり、そのまま切り裂いてしまったのだ。

あ、まずい。すぐにそう思った。

いや、普通ならいい反撃になったって思うんだろうけど。

相手は「炎」のエシデイシ！ 彼の流法モールドは熱だから！ 下手に裂傷をつけちゃうと……。

「ありがとよオ、血管を出す手間が省けたぜエエ！」

ほらなあ！

切り裂かれた傷口から、数本の血管が出てきてわたしに絡みつく。同時にそこからは血液がじわじわとにじみ出ている、景色が揺らぐほどの熱気がわたしを襲った。

「うああああつうううーい!!」

しかも傷口に熱が染みる!!

くそう、でも負けてたまるか! 絶対逃げきってやるんだい!

わたしも傷口から血管を出して、反撃だ!

流法モード行くぞ! 「如意転変」!

「おつ? へえ、お前の 流法モード、無機物にも変身できたんだなあ?」

「あくまでも『っぽい』だけですけどね! カーズ様の見よう見まねです!」

わたしが出した血管は、体外に出る過程で刃に変身していた。これでエシデイシの血管を切って、拘束から抜け出る!

と同時に、手のない左腕から血管を飛ばして近場の木の枝に引っ掛ける。どこぞの考古学者のように脱出……!

「だ?」

と思つてたら、急に身体から力が抜けてわたしはぱたりと前に倒れた。そのままろくに受け身も取れず、顔面から地面に激突する。

「な……なんで……? て、いうか……身体……しびれ……?」

「残念、惜しかったなあ」

そんなわたしの顔近くにエシデイシがしゃがんで笑う。手にはさつき見せた試験管みたいな道具。その口を、ぐるりと地面に向けた。

……んだけど、そこから毒らしいものが落ちてくる様子はなかった。

「ま、さか……」

「おう、最初っから空っぽだぜ。中身は最初浴びせた血の中に混ぜておいた。もちろん俺は解毒剤を服用済み。つまり、最初の一発で既にお前は毒を摂取してたってえわけだ」

「う、おう、う……!」

やられたー!

くそう、逃げようとするところから挑発に乗るところまで、何から何までわたしはエシデイシの手のひらの上だったってことじゃあないかー！

「さすがだな、エシデイシ」

とそこに、カーズ様が近づいてきた。

「ふん、この程度でさすがと言われてもそう嬉しくもねえなあ」

「それもそうか。……おい、どうだアルフィー。得意だと思っただ分野で負けた気分は？」

「……………」

むきー！ と普段なら言うんだろうけど。

ダメだ、もう毒が全身に回ってるんだろう。口をぱくぱくと動かすのもままならないぞ。

え、ちよつと。エシデイシ？ これ、本当に大丈夫なやつ？ 本当に死なずに済むの？ このままあの世に行ってもおかしくないくらいな気がするんですけど!?

「……ふむ、第一段階の神経毒作用は問題なさそうだな。我々でもこの即効性、実に素晴らしい。いい実験になったな」

「あとは経過観察だなあ。調合がうまくいってりやあ次は出血毒に効果が変わって、最終段階になると体内体外を問わず様々な症状を発現させて死に至るはずだがー……………」

「そうだな。ここから先がどうなるか……………さて見ものだな？」

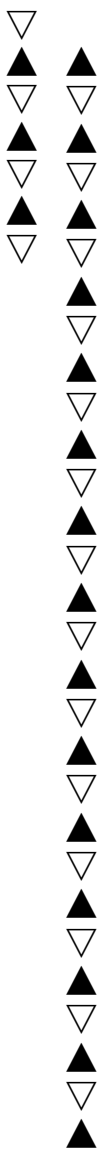
「だなあ。第一段階だと即効だが、そこからさきはじわじわと効くようにしてるからなあ！」

ちよつと……………ちよつとちよつと、ねえそこのお二人さん！

物騒な実験トークで盛り上がるのはいいですけど、わたし今まさにその症状で出血がひどくなり始めてるんですけど!?

なんだか全身の痛みも鋭くなってきたし、これ本当にヤバいんじゃない？

簡単な実験台になるのは慣れてるけど、今回は一万年以上の付き合いの中でもトップクラスにヤバい反応がもう出てるんですけど!?!
ねえちよつとお!?!



三日三晩苦しんだ。いやホント、マジで死ぬかと思った。前世で死んだときに匹敵するくらい死ぬかと思った。

結局、わたしの苦しみ方が尋常じゃあないってことで、見かねたワムウが途中で止めに入ってくれなかったらもつと長引いてたと思う。いやもう、ワムウありがとう本当ありがとう。お姉ちゃん嬉しい。

なんかエシディシの想定より効果が激しかったってあとで聞いたときは、本当お前お前お前……って感じだったけど、毒が抜けた直後の身体で抵抗なんてできるはずもなく。

それでいて、苦しみ抜いたわたしにカーズ様とエシディシは「鍛え方が足らん」「これに懲りたらもつと強くなれ」だもんなあ。鬼畜の所業だよもう。令和だったら絶対パワハラとかモラハラで訴えられますよこんなの！

とまあそんな感じで日常に戻ってきたんだけど、なんとか療養と身体が再生が終わるころには十日くらい経っていた。

うーんあの毒、苦しませるだけでなく治癒力まで奪うとは恐るべし。もう二度と飲みたくないです！

そうして落ち着いて、ようやく動けるようになったわたしはある日なんとという気なしにスタンド空間に入ったんですけどね。

「うえええ!? なんでまだいるの!?!」

わたしの目に飛び込んできたのは、柵に飾った太公望のサイン竹簡スーブリジャンに半分埋まった【四不象】の姿だった。

待って? これは緊急調査案件では!?



ってわけでもたまた五百年くらいがすつ飛んで、わたしきつと一万三千

五百歳くらい！ 紀元前六世紀を迎えましたアルフィーちゃんです。
この五百年ほどは、主にスタンド空間へのスタンドの収納について調べてた。いや、ある程度の当たりをつけるまでこれくらいかかったんだよ。そもそも人口の少ないこの時代に、スタンド使いと出会う確率もそんなに高くないからさあ。

結論から言うと、「スターシップ」によるスタンドの収納は、普通にしてたら生物と同じように一日で外に弾かれる。

じゃあなんで太公望の【四不象】^{スープレーション}が残ってたかというところ、これは恐らく太公望に所縁の深いものが空間内にあつたからだ。つまり例のサイン竹簡だね。あれがどうも、本体の代わりのような効果を発揮してるみたいなのだ。

他のスタンドでも、本体と何かしら関わりのあるものが中であつた場合は同様にそれに引つ張られたから、たぶんこれは間違いない。

それじゃあわたしの意思でスタンドを空間から出すとどうなるか。答えは本体のところに即戻る、だった。【四不象】^{スープレーション}もこれでちゃんと返りました。

ただし、それができるのは本体がまだ生きてる場合に限るらしい。本体が死亡してる場合、外に出したスタンドは完全に消滅する。

例外として、空間内で媒体になつてるものと一緒に出せば消滅は免れるんだけど……。これってつまり、媒体になるものがあれば、スタンドだけ引き剥がして本体を殺害することで半永久的に他人のスタンドを保持できることになる。

正確に言うと、「アヌビス神」のようなアイテムに宿つた本体不在型のスタンドに作り変えられる、のほうが良いかな。

唯一の救いは、単にそのアイテムを持たせただけで誰もがスタンド使いになる効果はない、ってことか。スタンド使いに持たせても能力が使えるようになるわけでもなかったから、安心は安心だけど……。

将来そうならない保証がないんだから、どつちにしてもヤバイ。そんなことあっていいのか。

これでもしも他人にスタンドの移植ができるようになったら、それ完全に【ホワイトスネイク】じゃん。ラスボスじゃん。わたしそのポ

ジションだけは本気で遠慮したいんですけど……。

まあそんな感じで検証はここらで一且終わりにしようと思うんだけど、さてどうしよう。この空間内に並んだスタンドつきのアイテムたち……。

どれも紀元前の文物だから、史料としての価値はいずれ青天井に上がり続けるだろう。かと言って、万が一のことを考えると人に譲渡するとあとのことが心配すぎる。

このままスタンド博物館みたいな感じで、空間内を維持していくしかないってことなんだろうか。それはそれでもつたないような気も……うーん。

あ、ちなみになんだけど、この五百年間で実験に巻き込むことになったスタンドは、いずれも強引に奪ったわけじゃあないことは付け加えておきたい。幼いころの花京院みたいに、他人に見えない何かを持つてることに悩んだりその力を持って余してる人から、同意を得て譲ってもらったものだ。

中には制御しきれなくて暴走してたスタンドを譲ってもらったこともあるんだけど、それはスタンド空間の中でも暴れたからもう二度としない。あのときはそこまで害のあるものじゃなかったものの、それでも貴重な史料がいくつか壊れちゃったから……。

14. 悟れ！ アルファイ

さてそんなわけで紀元前六世紀くらいなんですよけどね。

わたしのスタン্ড調査と違って、カーズ様本来の目的はあんまり進捗がない。一応小さめかつ質もよろしくないとはいえ、エイジャの赤石もいくつか入手はできたんだけどねえ。やっぱりそれじゃあダメみたい。

波紋使いとの遭遇率も上がってるせいもあってか、カーズ様の機嫌も悪いことが多い。なんなら憂さ晴らしに波紋使い狩りをしてるまであるんじゃないかってくらいだ。

あまりにも進捗がないせいか最近はその殺し方のバリエーションを増やす方向に行つてて、こないだ別行動でエジプト辺りに行つたときとか、スタン্ডの矢を持ち出して派手にやりましたね……。

まあ派手にやった結果、全部の矢を廃棄してきたって聞いたときは思わず絶叫しちゃったけどさ。せつかく原作よりスタン্ড使いの数を減らして楽ができると思つてたのに、台無し！ それともこれが歴史の修正力とでも言うのか……。

とはいえ、なくなってしまうものは仕方ない。スタン্ডについては未来のわたしに任せよう。現在、目下のところの問題はやはり赤石だ。

ただこれ、時代が下つて世界の人口が増えてるからか、赤石の情報も少しずつ増えてきてる。だからまったく進んでないってわけでもない。

それにわたしは知っている。カーズ様が探し求める品質の赤石が歴史上に登場するのも間もなくだってね。……ん？ 約四百年は間もなくとは言わないか。

というわけで今、わたしたちはインドまでやってきた。正確に言うると北東インドつてところかな。

この辺り一帯で赤石の採掘ができる、みたいな話があったんだよね。だいぶ範囲が広いから、みんなで別行動して真偽を確かめることになったんだけど。

「何を言っておられる！　せつかくの悟りがもつたいたい！　教祖に
なるべきだ！」

「いや、でも……あー、うーん、鹿スタートなら、まあ……」
なんかものすごく熱いトークで説得してる人がいる……。

されてる側の人は、一見パンチパーマみたいな髪……型？　で、耳
たぶがものすごくおつきい。おまけに眉間の辺りにボタンみたいな
……って。

いやいや。いやいやいや！

あれどう見てもお釈迦様じゃん!?　もう一人はもしかして梵天さ
んかな!?　状況があまりにも聖求教しょうきゅうの梵天勸請ぼんてんかんじょうに一致しすぎてるよ
!!

というか、あれがそうだとしたら、お釈迦様って悟りを開いた頃か
らもうあのいわゆる仏像スタイルなのか……!?　なんだか妙な歴史
的事実を知ってしまったような気がする……!

……あ、でもスケッチはしたいな……歴史的瞬間だよねこのシーン
……!

「……そうだそこの方！」

「……へ？　え、わたしですか？」

どうしようかなと思いつながら遠巻きに二人を眺めてたら、梵天さん
(推定)に声をかけられた。思わず反応してしまったけど、よかったん
だろうかこれ。

ちなみに現在、いつものように目的地周辺に潜伏している吸血鬼と
合流するため大人バージョンの姿に擬態してるんですけども。

なんかわたしてって、こう妙に歴史上の人物と会う機会が多くないで
す?　いや、それ自体はむしろありがたいんですけど、本当にいいの
かとも思うわけで。

「そうです！　あなたも真理に達した目覚めし者の教えを知りたいと
思うでしょう!？」

「わーっ、ちよ、初対面の方に何を……!」

でももうこの流れは変えられそうにないなあ。梵天さん(推定)が
ものすごくぐいぐい来る……ちよっと、ものすごく近いんですけど

……って、眉毛すんごい太いなこの人……。

た、ただまあ、なんていうか。歴史学を志したものとしては、この質問の答えは一つしかないんだよねあ！

「ええ、まあ。その、興味が無いと言ったら嘘になりますね……」

「えっ、ほ、本当ですか!? わ、わかりにくいですよたぶん！」

「ほらごらんなさい！ 心あるものはいるのです！ 智慧持つものはいるのです！ そういうものにこそ、あなたの法ダラムは必要なのです！」

「わ、わかりました……その、できるかどうかわかりませんが、私は甘露の門を開きましょう」

名ゼリフきたあああ！ そのゼリフ実際に言ったんですね!? 感動だ！

そんなわたしの心境をどう思ったか、お釈迦様は少し照れたように前に出た。

後ろに下がった梵天さん（推定）は、うんうんと頷くながらも言葉は発さない。成り行きを見守ることにしてみたんだ。

「ええと、ではまず……そうですね……あなたは、なぜ人は苦しむのだと思いますか？」

初手から質問が重い!!

……人はなぜ苦しむのか。重い上に難しい問いだ。これをまじめに考えたことのある人間が、宗教者以外で果たしてどれくらいいるだろう。

ただ、一応わたしは歴史を学んだ身。仏教も当然その範疇で、一部だし大雑把ではあるけどその教えは多少知っている。

キリスト教なら原罪から逃れられない的などところから切り込むんだらうけど、仏教の場合は――。

「えーっと、何かにあまりにも入れ込みすぎるから、ですかねえ……」
「……！ そ、その心は？」

「なんていうんですかね、こう、ものでも人でも、一つのことにごだわりすぎると大体ろくなことにならないっていうか。苦ってそもそも思う通りにならないからこそ感じるものだと思うんですけど、いいことも悪いことも、行き過ぎると人の思う範囲を超えて害になっちゃう

んだと思ってます、かね」

「そ……そう！　そうなんですよ！」

「ひゃっ!？」

いきなりお釈迦様に手を握られてしまった!?

どうしようこの手もう洗わないほうがいいかな!?

「そうなんですよ……!　人間はどんなことにもこだわりすぎる……

!　固執して、とらわれることで心を乱されるんです……!」

「え、は、はあ……」

なんだかよつぽど感極まったのか、泣いちやつてる。

ええ……そんなに……?　いやそんなにか……だつてまだ仏教成

立してないんだもんね……。

「すべての苦には必ず原因があり、それを冷静に見つめ、因果を読み解いて明らかにすることでその本質がわかる……苦を和らげるには、解くには、その理解こそが肝要なのです!　そして理解を得たうえで、努力を重ねるべきなのです!　多くの人がそれに気づかず、間違った努力を重ねている……私はそれが悲しい……!」

「ええと、四諦しだいでしたっけ。確か苦集滅道くじゅうめつどう……だつたかな？」

「おお……!　そう、まさにその通りです!　まさか、あなたも悟りを……!？」

「い、いえそんな。わたしはただ……なんていうか、ズルをしているだけなんです。前世の記憶があるだけで……」

転生なんて普通なら頭を疑われるだろうけど、この時代のこの地域なら別に気にされることはないだろう。

そう思つて前世のことに触れたら、案の定なるほどと納得された。ネパール近隣の死生観は転生(この世界観の輪廻転生において時系列は関係ない)が基礎にあるからね……。

「そういうわけなので、理論はなんとなく知つても実践できてるわけでもなくてですね。今もどうにかこうにか生きあがいてる感じがす……」

そう締めくくつて、わたしはため息をついた。

そう、知ってるのとできるのとは別だ。一応浅くとも仏教を知つて

たつて、わたしはろくに実践できてない。一万年以上、同じ場所で足踏みしてばかりで……。

「どうですシツダールタ！ 私の言った通りでしょう!？」

「はい！ 私の目が曇っていたようです！ わかってくれる方は必ずいるのですね！」

一方、わたしをよそに盛り上がるお釈迦様と梵天さん（推定）。

まあ、わたしのことはさておきお釈迦様が喜んでくれるなら、別にいつか。理解してくれる人はいないだろうって思ってたところに、それらしい人が現れたら誰だつてそうなるだろうし。

「あなたにも、お礼を言わせてください。ありがとうございます、あなたのおかげで私は一つの決心ができました」

「……お役に立てたなら何よりです」

にこりと微笑むお釈迦様の顔は、晴れ晴れとしていた。元がいいんだろうなあ、とつてもイケメンに見える。

だけど気さくな雰囲気もあって、東京の下町でバカンスしてるお兄さんみたいだ。フェイスラインは手塚版っぽいけど。

……それにしても、ここから仏教が始まるんだとしたら、感慨深いものがあるなあ。まあ、彼はわたしが関わっていなくたって悟りを開いて、教えを広げるんだけどさ。

だとしても、その伝説の一助になれたんだとしたら、こんなに嬉しいことはないよね。

「……それで、お礼というものはばかられるのですが。もしよろしかったら……」

「あ、はい？ なんででしょう？」

「私の初仕事に。あなたの重荷を少し、分けていただけませんか？」
「……………」

重ねて微笑む彼に、わたしは思わず息を呑んだ。彼の表情が、近所のお兄さんから目覚めた人のものに変わっていたから。

そう思うと同時に、彼の背後に彼とよく似た仏像が出現した。ただ彼と違うのは、その仏像の手が大量にあることか。わたし仏像の分類はわからないけど、顔の造形は如来っぽい気がする。それを抜きにす

れば、全体像はどこぞの会長の百式観音に似てるかな？

「……あの、それ」

「えっ、これが見えるんですか？　そうですか、あなたもかなりの苦行を重ねたのですね……」

思わず指摘してしまっただけど、お釈迦様はなぜか納得顔で頷いた。うん、どうやらスタンドらしい。またか。もしかして歴史上の偉人はみんなスタンド使いだったりしない？

まあでも、二回目ともなれば驚くほどでもない。むしろお釈迦様と見比べて、違いを観察する余裕すらあるくらいだ。

「ご安心を、本物ではありませんよ。もし本物なら、限られた人にしか見えずその恩恵に浴せないはずがありませんからね。これはあくまでわたしの願いが形作る力の像でしかありません」

いや、そういうことを気にしてるわけじゃあないんですが。

なんて思いつつも回答に迷っていると、お釈迦様の後ろから後光が差してきた。スタンドが光ってるんだ。

とはいえ、お釈迦様のスタンドがいきなり攻撃してくるとは思えない。わたしはそのまま、特にスタンドに対処することなく彼の言葉を聞いていた。

「修行の果てに目覚めたこの力はなかなか不便なものでして。人が抱えている心の苦しみを目で見える形で認識することができるのですが、手で触れるだけで勝手に見えてしまう欠点があるんです」

「あー……ってことは」

「ええ……申し訳ない、先ほど嬉しくてついあなたの手を握ってしまいました。そのせいで見えてしまっているんです。そしてあなたの苦しみは、今まで私が見た中でも特に大きく深いように見えまして……」

「……わかりました、そこまで見えているなら」

原作なら、スタンド使いに心の内を話そうものならとんでもない目に遭いそう。でもさっきも言ったけど、お釈迦様がそういうことをするはずないだろうし。

それに何より、仏教の開祖にカウンセリングしてもらえる機会なん

て、ここで逃したら二度とないだろうから素直に話そうと思う。いい加減、人に相談したかったってのもある。

「……昔、仲間をたくさん殺してしまったんです」

初っ端に出てくるのはこれだから、確かに深いと思われたのも仕方ないなと思う。

「そうしないと、わたしが殺されてしまうから。わたしは、自分一人だけが助かるために、親も含めた仲間をこの手にかけてしまったんです……」

それは一万年以上もの間、ずっと抱えていたわたしの罪だ。そこから続く大量殺戮と併せて、わたしが天国に行くことは絶対ないと断言できる。

根が一般人のわたしは、そこからずっと目を背けていた。やれと言われたから、そうするしかなかったから……そんな風に、自分がさも被害者の一人みたいな顔で。

おまけにわたしは未来を知っていた。なのに何もすることなく最初から全力で保身に走ったんだから、まったく救いようがない。ただ一人自分が生き残るためだけにカーズ様の身内になったわたしの罪は、未来永劫許されることはないだろう。

「それにそのあとも。たくさん、たくさんの人を殺しました。きつとこれからも。命令されて仕方なく、なんて言えません。わたしは、自分の意思でたくさんの人を……」

「……辛い想いをたくさんしたのでですね。あなたのこれまでのことは、私が心に刻みましよう」

ところがお釈迦様は、そんな極悪人のわたしを断ずることなく優しく答えた。

思わず顔を上げてみれば、そこには変わらず笑顔を浮かべた彼がいる。

「そもそもこの世に救われてはいけない衆生など存在しません。たとえあなたが闇より出ずるものであろうとも、この世に生まれたからにはあなたも救われるべき衆生の一人です」

本当に？

本当に、わたしは救われていいのだろうか。そんな価値がわたしにあるのだろうか。

仮にあったとして、わたしは。

「……わたしは、どうすれば」

「あなたの苦しみは、身体と心が相反する生き方を求めていることから生じていると私の目には映りました。あなたは、修羅の身でありながら人の心を持っている。あなたの苦しみの因果はそこにある」

「修羅と、人……」

言わんとしていることは理解できた。

確かに、わたしはいびつな存在なんだろう。人間よりもはるかに強靱な生命体である柱の一族の身体に、どこにでもいるような一般人の魂がインストールされてるんだから。

「なので、修羅の身に心が染まることができれば、あなたは救われるでしょう。ですがあなたは、そうしたいとは思っていない。そうですね？」

その問いには、ほとんど反射的にこくりと頷いていた。

確かに、心からカーズ様に心服できればこんなに悩まないだろう。彼と同じように、ときに楽しんで殺戮ができればこんなに悩まないだろう。そういう生き方に素直になれるなら、どれだけよかつたことか。

でも、そうだ。わたしはそれを受け入れられない。前世から持ち越した人間の心が、どうしてもそれを拒む……。

「やはり、あなたは意志の強い方ですね。そして優しい人だ。人を傷つけることをことさら厭う。追い詰められたときでさえ、目の前の敵がそのあとどうなるかを考えてしまう」

そう思っていたら、まったく想定外の言葉が投げかけられた。

お釈迦様の意図がわからず、思わず彼の顔を直視したけれど……彼は確信をしているような穏やかな、けれど揺るぎない顔をしていた。

「……そう、ですか？ 自分で言うのもなんですけど、そんなことないと思いますけど。わたしなんて、いつも流されてばかりで……」

「本当に意志の弱い方なら、優しさを持たぬ方なら、何年も悩まずとっ

くに修羅に染まっているでしょう。生きている限り、どんなものであろうと良しにつけ悪しにつけ、身を置く環境に影響を受けるものなのですから。

しかしあなたはその環境にあつて、人の記憶を失っていない。人としての価値観、倫理観を維持して今もなお悩んでいる。これを意志が強く、優しいと言わずしてなんと言いましょう?」

「……!?!」

そ……その、発想はなかった。

言われてみれば、確かに。一万年以上も一緒にいるんだ、普通ならもっとカーズ様側に寄つてもおかしくない……の、か……?」

「つまりあなたは、既に歩き出しているのです。人であろうという生き方を、貫こうとしているのです。自覚はないかもしれませんが、あなたは確かに前に進もうという意志を持っているのですよ」

「……本当に、そうなんでしょうか。わたしは、本当に、前に進めてるんでしょうか。というより……進んで、いいんでしょうか? わたしのせいで進みたくても進めなかった人が、たくさんいるのに……!」

「そうですね、一度起きたことは変えることはできません。あなたが行ったことをなかったことにはできません」

感情が高ぶってきたことがなんとなく自分でもわかる。

そんな、感情の乗った言葉を遮ることなく受け止めたお釈迦様の言葉は、ある意味で正面から切り捨てるようなものだった。

「……ただ……ああ、そうだ。だけど、それはまたある意味で、わたしが望んでいた言葉でもある。」

そう、そうなんだよ。わたしは、わたしはそういうことをしたんだ。怒られるのが、恨まれるのが、裁かれるのが、当たり前なんだ!

ところが、お釈迦様はですが、と言葉を続ける。

「これから起こることを止めることは、できるはずですよ」

「……わたしは! これからも人を殺すのに!? わたしの意味とは関係なく、たくさん! それを止めるのは、すぐには……!」

今のわたしに、カーズ様の命令を跳ね除ける力なんてない。やれと

言われればやるしかない。止めるなんて、そんなの不可能だ。そんなやるせなさ、無力感で視界がにじむ。

だけどその視界の中で、お釈迦様の表情が変わった。やや怒りを含んだ色。背後のスタンドもまた、同様のものへと切り替わる。

「あなたが死ねば、すべての命が救われるとでも？ あなたがいなければ、死なずに済んだ命ばかりだとでも？ そう思っているのだとしたら、それは思い上がりというもの。

あなたがいなくとも人々は死んだでしょう。これからも死ぬでしょう。なぜなら、あなたへ指示を出している存在はあなたがいなくとも健在だからだ！」

「……ッ！」

気迫の乗った言葉は、まるで質量を宿した風のように正面からわたしの顔を打ち据えた。

でもおかげで、その意図はバカなわたしでもはっきりとわかった。

そうだ。カーズ様たちは息をするように人を殺す。それは、原作を見ていると確かなことだ。

その生き方が変わらない以上、いつの時代であろうと意味はなく、死体の山は延々と積み重なっていく。

わたしがいなくなっても、殺戮を直接行うのがわたしじゃなくてカーズ様になるだけ……。

「だからこそ、あなたは生きなければなりません。もしもあなたが本当に心のまま人であろうとするなら、そうであるからこそあなたは生きなければなりません」

わたしの理解を察したからか、お釈迦様の表情がまた戻る。スタンドも。

穏やかで、けれどすべてを見通すような超然とした微笑みが、改めてわたしを射竦める。

「あなたがいてもいなくても、失われる命がある。であるならば。

あなたはそれ以上の命を救いなさい。あなたがいなくても失われる命の中にある、あなたがいれば救える命を」

「……！」

わたしがいなくなったら死ぬ人たち。

それは。それは、原作で柱の男たちに。あるいはその関わりの中で死ぬことになる人たち？

その中に、わたしがいれば救われる命が、ある……？

それは、それって、つまり。

原作を。

変える。

そういう、こと？

「何か、思うところがあつたようですね。恐らく、それがあなたが進む道における一つの答えです。」

そうやって未来に善を残しなさい。起こり得る不善を起らぬよう、過去、現在、未来の善をよりよいものへ拡げ、縁起を繋ぎなさい。そのために心身を鍛えるべく努め、精進なさい。

それこそが、あなたが手にかけてきたものたち、これからかけることになるものたちへの償いとなるでしょう」

ああ。

やっぱり。この人はお釈迦様だ。

これが目覚めた人。これがこの世で最初の仏。

見透かされてる。その上で、導かれている！

「あなたはまだ、力の出し方を覚えていません。まずは力の限界を知りなさい。」

そして、少しくらい力をつけたとて思い上がってはいけませんよ。どれほど力をつけたとて、一人でできることには限りがあるのですから。

元よりあなたは、自分より誰かのためにこそ力を発揮する人のようです。なれば喜びも悲しみも分かち合う友と出会えたとき、あなたの本当の冒険が始まるのだと心得なさい」

「……はい！　ありがとうございます、……ありがとうございます、……ありがとうございます……！」

ああ、どうしような。涙が止まらない――。

15. 第三の矢

この身に宿った魂の声に従おう。人として生きて、物語を変えよう。お釈迦様のお言葉で、わたしはそう決めた。

決めたけど……だからと言ってそう簡単にどうにかできるはずもない。

まず、現状でカーズ様をどうこうするのは不可能だ。これは単純にわたしが力不足な上に、ドジこくとカーズ様以外とも同時に戦う羽目になるからだね。

何より、一度でも失敗するともう取り返しがつかない。これは本当に最後の最後の手段だ。時代がジョジョ原作に追いつくまでは、極力避けるべきだと思う。

じゃあ他に何ができるかって言えば、強くなるための訓練以外は世界の歴史そのものを変えることだろうけど……一個人がどうこうできるほど歴史はヤワじゃあない。

確かに歴史を変える系の逆行転生モノはジャンルとして存在するけど、あれは腰を据えて何かしらの組織を構築するなり乗っ取るなり、しっかりとした基盤を作って初めてできることだ。

根無し草の一個人であるわたしには手が出せない。カーズ様からの命令であちこち動かなきゃいけない以上、この選択肢も選べない。ならどうすればいいのか。しばらく考えたんだけど、ひとまずわたしは死にそうな人たちをできる限り助けようという結論を出した。

紀元前のこの時代、人の命は驚くほど安くて軽い。社会制度は未発達だし、科学や医療も同様だ。倫理観なんてあまりにも薄い。だから二十世紀人からは信じられないくらい、簡単に人が死んでいく。そんな人たちを、まずはできるだけ助けようと思ったんだ。

もちろん、元がただの文系大学院生だったわたしに科学や工学、医療方面の活躍は無理だ。人文系の知識なんて、この時代じゃあほとんど役に立たない。

でも、今のわたしは柱の女だ。たとえ元がヘタレの一般人でも、人間を大きく上回る戦闘力がある。だからせめて、荒事で命を落とす人

が出ないようにしよう。居合わせた場所で、理不尽に殺される人が出ないようにしよう。そう思ったんだ。

その上で、いずれ到達する未来で、その時代のジョジョたちの助けになる。

肩を並べて戦えるならそれでよし。それができなくても、スピードワゴン^{スピー}みたいな彼らを支えることができるならセカンドベストだろう。

と、以上がわたしが考えて出した答え。とにかく手が届く範囲の人は助ける。それを念頭に置いて生きていくことにした。

それでわたしが許されるとは思ってないけど、少しでもよりよい未来のためになるならわたし、がんばれると思う。

まあ一ファンとして、原作で死んじやったキャラが死なないようにしたいっていう欲望もないわけじゃないんだけどね。あわよくば世界を一巡させないようにできればいいかなあ、なんて。

そのためにも、まずはもつと戦えるようにならないといけない。強くなれば、きつと助けられる機会も多くなる。ジョジョたちと同じ戦場に立てる意義は言うまでもない。

そして可能なら、回復系の能力が欲しい。戦うだけで助けられる人は限られるから、もう少し手を伸ばしたい。

特にジョジョは四部になるまで明確に回復系の能力が登場しない（波紋もそうと言えはそうだけど敵が強すぎていまいち回復効果が実感できない）からね。そういう能力があれば、大幅に死者を減らせると思うんだ。

ということ、スタンドに関してはしばらく回復技の開発に専念することにした。

開発って言っても、精神修行っていうか、一種のイメトレみたいなものだけだね。

スタンドは超能力的なものだけど、できるって思うことが大事なところがある。エンヤ婆も言ってたけど、「空気を吸って吐くことのように！ HBの鉛筆をベキッ！ とへし折る事と同じようにツできて当然と思」ってこそ能力も成長するんじゃないかってね。

ただ、わたしがやろうとしてることは要するに、長年共に過ごした人たちへの裏切りだ。人を殺すどころとはまた別の罪悪感がある。人類と柱の一族が争うことなく共存できれば一番なんだろうけど、そんな方法あるのかなあ……。

種としての生存競争つてことを考えると正解はないんだ、とも思う。それでも……どっちも知恵のある生き物なんだから、住み分けができればいいのに。

そんな難しい新たな悩みも抱えつつ、三百年ほど時代も進みまして、なんとか回復技を使えるようになった頃。

わたしはカーズ様たちと一緒にシチリア島にやってきた。あ、念のためと言つとくと、イタリア半島をつま先にある大きめの島ですね。そこに何しに総出でやってきたかと言えば、ここはかなり大きいエイジャの赤石が使われたつて情報をつかんだから。

しかもなんと、赤石を利用して日光を増幅し、攻めよせるローマの軍艦を焼き払ったというあまりにも聞き覚えのある情報だ。

うーん、たぶん「アルキメデスの熱光線」でしょうねえ。あれは伝説というか、後世に付け加えられた逸話だった気がするけど、赤石があるなら不可能じゃあないだろうし。

ともあれこれはかなり信用していいと思う。そしてそれがあんなにしいとなれば、カーズ様が動かないはずがない。

こういうとき率先して動くのはカーズ様のいいところだよ。人手がないからでもあるけど。

ただ、問題が一つ。当該の赤石が仮に「アルキメデスの熱光線」の逸話を形作るものであるなら、その場所はシラクサの中つてことになる。

なんでそれが問題かって？

それはね。シラクサは今、ローマ軍に絶賛包囲されてる最中で……うん、要するに、歴史に名高いシラクサ包囲戦の真つただ中なんですよ！

ちなみに史実通りなら、アルキメデスはこのときに殺されます。

そしてわたしたちがシラクサに着いたとき、街は既に外郭を落とさ

れて陥落寸前。内郭でなんとか籠城はしてるけど、まさに風前の灯状態だったわけで……ね？ 問題でしょ？

それに歴史を知るわたしは知っている。このあとシラクサが巻き返すことはないって。そして、陥落したシラクサの街は軽く地獄になる。苦戦させられたローマ軍が、鬱憤を晴らすかのように暴れ回るんだよね……。

その是非を問うつもりはない。この時代の戦争でそれは普通のことだし、ローマはそれを繰り返して歴史の覇者になるのだから。そこを土台にして発展した時代を生きたことのあるわたしに、彼らの是非を問う資格なんてあるはずもない。

もちろん止められるなら止めたいけど、万単位の人同士がぶつかり合う戦争が始まったあとに腕力だけで止めるのは不可能だ。

だからわたし自身は、せめてどちらかに肩入れることはないようにしたいんだけど……。

「状況はよくわかった。ならばそのローマとやらを手伝ってやろうではないか。なに、どうせここから籠城側が勝つことはなからう。ならばそれが少し早くなるかどうかの違いだ」

なんてカーズ様が言うんだもんなあ。

要するに、ローマ軍の略奪に便乗して赤石を回収しようぜってことだ。漁夫の利を狙う立場としては至極当然の選択だとは思うけど、釈然としないのはわたしだけじゃないって信じたい。

そして夜。シラクサにとっての地獄の化身が現れる。

固く閉ざされた城門はワムウ渾身の神砂嵐でズタボロに吹っ飛び、その近くで守りに当たっていた兵士たちはカーズ様の輝彩滑刀きさいかつとうとエシデイシの怪炎王かいえんのうでバラバラになるか消し炭になるかした。

突然の出来事に動揺はあったものの、ローマ軍がそこを見逃すはずもなく……やがて冷静になった彼らはほどなくしてシラクサに攻め寄せ始める。

先んじて空からシラクサの中に乗り込んでいたわたしは、少しずつだけ確かに近づいてくる彼らの雄叫びにそつとため息をついた。

これから一体、何人の人たちが死ぬことだろう。歴史の必然とはい

え、それを目の当たりにするのはやるせない。

だけどそれよりも問題は、カーズ様たちが暴れる気満々つてことだ。赤石を入手するか、最低でもその行方に関する情報を入手するまで彼らは止まらないだろう。

「だったらいつそ、赤石を真つ先に入手すればいいのでは？　そしてもし入手出来たら、ローマ軍に渡してしまおう。そう思って、わたしは海側のほうにやって来た。」

伝承では、さらにはこの世界での伝聞でも、赤石によると思われる熱光線はローマ海軍に向けて放たれた。なら、きっとその辺りにあると踏んでのことだったんだけど……。

「……ない。やっぱりもう回収されてるのかなあ」

どこを探しても、それらしいものは見当たらない。赤石を組み込んだであろう装置も見当たらないのは、そもそも作られてなくて赤石から直にレーザーだったのか。それとも装置ごとどこかに回収されたのか……。

いずれにしても、当てが外れた。ここになると、他の心当たりはわたしにもない。となると、情報を得るためにカーズ様たちが拷問に走る可能性が……それだけはなんとかして避けないと！

わたしはツノを隠して、市民が避難してる場所へ向かう。道中、申し訳ないけど適当な服を失敬しつつ、それがかみ合う姿に変身して装備。これどこからどう見てもシラクサ市民！

そしてその恰好で、その辺を慌ただしく走り回る兵士に聞く。どうしてあの熱光線の兵器を使わないのか、つてね。いかにも状況に混乱してる人を装いつつ、クレーマー気味にだ。

「バカ野郎ッ、そんなもんもう使えねえーよ！　アルキメデス様が殺されちまったんだからな！」

「あれはアルキメデス様が管理しておられたものだ、我々はどうなってるのかもさっぱり知らんよ！」

「大体アルキメデス様が死ぬ少し前にまだ改良の余地があるとか言っ

て持っていかれたから、今どこにあるかもわからんわ！」

場所を変えて何人かに聞いて、得られた答えで有用そうなのはこの

辺りだ。

つまり、あの熱光線はやつぱりアルキメデスによるもので。その管理運用はアルキメデスが担ってて、今は装置そのものが内郭にない。だけど肝心のアルキメデスは既に死んでいて……。

「……待てよ。確かアルキメデスが殺されたのって、史実通りならシラクサ外郭の陥落時だよ。この世界でもそうだったとして、それって今から……えっ、八か月前じゃん!？」

ってことは、赤石はシラクサどころかこのシチリア島にすらとつくない可能性があるぞ!？」

だとしたら……ここに理由はないってことに!

「カーズ様に早く知らせないと……!」 じゃないと無駄に大勢が死んじゃう……!」

わたしは大急ぎで外に出た。すぐさま元の姿に戻ると同時に、背中から翼を生やして空に浮かぶ。

空から眺めるシラクサの光景は、まさに地獄だった。あちこちから悲鳴と火の手が上がっているし、それを追い詰めるような怒号も飛び交っている。略奪が進行しているんだ。

でも申し訳ないけど、今はそれに関わってる余裕はない。一刻も早くカーズ様の場所を特定しないと!

「……でも、少しくらいはっ!」

空を移動しながら「コンフィデンス」を取り出す。

そしてローマ軍の略奪にさらされているシラクサの人たちを助けるべく、矢を放つ。

当たり前だけど、彼らに向けて射かけるわけじゃあない。そして襲ってるローマ兵を射貫くわけでもない。そんなことしたら即死しちゃう。カーズ様たち相手だとろくなダメージソースにならないから忘れがちだけど、対人として見ると逆にオーバークイルだからね。

じゃあ何を狙ったかと言えば、彼らの周囲にある壁やものだ。そこを破壊して発生するがれきなんかでローマ兵を妨害して、逃げる時間を稼ぐ寸法だ。

ついでに言えば、スタンドが見えない人にはいきなり目の前のもの

が壊れたように見えるだろう。それが連続すれば、得体の知れなさに逃げてくれる……はず。

どのみちカーズ様を探してあちこちを見ることになるんだから、これくらいはしてもいいでしょ？

そうやって空をさまようことしばし。ある場所から、夜とは思えないほどの強烈な光が生じた。

「……いー あれはー 間違いない、カーズ様の輝彩滑刀！」

あそこにカーズ様がいる！ よし直行だ！

……待てよ？ 向かいながらふと疑問に思う。

カーズ様の流法モードは確かに光だ。そしてその正体は腕から生じさせる刃が発する光だけど、常に光ってるわけでもない。あれを光らせるときは、すなわち使ってもいいと思う敵と相対したときで……え、このシラクサにそれほどの人間がいるの？

「カーズ様！」

「アルフィーか。何をしている、調べるところはまだあるだろう」

慌ててそこに下りたところ、カーズ様つてば波紋戦士と対峙しておられた。なるほどなあ！

そちらをちらつと横目で見てみれば、相手はどうやらローマの兵士。ローマ軍にも波紋戦士がいるんだなあとか場違いな感想が脳裏をよぎるけど、カーズ様が輝彩滑刀を出すまで五体満足とは相当な使い手だ。いや、手加減してた可能性もあるけど。

手にしているのは波紋を帯びた剣。なるほど、メタルシルバードライヴ銀色の波紋疾走の使い手かな？

とはいえ、カーズ様が輝彩滑刀を出したからには彼の勝ち目はかなり低いだろう。それなのに逃げる気が欠片も見当たらないのは、その近くで倒れている瀕死の男のためだろうか。こちらは既に両腕を落とされてる上に、目を潰されているようだ。完全に戦意を喪失して泣き叫んでいる。あるいは近くで隠れてる未熟な使い手のためか……。

どっちにしても、これ以上はいけない。そう思って、わたしは声を張り上げた。

「いえそのつ、それなんですけど、もしかして赤石はもうここにないかもしれない可能性が出てきました！」

「……続ける」

その内容に、カーズ様はピクリと眉を動かしてこちらに顔を向けた。

「はああああーっ！」

それをスキと見てか、相手の波紋戦士が突っ込んできた。

だけどカーズ様は動じない。相手の猛烈な剣戟を、まるで遊ぶかのように上半身の動きだけでかわし始めた。ぐねんぐねんとありえない方向に動き回って、ときには骨格からしておかしい形にズレたりする動きは……えっと、ジャングルの王者で見たような気がしますけど、こうやって目の前で見ると正直かなりキモく……。

「えっとですね、実はかくかくしかじかで……」

その動きは、わたしが事情を説明し終わるまで続いた。たまに輝彩滑刀で地面を弾いてバランス取ったり態勢を変えたりもしてたけど、終始相手を翻弄し続けていた。

思うんだけど、カーズ様つてたまにそういう遊びにこそ本気になるところあるよね？ 遊び心を忘れない大人なの？

それにしても相手がかわいそうだ……。あまりにも攻撃が当たらなすぎ過ぎて涙目じゃあないか……。

呼吸も乱れてるのは、あのみようちきりんなかわし方には精神攻撃の意味もあつたからなんだろうけど、にしてもかわいすぎる……。

「チッ、遅かったということか？」

「かもしれないせん！ なので調べるとしたら、まずはそのアルキメデスとやらの家のほうが……」

そして説明が終わると同時に、彼は遊びは終わりだと言わんばかりに腕を振るつた。

「ぎよええええーっ!？」

それは一条の軌跡を描いて、正確に相手の首筋に裂傷を入れた。

裂傷はゆつくりと、けれど間違いなく奥まで達して……ええまあ、

その、首が飛びました、ね。当然、血しぶきが派手に噴き上がる。

「……いい、かも……しれません、よう？」

ぐらりと倒れ伏す男。その凄惨な最期に、わたしは思わず顔ごと声がひきつった。

「そうだな」

一方、それをしたカーズ様は淡白に頷くだけだ。バツンツ、と音がして刃が腕に収納される。

そしてそのまま、もはやこの場のすべてに興味がないと言いたげに踵を返した。

「戻るぞアルフィー。エシテイシたちと合流する」

「えっ、あ、は、はい！」

彼に促されて、わたしも続く。

だけど……そこで一旦足を止めて、振り返る。

そこには即死しただろう波紋戦士の遺体と、今なお死への痛みと恐怖で泣き叫ぶ男の姿。

わたしは、その光景を目に焼き付ける。そしてごめんなさい、と心の中で言う。

この光景を、わたしは忘れない。忘れちゃいけない。だから……。

「アルフィー、隠れている臆病者のことなど気にするな」

「はい……」

後ろからカーズ様の声が飛んできた。

彼の言わんとすることにそれ以上の意味はないだろう。もはや彼にとつて、彼らは路傍の石以下の存在に化したんだ。

だけど、わたしが用事があるのはそっちじゃあない。

〔コンフィデンス〕第三の矢、〔センド・マイハート〕！〕

カーズ様に聞こえないよう、心の中で言いながら〔コンフィデンス〕を構えて矢を放つ。それは狙いを一切違えず、腕と視力を無くした男の眉間に突き刺さった。

だけど血は出ない。それどころか、男がそれで痛みを覚える様子もない。

そりやそうだ、放った矢は癒しの矢。そのデザインは、普段の矢と

も【スターシップ】の矢とも異なる。

鏃に刻まれた意匠は、その名にもあるハート。この矢に殺傷能力は一切なく、射貫かれたものは治療される！

その仕組みは、わたしという本体から生命力を譲渡するというものだ。それを用いて対象を癒すわけだから、ある意味では波紋による治療に近い。

ただ地球上で最も生命力のある柱の一族であるわたしの生命力は、それだけで強力な治療装置足りうる。治療速度は、並みの波紋使用の非じゃあない。譲渡する量を増やせば、部位欠損にすら対応できるのだ！ なんならスタンドにも有効で、一時的にスタンドパワーのブーストにだって使える優れものだろう。

とはいえデメリットももちろんあつて、その性質上即死した人には効果がないし、一度に放てるのは一本だけ。二発目を出すには、先に放った【センド・マイハート】を消費なくつちやあいけない。わたしは射貫いた相手、どちらかが射程距離外に出ても矢は消える。

さらに、対象に生きる気力がないと効きがすこぶる悪くなったり……あとは、前提としてわたしから生命力を譲るものだから、わたしには効かないんだけど。

でもそれでいい。わたしのことなんて後回しでいいんだ。

ともあれ、これでよし。これでわたしがここから離れるまでの間に、多少なりとも彼を癒してくれるはずだ。

「……あつ、カーズ様待ってくださいよおー！」

そしてわたしはばたばたと、ただでできるだけゆつくりとその場を後にした。

願わくば、彼が死なないようにと思いながら。

16. 合法ロリVS脱法ロリ

結局とすべきか案の定とすべきかはわからないけど、赤石はシラクサでは見つからなかった。

あのあと足を運んだアルキメデスの家は、当たり前だけどかなり略奪されていた。ただ、図面や資料の類は乗り込んだ兵士が価値を見出せなかったのか多くが残ってた。これはカーズ様にとっては不幸中の幸いだと思う。

何せこれを見るに、アルキメデスが熱光線に利用した赤石は石仮面を完成させるに足るもの、すなわちスーパーエイジャである可能性が極めて高いということはわかったからね。

彼は色までつけたかなり詳細なスケッチを残してたんだけど、それを見る限りここにあった赤石の形はまさに原作で出てきたスーパーエイジャだったからね。これにはカーズ様も一応につきり。

そのスケッチは、今後の比較用にするという名目でスタンド空間に収納させていただいて、このときは撤収することになった。

そのあと指示を受けてローマ軍に潜り込んだ結果わかったのは、少なくともローマ側指揮官は赤石の存在を認識していたこと。そして彼は略奪の成果を奪うことはしなかったものの、アルキメデスを殺すなど命令していたのに殺して略奪に走った兵士たちを、後方に下げたことの二つだ。

「……………」

「はい。そのあと彼らは冷遇されたことに腹を立て、勝手に陣幕から脱走したみたいです。そのあとの行方はわかりません。」

ローマの兵士が脱走してローマに戻るとか、ローマと戦争中のカルタゴ方面に行くとかはちよつと考えづらいですけど、可能性がないとは言いい切れないですね……。他にも選択肢はいっぱいあるので……そのう」

無言のカーズ様が拳を下ろした机が「ゴワシア」とあっけなく壊れる。やめてよね心臓に悪い。

にしても、これは相当お冠ですね……。原作で手段選ばないやり方

が目立ったのも、こういうイライラが積もり積もった結果なんだろうか……。

とはいえ、激昂した様子を見せたのは一瞬。すぐに普段の様子に戻るのにはさすがと言うべきか。

「……赤石は傍目には宝石とさほど変わらん。各地の商人や質屋などを重点的に探すぞ。エシデイシはギリシヤを頼む。ワムウはヒスパニアだ。私は念のためエジプトを調べる。」

アルフィーはローマ周辺を調べる。だがついでに、ローマのたかが末端の兵士に波紋使いがいた経緯も調べておけ。どうも嫌な予感がある」

「あいよ、任せられた」

「御意」

「わかりました」

わたしだけ仕事が多くないですか……。そりゃあ、便利キャラなのはわたしも自覚するところではありますけど。

ともあれそんなわけで、それぞれ別行動になった。カーズ様たちが行くことになった土地で何かやらかさないかすごく心配だけど、今は何もできない。せめて穏便でありますようにと祈る。南無阿弥陀仏。

さてせっかくの単行動だから、この機会にローマの街並みを堪能しながらゆつくりしたいところではあるけど、まずは赤石探した。

少なくとも現状のローマにある情報をしっかり集めておかないと、万が一他の地域でローマから来た商人がスパーパーエイジャを持ってたなんてなったら、カーズ様に殺されかねない。あの不機嫌な感じからしてその可能性は高い。だからお楽しみは全部終わってからだ。

で、ローマおよびその周辺であれこれ調べて回ったところ、いやはや戦争景気と言うべきか。儲かる人は儲かるんですね。結構短い間に宝石関係の商取引が行われてて、歴史つて繰り返されるんだなあなどと思うなど。

まあその手の売買で動いた「赤い宝石」の大半はルビーだったわけだけど、中には質は良くなくても本物の赤石がちよつとだけ混ざってた。この辺りは、昔と比べて変わったなと思うね。人類の数が少な

かった数千年前じゃ考えられなかった。

「……このもルビー、と。これでとりあえず、今のところ回ってきた情報のところは全部答え合わせが済んだかなあ」

そんなある日。わたしはとある新興貴族の家に忍び込んで、宝物庫（と言うほど広くはないけど）を物色していた。

調べた限り、ここも外れ。そして現状、これ以上ここ一年以内でそれらしい宝石が動いたって話は聞かないから、赤石関係はここらで一且中断して波紋関係の調査に移ったほうが良さそうだ。

……闇取引とか個人間の譲渡とか、あるいはどこかで盗賊とかに奪われたとかの可能性もあるけど、それをやり始めるときりがない。一応の区切りは必要だろう。

「よしそれじゃあ帰るかー。今日はもうゆっくり休みたーい」

持ち主が無精者なのか、今日のところは宝物庫内がごちゃごちゃしててかなり時間がかかっちゃって疲れた。最近はず赤石の情報を早めに潰しておこうと思って働きすぎだったし、今日くらいはゆっくり休んでも許されるよね。

そう思いながら宝物庫を出る。結構広い邸宅だからちよつと脱出が面倒だけど、わたしには空から出入りするという反則技があるから庭に向かう。

廊下を抜けて見えてくる庭まで行けば天井がないから、そこで大幅なショートカットだ。ちよつと正方形を対角線に切り込む形で中に足を踏み入れ……ようとしたとき、それが目に入った。

寝室と思われる部屋で、恰幅のいいおじさんが全裸でハッスルしておられる様子が。もちろん、性的な意味でのハッスルだ。うわあ。

正確にはこれからハッスルしようとしてるところ、ではあるんだけど……それだけなら別に、嫌なもの見たってだけでスルーなんだけど、問題はそこのおじさんが迫ってる相手だ。

そこにいたのは、どこからどう見てもわたしより小さい女の子だったのだ。

どう見積もっても二桁に達してないだろう女の子が、全裸に剥かれて襲われて泣き叫んでる。どこからどう見ても事案ですよこれは！

しかも改めて見るとあの女の子、身体のあちこちに暴力のあとが見えますね!? これは……ギルティ! 誰がなんと言おうとこれはギルティです!!

わたしは一刻も争うだろうと、大急ぎで今まさに蛮行がなされようとしていた部屋に突入……。

「ぶげあ!」

「えっ」

したところで、入れ替わるようにしておじさんが外に吹き飛んでいった。

その姿を見送って、数秒硬直。まさかこんな小さな女の子が……と
思っ、改めて室内に目を向けたわたしは、お釈迦様に会ったとき以来くらしいの驚愕を覚えた。

「は?」

そこにいた女の子の背中から、白い翼が生えていた。

それはいい。それだけならまだいい。

けど、次の瞬間女の子の身体が波打つようにたわみ、ぐにやりと歪んだかと思うと、それまでとまったく違う姿に変わったんだから、驚くなつてほうが無理でしょこんなの!

しかも現れたのは、全体的にダークな系統の色で統一された身体、それに反して唯一抜けるような白さを保つ一對の翼、禍々しい形状の装飾、あちこち割れたり欠けたりした悲しげな顔をした謎の存在で……。

「いやいやいやいや、ここジョジョの世界なんですけど!? 仮面ライダーの世界じゃあないんですけど!?」

そう、有り体に言っそれは仮面ライダーとかに出てきそうな怪人みたいだった。そんなものに女の子が変身してしまったんだから、驚くなつて言うほうが無理!

「グキカクゲココアアア!!」

「そんない!」

そしてその怪人は、自我をなくしたような獣じみた声を上げて襲いかかってきた!

……けど、なんていうかわりと冷静に対処できた。

いやその、だつて相手が普通に遅くてパワーもなかったから……見てから回避余裕でした……。

これはあれかな、見た目すごいヤバそうだけど、中身はそのまま少女のまま身体能力は特に変わってないってことなのかな？ だとしたら、逆に下手な攻撃をすると死なせちゃうぞ。どうしよう。

そう思つて、まずは無力化するために軽く腕を狙つて拳を当ててみたんだけど……これがなんとノーダメージ。

あまりにもダメージがなかったから、次は強めに攻撃してみたんだけど、これまたノーダメージ。

「……え、なにそれどんな防御力？」

「グギエエエー!!」

さすがに二発目はそこそこ効いたでしょつて思つてたから、手応えのなさに思わず呆然としちゃつて反撃に頭を殴られた。

ところがこの攻撃、こちらもノーダメージに終わった。

いや、普通に幼女に殴られたくらい威力しかなかったらそりやノーダメですよ。子供の加減知らずな一撃はときにかなり効くものだけど、一応わたしこれでも柱の女なんで……。

ただこのままだと千日手だ。仕方ない、暴れられたら中のものが壊れかねないからしたくなかつたけど、ここは「スターシップ」で……。「えっ、うっそだあ!」

弾かれた!? マジでどんな防御力してるの!?

試しにと思つて今度は普通の矢を、結構本気で射かけてみたらこれもまた弾かれる。ちよつと待つてそれはどうかと思う!

これでもわたし柱の女ですよ!? コンクリ破壊できる威力の矢を出せるんですよ!? それ食らつてちよつと火花が散るだけつて絶対おかしい!

でも現実是不変わらない。

となると仕方ない、今度は本気でボディブローだ! 中の幼女に何かあつたら……そのときは平謝りの上で【センド・マイハート】しかないだろう。

そうと決めたからには、速攻だ。ガツて近づいてどんってパンチを放った……と思ったら、あつと思う間もなくいきなり吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばす衝撃はなかった。そして速度も結構なものだ。人間だったら反応できなかっただろう。

「……え、今のなに？」

伸ばした手を地面に打ち込んで、体勢を整えながら着地する。

しながら思わずつぶやいたけど、それに対する答えは言葉じゃなくてそこら辺の石とか木屑とか燭台とかだった。まさしく手当たり次第って感じで飛んでくる。

これも一応回避できる速度だったから、なんとか全部避けた。正面向いた状態で横向き九十度に身体が曲がるのは、我がことながら気色悪い。でも、飛んできたものに何か変な効果があっても嫌だからね。がんばったよ。

いや、今のは明らかに物理法則が無視されてたもの。つまり、この奇妙な怪人？ もたぶんスタンドなんだ。となると、それによると思われるものに迂闊に触れるのはまずいでしょ。暴走してるっぽいし。スタンドとしては、物質と同化する「ストレンジス」か、スタンドのスーツを身にまとう「ホワイトアルバム」みたいなものかな？ 前者だとしたら、普通の人にも明確に認識できる。この外見で人目に触れたら、バケモノ扱いまっしぐらだろうなあ……。

じゃあ問題の能力は、ってことだけど……。

「サイコキネシス？ ……や、違うな、どっちかっていうとこれは……
【タスク】に近い？」

爪を弾丸として放つあれとは違うけど、雰囲気……ものを放つって一点に関してはかなり近いような。

音はない。けどまっすぐ飛んでくる様はまさに弾丸みたいで、言うなればあれの能力はものを撃ち出す程度の能力と見た。

確認のためにそこら辺のものを投げ返したりして様子を見たけど、飛ばしたものに何か特殊効果があるわけでもなさそうだ。

本体もただ叫びながら殴りかかってくるかものを飛ばしてくるだ

けな上に、それも単調。本当に子供を相手にしてるみたいだ。

「……そろそろ終わりにしないと人が集まってくるかな」

人が慌ただしく集まってくる気配もある。となると、これ以上の長居はまずい。そう思ったわたしは、一気に前に出ることにした。

特殊効果のない飛来物なら、怖くない。色んなものを正面から食らいながら無視して突き進む。

たぶんマスクト銃くらいの威力はあると思うんだけど、残念ながらそれくらいでダメージを負うような身体じゃあないから……。

近づいてどうするかといえば、同化だ。わたしは普段滅多にやらないから忘れがちだけど、一応柱の女。普通の生き物を体表から吸収できるし、吸収せずその体内に潜り込んだりができる。

もしもあれが本体と同化したことで見た目が変わっただけなら、たぶん接触からの同化は行けると思うんだよね。スーツタイプだったら……一度抱えてこの場を離れよう。

ということ、相手の眼前。だけどそれを認識するよりもわたしが手を出すほうが早い。やつぱりというかなんとか、身体能力は全面的に幼女のままみたいだ。

とくれば、振り払うこともできないだろう。わたしが発射されるのは防げないけど、今からやるのが成功すればそれも無効化できる。

「よしよしよ」

「ギアッ!？」

鞭……というか触手じみた状態にした両手両腕で、相手の身体を拘束する。それと同時に、相手を取り込む要領で一体化……あつ、できた!

よし。大丈夫、食べはしないよ。このまま身体の中に入り込んで、ちよつとだけ体内を傷つけるだけだから!

うん、外からの攻撃には強い相手は中からやつつけるのは鉄板だよ
ね。

「アアアアアアアッ!!」

「ちよ、そんなに嫌がられるとさすがにわたしも傷つくんですけど」
ところがものすごい悲鳴を上げながら、のたうちまわろうとするも

のだから思わずこっちが泣きそうになる。

そんなにこれ嫌なのかな……。いや確かに嬉しくはないだろうけどさ……。。

このままだとわたしの心に致命的なダメージを受けそうなので、さっさと終わらせよう。

えーっと、まだちっちゃいんだし、なるべくあとに響かないだろう場所を選んで、ちよつとだけちくりと……。

「アアアアアアッ!!」

そしたらそれがまたよつぽど痛かったのか、びくんびくんしながら絶叫してそのままがくりと動かなくなってしまった。

と同時に、変身が解けて元の幼女に戻る。

「ええ……。そんなに……。？　体内が傷つくくらい、よくある……。ことじゃあないな。うん」

しまった、一万年以上人間してなかったせいか感覚がマヒしてる。

そりやそうだ。麻酔なしで体内をいきなり傷つけられたら、普通死ぬほど痛い。しかもこの子はまだ幼いわけだし、気絶の一つや二つくらいしちやつてもおかしくない。

うん……。わたし見た目はこの子よりちよつと大きいくらいだけど、中身は大人だしなんなら死にそうな大ダメージも稀によくあるから、痛み自体にはもうすっかり慣れ切ってるんだよね……。

「……。ごめん。いやホントごめん」

ずぷりと女の子から抜け出ながら、とりあえず謝る。気絶してる子に言っても仕方ないけど。

と……。とりあえず、このまま放置したら大変なことになる。わたしはこの幼女に「スターシップ」を撃ち込んで、そそくとその場を後にした。

「……。あれ、待てよ。この子の立場がどうあれ、この時代の法律だとわたしは文字通りの誘拐犯なのでは？」

そのことに気づいたのは、ねぐらにしているスラム近くの家に着いたときだった。

……。共和政ローマって、虐待されてた子を助けましたって言って通

じる時代かなあ？

17. 旅は道連れ

「ごめんなさいわたしがやりましたごめんなさい……ぶたないでくださいごめんなさい……」

……幼女誘拐犯の供述じゃあないよ？

これは目を覚ました幼女が、わたしを見て最初に言ったセリフだ。これに土下座がついてくる。まったく嬉しくないセツトがあったものだ。一体普段からどんな生活を送ってたのか、想像するだけでも嫌な気分になる。

というわけで、わたしはすぐに彼女を助けるべく動くことにした。うつろな目で何度も謝罪を繰り返す幼女には、なだめすかすようにしてあやしてスタンド空間の中で休んでもらう。

そのついでに「センド・マイハート」を撃ち込んで、治療する。まあ、あの奇妙な姿はやはりスタンドなのか、矢を視認できた幼女にものごく怯えられるっていう顛末もありましたけどね……。

いや違うんですよポリスさん、誤解です。確かにわたしは思わず幼女を連れてきてしまいました。字面だけ見ると最悪ですね。でもこれには深いわけがあるんです、本当なんです。

……誰に向けてるのかわからない言い訳はともかく。

この幼女について、あとから調べたことを先に説明しておく、彼女はあのおじさんの家で使われていた奴隷だった。どうやら見世物小屋で見世物にされていたところをあの家敷のおじさんが買い取ったらしい。

詳しい来歴は不明。どことなくゲルマン系の雰囲気がある気がするけど、見た目でそういうのを判断できるような知識とか機能はわたしにはないしわからない。

ただ、背中に生やした不気味な羽と謎の力を振るう娘を嫌った両親に売られて奴隷になった、という話は聞いた。そして、あちこちの奴隷商をたらい回しにされた結果、見世物小屋にたどり着いて今に至る、んだとか。

ここまでだと買い取ったおじさんが善人に見えるけど、買った理由

が自分の一族に幼女が持つスタンドを取り込んでローマを牛耳るくらいになりたいから、な辺りもうなんていうか。

で、毎晩のように幼女を犯そうとするも、そのたびにあの同化するスタンドに撃退されてたんだってさ。一般人が毎晩スタンド使いに挑むそのガッツは賞賛するけど、向ける先をもうちよつと考えて欲しかった。

そしてそのおじさん。実はわたしが幼女を連れ出したその日に家が火事になって、それに巻き込まれてお亡くなりになってます。

いや急展開がすぎるようにも思うけど、わたしだってびっくりしたよ！ ねぐらに戻ってこれからのことを考えてたらいきなり空が赤くなつて、街が大騒ぎになったんだもん！

聞けば火事で、それが直前までいたところで起こってるってんだから、思わずわたしじゃありませんって言っちゃったくらい驚いたよ！ただ、原因がまったたくわたしにないわけでもなくって。というのも、暴走した幼女と戦ったとき、彼女わたしに向けて燭台を発射してたじゃない？ どうもあれがそのまま燃え広がったみたいで……。

そして運の悪いことにあのととき幼女にぶつとばされたおじさん、ぶつとばされたまま気絶してたみたいで、逃げ遅れて……。

家族も、幼女を襲って返り討ちに遭う毎日に感覚がマヒしてて、特に起こしたりとかしなかったっていうからなんていうか、因果応報ってこういうことを言うのかなって。しかも彼以外の家族は奴隷も含めてみんな無事って言うんだから、日頃の行いって大事だよね……。

火事自体はわたしのせいでもあるから消火活動は手伝ったし、救助だって手伝ったけど、おじさん火元周辺にいたから間に合わなくつてね……。

とまあそういうわけで、なんだかんだあつたけどあの幼女はわたしが引き取ることになった。

法律的な面は、先にも言った通り幸い奴隷だったので、お金が解決してくれた。

うん、家主が死んだ上に家もなくなったわけで、お金がいるだろうと思つてちよつと、ね。元二十一世紀人としてはお金で人の身をやり

とりするのは思うところがあるけど、この時代のローマでこれは普通のことだ。

え？ いやいや、わたしちゃんと経済活動してますから。お金は各国のをそれなりに持つてるんですよ。カーズ様たちはお前のものは俺のものみたいな感じでかつさらっていきますけど、わたしはちゃんとお金が必要なものは払いますからね！

それはともかく、そこその金額（一般人の年収の半分くらい）を払ったから、あちらとしても渡りに船だったんじゃないかな。あのおじさんの趣味で買った気色の悪い小娘、みたいな認識の人ばかりだったから。

というわけで幼女なんだけど。いや、まさか背中の中が一般人に認識されるとは思わなかった。

そりやあ普通の人には受け入れがたいだろう。いや、羽だけなら人によってはキューピッドの化身みたいに崇めるかもしれないけど、暴走したスタンドが本人の意思に関係なく色々巻き起こすとあっちゃあねえ……。

あちこちところかまわずものを吹っ飛ばしまくったら、そりやあ不気味がられても仕方がないんじゃないかな。

これで暴走が加速するとあの姿に変身する話は既にこの辺一帯に広がってるものだから、まあ迫害されるよね。見世物小屋とかで離れたところから見るにはいいけど近づきたくはない、くらいが一般人の歩み寄れる限界じゃあないかな。だから売られたんだらうね。

当初はどこかの孤児院とかに入れてあげればよかった、思ってたんですけどね。

だって生活習慣どころか生態が違うし、今はローマにいるけどそれもずつとじゃなくて、カーズ様の命令次第であちこち飛び回る。物騒なことだってする。そんなすさんだ生活よりは、心ある人に引き取ってもらったほうがよっぽど幸せになれるでしょ。

ところが羽を全員が認識できる（ついでにスタンドで事件が起こりまくる）ということ、そうもいかなかった。

何せあの羽、ただ見えるだけじゃあない。それならマントとかで隠

せるけど、スタンドが暴走して中途半端に本体と同化してるからなのか、服とか関係なく生えてるんだ。そのうえで人の目に見えるわけだからもうね。

連れ立って歩くことすら奇異の目で見られる始末で、引き取ってどうこう以前に、話をするところまで持ち込めないことのほうが多かったレベルですよ。

結果、文字通りわたしが引き取ることになりましたとき。まさかの一万年ぶりの未婚の母リターンズだよ。

まあ、これも何かの縁だろう。仏教的に言うなら、縁起か。見捨てる選択肢は最初からなかったし、こうなったからには責任を取るべきだろうと腹をくくりましたよ。

確かに仕事に支障が出るだろうし、それでカーズ様に怒られることもあるかもしれない。でもそんなこと、子供には関係ない。少しでも首を突っ込んだ以上は、面倒見るのがわたしの義務だと思うんだ。

……というわけで、この幼女にはシヨシヤナって名付けました。元々の名前はあつたみたいなんだけど、嫌な思い出でもあるのか名乗ろうとしなくてね。

まあ当たり前だけど、最初は全然心を開いてくれなかった。でもわたしにも羽があるよって言いながら生やしたら、それ以降は一気に懐いてくれた。

懐くを通り過ぎてしまったような気もするけど、無気力のままずっと心を閉ざしてるよりはマシだろう。断じてわたしが甘やかしているわけではないと思いたい。

そして彼女の生い立ちとかに関する調査も済んで少し。大体引き取ってから三か月くらい経った頃。

「おねーちゃん！ できたよー！」

「うん、よくできました。シヨシヤナはいい子だねえ」

スタンドという概念を理解したからか、彼女は遂に、幼くして自らのスタンドを制御できるようになった。

これによって彼女は、常に背中から生やしていた羽を消すことに成功。自分の意思で出し入れが可能になり、自由に変身できるように

なった。

そう、やっぱり彼女のスタンドは本体が同化して変身するというものだった。一通り試してもらったけど、わたしと戦ったときに見せた圧倒的な防御力も健在だった。

さらに、触れたものを発射する能力まである。どちらもシンプルだけど、それゆえに使いこなせれば敵対するものにとってはものすごく厄介なものになるだろう。

……制御しきつてもなお、変身後の姿が特撮の怪人みたいなままたのは、彼女の深層心理がそうさせるんだろうか。

泣いたような悲しげな顔と、ボロボロかつ暗い色彩の身体が心の闇を窺わせる。あの強固な防御力も、もしかしたらそれ由来かも。だとしたら悲しい子だ。

けれどそれ以上に、もう彼女が人目にもつくほどの羽を常時展開させることはもうないだろうことが、今は重要だ。

「これで一緒に歩けるね」

「うん！」

頭をなでたわたしに笑う彼女の姿からは、虐待されていたなんて誰も思わないだろう。虐待の痕跡も全部治したし、傍目には普通の子供と変わらないように見えるはずだ。

いやはや、この短期間で随分変わったとは思うけど、子供は笑顔が一番だよ。

「よし、それじゃあシヨシヤナのスタンドに名前をつけてあげよう。

……でも本当にわたしがつけていいの？」

「うん！ おねえちゃんおねがい！」

そう言つて、べたりと抱きついてくるシヨシヤナ。

だいぶ依存されてる自覚はある。このままだと、わたしがいないと生きていけない大人になりそうで怖い。早いところ人付き合いを学ばせないとなあ。

と思いつつも、彼女に合わせざるを得ない形とはいえ実に万年ぶりの人間らしい生活をしていることに、内心喜んでるわたしがいるのも事実だったりする。人付き合いをこんなに楽しいと思う日が来ると

は思わなかったよ。

まあ、これが執着になってしまわないか、将来の苦になりやしないかって、思うこともあるんだけど。そのときは念仏と写経をして心を落ち着けて、お釈迦様の教えをしっかり反芻しようと思ってる。

……わたしのことだから、どうせうだろうだとそれなりの期間悩むような気はするけど。でもそれは今じゃないし、とりあえずそのときの自分の任せようと思う。

まあ、今はともかく彼女のスタンドに名前をあげよう。

名付けてくれとは言われてたから、実は結構前にもう決めてある。

「シヨシヤナ、覚えておくんだよ。あなたのスタンドの名前は――

「ラ・ラガツツア・コル・フチャーレ！」

願わくば、小さくともあなたが幸せに出会える人生を送れますように。

18. ローマ、その力の源

突然だけど、わたしは元日本人だ。そして日本人に必要なものといえば、お米とお風呂だと思う。異論は認める。

そして今わたしがいるのはローマ。ローマと言えば？

うん、ズバリお風呂でしょうよ。

一時期ローマの浴場技師を主人公にしたタイムスリップものが人気を博したけど、あれはわりと冗談じゃあない。ローマ人は本気でお風呂を愛してる。それはこの紀元前三世紀に、既に公衆浴場があちこちにあることからはっきりわかる。

まあ、さすがにあの漫画の時代みたいに豪華だったり色んな施設が付随してるところはまだないみたいだけど。

それでも広い浴槽に足を伸ばして浸かれる。これはわたしにとつととても嬉しいことに他ならない！

生まれ変わってこの方およそ一万四千年。そこら辺で自然発生してる温泉以外でお風呂に入る機会なんてずっとなかったから、ローマに滞在する機会が来て一番嬉しいのはこれかもしれないとわりと真剣に思うよ。もちろん単独行動になった初日に行きましたとも！

ただ、シヨシヤナを拾ってからは控えてた。この子を一人にするわけにはいかないし、かといって一人で行くのもなんだか申し訳なかったしね。

だけど彼女が羽の出し入れを制御できるようになったことで、銭湯通いが再開できた。これがまあ染みるのなんのつてね。お風呂はいいぞ。いや本当に！

というわけで最近よく使ってるのは、うらぶれた公衆浴場。質は悪くないけど、真新しさを打ち出せないまま続けてきたことで客足が遠のいたところだね。

シヨシヤナがまだ人の多いところを怖がるし、わたしもスネに傷のある身だから、こういう隠れ家的なところはありがたい。

「あつたかぁーい……」

浴槽に肩まで浸かったシヨシヤナが、緩みきった顔でわたしの身体

にしがみつく。彼女の身長だどぎりぎり足がつかないせいだけど、それだけでもなさそうだ。

「ねー。お風呂は命の洗濯だよー」

彼女の頭をなでながら返すわたしも似たような背丈だから、傍目からはどこかの子供が戯れてるようにしか見えないだろう。まあ、その傍目から見ると人がいないだけだね。

そんな感じでお風呂を堪能しつつ、二人で身体を洗い合う。これまでの傍目からは微笑ましい光景にしか見えないだろう。

と言つてもこの時代にはまだ石鹸は貴重だから、汚れを洗い流したらあとはストリジルで垢をかきとるくらいがせいぜいなんだけど。

……そういえば原作でワムウがシーザーのシャボンランチャーを見て、似たような技を使う相手と戦ったことがあるみたいなこと言つてたけど、この時代に石鹸をそんな贅沢な使い方できる人つてかなり限られる。一般人から見たら、非難の対象になつてもおかしくない気がする。

一体どんな状況ならそんな人と戦うことになるんだろうねえ。既に波紋に関するあれこれの地盤はあるから、確かにあり得るのが怖いところではあるけど。

「はー、きつぱりしたねえ」

「したー!」

「これでコーヒー牛乳とかフルーツ牛乳でもあればなおいいんだけどねえ」

「コーヒー? ふるーつ?」

「あーうん。コーヒーは最低でも千年は経たないと出てこない飲み物だよー。フルーツのほうは……がんばればこの時代でも再現できるのかな?」

なんて話をしながら、シヨシヤナの手を引いて家路に着く。

ああ……なんていうか、わたし今人間してるなあ。もちろん実態は依然変わりなくバケモノなんだけど、それでもこうしていると、わたしの性根は人間なんだなって思える。なんだかとても懐かしい……。

「いつも以上に気の抜けた顔をしているな」

「かかかカーズ様!? おおおお早いお着きでしゅね!？」

そこにはカーズ様がいた。まだ日は沈んでないのにいつの間にも「船が予定通りに動いたただけだ。それよりアルフィー、その人間はなんだ? 飼っているのか?」

「いえその、飼っているわけではなくですね。ちよつと色々あつて、育てるところでして……」

「ほおーん?」

言葉とは裏腹に、カーズ様の視線は剣呑だ。元々人見知り(さえず)が激しいシヨシヤナは、これで完全にわたしの後ろに隠れてしまった。

「相変わらずお前はわけのわからんことをするな。人間のような短命で気まぐれな生き物を育てたところで意味などほとんどないだろう」

「……カーズ様つて、なんていうか自分の効率最優先みたいなどころありますよね……。意味がないならしちやあいけないなんてこと、ないと思いますけど……」

「……ふん、最近では本当に言うようになったではないか。どんなことから逃げる(さえず)ことしかできなかつた小娘風情が一丁前に嘖(さえず)りおる」

「う……そ、それを言われると反論できませんけど……わたしだってもう一万年以上生きてるんですから、これくらいはですね」

お釈迦様の後押しがなかったら、今でも逃げ続けてるであろうのがある(さえず)ありと想像できるけどね……。

「まあ良い。我々は不老不死……趣味の一つや二つくらいはないと張り合いもなからう。好きにしろ。私の邪魔にならない範囲でな」

「……はい、わかつてます……」

しつかり釘を刺されてしまった。うーん、カーズ様に心を読む能力はなかったと思うけど、頭のいい人だからなあ。わたしが考えてる(さえず)ことがバレてなきやいいけど。

わたし、ヘタレな上に抜けてるからなあ……。気をつけてるつもりだけど、自分が考えてる以上にやらかしてる可能性は否定できない。

最悪のことはちゃんと考えておかないといけないな……。





さてなんでここにカーズ様がいるのかと言えば、定期報告会だ。一
定期間進展がないときは、ローマに一旦集まって状況を確認し合うつ
て事前に決めてたのだ。

これが二十一世紀なら、もつと迅速かつ世界中から連絡が取り合え
るんだけどね。紀元前だからね。

というわけで、カーズ様の次にエシデインが。少し遅れて最後にワ
ムウがやってきた。

屈強かつ強面なおじさん三人の揃い踏みにはシヨシヤナが怯えに怯
え、わたしも彼女を柱の会議に連れ込むつもりはなかったから、まだ
洗濯してないわたしの服を与えてスタンド空間でお留守番してもら
う。

……わたしの匂いで安心するらしいんだけど、早くも危ない方向に
進んでる気がしないでもない。いやいや、単純に子供が保護者の匂い
で安心してるだけだよ。そうだと思いたい。

そして始まった報告会。やっぱり、わたし含めて全員がスーパージェ
イジャを見つけられていないみたい。その明確な行方もだ。

これは仕方ない。何せ紀元前なのだ。世界がいまだに広く、人々の
交流も限定的だった時代だ。そんなところを一人で調べるのはなか
なかに難しいよね。人手が足りなさすぎる。

「……人手が足りないの、サンタナを連れてくるのはどうですか？」
「戦いとなると番犬程度にしかならんが、数合わせにはなるか」

カーズ様のサンタナ評が相変わらず手厳しい。もうちよつとなん
かあるでしょ。

「しかしわざわざ大陸を渡ってまで呼ぶ価値があるかと言うと、微妙
なところだろう。費用対効果に見合わん。その間、この辺りの調査が
滞るわけだからな」

「……わたしは徐々にサンタナにも会いたいですけどね。あの子も寂
しがつてるでしょうし」

「またお前はサンタナを甘やかす。お前がそんな風だから、サンタナ

が情弱に育ったのではないか？」

「いやいやいや、それだけはカーズ様に言われたくないですよ。完全にわたしに丸投げだったじゃないですか」

まあ確かに、あつという間に強くなったワムウより、彼に置いてけぼりだったサンタナのほうを構ってたとは思うよ。いつも凹んでたら気にもなるじゃない。

そして彼を凹ませてた最大の理由はカーズ様たちからのプレッシャーなんだから、この件に関してはマジでとやかく言われる筋合いないと思う。

……あの頃はカーズ様に全面服従してたから、わたしもその一端を担ってはいるんだけどね。だからわたしも許されるべきではないとは思ってるんだけど、それもあつてサンタナには休眠期入る前に会っておきたいんだよなあ。趣味というか、研究とか工作とかで気が合うし、頼んでた吸血鬼の研究とかどうなったのかも気になるところ……。

「そうだぜカーズ。それにワムウと一緒にだったろ。あいつのシヨボさはいつ生来のもんだらうよ」

「それもそうか」

そうかじゃないんだよなあ……。まあ、ここでこれ以上言っても仕方ないだらうけどさ……。

「ところでアルフィー、波紋使いについてはどうだ？」

「ああはい、それなんですけど……ちよつと厄介なことになってましてですね。まずはこちらををご覧ください」

このローマ市内の大まかな地図を、三人に渡す。

プレゼンの準備は万端だ。シヨシヤナを引き取ってから早一年近く。わたしはちゃんとお仕事はする女だからね！

「地図か。これがどうした？」

「なんか、ちよこちよこ書き込みがあるみてえだが……」

「それはですね、一定水準以上の力を持つてるだろう波紋使いの住んでる家です。確認できた範囲ですけど」

「はっ」

「なんだと?」

わたしの言葉に、三人が目の色を変えた。ワムウは言葉こそ出さなかったものの、明らかに好奇心の色を見せてるな。

でも彼らがそういう反応をするのも無理はない。何せ地図上の書き込みが正しいなら、ローマには方に匹敵する波紋使いが住んでることになるのだから。

「どういうことだ。ここが総本山ということか?」

「ある意味近いと思います。まだ調べ切ったわけじゃないんで、具体的なことはわからないんですけど、どうもローマの軍事教練には波紋が科目として組み込まれてるみたいなんですよ」

「……ッ!?!」

そうなのだ。ローマがヤバいのは元々わかってはいたけど、その実態はさらに輪をかけてヤバかったのだ。

ローマにおいて、兵役は義務だ。正確に言うと権利に近いんだけどそれを説明するとややこしくなるから、置いておくとして。

とにかくそんなわけで、ローマでは市民権を持つ成人男性はみな軍に従事することを求められている。そこで一般的な軍事教練に加えて、波紋を叩き込まれる。これがいかにヤバいかは、ジョジョ好きの皆さんにはご理解いただけるよね。

もちろん、というかなんというか。明確に波紋法に開眼するのは、その中の一握りではあるらしい。そりゃあそうだ、原作でも習得はかなりの時間と鍛錬、才能が必要ということが示されてたもんね。

それでもこれだけ分母が大きいなら、まったく波紋を練れないような人の数も一握りだ。僅かでも波紋を扱える兵士が軍の大半を占める。だから今、ローマ市民権を持つ成人男性は全員が波紋使いと言っても言い過ぎではない状況なのだ。ヤバいなんてレベルじゃあない。

そしてなおヤバいことに、はつきりと波紋に開眼した上位の使い手は軒並みどこかで出世してしまっただけ! 調べた限り、軍の上層部に少なくとも二桁人数、元老院議員にも三人ほど波紋使いがいるんですよ! さすがに太公望やお釈迦様ほどの使い手はいないみたいだけど、それでも相当ですよこれは!

おまけに史実通りなら、この百年後くらいに軍制改革を成し遂げてローマはさらに強くなる。ぶっちゃけて言うと手がつけられなくなる。

なるほど、ローマがヨーロッパはおろか地中海全域をも統べる大帝国になるはずだよ。将校クラスどころか兵士にすら波紋使いがいて、そいつらが統制された職業軍人ときたらそりゃあ銃のない時代では最強の陸軍国家でしょうよ！

多少の怪我はものともしないだろうから最悪ゾンビアタックまでできるだろうし、なんなら海の上を走って渡れるだろうから海軍でも他を圧倒できそう！

いやーこれは、なんというか、原作のカーズ様たちは波紋の一族を滅ぼしたって言ってたけど、そりゃあ滅ぼせませんよ。裾野が広すぎて、三人でなんとかできる範囲を超えてるよ。きつと地獄昇柱ヘルクライム・ピラーとかもそこから生き残った誰かが作ったんだろうね。

「そうそう、赤字で名前書いた人は、遠目で見て特に強そうだなって感じた波紋使いです。さらにですが、青字で名前書いた人はわたしと同じように能力に目覚めた人ですね……」

「むう……厄介な……」

これには流石のカーズ様も腕を組んでうなる。その少し後ろで、ワムウがそわそわしてるのが対照的だ。

「……その人数は面倒だなオイ。負ける気はまったくしねえが、人海戦術されるとどんだけ時間食うかわかんねえぞ」

「そうだな……万単位となると、さすがに想定しきれん。くそつ、ここまで来てこれとは、やはり人間はろくなことをしない！」

あのとときシラクサを手伝ってやるべきだったか、なんて付け加えるくらいだから、カーズ様これだいたいぶ頭にキてるんだろうな。

この間の「嫌な予感がする」はまさにフラグだったわけだ。見事なフラグ回収とも言えるけど、彼がそれで喜ぶわけがない。

「わたしも今はローマとことを構えるのはまずいと思います。やはりここは、赤石探しを優先したほうがいいんじゃないでしょうか」

「チツ、まったく腹立たしい。だがそれが最も効率的だろうな。最も

優先されるべきは赤石だ。連中の命はそれを手に入れるまでは預けておいてやろうではないか」

そして話は、カーズ様がそう締めくくって終わった。

……赤石とわたしたちについては、まだしばらく波紋使いたちには教えないほうがよさそう、かなあ。

確かにこの時点で彼らが敵に回れば、カーズ様の目的はさらに遠のくだろう。それは、人間として生きると決めたわたしにとっては悪いことじゃあない。

でも逆に早期からカーズ様たちと敵対すれば、当然波紋使い、一般人の別なく死ぬ人の数は増えると思うんだよね。何せカーズ様のことだから、無関係の人も相当数巻き込むだろうからさ。わたしにとってそれは選びがたい道だ。

だから今は、まだ原作通りに進んだほうがマシ……なんじゃないかなあ、と、思うんだけど……。

さて、これが吉と出るか凶と出るか……。

19. あっちこっち

そしてあっという間に時間は流れ、大体三十年くらい経った。けどスーパーエイジャはいまだ見つからない。昔みたいに吸血鬼も動員してるんだけど、成果はかんばしくない。

正確には、一瞬見つかるんだけどそのたびに逃げられてる、かな。吸血鬼に至っては、ローマの勢力圏内だとかかなりの早さで駆逐されちゃうからあんまり……って感じ。しかもその勢力圏が年々広がってるものだから笑うしかない。さすがローマ。すべての道を繋げただけのことはある。

それはともかく。

最初にスーパーエイジャの情報が出たのは、ワムウが調べていたヒスパニア。そこで彼は、ローマ人が赤く美しい宝石を売ったという情報を手に入れた。

ところがこれを知ったときにはもう遅く、その宝石を買った人はおりしもローマとポエニ戦争を戦っていたカルタゴ軍の略奪で奪われてしまつてて。

この時代の第二次ポエニ戦争では、両国はヒスパニア、つまりイベリア半島でも覇権を争っていた。そこで作戦行動中のカルタゴ軍に襲われたわけだね。

で、ならばとカルタゴに乗り込んだわけだけど、カルタゴもこの時期斜陽になりつつあるとはいえ、ローマと競り合った国だ。その勢力圏はローマに匹敵する広さを誇り、しかも地中海を挟んで分かれている。

仕方なしに二手に分かれて調べることになったんだけど……その矢先にスーパーエイジャらしき情報がエジプトから挙がる。これですらに手を分けなきやいけなくなつて、わたしはシヨシヤナを連れてエジプトに飛ぶ羽目になった。

久しぶりのアレクサンドリア大図書館でちよつとサボったりもしたけど、それなりにまともにも活動してましたとも。

ところがそうこうしてるうちに、マケドニアのほうでスーパーエイ

ジャラしき宝石を自慢げに吹聴している貴族の話が聞こえてくるようになって。

それに前後する形で、カルタゴが敗北してローマへ払われた損害賠償金の一部に赤石があったという情報も出てきた。

情報が錯綜しまくって何が何だか、な中でマケドニアに飛ばされたわたしは、そこで運悪くローマとマケドニアの戦争に、更にはそこにシリアとエジプトも絡む一連のゴタゴタに巻き込まれて数年も足止めを食らった。第二次ポエニ戦争も終わって間もないのに、ローマもよくやるなっと思う。

いや、わたしだけなら難なく脱出できたんだろうけど、このときのわたし、シヨシヤナ以外にもたくさんの人を抱えて大所帯になっただけ……。

うん……あちこちで手当たり次第にいろんな人を助けてたら、そりやあ中にはわたしが引き取らざるを得ない人も出てきますよ。

それでもまさか、一つの組織になるくらいの人数が集まるとは思わなかったよ。最盛期には百人くらい連れ歩いてた気がする。

もちろんカーズ様には職務怠慢でこってり絞られて、それを見たシヨシヤナがしばらくキレっぱなしだったのが今世で最高に心臓に悪い時期だった。なだめるの大変だったんだからねマジで。

で。このときやっぱりたくさんの人を連れて行動するわけにはいかないってことで、この団体を商団として独立させることになった。目指したのは、地中海を囲む地域を網羅する大商会だ。

そして主に扱うのは宝石などの高級品や、嗜好品に設定した。これはわたしがこれからも引き取ることになるだろう人々の受け皿にすると同時に、その情報網でスーパーエイジャをいち早く見つけいち早く届けてもらおうってわけだね。

名前は「ルブルム商会」。斜めに交差する二本の矢をトレードマークにして、その後ろに赤い弓が背負われてる紋章を使ってる。

名前のルブルムは、ラテン語で赤という意味。日本語に意識したら赤井商会みたいな感じになるかなあ。ひねりも何もないと思われるかもしれないけど、最初はわたし以外の満場一致でわたしの名前を使

おうとしてたから、慌てて却下した経緯があったりする。

ルブルムは、わたしのスタンダード「コンフィデンス」が赤いから、そこから取ったらしい。それもどうなんだろうね。まあアルフィー商會にされるよりは格段にマシだったから、オーケーしちゃったけど。

そんな命名をやらかしくてくれた代表はシヨシヤナだ。彼女案内営業がうまいみたいで、妙齡の女性に成長した今はまさにやり手の女社長って感じになっている。

と、ここまでが大体この約三十年間のダイジェストになるわけだけど……。

「アルフィー様、ようやくローマに店舗を出せることになりました。これでひとまず、地中海の主要都市には足がかりができたことになりましたね」

「おおー、遂にだね。この短期間で随分と成長したものだねえ」

「そこはアルフィー様のお力あつてのことですよ」

「いやあ、わたしなんて初期投資費用を出したくらいでしょ。そりゃ、たまに「スターシップ」で重いもの運んだりもしたけど、それだつてたまにだし」

「その初期投資費用がまさに一番大きいのですよ。あれがなければこうは行きませんでした」

「そういうものかな？　まあ確かに、コンビニとか街とか文明とかのシミュレーションゲームでも、初期費用が多いとヌルゲーになるか」アレクサンドリアに構えた本店の店舗で、そんなことを話すわたしたち。

ただ、シヨシヤナが仕立てのいい椅子に座っているのに対して、わたしが彼女の膝の上に座っている点が複雑な心境にさせる。

シヨシヤナはわたしを膝の上に乗せて、後ろから抱きしめながらもわたしの髪を手ですいているのだ。

当初わたしのほうが大きかったのに、今や完全に逆転してる。どころか、頭二つ分くらいは身長差がある。外からの印象も、もうお母さんと娘くらいだろうなあ。

十年前ならぎりぎり姉妹でいけたかもけど、さすがにこの時代の三

十代後半は、二十一世紀のそれより老けて見える。ローマじゃ女つて理由で波紋を教えてもらえなかったし、これも仕方ないだろうけどね。

まあでも、うん。お姉ちゃんはシヨシヤナが大きく立派に育つてくれて、嬉しいよ……大きく立派に育つてくれて……。どこがとは言わないけどさ……。

でも、ねえ。

ちらりと目を向ければセリフに反して顔はとろけていて、かなり危ない。これが今新進気鋭の商會を率いる女頭首とは誰も思うまい。

「……あのさシヨシヤナ、確かに今日はもう人に会わないだろうけどさあ」

「嫌です。今日はもう仕事終わったんですからアルフィー様を堪能するんです」

そう早口に言いながら、わたしのうなじに顔を埋めてすーはーすーはーくんかくんかする様は完全に向こう岸の人だ。どうして……なんでこんなことに……。

「だってアルフィー様を愛しているんですもの。アルフィー様さえいれば私何もいりませんわ」

「……人目のないところでだけにしてよね」

そう、彼女ときたら当初の懸念通りそっちの人になつていた。依存がそのまま恋慕に変換されたみたいで、思春期以降わたしに愛をささやいてくるんだよね……。

根っからそっちの人だったのか、育ちが理由でそっちに気質が寄つたのかはわからないけど、どちらにしてもこの時代ではあんまり一般的じゃあないから時と場所は選んでほしい。

時と場所を選べばいいのかと言えどももちろんよくはないんだけど、それでもわたしも好きと言われて悪い気分じゃあない。わたしを選んでしまった見る目のなさはともかく、その短い一生をわたしと使いたいと願ってくれるなら、わたしはそれに寄り添うよ。

ただ残念ながら、わたしが彼女に感情を高ぶらせることは今のところない。それが種族が違うからなのか、根っからのノンケだからなの

か、はたまた石仮面の影響なのかはわからない。

おかげでこうもわたしに身も心も捧げようとする彼女の気持ちに
応えられないのは、申し訳なくも思うよ。家族的な愛はあるんだけど
ねえ。

というか、愛を注ぐ相手にするならわたしなんかよりいい人なんて
世界中にいくらでもいるだろうに。せっかくエジプトの王族に見初
められたのに断っちゃやし、なんだかなあ。

まあ、それで諦めるどころかさらに熱を上げて、アレクサンドリア
の一等地に土地まで用意したあの王子様はすごぶるキてるなとも思
うけど。

ただ、それをそっくりそのまま商店に使うシヨシヤナの神経はだい
ぶ凶太い。不敬罪で死刑が普通にあり得るこの時代に、よくもまあそ
んな大胆に行動できるものだ。わたしにはとてもできない。

いやうん、つまり彼女の中ではこの世のものはわたしか、わたし関
係か、それ以外かの三種類しかないだろうね。わたしはとっても複
雑だ。

「……まあでも、これでスーパーエイジャの情報も手に入りやすくな
るかな」

「……アルフィー様にやれと言われれば、これからも私やりますけど。
でも本当に赤石探し続けるんですか？ まったく、アルフィー様に一
万年以上こんな苦労を強いるなんて、あんな男早く死ねばいいのに」
「く、くれぐれも言葉は選んでね……」

「善処します」

シヨシヤナはやたらカーズ様への風当たりが強い。わたしをお説
教したことがよっぽど頭に来たんだろうけど、だとしてもあのラスボ
ス相手によくそこまで言えるよなあ……。

本当、あの誰にでも怯えてた子がここまで凶太くなるなんて……
あの頃が懐かしい……。

ちなみになんだけど、彼女にわたしの本当の目的は言っていない。も
ちろん他の人間にもまったくだ。

だけどそれとは別のところで、カーズ様と敵対する覚悟を勝手にい

つの間にか固めてた彼女にわたしは苦笑するしかない。これが黄金の精神ってやつか……いや違うか。

「いやホント、マジでやめてね。フリでもなんでもなく。シヨシヤナが殺されるなんて嫌だからね」

「わかってます、しないでですよ。アルフィー様に迷惑がかかることなんて私しませんから」

「じゃなくってさ。シヨシヤナが殺されるなんて普通に怖いからやめてって話なんだけど」

どうせ寿命に大差があるんだから、せめて逝くときは寿命であつてほしいんだよ。

素直にそう思えるくらいには、わたしだつてこの子には情があるんだ。毎日ストレートに愛をぶつけられてたらまあ、そりゃあね。

「アルフィー様が私を心配してくださいさつてる……!?!」
「そこ泣くところじゃないでしょ!?!」

ダメだこいつ……早くなんとかしないと……。

これでこの子大丈夫かなあ……。情報網の構築もある程度できたことだし、わたしこのあとしばらくアメリカ大陸に帰省する予定なんだけどな……。

20. 帰省

わたしがしばらく帰省すると告げたら、案の定シヨシヤナはついていくと即答した。

だけど現状、ルブルム商会は成長著しいとはいえまだ新興勢力の域を出ていない。経営陣は育ちきっておらず、そもそも人数もあまり足りてないのが現状だ。

ついでに言うなら、パソコンやら携帯電話やらの文明の利器がないこの時代でモノを言うのはマンパワーだ。一人いなくなるだけで生じるロスは二十一世紀の比じゃあない。

というわけで、わたしの返答は却下だったんだけど。そしたら彼女、号泣しながら留守を守ると宣言すると共に、近い将来絶対に商会を盤石にして会頭を辞めると力強く断言した。

なんとなくそうなるような気はしてたけど、まったくわたしのどこがそんなにいいんだか……。

それにしても、思えばシヨシヤナを拾ってから今日まで彼女と離れたことがなかった。それを思うと、彼女の反応は親離れできない雛鳥みたいなものなのかも。

だとしたら、わたしは育ての親としてちゃんと親離れできるようにしなきゃ。そう思って、心を鬼にして留守は任せることにした。

そう、わたしは今回アメリカ大陸に戻る。その間カーズ様の下から離れることになるわけで、当たり前だけど彼がそれを許すはずがない。

だからこそ、ルブルム商会だ。これが機能するようになった今、わたしが今までやってきた仕事のほとんどは彼らで代行できる。そう説明して、実演して見せたらちゃんと許可も降りた。ノルマをこなしてるうちは、カーズ様は寛大なのだ。

「人間も少しは役に立つようだな」

ただ、そう言ってたのがとても不穏でしたけどね！

さてそんなわけで、わたしはアメリカ大陸に戻ってきた。道中は身体のスベックにモノを言わせて全力でやってきたから、エジプトから

陸路（ちよつと空路込み）でアメリカまで二ヶ月弱でたどり着くという頭悪い記録を叩き出した。

なお、そのうち約一か月は北極圏の凍結待ちなので、実質五十日程度の到着だ。我ながらどうかしてる。

まあ、そこから目的地までまだあるんですけどね。何せ行き先はメキシコ周辺なので。

そう、メキシコ周辺。つまりはサンタナがいるところだね。当たり前だ。今回の帰省はサンタナに会うことが主な目的なんだから。

理由はもちろん、人手不足の解消のためにサンタナを迎えに行くこと。ただ、カーズ様は「え、こないだのあれ本気だったの？」って顔してたし、実際ほぼそのままのセリフを言った。エシデイシも興味なさそうだったしなあ……。

ワムウはさすがに同年代だからか、わりと嬉しそうにしてたのがあまりにも対照的で……なんというかあの二人、つくづくサンタナへの当たりが厳しいのホントなんだろうね。

仕方ないから、連れて帰らずとも久しぶりに会いたいからって言うたら、呆れられた。解せぬ。

そうまでして会いたい相手かとカーズ様には言われたんだけど、いやわりと会いたいです。どうもわたしは、自分で思ってた以上にサンタナに愛着があるらしい。

前世じゃあ好きなキャラの上位にいたわけでもないのに、なんでだろうね？ 育児を担当したからなのかなあ。それとも、カーズ様に虐げられてるところにある種の親近感でも持つてるのか……。

ともあれそういうわけで、サンタナに会うためにアメリカまで来たけど……久々に足を踏み入れた北アメリカの大地は、記憶にある景色とさほど変化がなかった。

とはいえこれは、当たり前とも言える。何せアメリカ大陸では、ユーラシア大陸のものと同じタイプの文明は発生しなかったんだからね。

正確に言えばインカとかアステカとか、中南米には王権を擁する文明が生じるけど、それはまだかなり先のことだ。何より、北米にはそ

ういうものがついぞ興らなかつたんだから、景色がさほど変わらないのも当たり前なのだ。

それでも人間はいる。いわゆるネイティブアメリカンと呼ばれる人々……の、祖先たちだ。自然と共に生き、死ぬ人々の営みは、文明によって劇的に、そして現在進行形で変わるユーラシア大陸に慣れた身にはすごく穏やかに見える。ここは時間が緩やかだ。

もちろん、自然がそんなに優しいものじゃあないってことは、わかっているつもりだけど。

そんな北米大陸を抜けて、メキシコ。そのユカタン半島の根元からまっすぐ西に行った辺りの台地の上にそびえ立つ建物が、わたしの目指す場所だ。つまるところ、スツピーがスト様に殺されかけたあの遺跡だね。

原作だと管理するものがいなくなつてかなり経つてたからか、色が落ちてあちこち朽ちていたけど今は真逆。装飾はおろか彩色まで残つた外観はとても美しいし、すべて健在な外観はとても大きく……いや待って？

ガチに原作で見たやつより大規模かつ豪華な気がする……ここつてこんなに大きかつたっけ？ なんなら最後に見たときより大きくなつてる気がするんだけど……あつれー？

わたしの記憶違いかなあ……？ うーん、柱の一族でもド忘れつてあるんだね。

まあそれはそれとして、すごく歴史的に価値がありそうな外観ではある。ということで、時間に余裕があつたらあとでスケッチしたいところ。

そう思いながら入り口付近に飛んできたわたしは、その周辺で掃除をしていたらしい子供たちを見つけて驚く。

なんとまあ、ここに人が住んでるのか。

いやでも、確か原作でもミイラとかが出てきてたっけ。それならここは、全盛期の今は集落としても機能してるのかもしれない。

それっぽい結論を自分の中で勝手に出して、わたしは着陸する。すると当然、そこにいた子供たちが一斉に驚いた顔を向けてきた。

そりやあそうだろうね……って言いたいところだけど、実のところ驚いたのはわたしも一緒だ。

いやだつて、この距離まで近づいたらさすがに違いがわかる。この子たち、人間じゃあないぞ！

だとしたらつまり、吸血鬼つてことになるけど……それだけならまあ、別にそこまでおかしくはない。サンタナにとって彼らは食料、かつ奉仕種族みたいなものだろうから。

けど何よりおかしいのは、今が昼間で、太陽が普通に照っているつてことだ。それはありえないはずんだけど……。

「こんにちは。今、サンタナいる？ アルフィーが来たつて伝えてもらえないかなあ」

とりあえず黙つても仕方ない。羽をしまいながらそう告げたところ、目の前の子供たちは「なんだこいつ」「通していいのか？」と相談し始めた。

なんだろうこれ、吸血鬼の割にはずいぶん人間の子供っぽい態度だなあ。話がまとまらずわちゃわちゃしてるところなんて、完全にただの子供だ。いや、子供の吸血鬼とかあり得るのかつていう疑問はさておきね。

うーん、これどうすればいいんだろう。押し通つてもいいけど、それだと誤解を生むよなあ……と思つていたら、

「姉さん!? どうしてここに!」

普通にわたしを察知したらしいサンタナがやってきた。屋外にまでは出てこないのは、太陽が出てるから仕方ないとして。

彼の登場に、子供たちが一齐に彼の名前を呼びながら彼に群がる。それはさながら、遊園地で着ぐるみに殺到する子供たちみたいで……。

サンタナに笑いかけながら手を振ろうとしていたわたしは、殺されるぞと思つて思わず顔を引きつらせた。だけど……。

「ええい邪魔だ、控えている!」

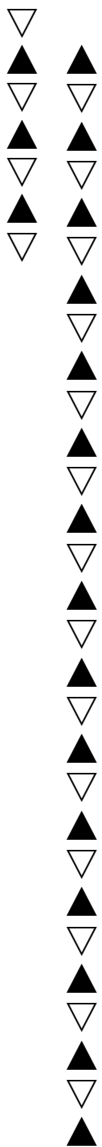
驚くことに、サンタナはそう恫喝はしたものの特に手を出すことも、吸収することもなく、ただどかすだけに留めたのだ。

そして言われた子供たちも、幼さゆえの緩さはあるものの、「はい」と了承を返してその場に腰を下ろす。

え………っ？

いや、ええ!?

ちよつとちよつと、この二千年の間に何があつたサンタナあ!?



「久しぶりだな、姉さん。元気そうで何よりだ」

「……サンタナもね。安心したよ」

立ち話もなんだつてことで奥のパーティ会場みたいなところに案内されたわたしは、豪華な机（サンタナ作）に着いていた。机の上には美しい細工が施された諸々の食器（すべてサンタナ作）が並んでいて、それぞれに豊かな自然の恵みが絶妙な具合に調理されて配されている。

そしてお互いの横には数人の吸血鬼が控えていて、ベテランの給仕さながらに甲斐甲斐しくそして勤勉に動いている。

「あ、ありがとね」

その中の一人から差し出された立派な杯（サンタナ作）を受け取ってみれば、そこには琥珀色の液体が満たされている……。

………つていやいや！ なんなのこれ!? ホントなんなの!?

この時期のサンタナ（というか柱の男全般）がどこで何をしていたかは原作で何も描写がなかったけど、マジで何がどうなってるの!?

ものすごく文化的というか、文明的というか、ナイフやフォークまであるし、なんならお箸まであるんですけど、確実にここだけローマ以上の文明度じゃあないの!?

「どうだい姉さん、その酒は。昔、姉さんが言っていたことを実践してみた結果なんだが」

「えっ、あ、う、うん………おいしい、よ?」

………お酒には明るくないけどこれはわかる、バーボンだこれ!!

嘘でしょ紀元前のメキシコでバーボン作ってるのこの子……!?

「ていうか、え？ サンタナ、そんな昔にわたしがちよつとだけした話からこれ作ったの？」

「？ 作り方は姉さんが教えてくれたんじゃあないか」

「いや、それはそうなんだけど、にしてもちよつとした合間の休憩の数分で終わったような曖昧な説明だったはずだし、そもそもサンタナには作る必要がないじゃない？」

「暇つぶしにやってみたらできただけのことだ」

「ええ……」

やだ何この子、天才なの？ 天才技術者？ いくらわたしたちが種族柄ハイスペックだからって、そんな……ああいや、ハイスペック種族に暇と知識を与えたらこうなるのかな……。

そう考えながら、とりあえずバーボン（サンタナ作）を改めて口に含む。アルコールは感じるけど、酔いを覚えるような感覚はゼロ。うーん、これじゃあお酒の楽しさが半減だぞ。

そう思いながらも味だけはと口の中で転がしていたら、

「それに、こいつらにも娯楽は必要だったからな」

再びサンタナが爆弾をぶち込んできた。思わずバーボンを嘔き出しそうになったよ。

いやもう、もう！

ホントなんなの君！ どうしちゃったの!?

なんか穏やかな微笑み浮かべてイケメン度増してる気がするし、その態度で乃村ボイスはズルすぎるぞ！

おまけに周りの吸血鬼たちも、尊敬どころか信仰すら感じさせる眼差しを向けてるんだけど!?

ホントもう、この二千年の間に何があったんだよお!?

21. バタフライエフェクトLv100 上

「……えっと、サンタナ？ その、この二千年の間に何があったの？」
なんていうか、考えてることがそっくりそのまま口に出た。いやでも、これ以外に言いようがないんだもん、しようがないじゃない。
そんな益体もないことを考えてたら、サンタナはふっとほほ笑んできた。

「色々あった……と言うのは陳腐だが、そう、色々あったのだ。長い話になるだろうから……あとで姉さんの部屋に入れてくれ」

「……わかった。あとでね」

わたしの部屋……つまりスタンド空間のことかな。

ふむ、そこで話したいってことはもしかして、ここにいる吸血鬼たちには言えない事情がある？

だとすると、今の態度も作ってるものだったりするのかも。うん、もしかしてあんま変わってないかもしれない。

それなら……それまでは、この食事を堪能するとしよっかな。せつかく出してもらったんだし、素直に楽しめるならそのほうがいいに決まってるよね。

……えーっと、このお肉はなんなんだろう。黒みがかった茶色いソースがかかってて、ステーキみたいなの雰囲気だけ。

うーん、アメリカ大陸には二十一世紀に主要な食肉となる生き物がいないはずなんだけどな。全然想像がつかない……んん？

なんだか鶏肉みたいな食感。くさみもないし、普通に美味しい。あとこれ、このソース何？ 食べた感じなんだか照り焼きソースにかなり近いんだけど、まさかサンタナ醤油や砂糖まで再現を……!?

「……ねえサンタナ、これおいしんだけどなんのお肉？」

「ああ、姉さんの口にあってよかった。それはワニの肉だ。最初は俺と同じようにしようと考えたが、姉さんは昔から偏食だったからな。人間や吸血鬼よりこっちのほうがいいと思って」

なるほどなーと思ってたら、最後に付け加えられたセリフに思わず吹き出すかと思っただ。

うん、まあ、そうね。わたし、確かに人間は極力食べないようにしてる。なんならお釈迦様に諭されて以降は一度も食べてないまであるから、その配慮はとても嬉しいんだけど。

そんなことここで言ったら周りの人たちが怒るんじゃないかと思っただものの、特に何もなし。みんなそれが当たり前と言わんばかりにしてる。

え、待って？　ということは、サンタナの前に給されてるお肉って、まさか……。

いや、考えるのはよそう。これ以上考えるのはやめたほうがいいと思う。

「……そっかー、ワニかなるほどね。初めて食べたけどおいしいね……」

なんとかさそう答えたわたしに、サンタナは嬉しそうに頷いた。

直前の嫌な予感はさておき、ワニは普通に納得だ。恐竜より起源の古いワニはこの地域なら普通にいるだろうしね。鶏肉みたいな感じも、そういうえば前世でそんな話が聞いたことあったよ。

「このソースは？」

「それも昔姉さんに聞いた、テリヤキとやらの再現だ。うまく再現できているといいんだけど……」

「……うん、かなりイメージ通り、かな。おいしいよ、うん……」

「それはよかった。姉さんが喜んでくれて何より」

やっぱり照り焼きソースかい！

おかしいなー、大豆ってこの辺のものじゃあなかったと思うけどなー……！　これ何から作ってるんだろう……！

「シヨークとやらは、要は豆から作る発酵食品なんだろう？　それなら、と思って豆なら種類を問わず手当たり次第に集めて、片っ端から試したのさ」

「根気すごいなあ……」

「時間だけはあったからな。……ああそうだ、甘みは北から取り寄せた木の樹液を使っている。その分多くは作れないが」

「……えっ、もしかしてサトウカエデを北米から輸入してるの？　て、

手広いね？」

「おかげさまでな」

ふふふ、と笑うサンタナだけど。

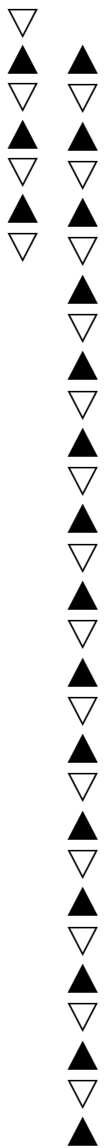
ちよつと待って、それもしかしなくても普通にある種の国じやない。なんなのサンタナ、なんでそんな内政チートモノの転生主人公みたいなムーブして……。

はっ!? ま、まさかとは思うけど、サンタナもわたしと同じ転生者だったりして!?

今までそんな兆候なかったけど、途中から意識が覚醒するパターンもあるし……そういう……!?

も、もしそうだったとしたら、わたしとしてはとても嬉しい。色んな意味で。

これはちよつと、聞くべきことが増えたぞ……!!



どうやって問いただすべきかと思いなながらも、食事は続く。

タイミングがはかれないのは、周りに人目があるのもそうなんだけど、サンタナからほこじやか繰り出される内政チートモノそのものな話題がびっくりすぎて、そっちについて聞いちゃうのが一番大きい。

何さ食用ワニの養殖場って。主要穀物用、兼酒用のトウモロコシ畑って。

品種改良? うっそでしよ。

水車小屋と連動した粉挽き機とか、紀元前の中米で作っていいものじゃあないでしょーが! いわんやローマ顔負けの水道施設をや!

いやはや、サンタナも成果を自慢したいみたいでお互いに打てば響く状態で会話が弾む弾む。こういう話するのがすごく久しぶりで、ツツコミつつも楽しんでる自分がいるのがよくわかる。

そしてそれを、周りにいる吸血鬼たちが讚える。いわくおかげでいい暮らしができて、毎日が充実している、神。などなど。

そして、そんな神に食べていただけるとは、彼らにとってこの上ない名誉らしい。吸血鬼になるということはすなわち神の食事になると同義で、このサンタナの城に上がるためにこの周辺地域の人はあれこれと頑張ってるんだとかなんとか。

……うーんなるほど。つまり……これは……ミノタウロスの皿ですねぇ!? 嫌な予感ってホント当たるなあ!

完全に家畜だぞそれ! どこぞの絶対巨人駆逐するマンが聞いたら全ギレ待ったなしなやつじゃん!

ま、まあ、それを喜んでる人たちにわたしがとやかく言うことはひとまずこの場ではないけど、さあ。人間として生きようと思ってるわたしには複雑な心境だ。

さらにわたしを困らせるのが、わたしまで神様扱いされてることだ。むしろサンタナより敬われてるまでである。

何せ彼らにとっての神であるサンタナが、わたしを姉と呼んで歓待してるのだ。おまけに彼の話題にずっとついていけている。そりゃあそうもなるのかもしれない。

でもわたしの頭なんてそんな大したものじゃあないので! というか、絶対この件に関してはサンタナのがすごいから! わたしの持つてる曖昧な知識だけでここまでできる自信なんてこれっぽっちもないし、たとえその手の知識を潤沢に持ってたとしてもできないと思う!!

ちなみにそんな神ことサンタナの最近のマイブームは、チョコレート作りらしい。カカオの加工が予想より難しくてまだ全然みたいだけど、だからこそやりがいがあると笑ってた。その顔には邪気がなくて、わたし何も言えなかったよ!

ただ、話を聞き続けて感じただけど、たぶんサンタナは転生者じゃない。何せ、彼がやらかしたことは全部わたしが昔彼に話したことがあるものばかりだからだ。このときばかりは記憶力がよくてほつとしてる。

んだけど……。

「姉さんが言っていた……」

が必ずどこかに挟まるせいで、お前はどこの天の道を行き総てを司る男なんだってツツコミたかったよね……。

まあそれはともかく。要するに、彼はわたしがちよくちよく話してたことを全部覚えてて、カーズ様がいないのをいいことに試し続けるんだ。好奇心の赴くままに。

……うん……なんていうか、うん……。

つまり、わたしのせい……！ 圧倒的に原因はわたし……！

さしずめわたしは神話学で言うところの文化英雄ってか！ ハッ！ 笑えない！

いやでも、まさかこんなことになるなんて思わないじゃん!? 昔何気なく言ってたことがこんな形で返ってくるなんて、そんなの思わないじゃん!?

これがバタフライエフェクト……ううう、ちようちよがふきとばしとぎんいろのかぜとようせいのかぜとたつまきを同時に使ってるのが見える……！

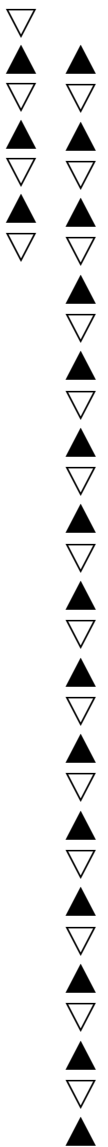
宴が終わる頃には、わたしは普段とは異なる精神的ダメージで吐きそうだった。なんていうかもう、ホントこれ以上は勘弁して……。

「では姉さん、本題に入りたいんだが」

「……ああ、うん、そうね。うん。そうだね。じゃあ行くよ……」

そうでしたね！ まだ話は終わってませんでしたね！

かくしてわたしは泣きそうになるのをこらえながら、サンタナと自分に順次「スターシップ」を撃ち込んだのだった。



「……また随分とものが増えたんだな」

「そりやまあ、色んなところいっぱい見て回ったからねえ」

「姉さんが楽しそうで何よりだ」

スタンド空間に収められたあれこれを眺めたサンタナが、楽しそうに言う。

視線はあつちこつちを動き回っていて、非常に興味深そうでもあ
る。彼はやつぱり、こつち方面の人なんだろう。

でもそういう話はあとにしたい。ひとまず椅子を勧めて、向かい合
う形で座り合う。

「……それで？ 一体何があつたの？」

「ああ。正直、俺もこうなるとは思っていたわけではないのだが」
「？」

「すべてのきつかけは、姉さんがもし時間が余るならと任せてくれた
吸血鬼の調査だ」

「うん？ それがなんでこんなことに……」

「同感だ。順を追って話そう。俺は姉さんたちが発つてから、早速時
間を持て余した。だから姉さんの言う通り、吸血鬼の調査に乗り出し
たのだが……これがなかなかうまくいかなくてな」

肩をすくめるサンタナいわく。

彼は最初、力づくで吸血鬼を作つては強引に実験を繰り返してたら
しい。

まあそれはある意味既定路線だ。彼だつて戦闘力は低くても柱の
男なんだから、人間なんて相手にならないし吸血鬼だつてそうだもん
ね。カーズ様の教育方針がそういう方向だったから、そういうやり方
をする子に育つたのだ。

でもそれだと、なかなか調査が進まなくなった。みんな死に物狂い
で抵抗するからだんだん面倒になるし、なんなら研究中に押し入つて
くることもままあつたとか。深い思考を必要とするときにそんなこ
とされたら、まあ腹も立つ。おかげでイライラも募る、と。

そんな生活を五百年ほど続けたサンタナは、あるとき方針の転換を
決意したという。

「姉さんも昔から言っていただろう。行き詰つた時は発想を切り替え
るんだと。逆に考えるんだ、と」

「……うん、まあ、うん。言つたね」

「ごめんねジョースター卿！ 二千年以上先取りしたことになつ
ちやつたよ！」

「だから俺も逆に考えてみた。強引にやるから反発されるのではないかと。だから、やり方を変えた。連中のほうから率先して首を差し出すようにしむけることにした。その結果が、この王国だ」

ここからそれを見ることはできないけど、ともあれサンタナはそう言いながら見せつけるように腕を開いた。

そしてその説明に、わたしはなるほどと思う。

ようやく腑に落ちた。わたしは食事の席で、控える吸血鬼たちや人間の話を聞いて家畜だと思ったけど、まさにその通りだったわけだ。

サンタナは、人間を家畜化した。自分の食料に、あるいは実験材料になることが名誉だと思うように育て上げた。そういうシステムを組み上げたのだ。

「この地に俺の王国ができて、千年ほどになる。こうやって手なずけてみれば、人間もなかなかかわいいものだと思うようになった。姉さんが何かと気にかけるのも理解できたよ」

いや、わたしはそういうつもりで人間を気にしてるわけじゃあないんだけども。

でも見方を変えればわたしも似たようなものかもしれない。わたしにそんなつもりはなくても、そう思う人も出てくるかもしれない。

にしても、千年かあ……。人間の歴史としてはとても長い時間だ。それだけの間、この周辺に住む人たちは一人の男を神として崇め、その庇護の下で平和を謳歌しているのか。それは……。

……ああでも、わたしが見たのはこのサンタナの城だけだ。それだけで答えを決めるのは、さすがに早いな。もつと見てからでも遅くはないだろう。

だからわたしは、のどまで出かかった言葉を飲み込んだ。そして、やけに誇らしげな様子の弟分に、改めて声をかける。

「がんばったんだね、サンタナ。たった一人でここまでできるなんて、本当にすごいよ」

「……ああ！ 姉さんなら、わかってくれると思ってたぞ！」

返ってきたのは……原作でも、そして今までの人生でも見たことのない、とてもいい笑顔だった。

2.2. バタフライエフェクトLv100 下

それからしばらく、わたしたちはユーラシア大陸の文明について盛り上がった。

こつちの大陸とは異なる文化や、そこで作られたものはやっぱりサントナにとつては興味深いものみたいで、あれやこれやと品を変えて見せながら話すとても楽しそうなのだ。

特にサントナの目を引いたのは、青銅器と鉄器だ。前世と同じくこつちの大陸では金属関係の技術が発達してないみたいで、興味津々だったね。金属器は多種多様な道具にできるうえに、石器よりも頑丈だ。その用途の広さに感じ入ってたよ。

いやー、あつちのものを色々とお土産として持ってきて正解だ。こういうこと話せる相手がいるって楽しいなあ！

あとは、描きためてきたスケッチもここで大活躍した。ローマの街並みやそこに繋がる道路、水道橋、あるいはエジプトのピラミッド（わたしが初めて見たときまだ化粧石が健在だった！）、スフィンクスみたいな建造物の絵を見せながら色々話したんだけど、特にピラミッドはやっぱり彼も驚いていた。万里の長城なんかもそうで、この辺りはわたしも改めて人類ってすごいなって思ったところだ。

そしてある程度距離が離れてかなり性質の違う文明が複数鼎立しているあつちの状態については、主に国を動かすものとして気になつたみたい。

確かに、この大陸でも中南米にはアステカやマヤ、ナスカ、あるいはインカと言った文明が国を作る。今後はそういう、考え方も文化も異なる国と色んな形で接触する機会もかなり増えてくるだろうし、その辺りは参考にしたいって言ってた。

これに付随して孫子の写しを渡したんだけど、これが一番喜ばれたかもしれない。これはさすが、人類史に通底する兵法書ってところかな？

そうやって盛り上がって、一体どれだけの時間が経ったことやら。時計がないからよくわからないけど、ともあれ文明談義が一段落した

ころ。

「……そういえば、姉さんはどうしてこっちに戻ってきたんだ？」
会話の切れ目に、何気なくって感じでサンタナが問うてきた。

「うん、久しぶりにサンタナに会いたくて」

「……そうか。そうか」

そしたら、少し照れたように笑った。うーん、カーズ様たちだところはいかない。

「一応他の用事もなくはないんだけどね」

「そうなのか？」

「うん。ちよつと人手が足りないから、サンタナにもあっち行ってほしいなって話んだけど……」

「……聞こう」

わたしの言葉に、サンタナは腕と足を組んだ。

顔から笑みは消えていて、何だか身構えるような雰囲気。

えっ、そんな警戒されるようなことかなこれ？

「えーと、確かこの辺に写しを……あ、あつたあつた。ね、サンタナ、これ」

「このスケッチは……まさか、エイジャの赤石が見つかったのか？」

「うん。……って言っても、まだみんな目で見たわけじゃあないんだけど」

手渡したのは、アルキメデスの家から拝借してきた例のスケッチ。色までしっかりついてるから、サンタナもすぐに理解したみたいだ。

そんな彼に視線で続きを促されて、わたしは口を開く。

「ただ、場所がはつきりとわかってないんだよね。最初持ってた人は強奪されて、そこからあっちこっちを人伝いに動き続けてるみたいで。今はみんなでそれを追ってるんだけど何分範囲が広がってねえ」

「なるほど、それで俺もということか」

「うん、そう……なんだけど……」

「……？ 構わない、言ってくれ姉さん」

「あ、うん……その、カーズ様は、費用対効果に見合わないから別にいいって言うんだよ」

「……あの方はそういう方だろう」

そう言いつつも、サンタナの表情は渋い。

やっぱり彼も、カーズ様には思うところがあるんだろうなあ。

「そうなんだけどき。それでもやっぱりひどいよ。だからね、わたし逆に会いに行こうと思って」

「……ふっ、なんだそれは。カーズ様に逆らったと?」

「そこまではしてないよ。ただ、わたしがいなくても情報が集まるようにしただけ。カーズ様、ノルマをこなしてるうちはあんまり大きく言つてこないからね」

「その辺りはさすがというか……器用だな、姉さんは」

「ま……まーね!」

実際のところは半分くらい成り行きなんだけど、せつかく褒めてくれてるんだしちよつと見栄を張っちゃうわたしだ。

「と……とにかく、そんなわけでき。サンタナもあっち行かない?

色々話した通り、あっちは色んな文明があるから見て回るのも楽しいだろうし」

ところがそう提案したところ、サンタナの表情は渋いを通り越して険しくなった。

え……えーつと、あれー? なんで? どうして?

「……なあ姉さん……」

「な、なあに?」

「つまりもう間もなく、石仮面を完成させられるところまで行つていると見たが。それでカーズ様はどうするのだろうな?」

「え? ど、どうつて……あの人の目的は太陽を克服することだから……」

「いや、俺が聞きたいのはそのあとだ」

「そのあと」

思わずオウム返しに問うたわたしに、サンタナが重々しく頷く。

彼はそのまま、天井を仰ぎながら言葉を続けた。

「カーズ様は太陽を克服し、究極の生命体になろうとしている。だがそのあと、何をやるのだろう? 俺の知る限りでは、世界を支配する

と聞いているが」

「あー……うん……そう、だねえ。たぶんそうだと思うよ。昔一族を出たときもそんなようなこと言ってたし……」

原作でも、究極生命体になったあとの目的は「自分の思うがままの世界を創造してゆくこと」って書いてあったし……。

「……だとすると、俺たちはどうなる？ 俺たちも、完成した石仮面を使わせてもらえるのか？」

「え。え……あー、あーあー、それを言われると……」

素直に領けないなあ。何せあのカーズ様だ。最後の最後で捨て石として切られる可能性は否定できないぞ。

特に原作で完全にその他大勢扱いだったサンタナはその可能性が高いだろうし、わたしにしてもどこまで信用されてるかわからない。

エシデイシは……まあ昔からのカーズ様の同好の士だし、ワムウも二人にとって自慢の弟子みたいなものだろうから、使わせてもらえるだろうけど……。

「だろう。そしてもう一つ聞くんだが……姉さん。カーズ様は、俺の作った王国を見てどう思うだろうな？」

「……」

人間を家畜にした世界を見てどう思う、か……。

超効率主義なあの人のことだから、たぶんありよう自体は肯定すると思う……けど。

「……乗っ取られる可能性が高いんじゃないかなあ」

ゼロからシステムを構築するより、既にあるものをそのまま使ったほうが早い。

そして何度も言うけど、カーズ様は超効率主義者だ。今まで歯牙にもかけてなかったサンタナが作り上げたものなら、躊躇せず没収してもおかしくない。

「だろうな……俺も同意見だ……」

そう告げたところ、サンタナは深いため息をついた。

……えっと。

あれ？ もしかしてだけ……サンタナ、あなた……。

「……姉さん」

「うん」

「姉さん、俺はな。今までずっとカーズ様たちに虐げられてきた。無能とさげすまれ、こちらに置いて行かれた。そう思っている。確信と
してな。」

そんな俺を見ていてくれたのは姉さんだけだ……。姉さんだけは俺の技術を褒めてくれた。それを誇つていいのだと言ってくれた。俺にも長所はあるのだと、教えてくれた。

そんな姉さんにだから……。言うのだが。俺は——これ以上カーズ様には従いたくない」

静かに、だけどはつきりと告げたサンタナに、わたしは思わず生唾を呑んだ。

彼が言葉を続ける。気分が高ぶつて来たのか立ち上がって、腕を振りかざしながら。

「俺はこの地に、俺の国を作った。ここでは俺は誰よりも偉く、誰よりも優れていて、誰よりも勝^{まさ}つている！　ここは俺を崇める、俺だけの、俺のための国だ！　今さらこの地を明け渡してたまるものかッ！」

自分の目が大きく開いたのがわかった。心の底からと思えるほどの叫びが、びりびりと身体を揺らすのがわかる。

サンタナがまさかここまでカーズ様に反抗心を露わにするなんて、原作を知ってる身としては信じられない。

視線を合わせる。彼の瞳は……。まったく揺らいでいなかった。

本気だ。彼は本気なんだ。そのまなざしの力強さに、わたしはそう確信するしかなかった。

なんてことだ。今までわたし、この地域の変貌っぷりをバタフライエフェクトだつて思ってたけど……。これに比べたら、あんなの大したことない！

まさか、まさかあのサンタナが！　カーズ様に反旗を翻そうとするなんて！　ただ未来の知識を断片的に話ただけでこんなことになるなんて、これこそがバタフライエフェクトだッ！

そして……。わたしは。彼の言葉を聞いて、わたしは。

「……サンタナ、あなた……」

口端が、くいつと持ち上がったのがわかった。

同時に冷や汗がこめかみを滑り落ちる。

「……応援するよ」

「姉さん……!」

少し。少しだけ、目指すところは違うけど。

それでもサンタナの目指すところは、わたしの目指すところに限りなく近い。

だから、きつと。サンタナとなら、手を取れるんじゃないか。一緒に生きていけるんじゃないか。

意見の相違もあるかもしれないけど……でも、それをときにぶつけあつて、その中間を探す行為は……人間のそれじゃあないか。

そう……思った。思えた。あるいは、思ってしまったのか。

「今はまだできないけど。でも……もう少し時間が経ったら。わたしも協力するよ」

「姉さん？　姉さんまで俺に付き合う必要は」

「ううん、そんなことない。だって……わたしは人間の作る歴史を見ていたいから」

「!」

「カーズ様は、たぶんそれを認めない。だから……わたしも」

「姉さん……!」

「わっ?」

わたしの言葉を遮るようにして、サンタナの身体がわたしを抱き寄せた。そのまま彼の腕の中にすっぽり収まる。

普段のわたしならものすごく動揺しそうなことをされてるけど、でもなんだか不思議と頭は冷静だった。

昔、まだサンタナが子供だったころ、抱っこしたりしてたからかなあ。

そんなことをぼんやり脳裏に浮かべながら、彼の背中に手を伸ばす。

あー、サンタナ大きくなったなあ。手が手に届かないや。わたしは

小さいままだから、それは当たり前ではあるんだけど……本当に、なんだか感慨深いものがある。

そうやって、どれだけ二人で抱き合ってたかはちよつとわからない。

どちらからともなく離れたのはいいけど、お互いにちよつと……いやだいがあきまらずくて、とりあえずこれまたどちらからともなく視線を外す。

「……えーつと、まあその、そういうわけだから、わたしはサンタナの味方だよ。うん」

「ありがとう姉さん……姉さんが味方してくれるなら百人力だ」

「しばらくはまたあっちの大陸に行くことになるけど……いつも通りならわたしが最初に寝て最初に起きるだろうから、そのときに、また」

「ああ、そこが節目だな」

「それまで、赤石がカーズ様の手に渡らないようにしないとね」

「ククク……そうだな、その通りだ」

そうしてわたしたちは、これまたどちらからともなく笑い合う。まるで越後屋と悪代官みたいなやり取りだ。

かくしてわたしは、思いがけないところで思いがけない共犯者を見つけたのだった。

2.3. サンタナの吸血鬼レポート

・吸血鬼の定義

石仮面により我々に近い生態と能力を獲得した人間を、吸血鬼と定義する。以下、特記しない限り吸血鬼はそれを指すものとする。

・吸血鬼の特徴

A. 犬歯を中心としたいくつかの歯に若干の伸長が見られる。特に深い意味はないと思われる。

B. 他者の体液を吸収することで自身の栄養とする。この行為は接触してさえいればどこからでも可能だが、固定観念により口からしか行えない個体もいる。

対象となる体液はなんでも良いが、血液が最もエネルギー効率が良い。限定的だが、妊婦の母乳はこれに匹敵するか場合によっては凌駕する。

C. Bを行うことで肉体は常に全盛期を維持する。外的な要因による病気や感染症などにも罹患しない。

ただし、精神的な疾患や先天的な疾患に関しては例外である。先天的なものについては一部治癒する症例もあるため、こちらについては調査を続行する。

この他、幼体に関してもこの限りではない。幼体を吸血鬼とした場合は、生物としての全盛期ではなくそのときの年齢で固定される。これは、まだ生物としての全盛期を迎えていない個体は、生態としての遺伝子がその状態を現状の全盛期として認識したまま固定されるからと推測される。

D. Cとやや重複するが、ほぼ不死身の肉体を持つ。怪我はするが、脳さえ無事であればどの部位も復元が可能。

ただし我々と異なりその効率は悪いが、その個体と適合し得る肉体を用意することで効率よく行うことが可能。

例外は頭部を破壊された場合で、このときは死亡する。

E. Bに伴い、吸血した対象に自身の体液を注入することで対象を隷属下に置くことができる。ただしこの行為は任意であり、吸血のみ

にとどめることも可能。

またこの処置を施されたものは限りなく自我を低減させられることに加え、肉体の生命活動が極限まで低下する。このため、人間の価値観で言えば「生ける屍」と称される状態に陥る。

F・人間の数倍の身体能力を持つ。これは個体差が激しいうえ、能力ごとにもばらつきが大きい。そのため厳密な数値は個体ごとに見るべきものとなる。

現状では、およそ二倍〜十倍の範囲で収まっている。

G・肉体を操作する能力を持つことがある。ただしこれはあくまで技術であり、これは上記までのものとは厳密には異なる。各個体が意図して身につけようとしなければ身につかないものであり、我々で言うところの「流法」に相当するものと見なせる。

現状確認できたものは、眼球より行う体液の射出、自身の血液の物理的な操作など。

H・日光に極めて脆弱である。触れただけで当該箇所が灰化するほどであり、全身を焼かれた場合はほとんど間を置かず死滅する。

また、吸血鬼化してもこの弱点を認知することはない。このため、吸血鬼とはあくまで後天的な生物であると言える。

I・上記の特徴から、吸血鬼は理論上はほぼ不老不死である。ただし、多くの個体は一定以上生きるとこの特徴を持って余すようになり、最終的に自ら死を選ぶ。この境地に達する目安はなく、完全に個体差である。

生を諦めない個体は生き続けるが、そこに限界があるかどうかは不明。

現在、自死を選んだ個体の寿命は確認できている最短は百年ほど、最長は八百年ほどである。

・特殊環境下における吸血鬼の実験記録

以下に、様々な状況での吸血鬼化がどうなるかを実験した結果を記録する。

1・人間以外の吸血鬼化

哺乳類に限って可能。これは哺乳類の「幼体が哺乳によって成長を

行う」という特徴が、吸血鬼のそれに繋がるからと思われる。

この際人間同様に様々な能力の向上が確認できるが、現状では我々に及ぶ知能に至るものは確認できておらず、人間にも及ぶものではない。ただし、可能性はあるものと思われるため調査を続行する。

我々の食料と見た場合、人間ほどではないが栄養価が増大するため、そういう観点では有用である。

2. 幼体の吸血鬼化

一定以上の年齢であれば可能。逆に言えば、極端に幼い幼体を吸血鬼化することは不可能である。

これは恐らく、幼すぎる肉体では石仮面の力に耐えられないからと思われる。

なお、可否の目安は生殖機能が充実し始める時期である。

3. 吸血鬼化に我々の血を使用

若干だが日光への耐性が見られるなど、全体的に性能の高い吸血鬼となる。

食用としてもこちらのほうが質が良い。

4. 吸血鬼の生殖行動

吸血鬼の親と人間の親：吸血鬼の特徴は一切遺伝しない。ただし、稀に親から受け継いだ遺伝的形質が成長過程で入れ替わることがある。原因は現状不明。

吸血鬼の親同士：吸血鬼の特徴は、Aを除き一切遺伝しない。ただし、知能に関してのみ最初から高度なものを持つ個体が現れることがある。それも初期値が高いだけで、最終的な到達点は人間と大差ない。

また、吸血鬼の親と人間の親の間に生まれた子供と同様、稀に親から受け継いだ遺伝的形質が成長過程で入れ替わることがある。

人間の妊婦を吸血鬼化した場合：特殊な変化が生じるため、別項目を設けてそこで説明する。

5. 一度吸血鬼化したものへの石仮面の再使用

特に変化なし。

ただし、エイジヤの赤石を用いる完成した石仮面を使用した場合ど

うなるかは現状不明。

また、Cの状況における妊婦に対しては効果がみられる。この詳細は当該の項目で説明する。

・半吸血鬼の定義

先述の通り、妊婦を吸血鬼化する場合には特殊な変化が起こる。具体的には、吸血鬼の特徴がある程度遺伝する（この表現は厳密には正しくないが、わかりやすくするためこう表現する）

ただし必ずしもこの変化が起こるわけではなく、どうやら妊娠中期に入る少し前の段階で行うと遺伝すると思われる。

仮説だが、これは恐らく石仮面の効果がある程度及ぶほど胎児が成長しており、かつ母体とは別個体という認識が完全にはなされていない時期がこの時期に当たるからではないかと思われる。

以下、この吸血鬼の特徴を受け継いで生まれる個体を半吸血鬼と定義する。

半吸血鬼が発現する特徴は個体ごとに異なる。また、その程度も個体ごとに異なる。ただし、一部共通する特徴もある。

・半吸血鬼の特徴

基本的には吸血鬼のものと同様だが、一部異なる部分もある。基本的には人間と吸血鬼の中間くらいの特徴を持ち、全体的に人間以上吸血鬼未満と言ったところ。

吸血鬼とは異なる特徴は以下の通り。

- a. 歯に特に変化はない。人間のものと変わらない。
- b. 吸血鬼ほど柔軟に体液を吸収できず、口でしか摂取できない。ただし、それによって吸血鬼同様に栄養を確保できる。
- c. bを行っても成長・老化する。外的要因による病気や感染症などは、罹患するものとそうでないものがある。

逆に、吸血鬼が発症するもので半吸血鬼が発症しないものは今のところ存在しない。

- d. 人間よりは頑丈な肉体だが、吸血鬼よりは脆弱。切り傷や打撲、骨折程度は早期に回復するが、部位欠損が回復することはないし一度切断された部位同士が簡単にくっつくこともない。

また、その適合し得る肉体を用意しても効率よく回復することはできない。失血死も起こり得る。

e. Eに該当する行為は不可能。

ただし、半吸血鬼がEを施されても生ける屍と化すことはなく、逆にそれを吸収して一時的に強化する。

f. 身体能力は人間より少し強い程度。個体差が激しいうえ、能力ごとにもばらつきが大きい。ため厳密な数値は個体ごとに見るべきという点は変わらない。

現状では、およそ等倍〜三倍の範囲で収まっている。

g. 肉体を操作する能力は一切持たない。

h. 日光に対しては人間寄りであり、我々より日光に強い。人間よりは弱い。白化^{アルビノ}個体程度には日中の活動が可能。

i. 半吸血鬼は当然幼体として生まれるが、その成長は心身ともに人間より遅く、また寿命は人間より長い。

おおよそ人間の三倍の時間をかけて成体へとなり、最長でも二百歳ほどで死を迎える。寿命については、人間同様技術の進歩などで伸びる可能性が高いがその点は保留とする。

・特殊環境下における半吸血鬼の実験記録

以下に、様々な状況での半吸血鬼がどうなるかを実験した結果を記録する。

1. 半吸血鬼の吸血鬼化

問題なく可能。ただしこの場合、普通の吸血鬼と特に変わらない存在と化す。

このため、食料として考えた場合は費用対効果に見合わない。

2. 幼体の半吸血鬼の吸血鬼化

問題なく可能。吸血鬼と異なり、生まれたての幼体であっても吸血鬼化することができる。

幼体時の吸血鬼化による外見年齢の固定も変わりなく起こる。

3. 半吸血鬼の吸血鬼化に我々の血を使用

普通の人間を同様のプロセスで吸血鬼化するより、さらに全体的に性能の高い吸血鬼となる。

日光耐性に至っては半吸血鬼よりも弱くなるものの、吸血鬼や我々よりも高い耐性を依然として保持する。

食用としてもこちらのほうが質が格段に良い。

4. 吸血鬼の生殖行動

現在調査および実験中だが、半吸血鬼同士を交配させることでその特徴を保持した子供ができることがあるようだ。

今後代を重ねて行けば、人間という種の品種改良種として成立し得る可能性がある。

もしこれに成功すればより我が王国の力は増す上、この身より血を分け与えればさらに使い勝手のいい吸血鬼を量産可能となるだろう。

さらに調査と実験を重ね、より確かな成果としたい。

……………。

……………。



あのあと、サンタナから渡された研究レポートが冗談抜きで笑えない件について。

紙を持つ手が震える……………。

「……………え、サンタナこれ、……………ホントに?」

「そうだ。今俺の城に詰めている子供は大体が半吸血鬼だな。実験用に飼っている」

「へ、へえー……………、そ、そうなんだあ……………」

だ、誰がここまでやれと……………!

この凝り性め……………!

24. 神が住む山

恐ろしい研究は全力で見なかったことにしたわたしは、ひとまずしばらくの間サンタナの城に逗留しつつ、彼の国を見て回ることにした。

色々と気になるワードも多かったし、いずれ歴史になるこの地域の今も見ておきたかったからね。

というわけで夜はサンタナの案内を受けつつ、昼は自分の足であちこちを観光する形で過ごすことになる。

だけど、昼間外に出られないサンタナに代わってわたしのお世話係としてつけられた子が、当たり前のように半吸血鬼だったから見なかつたことにはできなかつた。息をするように彼女が人間じゃないことをあちこちで見せつけられたんだよね……。

「下界に行くには、ここから飛び降ります！」
「どう見ても崖な件」

その子、トナティウに連れられてやってきたのは、崖だった。普通にどこからどう見ても断崖絶壁で、これをどうしたら移動経路に設定できるのか。

いやうん、普通の人間が簡単には踏み込めない場所だからこそ、神として崇められるサンタナがいる価値があるんだらうけどさ……。これをなんかあるたびに登り降りするのは、ちよつと……。

江戸時代の城が軒並み平野に建てられているのは、それだけの理由がちゃんとあるんですよ！ 主に平時に毎日山を上り下りするのがしんどいって理由が！

「ここが一番安全なんですよ！ それではお先に失礼しまして……」
そうやってわたしがドン引いてるのをよそに、トナティウは無邪気にそこから飛び降りた。

「トナティウーっ!？」

慌てて顔を出して下を見れば、ちよつとした段差や取っ掛かりをうまくいこと使って落ちる速度を殺しながら、順調に降りているトナティウの姿が見えて……。

同時に、その身体から出ている人型の像サイジョンに、目を疑う。見たこともない花が五つ、その人型の周りを公転するかのように回っていて……うん、なるほど、あの子半吸血鬼でスタンド使いか！

やれやれ。ここでもスタンド使いは引かれ合うらしい。さすがにこつちの大陸で歴史上の偉人に会うことはないっぽいけど、だとしても毎度のことながら喜んでいいのか悪いのか。

「……とりあえず追いかけるかあ」

どんどん小さくなるトナティウの姿に、そう呟いて背中から翼を生やす。たぶんこの高さから落ちてでも死なないけど、わたしは紐なしバンジーをする趣味はないんだ。

「わあ!? さすがはサンタナ様のお姉様ですね!」

そうやって持ち上げられると普段なら調子に乗っちゃうわたしだけど、迂闊なことを言うところの地域の神話に名前を刻まれる可能性がある。今回ばかりは曖昧に笑い返すだけにとどめたのはかなりナイスな判断だったんじゃないかな！

そうして到着したふもとの集落では、まず神殿を見ることにした。遠目から見ても、見事な装飾や壁画が施された大きな建物は、歴史クラスタの心をくすぐるのだ。

「アルフィー様! こちらがサンタナ様を祀る神殿です!」

「うわあ、めっちゃ祈られてる……」

「サンタナ様は偉大な神様ですからね!」

ふふーん、と自分のことのように胸を張る(その胸は平坦であった)トナティウはさておき、サンタナは本当に崇められてるんだなっつてことがあちこち見たことでよくわかった。

人間はほとんどが台地の下に住んでて、サンタナや吸血鬼とは明確な線引きがされてるんだけど、彼らは毎朝夜が明けるとまずサンタナの城がある台地に向かって祈りを捧げる。夜闇から人々を守る神という扱いみたいで、無事に朝を迎えられたことを祈る儀式が毎日絶やすことなく行われてる。

わたしはこれを見学したわけなんだけど、決して広くはない神殿の中に老若男女が並んで、平坦ながらも確かな抑揚のある歌を奏でる様

はまさに宗教行事って感じがして興味深かった。

と同時に、改めて神様としてひざまずかれるのは性に合わないなとも思った。ちやほやされるのが嫌だとは言わないけど、やっぱり人間身の丈にあつた生活ってあるよね……。

「……わたしのことは、神様扱いたくないで適当にごまかしといて……」
「なんでですか？ サンタナ様のお姉様となれば当然神様じゃあないですか！」

「それはその、ホラ、アレだよ。神様だつてバレたら、普段の姿が見れないでしょ。わたしはありのままの姿が見たいだけだから……」

「な……なるほど！ さすが神様がたは冴えてらっしゃいますね！」

なんか、トナテイウの後ろにぶんぶん振られる尻尾が見えるのは気のせいなんだろうなあ……。

「ところで、あそこにある神殿とよく似たデザインの建物は？」

「はい？ あ、あれですか。アレはですね、食料を下賜するための神殿ですね！ 五日ごとに、吸血鬼の皆さんがあそこに食料を用意するんですよ！」

「ああ……あれベーシックインカム用の場所なのね……」

サンタナから聞いている。彼は自分の領土内ではすべての集落でこれをやってるらしい。有能か。

おまけにこの配給、先天的な障害だったり精神的な疾患を持っている人であっても区別なく行われるそう。この時代であれば、真っ先に排除されるだろう人々もサンタナは等しく取り上げ、自分の民として差別しない。

前世で何か大罪を犯したとか、神に嫌われたからとか、そんな迷信めいた差別を彼は許さない。だって障害がなんだろうと、食料とした場合のエネルギー効率や普通の人と変わらないもの。彼にとっては人間なんて、その程度の差しかないだろうね。

でも、人間にとってはそうはならない。どんな人間でも、サンタナの手が届く範囲にいれば生きていける。最低限の暮らしは保障される。つまり、ある意味で多様性が認められた社会として機能してるわけだ。

その上で、様々な道具や知識も与えている。それが人々の暮らしを豊かにしているんだから、

「サンタナ様は素晴らしい神様なのです!」

そりゃあ慈悲深い神様扱いも納得だ。祈られもするし、崇められもするよ。とりあえず、トナティウをよしよしして同意しておく。

「でもさ、サンタナは人間を食べるんだよ? それは怖くないの?」

「普通に死ぬならそう思うかもですけど、神様の血肉になれるなら怖くないです! それに、サンタナ様はそんなに頻繁に食事されるわけでもないですし!」

「そ、そっかあ」

他の人にも聞いてみたけど、みんな大体おんなじ感想だった。すごい、めっちゃ飼いや慣らししてる……。

ただ聞いた限り、ただ闇雲に名誉なことだっと思って思ってるだけでもないみたいだ。どうもサンタナ、食べるのは主に「長きに渡る神への奉仕、功績の大なる人間」……つまり年寄りを中心にしてるらしい。しかもときには食べることなく、吸血鬼として眷属にする。

となれば、人間なら懸念する殺されるという出来事も立派な慶事扱いになるわけで……よく考えてるよ、サンタナってば。

城のある台地なんて、そのまま「神が住む山」って呼ばれてるもんなあ。世界が違えばとんでもない信仰を稼いでる主神になってもおかしくないレベル。

そして彼に信仰を注ぐ人々の顔に、悲壮感はまったくない。二十一世紀の地球でも、これほど穏やかに暮らしてる人々が一体どれくらいいたことか。

なるほど、これはわたしがどうこう言うのは完全にお節介らしい。それが、わたしの結論となった。

確かにすべてを知っていれば、この人々は家畜の安寧を甘受するだけの存在に見えるかもしれない。だけど、彼らは幸せに日々を生きている。それを、部外者が違うって言うのはお門違いだね。中からそういう人が出てくるならまた話は別だろうけど。

というわけで、あちこち見て回って納得したわたしは、帰省を終え

てユーラシア大陸に戻ることにした。

「サンタナの国、堪能させてもらったよ。すごいね、直に見るとつくづくそう思う」

「姉さんにそう言ってもらえると、頑張った甲斐があったというものだ」

サンタナが笑う。この間、決心を固めたからか今まで以上に表情が柔らかい。おかげで原作の彼と比べると別人感がすごい。

「次に会うのは、たぶん休眠期が明けてからになるだろうから……二千年くらい先かな」

「そうなりそうだな。俺がいない間、この国が保てばいいが……」

「それは難しいんじゃないかな。人間の作る国が、二千年以上続いたって話はわたし知らないもの」

地域の歴史として数千年以上続くところはあるけど、一つの王朝が大過なく千年、二千年続いたことなんて前世でも聞いたことがない。

強いて言えば日本はそれに当たるかもだけど、それにしたって単に天皇家が続いてるっただけで、統治機構として考えれば他の国と大差ないもんね。そもそも、実在を確実視されてない人もいるし。

「……そのときはそのときだ。できる限りの備えはしておくが……」
「だよねえ……」

これについては本当にどうしようもないから、運否天賦に任せるしかないと思う。

まあでも、千五百年後くらいに、ユーラシア大陸からコンキスタドールが来ることくらいは教えといてもいいんじゃないだろうか。サンタナとしても、遠方から来た人コロンブス間を自分と同類と誤認されるのは業腹だろうし。

「ふむ、確かに技術が進めばそれもあり得るか。なるほど。考えることが増えたが、備えられることを考えれば朗報とも言える。感謝するぞ姉さん」

「えへへ、どういたしまして」

そんな会話を交わした翌日。わたしはいよいよ、メキシコを出立することにした。

餞別としてサンタナが作った色んな道具をもらっちゃったから、これはシヨシヤナたちへのお土産にしようと思う。

「姉さん、よければこれを連れていってくれ」

ところが、そう言っただけで差し出されたトナティウを見て、わたしは視線を限りなく遠くに向けた。

この子連れて帰っていいんだろうか。正直、嫌な予感しかないんですけど。

トナティウは、最初に言った通り半吸血鬼だ。それはもうこの際どうでもいいんだけど、聞けば今年でちょうど五十歳とのこと。つまり人間に当てはめると、大体高校生くらいなんだけど……要するに若い年頃の女の子なわけだ。

さて問題です。そんな女の子を連れてわたしが帰ってきたら、果たしてシヨシヤナはどういう反応をするでしょう？

わたしには、修羅場になる未来しか見えないんですよ！

「あちらの大陸のこと、あたしこの目で見てみたいんです！」

でもなあ！ わたしとほぼ同じ動機を語る彼女を無下にするのは、わたしのポリシーに反するんだよなあ！ これは断れない……！

「サンタナ、ホントにいいの？ 人手はあんまり足りてないんでしょ？」

「構わない。姉さんのほうこそ、人手を求めてこっちに来たのに手ぶらで戻っては何を言われるかわからんだろう？」

「それはそうなんだけど……」

というやり取りもあつたしね……。うん、サンタナの完全な厚意だし、そういう意味でも断れないよね……。

正直、シヨシヤナ関係で不安がある以外にも、検疫的な意味で大丈夫かなとも思ったりするんだけど……。これに関しては、柱の一族が行き来してる以上あんまり気にしても仕方ないかもだけどさ。

「……ええと、うん。移動は正直強行軍になるけど、そこは覚悟してねトナティウ」

「はいっー」

シヨシヤナとは逆に、根っからの元気っ子という感じのトナティウ

ウ。名は体を表すとは言うけど、もしかして世界共通なのかな。半分
とはいえ吸血鬼に太陽トナテイウとか、よく名付けたなとも思うけど。

そんなわりとどうでもいいことを考えながら、わたしは北に向けて
走り始めたのだった。

25. 嫌な予感は大体当たる

さて戻ってきましたユーラシア大陸。強行軍になるとか言っておきながら、行きと同じく北極海が凍るまで移動できなかった時期もあったことについてはなかつたことにしたい。

まあでも、その時期はトナティウに文字や言葉を教えるのに使えたから、結果オーライってことで？

にしても、トナティウは記憶力がいい。そして身体能力もかなり高い。半吸血鬼は能力が高いとはサンタナのレポートにあつたけど、どうもその通りみたいだ。

シヨシヤナもかなり物覚えがよかつたけど、あの子はわたしの見えないところでもものすごい努力をしていることをわたしは知ってる。それをさほど苦労しないでこなしちゃうんだから、いかにトナティウが……というより半吸血鬼がすごいかわかるね。

……その点について、色んな懸念があるのも事実ではあるけど。いつものようにそれは棚に上げて、わたしは一路エジプトはアレクサンドリアに戻ってきた。

道中では何度もトナティウが好奇心を爆発させて質問攻めにあつたけど、スポンジのように知識を吸収する彼女にわたしも触発されて、ついつい語りすぎてしまったこともあつたね！

念のため、ギザの三大ピラミッドはまだ見せてない。あれはこの時代ですら、既に完成から二千年近くが経ってるロマンの塊だ。語り尽くすには相応の時間が必要だ。

「はー、やっと着いた」

「賑やかな街ですね！ あんなに大きな船まであります！」

「ここは港としても重要なところだからね。色んなところの色んなものがここに集まっては出て行くんだよ」

「すごいですね……！」

キラキラした目であつちこつちに目を向けるトナティウを見ると、なんだか自分を見てるような気分になる。カーズ様たちも、こんな感じでわたしを見てたんだろうか……。

「えーと、これから行くのがここでのわたしの拠点だよ」

「ルブルム商会ですね！ 商売というのがあちらにはほとんどなかったもので、とつても楽しみです！」

サンタナの国は、ある意味では完全な統制国家とも言える。だから商売という概念が希薄で、広範囲をカバーする商会という概念となると皆無だった。トナティウが好奇心を向けるのも当然と言える。

そもそも売買すら減多になかったもんなあ……。物々交換がされてたからいだから、貨幣という概念には最初困惑してたっけ。

そんなことを考えながら、およそ一年ぶりとなる我が家の軒先をくぐる。

「ただいまー」

「!? あ、アルフィー様！」

店番をした男が、わたしの顔を見て驚く。だけどすぐに嬉しそうな顔になって、大急ぎでシヨシヤナを呼んでくるように周りの従業員に指示する。

「お久しぶりですアルフィー様！ よくご無事で！」

「うん、久しぶり。まあ、病気とかに縁のない身体だし、そこはね」

「ああ、それは確かにそうなのですが。我々としてはやはり、どれだけあなたがすごくても心配になるのです」

「ありがとう。みんな優しいよね、嬉しいよ」

「いえいえ、アルフィー様にいただいた恩に比べれば……」

「ああああああああ!!」

「……シヨシヤナが来たね」

「ですな」

話の途中に割り込んできた叫び声に、わたしと彼は苦笑する。

だんだん大きくなるその声が、シヨシヤナのものということは一目瞭然だ。

そして勢いよく扉が開くと同時に、

「ああああアルフィーさまああああああ!!」

猛然とわたしに抱きついてくる、いい歳した女が一人。言うまでもなくシヨシヤナだ。

わたしに抱きついた彼女は泣きわめきながらわたしを抱きしめ、さらに頬ずりしながらキスを乱発してくる。

間近で見ると、随分やつれて髪も肌もかなり荒れているのがわかるけど……わたしに会えないのがそんなに堪えたのか……。

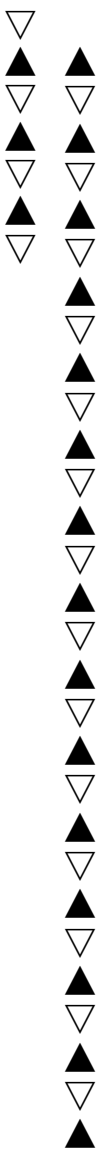
「……うん……よしよし、よしよし。寂しかったねえ。大丈夫だよ、わたしちゃんと帰ってきたからねえ」

でもそんな彼女を振り払う選択肢はわたしにはない。なんだかんだで、わたしも彼女のことは身内として認めてるのだ。実際、一年ぶりのこの強烈なスキンシップに妙に安心してるところあるし。

……待て、さすがに股間に手を伸ばすのはナシだぞ。顔を舐めるのもやめなさい。ペろペろじゃありません、どこでそんなこと覚えたんですかこの子は！ そんな子に育てた覚えはありませんよ！ わりとマジで！

ちなみに、斜め後ろに控えてたトナティウはドン引きだ。紛うことなきドン引きで、ついでに言うなら彼女の的にわたしはサンタナに並ぶか下手すると上回る神様なので、シヨシヤナのこの行動に対して「不敬！」と言いたげでもある。

まあ、この子はわたしの家族なので。大目に見てあげて。これもカルチャーギャップってことでさあ。



その日は、終始シヨシヤナに抱きつかれたまま行動することになった。食事はおろか入浴や就寝まで彼女はわたしにべったりで、まるで子供の頃に戻ったようなありさまだった。

そんなに寂しかったのかと改めて思ったけど、同時にこれは矯正は無理そうだなと思う。どうしてこんなになるまで放っておいたんだ。……わたしのせいかな。

他のメンバーに聞けば、わたしがいない間は最初の一ヶ月以外ほとんど使い物にならなかったみたいで、文字通り「わたしがいないとダ

メ」らしい。

おかげで他のメンバーも商人として成長せざるを得ず、結果として商会の底上げになったのは怪我の功名以外の何物でもない。

「……おはようシヨシヤナ。よく眠れたみたいだね?」

朝。彼女が起きたのを見てそう言うと、彼女は感無量と言った様子でわたしの頬を両手で挟み込むと、さわさわと手を動かして。

「ああ……いる……アルフィー様が、ここにいらっしやる……!」

とつぶやいてはらはらと泣くんだから、ホントどうしたものだろうね……。

そのまま唇を奪われたことはこの際目をつぶるから、誰かこの末期的な依存症をなんとかする方法を教えて欲しい。はーもう、二十一世紀から病院が来ないかなー!

だけど、本当の地獄はここからだった。

ルブルム商会での普段通りに、わたしがシヨシヤナに抱きかかえられて食堂に降りたところをトナティウが待ち構えていたのだ。

「おはようございますアルフィー様! 本日もよろしくお願いします!」

「うん、おはようトナティウ。今日も元気だねえ」

わたしも、ここ一年ほどの普段通りになっていた挨拶を習慣でしてしまっただけだ……。

ここでわたし、自分の失敗を悟る。

慌ててシヨシヤナに目を向ければ、彼女は般若も裸足で逃げ出しそうな凶相でトナティウをにらんでいたのだ。

「……アルフィー様……? この小娘は……一体……?」

「あ、あーっと、あのねシヨシヤナ。あなたが思ってるのとは違うからね? この子はトナティウって言って、わたしの弟の従者なんだけどね、色々あつてこっちに勉強しに来たの」

「……は……? まさか……この一年……この小娘と一緒にいたと……?」

「いや一緒だったのは帰りだけだから、半年くらい……」

「半年もツ! アルフィー様とツ!」

その声は、悲鳴みたいだった。思わずわたしは口をつぐむ。

「ゆ……許せない……許せない許さない許さないツッ!!」

そして沈黙は一瞬。シヨシヤナは身体を翻すと、そのまま一直線にトナティウに襲いかかった!

「ちよ、ちよつとシヨシヤナ?!」

幸い、というかなんと言うか。トナティウは半吸血鬼だから、攻撃自体はなんなく受け止めてた。なんならそのまま押し返すだけの脅力もあるから、余裕すら感じられる。

だけどその顔には隠しきれない怒りが浮かんでいて……。

「それはあたしのセリフですっ! なんですかあなたは昨日から!

黙って見てればアルフィー様に無礼な行いの数々! 神様に対する敬意はないんですかっ!」

「うるさいうるさいうるさあああ!! アルフィー様は私の母で姉で運命の人なのよ!! ポツと出の小娘ごときが、私たちの愛を引き裂こうなんて断じて許さないわ!!」

「なんですかこの頭悪い女! 信じられないです! あーもーあたしも限界! もー我慢できないっ!」

あ、やべ。そんな声が出た。

そしてわたしが周りにいる全員に避難指示を出すのと、にらみ合う二人がスタンドを出すのは同時だった。

「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」ツッ!

シヨシヤナの姿が変わる。暗い色合いで構成された全身に。昔に比べて背丈も伸びて、すらりとした身体つき。だけどどこか泣き顔のような印象を受ける顔面のデザインは、昔と変わることなく怪人のようだ。

ただ一つ、背中に生える翼だけがどこまでも白く、彼女に許された純真さがいかに少ないかを語っているようで。

その姿は、どことなく物悲しい。

「マクイルシヨチトル」ツッ!

対してトナティウの隣に現れた人型は、まさに正反対。白を基調とした身体は美しく、その身に刻まれた装飾はサンタナを祀る神殿に施

されていたものとはほぼ同じ。エメラルドのように輝く瞳はトナテイウのそれと同じ色で、彼女の旺盛な好奇心を体現したかのようだ。さらにはその周囲を緩やかに公転する、五つの花が特に目を引く。いかにも熱帯の花らしい様子のそれは赤やオレンジなどの、鮮やかな色合いで。

その姿は、どこまでも華々しい。

「スタンド……!? そうか……そういうことなのね……それでアルフィー様にすり寄ったのねッ!」

「ナワル……!? なんでそんな高等なものに欲望一直線の単細胞が開眼してるんです!?!」

二人はお互いのスタンドを見るやそう感想を言い、

「アルフィー様! 騙されてはいけませんわ! この小娘はスタンドであなただ様をたぶらかしているのですよッ!」

「アルフィー様! あたし納得できません! こんなおバカになんてここまで加護を与えちゃったんですかあ!?!」

そして直後に同時にわたしに声をかけ、

「誰がバカですってえこの小娘がッ!」

「不敬がすぎますこの頭沸騰女めッ!」

最後に、これまた同時にガンを飛ばしあつた。

さらに二人同時に拳を繰り出す様を見て、わたしは思った。

実は仲が良いのでは……?!

そんなわたしをよそに、二人の……正確にはシヨシヤナの拳とトナテイウのスタンドの拳とがぶつかり合った。爆発にも似た音が鳴り響く。

だけど、両者にダメージはなし。シヨシヤナの「ラ・ラガツツァ・コル・フチャーレ」は防御特化のスタンドで、自身の攻撃力はあくまで本体であるシヨシヤナに依存する。けど、ただの人間である彼女が放った拳は、あくまで成人女性のそれではない。

一方、トナテイウの「マクイルシヨチトル」は近距離パワー型のスタンドで、本来であればそのパンチはわたしたち柱の一族にすらダメージを与えうる。ところがそんなパンチであっても、「ラ・ラガツ

ツア・コル・フチーレ」の守りを抜くことはできないらしい。

そして二人は、これまた同時に自身の攻撃が互いに効かないことを瞬時に理解したんだろう。すぐさま能力を用いた戦いに移行した。

「死ねッ！」

なんとも物騒な言葉とともに、シヨシヤナの足元に転がっていた小石たちが凄まじい速度で放たれた。

向かう先はもちろんトナティウだけど、半分を本体に、もう半分はスタンドにという具合でなかなか周到だ。速度と言ひ、随分と能力を使いこなしてるようで何よりだよ。

「ふうーん、ですっ！」

「!?」

だけど、それはすべて当たらなかつた。外れたのではない。かわされたのだ。

トナティウが何をしたかと言えば、「マクイルシヨチトル」の周りを公転していた花が二つ消え、直後に周辺にその花がいくつもしかしわずかな時間差で咲き誇り始め。それらを順繰りにスタンドで殴っていっただけだ。

一見すると、それだけ。だけど、そうやって順番に花を殴ったことで、結果的にスタンドと本体が踊るように動くことになり、それによつて石を回避したのだ。

ちなみに花を殴った時に、グレートとかパーフェクトとか、そういう意味合いの象形文字が出現するのは……なんていうか、すごくゲームっぽい。

「……ちい！」

とはいえ、それで取り乱すほどシヨシヤナはうぶじゃないし、諦めも良くない。小さいものでダメなら、同時にダメならと、すぐそこにあった机と椅子をランダムにぶつ飛ばし始める。

「効きませんねえ！」

それをトナティウは、やはりその能力で回避し続ける。

けれどかわすだけでもなくて、スタンドのほうが少しずつシヨシヤナに近づいている。本体にも飛んでくる射撃もかなりあるのに、それ

をかわせているのはひとえに半吸血鬼としての高い能力があるからだろう。

「はあっ！」

げ、シヨシヤナったら遂に包丁の類まで飛ばし始めた……ああもう、食堂がめちやくちやだ。

そして当然のようにそれを回避するトナティウに、いい加減痺れを切らしたのか。シヨシヤナが次の手を切った。

「うひゃっ!? くっ、このおやりましたね!」

今しがた、回避したはずの包丁がぐるりと軌道を変えて再びトナティウに襲いかかったのだ。

そう、シヨシヤナはある程度射出したものの軌道を変えられる。追尾はさせられないけど、進行方向を変えるくらいはわけないのだ。この辺りは、わたしの「コンフィデンス」の影響のような気もするけど。この能力を使い出したことで、トナティウもスタンドをより精密かつ正確に動かす必要が出てきた。先ほどまでは単調なところもあった花は、かなりの頻度で現れるようになってる。

ついでに言えばスタンドの周囲を公転する花の数は二つに減っていて……いわゆる、「難易度が上がった」ことが見て取れる。

それでも直撃を食らわないのはさすがと言うべきか。

「そ………こだあっ！」

そして間隙を縫って反撃に転じるんだから、まったく大したものだと思う。

「効かないわね！」

だけど、その攻撃もシヨシヤナには効かない。打音は鳴ったけど、それだけ。強いて言えば少し体幹が揺らいだ程度で、相変わらず理不尽な防御力だ。

「これでも食らいなさいっ！」

そしてその隙を見逃すシヨシヤナじゃあない。攻撃直後の体勢を崩すように、拳が遂に「マクイルシヨチトル」の腹部に叩き込まれた。

「……っ！ ふん………軽いですねえ！」

普通なら、本体の攻撃はスタンドには通じない。だけどスタンドに

よって変身しているシヨシヤナの拳は通る。いかにそれがただのパンチでも、確かにダメージになったようだ。

「ふふん、でも『効かない』とは言わなかったわね！」

「……言わせておけばっ！」

そう、トナティウは効かないではなく軽いと言った。それはつまり、ダメージを受けたことを認めたも同然だ。

にも関わらず、逃げなかったトナティウは根性が据わってると思う。わたしがあの場にいたら、……シヨシヤナの能力を知ってるからでもあるけど、一度下がって様子を見るだろうに。

うん、トナティウは逃げなかった。公転する花をすべて使って咲き誇る無数の花を殴りながら、踊るようにシヨシヤナの身体を打ちさえする！ ラツシユだ！

「うろうりやあああああーっ!!」

花が次々に消されていく。現れる文字はほとんどがグッド、だけどもたまにプアーとパーフェクトが混ざる。

「無駄ア！」

「うぐっ!？」

シヨシヤナがD I O様みたいなおことを言い出した！ いや今更か！

彼女の声とともに、「マクイルシヨチトル」が天井にぶっ飛ばされた。あれは殴ったんじゃないで、スタンドそのものを射出したんだな。その速度は今までの比じゃあなく、さながら人間大砲じみた有様だった。

あれがあるからシヨシヤナのスタンドは厄介なんだよなあ……。殴ってきた相手すら能力の対象としてぶっ飛ばせるから、本人の攻撃力が低くても関係ないんだよなあ。特に閉所だと、壁が凶悪な武器に早変わりするから余計。

それはそれとして、今の大丈夫かな？ トナティウはもちろんだけど、この建物が壊れるのはまずい。ローマンコンクリートできてるし、大丈夫だと信じたいなあ……。あとで念のため検査しとくか……。

ハラハラしながらも二人に目を戻すと、トナティウが背中をかばうようにして立っていた。さすがに、コンクリートに背中から叩きつけられたのは効いたらしい。口から血を吐いてるし、内臓にも届いたみたいだ。

「…………ふふん」

ところが、彼女は笑っていた。なぜなら。

「な…………そ、そんな…………!?!」

シヨシヤナの身体に、一部。小さいけど確かに、ヒビが入っていた。そこからはくすぶる煙と弾ける火花が上がっている。さながら壊れた機械みたいで…………彼女自身も、痛みがあるのか少しフラついてる。

そう。なんと、トナティウはあの「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」の防御を抜いたのだ!

あの絶望的な防御力を知っていると、にわかには信じられない話だ。だけどこれも、もちろんスタンド能力によるものだ。

トナティウのスタンド、「マクイルシヨチトル」。その能力は、ただ攻撃をかわすことじゃあない。その本質は、直近の最善を手繰り寄せるといふものだ。

あらゆる直近の可能性の中から、自分にとって最善の結果を導く場所に花を咲かせ、花を自ら最適のタイミングで散らすことで引き寄せる。それこそ、「マクイルシヨチトル」の能力。つまり回避だけでなく、攻撃にも使えるのだ。

ラツシユのとき、いくつか混ざったパーフェクトの象形文字はまさにその証。シヨシヤナの堅い守りを抜くという、限りなくゼロに近い可能性をそれによつて強引に現実のものとしたんだね。

正直言つて、運命に干渉する破茶滅茶なスタンドだと思う。ただ、もちろん穴はあるわけだけど…………さて、シヨシヤナにそれをつけるだろうか。

まあ、つけたとしてもこれ以上はわたしが許さないけど!

「はい、二人ともそこまで!」

建物はもちろん、二人にも相応のダメージが入ったところで、レフェリーストップだ。これ以上暴れられると、色んな意味で取り返し

がつかなくなる。主に建物のほうが。

ダメーじを受けた(あるいは与えた)ことで少し頭が冷えたのか、二人もそれは認識したようだ。双方が同じ表情を浮かべながらもスタンドを解除した。

「うん、よろしい。はあ……わたしも迂闊な発言したけど、やりすぎちゃダメだよ?」

「申し訳ありません……私としたことが我を忘れてしまつて……」

「はい……あたしが軽率でした。せっかくの食堂がめちやめちやですね……」

周りに目を向ければ、大惨事だ。これより悪い事態なんて、それこそ建物が壊れるくらいしかないんじゃないかってレベル。

「だよ。……というわけで、まずは片付けだよ。わたしも手伝うから、三人で終わらせるよ!」

ところがそう言ったら、

「いいえ! アルフィー様のお手を煩わせるほどのことではありませんわ! アルフィー様は休んでいてください!」

「そんな恐れ多い! アルフィー様は神様なんですから、こういうことは下々に任せていただければいいんですよ!」

二人してこう言うんだもんなあ。

君たち、やつぱり仲良いでしょ?

「……ふん、小娘と同意見なのは癪ですが、確かにこういうことは私たちの仕事です」

「ふーんだ、あたしだって癪ですよ。でも実際、これくらい余裕ですもんね」

こう付け加えて、顔を背け合うんだからなんだかなあ。わたしは苦笑するしかない。

わたしとしては、わたしも含めて三人でやったほうが早く終わると思うんだけど。それでも二人は頑として譲らなかつたから、わたしは諦めて二人の仕事ぶりを眺めてることにした。

なお、この日の朝食は昼食とイコールになったことは付け加えておきたい。二人とも片付けながらケンカするんだもんなあ……。

26. 新しい門出

ともあれそんなわけで、トナティウがなまにくわわった。

彼女のこちらでの役割は、主にわたしが以前から担当していた情報の取りまとめと各所の繋ぎ役となる。これは、彼女が人間以上の身体能力を持ちながら日中に行動できるからこそその役割だ。

わたしやルブルム商会だけでなく、カーズ様たちとのやり取りも担当することになるかなり重要なポジションになる。わたしもこの仕事は継続するけど、わたし一人で行ったことを二人でできるようになったことは色んな意味で大きい。

新入りにいきなりそんな重要な仕事を与えて嫉妬する人が出てくるかなとも思ってたけど、そこは彼女の一本気な性格と相応の実力もあつて特に気にされた様子はない。

シヨシヤナ？ あの子はわたしの隣さえ死守できればいい子だから……。

なんならトナティウがわたしの近くにいる頻度が下がる上に、トナティウがこの仕事をやってればシヨシヤナが毛嫌いしてるカーズ様に顔を合わせる頻度も下がるってことで、歓迎してたほどだ。

そしてそのカーズ様はと言えば、さすがと言うかなんと言うか、トナティウを一目見て人間じゃあないと看破した。これについてはわたしですらわかったことだから、彼にわからないはずがないよね。

それからその正体について説明を求められ、かくかくしかじかとサントナの人間の品種改良について話したら、なるほどと面白そうにしてたのが実に嫌な予感しかしい。

と思つてたら、案の定こっちでも半吸血鬼を作ってみようと言いついたからたまつたもんじゃやない。

とはいえ、人手不足解消のためにわざわざ一時離脱したのに、ほぼ成果なしで戻ってきたわたしにノーと言う権利なんてあるはずもなく。求められるまま（脅されるままと言い換えても可）半吸血鬼について説明せざるを得なかつたよ……。

まあ、細かい作り方までは説明してないけどね！ 内容が内容と

はいえ、サンタナが頑張って調べたことを全部開示するのははばかられたし、歴史どころか世界そのものがこれで変わる可能性まであるんだからあちこちぼかしてごまかしたよ。わたしががんばった。

というわけで、カーズ様は気晴らしも兼ねて実験を始められた。わざわざアルビオン（ブリテン島のこの時代の呼び名）に渡って人目の少ないところで始めるあたり、こういうことには凝り性な人だなとは思う。

まあ、カーズ様が実験にかまけてればその分赤石探しも遅れるわけだから、そこは歓迎だ。それだけ原作の時代への備えもできるわけだしね。

実験台にされる人については本当にごめんなさいだけど……それについてはせめてまっとうに生きていけるように、人生の選択肢を増やしてあげるようにしようと思ってる。どうせ、カーズ様のことだから教育関係はわたしに丸投げるだろうし。

なお、トナテイウのカーズ様たちに対する印象は、悪神、悪神、武神らしい。順にカーズ様、エシテイシ、ワムウだ。

カーズ様たちの言動は、確かに悪神と言われても仕方ないとは思う。あつちでサンタナがやってることに比べればそりゃあ、ねえ。

そんなこともあつてか、カーズ様のいないところでは、神としての力をいたずらに振るう邪悪な存在扱いだ。そしてこの件で、シヨシヤナと悪口が盛り上がってる。やっぱり君ら仲良しだよな？

でも指摘すると口を揃えて違えますって言うんだなあ。わたしはもう、なんか親戚の姪っ子とかを眺めてるようなほっこりした気分だよ。

そんなこんなで、また三十年ほどが過ぎた。今のところは波紋使いの目を避けることもあつてか、わりと穏やかだったと思う。相変わらずローマは拡張を続けてたけど。

わたし自身は、案の定アルビオンの人体実験施設での教育を丸投げられたせいもあつて、ちよつと忙しかった。ルブルム商会の拠点がエジプトのアレクサンドリアなことあつて、行き来がもうね、しんどくってね……。

とはいえ、半吸血鬼の研究はサンタナが何百年もかけたものだ。ただかだか三十年、しかも気晴らしの片手間にやってることもあって、目立った人材を輩出するには至ってない。

そもそも半吸血鬼って老化が遅いんだけど、それは同時に成長が遅いってことでもある。だから三十年経っても、初期に生まれた子ですらまだ十歳くらいの子供なんだよね。そりゃあ人材どうこう以前の問題だ。

それはともかく。

さつきも言ったけど、三十年が過ぎた。大事なことだから何回も言う。

わたしたち柱の一族にとって三十年はあっという間だけど、人間にとってはそうじゃあない。むしろとても長い期間だ。

何が言いたいかって？

それはね。

三十年が過ぎたってことはね。

シヨシヤナが、七十近いおばあさんになったしまったということでもある、んだよ。

……この時代としては、かなり長生きだ。それでも、二十一世紀の七十手前とはわけが違う。随分と老け込んでしまって、最近では介護が必要なレベルになっている。

トナティウは半吸血鬼だから、まだ二十代くらいの姿と精神を保ってるけど……だからこそ、二人の差があまりにも顕著で見てるだけであつらくなってくる。

トナティウもシヨシヤナの衰弱には思うところがあるみたいで、寂しそうにしていることが増えた。やっぱり仲良しだった。

そんなある日のこと。わたしはいつものようにシヨシヤナの介護のために、つきつきりで世話をしていたんだけど。

彼女は普段とは違う覚悟を決めた顔でこう言った。

「アルフィー様……私に……石仮面を使わせてください」

その言葉に、わたしは思わず手にしていた食器を取り落としてしま

石仮面を使う。それはすなわち、吸血鬼になるということ。ほぼ不老不死の身体と無双の力の引き換えに、人間性を失う諸刃の剣。それを使わせてくれと、彼女は言ったのだ。今までずっと使わせなかったそれを、使わせてくれと。

「私……死にたくないのです……。もつと、もつとアルフィー様のおそばにいたいのです……。アルフィー様をずっとお支えしたい……」
「……シヨシヤナ……」

「それに、あの女はこれからもアルフィー様と一緒にいるのに……私だけなんて、そんなの、あんまりです……!」

「そっちなんだ……」

死にたくない理由がわたしで、さらにはトナティウに張り合うためとか。老婆になってもこの子が変わらなさすぎてわたしは思わず笑っちゃったよ。

でもそれはそれとして、簡単に吸血鬼になっていいものでもない。カーズ様はほいほいやるけど、わたしはやっぱりそういうものじゃないと思うんだよね。

「……わかっている？ 吸血鬼になったところで、シヨシヤナがシヨシヤナであり続けられる保障はどこにもないんだよ？」

「愛の力で乗り越えますわ」

「なんの根拠もない答えをありがとう」

ブレないなあ、この子は。結局、ずーっとわたしのことだけを見てわたしのことだけを愛し続けてくれた。

わたし自身は、やっぱり人を見る目がないなあと思うんだけど。でも好き嫌いつて、理屈じゃないところもあるしねえ。

だけど吸血鬼にはなってほしくないのは、それだけじゃないんだよ。他にも問題はあるんだ。だってサンタナの研究によれば、殺される以外の吸血鬼の死因は主に自殺なんだから。

吸血鬼という生き物は、根本的に人間と変わらない。それは生物学的な意味だけでなく、精神性もそうなんだよね。ただ、心のブレーキがなくなるだけで。

そして人間は、何百年も生きていられるほど凶太くない。多くの吸

血鬼は、その永遠性を最終的には持て余して自ら死ぬことになる。

「……ねえシヨシヤナ。吸血鬼になって、あなたも心を喪わなかったとして。それでも、あなたの心が生き続けられるかはわからないんだよ?」

「そんなことはありません! ありえませんわ! 私は、アルフィー様さえいれば何も怖くありませんもの!」

「わたしが二千年もの間不在でも?」

「……!?!」

シヨシヤナが絶句した。そのまま、しばらく沈黙が場を支配する。彼女には、言つてなかった。だって、人間の彼女の短い人生の中では関係がないと思つてたから。

でも、吸血鬼になるなら話は変わってくる。わたしの、と言うより柱の一族の生態を知る必要がある。

そう、わたしはもう百年もしないうちに、二千年の眠りにつくということを。

「シヨシヤナは、それに耐えられるの? たった一年ちよつと、わたしがいなかったただけであんなに取り乱したあなたが?」

そして説明を終えて、わたしはあえて突き放すように言った。

だつてもしも耐え切れなかったときは、生き地獄を味わうことになるんだよ。目の前にわたしがいるのに、石化している。いないも同然の状態を目の前に、延々と苦しむことになる。

そうやって心が壊れていくシヨシヤナのことを考えると、とてもじゃないけどいいよなんて言えない。かわいそすぎる。

だから、あえてわたしは拒絶したんだ。どれだけ人間ぶつても、結局のところわたしのこの手は悪魔の手。こんな手は取るべきじゃない。シヨシヤナはあくまで人間として、その命を全うしてほしいんだよ。

ああでも……それでも、家族だからわかる。シヨシヤナはそれでも、つて言うだろう。

「それでも……たとえ私が壊れることになつても、それでも私は……アルフィー様と同じ時間を過ごしたいんです!」

ほらね。

わかってた。知ってる。シヨシヤナがそういう子なのは、誰よりも知ってる。

だって、わたしがこの子を育てたんだもの。わたしは世界で一番、この子のことをわかってる。

きつと、二千年の不在に耐えられないだろうなってことも、なんとなく。

わかっているなら止めるべきだ。それはわかっている。

わかっているけど……でも、万年単位で続くわたしの人生と同じ時間を過ごしたいという彼女の言葉は、わたしにとっても嬉しいもので。そんなこと言われたら、わたし断れないじゃないか……。

「はあ……。わかった、わかったよ。死ぬより辛い目に遭う覚悟があるなら、わたしはもう何も言わないよ」

「……ありがとうございますー！」

かくして、シヨシヤナは吸血鬼として生まれ変わった。せめて、と思っただけの起動にはわたしの血を使い、若返るための最初の吸血もわたしからさせた。

サンタナのレポート通りなら、これで普通より優れた吸血鬼になるはずだ。そうなってほしい。そう願って、わたしの血を使った。

「ああ、身体に力がみなぎる……！　これが若さ……！　素晴らしいわ、今までの重かった身体が嘘のよう！」

そうして、見事に二十代前半くらいの姿を取り戻したシヨシヤナは、どうやら理性を失わずに済んだようだ。

よかった。わたしの手でこの子を殺すなんてしたくなかったから、本当によかった。

でも、やっぱり石仮面は人を狂わせる。つくづくそう思わされた。

「ではアルフィー様！　まぐわいませよう！」

「なんでそうなるかなあ?!」

「だってせっかく若返ったのですもの！　やはり褥しとねは共にしたいじゃありませんか！　さあ遠慮せずこちらにどうぞ！　愛を育みましよう！」

「いやそのりくつはおかしい……つう、きゅ、吸血鬼になったから力が……！」

「はあはあ、アルフィー様を押し倒せる日が来るなんて、夢のようですわ！　大丈夫です、幼い頃から頭の中でイメージトレーニングはバツチリ重ねてきましたので！　私に身体を委ねてくださいいな！」

「ああもう！　石仮面なんてだいつきらいだあ！」

「ああんアルフィー様あ！　あ、でもこんな風に蹴っていただけのも新鮮……！　頑丈になったからできることですね！　最高ですわ！」

どうしよう。まさかスケベ方面にタガが外れるなんて思っ
てなかったよ！

原作の吸血鬼は大体破壊衝動とかそっち方面だったのに、この子と
きたら！

そりゃあ、わたし今までショシヤナのそういう求めには応じてこ
なかったけどさあ！　いくらなんでも処女をこじらせすぎでしょ!?

27. スーパーエイジャ争奪戦 序

「はあー？ 最期くらい真面目に見送ってあげよーと思って、必死こいて戻ってきてみれば……何やってるんですかこの色ポケババア！」アレクサンドリアに戻ってきたトナティウ、渾身のツツコミだ。全面的に同意したい。

ところが言われたほうはどこ吹く風で、今日も元気にわたしに踏まれて興奮している。

なんとかしてほしいところだけど、何しても喜ぶせいでどうにもならない。放置が一番ではあるんだけど、そうするとそれはそれで泣き始めるから……。

「聞きなさいっ！」

「はあーん？ 負け犬が何か吠えてるわねえ？ よくわからないわ、だって私人間ですもの！」

「もう人間じゃないくせに何をいけしやあしやあと！」

「見苦しいわよトナティウ！ どうせ嫉妬してるんでしよう！ アルフィー様の血をいただけたこの私に！」

「え、別に？ だってアルフィー様の血はあたしもたまにいただいでるし」

「……は？」

「はアン？」

「ああもう、二人ともそれまでにしようね……」

なんとなく楽しそうに見えるけど、一応とめておく。

視線をぶつけあってすぐにこっちを向いて、同時に謝ってくるのなんて久々すぎて思わず笑っちゃったけどさ。なんだか始めの頃に戻ったみたい。

「……アルフィー様、どうしてこいつを吸血鬼なんかに？ 元からアレな性格だったんですから、石仮面使ったらこうなるのはわかってたでしょうに」

「ごめん、わかってなかったんだ……いや忘れてたっていうか」

「神をも欺く色狂い……!?!」

「失礼ね！ 誰が色狂いですって!？」

「あんたですよ！」

ハハハやっぱり二人は仲がいいなあ（現実逃避

でも実際問題、シヨシヤナがシヨシヤナでなくなることは危惧してても、性格が悪に振り切れることに関しては失念してたんだよね……。

もうすぐ死ぬって状況で、わたしもわたしなりに冷静じゃあなかったんだらうけど……それはそれとして、自発的に石仮面を使ったことには変わりないわけで。本当にやってよかったのか、許されることではないんじゃないかって、今になって後悔してる。

我ながら、本当に学習能力がない。生まれ変わって記憶力とかそういうのはよくなったかもだけど、根本的なところがまるで成長してないんだよなあ。うっかり屋っていうかなんていうか。お釈迦様が聞いたら怒る通り越して呆れるかなあ……。

「……とりあえず、そろそろストップね」

放っておくとすぐケンカするのは、猫とネズミ的な間柄だと信じていい。

ただそれはそれとして、わたしを物理的な中心にしてぐるぐる追いかけてっこされるのはさすがにちよつと気になるんだ。

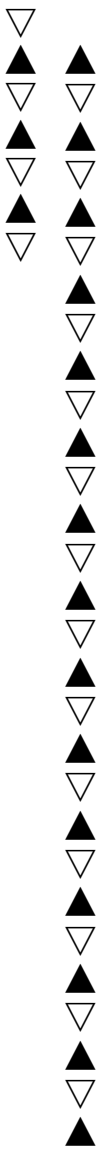
「はあい」

「はい。……だからそこで抱きつかない！」

「嫌よー！」

「迫真の顔で言うことじゃあないですからね！」

ハハハやっぱり二人は仲がいいなあ（現実逃避



カルタゴ、地図から消えるってよ。

そんな速報をもらったわたしは、ならば今が紀元前百四十六年なのかなと時系列に思いを馳せる。

これは明確な歴史の分水嶺だ。カルタゴはローマに匹敵する存在だったんだからね。それが破れ、歴史の彼方へ去ったことでローマの覇権はもはや確定したも同然だ。ここにローマ帝国は、歴史に燦然と輝く金字塔となる。

今後、カエサルたちの第一次三頭政治、オクタウィアヌスたちの第二次三頭政治という歴史的に重要な出来事はあるけど、それらが行われないにしてもローマは存続していずれ帝国になるはずだ。

言うなれば、ローマをローマ足らしめる……後世にまであまたの分野でその影響を残すローマ帝国、その礎は間違いなくここで完成した。であれば、今後の歴史にそこまで大きな差は出てこないだろう。

もちろん、わたしの知る歴史と大きく異なるものになり得る歴史の分水嶺は、まだいくつか残ってる。その筋の人なら、人理定礎と言えばそれが何を指すかわかるだろう。大航海時代の成否とか、ウオーバランスの担い手となるアメリカ合衆国の行方とか、その辺だ。

ただ、この時代の先にあるそれは、わたしにとっては当事者にならないものでもある。そのすべてを寝て過ごすことになるんだから仕方ないんだけど、それはそれとして残念だ。

……シヨシヤナには、そういう歴史上のあれこれを記録したり、文物を集めてもらおう。あの子がわたし抜きで生き抜いていけるかどうかは正直怪しいところだと思ってるけど、仕事があればもしかしてそれが逃避になるかもしれないし。

あとは、念には念も入れとこうかな……。

さてそれはともかく、今が紀元前百四十六年なら、わたしはあと三十年くらいで眠りにつくことになる。一年二年くらいは平気で誤差として出てくるから、はつきりこの年、って断言できないのはアレだけど。そこは人間だって、絶対に同じ時間に起きて寝るなんて人はいないだろうし。

……いや、四部の吉良吉影ならやってそうではあるけど。彼ほどの几帳面さはわたしにはないから、いつもブレるんだよね。

だから今のうちに、寝たあとのことを伝言として残しとこう。シヨシヤナとトナティウ宛に書いとけば、万が一はないだろうしね。

……そこ、遺言とか言わないように。

そしてカルタゴが滅ぶのに前後して、遂にと言うべきかいよいよと
言うべきか……。

ともあれ、このタイミングで赤石とわたしたち柱の一族のことが
ローマの波紋戦士たちに発覚した。

事の発端は、エシデイシだ。あの人ときたら、せっかく秘密裏にこ
とを進めてたのにうっかり見られて、それだけならまだしも人間に
ちよつと（聞く限りかなりのものではあったけど）挑発されただけで
激昂して、派手にやっちゃったのだ。それも波紋戦士の前でだ。

これにはカーズ様もげきおこで、友達に怒られたエシデイシはさす
がにシユンとした。以降彼は、キレそうになったときは号泣して気
分を入れ替える手法を採るようになった。

このタイミングと顛末が原作と同じかどうかはわからないけど、と
もあれジョセフに対して見せたエシデイシの「あんまりだ」はここか
ら始まったのか……とちよつと感慨深いものがあるのはわたしだけ
だろうな。

それはともかく。

そんなわけでバレちゃったので、事あるごとに波紋戦士と戦う羽目
になった。まあワムウなんかは楽しそうにしてたんだけど、カーズ様
とあとわたしにとっては面倒でしかない。

一応、ルブルム商会在柱の一族と繋がりが……っていうかぶつ
ちやけ下位組織ってことまではバレてないけど、やりづらくなったの
は間違いない。

カーズ様がやってるアルビオンでのアレもまだ時間が足りないし
で、ほとんどの作戦を少人数でやることになったと言える。

これでも原作よりも手が届く範囲はだいぶ広いんだけどね。ただ、
残念ながらわたしは諸々含めて決定的な情報をうっかりたまたま見
落とし続けているので、状況としてはたぶん原作と大差ない……と思
う。思いたい。

そうやっていたちごっこを続けることおよそ三十年。トナティウ
がシヨシヤナの外見年齢を追い越し、アルビオンに半吸血鬼の部族が

形成され始めた頃。

変わった世界情勢と、スーパーエイジャがローマ市内に持ち込まれたという情報を受けて、いよいよカーズ様が動き出す。

「作戦は、単純に言ってしまうえば囷だ」

アレクサンドリアにあるルブルム商会の本店で、カーズ様以下すべての柱の一族が揃っていた。

「囷は二段階に分ける。まず一つ目。ローマの目と鼻の先にあるシチリア島に石仮面を放つ」

あつ、察し。

「とりあえず一体、適当な吸血鬼を作るのだ。そいつに暴れさせる。すると当然、ローマは軍を派遣せざるを得なくなる。……が、ここ最近のローマ軍は弱体化が著しい」

以前ローマが手をつけられなくなるって言ったけど、実はこの時期はその空白期間だったりする。ローマ軍の強さは市民権を持つものが支えていたけど、この時期になると拡張がすぎて財を失わざるを得ない人が続出。それに伴って市民権も失う人が相次いだんだよね。

だからこそ根本的な軍制改革が必要になって、実際それは成し遂げられるんだけど……それが完成するにはもう数年の時間が必要になる。カーズ様はそこを突くつもりなのだ。

「なるほど、最近のローマ軍にやあ手応えがなかったからな……」

「スタンド使いの波紋戦士も減りましたしねえ」

「ただでさえ弱体化している軍が、さらに減ったところを狙うと。そういうわけですか」

「ああ。シチリア島に関してはそれでいい。あとがどうなろうと我々には関係のないことだ」

……終わったらちゃんと後始末しなきゃ。

「軍がローマを離れ、シチリア島にたどり着いた頃合いで我々は動く。ここでも囷だ。アルフィー、お前吸血鬼を飼っていただろう。そいつにやらせる」

「……あの子を囷にするんですか」

「能力的にもちようどいいだろう?」

不満か？　と言いたげにじろりと視線が向けられる。

そりや、確かに変身後のシヨシヤナは怪人だけどき……防御力も折り紙付きだけど、波紋は普通に食らうんだから危ないじゃあないか。

「……私も囿に回っていいですか？」

「ほお。まあいいだろう。せいぜい死なないように立ち回れよ」

一瞬にやりと笑ったように見えたけど……今のなんだったんだろう。

でもそれはともかく、やっぱり危険なことをシヨシヤナにはやってほしくないんだ。

殺されることが心配なんじゃあない、戦いの中で吸血鬼としての衝動に呑み込まれてしまうことが怖いんだ。もしそうになったら、わたしは石仮面を使ったものとして彼女を殺さなきゃならない。

ここ三十年の間に、やってしまったものは仕方ないと一応の折り合いはつけたものの、やっぱりそういう事態になってほしくないよ。

まあ、それでもまったく関係のない人を無理やり吸血鬼にするよりはマシか。そう思わないとやってられない。

シチリア島に関しては、それもできないわけだけど……なんとかして被害を最小限にすることで償いしたい。

「囿のアルフィーに波紋戦士の大半を引き付けることとするが……下手に騒ぎを大きくすると情報が錯綜する。ゆえにアルフィー、そこは賢く立ち回れよ？」

そうやって内心で葛藤している間にも、話は進む。とりあえず自分のことはあとで考えるところ、今はカーズ様に合わせよう。聞いてませんでしたとか言ったら斬られる。

「えーと、あのローマの街を完全に制御するのはいくらなんでも無理ですよ。人手が足らなすぎます」

「それについては半吸血鬼どもを使って構わん。情報網を確実に構築しろ。それと、赤石がローマから出ないように監視もな」

「わ、わかりました」

うへえ、そんな指揮官みたいなことわたしにできるかなあ。全然自信ないぞ。シヨシヤナに任せちゃっていいかなあ……。

トナティウ……は、シチリア島のほうをなんとかしてもらいたいし……んんん、どうしたものか。会議が終わったら、二人を呼んで話し合おう、そうしよう。

「スーパーエイジャが持ち込まれたとされる場所は、全部で三箇所。この騒ぎに乗じて、同時に攻め入る。ワムウ、お前には強力な波紋戦士がいるところを任せるぞ」

「御意」

「人数の多いところは私がやろう。自らの持ち場が片付いたら私のところを手伝ってくれ」

「あいよ、了解だ」

「わかりました」

「作戦は以上だ。何か質問は？」

カーズ様の問いに答えるものはない。それを見て、彼は満足そうに頷く。

「では行くぞ。スーパーエイジャをこの手にするのだ！」

かくして、賽は投げられた。

28. スーパーエイジャ争奪戦 破

そんなわけで移動を始めたわたしたち。最初の目的地は、ローマを一旦通り過ぎてアルビオンだ。

昼間は吸血鬼化で日光に極端に弱いシヨシヤナはスタンド空間に退避させて。夜間はみんな出て走るっていうスタイルだ。

その途中、わたしはカーズ様たちが周囲にいないことを確認してから口を開いた。

「シヨシヤナ、トナティウ。ローマに入る前に言っておきたいことがあるんだけど」

「遂に愛の告白ですか!?!」

「んなわけないでしょ……」

「うん、そんなわけない。だいたい、大仕事の前に恋愛について話すと死ぬっていう迷信があるからするにしても終わったあとだよ」

しよぼーんのアスキーアートみたいな顔されても、わたしはそれ以上言わないぞ。

おほん。

「それはともかく。これからカーズ様の大作戦が始まるわけだけど……ぶっちゃけるね。めっちゃやねむい」

「ああ……」

「そういえば、そういう時期でしたっけ」

納得という様子の二人に、こくんと頷く。

そう、眠い。わたしの休眠周期的に、もうほとんど寝てる時期なのだ。

今のわたしは言うなれば、眠気に耐えながら必死こいて勉強をしている受験生の心境。寝そうになるのをこらえながら、あれこれやってるわけ……。

「何かやらかしてもおかしくないから、注意しといてほしいなって」

「わかりました、すべてこの私にお任せくださいませ!」

「こいつに任せとくと不安なので、あたしも気をつけておきますね」

「ごめんねえ……。ある程度すると逆にハイになるんだけど」

人間だったころ、よく眠気と深夜ハイテンションが交互に来てたものだけ……今の身体でも似たような感覚は存在する。人間は数時間単位で推移するけど、今の身体だと大体数日ごとによって感じた。わりと冗談抜きで二千年ぶりくらいのおくびをこらえようと、はあとため息をつく。

人間があんまり夜更かしをし続けると次の日に早く起きられないように、わたしたち柱の一族もそういう傾向はある。いかに常識を超えた生き物であっても、地球に生まれた生き物である以上はその範疇からは逃れられないんだろうな。

でもそうなると困るんだよなあ……。夜更かししたせいで原作を寝過ぎしましたとかなったら目も当てられないじゃあないか。

いや、さすがに二部の時期になってもまだ寝こけてたらカーズ様たちにたたき起こされるとは思うけど……。でもそれだと何もできないまま原作の物語に突入するから、できれば早めに起きときたいんだよなあ。

できるかな……。目覚まし時計的なものって作れないものか……。

……まあ、これに関してはどうしようもないから諦めるしかない。早く起きようって思っても、できないときはできないのはみんなもご存知の通りだ。

だから今はそれよりも……。

「二人とも、これ今のうちに渡しとくよ」

「これは……まさか……恋文……!?!」

「なわけないでしょ……。あの、中を見てしまっても?」

「うん、いいよ。それはわたしが寝た後こうしてほしいって言う……。まあ、要望みたいなものだから」

「あら?。一枚目はもしかして同じ内容ですか?」

「……シチリア島の後始末となってますね。シヨシヤナもですか」
「うん、たぶんひどいことになるだろうから」

吸血鬼を作って放置するとか、昔ですらしなかった。最低限の管理はしてたんだから、今の地中海地域で吸血鬼の放置なんてやったらとんでもないことになる。それこそジョジョの世界っていうよりバイ

オの世界になっちゃうぞ。

それはなんとしてでも避けたい。避けられないとしたら、最低限に抑えたいんだ。原作でそういう逸話が出てこなかったことを考えると、たぶんこれはわたしがいることで起きることだから、ね……。

遠回しにそう告げると、二人は神妙な面持ちで頷いてくれた。

「やっぱリアルファイ様は、お優しい神様ですね」

「……そんなことない。わたしはただ、弱虫なだけだから」

「何をおっしゃいますか。そんなリアルファイ様に私は救われたのです！ ですから、そんなにご自身を卑下しないでくださいな」

「シヨシヤナに同意するのは癪ですけど、あたしもそう思います」

「……二人ともありがとね。本当に。二人に会えて、本当によかったよ」

これは本心だ。たまに期待が重いときもあるけど、むしろわたしみたいなのはタレで風見鶏なやつにはそれくらい重しになってくれる人がいてくれないと、ちよつとした決心さえできないんだから。

それに、二人はこうやって励ましてくれるしね。過度な励ましは重荷になるものだけど、まったく励ましが無いのもやっぱりしんどいもん。

「……あの、ところでリアルファイ様」

「なあに？」

「三枚目以降に書いてある内容なのですが……」

連絡書として二人に渡した一覧は、一枚目が今回の一件が終わったあとのことを。二枚目がカーズ様たちが寝るまでの間のことを書いてある。

じゃあ三枚目以降は何かというと……。

「これは、その……もしかして予言ですか？ ナザレ地方に生まれるヨシユアという人間からサイン入りの杯をもらっておいてほしい、とか……そういう記述が多く目立ちますけど……」

「いやー、うん、その……なんていうか、まあ、うん……」

いや、だって。仕方なくない？ 何の因果か、不老不死になったシヨシヤナがいるんだしせつかつくなら……って思っちゃうのはさあ

！
正直、全力でお釈迦様に顔向けできないことだとは思いますが、それでも……！ それでもこれは元歴史学の徒としてはどうしても……どうしても我慢できないの……！

だってよりにもよって人類史の中でこれから面白くなる地点で休眠を余儀なくされて、次に起きる予定なのが十九世紀末って、そんなのあんまりだよ……！

「すごい……！ アルフィー様は予言もできたのですね……！ やはり知の神様……！」

「い、いや、そんなすごいものじゃあないから……！ これはなんていうか、ズル……そう、チートだから……！」

そんなに信仰のまなざしで見ないで……！
自業自得なのはわかってはいるけどさ……！



さてそれはさておき、まずはアルビオンだ。ここで半吸血鬼の部族と合流する。

カーズ様が暇つぶしに手がけた彼らには、その当初からかわつてるわたしだ。顔を見ればそれで歓迎される。フリーの顔パスだ。

これはシヨシヤナやトナティウも一緒に、基本的に彼らはわたしたちに対してはサンタナの民並みに従順だったりする。

この点はカーズ様に対しても同様つてところがあつちとは違うけど、カーズ様へのそれはどっちかって言うところと恐怖政治に対するそれに近い。なので、命令するとなつたらわたしたちのほうを受け入れてもらいやすい……はず。

というわけで彼らの集落にやってきたわけだけ……案の定、わたしたちは歓迎されたあと、こうこうでと事情を説明したら半分以上が微妙な顔をしていた。

彼らに吸血鬼のような不死身がないのは周知の事実だし、そもそも

も言葉の通じないところに行きたがる人間がこの時代にどれだけいるかっていうと、ねえ……。

おまけに危ないことをしに行かされるわけだから、やりたがるはずがないんだよなあ……。

で、こういうとき強引にできないのがわたしだ。カーズ様みたいな情け無用の男ならそれもないんだろうけど、それができないわたしは言葉を尽くすしかない。

幸い三十人ほどが素直に応じてくれて、二十人ほどが説得の末に応じてくれた。合計五十人ほどが、ローマに来てくれることになる。

そのほとんどがまだ人間換算で十代くらいの若い子たちで、ローマを見てみたいっていういかにも若者らしい理由での賛同してくれたんだけど、わたしとしては複雑な心境だ。だってローマで何をするって、下手したら死ぬかもしれない行為なわけだし……。

だからわたしは、できる限り彼らが死なないようにがんばらないといけない。指揮自体は、まあ、シヨシヤナたちに任せようがうまくいくと思うけど。方針として、いのちだいに徹底させるという点ではわたしがやらないとだ。

そしてこれは、相手側に対しても同様だ。当たり前だけど、わたしは波紋使いを全員殺して済ませるつもりなんてない。

カーズ様としてはそのほうがあとあと楽かもしれないけど、率先して人を殺す趣味は持ち合わせてないもんね。だから、できる限り穏便に済ませるつもりだ。気絶か、捕縛くらいにとどめる感じでね。

大丈夫。なんてったって今回、カーズ様はできるだけ騒ぎを大きくすることなく、波紋使いの大半をわたしが引き付けておくようにと仰せだ。つまり、殺せとは言われてない！ これ幸いとばかりに穏やかに終わらせたい。

ローマへの移動中にそういう話を済ませておく。と言っても、ローマ近くに着くまでは行きと同じくシヨシヤナをスタンド空間に入れて。半吸血鬼のみんなもそこに入ってもらって、その間にシヨシヤナに説明してもらおう。

……ヘンなことを吹き込んでなきやいいんだけど、そこは信じてる

ので。うん。あの子はその辺りをぼかすことはしないはずだから。

ローマの近くに着いたら、ルブルム商会に手配しておいてもらった荷車とかで身分や外見をカムフラージュ。そのまま堂々とローマ市内に入り込むことに成功した。

カーズ様たちはまだ到着してなかったこともあって、待つてる間はみんなに自由行動をさせてあげることができた。

みんななんというか、田舎から上京した若者って感じで見てると微笑ましかったね。この時代としては最先端を走るローマだ、アルビオンの風景とはまるで違うもんね。

彼らの目を特に引いたのは、やっぱり巨大建造物。凱旋門の類に始まって、水道橋や円形闘技場なんかが人気だった。

中には闘技場に飛び入り参加して優勝をかつさらった子もいたんだけど、ただの人間相手に半吸血鬼が全力出したらそりゃあそうもなる。

その間わたしは何をしてたかと言えば、波紋使いたちの調査だ。ルブルム商会はローマ市内にも拠点を構えてるから、彼らの情報網を使って今何をしてるのかを調べてたよ。

まあ、向こうも相当警戒してるのか、事前にわかってたこと以外でわかったことなんてほとんどなかったけどね。

強いて言うなら、今ローマにいるスタンド使いが一人だけってくらいか。他はみんなシチリア島に向かったらしい。スタンドが使えずとも、波紋戦士として一流の人間はまだまだいるみたいだけど、スタンド使いがいらないだけで戦力にはだいぶ差が出る。カーズ様の作戦、大成功じゃないのこれ。

「ふっ、当然だ」

合流してきたカーズ様にそう伝えたら、渾身のドヤ顔を拝むことができた。井上ボイスでそれはずるい。

まあそれはともかく、カーズ様たちの合流に合わせてわたしは半吸血鬼とルブルム商会の面々を動員。およそ一日かけて、秘密裏にローマの街を可能な限り封鎖した。

もちろん正体はわからないように特殊な恰好をさせてだ。ついで

に波紋対策もつけてあげている。こうすれば万が一波紋戦士と戦うことになっても、安心して戦えるだろうからね。

そしてその夜。いよいよ本作戦が始まる。

「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ！」

シヨシヤナが、スタンドを発動させる。すぐさま怪人のように変身した彼女の姿は、かつてと異なり翼まで真っ黒に染まっていた。それはまるで彼女が吸血鬼になったことを示しているようで、わたしとしてはちよつと複雑なんだけど、それはともかく。

そうやって変身したシヨシヤナは、本体と同化する性質のスタンドゆえに誰もがその全身をはつきりと認識することができる。

そんな彼女が、夜とはいえまだまだ元気な繁華街に突如として降り立ったら。しかも暴れ始めたら、さてどうなるでしょう？

答えは一つしかない。

阿鼻叫喚、とまでは言わないけど、悲鳴と怒号が飛び交う大騒ぎに早変わり、だ。

それを一瞥して、カーズ様たち三人はそれぞれの目的地に向かって散開する。

わたしは彼らを見送って、深呼吸を一つ。

「……たぶん、これが今回寝る前最後の仕事だ。がんばるぞ」

自分に言い聞かせるようにつぶやいて、わたしはいつでも動けるように意識を集中させた。

29. スーパーエイジャ争奪戦 急

変身したシヨシヤナが暴れるたびに、人々の悲鳴が上がる。

暴れる、と言っても本気で殺すつもりでやってるわけじゃなくて、少し転がしたり、クツシヨンになるようなものに向けて投げたり撃つたり、あとは壁をぶん殴って破壊してるくらいなんだけど。何せ見た目が見えた目だ。

何より一撃で粉碎される壁、という絵面が人々の恐怖を煽るんだろうね。わたしも前世時代にああいう存在と出くわしたら、正気でいられる自信がないもん。

あれで吸血鬼としての能力まで使ったら相当な騒ぎを起こせるだろうけど、それはやりすぎになる。小心者のわたしは死者はおろか怪我人だってできるだけ出したくないから、それはしないようにってシヨシヤナには伝えてある。

まあ、元々そっちの力を使わないようにって言うてあるんだけど、今回はカーズ様も下手に騒ぎを大きくしないように言ってきたるしね。どっちにしてもナシってわけだ。

そんな様子を高所から観察しつつ、周りにもできるだけ目を向ける。シヨシヤナが暴れるのに合わせて、人々が向かう先を絞るように立ち回ってる半吸血鬼たちが見える。今のところ順調そうで何より。

……なんだけど、

「もう来た……初動が早いなあ、さすがローマの街中ってことかな」
武装した兵士たちがすぐさまやってきて、シヨシヤナを取り囲んだ。

彼らは、シヨシヤナ相手に誰何はしなかった。暴徒を見て、すぐさま攻撃に移る刃り時代を感じる。

とはいえ、普通の人間が槍で突きかかってくらいでシヨシヤナには傷一つつけられない。彼女は避けるそぶりも見せず、すべての攻撃を身体で受けた。

もちろん、それで「ラ・ラガツア・コル・フチーレ」の守りを抜けるはずがない。硬すぎたのか、全員が手を痺れさせたようなりアク

シヨンをして愕然としていた。

にやり、と。シヨシヤナの顔が歪んだように見えた。あのスタンドの顔の表情が変わることはないんだけど、なんだかそう見えたんだ。次の瞬間、シヨシヤナが前進しながら腕を振るったことで、兵士たちが文字通り宙を舞った。

そこからしばらく、シヨシヤナの独擅場が続いたけど……。

「来た、波紋使いだ」

彼女の下に方々から急行する、屈強な男たちがわたしの視界に入り込んだ。ただの兵士とは明らかに一線を画する身体つきに加えて、耳に届く独特な呼吸音。波紋使いだ。

「ごめんね……しばらく通せないんだ」

わたしは「コンフィデンス」を出すと、彼らの進路を妨害する形で周辺のを撃ち抜く。全力でやると普通に建物が倒壊しかねないから、手加減してね。

すると壁とかが崩れて、いくつかの道が使えなくなる。いきなりのこと波紋使いたちが驚くけど、それは一瞬。彼らは気を取り直してすぐに別の道を目指し始めた。

うーん、有能。すぐに意識を切り替えられるなんてすごい。それでいて、妨害を受けてる可能性を考慮して周囲を警戒してる。これはちよつと、工夫したほうがよさそうだ。

わたしは全身の色を、夜闇に紛れるように黒く変えた。これでそう見つかからないだろう。ついでに、位置も少し変えよう。

「……あつちも順調……なのかな？」

そんなとき、風に乗ってあまりにも凄惨な悲鳴が聞こえてきた。方向的に、カーズ様が向かった先だ。

……うん、まあ、その。つまりそういうことなんだろうね。相変わらず容赦がないなあ……。

「わっ？」

思わず視線が遠くなったわたしの横を、人間が吹き飛んでいった。シヨシヤナに飛ばされたらしい。勢いから言って、射出されたのかな。

見ればシヨシヤナは、なんとかたどり着いた波紋使いたち相手にも優位に立ち回っていた。

それも当たり前だ。だってシヨシヤナ、飛べるもん。

「ラ・ラガツツァ・コル・フチャーレ」は、墮天使みたいな見た目のスタンドだけど。あの翼、飾りじゃあないんだよね。訓練を重ねた結果、彼女は今や普通に飛べる。

訓練した理由が、便利とか強いとかじゃあなくてわたしと一緒に飛びたい、な辺り相当アレだけど……それはそれとして、肉弾戦で飛べるってことがどれだけ有利かは言うまでもないわけで。

しかも彼女の能力は接触したものの射出なので……こう、そこら辺から拾った石でもあれば一方的に攻撃できるんだよね……はつきり言つてシンプルに強すぎる。

そして波紋は、基本的に接触しないと効果がないので……うん……なんていうか、無双ゲーみたい。あそこだけなんか世界が違う感じする。

「ふにゃあ」

「おや。こんなところにいたら危ないよ」

飛び交う人々を尻目に、これはわたしの出番はないかなあと思いながらもたどり着いた屋根の上で、丸くなつてくつろいでいる猫と出くわした。

こんなときにこんなところでのんびりしてるなんて、肝が据わってるなあ……。

しかもこの猫、逃げる気配もなく近寄ってきた。随分と人懐っこい猫だなあ。飼い猫なのかな？

かわいいけど、かといつて遊んであげるだけの暇はないわけで。あとから来といてなんだけど、ちよつとだけ横にズレてもらおう、

「うゝ あおツ!？」

どかそうと思つて身体を持った瞬間、その手から全身にビリッと衝撃が走った!

「なっ、な、ななな、なあゝゝ!？」

大慌てで猫から手を離して、さらに距離も取ってから触れた手を見

る。その手はじゅくじゅくに溶けかけていて、白煙がうつすらと上がっていた。黒くした肌の色が元に戻ってるのは、ダメージ受けたからだとして……。

これ波紋傷だ!? 猫が波紋を使っただって!? そんなバカな!

混乱しつつも猫に目を向ければ、当の本人はのんきに「なんかあったの?」とでも言いたげに首を傾げていた。

耳を澄ましてみるけど、波紋の呼吸をしている気配はない……ということは、まさか。

「スタンド攻撃を受けている……!?」

い、一体どこから!?

周りを見渡してみるけど、それらしい姿は見えない。いや逃げ惑う人が多くて特定できない、のほう正しいか。

待つて待つて、落ち着こう。まずは状況を整理だ。

猫が波紋を使った。これはたぶん間違いない。だけど猫自身にそんな自覚はなさげで……おまけにしている雰囲気もない。

どういうことだろう? 動物を操るとか、変身するとか、乗り移るとか……その辺りかと思うけど、だとしたら波紋の呼吸してる様子がないのはおかしいよね……?

で、でも仮にそういう搦め手系の能力だった場合は、遠距離操作型のことが多いはず。もしそうだとしたら……うん、すぐ近くとまではいかないまでも、劇的に離れた場所にいる可能性は低い。はず。たぶん。いたとしても、隠れてるはずだ。

そして事前の調査のおかげで、ローマにいるスタンド使いは似顔絵程度ではあるけど全員顔を覚えてる。誰がどんな能力かまではわからないけど、少なくともシチリアに出撃せず残留した人の顔はわかってるんだ。そこに気配を探る手順も加えれば……。

「にゃあん」

「ひえっ」

ところが、そんなわたしをよそに猫が近づいてきた。どこまでもマイペースなのはいかにも猫っぽいんだけど、そのまま屈託のない表情でじやれついてくるのは今はちよつとやめてほしい!

「わあーっ、ごめんこっち来ないで！ 今の君すごく危ないから！」

「ふにゃあー」

「うひいー!!」

制止しようにも触ったら波紋だし、殺すなんてできないし、仕方なくわたしは飛び降りてこの場から逃げた。

あーもう、我ながら情けないよう！ カーズ様に知られたら、お腹抱えて大爆笑されるやつだこれ！

あるいは恥さらしとかってなじられるか！ 猫から逃げる柱の一族とか、されても文句言えないけど仕方なくない!?

だってあの猫が宿してた波紋の量、おかしかったよ!?! あの猫の身体、まるで波紋でできてるんじゃないかって量だったんだよ!?!

太陽に耐性のあるわたしは同時に波紋にもそれなりの耐性があるんだけど、それをなでるくらいの一瞬のうちにあっさり貫通してくる猫とか、恐怖以外の何物でもないよ！

それにじゃれつかれるとか、死だよ！ 死あるのみだよ!!

「うっぎゃあああ!?!」

そうやって必死に自己弁護しながらも、ちょうどいい高所を見つけたからそこに着地したら……その瞬間、足から波紋が伝わってきた!

その衝撃はさっきの猫に勝るとも劣らないレベルで……猫と違ってすぐに身体を離せなかったこともあってか、わたしは下半身が一時的に麻痺してそのままそこから落下した。

落下しながらその足場をにらんだけど、全然普通の屋根だった。何の変哲も無い屋根。なんでそこから波紋が伝わってくるんだよう!?!

いやでも、なんとなくわかった気がする！ そもそも波紋は非生物には宿らない。剣とかに波紋を流す技はあるけど、あれはあくまで伝わらせてるだけでとどめておけるわけじゃあないんだ。それはありえない。

ありえないのに今まさにそれが起きてるってことは？ きつと普通じゃない力が働いてるんだ。そしてこの世界には、それがある。

スタンド。傍に立つもの、あるいは立ち向かうもの。そこから発現する能力は、この世の物理法則を無視する!

そして今わたしが受けてる攻撃は、たぶん攻撃であって攻撃じゃあない。これは一種の罠と見たね!

波紋を設置する。それも対象は生物、非生物を問わない。たぶん、相手はそんな能力の持ち主なんだ!

「ふぎえつ」

考察ができたところで、地面に叩きつけられる。くそお、波紋の影響もあって治りが悪いせいで普通に痛い!

起き上がる頃には痺れも綺麗さっぱり消えてたけど、痛いものは痛い!

「いつづ!」

そうしてもしかしてと思いながら、今しがた落ちてきた建物の壁に触ったら……案の定、波紋が流れてきた。

建物全体に波紋を設置ですか!?! どんなスタンドパワーしてるの!?!

くそう……まさかとは思うけど、行く先々に仕掛けてあったりしないだろうな!?! 可能性高そう!

「となると……やっぱ空だね!」

というわけで、わたしは翼を生やして改めて空に浮かび上がる。そのまま最初に陣取ってた場所と同じくらいの高度まで上がって、状況を確認。

少し目を離してたけど……ああ、さすがにシヨシヤナのほうは変わらずかな。無双している様子がよくわかる。

それでもできるだけ死人が出ないようにしてるのは、ちゃんと守ってくれてるようで何より。

となると、問題はわたしのほうだ。シヨシヤナの「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」は無敵に近い防御力を持つてるけど、弱点はある。あれは身にまよってるとるわけじゃあなくて変身してるものだから、かつてわたしが同化できたのと同じように波紋が通るんだよ。

変身中は平常時よりは耐性がついてて、普通の柱の一族くらいの耐性はあるけどそれは吸血鬼よりマシって程度だ。

だから彼女が今わたしが受けたような波紋を受けちゃったら致命

傷になりかねない。そうなる前にわたしがなんとかしないと……！
「まずは本体を見つけないと！ 話はそれからだよね！」

というわけで飛びながらそれらしい姿を探していると……。

「……いー あれだー！」

とあるインストラ（集合住宅）の上層階から、こちらをじつと眺めているやたら大柄なおじいさんがいた。顔の半分を覆うあの火傷の跡……間違いない、スタンド使いとして紹介された一人だ！

……またおじいさんか。太公望みたいな凄腕じゃなきやいいんだけど、多分そうもいかないんだろうな。

彼はにやりと笑うと、とてもその見た目からは想像できない跳躍力で建物を屋根伝いに移動していく。来るなら来い、つてことだろうか。どこからどう見ても罨だよねえ……。

でもこのままじつとしてるわけにもいかないか。虎穴に入らずんば虎子を得ず、だ。仕方がない、シヨシヤナのためにもがんばるぞ。

心の中で自分を鼓舞して、わたしは彼を追いかけ始める。もちろん、ただ追いかけるだけなわけではない。矢を射かけながらだ。

移動もずつと飛んでやってるから、仕掛けられてる罨を踏むことはないはず。空中に罨が仕掛けられてる可能性は排除できないけど……それをされてたら飛ぼうが走ろうが防ぎようがないし、そのときはダメージ覚悟で突っ込もうと思う。

「うーん……当たらないなあ……？」

周りの家を破壊しすぎないように手加減してるとはいえ、それなりの威力で撃ってるんだけど。軌道も操作して追いかけてるのに。

なんだか不思議な挙動してるんだよね。ふわふわ空中を漂ったり、かと思えばすっと落ちたり。なんなら近くを通った矢の勢いだけで吹き飛んだりしてる。波紋にあんな歩法（？）なんてあったっけ？

それともあれもスタンド能力なんだろうか？ スタンドつて一つ一能力で、複数持つてもなんらかの共通点があるものだけ……。もしかして、ただ波紋を設置するだけの能力じゃないのか……？

わたしがその考えに至った、ちょうどそのときだ。おじいさんが足を止めて振り返った。

「……追いかけてこは終わりですか？」

「そうじゃな、これで終わりじゃ」

追いついたわたしの質問には、即答でそう返ってきた。あまりにも自信に満ち溢れた答えと、その体内からずりと出てきたリスに似た小動物に、わたしは警戒度を上げる。

周囲は古い神殿まで至っていた。その上に立って、わたしたちは向かい合っている。

古い上に小さくて、少し前に引越しがあつた神殿じゃなかったわけここ。周囲を見渡しても、特に何か目立ったものがあるようには見えないけど……たぶん、この建物には波紋が仕掛けてあるはずだ。波紋以外にも、何かある可能性は高い。わたしは背中の翼をハチドリのものに変えて、空中にとどまった。

あとはあのリスみたい……そう呼ぶしかない奇妙ないでたちの小動物は、間違いなくスタンドだろう。尻尾が注射器みたいになっている。それがおじいさんの手のひらにも文字通り出現する。群体型なのかな？

新しく出現したやつもデザインは同じだけど、注射器っぽくなって尻尾の雰囲気が違う。体内から出てきたのはタンポポの綿毛みたいなものが入ってるけど、あとからパツと出てきたのはバチバチと火花が電気みたいなのが見える。

ここでスタンドを出してきた意図はわからない。だけど、何かをしようとしているのは間違いないはず。

だからわたしは、「コンフィデンス」を引き絞る。今度こそ逃がさないぞ。

そして先手必勝、矢は一気に六本！ 行つけえー！

「なるほど速くて強い……狙いも正確じゃ。しかし、当たらねば意味はない」

わたしの攻撃を見るのと同時に、おじいさんの体内にあとから出てきたスタンドがずりと入り込んだ。

「ッ!？」

すると次の瞬間、おじいさんが二つほど離れた横のインストラの屋上

にいた。

なんだ!?! 今、一体何が起きたの!?! 超スピード!?! いやまさか、時間停止!?!

大慌てで相手に目を向ける……と、その視線の先、ちようどわたしたちの間でありながら神殿の屋根の淵のところ、いつの間にか先ほど見たリスっぽいスタンドがいた。その尻尾には、煌々と輝く白い光が入っっていて……。

「そして波紋で傷を負うということは……太陽に弱いということ!?!」
「……!?!」

「滅せよ吸血鬼!?! 太陽の光に焼かれて灰になるがよいツ!?!」

「わあああああーっ!?!」

そのスタンドが、ずぶりと神殿に入り込んだ次の瞬間。その神殿が光り出した。まるで真昼の太陽のような、真っ白な光が湧き上がる。

光を回避するなんてもちろんできるはずもなく、わたしはそれに呑み込まれたんだけど……痛い痛い痛い!?! これ、これはただの光じゃあない!?! 日光だ!?! やっぱり波紋以外も設置できたんだ!?!

でもだからって、まさか日光まで設置できるとか思わないでしょ!?! この光量、この神殿の近くまで来た時点で大ダメージ不可避じゃないか!?!

とにかくここから離れるべく、わたしは大慌てで神殿から離れる。だけど既に翼を維持できなくなって、無様に地面に墜落した。

それでも光が収まることはなくて……ああ、これはもうダメだ。身体が石化し始めたのがわかる。食らった日光があまりにも強烈過ぎたんだ。

普段ならもうちよつと耐えられそうだけど、休眠期直前の今はこれ以上は無理だ。さほど時間をかけることなく、わたしは気絶するだろう。

「うう……!?! ほ、本当に……本当にどこまでも不甲斐ないわたし……!?! 何やつても全然だ……!?!」

地面を這いつくばりながら、思わず自己嫌悪に囚われそうになる。でもここですんなり終わってたまるもんか!?! せめて、せめて悪あ

がきぐらいはっ！

たどり着いたインストラの壁で身体を支えながら、「コンフィデンス」を空に向ける。つがえた矢に描かれた紋様は、雫。

そしてわたしは……トドメを刺すそぶりも見せずに屋根からわたしを見下ろしていたおじいさんを一瞥すると、今生まれたばかりの第四の矢を発射した。

と同時に、わたしの身体を石化が覆いつくして……ほどなくして、わたしの意識は闇の底へと落ちていった。

30. ペル・アスペラ・アド・アストラ 1

相手の気配が消えたことを確認して、テルティウス・クラウディウス・マルケッルスは、自らのスタンドをとめた。

ずぷり、と神殿からリスのような見た目の小さい動物が現れる。それを手元に呼び寄せながら、テルティウスはふうと一息ついた。

手のひらに上がってきたその小型のスタンドをちらりと一瞥する。尻尾になっている、注射器めいたものの中にある白い光が弱くなっていた。

「やれやれ、まさか幽波紋を使う吸血鬼がおったとは。日光を貯めておいてよかったわい。備えあればなんとやらじゃな」

スタンドをひとまずかき消して、ひとりごちる。

だが彼は、死んだはずの相手が石の状態とはいえまだそこに残っていることに気づいて目を見開いた。

「バカな、灰になっておらんじゃと?」

吸血鬼ならばありえない事実を前に、思わずうろたえる。

しかしそれも一瞬。わずかな思考ののち、ならばトドメを刺せばよいと判断して神殿の屋根から飛び降りた。そして警戒しながら、直前まで戦っていたアルフィーに近づく。

石化した彼女は翼を広げつつ、弓を空に向けて引き絞った体勢で完全に固まっていたが、テルティウスはその表情に何か含むものが感じられた。

気配が消える直前、空に矢を放つたことは見えていた。あれがスタンドであることはテルティウスには理解できていたため、何かしようにとしていたことも理解できた。

「ならばあまり警戒しすぎて、増援が来てもいかな。なるべく急いで破壊してしまうか」

ひとまずアルフィーが何も反応しないことを確認したテルティウスは、足元に転がっていた手頃なサイズの石を拾うと、出現させたりス型のスタンドを出す。注射器のような形状の尻尾では、黄金に輝く波紋のエネルギーが躍っている。

そのスタンドを潜り込ませた石を、テルティウスは振りかぶって投げた。

老いているとはいえ、鍛えられた人間が投げた石だ。それはかなりの速度でもって、アルフィーの翼部分に当たり……石のほうが砕けた。その瞬間、テルティウスの左腕からつぷりとわずかに血が漏れる。

「む……これでは足らんか」

顔をしかめた彼は、ため息をつく。

「しかも波紋の性質を与えた石に触れても、影響はないと来たか。厄介な置き土産もあつたもんじゃ……」

さらにため息。

「手近な武器はないが……高所から落としてみるか。さすがに多少の効果はあるじゃろ」

そしてそう付け加えて、アルフィーに歩み寄ろうとした。その瞬間。

「……！」

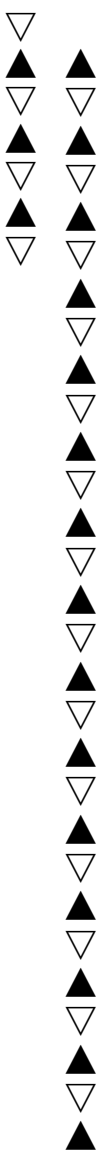
空から飛来する憎悪を感じて、テルティウスはとつさに後方へ跳んだ。それとほぼ同時に、アルフィーをかばうようにして何者かが着地する。その軌道は間違いなく、テルティウスを踏みつぶそうとしていた。

現れたのは、黒い全身に、黒い翼を背負う異形。自らのスタンドによつてその身を変じたシヨシヤナだった。

「……もう来おつたか、予想よりもだいぶ早いな」

「……殺すツツ!!」

そして彼女は、衝撃すら伴うほどの怒声と共に前へ出た。



その少し前。夜の街に突如として現れた昼の光に、誰もがそちらに気を取られていたころ。

シヨシヤナは忌々しい日光を避けて、一度物陰に隠れようとしていた。

しかしそんな彼女に、見覚えのある矢が飛んでくる。それがまっすぐに己に向かっていることを見とめた彼女は、それが偏愛する主人のものだと判断して頭部だけ変身を解除した。

そこには、矢の殺傷力を懸念するそぶりなどかけらもない。彼女にとってはその疑いの余地がないし、そもそも主人に殺されるなら本望ですらあった。

だがそんな彼女も、頭部に突き刺さった矢からもたらされたものには驚愕を覚え、さらには底のない怒りに支配されることになる。

彼女の主人……アルフィーが悪あがきに放った新しい第四の矢。雫の紋様が刻まれたその矢がもたらしたものは、アルフィーの記憶だった。いや、正確にはその場所の記憶とでも言うべきか。

アルフィーがいかにして敵に出会い、戦い、そして敗れたか。それが、アルフィーではなく神の視点でシヨシヤナに流れ込んできたのだ。

様々な角度から俯瞰できる記憶を与えられたシヨシヤナが、それに怒りに突き動かされることは必然であった。

やがて雫の紋様が黒く変じ、その役目を終えて霧散したとき。もはやその怒りは誰にも抑えられなくなっていた。

彼女は周りを見無視して空へ上がると、そのまま一直線にアルフィーの下へ向かい……テルティウスと遭遇した。

かくして二人は、必然として戦い始める。

しかしシヨシヤナは当初怒りに支配されていて、我を忘れていた。暴走列車さながらの、制御も何もあつたものではない一直線の攻撃をしかけて返り討ちに遭った。

無駄のない足払いと、人体の急所への的確な一撃。さらに波紋が加わったそれは、「ラ・ラガツァ・コル・フチーレ」に阻まれこそのしたもの、その守りを抜いてシヨシヤナの身体をわずかに焼いた。これにより、彼女は多少なりとも落ち着きを取り戻したのだ。

そこからの戦いは、ほぼ一進一退へともつれ込む。

(なんとという苛烈な攻撃か！ 少しでも気を緩めたらそこで腕の一本や二本、簡単に持っていかれかねん！)

シヨシヤナは受け取った記憶を元に、テルティウスにスタンドを使わせないように巧みにものを発射して行動を制限。同時に吸血鬼としての身体能力をフルに発揮して猛烈な、けれどそれまでとは異なる制御された攻め方を見せる。

(くっ！… なによこの爺！ なんで一発も当たらない!?)

一方で、テルティウスも引かない。磨き抜かれた熟練の技は、スタンドを多少制限された程度では陰ることはなかった。強烈な攻撃力を前にしてもひるむことなく、受け流しや障害物を駆使して致命的な一撃は一切受けていない。ときには自らのスタンドすら見せ札として使い、攻撃を誘発することすらあった。

一見するとテルティウスが位置を常に変えているし、シヨシヤナの派手な攻め方からシヨシヤナ有利に見えるが、実際はそうでもないほど状況は拮抗していた。

またその裏で、テルティウスはスタンドのいくつかを気づかれないように動かしている。それらは既に、テルティウスの波紋を抱えて周辺の様々なものに潜り込み、場を整えつつあった。

整えつつあったが……。

(こやつ……並みの吸血鬼と違って波紋に耐性を持っているな？ 接触するたびに流しているのに、手ごたえがほとんどない！)

苦々しい思いを決して表には出さず、テルティウスは呼吸を整える。

それによつて波紋が練り上げられるが、その量は決して多いほうではない。ローマでも屈指の使い手の彼ではあるが、その神髄は波紋の量ではなく操作にあった。

とはいえ、波紋に強い耐性を持つアルフィーに即ダメージを与えられたのは、それだけでもない。対象に性質を付与するスタンドと合わせつつこそその結果だ。

そう、彼のスタンドの能力は性質の付与。与えられた側はそれそのものとも言える性質を帯びるため、テルティウスの丁寧に制御された

波紋を付与すれば量の多寡は関係なく、波紋の「吸血鬼や柱の一族に強力なダメージを与える」という結果だけが生じるのだ。

これはすなわち誰を相手にしてもダメージ量は同じ、即死させられないということでもあるのだが、防御力を無視できる意味は極めて大きい。

これで地面そのものに波紋の性質を付与できればよかったのだが、世の中そう上手くはいかない。大きなものに付与すると、それだけ多大なエネルギーを消費するからだ。

（うーむ、さっきの分は光る性質まで吸い出してしまったものじゃから、あれを使うと即座に光ってしまって隠せぬ……我が技ながら妙なところで融通が利かぬわい。使い所をしかと考えねばな……それまでは、波紋をたくさん仕込むとしよう）

ちなみに自分に対して使用することもできるため、波紋を付与すればわずかな接触でダメージが与えられるようになる。しかしそのために用意したスタンドは、囷にしたものそうでないものの区別なくもの見事にすべて妨害されて使えないでいる。

（最初からまるでわしの能力を知っているかのような動き……あの最後に放たれた矢の影響か？）

彼の予測は正しい。シヨシヤナは与えられた記憶から、ほぼ正確にテルティウスの能力を把握しているのだから。より正しくは発動条件を、だが。

さらに言えば、彼女はアルフィーから……原作ジョジョの知識を知るものから、スタンドに関することはほぼすべてを教えられている。

だからこそ、彼女はテルティウスにスタンドを使わせない。スタンドが持つ能力は、どんなものであろうと使い方次第で相手を即戦闘不能に追い込めると教えられたからだ。

（スタンドなんて使わせるものかッ！ 囷に使うならそれでもいい、そのスタンドごとぶっ殺してやるッ！）

さらに、彼女は実のところテルティウスが繰り出そうとするスタンドのいくつかが囷であることには気づいていた。

しかしそれでもスタンドを狙うのは、単にスタンドを使わせないと

いう牽制のみならず、本体へのダメージも狙っているからだ。群体型のスタンドは本体へのフィードバックが少ないが、ゼロでもないのだから。

事実、テルティウスの身体は無傷ではない。わずかではあるが、血があちこちからにじんでいる。多少のキズなど波紋でどうにでもできるはずが、それでも出血があるということはやはり群体型でも限度はあるということに他ならない。

戦い方としてはかなり消極的ではあるが、そもそも殴る蹴ると言った単純な攻撃が一発も当たらない。達人級の技術を前に、致命傷を与えるには至っていないのだ。こと殴り合いのみに限って言えば、この時代で最も洗練された体系を極めたテルティウスと、ただ強大な力を持つだけのシヨシヤナの差は隔絶したものがあつた。

それゆえに、彼女はどれだけ迂遠であろうとダメージとなるならなんでも狙う必要に迫られていたのである。

(なんでもいい、押し切るツ！　どんなことをしてもこいつは絶対に殺すツ！　殺さなきゃいけないツツ!!)

シヨシヤナはさらに、前に出る。今度は地面を踏みしめてではない。翼を広げ、地面ストレスを切り裂くように飛んでだ。

(ちい、やはりそう来るか)

自らのスタンドの多くを地面に近いところにあるものへ潜ませていたテルティウスは、それに眉をひそめる。触れてくれなければ意味がないのが波紋の性質だ。これではせつかくの罠があまり使えない。

それでも使い道はある。テルティウスは攻撃をかわしながら地面を転がりつつ、波紋を付与していた瓦礫を拾う。

その間に、シヨシヤナは完全に空の上にいた。道中、手近なところにあつたインストラを破壊し、それがテルティウスに降り注ぐように乱射しながら。

(これだから吸血鬼は嫌いなんじゃ！　何百年とかけてここまで至つたローマの街に対する敬意がこいつらにはまったくない！)

テルティウスはそんな雨あられと降り注ぐ壁の一部を最低限回避しつつ、ダメージを受けながらも拾っていた瓦礫を憤慨と共に投げ

る。それは一直線にシヨシヤナに向かうが、空中を自在に動く彼女にはあつさりかわされた。

だがそれでいい。彼はそれを狙っていたのだ。シヨシヤナが回避にリソースを割く、一瞬さえあればよかった。

「困難を乗り越えペル・アスペラ・アド・アストラ！」

テルティウスが己のスタンドを手元に出した。その注射器状の尻尾では、音がないのが不思議なくらいの紫電が躍っている。

「……！」

「さてここからが本番じゃぞ！」
ずぶりと。

それがテルティウスに入り込んだ次の瞬間。

彼という人間に、雷光の性質が付与された。

31. ペル・アスペラ・アド・アストラ 2

テルティウスの宣言に対して身構えるより早く、シヨシヤナは腹部に衝撃を受けてたたらを踏んだ。

「!?」

すぐ目の前には、間違いなくテルティウスがいた。無駄なく、右の拳を突き出した状態で。

「この……」

即座に反撃しようと腕を動かすが、それと同時にテルティウスの姿が消えて空を切る。

そして次の瞬間、彼は完全にシヨシヤナから離脱していた。

「……ッ！」

「さて、見えるか？」

テルティウスが構える。と同時に消える。そして、シヨシヤナは打撃を受ける。あてずっぽうで攻撃を試みるが、当然のように当たらない。かすりもしない。

そうして相手の姿を認識できないまま、彼女はしばらくは術もなく攻撃を四方八方から食らい続けた。

ただしテルティウスのほうも、完全には波紋を流し込めていない。接触が一瞬ということもあるが、やはり「ラ・ラガツア・コル・フチーレ」の防御力が高すぎるのだ。これがなければ、既にシヨシヤナは死んでいるだろう。

それでも、強固な防御力を持つシヨシヤナにこれほどのダメージを与えたものは過去にはいなかった。

「な……めるなあッ！」

ただ、そこは彼女も吸血鬼。人間より鋭敏な感覚が、テルティウスの行動のタネを理解しつつあった。

それでこの状況を覆せるかと言えば、必ずしもイエスではない。ないが、それでも彼女は己の推理に従って虚空を裏拳で薙いだ。それまでと違って、明確に何かを察した動きだった。

すると派手な音を立てて一瞬テルティウスが裏拳の寸前に現れ、直

後地面を蹴り抜いた砂埃とともに再度消える。

そうして刹那のうちに、彼は遠巻きに現れた。

「やりおる。さすがに吸血鬼じゃな……」

「……超スピードということね？」

「いかにも」

大股に踏み出してシヨシヤナが問えば、テルティウスは隠すほどのことでもないと言いたげに肯定した。

彼が自身に宿したのは、雷光である。雷ではない。雷光だ。即ち光。

光の性質は様々あるが……中でも彼が選んで宿したのはその速度だ。時代の科学的知識の限界から、それ以外に選べないとも言うが、それはともかく。

光より速く動くものは、この地球上には存在しない。少なくとも、二十一世紀の段階でもそれは揺るぎない。まして、生き物でそれを認識できるものなどあるはずもない。

そう、今のテルティウスはまさに光速で動く。動けてしまう。

再びテルティウスが動き、怒涛の攻撃を開始する。

だがシヨシヤナがいかにも人間を上回る身体能力を持っていようと、その速さを視認することは不可能だった。

(くそっ、速い！ 集中すればなんとどこから来るかわかるけど、割に合わない……ッ!!)

最初に比べると、明らかに対応できるようになってはいる。ただ、それでもまったく間に合っておらず、攻撃はすべて空振りだ。光とはそれだけ速いのだ。

だが、それでもシヨシヤナに諦めるという選択肢はなかった。今まで蓄積したダメージもあってか、波紋によって肉体が焼ける音も響き始めていたが、そんなことは関係なかった。アルフィーに傷をつけた男を許すつもりなど、毛ほどもないのだから。

「これは……どうだアッー」

歯を食いしばり、シヨシヤナはテルティウスが来ると判断したほうへ向けて地面を勢いよくえぐった。それによって巻き上げられた砂

と、土、それに小石が、散弾となってテルティウスに向かう。位置の目測は正しかった。

ただそれは、当然のように回避される。シヨシヤナの行う射撃は既に銃に匹敵する速度を持つが、光速で動けるテルティウスにとっては不足に過ぎる。

だが、ひとまずそれでよかった。たった一瞬でも、テルティウスの意識が外れさえすれば、シヨシヤナは飛び立てると判断して。

とはいえ、馬鹿正直にこの場で上に行こうとは思っていない。空に上がるのは逃げるためだが、その能力ゆえに彼女は逃げながらも攻撃ができる。

だから彼女は、躊躇なくインスラに飛び込んだ。否、体当たりした。それを受けたインスラは、先ほどシヨシヤナによって一部を破壊されたインスラであり……この体当たりによっていよいよ寿命を迎え、崩れ始める。

彼女はそれだけにとどまらず、隣、さらに隣と移動して周辺の建物も破壊しにかかった。

「やめんか！ これ以上街を破壊するんじゃあないッ！」

その行動に、テルティウスは気色ばむ。

慌てて止めようとするが、既にシヨシヤナはそれらに順次触れている。

「これならどうよー！」

テルティウスの言葉を無視して、一気にその能力を発動させる。

たちまち彼女に当たった、あるいは触れた大量の瓦礫が次から次へと弾丸となってテルティウスに殺到する！

「吸血鬼め……！ 甘く見るでないぞー！」

圧倒的な物量で全方面から放たれるその攻撃は、光速で動けたとしてもかわせない。このまま光速で動いたら、逆に光速で弾丸に突っ込むことになるだろう。テルティウスがもっと小さい身体をしていればあるいは、隙間を縫って避けられたかもしれないが。彼の体格で、この弾幕を抜けることは不可能だ。

だが、そんな攻撃を前にテルティウスは慌てない。対策は、持って

いる。光速移動すら、テルティウスにとっては戦いの一手段でしかないのだ。

彼はシヨシヤナの動きを止められないと見るや、すぐに体内からスタンド【ペル・アスペラ・アド・アストラ】を放出していた。代わりに、今度は一見すると空の尻尾に見えるスタンドを身体に入れる。シヨシヤナの攻撃は、直後に彼を襲った。

ほぼ全弾がテルティウスの身体を貫いたが……それは貫くというより、素通りと言ったほうがよかった。何せ、弾丸を全方位から受けたテルティウスは、ダメージを受けなかったのだから。

その結果にシヨシヤナは目を見開く。

「今のは……！」

「答える義理はないッ！」

その宣言と共に、攻撃の余波で巻き起こった砂煙の中にテルティウスは身を隠す。

すぐにその気配を追って攻撃をしようとしたシヨシヤナだったが……それよりも彼女は、別の場所の変化に気づいて視線をそちらに向けてしまった。

だがそれはある意味、無理もない。何せそこでは、石化したアルフィーを波紋戦士たちが取り囲んでいたのだから。シヨシヤナにとってそれは、決して見過ごすことのできないものだった。

「来たか！ お主ら、その像をしかと持ち帰るんじやぞ。吸血鬼たちのことが調べられるかもしれん！」

「はっ！」

「やめろッ！ 汚い手でアルフィー様に触れるんじやあないッ!!」

シヨシヤナはこの瞬間、テルティウスを忘れた。隠れているのに声を上げたテルティウスを、完全に意識の外に追いやってしまった。結果、彼女は一直線に、全速力でもってアルフィーの下へ急降下する。

その動きを見逃すテルティウスではない。彼は砂煙の中から飛び出すと共に、網を投げ込んだ。物陰に隠していた道具の一つで、誘い込んだアルフィーが万一日光に耐えたときに備えてのものだった。

放たれた網はすぐに大口を開けて広がり、シヨシヤナの身体を掬め

とる。と同時に、その身体に波紋が一気に流れ始めた。

「ぐうあああああッ、きつ、貴様らあああッ!!」

そしてこの網は、ただの網ではない。油が染み込んだ縄で作られており、対吸血鬼用に仕上げられた一品だった。

油は波紋をよく伝える。そこに自ら飛び込んだシヨシヤナのダメージは、それまでの比ではなかった。

「よしー!」

「やったッ!」

それを見て、アルフィーを運ぼうとしていた男の一人も歓声を上げた。他のものも声にこそ出さなかったが、勝利を確信して表情を緩める。

「まだじゃ、まだ気を抜いてはいかん!」

しかしテルティウスただ一人が、それに否を唱えた。そして彼の指摘は正しい。

「へ……? うぎゃあッ!」

不意にインスラの壁が崩れ、波紋戦士の一人が潰されて即死した。突然の出来事に、誰もがそれに気を取られる。

一見すると不幸な事故に見える。だが、その崩れたインスラは他と違ってまったくの無傷だった。それがいきなり、何の脈絡もなく崩れ、しかも狙ったかのように人に落ちてくるというのはあまりにも不自然だ。

そう、まるでそれが最善であるかのように、そうであるべしと引つ張り出されたようで。

ゆえにテルティウスは注意を促し、自身も気を緩めることなく周囲に目を配ったが……それでも、死角から飛ぶようにして襲ってきた白人型に対処しきれず、網から離れるしかなかった。

「テルティウス様!」

「わしはよい! それよりお主ら、後ろじゃ!」

「ぎゃっ!」

白人型からの攻撃をテルティウスがバク転で回避するのと、波紋戦士がさらに一人、猛烈なアッパーカットで宙を舞うのは同時だっ

た。

その攻撃を見舞った人物は……。

「トナティウ!？」

「ちよつとなんで言うんですか、こちとら顔隠してるんですよ!？」

「はーもうまったく、相変わらず頭が沸騰してますねあなたは! そんなあつきりはめられて、吸血鬼として恥ずかしくないんですかばーがばーか!」

「うるさいわね! あんたから殺すわよ!？」

「ふふーん、やれるものならやってみてくださいよ! ぷぷつ、そんな網の中でどうこうできるならですけどー?」

「きいいいいいいーッ!!」

そう、トナティウだった。ただし顔は布で覆い隠しているし、全身もアサシンを思わせるものだ。

彼女はショシヤナを弄りながらも、止まることなく攻撃を繰り返してアルフィーから波紋戦士たちを遠ざける。

そんな彼女の背後からは、同じ格好の人間……もとい、半吸血鬼が十人以上現れた。彼らはすぐさま波紋戦士を蹴散らすと、アルフィーの身体を何重にも布で包んで撤収の準備を整えていく。

「くつ、逃さんぞー!」

「ダメでーす! おじいさんはここから通しませーん!」

「ちいっ!」

仲間を確認したトナティウは、テルティウスへ直進する。

その勢いのまま蹴りを放つが、テルティウスはそれを腕で的確に受け止めた。さらには呼吸を振り絞る。接触している腕から波紋がほとぼしり、トナティウの身体を襲うが……。

「……!? お主、人間か……!」

「ふっふっふ、あたしに波紋は効きませんよ!」

トナティウは一瞬硬直したが、それだけ。それは人間に波紋を流したときとよく似た現象で……テルティウスは愕然として声を張り上げた。

「吸血鬼に味方する人間とは! いることは知っていたが、この目で

見るまで信じたくはなかったわい……！」

しかし波紋が効かないと見るや、テルティウスは即座にトナティウを押し出しながら距離を取った。

だがその横から、白い人型……トナティウのスタンド「マクイルシヨチトル」が攻撃をしかける。間髪を入れずの連携は、さしものテルティウスもかわしきれなかった。

それでもそこは歴戦の戦士。彼はかわしきれないと判断すると、即座に左腕を捨てにかかった。率先して腕を犠牲にすることでスタンドのパンチによるダメージは最小限にとどめつつ、衝撃で吹き飛ばされることで大きく距離を離すことに成功したのである。

「ぐ……っ、っつ、この娘も幽波紋を使うのか！ 一体吸血鬼どもは、どこまでローマに根を伸ばしているんじゃ……！」

呼吸を整え痛みを消しながら立ち上がったテルティウスに、トナティウが正面から立ちはだかる。

その隣では五つの美しい花を公転させて、「マクイルシヨチトル」が同じポーズを取る。

「さあ選手交代ですよおじいさん！ 別にこの単細胞女のこととはどーだっていいですけど、あの方を痛めつけた不敬は見過ごせないのです！」

彼女の宣言に、テルティウスはここが己の命の使いどころだと覚悟した。

32. ペル・アスペラ・アド・アストラ 3

襲いかかるトナティウに対し、テルティウスは剣を持ち対抗する。先ほど吹き飛ばされたところで拾ったもので、いわゆるグラディウスと呼ばれるものだ。

彼はそこまで剣術に通じているわけではないが、ローマの市民権を持つものとして一通りの技は持っている。左腕がまともに使えないのは泣きどころだが、添えるくらいはできるしそもそも波紋戦士であればこの剣を片手で使うくらいはわけもない。これがあれば、技のない力だけの攻撃にはなんとか対処ができる自信が彼にはあった。

実際、襲いかかってくるトナティウの攻撃にも対応して見せた。放たれる拳を払い、振るわれる脚をかわし、ときには反撃も試みる。そんな応酬がしばし続く。

しかし剣はひらひらとしたトナティウの服を切り裂くことも、貫くこともできず、かといって接触時に流した波紋もやはり効いた様子がない。これでは牽制になっているかどうかも怪しかった。

とはいえ、テルティウスにとって気をつけるべきは彼女ではなくスタンド「マクイルシヨクトル」のほうだ。トナティウ自身も人間より強烈な攻撃をするが、吸血鬼に比べたら軽い。格闘技術も、シヨシヤナほどではないが力に任せたところが目立つ。テルティウスにとつてはノーダメージとはいかないまでも、なんとかさばくことができる。

だがスタンドの攻撃となると話は違う。何せスタンドにはスタンドでしか触れないのだ。そして攻撃力もスタンドのほうが高い。

だからこそ、出会い頭の一瞬でそれを見切ったテルティウスは、常にスタンドへ注意を向けていた。そしてその判断は正しく、彼は能力を使った確定的な一撃を幾度かもらうことになる。

それでも致命傷を負わずに済んでいるのは、彼が自らに付与した空気の……というよりは気体の性質が、受ける衝撃をほとんど通過させてしまっているからだ。

「あー！　またそれですか！　なんなんですかそれ！」

もはや何度目かもわからない至近での攻防。それを制したはずのトナティウが、悔しげに声を上げた。

「さて、当ててみるがよいぞ！」

スタンド「マクイルシヨクトル」の強烈な拳が直撃したテルティウスの身体が、そのまま拳ごと貫通している。肉体や血がまるで煙のようにふわりと舞ったが、ダメージはほとんどない。

とある並行世界には「当たらなければどうということはない」と言った男がいたが、テルティウスは当たってもダメージがないならどうということはないと言いたげに波紋を練り上げる。

彼はそのまま「マクイルシヨクトル」に体内から波紋を流し込む。黄金の輝きが走り、それは一瞬の誤差なく本体であるトナティウにも伝わった。

「いつつつつ、はーもう厄介！ あの子が苦戦したのもわかりますね……！」

スタンドの拳を下げながら愚痴るトナティウだが、それでも攻撃はやめない。美しいオレンジの花が咲き乱れる。

彼女が先ほどまで選んでいた最善は、あくまで攻撃を当てることだった。だがここからは、当てるとともに明確なダメージも求める。(こうなったら仕方ないですね……疲れるの早くなりますけど、段階を上げましょう！)

そう彼女が決めると、「マクイルシヨクトル」を公転する花の数が二つ減った。能力を発揮するための難易度が上がった証拠だった。

(花の数が減った……何かしかけてくるか?)

しかしテルティウスも簡単にやられるつもりはない。彼はまだトナティウの能力を見切っていないが、それでもやけにタイミングよく、あるいは不自然なまでにちょうどよく攻撃を食らうことがあることは認識していた。周囲に設置した罠をまるで場所を知っているかのように避けていく様など、呆れるしかなかった。

だからこそ、「マクイルシヨクトル」に起こったわずかな変化を見逃さなかった。相手が手札を切ったと見たテルティウスもまた、己の札を切る。

周囲に咲き乱れる花と共に再び向かってきたトナティウスは、恐らく次こそ確実にダメージを与えてくるだろうと予測して。致命的な場所を守りながら迎え撃つ。

「せえいー！」

トナティウスと「マクイルシヨクトル」が、同時に殴りかかる。後者は最高のタイミングで花を散らしており、それによってテルティウスは拳が通る場所に無意識のうちに移動させられる。

「……………じゃー！」

そして左右から殴られる直前。彼はスタンドを繰り出してトナティウスにけしかけた。

新しく現れた「ペル・アスペラ・アド・アストラ」が尾に宿していたのは、炎。それが躊躇なくトナティウスへ……………否、そのまま服へ入り込んでいく。

「ぐふっ！」

直後、テルティウスはスタンドの拳をほぼまともに食らう。剣を使い、現状可能な最高の防御はしたつもりだったがあっさり砕かれ、一緒に吹き飛ばされた彼はインストラの壁を突き破って屋内に叩き込まれる。

「あたしに能力を使った……………？」

一方のトナティウスは首を傾げた……………が、即座にテルティウスの意図を悟って服をかなぐり捨てた。

地面に落ちた服が触れた箇所が、急速に赤熱する。それに伴って服からスタンドが抜け出し、その影響を失った服は勢いよく燃え始めた。

「あたしじゃなくて、服に火の熱を付与したんですね!？」

下着姿になり、その肢体を露わにしたトナティウスだが羞恥心はない。いやあるが、戦いの場でそれを気にするつもりがないだけのことだ。

「その通りじゃ……………下手をすると街を焼く、からあまり使いたくはなかったが、な……………」

そしてテルティウスも、そこまでは期待していない。

瓦礫をはたき落としながらインストラから出てきた彼に、今しがた服を燃やしたスタンドが駆け寄ってかき消えた。

その身体から、多量の血が滴る。はた目からはわかりづらいが、左腕だけでなくあばら骨もいくつか折れていた。

それでも致命傷には至っていない。心臓も、肺も。諸々を無視すればひとまずは戦える程度には、動いている。

「お主、波紋は効かんと言ったが嘘じゃな？ いや、確かに今までのお主に波紋は効かなかった。じゃが今は効く」

「……どこで気づきました？」

テルティウスの指摘にトナティウは逆に聞き返した。相手が相手なら怒られる場面だが、問い返したということは認めたと等しい。

「何度も殴り合って波紋を流せば誰だって気づくじやろ……服が波紋を散らしていたことにな」

「……はー、やれやれその通りです。よくわかりましたね、最新の高級品だったんですけど」

燃え尽きた服を名残惜しそうに見やっつて、トナティウは肩をすくめる。

「波紋を散らす衣料とは実に興味深い。どこでどう調達したか知りたるところじゃが……」

「答えると思います？」

「じゃろうて。しかし……」

そしてそれだけやりとりを交わした二人が、同時にとあるほうへ顔を向けた。

そこには網からようやく脱出したシヨシヤナが立っている。身体は今もなおスタンド「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」に包まれており、悪鬼羅刹もかくやといった佇まいだ。

(これで二対一か……)

彼女を見て、いよいよもって悲壮な決意を固めたテルティウスだったが……。

「トナティウ……少しだけこいつの相手を任せるわ……」

「は？ どういう風の吹き回しです？」

「すぐ戻るわ……すぐね……!」

「あ、ちよつと?」

当のシヨシヤナはトナティウの声も聞かず、飛び立って行った。

その姿を呆然と見送るしかなかったトナティウだったが、テルティウスは違った。

「まさか……いかん!」

慌ててシヨシヤナを追いかけようとするが、やはりトナティウが立ちはだかる。

「あの子が何をする気かわかりませんが、任されましたし行かせませんよ!」

「どいてくれ! あの吸血鬼、このままではローマを滅ぼしかねん!」

「はあ? ははは、いやそんなはずないですよ。それはするなって言われてますからね。盲信する神様からの命令に、あの子が背くなんてありえません」

「我を忘れるほどの激情に囚われたものがそこまで自身を戒められるものか! ましてや吸血鬼! あれは今、わしを殺すためならなんでもするつもりでいるぞ?!」

「……いやいや、まさか。いやそんなはずは」

テルティウスの指摘に一瞬だけ固まるトナティウ。

口では否定したが、彼女はあり得ると思ってしまったのだ。今のシヨシヤナならあるいはと、思ってしまった。何せその指摘は、他ならないアルフィーからも連絡書という形でされていたのだから。

だがそのスキを、テルティウスは見逃さない。自らに雷光を付与すると、光速で走り出した。

「あつ、しまつ……待ちなさい!」

テルティウスを見失ったトナティウもそれに続くが、シヨシヤナが飛び去った方角から新しい悲鳴が続々と上がり始めたのを耳にして息を呑む。

それを頼りに走って、走って。

やがてトナティウがたどり着いた先では、呆然とした様子のテルティウスがシヨシヤナと対峙していた。

だが同時に、彼女は見てしまった。そこいらに打ち捨てられた、恐らくは屈強な戦士であつたろう亡骸の数々を。

そして、そんな死体のいくつかが起き上がる様を。

知識があれば、何が起きたのかはすぐわかる。ゾンビだ。今ここに、シヨシヤナによってゾンビが作られたのだ。

(や、やりやがった……！)

それを見て、トナティウは心の中で頭を抱える。

トナティウとしては、憎まれ口をたたき合う間柄とはいえシヨシヤナはアルフィーに仕える同僚だ。その態度の是非はともかく、彼女が主に向ける感情の強さにだけは一目置いていた。

だからこそ、主の言いつけは何があつても守るだろうと、アルフィーからの指摘には半信半疑になつてしまつていたのだが……どうやら、正しいのはアルフィーだったと、トナティウは主への尊敬を新たにする。

しかし、今はあれこれと考えている場合ではないとも理解できていた。だからこそ、彼女は決意を持つて前へ進み出る。

「あらトナティウ……まったくもう、少しだけ任せるつて言ったのに。何出し抜かれてるわけ？ まったく、それでもアルフィー様の使徒ですかだらしない！」

「……申し開きのしようもない、あたしのミスですね。だからそれについては何も言わないですけど……」

そして、警戒、驚愕、憤怒……様々な感情を顔に浮かべるテルティウスをよそに言葉を紡ぐ。

「今のあなた、あの方の命令を完全に無視してますよ。それわかっています？」

「トナティウこそわかつてるの!? アルフィー様を傷つけられたのよ!?! 本当なら穏やかな眠りにしていただけだったのに! それをこいつは!」

「それはあたしだって許せませんけど! でもそれにはそれ相應のやり方があるでしょう!? 究極、今ここでやる必要だつてないはずですよ!」

「あなたはアルフィー様を傷つけたやつらを許すと言うの!? 信じられない……! 小憎らしい小娘だけど、あなたは、あなただけは私に匹敵するアルフィー様への愛を持っていると思っていたのに!」

「そんなことは言ってもせんよ!? いいですかこのおバカ! あの方は優しい方です! 人間をできるだけ殺さないように、怪我だつてできるだけしないようにいつも心を砕いておられる! そんなあなたの方が、無差別な吸血やゾンビ化をしてるあなたを見て喜ぶとも思ってるんですか!?!」

「無差別……? 何を言っているの……? こいつらは全員、波紋使い! こいつらはアルフィー様の敵ツ! そんな連中を殺して何がいけないと!?!」

「だから、そこじゃなくて……! ああもう、話がかみあわない!」

「まったくくだわ……あなたもう黙りなさい。そして隅のほうで私の活躍を見ていればいいわ! 今からこの爺を殺すからツ!!」

「やめ——」

成立しているようではない、正気を感じられない会話を打ち切られたトナティウスは、テルティウスへとびかかるシヨシヤナに手を伸ばす。

遠くを攻撃する手段を持たない彼女にできるのは、それくらいしかなかったから。

しかしそれよりも早く、テルティウスが動いていた。蚊帳の外にあった会話のさなか、ひっそりと用意していたスタンドを自らに使う。

かのスタンドの尾にあったのは、少し前にアルフィーを焼いた光。その残り。

そしてそれを宿したテルティウスは。

「我が門弟たちよ、太陽の光のもとで安らかに眠れツ!」

全身から日光を放ち、高々と声を上げた——!

33. ペル・アスペラ・アド・アストラ 4

シヨシヤナとトナティウにお願いすることはたくさんあるけど、それぞれにだけ伝えたいことがあって、それは分けて書き記しておいたからあんまりお互いに詮索しないでおいでしてくれると助かります。

……というわけで、ここから先はトナティウにだけのお話。あなたがこれを見てどう思うか、わたしには……想像はできても確信はできません。それでも、せめてわたしのお話に目を通してくれたら嬉しいです。

では本題に入りましょう。わたしが二千年の眠りについたあとのこと。世界がどうなるかはまだわからないけれど、それはこの際気にしません。

ただ気がかりなのは、シヨシヤナのこと。彼女が狂ってしまいいやしないか、わたしはそれが心配です。

いえ、寂しさに耐えかねて死を願うようになるのであれば、まだいいんです。それは悲しいけれど、でも受け入れることができます。

だからわたしが心配してるのは、シヨシヤナが吸血鬼としての衝動に呑み込まれて、人を人とも思わない、殺しをいとうことのない化物になってしまうこと。それが心配なのです。

あの子は今も昔も、極端から極端に走る子です。生まれ育ちに不幸があつて、それも仕方がないとは思うのだけど、それでもしたことをなかつたことにはできません。それが悪いことなら、なおさら取り消すわけにはいかないのです。

もちろん、自分以外から生命をいただくこと自体は、この世界に生きとし生けるものすべてが行なっていること。ですから、命を繋ぐために必要な分だけというのであればわたしは何も言いません。

だけど……そうじゃなくて。たとえば自分の快樂のために。たとえばいわれのない復讐のために。そんなことのために多くの人を殺すようであれば、それは見過ごせません。

ですから、もしシヨシヤナがそうなつてしまったときは、トナティウ。どうか彼女をとめてあげてください。そのために彼女が死ぬこ

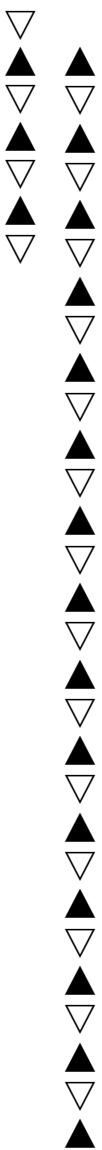
とになつても構いません。いえ、むしろ命を奪うことになつてもとめなければいけないでしょう。

……本当は、彼女を吸血鬼にしてしまったわたしがそれをしなければいけない。いつときの感情に流されるまま、石仮面を使ったわたしにはそうする義務があります。

それを、眠ることをいいことにあなたにお願いしてるわたしは、ひどく身勝手で、傲慢で、浅ましいやつだなと思います。どれだけ罵られても、それは正当なものでしょう。

ですが……それでも、伏してお願いします。どうか、どうかあの子に間違いを犯させないでほしい。

どうか、どうか……。



ローマの街に突如現れ、その大部分を包み込む強烈な日光からかうじて身を隠したトナティウは、近くから聞こえる戦いの音に耳を傾ける。

その脳裏によぎるのは、主人から受け取った自身宛の手紙の内容。シヨシヤナの行く末をひたすらに心配する優しい主人の切実な懸念は、まさに今現実となっていた。

テルティウスから日光を浴びせられたシヨシヤナは。

今もなお、高笑いをしながら戦い続けている。日光をもともせず、吸血鬼としての力を振るって破壊をもたらし続けている。

(光を浴びた端から全部発射し続けるなんて……いくらなんでも力技すぎですよ！)

そう。シヨシヤナは自身が浴びた光を即座に発射し返し続けることで、無理やり日光を乗り切っていた。

確かに彼女のスタンドには「触れたものを発射する」能力があり、光とて接触することで作用するものであるからには能力の対象になるだろう。だがそれは常にスタンドの力を全開にし続けているに等し

く、いかな吸血鬼と言えど簡単なことではない。

しかし吸血鬼であれば、不可能でもない。他人の命を、血液を介して奪う吸血鬼ならば。

それはすなわち、必要以上に命を奪う行為に他ならず……トナティウは、シヨシヤナが派手にスタンドパワーを使い続けるその様を察して、主人が残した懸念は確実なものとして改めて認識した。

「WWWWRYYYYY!!」

今もまた、シヨシヤナの攻撃でインスラが一つ破壊された。傍目には謎の発光体が建物に突っ込んで破壊したようにも見えるが、それはともかく。

壊れると同時に散弾のように吹き飛ぶインスラから距離を取りながら、トナティウは決意する。

今シヨシヤナがしていることは、トナティウにとっても許容できない。だからこそ、シヨシヤナをとめる。たとえそれがテルティウスを助けることになるとしても、と。

幸い、シヨシヤナは日光の対処に全スタンドパワーを割いているからか、発射を攻撃に使う気配はない。

いや、現状は発射に専念している状態ではあるのだが、絡め手として戦いの要所要所に織り込むような使い方をしていない。それに伴ってか、動きも鈍い上にあの防御力もやや落ちているように見える。

何せ、テルティウスがどこからともなく調達してきた槍がわずかとはいえ刺さったのだ。やりようはあるだろう。

そう判断したトナティウは、あるものを求めてこの場を一時離脱することにした。ルブルム商会のローマ支店に行けばあれがあるはずだ。そう考えて。

一方シヨシヤナと対峙するテルティウスは、己の命を顧みない捨て身の攻撃を続けていた。攻撃を回避しない、というような次元ではない。己の命を薪にくべて、スタンドパワーを全開にし続けているのだ。

もちろん、吸血鬼でない彼がそんなことをすれば、死ぬ以外の道は

ない。だがそれを、彼は受け入れた。刺し違えて目の前の吸血鬼を打倒する。その一念であった。

これによって、テルティウスは一度に顕現できるスタンドの枠を一時的に増やしていた。今は全盛期の頃同様に、五体の「ペル・アストラ・アド・アストラ」を一度に繰り出せる状態にある。

それらを駆使して、今までストックしていた様々なものを惜しみなく使い潰し、ありとあらゆる手段でシヨシヤナを攻撃するのだ。

傍目には、テルティウスが押しているように見えるだろう。何せ、そのほとんどの攻撃をシヨシヤナは回避しないのだから。光の反射に力を注いでいる分、動きも鈍くなっているのである。もちろん、後々に響くだろうものは的確に回避しているが。

しかし、この攻勢が長く続かないことをシヨシヤナは見抜いていた。自身もまた急速に疲弊していることはわかっていたが、それでも先に力尽きるのは己ではないと確信していた。そしてそうなれば、もはや目の前の相手に一切の余力が残らないことも。

それは相手を見くびっているというような話ではない。生命としての形の違いから来る、客観的な事実だ。

だからシヨシヤナは、守りを堅くする。どのみち、光を反射し続けているためにスピードなどは犠牲になっている。ただ時間を稼ぐだけで確実に勝てるのだから、下手に力を浪費しようとも思わない。

(何よりエネルギー切れになってくれたほうが、色々とできそうだしねえ！ 絶望した顔を拝んであげるわあ！)

シヨシヤナは、力尽きた相手を自身が思いつくありとあらゆる拷問でいたぶる気満々であった。彼女にとって、テルティウスはそうされるべき相手だった。

そんなシヨシヤナの嗜虐心を認識しながら、テルティウスは網を放る。戦いながら移動するさなか、拾ったものだ。

もちろんただの網ではない。既に波紋の性質が付与されており、これに絡め取られればシヨシヤナは大ダメージを余儀なくされるだろう。

とはいえ、こんなあからさまな危険物は当然シヨシヤナももう受け

ない。だからこそ、テルティウスにとっては当たれば儲けもの程度でしかない。

すぐさま次の攻撃を放つ。後ろ手に隠していたナイフを、回避の動きを取っているシヨシヤナ目がけて投げた。

だがこれは、あつさり腕で弾かれ明後日の方向へ飛んでいく。目標を失ったナイフは、そのまま転がっていた木箱の残骸に刺さった。

それを確認するより早く、テルティウスは前に出る。猛然とシヨシヤナに肉薄し、年齢に釣り合わない鋭い正拳突きを放った。

「あはははははは、あははははははは!! 効かない、効かないわツ!!」

それらを当然のように受け流しながら、シヨシヤナは嗤う。かなりの波紋が乗った攻撃でありながら、それはほとんど効いていなかった。

何せ、光すらも触れた瞬間に発射して無効化しているのだ。波紋も同じ道を辿ったにすぎない。

そしてそれを操るテルティウスの身体もまた、能力によって強引にシヨシヤナから引き離される。もはや何度も繰り返された光景だ。

だが、今回は違った。

「いや、これでよい」

テルティウスはにやりと笑う。攻撃が一切通じなかったにもかかわらず、不敵に。

その態度が、シヨシヤナは気に入らない。この男は彼女にとってできるだけ惨たらしく死ぬべき相手で、そんな相手がいまだ負けるつもりがないことに苛立ちを覚える。

「ふん、いい加減諦めればいいものを!」

地面を転がりながらも立ち上がるテルティウスをよそに、シヨシヤナは瓦礫の中に飛び込む。

今の彼女は全自動発射装置だ。触れたものを片っ端から乱射する。瓦礫もまた、その大小に関わらず一気に発射され、またしてもいくつかのインストラが傾いていく。

「もちろん……諦めるはずがなからう!」

その間をすれすれでくぐり抜けて、テルティウスが再度シヨシヤナ

に迫る。

手には、先程あつさり弾かれたナイフ。転がったときに拾い上げたそれには波紋に加えて波紋の性質そのものまで与えられていて、黄金の輝きを放っていた。

光とはまた若干異なるその光彩に、シヨシヤナも警戒を強めて身構える。これにだけは触れるわけにはいかないと判断して、今しがた崩れ終わったインスタラの瓦礫の山に踏み込む。

再び、大量の瓦礫が無数の弾丸となつて発射された。テルティウスはもう一度、その隙間を潜り抜けようとするが……今度は完全にはかわし切れず、手にしていたナイフを撃ち抜かれ取り落としてしまう。彼はそれでも、前に進むことをやめない。ここで立ち止まったり、背中を向けようものならその瞬間無駄死にするということを理解しているがゆえに。

しかし、現実是非情だ。痛打を全身に負いながらも気力で瓦礫の弾丸の雨を潜り抜けたテルティウスの身体から、急速に光が消え始めた。スタンドによつて付与された日光が、遂に底をついたのだ。

シヨシヤナが暗く嗤う。死と隣り合わせの綱渡りをするかのようなギリギリの前進をなんとか切り抜けたというのに、ここまで来て頼みの綱を失うという相手の間の悪さに、心底愉悦を感じながら。

その顔のまま、彼女はこれまでの守勢が嘘であったかのように一転攻勢に出た。光の対処に割いていた力を、テルティウスの発射に振り分けるべく姿勢を整え、猛烈な力を腕に込めて振り抜ける。

果たしてその一撃はテルティウスの身体を捉え、……そして、その感触にシヨシヤナは顔色を変えた。

今まで殴ったことのない硬さだった。「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」をまとった身では、一度とて感じたことのない強烈な硬さ。それはまるで自分のスタンドのようで……。

「どうやらギリギリで間に合ったようじゃな……ふふ、わしは悪運が強い」

吹っ飛んだ先から戻ってきたテルティウスは、無傷だった。

その姿を見て、シヨシヤナも察する。

「まさか、貴様……！ 私のスタンドから！」

「おっと、気づいたか。左様、左様。一手前に殴りかかったとき、お主の『硬さ』を抽出させてもらった。そして一撃を食らう直前に、それを自分に入れたということじゃ」

「いつの間に……！」

その言葉を受けてもう一度にやりと笑い、テルティウスは己のスタンドを一体繰り出す。現れたリスのような姿のそれは、今までと違い注射器のような尻尾に何も入っていなかった。

そのスタンドが、今しがた戻つて来るときに拾っていた剣に尻尾を突き立てる。すると、その尻尾の中に剣の形をした陽炎が現れた。

「そうか……さつきまで、私の防御も少し弱まっていたから……！」

「その通り。槍が少しでも刺さるくらいであれば、我が幽波紋はその真価を発揮できる」

テルティウスのスタンド、「ペル・アスペラ・アド・アストラ」。その能力は性質の付与だが、そのためには一度、付与する性質を何かから調達する必要がある。

今見せた行為こそそれだ。対象から、性質を抽出する。これで今、テルティウスは剣の性質である「特定部位に触れたものを切断する」性質を一つ獲得した。

とはいえ、対象から性質を抜き取り空にすること……つまり性質を完全に奪うことはできない。抽出とは言っても、その実態は転写のようなものだからだ。

しかし、それでも。

「さて、これでようやく五分かのう。いい加減決着をつけようではないか」

シヨシヤナが持っていた、絶対的な防御力。そのアドバンテージが崩れた。

34. ペル・アスペラ・アド・アストラ 5

「舐めるなよ……い！ その程度で私に勝てると思うなッ！」
シヨシヤナが吠える。と同時に、大きく地面を蹴ってテルティウスに向かう。

今まで明確に距離を置いて戦っていた彼女の行動に、対するテルティウスは目を細めて身構える。構えた剣に、今しがた性質を抽出したばかりのスタンド「ペル・アスペラ・アド・アストラ」が潜り込む。そして一直線に突っ込んできたシヨシヤナの攻撃を、避けることなく当たりに行く。これまた今までとまるで正反対の行動だ。

普通の人間なら、大丈夫だとは思っていても慣れた感覚を捨てきれないものだが、テルティウスは違った。攻撃を受けても問題ない、と即座に切り替えられる辺りはやはり歴戦の戦士と言えるだろう。直前まで散々苦勞させられた防御力を、ある意味で信賴していたとも言う。

そのままぶつかり合う両者の肉体。どちらもそれによるダメージはなく、ただ膂力の差からテルティウスが押し出される。

だが当然、馬鹿正直に攻撃を受け止めたわけではない。接触と同時に波紋を流して少しでも吹き飛ばされるのをこらえつつ、シヨシヤナにしがみつかながら手にした剣でもって彼女を切りつける。

——火花が散った。が、それだけ。シヨシヤナの身体は切られることなく健在だ。

にも拘らず、シヨシヤナの肉体には確かに痛覚が駆け巡っていた。それは文字通り、斬撃を身に受けたときと同じもの。ただ規模が違っただけ。

「……ッ！」

「どうやら、重ねがけは効果があるようじゃな。ま、こんな至近距離でノーガードに攻められれば、という条件つきのようにじゃが！」

「小癩な真似をッ!!」

テルティウスの目は、それを即座に見抜いていた。

しかし彼は、それだけにこだわるつもりもない。剣での打撃を狙う

と見せかけて関節を極めに行ったり、空に逃げられては困るとばかりに翼を集中的に狙ったり、それまで反撃を警戒してできなかった戦い方を恐れずに繰り出していく。

そこに織り込まれた技巧の数々は、まさに歴戦の戦士と言えよう。対して、長くは生きていても戦いを本分としてこなかつたシヨシヤナは、やはりその対応に苦勞することになる。

とはいえ身にまとつたスタンドの防御力と、吸血鬼特有の膂力もあつて、その苦勞というのも「嫌らしくて面倒」程度のものだ。ゆえに彼女もまた、反撃など気にすることもなく攻め続ける。

そして互いに防御を考慮しない殴り合いとなれば、膂力で勝るシヨシヤナに分がある。次第にテルティウスが押され始め、少しずつ後退していく。

(……こじや！)

ここでテルティウスが再度前に出た。と同時に、足元に転がつていたものをその足で上へと跳ね上げる。

それは夜の中にあつても波紋特有の黄金に煌めいており……しかしその光は、テルティウス本人の身体によつてシヨシヤナには隠されていた。

その中で、彼の波紋が込められた拳がシヨシヤナの胸元に叩き込まれる。もちろんそれによつてダメージは入らないが、波紋はわずかにシヨシヤナの身体に染み入る。それは遅効性の毒として、彼女の身体に蓄積するのだ。

だがこれを意に介さず、シヨシヤナはテルティウスの腕をつかむと強引に引つ張る。それに引きずられるテルティウスの顔には、空いた手を握り込んでたたきつけるのも忘れない。派手な音が鳴り響いて、テルティウスの身体が泳ぐ。

「ふんはッー」

しかしそれでもなお、テルティウスは攻め手を緩めなかつた。たたらを踏んで後ろに下がった彼は——今まさに眼前に落ちてきた光を。スタンドによつて波紋の性質そのものを与えられたナイフの切っ先が、シヨシヤナを向いたそのタイミングで柄の根元に殴りつけた。

当然、ナイフは反作用によって落ちる方向を変える。すなわち、シヨシヤナに向けて。切っ先が突き刺さるように、押し込まれる。だが、刺さらない。当然だ。ただのナイフで、「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」は抜けない。

「ぐが……ッ！」

けれども、波紋の性質。「日光に弱いものにダメージを与える」性質が、スタンドの防御力を無視してシヨシヤナの腕を焼く。

波紋が通ったとき特有の音が響き、同時に肉が焼けるような音も上がった。

上がったが……。

「押し通るッ!!」

そんなことはおかまいなしに、シヨシヤナも前に出た。身体を巡ろうとする波紋を強引に押しつけ、ナイフを蹴散らしながら突き進む。

彼女はそのまま、テルティウスの懐に入り込む。そして波紋を受けなかったほうの腕を可能な限り全力で振るって、テルティウスの腹にアッパーカットを叩きつけた。

「何?」

刹那、テルティウスの身体が発射される。飛んでいく方向は、上だ。アッパーカットが入るそのタイミングで、スタンドの力を開放したのだ。

さらに言えば、彼の身体はまっすぐに飛ばされたわけではない。シヨシヤナは発射する際にそこにひねりを入れており、テルティウスの身体は縦に回転しながら吹き飛ばされていた。

空中は、人間のあるべき場所ではない。飛ぶ手段を持たない彼にしてみればもはやできることはほとんどないのに、これではまともな着地すら不可能だろう。

「まだまだア!!」

にもかかわらず、シヨシヤナはさらに追い打ちをかける。黒い翼を広げて勢いよく空へと舞い上がると、そのまま一直線にテルティウスへ突っ込んでいく。

その勢いを見て、テルティウスは意図を察する。

(空の果てまで飛ばし続けるつもりか!?)

この時代、空の果てがどうなっているかを知る者は普通いない。それでも漠然と、戻ってこれなくなる地点はあるだろうと彼は思った。なるほど、そこまで飛ばされれば防御力の高低は関係ない。行き着くところまで行き、二度と戻ってこれないのであれば、それは敗北そのものと言える。

仮にそこまで行かずとも、そこから落下したとあれば……今の彼を包む守りであっても無事で済む保証はないだろう。

(あれに切り替える……いや、次の攻撃まではこのままじゃ!)

眼前に迫ったシヨシヤナの、恐ろしくも悲しげなスタンドの顔面を見据えながらテルティウスは決断する。ここから無事に帰還する手段を、彼は思いついていた。

しかし今ここで防御を捨ててしまえば、発射の能力以前に殴られるダメージを食らってしまう。そう判断して。

実際、次の瞬間シヨシヤナの拳が再度テルティウスの腹に刺さった。テルティウスの予測通り、吸血鬼の臂力で放たれる凄まじい拳だ。

しかもそこには、高速で上昇する勢いまで乗っている。先ほどよりも強烈な衝撃が、彼の身体を走り抜ける。

「ゴーンッ!!」

そしてシヨシヤナの攻撃は、まだ終わっていないかった。そこに乗せられたスタンドパワーが炸裂する。

これにより、ようやく上昇のピークに肉迫していたテルティウスの身体は、またしてもさらなる上空へと撃ち上げられる。

これは予定通り、と頭の中でつぶやいたテルティウスはしかし、飛ばされる直前にシヨシヤナの顔が笑ったように見えて思考を加速させる。

そして、自身が空を上がる速度が先ほどよりも増していることに気づき、歯ぎしりした。

(読まれていたか! しかしまだ手はある……む? これは……さ、寒い……いや待て、こ、呼吸が!?)

そこで彼は、己の身に起きた異変に気がついた。夜のローマに迷い込んだ小柄な雲を突き抜けて、闇一色の空の高みをも貫きつつある彼の身体が、凍てつき始めたのだ。それに前後する形で、どんどん息苦しくなっていく。

母なる星の庇護から離れつつあるのだ。温度という温度はどこまでも暗い宇宙の闇に飲み込まれ、下がり続ける。生き物をはぐくむ酸素もまた、例外ではなかった。

そう、地球という天体は、高度を上げれば上げるだけ温度が下がる。さらには、空気も薄くなるのだ。

二十一世紀の日本であれば、ほぼ常識として認識されている知識である。そう、二十一世紀の日本であれば。

「名前通り、星の果てまで飛んで行ってしまえッ!!」

それを飛べるようになったとき主から教えられたシヨシヤナは、勝ち誇ったように宣言する。

実際、彼女は勝利を確信していた。だからこそ、彼女は残心しながらも少しずつ己の高度を下げつつある。

そんなシヨシヤナをにらんで、テルティウスは浅く、荒い息をつく。既にほとんど空気のないところにまで到達し、なおも上昇がとまらない事実にはさすがの彼も焦りを隠せない。

そうこうしているうちに、シヨシヤナの身体が雲間に紛れて、見えなくなる。

(く……っ！　く……まで来たら、あれでは戻るのは難しいか……むしろそれこそ永遠にここに取り残されそうじゃ。……ふ、ふふ……わしも焼きが回ったか……まだ心のどこかで、生きて帰るつもりでおったようじゃな……)

見失った敵の姿を思い起こして、テルティウスは笑った。凍てつき動かすのが億劫だったが、それでも確かに。

(よかろう、これにて本当に終いじゃ。これをもって、我が人生の幕としよう。無論、このままただで死ぬと思うなよ、吸血鬼！)

そして、彼が内心で叫び。

身体の上昇がピタリととまり。

いよいよもって落下が始まった、その瞬間。

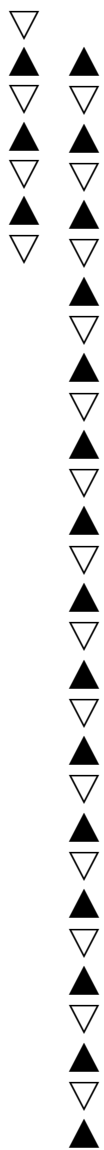
「最後にとくと見よ！ この身は！ 困難ペル・アスベラ・アド・アストラを乗り越えて星へ至ったぞ！！」

かすれた声で、されど今度はしかと叫んだその身に、今までどれほど命をくべても不可能だった二つ目の性質付与が行われる。そう、二つ目のスタンドが彼の体内に入り込んだのだ。

その特徴とも言える注射器のような尾の中には——雷光が煌めいていた。

かくして、彼の身体は光速で走る流星となる。

そして——



この日、ローマの街に激震が走った。比喻ではない。文字通りの激しい揺れが、実際にローマの街を駆け巡ったのだ。

その直前には筆舌に尽くしがたい轟音も響いていたから、ローマ中の……いや、その近隣も含めた実に多くの人間が、天罰ではないかと恐れおののいた。

「い、一体何?」

それを認知したとき、トナティウは簡単な衣服をまとい直し、エイジャの赤石を懐に忍ばせて表に出たところであった。

赤石とは言っても、クズ石とまではいかないものの石仮面を完成させるには届かない小石が数個である。しかし小石といえど、テルティウスほどの熟練の波紋戦士が扱えば、堅い守りを誇るシヨシヤナにも多大なダメージを与えられる。

トナティウはそう判断して、ルブルム商会からこれを持ち出したのだ。暴走したシヨシヤナを止めるために。

だがそこで彼女が見たものは、はるか彼方の天空から、縦一文字に夜空を切り裂く雷がごとき白光で。

それに数瞬遅れて、これまた雷鳴を思わせる轟音が鳴り響く。

直後、大地が大きく揺れ動き……あの光が落ちたところから猛烈な煙が立ち上がった。

煙といっても火災によるものではなく、瓦礫などの土埃によるものだ。それが、雪崩のようにローマの市内に殺到する。

それで建物が壊れることはなかったが、人間にとつては十分に脅威になり得た。

「けほっ、な、何が起きて……！」

だが、半吸血鬼のトナティウにとつてはそこまでもない。強引にその中を突き進めるだけのスペックが彼女にはある。

だからそうした。

もうもうと立ち込める土埃の中を、しかし明確に原因と思われるものが落ちた場所はまっすぐ向かう。道中の建築物は、これまた身体能力でゴリ押しして屋根の上を走る。

やがて彼女はその中でも、現場に最も近くまた最も高い建物に目をつけた。一度の跳躍と数秒の登攀を経てその頂上へと至る。

「……あれは。遅かったか……」

そこで彼女が目にしたもの。

それは、クレーターのようにえぐれたローマの大地……その中央に、重なって倒れるシヨシヤナとテルティウスだった。

二人とも身体はぼろぼろ……というよりはバラバラで、手足などは両者とも吹き飛んでいた。そこらに、ではない。文字通り吹き飛んでしまつて痕跡がなかった。

テルティウスはもちろん、シヨシヤナすらそのスタンドが解けている辺り、凄まじい攻防があつたことは誰の目にも明らかだ。

「先ほどの何か？ が二人に落ちた……？ いや、そんなことは今はどうでもいいか……！」

ともあれトナティウは、大急ぎでその場から飛び降りた。その勢いのまま、動かない二人の下へ一気に距離を詰めていく。

そして目の前まで来て、トナティウは改めて驚愕した。

「……まだ息があるなんて。さすが吸血鬼ですかね……」

テルティウスは、さすがに死んでいた。もはや臓器の動きさえ微塵

もなく、呼吸も同様で。少し前までであったはずの命の煌きはかけらもなく、肉体もまたひどく萎縮したように見える。

しかしシヨシヤナは生きていた。呼吸をしている。心臓も動いている。意識は失っているようだが、それでも。

(……今なら。今ならやれる)

その様を見て、トナティウの脳裏に主の手紙が浮かび、今しかないと判断する。すっとシヨシヤナの近くに立ち、スタンド「マクイルシヨクトル」の拳を振りかぶり……無意識のうちに動きをとめて、ごくりとつばを嚙下した。

しかし、その一瞬がすべてを手遅れとした。

仮に彼女がそのわずかな動作を挟まず、即座に動いていれば間に合っただろう。

だが、いまだ心に傷のない彼女は、ためらった。ほんの一瞬だけ、ためらってしまった。

だからこそ。

「アルフィーのアホめが……目立つなどあれほど言ったというのに」「そのアルフィーが見えねえな……どこだあ？」

カーズとエシデイシ、そしてワムウが到着してしまった。

彼らの登場に、慌ててトナティウは平伏する。

トナティウは自覚している。自分ではこの三人には勝てないと。そもそも、悪とはいえ神に歯向かおうなどは露ほどにも思っていないが、それでもなお。

「お前は確か、アルフィーが飼っていた半吸血鬼の頭だな。状況を説明しろ」

そしてその頂点に立つ男が、殺気と苛立ちを隠すことなく言い放つ。既にその腕には刃が展開されており、下手なことを言えば即座に餌にされることは明白であった。

「……アルフィー様は」

だから、自分でも完全には状況を把握しておらずとも、まずは口を開き。

それを、数十年を共にした声に遮られた。

「わ、たしが……説明、します……」

「シヨシヤナ!? あんた……」

「許す。ただし手短に言え」

振り返れば、再生を始めたシヨシヤナがはいつくばりながら起き上がろうとしていた。

震える上半身をわずかにもたげさせて、血反吐を一つ。

「……はあつ、はあ……! アルフィー様は……! あの波紋戦士のスタンドにより痛打を浴び、石化いたしました……今は、このトナティウの配下がかくまっています……!」

「……何?」

そして紡がれた報告に、カーズの眉が半分上がった。他の柱の男も同様だ。

「逃げ回ることには定評のあるアルフィーが、か?」

「光……日光を目の前で叩きつけられたのです……! だからアルフィー様は!」

シヨシヤナの言葉に、トナティウは悲しげに顔を伏せた。

事情は初めて知ったが、やはり主がテルティウスに敗北していたという事実は堪えるものだ。シヨシヤナの狂乱っぷりも、理解はできると彼女も思う。

「……つまり、吸血鬼……お前はこう言いたいのか? アルフィーがやられ、冷静ではいられず仇を取った、と?」

「アルフィー様に不敬を働いた愚か者、死んで当然でしょう!! 本当はもつと惨めに死なせたかった! ……ですが、ええ、そうです。私の力不足です……!」

「……………」

カーズの言い方に、シヨシヤナは激高して顔を上げる。

それこそ不敬だ、と思ったトナティウだったが、ここでカーズたちの不興を買うことはなんの益もなく、動くことができない。

そんな二人に、カーズは刃を閉かせて——息をのむ二人をよそに、一歩でテルティウスのもとへ移動し、その身体を滅多斬りにした。

てつきり自分たちが斬られると思っていたトナティウは、呆気にと

られてその背中を見つめる。

それでもなおカーズはとまらず、ほどなくして命を賭して吸血鬼と戦った誇り高い戦士の遺骸は、無惨な血と肉の塊と化した。

カーズはそれでもしばらくそこに佇んでいた。しかしやがてトナティウたちに振り返る。

そんな彼の顔を見て、トナティウは瞠目した。

「……吸血鬼、名は？」

「シヨシヤナ。アルフィー様より、賜りました」

「そうか。ではシヨシヤナよ。仇討ち、大義。お前の忠心、アルフィーに代わりこのカーズが確かに見届けた」

カーズが、悲しげに顔を歪めていた。あるいは悔しげに。

初めて見るその表情に、トナティウは心底驚いた。

血も涙もない悪神だと思っていた。なんの躊躇いもなく、他人を害せる男だと思っていた。

（……仲間には、そういう顔もするんですか。できる、んですか……）
だから、トナティウは少しだけカーズへの評を改めたほうがいいかもしれない、と考えた。

考えたが、

「だが見た限り、満足のいく葬い合戦ではなかったと見た。シヨシヤナよ……構わん。このカーズが許す。波紋使いをこの星から根絶やしにしろ」

続けられた言葉を聞いて、やはりこの男は悪神だと再認識した。

「……ッ！ 喜んで!!」

そして、その言葉に嬉々として平伏するシヨシヤナに、薄ら寒いものを感じる。

あれほどカーズを嫌っていたはずのシヨシヤナの、まるで新たな主を得たような態度に。

（ダメだ……このままじゃ、ダメだ……!）

だからこそ、トナティウは決意を新たにす。

喧嘩ばかりではあったが、確かに同じ神を崇めた隣人との決別だった。

そして。

そんなトナティウの背中に、今にも消滅しそうな小さなリス……
否、リスのような出で立ちの、ヴァイジョン像が。逃げ場所を求めるかのように、
ずぷりと沈み込んでいく。

その尻尾には——星のような揺らぎが宿っていた。

35. アンケ・セ・モリラ・ドマーニ

「いやー、随分と寛大だったなあ?」

闇が最も強くなる時間。ローマの街を後にする柱の男たちの中で、ふとエシデイシが口を開いた。言いながら歩み寄り、カーズの肩に腕を置く。

「なんだ、知らなかったのかエシデイシ?」

それを払うそぶりは見せず、カーズはフツと笑う。

「私はわりと、犬が好きなのだよ。アルフィー風に言うなら、犬派というやつだ」

「飼い主に忠実な犬は、だろ?」

再度の問いに、カーズは答えない。代わりに皮肉げな笑みを返しただけだった。

「……しかしよかったのか?」

「何がだ?」

「みたび、エシデイシが問う。」

「アルフィーを置いてきてよかったのか、ってことだよ。わかってるくせに、はぐらかすなあカーズ?」

「死んでおらんのだ。ならば放っておいてもあれなら大丈夫だ。既に報復は済ませたしな」

「報復、ねえ……。俺には赤石が見つからなかった腹いせにしか見えなかったがな?」

エシデイシの追究に、カーズは視線を合わせず自嘲気味に笑った。他の生き物ならいざ知らず、柱の男の攻撃なら問題なくアルフィーも死ぬだろう。

もちろん、カーズもそんなことをするつもりはない。今はまだ。

だからこそ、手ごろな肉袋で濁したのだ。今まで使いづらくて邪魔でしかなかった吸血鬼女がいい具合に仕上がっていたから、ついでに背中を軽く一押しした。カーズにとってはそれだけのことに過ぎない。

「しかしあの吸血鬼……ありやヤベエやつだぞ。寄りかかる柱がない

と何もできんくせにその本質を見ようとしな、実に人間らしいクスだ」

「馬鹿と鉄は使いようだ。だからこそ一声かけたのではないか」

「クツクツク……まったく、相変わらずのお手並みだぜ」

「そのほうがあの吸血鬼のやる気も出るだろう？」

「手のひらくるっくるだったな！」

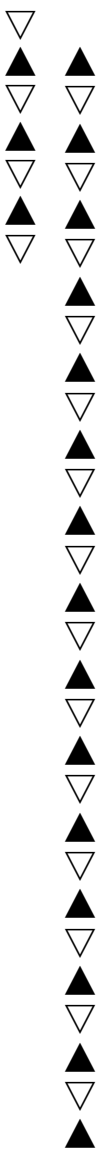
エシデイシの笑い声が夜の中に響いて溶けていく。カーズの冷たい物言いがそれに続く。

彼らの後ろに無言で従うワムウは、そんな主たちの様子を静かに……しかし良き戦いを制した感慨とは逆の、ささくれた心境で眺めていた。

（あのような子供まで殺す必要はあったのだろうか？ 皆殺しにする必要もあるのだろうか？ 人間の一生など所詮短いと言うのに……いや、カーズ様の目的のためには……）

戦士として純粹すぎるが故の、心の乱れであった。

本来であれば、彼はそこまで考えなかつただろう。しかしこの世界の彼には、姉がいた。彼女がいることで獲得した記憶が、経験が、本来の彼とはごくわずかな……誰の目からもほとんどわからないほどのかすかな差を、生み出そうとしていた。



良きことがあろうと悪しきことがあろうと、時間は流れ続ける。低きに従う水のごとき流れの中で、人の営みは続いていく。

ローマに落ちた光は記憶から記録となり、やがて伝説、神話へと変わっていく。

その記憶の変質の過程で、波紋使いを襲撃した柱の男たちのことは埋もれ、ごく一部を除いて人々の口にすら上がらなくなった。

そうして当の柱の男たちすら長い眠りにつき、歴史が今一度人の手に預けられたのと時を同じく。

逃れ得ぬ生命の終焉を間近に控えた老婆が、イタリア半島のとある集落を訪れた。

老いてなおしゃんとした背筋に、適度に残る肉。何より瑞々しく光をたたえた瞳は、とても二百近いものとは誰も思わぬだろう。

しかし、彼女を迎え入れるものはいなかった。

単に夜だからではない。何せ、集落のあちこちに死体が転がっているのだから。なんのことはない、この集落には今、生きた人間が一人もいないのだ。

そんな無人の集落を、老婆はゆつくりと中心に向けて進んでいく。視界に入る死体に悲しげな表情を浮かべ、されどためらうことなく。やがて彼女がたどり着いた、集落でも特に大きな建物。その玄関口で、彼女は今しがた出てきた妙齡の女と顔を合わせる。

「お目当てのものは見つかったようですね、シヨシヤナ」

その声に女はやや驚いた顔を見せたが、すぐに気を取り直して口を開く。

「……驚いた。トナティウね？　しばらく見ないうちにまあ、随分と老けたこと」

「おかげさまで、まだ人はやめていませんからね。あんたのほうは相変わらず、元気そうで何よりですよ」

肩をすくめる老婆……トナティウの言葉に、女……シヨシヤナは鼻を鳴らして応じる。

その手には、一本の矢。鏃は石できているのか光を反射していない。

「ふん……ご覧の通り、カーズ様の矢を遂に見つけたわ。これでもう私に憂うものはないわ。あなた以外はね」

「……変わりましたね。人間だった頃のあんたは、もう少しまともでした」

「皮肉のつもり？　あいにくと裏切り者の言葉に貸す耳はないわ」

「でしょうね。……もはや問答も無用となって久しいですし、そろそろ始めますか。いい加減決着をつけましょう」

「醜く老いさらばえたあなたに何ができるのかしら？」

「余裕ぶつてないで、早くスタンドを出したほうがいいですよ。今回は切り札を用意してきたので」

言葉を交わしながら、トナティウの隣にスタンドが浮かび上がる。「マクイルシヨチトル」。その姿は往年のそれと違ってやや老いた風貌をたたえながらも、今なお凛々しく力強い。

それに応じて、シヨシャナの姿が変わる。全身黒の、翼持つ異形の姿。「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」。その姿は往年のそれと変わらないがただ一つ、顔だけが憤怒の形に変わっていた。

「……アルフィー様の意思に背いたあんたを、ここで終わらせる。あの方が堕ちたあんたを見て悲しむ前に」

「その言葉、そっくりそのままお返しするわ」

そして二つの影が凄まじい速度で飛び出し、ぶつかり合う。否、拳がぶつかり合う。

刹那。「マクイルシヨチトル」の拳が黄金に輝いた。

それだけではない。黄金は真紅の輝きを内包して、すさまじいエネルギーの奔流を一瞬にして生み出していた。

それが、シヨシャナの拳を貫く。無敵の防御力を誇ったはずの「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」が、いともたやすく。

「グア……!?!」

「——【マクイルシヨチトル・ニョア】」

トナティウが静かに告げる。

それに呼応するように、「マクイルシヨチトル」の背中に星の刻印が輝きながら現れる。

そして、衣服で隠れて見えないが、トナティウ自身の背中にも、同じ刻印が現れていた。

「ば……ッ、バカな、そんなバカな!?!」

「いいえ、必然です。このために今まで何度も負けたフリをして、色んな性質を抽出して来ましたからね」

「そ……そんな、あり得ない! それは、あの爺のツ!?!」

「なぜかはわかりませんがね。そういう風になったんですよ……不思議なこともあるものです。ねえ?」

深呼吸のような息をして、トナティウは言葉が続ける。

「波紋とエイジャの赤石を中心に、『ラ・ラガツア・コル・フチーレ』からも少々。他にもありとあらゆるものを取り出して、混ぜて、一つにして……まさか八十年近くかかるとは思ってたんですけど……でもこれで、ようやく」

——おしまいです。

そう告げて、トナティウが悲しげに微笑む。

彼女がそうしているうちにも、シヨシヤナの身体が崩れていく。スタンドの変化は半ば解け、左半分が露わになった顔がそれでもギラついた目を向けている。

「ふざけるな……ふざけるなあ！　こんな、こんなもの認めないわッ！！　私は、私はアルフィー様と一つになるまで、死なない、死んではいけないのにッ!!」

「そのアルフィー様を裏切ったのはあんたのほうでしょうに……と、言うのはもう何十年も重ねたやり取りでしたね」

「ゆ……ッ、許さない、許さないッ!!　トナティウお前は、お前だけはッ!!」

グズグズに溶け始めた顔。それでもなお腹の底から絶叫が放たれる。

同時に能力が発動し、肉片が放たれた……が、もはやその軌道は覚束ないもので、一步横にずれただけでトナティウは難なく攻撃を回避した。

「うおおおおあああ!!　認めない、認められるものか！　こんな、こんな終わり方なんてッ!!」

シヨシヤナが慟哭する。光のない闇の中、一人しか聞くもののない絶望が響き渡る。

「……………」

その声を。

「!?!」

聞き届けるものがあつた。

「ぐっ!?!　——は、はあ……………」

矢。
石でできた鏃が。

シヨシヤナの身体を。波紋で溶けかけた右腕に、突き刺さっていた。

そして。

変化は劇的だった。

残っていた「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」の表面が波打つ。さながら水に広がる波紋のように。

それに応じて、一部の黒が薄れていく。代わりに現れたのは、金。技術としての波紋に近い、金色の装飾が今まさに作られ、「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」は腕輪を手に入れた。

「こ、それは。スタンドの、矢？　それが、スタンド使いに、刺さった、ということとは」

「は……はは……ははははははは!!」

ずるり、と波紋に焼かれた腕が煙を上げながら落ちる。にもかかわらず、シヨシヤナは強引に立ち上がる。

既に死に体のはずなのに、その姿は変化を終えた半身のみがやけに生き生きとしていた。

「アルフィー様……ありがとうございます!!　やはりあなたの仰ることは正しかった!!」

「シヨシヤナ……あんな……」

「私は……ッ！　私のスタンドは！　今新たな力に目覚めたッ！　すべてアルフィー様のお導き通りに!!」

「……!」

「もうこの身体は持たない……けれど！　お前だけは！　お前だけは殺すッ!!」

言うや否や、彼女の身体から「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」が発射された。恐らく彼女の人生においても、最速と呼べる速さだった。

そして、まさか「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」そのものが飛んでくるとは思っていなかったトナティウは、回避行動を取ったもの

の下半身を撃ち抜かれる。

「ぐ……っ!?!」

このとき、トナティウは見た。「ラ・ラガツツア・コル・フチャーレ」が撃ち抜いたところから、生きるために必要なもののほとんどが吹き飛んだところを。「ラ・ラガツツア・コル・フチャーレ」が、それを遥か彼方のいずこかへと持っていくところを。
が。

ここに至ってもなお、反撃するべくシヨシヤナに目を向けて。

そこでシヨシヤナの身体が、既に灰に朽ちている様を見て、トナティウは拍子抜けしたようにぼかんとした。

ゆつくりと、そのまま仰向けに倒れる。

「……………ま、いつか」

そして、誰にもなくひとりごちた。

「元々もう長くはなかったし……。はあ、やれやれ。わかりましたよ。あんたを一人にしてもドーせ周りに迷惑かけそうですしね。あたしも一緒に死んであげますよ。感謝するんですね」

目が閉じられる。ほう、と息が漏れる。

「……………さようなら、アルフィー様。あなた様によい未来がありますよ
う……………」

そして。

トナティウの身体も、穏やかに生命活動を停止した。

動くものがいなくなった紀元前の夜が、緩やかに更けていく。

その空に、いまだ星はない――。

Part 1. いまだ星なき世界の転生者

――完

Part 1 終了時点のキャラ紹介

《めっちゃ登場したオリキャラたち》

◆アルフィー

年齢：約1万4000歳（推定、自己申告ですけどね）

出身地：アメリカ大陸のどこか、闇の一族の集落

身長：約130センチ（つ、角を入れると140センチくらいありますよ！ それに、能力使えば1〜2メートルの範囲で変えられますもん！）

体重：約85キロ（これは変えられないですよね……）

外見：銀髪、金眼、褐色肌が揃った合法ロリ。額からは太めの角が一本（角は収納可能ですよ！）

胸ランク：無（の、能力で大きくできますし！）

好きな色：キラキラ光る赤

好きな食べ物：甘いもの全般（でも今は日本食が恋しいです……）
趣味：歴史、文化、風俗の勉強、研究、収集（ほしいひみつ道具はタイムテレビです！）あと写経

性格：ビビりのヘタレだが好奇心は強く、好きなものにはとことんのめり込む。喜怒哀楽もかなりはつきりしているため、見た目もあつて子供っぽい。

流法：^{モード}如意転変、自身の姿を任意でかなり自在に変えられる

スタンド：コンフィデンス（普通の能力に加えて、スターシップ、センド・マイハード、名称未決定の能力が3つもあります！ えっへん！）

作者解説：いまいち主人公してない主人公。ごくごく一般の歴オタだったのに、よりにもよってジョジョ世界のカーズたち一族に転生してしまった人。

死にたくないからカーズに従い、けれどそのやり方に染まり切れず、人間としての魂を抱え込み、それをブツダに指摘されジョジョの改変に挑む。

その経験から、明確に仏教徒になっていたりする。仏教徒の柱の一

族って、字面がもはやギャグ。

名前の由来は言わずと知れた日本屈指のロックバンド「The ALFEE」から。スタンドの名前はその前身となったグループ「コンフィデンス」であり、能力名もすべて彼らの楽曲名から。

「The ALFEE」をすこれ。ちなみに作者のお気に入りには「冒険者たち」と「エルドラド」。モンタナはいいぞ。NHKさんどうして再配信してくれないの……。

◆シヨシヤナ

生年月日：紀元前220年ごろ

出身地：ガリア・ベルギカ周辺（今でいうベルギー周辺）

身長：約165センチ

体重：約55キロ

外見：茶髪碧眼のコーカソイド系

胸ランク：大

好きな色：銀、金、褐色、キラキラ光る赤

好きな食べ物：アルフィーが作ったもの全般

趣味：アルフィー

性格：極めて依存の強いヤンデレ。アルフィーのことしか見ていないが、その本質をとらえられていないためエシディシに「人間らしいクズ」とか言われる。

スタンド：ラ・ラガツツア・コル・フチーレ、アンケ・セ・モリラ・ドマーニ

作者解説：家族枠として登場したやべーやつ。育児放棄と虐待があつたとはいえ、最初はここまでこじらせるつもりはなかった。

当初の予定ではトナティウ路線のキャラで、貞淑に主人公の帰りを待つ、原作では一切いなかった正義の吸血鬼にする予定だったんだけど。あれえ？

ぶっちゃけた話、こいつ一人に属性を盛りすぎたため扱いがめっちゃ難しくなっちゃってしまい、打開策としてトナティウに正の成分を持つていかれた経緯がある。

おかげで「ゲロ以下のおいがポンポンする」成分だけが残ってし

まった不遇なキャラなんだ。本当なんだ。嘘じゃないんだ……。

名前の由来は英語でいう「スザンナ」で、シヨシヤナとはその原形であるヘブライ語での名前。そしてその名前の意味するところは「百合」。書き始めた段階ではGL要素もモリモリ入れようと思つたので、そういうネーミングだった。途中でラブはいらないって判断したのでちよつと半端になつたけど。

スタンド名はRevoによるガンスリンガー・ガールのイメージアルバム、「poca felice」の第1曲目「La ragazza col fucile」の少女と銃」。

第二の能力は「La ragazza col fucile」の少女と銃」の歌詞である「Ah::Anche se morirò domani il cielo può darsi non cambierà」の前半部分。

意味するところは「嗚呼 彼女が明日天に召されるとしても 空は変わらないだろう」であり、まさに彼女が死んでも紀元前の空は何も変わらないままだった。

◆トナティウ

生年月日：紀元前240年ごろ

出身地：ユカタン半島周辺（今でいうメキシコの東のほう）

身長：約150センチ

体重：約50キロ

外見：黒髪黒目のモンゴロイド系

胸ランク：小

好きな色：緑（特に翡翠の緑）

好きな食べ物：ワニ肉の照り焼き

趣味：新しい物事を知ること

性格：快活な元氣娘。一方で敬語を滅多に崩さないなど一歩引いたところもある他、神の従者として常にどうすれば神のためになるのか考え、実行する理性的な一面も併せ持つ。

スタンド：マクイルシヨチトル、マクイルシヨチトル・ニョア

作者解説：主人公の里帰りのエピソードを書いているとき、なんか勝

手に生えてきた本来なら出すつもりはなかったキャラ。

いやだって、せっかく吸血鬼の設定独自解釈で掘り下げた上に、半吸血鬼なんて独自設定盛つたのにそれ使わないとかもつたいないし・・・もつたいくない？

だけど先述の通りシヨシヤナの扱いが難しかったこともあって、よっしや逆に都合いいやんけとばかりにいいところを軒並み移植され、結果出来上がったある意味勝ち組。

プロットは置いてきた・・・この戦いにはついてこれそうにないからな。

名前の由来はナワトル語（アステカ帝国の言葉）で「太陽」の意味。さらにはアステカ神話における太陽神の名前でもある。性格から逆算して名前を付けました。

スタンド名はコナミの音ゲー「Jubeat」のアーケード第二弾、「ripples」で新規実装された曲の中でも最高難易度を誇る曲、「Macuilxochitl」より。能力も指だったし、まあ多少はね？

さらにたどるとマクイルシヨチトルとは、やはりナワトル語で「五輪の花」を意味であり、さらにはアステカ神話における芸能の神の名前でもある。

さらにさらに、作曲者の別名義による短編物語集、ゼクトバツハ叙事詩における案内役が持つ剣の名前がマクイルシヨチトル。

ちなみにこの案内役の名前が、ニョアである。

◆テルテイウス・クラウディウス・マルケッルス

生年月日：紀元前180年ごろ

出身地：共和政ローマ首都、ローマ（現代でもイタリアのローマ市。

さすろま）

身長：約195センチ

体重：約115キロ

外見：元黒髪の白髪、茶眼の日焼けしたコーカソイド系

胸ランク：大（筋肉的な意味で）

好きな色：透明感のある色全般

好きな食べ物：ワインにあうもの

趣味：修行、ローマの街並みを眺めること

性格：ローマを愛し世界に冠たる帝国市民に恥じない善人足らんと、精進を続ける生粋のローマ人。善を愛し悪を憎む正義漢でもあり、理由なき悪行がどれほどの強敵であろうと立ち向かう心の強さを併せ持つ。

スタンド：ペル・アスペラ・アド・アストラ

作者解説：終盤になんかすぐ主人公してた人。この章のラスボスのつもりだったんだけど、確かに倒されたけど、展開が真逆になったのは予定半分誤算半分。

スタンドといい身長といい性格といい、すぐあの血族っぽいキャラに仕上がったけど実のところ作者の中ではイエスとノーの間を高速で反復横跳びしてて、現状でもぶっちゃけ定まっていなかったりする。

そしてこのあとは一気に時代ジャンプする予定なので、まあ、テル爺が彼らの先祖なのかどうかは読者の皆さんの解釈にゆだねるということで一つ・・・。

名前の由来は全部一般的なローマ人の名前から。ファーストネームのテルテイウスは、日本語訳すると三郎になる。この時代のローマ人の名前は数も少ないし結構適当です。帝政以降はバリエーションも増えるんだけどね。

クラウデイウスは氏族名で、日本で言うなら源氏とか平家。代々政府高官を輩出したローマ屈指の名一族で、国家利益を最優先とする確固たる意思、強い責任感、といった資質を持つ男たちが多いと言われる。ちなみに、かの有名な暴君ネロもこの氏族出身。

そしてマルケッルスは、軍神マルスに由来する家族名で、日本で言うなら徳川とか織田。歴史的には紀元前23年に断絶してるんだけど、きつと傍系はたくさんいただろうし、テル爺が彼らの先祖だとしてもさほどおかしくはない。歴史とはそういうものさ。

スタンド名はラテン語(ローマ帝国の言葉)の格言で、劇中ルビ振った通り「困難を乗り越えて星へ至る」の意味。あるいはシンプルに、

「星の彼方へ」とか。

格言とは言うものの実際にはローマ時代の文献にはないっぽくて、本歌取りみたいな感じで改変されて作り出された言葉と思われる。

ちなみに初期案はメメント・モリ（死を思え）でしたが、あからさまに吐き気を催す邪悪が使いそうな意味なので却下しました。

《ちよい役だったオリキャラたち》

◆名もなきスタンド使い

主人公が最初に戦ったあの人。相手が悪かったんだなあ。

ちなみに初期案では、この人こそショシヤナのポジションになる予定だったしなんなら当初は女だったんだけど、色々プロットの変更もあって屈強なおっさんになった。

いや、だつて展開上出会うの紀元前6000年とかそこらへんだつたし……いくら吸血鬼化したとしてもそんなには生きないだろつて思つて……。

感想で一度「絶対女だろ」つて言われたときは「貴様ツ見ているなツ!？」つて思つた。なんでわかつたんだろう……言葉遣いだけはそのままだったからかな……。

そんなわけで色々あつて名前与えられなかつたからスタンドにも名前はないんだけど、サファイアっぽい色合いとかは前述の設定の名残。主人公がルビーのような色合いのスタンドを持つてるから、その対に……つて思つてたんだけど。

うん、なんかなかつたことになったね。後悔はしてない。

ちなみに感想で問い合わせあつたので答えましたがここでも言つておくと、この人は吸血鬼になって集落の管理をさせられましたが、数百年後に普通に生きるのに疲れて死んでます。

◆太公望

波紋戦士でスタンド使い！ をやりたくて登場したキャラ。

原作でも波紋は東洋で仙道と呼ばれている、というツエペリさんの発言から至つたある種のクロスオーバーキャラ。

見た目はともかく、性格はもうぶつちやけほぼフジリユウ封神演義の太公望。能力も同様に。

スタンド名が今のところ唯一、元ネタありきの名前だったりする。四不象とは封神演義では空を飛ぶ靈獣のことで太公望の乗騎だが、実はこの名前の生き物は現実に存在する。四つの動物に似ていない象っぽい生き物だから四不象、だとかなんとか。

まあでも、さすがにヴィジョンをカバにする勇氣はなかった。それはそれで面白そうだけど、たぶん主人公がウザいくらいハツスルしちゃうだし。

ちなみに当初の予定では、四不象は主人公がパクったまま返さず原作の時代まで持ち込んで、シーザーにプレゼントしてVSワムウで風対決！ って流れを想定してた。

太公望にその仕打ちはしたくないなって思った（作者の封神演義に対する思い入れは、主人公のそれとほぼ同等である）のと、シーザーにはやっぱり自力で自分のスタンドに目覚めてほしいなって思ったので没になりました。

◆ブツダ

転生モノではおよそ半分くらいの確率で必要になる、主人公に発破をかけるポジションとして用意されたキャラ。

逸話から言ってこの人は絶対波紋使いだろうし、絶対スタンド使いだろうなって説得力しかないお人。

そして出すならせつかく太公望でクロスオーバー枠使ったし、ここはちよつとクロスオーバーしてもいいよねって思って、立川のパンチにご光臨いただいた次第。いや決して本人じゃないんですけど。本人だったら普通に六部に出てきちゃうから。出てきたらぶつちぎりで最強で話成立しないだろうし。

見た目と性格が立川のパンチってことで。雰囲気だけというか。

作中で彼に語らせた言葉の一部は、完全に立川のパンチと担当編集の会話と一致するのはここだけの話。

スタンド名は、マチャアキ主演のドラマ「西遊記」のEDにしてゴダイゴの名曲「ガンダーラ」から。インドだしやっぱこれかなって。

ちなみにロン毛のほうも出したかったんだけど、どうあがいても主人公が起きてる時代に彼は生まれてこないで、泣く泣く没。

一応、シヨシヤナかトナテイウを彼のところに行かせて説法を聞いて覚醒するシーンとか考えてたし、ペトロが「あつはははこうツスカ？」ってロン毛に投網するシーンを見せて爆笑させようとも思ってたけど、ご存知の通りシヨシヤナもトナテイウも死んじやったのでこれも没。プロット君さては虫の息だな？

↑To Be Continued...

Part. 2 エピソード：ルベルクラク

1. 覚醒のとき

気づけばそこにいた。

母親はいなかったけれど、厳しくも優しい父がいて、穏やかで紳士な弟がいて、暖かい場所だった。あとから養子として引き取られた義理の弟にも、彼の人の黒い部分を煮詰めて固めたような性根にも、不思議と親近感を覚えていた。

楽しかった。幸せだった。

けれど、それが自分には相応しくないと思っていた。

自分には、こんな幸せは似つかわしくない。自分はもっと、悲惨な目に遭うべきなのだ。

自分という存在が確立したときから、そう思っていた。そう感じていた。

それがなぜかはわからない。そこに思いを馳せると、いつも決まっていた行き詰まる。さながらゴールのない迷宮を彷徨っているような、そんな感覚を味わうのだ。

そして同時に、これまたなぜか、それはゴールがないのではなく、そこにあるゴールを忘れていているという確信もあった。

ずっとずっと、それについて考え続けてきた。考えても考えてもわからなかったけれど、ともかくずっと。それはもはや、ライフワークとも言えるほどだった。

だから。

その状況に居合わせたとき、これだと思った。そうだ、そうだったんだ、と思い出せた。

大切な何かを、失ってしまったのだ。

大切な誰かを、裏切ってしまったのだ。

それが何か、までは思い出せなかったけれど。

忘れてはいけないことを忘れていたのだと思い出せたのだから、まだよしとすべきだろう。

だから。

だから自分は今ここで弟のために死のう。

弟はたぶん、自分が失った、裏切ってしまった人ではないけれど、唯一残された、血の繋がった肉親だ。彼は今の自分にとって大切な家族で、失いたくない、裏切りたくない存在だった。

彼のためなら、この命も賭けられる。彼が助かるのなら、罪深いこの命など、いくらでも賭けよう。

そしてそう思ったときには、既に身体は適切な場所へ動いていた。弟の喉を狙いすました射線、その間に割り込んで。

もちろん、待っていたのは確実な死だ。それでもその行動に後悔はなく。

そんな死の瞬間に思ったことは、どうか自分の分まで生き延びてほしいと、夫婦仲良く幸せになってほしいと、そういうもので。

だから覚醒と永眠のあいまいに漂う刹那の間、死力を振り絞る。驚愕に顔を染める弟に向けて微笑みながら……彼は再びこの世を去ったのだった。

——だが彼の魂は、いまだ永劫の安らぎを赦されていない。他の誰でもない、赦しを乞うべき相手がまだいないのだから。

その相手が目覚めるまで、あと——



意識が少しずつ浮上していく。前世、人間だった頃はこの感覚がとてもふわふわしてて、好きだった。何度も眠り直す快感、たまらなかつたなあ。

柱の一族になつてからもそういう感覚はあるけど、二千年に一回なものだからちよつと惜しいよなあ。

でもなんか、すごく久しぶりに……それこそ万年ぶりくらいに、夢を見た気がする。どんなだったかはあんまり覚えてないけど、なんだか懐かしかったような……。

「ふふへっ!？」

なんて思ってたたら、覚醒が終わったらしい。身体の石化が完全に解けて、わたしはそのまま数メートル下に落ちた。顔から。

「うう、寝起き早々なんなの……」

もそりと身体を起こしながら、顔をさする。種族柄この程度で痛いわけじゃあないんだけど、こういうのは気分の問題だよ。

まあ、それはともかく……。

「……ここ、どこだろう？」

ぺたんと座って顔をさすりながら周りを見渡す。

そこはどうやら、何かの神殿っぽいところだった。ステンドグラス（なんかやたら赤の比率が多い気がするけど）があったり、巨大なパイプオルガンがあったり、人が並んで座るような長椅子がずらつと並んでる辺り全体的に教会っぽいけど、キリスト教らしいものが何もない。

まず十字架が見当たらない。隠れキリシタンじゃあるまいし、キリスト教徒がそれを隠す必要性がないよね。

それに置かれている像や絵画も、キリスト教っぽくない。キリスト教におけるその手のモチーフって言えば、キリストやマリアって相場が決まっているけど……なんか、こう、どっかで見たことのある四人組ばっかりだ。

極めつけは、天井に描かれた絵。そこにあっただのはミケランジェロもかくやな壮麗なものだったけど、肝心のモチーフがどうも……こう……角のある四人組で、ええと……。

「いやこれ以上は無理だ。どう見ても柱の男たちな件」

そう、そこにあっただモチーフは、誰がどう見てもわたしたちだった。頂点に立つのは、輝く剣を頭上に掲げる美丈夫。うん、剣そのものを持つてる点に目をつむればカーズ様ですわね!

その少しだけ下には、炎を両手からみなぎらせる巨漢。エシディシだろうなあ。

さらにその下に、弓矢を引きしぼる幼女。わたしだ。ただし肌が白いし髪も金色だ。2Pカラーか。なんで? 他は完璧なのに。わた

しの肌は褐色だし、髪も銀だよ？

……そんなわたしを肩車してるのが、下半身が竜巻になってる一番の巨漢。まあ、ワムウだよ。……肩車……肩車か……。

そしてサンタナらしい人物は描かれていない。サンタナは泣いていい。そりゃあ確かに、彼はこつちに来てないけどさ……。

「いやそれはともかく。なんでこんなのがあるんだろ？」

教会……なんだよね？

でもこんなのをキリスト教っぽく飾ってたら、異端審問待ったなしじゃない？ イザベル女王が黙ってないよ？ 貴公の首は柱に吊し上げられるのがお似合いになっちゃうよ？

「ジョジョの原作にこんな要素は一切出てきてなかったけど、実は柱の男たちを崇める邪教的なのが存在してたとか……？」

可能性はなくはない。何せ百年以上の時間経過が作中であつた、とても長い作品がジョジョだ。言及されてないものだつてあつておかしくない。

おかしくないけど……それを言い出したら、そもそもわたしの存在がおかしいからなあ……。

「……もしかしてわたし、また何かやっちゃいました？」

だからこつちの可能性のほうが絶対高い。間違いない。バタフライエフエクトが起きたんだ、きつと。

なんだ、今度はわたし、何をやらかしたんだ？ 何がきつかけでこつなつた？

半吸血鬼を作るきつかけになつたこと？

それとも、シヨシヤナたちに歴史上の人物たちのサインをねだつたことかな。ちよつとだけ先のこと手紙に書きちゃつたし、これの可能性が高いかなあ。

いやでも、もしかしたらスタンドの矢を教えたこともあり得るんじゃない？

ううん……これが世界の片隅の、村一つ程度の土着信仰くらいならいいけど、もし世界的な宗教になつてたら目も当てられないよね……どうしよう……。

なんて思つて、一人でわたわたしてたときだった。

バタン！ と扉が開いて光が差し込んでくるとともに、数人の人影が中に踏み込んだ。

その人影は全員、一様に銃を構えている。おお？ 銃だ！ すごい、時代はそこまで来たんだね！

どこの銃だろう……ポルトアクションの小銃つてことはわかるけど、それ以上はちよつとわからないや。前世の友人にいたミリオタならわかるだろうけど、わたしは兵器はそこまで詳しくないんだよなあ。

あ、そうそう。銃がわたしに効くとは思えないけど、一応手を上げておこう。友好的にね、振舞っておかないと。わたしは人類の味方だつて証拠、今のところなんにもないわけだし。

「そこにいるのは何者です！」

そんな人たちを縫うようにして、真ん中から一人の女性が進み出てきた。

見覚えはない。壮年ではあるけど、化粧その他でしつかり整えられているから結構若く見える人だな。美魔女つて感じ。

……けど、この感じ。人間じゃないな。でも吸血鬼でもない。半吸血鬼かな？

そう思つたけど、それよりも、だ。

今この人、英語でしゃべつたよね！ ね!? いま英語だつたよね! つまりここは英語圏!

てことはイギリスかな？ アメリカかな？ ショシヤナたちにお願ひした通りになつてるなら、イギリスのはずだけど……まあ、どつちに転んでもなんとかなる。幸先いい!

ただわたしの知つてる英語とちよつとイントネーションとか文法が違つて聞こえたのは、地域の違いか時代の違いかな？ 言語は生き物だから、そこらへんの違いで結構差が出るんだよね。

まあでも、とにかく英語なのは間違いない!

どうやらわたしは、無事に原作の時代に来れたらしい。それがなんだか嬉しい! 寝る直前のことは忘れよう! うん!

わたしがそうやって、一人で感動してる間にも話は進む。

燭台を掲げてわたしを照らした女性は、あり得ないものを見たように大きく目を見開いた。

まあ、気持ちはわかる。今の今まで忘れてたけど、わたし角出しっぱなしだったし……。英語圏なら間違いなく、悪魔認定でエクソシスト呼ばれるやつだよなあ……。

そう思ってたのに。

「おおー、お目覚めになりましたか、アルフィー様！」

「……はえ？」

次の瞬間、目の前の女性だけでなく、ここに入ってきたすべての人が土下座する勢いでひざまずいたものだから、わたしは目を点にして立ち尽くすことになった。

「あなた様の目覚めを我らルベルクラク、お待ち申し上げております！」

おまけになんかすごい大仰な言い出した。

なんだこれ、どうなってるの。わたしは何されてるのこれ。

そうやってわたしがどうすればいいのか、おろおろしていると話はなぜか不穏なほうに転がり始める。

「長きに渡る眠りで、空腹でございましょう。まずは我々をどうぞお食べください！」

なんかそんなことを言ったかと思ったら、懐から石仮面を取り出してかぶり……ってえ!?

ちよつと、いや、ずっと待ったあ!?

「あ、アルフィー様？ な、何を？」

思わず全力で腕を伸ばして仮面を取り上げちゃったよ。ああもう、心臓が悪い。

「何を、じゃあないッ！ 命を粗末にするんじゃないよッ！」

言いながら、石仮面に「スターシップ」を突き刺してスタンド空間にしまう。あ、危なかった。自分から生贄になるなんて、勘弁してほしいよ。

「あのね、わたしは人間を食べる気なんてないんだよ。吸血鬼にしよ

うとかも考えてないの。あなたたちはわたしを崇めてるみたいだけど、そこまでしなくったつていいんだからね」

そしてため息混じりにそう答えたんだけど、

「おお……素晴らしい……この一瞬で、二千年後の言語を既にマスターしてしまわれるとは…… さすが知の神……！」

「えっ、そっち!？」

想像の斜め上方向に感動されて、わたしは思わずのけぞった。

いや、確かに二千年も寝てたやつが起きた直後にいきなり当時存在しなかった言語をばっちり使ってきたら驚くだろうけど! それは単に前世で色んな言語を習ってたからであって、ぶっちゃけたただのチートだよ!

そりや前世で色んな国の一次資料に当たりたくて色んな言語勉強したけど! それが無駄になつてないみたいでラッキーだけど!

だとしても、知の神なんて荷が重すぎるよお! なんで二千年も経つてその肩書まだ残つてるの!?

「……と、冗談はここまでにいたしましょう」

「……うえ?」

混乱しながらもどう切り出そうかと考えてたら、女性がうつすらと微笑みながら膝をつき、深々と頭を下げた。今度こそ完全に、由緒正しい土下座スタイルだ。

「申し訳ありませんアルフィー様、先祖の言い伝えが正しいのかどうか、試させていただきました。あなたが人間を慈しむ神であるとは伝え聞いておりましたが、念のためと思ひまして」

「……ええと。なるほど?」

確かに伝承は、時代が下れば下るほど形も変わる。いくらそう言い伝えられてたとしても、確認したいと思うのは人間としては当然だろう。

それにこの場所を見るに、カーズ様たちも伝わってるだろうし。だとしたら、人間に近い立ち位置って言われても同族のわたしを警戒するのも当たり前かな。

……にしても、この世界では柱の一族についての情報が原作以上に

伝わってるのかな？　ということとは、戦闘潮流で共闘できる人も原作より多いんじゃないか……。

「不敬な行いであることは重々承知の上。どうぞこの首一つでご寛恕を」

おっと。話の途中だった。

……ていうか、また物騒なこと言うなこの人も。狂信的な人じゃないかと思ってたって思ってたけど、それでもなかったり……？

「いやいやいや、しないよ。するわけないってば。なんでそんなに死ぬとするの……いのちだいじにだよ……」

「もつたいないお言葉……ですが、ありがとうございます」

「……そろそろ頭を上げてほしいなあ、なんて」

「御意」

わたしに言われるまま、女性は顔を上げた。

やれやれ、これでようやく普通に話ができそうだ。

そう思ってたなら、女性はこう提案してきた。

「アルフィー様。様々なことをお考えかと存じますが、まずは場所を変えてもよろしいでしょうか？　食事とともに現状の説明をさせていただきます。考えている次第なのですが。あるいは湯殿もございますが、いかがなさいませう？」

「お風呂？　え、お風呂あるの？　ここヨーロッパじゃないの？」

「……はい、仰る通り。ですがアルフィー様がお好きだったと、記録がございます。ここ三十年ほどは、間もなくお目覚めになるはずだと思います。いつでも使えるように整えておりました」

「わあい！　ぜひぜひ！」

「ふふ、かしこまりました。ではこちらへ」

そしてわたしは、彼女が導くままにこのよくわからない場所を後にした。

2. 今はいつ？

お風呂ちようきもちいい。

いやほんとほんと。何せ寝る直前がアレだったからね……そりやもう、お湯が気持ちいいのなんのって。

ただ、子供が数人ついてきて、手取り足取りお世話してきたのには参ったよ。みんな本気でご奉仕しますって感じで、悪意どころか他意もなかったとは思うんだけど。こういう下にも置かない扱いってやっぱり慣れないんだよね……。根が小市民なもので……。

まあそんなわけだから、途中から遊ぶほうに持っていったけどね。子供たちも、見た目幼女な神様の相手なんて緊張するだけだろうし、こういうときはゆるーく行きたいじゃない？

決してまだまだ伸び代を感じる、だけど紀元前とは比べるべくもない石鱈の出来映えに感動して泡を作りまくったりしたわけじゃあない。子供たちと一緒に泡作りに夢中になったりなんかしてない。あわあわ星人なんていなかった。いなかったんだ、いいね？

あと、個人的にはタオルにも感動したね。

確かタオルが世に出たのは、十九世紀の初めなんだよね。当然、これは紀元前には影も形もないわけで。今治のタオルにはそりやあ劣るけど、それでもただの麻布に比べたら抜群の手触りなもの。

こういう文明の利器を見ると、間違いなく世界は進んでるんだなあ、って実感できて嬉しい。その歩みに寄り添えなかったのは残念だけど、逆にここから先はわたしも知らない時代がそのうちやってくるわけだから、そこを楽しみにしよう。

……その前に乗り越えなきゃいけない壁がいくつかあるけどね。

まあ、今はそれはともかく。

「お疲れ様でした。湯加減はいかがでしたか？」

「うん、よかったよ。ローマのお風呂を軽く超えてたよね！」

ローマのお風呂って、実は衛生観念ガバガバだからね！ おかげで公衆浴場から伝染病が広がったりとかしてたというのは、ローマのお風呂文化の闇の部分だよね！

「ありがたきお言葉。……と、この喜びをしばらく噛み締めたいところですが、わたくしのことはさておき、食事にいたしましたでしょう。この度は、今の我々に用意できる最高のものを揃えさせていただきました。どうぞ存分にお楽しみくださいませ」

「おおー」

ずらっと並んだ料理に、思わずぱちぱちと拍手をする。

いや、だつてだいが豪華だよこれ。料理の歴史はさておき料理自体は詳しくないから、どんなものかはよくわからないけど……とりあえず、並んでるナイフフォークからしてフルコースなのは間違いなさそう。

言語が英語つてところが、正直一抹どころじゃない不安を煽るけどね。きつかり二千年寝たんだったら、たぶん今がメシマズの国イギリスの頂点な時代だろうから……。

イギリスじゃなきゃいいじゃないって思われるかもしれないけど、私見ではイギリスの植民地だったところって食事がまずい国が多いんだよなあ……。

「まずは前菜からです」

けど、やってきたものを恐る恐る食べたわたしは……どうやら杞憂だったらしいと思ひ知らされた。

いやあ、なかなかどうして美味しいじゃない！ 少なくとも、ローマのものよりは確実に上だよ！ コシヨウは偉大だ！

聞けば、わたしにまずいものは食べさせられないと、長年腕を磨いたシェフが何人もいるらしい。シヨシヤナ並みの執念にちよつと引いたけど、美食の前にはかすんじやうんだなあ。

それからわたしは、しばらくの間二千年ぶりの食事に酔いしれるのだった。



「さて、一段落したところで本題に入りましょう」

「うん、お願い」

食後に出された紅茶を楽しみながら、わたしは目の前の女性に頷いた。

うーん、イギリス流の紅茶だ。やつぱりここイギリスでしょ。お風呂と食事を見る限りそうは思えないけど、絶対そうだよ。よくよく聞いたらクイーンズイングリッシュだしこれ。

「と言っても、何から話せばよいやらですが……そうですね、やはりまずは今がいつか、でしょうか」

「うん、たくさん話題はあるだろうけど、そこが一番気になる」

わたしたちは二千年周期で眠るけど、絶対きっかり二千年、ってわけじゃないから誤差はあるんだよね。わたしの予定だと、十九世紀末くらい……1880年代くらいだと思ってるんだけど……まあ、狙いすましたタイミングで起きたとは思ってない。絶対何年かズレてるはずだ。

わたしがそう伝えると、彼女はまた目を大きく開いて驚いた。

「……我々から言わずとも、西暦を……存知でしたか。さすが神……」

「え。あー。いや、まあその、い、一応タネも仕掛けもあるんだけどね、まあうん！」

しまったあ！ ついいつもの癖で！

そりやそうだ、二千年前とかキリストもないんだから、世紀とかそこらへんの概念もないよね！ くそう！

こういうことをうっかりやっちゃうから、知の神だとかなんだとかって祭り上げられるんだよな……！ いい加減気をつけなきゃ……できるかどうかかわかんないけど、次に寝て起きたらわたしの前世知識まったく使えないだろうし……！

……でも西暦^A、つまり^D Anno ^主 Domini^年が使われてるってことは、この世界でもキリストは生まれて贖罪をしたんだだろうなあ。そこは良かった……のかな？

シヨシヤナにはキリスト関係のものをできればサイン入りでお願いしてたけど、手に入ってるかな……どうかな……。

って、いや、それは今は後回しだよ！ うん！

「それはともかく、実際のところどうなの？ 今っていつくらい？」

「はい。今は1934年の6月8日でございます」

「へえー、じゃあもう二十世紀に入ってるんだ。ってことは飛行機もばっちり飛んでる時代……で……」

答えを聞いてうんうんと頷いたわたしだったけど。

え。

いや、ちよ、ちよっと待って？ 待ってよ？

1934年？ せんきゆうひやくさんじゆうよねん？

「……は!? 1934年!? うそ!? 二十世紀入ってる!? マジで!?」

理解するまで時間かかった！ 理解できなかったよ！

そして理解すると同時に、わたしはテーブルをたたきながら立ち上がる。

その剣幕に、周りにいた全員がびくりと身体を震わせて顔をこわばらせた。

「え、は、はい……二十世紀ですが……あの、どうかなさいましたか？」

「そ、そんな……そんな……こんなのってないよ……あんまりだあ……!」

だけど答えは肯定で……わたしは思わず頭を抱えて顔を伏せた。

だってそうでしょ!?

二十世紀に入ってたらい!

第一部とつくに終わってるじゃあないかつ!!

ジョナサン死んじゃってるよお!!



ジョジョの奇妙な冒険、という物語をここで少しおさらいしておく。

物語の舞台は、十九世紀末のイギリス。イギリスの名門貴族、ジョースター家の一人息子である主人公、ジョナサンが養子となるべ

くやってきたデイトと出会うところからすべてが始まる。

二人はそこから衝突しながらも青春時代を共に過ごすけれど、最終的にデイトは石仮面によって吸血鬼となり、命を懸けた戦いを繰り広げることになる……と、言うのがジョジョの物語だ。

正確には、第1部ファントムブラッドのあらすじが、だけれど。

そう、ジョジョの始まりは十九世紀なのだ。断じて二十世紀じゃない。1934年なんて、とうの昔に第1部が終わっている時期なのだ！

そしてこの第1部、なんと主人公のジョナサンの死によって幕を引く。しかも蘇ったりとか、そんな奇跡は何も起こらない。彼は淡々と、しかしすこぶる美しい最期を迎えて、物語を次に繋げていく。

……うん、そうなんだ。ジョナサン、死んでるんだよ。

わたしはジョジョの世界の犠牲者を減らそうと決意して、なんとかこの時代までやってきたっていうのに！

一番救いたい物語のメインキャラ、しかも劇中で明確に死亡して終わった一人であるジョナサンを救えない、だって!?

そんなの、そんなのあんまりすぎるじゃあないか!! 凹むなっていうほうが無理だよ!!

それだけじゃあない。ジョナサンは……ジョナサン・ジョースターという男は!

わたしにとって、一番推しのジョジョなんだ! 8人いる歴代のジョジョの中で、わたしが一番好きなジョジョ! 気は優しく力持ちを地で行く、男らしいことは優しいことだと言うような生き様が大好きなのに!

彼は、彼だけはどうかして助けたかった! エリナさんといつまでも仲睦まじく生きている彼が見たかったのに!!

なのに……なのに、寝過ごした!? バカじゃないのわたし!! いくらなんでもバカすぎる!!

「……あの、アルフィー様……一体何が……」

「……ごめん、ちよつと今すぐくシヨック受けてるところだから……」

「はあ……申し訳ありません」

わたしは椅子の上で膝を抱えて、背もたれを前にしてどんよりしている。

なんで……どうしてこんなことに……。

やっぱり、大きなダメージを受けて眠りに入ったのがいけなかったのかな……。

前にもスタンドの矢で痛い思いをしたあとの眠りは、普段より長かったし……。日光を浴びて石化したんだったら、多く寝てもおかしくないよなあ……。

カーズ様たちより少しでも先に目が覚めたのは、不幸中の幸いなんだろうけど……。気休めにしかならないよ……。

ううう……。ジョナサンと話がしたかった……。

彼なら、大学で考古学を専攻してた彼なら絶対話が合うのに……。わたし昔のものいっぱい持つてるから、それをさかなに歴史トークがしたかったよお……。

なんで……どうしてこんなことに……。

はあ……。

……これからどうしよう。ジョナサンを助けてファントムブラッドを大団円にして、ジョースター家と一緒にカーズ様の復活に備えようとしてた案が、完全にポシャってしまった。

あわよくば日本に大量のテコ入れをして、第二次世界大戦の犠牲者も減らそうと思ってたんだけどな……。今からやれることなんて、もうほとんどないよ……。世界恐慌もとづくに始まつてるし……。

ていうか、1934年つてもう第2部直前じゃあないか……。

だって第2部戦闘潮流の始まりは、1938年……。四年後だよ。すぐだよ四年なんて。柱の一族的には一瞬だよむしろ。

四年……。四年の間何をしてようか……。何かするには時間が足りないけど、何もしないとめつちや持て余すよなあ……。というか、何ができる……？

だってあれでしょ……。1934年つてことは、ジョナサンの息子でジョセフのお父さんであるジョージはとづくに死んでるでしょ。リサリサだって国際指名手配されて、イタリアに隠れてるはずだし、で

きることなんて何もないと思う。ジョセフの初飛行機墜落事件だつて、多分終わってるだろうし……。

あとは……あれか、シーザーがグレるきっかけになったお父さんの出奔もとつくに終わってるよなあ。なんならシーザーが波紋の修行を始めるきっかけになった、お父さんが死ぬ事件も終わってる可能性すらある……。

他に何か……と無理くりひねり出すとしたら、チベットの山奥まで行ってストレイツオを暗殺するくらい……？ でもそれにしたって、実質2部の物語的にはそんなに影響ないしなあ……。

はあ……ほんと……わたしってほんとバカ……。

3. 二十世紀の世界

まあしばらくぐぐじぐじしたけど。

あれこれ悩んだところでどうしようもないし、何か変わるわけでもないし。

今までのことは仕方ないものとして呑み込んで、これからのことを考えよう。そうすべきだし、そうしないと大変なことになる。

というわけで。

「……うん、ごめん。色々待たせて」

「いえ。我々では思いも及ばない何かがおありなのでしょうし」

そういうわけでもないんだけどね……。期待が重い……。

でも訂正したらもつと面倒なことになるし、これはスルーしたほうがいいんだろうな……。

「じゃあその、話を戻すんですけど……今が1934年だとして、ここはどこ？」

「はい。では、こちらをご覧ください」

そう言って広げられたのは、世界地図だった。ユーラシア大陸だけじゃなくて、アメリカ大陸もオーストラリア大陸も、そして南極、日本列島まで描き込まれた見まごうことなき世界地図。おまけにかなり詳細かつ正確だ。

うーん、これはまた、時代の流れを感じさせるものが出てきたなあ。ローマ時代にこれほどの代物は絶対に無理だし、あったとしても完全に国家機密だったろうに。こういう地図が普通とは言わないまでも、問題なく存在できる時代になったんだなあ。

「アルフィー様が眠っておられたここは、こちら。現代ではブリテン島に居を構えるグレートブリテンおよび北アイルランド連合王国です」

「おお、やっぱりイギリスだったんだね。ローマからわざわざ海を隔てたここまで運ぶの大変だったろうに……感謝しかないなあ」

いくらドーヴァー海峡が泳いで渡れる（素人にはお勧めできない）とはいえ、海は海だもんね。石化した状態のわたしなんて文字通り石

像だけど、触った生き物は問答無用で吸収しちゃう状態だから扱いも面倒だったでしょ。

当時の人はもう誰も生きてないだろうけど、それでも感謝はしておかないと。

「そしてその中の、ウェールズ地方。その首都のカーディフという街になります」

「おー、ウェールズ」

確か、アーサー王伝説の伝わる地域だよな。イギリスではわりと重要な地域で、伝統的にここの大公位、プリンス・オブ・ウェールズを与えられた人が次期王位継承者とみなされる土地だ。

そしてこの世界においては、半吸血鬼の集落の一つがあった地域でもある。なるほど、彼らはここでしっかり根を張ってわたしの復活に備えていたらしい。

なんてことを思いながら、改めてこの世界について説明してもらう。

ひとまず大雑把な現状だけを聞いたけど、どうやらこの世界はわたしが知る世界とおおむね変わらない歴史を歩んでるみたいだ。ヨーロッパの各国が列強として世界に覇を唱えていて、アメリカがその膨大な国力を爆発させる直前。中国は国民党と共産党が第一次国内戦を繰り広げていて、日本がそこに手を出して……そして、ドイツではヒトラーが既に内閣を取っている。

世界恐慌もすっかり起きたみたいで、喜んでいいんだか悪いんだか、って感じだ。

わたしの中の歴史好きな部分は、ある程度の条件が揃えば世界は同じように動くんだなっていう実態を認識できたんだから、喜んでるんだけど……。

世界恐慌が起きたってことは、当然世界全体で色んな面で不幸になった人が大勢いて、そのあおりを受けて死んでしまった人だっているわけ……。

それを知って喜ぶのは人としてどうなんだ、とも思う自分がある。いや、わたしもう人じゃないんだけど、心は人のつもりだから一応ね

？

ただ、わたしが知ってる歴史とは違うほうに動いてるところが少しだけある。地域的には西欧と中米なんだけど……。

「……カリオストロ公国って、あのカリオストロ公国……？」

スイスとフランスの間に、カリオストロ公国って名前が見えるんだよなあ……。

わたしの知ってる歴史にそんな国はないんだけど、そんな国が出てくるアニメなら知ってる。

あの作品の中だと、新聞の中でフランス語が使われている上にローマの遺跡が沈んだ湖がある、ってことでスイス近隣が舞台だろうって言われてたけど……スイスとフランスの間って、位置も完璧に一致してるよなあ……。

「カリオストロ公国が気になりますか？」

「いやまあ……その、予測してなかった国だから……」

「左様ですか。とはいえ、表向きにはあまり見るべきところのない国ですよ？」

「表向きには……？　ってことは裏向きには何か……はっ!?　もしかしてこの国、偽札とか作ってたりしてない？」

「ご明察です。……とはいえ、証拠はありませんが」

「……ゴート札まであるのか……」

「……まさかその名前までご存知とは。さすがです」
ガチじゃん。

間違いないじゃん。

それ絶対、30年ちよつとしたあとに大怪盗の孫が一味で乗り込んで世界に暴かれるやつじゃん。

「調べますか？」

「え？　……あー、いや、いいや。どうせ近い将来暴かれるだろうか
ら」

「御意」

ま、まあうん、そこは、うん。いいんだ。

あの作品の中だと、カリオストロ公国の偽札が世界恐慌を招いたつ

て話もあつたけど……その世界恐慌はもう始まつて何年も経つてゐるわけだし。今からこの国が世界に影響を与えられるかつていうと、ちよつと疑問だしね。

……あの大怪盗が実在する世界だったりするの？　つていう疑問はとつても気になるけれど、それは置いておこう。

それより、わたしにはもつと気になるところがある。カリオストロ公国以上に、前世とは違う部分。

それはここだ！

「……ところでこの神聖サンタナ王国……」

サンタナあなた、何地図に名前刻んでるの。

これあれじゃん。絶対サンタナが作つてた国の末裔じゃん！　位置的にも一致するし！

いや、二千年前のあの繁栄っぷりから考えれば、この時代に残つてもおかしくはないなって思つてたけど。完全に国名として残つてるとまでは思つてなかつたよ！

ていうか、メキシコがない！　わたしが知ってるメキシコはいずれへ!?!　メキシコだった土地が全部サンタナ王国になつてるんですけど!?!

へえー、首都の名前はテノチティランっていうのかー！　実にアステイカンな名前だなー！　そこはメキシコシティだつたと思うんだけどどなー！

しかも、おまけとばかりにグアテマラも存在しないぞ……どこに消えたんだ。ごたごたはしてたものの、この時代には一応既にあつたはずなのに。そこまですりサンタナ王国になつてる。どうなつてんだこの世界の歴史は……。

「ああ、そこはアメリカ大陸の先住民の国ですね。新大陸では唯一ヨーロッパからの征服を自力ではねのけた国で、アメリカ合衆国以外では新大陸でもつとも力を持った国とも言えますね」

「……マジかあ……」

すっかりばつちり生き残つてゐるらしい。なんていうか、すごいとしか言えない。

わたしが注意喚起を促したからってのもあるとは思うけど、二千年経つてもなおすっかり継承された国って前世じゃありえなかったよ。

……とりあえず、この国には一度行っておこう。前世では存在しなかった国ってのもそうだけど、サンタナが作った国が今どうなってるのか、見てみたい。サンタナの状態も確認したいしね。

「ちなみに我々ルベルクラクの民とは根を同じくしますね」

「あ、それは知ってる。だって導入したのわたしだし」

「そういえばそうでした。差し出がましいことを言ってしまうました」

「気にしてないから大丈夫だよ。……首を出そうとしないでいいからね?」

「はっ」

厳密に言えば、わたしは半吸血鬼の技術を持ち込んだのであって、知る限りあっちからこっちに来たのはトナティウ一人だけだ。だから遺伝子的にはまったく別の人種だと思うけど……それはそれとして、半吸血鬼ではあるから、同じと言えば同じなのかな。

っていうか、やっぱり半吸血鬼の国なのかな?

「この神聖サンタナ王国って、やっぱり半吸血鬼たちの国なの?」

「王族と大多数の貴族はそのようです。だからこそヨーロッパの征服に対抗できたとも言えましょうが」

「あなたたちもだよな?」

「ええ。とはいえ、我々は比較的早い段階でアングロサクソンに従っております。その方がのちのち活動しやすくなるだろうという見立てゆえですね。おかげ様で現在は、ウインザー朝から名門貴族として遇される身です」

「しっかりしてるねえ」

名門貴族としてイギリスに属してるって、なにげにすごいことでは? 半吸血鬼の団体がでしょ?

二千年前、ルブルム商会もローマに食い込んだ大商会だったけど、これも相当だよ。みんながんばったんだなあ……。

「……ちなみにそのルベルクラクって」

「はい、イングランドの下で過ごすうちに名乗るようになった家名です。かつてはルブルムと名乗っていたようですが、時代と共に変形してルベルクラクとなりました」

「なるほど、そういうことだったのね。すごいなあ」

「はー、と思わずため息が出た。」

「ちなみに、現当主はロンドンにある別宅で基本的に生活しております。先ほど連絡は致しましたので、明日にはこちらに来るか」と

「あ、そういう体裁もしっかりしてるんだね。完璧じゃない」

「いやあ、本当にねえ。」

「……ん？ あれ、そういえば。」

「ところでさ、その当主ってやっぱりシヨシヤナ？」

ふと思つて聞いてみた。

すると、露骨に視線を伏せられた。

それを見て、ああ……なんて思う。どうやら、やっぱりシヨシヤナは二千年を乗り越えられなかったみたいだ。

「……初代様は」

「ああうん、大丈夫だよ。言わなくつても。大体察した。吸血鬼の寿命は数百年くらいだからねえ……」

あの子の執念ならもしかして、とは思つてたけど。やっぱり越えられない壁つてのはあるんだなあ。

トナティウは半吸血鬼で、二百年くらいしか生きられないはずだからもういないだろうし。

つてことは、わたしを直接知ってるのはカーズ様たちだけなのか。覚悟はしてたけど、やっぱり寂しいな……。あの子たちと一緒にすごした百年がにぎやかで楽しかったから、余計にそう思う。

寿命の差か……。こればかりはどうしようもないよね……。これから人との付き合いも増えていくだろうけど、今後もこういう想いを何度もすることになるんだろうなあ……。

「いえ……その、実は、なのですが」

「？」

そう思つてただけだ。

「実は……初代様……シヨシヤナ様は、二代目様……トナティウ様と、相討ちになって……」

「!?」

どうやら実態はもつとんでもないらしかった。

「こちら……破損している箇所もありますが、トナティウ様の遺書です。アルフィー様宛になっておりますので……」

そうやって、うやうやしく差し出されたのは古ぼけた紙。言われた通りあっちこっちに穴が開いていて、おまけに色もかなり変色している。

だけどそこに書かれた文章は……忘れようもない。トナティウの筆跡だった。

慌ててそれを手に取る。

そこに書かれていたのは、トナティウからの報告だった。わたしが石になったのを見たシヨシヤナが暴走して無差別に血を吸って暴れ、カーズ様に言われるがまま波紋の一族を根絶やしにしてしまったこと。波紋に関わる文物の多くが破壊されたこと。

そして……わたしの依頼に従って、シヨシヤナを討つと。最後の闘いをしにいくと。そう書いてあった。

「……その手紙を最後に、トナティウ様は」

「そう……だったんだ……」

手紙を持つ手に、思わず力がこもる。くしやりと手紙がゆがんだ。ああ……ごめん、ごめんよシヨシヤナ。一番恐れていた事態になってしまったんだね。

もしかしたらそうなるんじゃないかって、思ってた。いつかあなたが暴走するんじゃないかって……。

わたしのせいだ。わたしが石仮面を使うの、許可したばかりに。シヨシヤナはシヨシヤナでいられなくなってしまったんだ……。

トナティウにも申し訳が立たない。本当ならわたしが後始末すべきだったのに。彼女に全部押し付けてしまった。あの二人に殺し合いをさせてしまった。

わたしは……わたしは本当にどうしようもないやつだ……。

「アルフィー様……」

横からメイドさんがハンカチを差し出してきた。

……なんか視界がぼやけてると思ったら、わたしひよつとして泣いてるのか。

心境の動きだけで泣くなんて、どれだけぶりだろう？ それこそ転生した直後以来じゃないだろうか。

そうか……わたしは、本気であの二人が好きだったんだな……。

恋人とかそういうことじゃない。それよりももうちよつと広くて、深い……家族。そうだ、家族だったんだな……。

ああくそ、もつと二人とたくさん話しておけばよかった。いいことも悪いことも、もつともつと……。

……これは、しばらく涙がとまりそうにないや。

4. イギリス貴族ルベルクラク伯爵家

結局その日は夜が更けるまで凹んでいた。日付が変わるくらいから筆記具借りて写経しながら念仏を唱えてたら、落ち着いたけどさ。

過ぎてしまったこと、とすぐに割り切れるほどわたしは前向きには生きられない。それでも、今を生きているのはわたしだけだ。だからせめて、彼女たちの分まで悔いのないように生きていく。そしてその分だけ人を助けていこう。改めてそう心に決めて、わたしは夜を明かした。

その後太陽が出る少し前くらいに、ルベルクラクの当主である伯爵本人が到着。その頃にはわたしも立ち直ってたから、顔を合わせるこ
とになった。

見た目は四十代くらいのナイスミドルって感じだったけど、半吸血鬼みたいだから見た目通りの歳では絶対ない。

彼からもやっぱりひざまずかれて、やっぱり自己犠牲的な献身をされそうになったから慌てて止める羽目になったよ。仮にも伯爵家の当主がやっていいことじゃないし。

そこからは改めて彼らについて聞くことになったけど、どうやらルベルクラク伯爵家はルブルム商会の約半分を母体にして出来上がった家系らしい。伯爵家としては特に、かつてウェールズ近辺にいた半吸血鬼がその祖になっているようだ。

半吸血鬼と言えば、人間を上回る身体能力と寿命が何より特徴だ。なので、代々のルベルクラクは武門の一族として活躍してきた。多少のことじゃ死なないから、つてことで切り込み隊長と殿軍を大体やってたらしい。

現在は傭兵業を営んでいて、それに併せて運送や医療などもやっているそう。傭兵としての能力は世界一だと言われている、国際的にも名の知られた傭兵の元締めとして有名らしい。

第一次世界大戦でもかなり活躍してたみたいだけど、このときは切り込み隊長とかそっち方面よりも後方支援での活躍のほうが目立つたみたい。

聞けば必要^{ジャ}なとき^トに必要な^イものを必要^タな量^イだけ届^ムける方式を徹底して、イギリス軍を強力にサポートしてたそうだ。大戦中は末端に至るまで一度とて兵站を途絶えさせなかったということだから、相当なものだろう。運送系の仕事は、このときのノウハウが使われているみたいだ。

けどそれだけのことをしても一次大戦の死傷者数は膨大なものになったらしいから、総力戦って怖いよね……。一応、わたしが記憶してる前世の歴史と比べると数十万人ほど減ってはいるんだけど……。桁が大きすぎるんだよなあ。

と、ここまで聞いて思ったんだけど。直接戦闘以外にも要人や施設、車両とかの警備までやる上に、兵站なんかまで取り扱ってるって、それって民間軍事会社^{PC}では？ あれって第二次世界大戦前に存在する概念だっけ……。オーパーツ^{PT}みを感じる……。

ともあれ、そんなルベルクラクの基礎を作ったのは、やはりというか、トナティウだった。彼女は波紋の一族を滅ぼしていくシヨシヤナから独立する形で引き抜いたルブルム商会のメンバーをこのブリテン島に集め、当時各地に存在していた半吸血鬼の集落とまとめて、ここウエルズで組織化したらしい。

で、先述した通り二千年の間に商会メンバーと半吸血鬼たちは混じり合い、半吸血鬼の一族としてイギリスに仕えるようになって今に至る、と。

ただサンタナ王国はともかく、イギリスでは半吸血鬼という種族はあまり定着していないみたいだ。一応、半吸血鬼同士なら子供も半吸血鬼になるらしいから、ホモ・サピエンスから独立した新しい生物種と言ってもいいような状態ではあるらしいけども。

ルベルクラクの関係者をすべて集めても、イギリスの半吸血鬼はその1%にも満たないんだとか。いわゆる「伯爵本家といくつかの分家」以外はすべて人間で構成されているらしい。その貴族としての血族も、一部は人間らしいから相当だよな。

とはいえ、ここは仕方ないかなとも思う。だって、キリスト教の考えと半吸血鬼という存在そのものがあまり相性よくないもの。

聞けば案の定、魔女狩り華やかなりし近世の頃は特に肩身が狭かったみたいだ。まあ、吸血鬼には及ばないにしても、半吸血鬼の身体能力や寿命は明らかにただの人間を超越してるもんね。

それでも今まで続いているのには、それだけの秘密があるみたいだ。そしてその秘密は、わたしの指示で集めていた歴史的文物の中にあるらしい。具体的には教えてもらえなかったけど、そこらへんは追々とのことだったから楽しみにしてる。

半吸血鬼としてはそんな状況だから、ここ千年ほどは石仮面を使う機会はほとんどなかったらしい。一応、有能な人間を一族に取り込むときに使つてはいたみたいだけど、それこそ百年単位で行われる神事みたいな扱いだったくらいには滅多にあることじゃあなかったようだ。

そしてこのときどうしても発生してしまう吸血鬼は、寝てる間のみたし用の生贄として捧げられていたらしい。

正直、素直には喜ばなかった。わたしとしては当然人は食べたくないし、わざわざ石仮面を使うことにも抵抗があるんだもの。

けれどそうやって定期的に養分を摂つてなかったら、たぶんわたしは戦闘潮流も寝過ごしてた気がするんだよなあ……。

「……わたしの生贄になった人たち、志願者？ 強制された人じゃないよね？」

「ご安心ください。そこは間違いなく、我々一族の中から自ら望んだもののみを使っております」

わたしの質問に、伯爵は穏やかに答えた。……ならいい、んだろっか？ 一応、石仮面の使用を制限してたのはその危険性を理解しているみたいだし……それならあまり長々と言うのはうるさいだけかなあ。

とはいえ、石仮面が普通に存在していることにも思うところはあ

る。話を聞く限り、現存する石仮面で場所のわかるものはすべてルベルクラクかサンタナ王国が独占しているらしい。一般にはほとんど知られていないみたいだから、そこは褒めるべきなのかなあ。彼らが半

吸血鬼として命を繋いできたからこそ、わたしは今ここでほとんど万全の状態で彼らのサポートを受けられることになってるわけでもあるんだし。

それでも知られていない石仮面がどこかに存在する可能性はあるわけで。それがいつかどこかで牙をむく可能性を考えると、やっぱり複雑な気分だよ。

……あ、そうそう。ルベルクラクにならなかつたルブルム商会の残り半分は、1300年間ほどフランス近隣に存続していたらしい。こちらはルベルクラクに対してルージュユフィシューと名乗っていたそう。

トナティウはルブルム商会の資産のおよそ半分を持って独立したとのことだったけど、逆に言えば半分は残ったということでもある。このときトナティウは良識派をほとんど引き抜いていったせいで、残された側は次第にヤバイ組織になってしまったようだ。

それはやりすぎなんじゃ、とも思ったけど、つまるところトナティウは暴走したショシヤナとの関わりが薄い人を選んでいたとのことだから仕方ない気もする。

まあそんな経緯があったこともあって、ルベルクラクとルージュフィシューは不倶戴天の敵だったようだ。けどルージュフィシューは石仮面もしつかり持っていた上に、それなりの頻度で普通に使っていたらしいから、まあ、うん。わたしの感覚だとゴリツゴリの悪の組織ですね……。

「それはどうしたの？」

「長くかかりましたが、百年戦争のさなかに滅ぼしました。アルフィー様の教えや記録をないがしろにし、石仮面を世に放った連中は放っておけませんでしたので」

「でかしたー！」

いや本当に！ 石仮面を悪用する組織が現代まで続いてたらと思うとゾツとする！

やっぱり石仮面はあっちゃいけないものだよ……。これがないと何かあったとき半吸血鬼は存続できなくなるけど、それよりもあれ

が引き起こす悲劇や惨劇は見過ごせない。

ルベルクラクの人たちには申し訳ないけど、石仮面はいずれ破壊させてもらおう。半吸血鬼という種は一応定着してるっぽいし、これ以上はいらないだろう。

その作り方を知ってるのもカーズ様とわたしだけだし、わたしは新しく作る気がない。カーズ様を無事に倒すことができたなら……そのときは、この世界から吸血鬼の脅威はなくなっていくだろう。

……と、まあそんな感じで色々聞いた後は、しばらくこの時代のことを身につけるためにこの邸宅にこもった。各国の言語を覚えたり、イギリス社交界のマナーを教えてもらったりとか、歴史を調べたりとかしてたよ。

まあ、やつぱり柱の一族の頭は優秀みたいで、勉強は全部合わせても半月くらいで終わったけど。

それはそれとして、この世界の歴史を知るのはやつぱり楽しかった！　大まかな流れはサンタナの国以外ほぼ共通だけど、ところどころ違つててそれがまた面白いんだ。人の名前も一部違つたりして、けど知ってる歴史と似たようなことが起きてたり……そういう差なんかも興味深いよね。これだから歴史はやめられないんだよね！

そのサンタナ王国は、サンタナが寝てから少ししたあと勢力を拡大して、中米を征服した王朝としてかつて君臨したらしい。

ただ八世紀ごろから内紛で分裂し始め、内乱時代に突入。そして古代から続く王統の本家筋は、テノチティラン周辺のみを治める小王国にまで一時は衰退したようだ。

ところが十六世紀初頭、コンキスタドルが現れる。彼らに対して内乱は終わって団結する姿勢ができたのは、人間らしいなってると思う。

このとき、途中までは順調だったらしい。というか普通に勝つてたようだ。サンタナのテコ入れもあつて、前世と違つてこの世界の中米は技術でヨーロッパにさほど負けてなかったららしいからね。

けど、一番の敵は人間じゃなかった。敵は彼らが持ち込んだ、旧大陸の疫病だった。これは前世と一緒だね。

新大陸側はこれによって急速に力を落とす。これを押しつけるこ

とができたのは、サンタナの予言や石仮面を唯一継承し、半吸血鬼の特性を維持していた本家筋の王統だけ。

かくして新大陸は、テノチティトラン周辺以外は征服される運びとなった。

残されたサンタナ王国は以降、富国強兵につとめる。何度も危ない橋を渡ることはなかったものの、ヨーロッパ列強の仲の悪さに巧みにつけ込む形で生き残り、アメリカが独立するどさくさに紛れて版図を拡大。今の領土を保有するに至ったようだ。

その後は鎖国的な態度を取って、他国の問題には関わらないことにして今に至るらしい。この辺りはアメリカのモンロー主義と似たような感じだ。交流や貿易にいくつか制限があるらしいから、アメリカともまた少し違うわけだけど。

ただし、日本は例外。なぜかって日本の醤油、味噌文化がサンタナ王国で大ウケらしく、官民共に交流が盛んに行われているからだとか。醤油は神がもたらした至高の調味料らしいよ、サンタナ王国だと。

君主の権限が強いその政治体制はドイツと並んで明治維新後の国づくりに参考にされているようだし、なんなら日本国天皇とサンタナ王国王は互いに「紀元前から万世一系で続く神々の子孫たる王統」として承認し合っているとか。

……確かに、わたしの影響でサンタナが醤油っぽいの作ってたけどさ。それってどうなんだろう。醤油で繋がる同盟って……いや、前世の和食ブームとか見るとなんとなくわからないでもないんだけど。醤油っておいしいよね。うん。

まあ、サンタナ王国についてはこれくらいにしとこう。基本的なこととは知れたから、あとは現地で直接見てみようと思う。

と、そうこうしてるうちにわたしのこの時代における戸籍が無事作成された。伯爵本人が中心になってあれこれ手を尽くしてくれたみたいで、感謝しかない。ちなみに戸籍制度は中国とその周辺にしかない文化でイギリスにもないのだけど、そこら辺を語り出すと長くなるから戸籍という表現でこれからも通させてもらおうね。

「アルフィー・ルベルクラク、1926年12月24日生まれ。ルベルクラク伯爵家の断絶した分家の一つから養子として迎え入れた……か」

渡された戸籍に関する書類を一通り読んで、思わず感嘆のため息が漏れた。一ヶ月経たないうちにここまでしてくれるなんて。あなたはジエバンニか。

それはともかく、さすがに伯爵の近親として戸籍を作るのは無理だったらしい。でも断絶した分家から、って言い訳はなかなか苦しいと思う。

ただこの言い訳、通すために前々から準備してあったようだ。というのも、伯爵に実子はいないけど養子はたくさんいる。こないだわたしと一緒に風呂に入ったあの子供たちがそうで、あの子どもたちはわたしを迎え入れる際の隠れみものとして引き取った面が強いらしい。もちろん、単に人材確保って意味もあるようだけど。

これ、わたしが復活するタイミングがある程度わかってたからこそらしい。おまけに奥さんはいるのに意図的に子供は作らないようにしてる上、世間にも生殖機能に問題があると公表してる。

そして篤志家の顔をして、身寄りのない子供たちを引き取ってるんだとか。おかげで伯爵が養子を取ること自体はこのイギリスではよくあることで、わたしの戸籍の申請もわりとあっさり通ったらしい。

わたしとしては、そこら辺の一般人としての身分さえあればよかったんだけど。まさか事前にここまでやってくれてたなんて、本当に頭が上がらないよ。

「ちなみに養子とはいえ一応家族になるんですよ。何かのパーティとかに出なきゃいけないとかってある?」

「ご安心ください。他の子どもたちとはともかく、アルフィー様はその必要はありませんよ。なんとかします」

「するんだ……」

「さすがに王室から招かれた場合はなかなか難しいですが……まあ、陛下からでなければなんとかなるでしょう」

「なるんだ!?!」

どんな強権を持つてるの伯爵。

と思つて聞いたたら、なんと現在王位継承権二位のチャールズ王子の妻が伯爵の妹らしい。そしてルベルクラク伯爵家の傭兵業はロイヤルファミリーや有力者の要人警護として、非常に重宝されているみたいで……ルベルクラクが護衛をするようになってから、毒殺や暗殺と思われる事件がかなり減つたらしいし、王室からも相当に信頼を寄せられているという。

となれば、二十世紀といえまだ貴族制が色濃く残るイギリスでは、多少の無茶は通つてしまうわけだ。わたしの戸籍なんかもその辺りが関わってるんだらうな。

ちなみにこのチャールズ王子。吃音症に悩んでたらしいから、前世で言うところのジョージ六世だと思う。『英国王のスピーチ』は素晴らしい映画だった。この世界でも作られるんだらうか。

いやそれはともかく、前世の系譜に当てはまると、なんと戸籍上わたしは未来のエリザベス二世と従姉妹ということになってしまう。嬉しいような恐れ多いような。

「それとアルフィー様の旅券についてですが、こちらも現在申請中ですの、遅くとも七月の半ばまでには用意できます」

「わかった。何から何まで本当にありがとね」

「いえ、我々はアルフィー様のしもべでございますので」

ここまでしてくれたのに、彼らはどこまでも従順だった。それはそれでなんだか申し訳ないし、何か彼らにわたしができることってないだらうか。

そう言つたら、今後の世界情勢がどうなるか教えてほしいと返された。

……正直、わたしが語れるのは二十一世紀の頭までなんだけど。おまけにサンタナのおかげで不確定要素が多すぎる。ここで答えてあとで自分の首を締めることになったりしないだらうか。

そう思いもしたけど、期待されるとノーと言えないわたしはやっぱり小心者だなあ。

でもこれから恐らく起こるだらう戦争のことを考えると、やっぱり

助言はしておいたほうがいいだろうとも思う。第二次世界大戦の死者は、軍人だけでも2000万を超えると言われている。一人でもいい、それを減らすことができるなら。だからそこまでは教えることにした。

——チエンがナチをかばうから、総統が熱を帯びていく。そして総統は隣へと電撃戦を届けてあげる。

第二次世界大戦への導線はいくつもあるけど、イギリスで言えばこれに尽きると思う。いや、ネヴィル・チエンバレン自体は決して無能な政治家ではなかったと思うよ。社会保障や労働者に関わる法案をいくつも通してるし。

ただ外交……というか対ドイツという点で言うと、かばえない。彼が率いるイギリスと、隣のフランスがもうちよつと動いていけば、ヒトラーはあんな大きな戦争を引き起こすことは難しかったはずなんだ。

「……ドイツがまた世界に戦争をしかけると?」

「間違いなく。今年中には首相と大統領を兼ねるようになって、来年くらいには再軍備宣言するはずだよ」

「確かにヒトラーはドイツ国民から熱狂的な支持を得ているようですが……」

全員に首を傾げられた。うーん、信じてもらえないかな。世界的にもそういう空気だろうから、仕方ないとも思うけど。

そもそもこの時代、大部分の国にとって一番の脅威は社会主義を国是にしたソ連だしな……。

でもそのソ連はイギリスやアメリカと共にドイツと戦う国なんですよ。

まあわたしがそう言えるのは歴史を知ってるからこそだし、信じられないのも無理はない。チエンバレンもまだ首相じゃないしねえ……。

「……まあうん、そんなわけで世界大戦がまた起きるよ。前回と同じくらいの期間ね。今度はもつとえげつない戦争になる。できるだけ避けたほうがいい……けど、避けられないならせめて少しでも人が死

ならないようにしておかないとまずい」

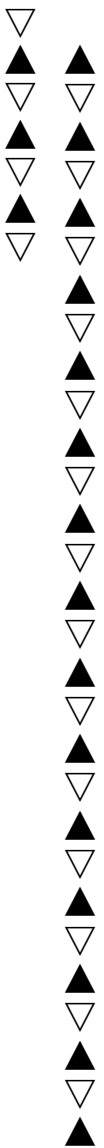
何せ第二次世界大戦中に、イギリスはドイツに空爆されるからね。特にロンドンには。そしてこの戦争の結果、イギリスは世界の頂点に君臨する大帝国の座から転がり落ちていく。

そう説明しながら、その他にも第二次世界大戦について話をする。最初はみんな怪訝な顔をしてたけど、わたしの話がやたら具体的だからか、信じる気になったみたいだ。

「畏まりました、仰せの通りに」

そして最終的にはそう言ってくれた。

さて……わたしは石を投げた。これがどういう風に動くだろう？
できることなら、戦争が起こらないでほしいところだけど……。



一通りの会話を済ませたあと、完成したドレスの試着のために部屋を出ていくアルフィーの背中を見送ったルベルクラク伯爵は、彼女が完全に退室したことを確認すると静かに口を開いた。

「どう思う？」

「にわかには信じがたいですね。けれど真実味があったことも事実。一応警戒はしたほうがよろしいかと」

彼に答えたのは、最初にアルフィーと対峙した女だ。彼女こそ、何を隠そう伯爵夫人である。

「……そうだな。ひとまず、チャーチル卿とのパイプを太くするところから始めるとしようか」

「新しい兵器の準備や、それに合わせた運用も考えたほうがよさそうですね。電撃戦……でしたか。言われてみればなるほどですが、今まで思いつきもしませんでした」

「うむ。知の神という伝承はあながち間違いではないらしい」

「平素は見た目通りの少女のようですね。多少気分屋なところもありますし、子供たちとも楽しそうに遊んでおられますし」

「そうだな。非常にかわいらしいお方だよ。それに、どうやらお優しいお方という話も事実のようだな?」

「はい。何かあれば一言お声をかけてくださいますし、謝礼の言葉も必ずいただけます。食事もわたくしたちと同じものを、ご所望されま
すし、未熟者の失敗にも寛容ですわ。命で失敗をあがなおうとするものも
も多くおりましたが、そういうものには必ず命を大切にしろと叱責
なさいますよ」

「そうか……」

妻の言葉を受けて、伯爵は顎に手を当てながら部屋の中をゆるりと
歩く。そのまま窓際まで寄ると、外の景色に目を向けた。

「……アルフィー様は、戴くに相応しいお方だと思いませんか?」

「どうでしょうか。今のところ見た範囲では、少々難しいかと」

その返答を受けて、伯爵は頷く。

「……やはり、これからの人類に神々はもはや必要ない。人類は神の
権能たる雷いかずちを手にして、神話を越えたのだからな。そこは神聖サンタ
ナ王国の陛下とも一致するところだ。しかし……」

伯爵はそこで一度言葉を切った。そして傍らの柵から葉巻を取り
出す。共に置かれていたはさみでヘッドを手際よく切り落とすと、オ
イルライターをカチリと鳴らす。湧き上がる炎でよどみなく切り口
をあぶりながら、彼は続きを口にした。

「……共存はできるはずだ。その点において私はかの陛下とは意見を
異にしている。そしてアルフィー様は、それができるお方だろう、と
は思うね。好ましくもな。……だが、まだ結論を急がずともよいだろ
う。戦争が起こるかどうか……それを確認してからでもな」

頃合いだろうか。伯爵は葉巻をくわえ、ゆるゆるとその煙を味わい
……一息に吐き出す。

そして。

「だがどちらに転ぶにしても、むくつけき大男よりかわいらしい少
女のほうが何倍も付き合いたいがあるじゃあないか。ましてや永遠
の美少女と来ればなおさらだ」

にやりと笑って見せた彼に、妻は冷ややかな目を向ける。

ルベルクラク伯爵。イギリス人でありながら、彼はジョークが致命的に下手だった。

5. 第四の矢

……聞こえてるんだよなあ。あいにくと普通の身体してないもので……。

まあでも、わたしを観察……監視？　してることはわかってた。そういうつもりじゃない人間が大多数だろうけど、ちよこちよこそういうつもりの人間も紛れ込んでる。そういう気配を察することができくらいいは、わたしも人間じゃあないんだ。

とはいえ、それを咎めるつもりはない。むしろ好ましく思ってるくらいだ。

だって二千年前、ルブルム商会の人たちはそのほとんどが盲目的にわたしを信じてくれていた。信じてくれることが嫌だとは言わないし、命を助けた人たちがルブルム商会を作ったんだから、無理もないと思う。

けどやつぱり、わたしは小市民なのだ。憧れを一身に集めるのは、居心地が悪い。わたしは超常の存在として憧れを集め君臨するより、理解できる身近な隣人として笑い合っていたいんだよね。つくづくそう思う。

いや、伯爵の言葉でそう気づいた。

だからこそ、わたしを見極めようとする今のルベルクラクの人たちのありようは、わたしにとっては好ましい。わたしという存在を盲目的に信じようとはせず、どういう存在なのかを見極めようとしている。それはわたしという人格を見てくれていると感じられる行いだ。……シヨシヤナやトナティウたちとも、そういう関わり方をすべきだったんだろうか。わたしは家族だと思ってたし、そう接してたつもりだけど。彼女たちの神聖視を積極的にやめさせようともしていなかった。そういうところなのかもしれない。

実際のところどうなのかは、今となってはもうわからないけど。

「それにしても、サンタナ王国はわたしたち柱の一族に対して否定的なのかな？　それは、……まあ、人間としてはある意味正しいあり方にも思うけど」

あれほどサンタナを信仰していた土地で、サンタナ信仰が薄れているらしいという話は、にわかには信じがたい。

けど、何世代も経れば考えが変わるのは当たり前のことだし。サンタナ王国であつてもそれは変わりないってことなんだろう。

わたしとしてはむしろ、ルベルクラクが今でもわたしに対して好意的なのがびっくりだ。伯爵たちは色々思うところがあるみたいだけど、それでも決して嫌われているわけではないらしいし。今までそれだけの利益を享受できたってことなんだろうか。

「……いやでも、それはそれとしても、伯爵がそつちの道の人だったとは」

視線にまったくいやらしいものがなかったから、気づかなかつた。視線からは父性しか感じなかつただけだな……ここら辺、わたしはやっぱワムウたちにはかなわないんだろうな。

まあそれはいい。仮に伯爵がわたしに手を出そうとしたところで、波紋使いでもなければスタンド使いでもない彼にわたしをどうこうできるはずもない。はず。普通の銃火器でもわたしたちを殺しきるのはできないしね。

問題は、彼が養子にしたあの子供たちだ。まさかとは思うけど、あの子たち性的な被害を受けてたりしないだろうね？

あるいはそういう裏稼業に手を染めてたりとかしないだろうね？

「ちよつと調べてみるかあ」

そんな不安に駆られたわたしは、スキを見計らつて伯爵を調べてみることにした。

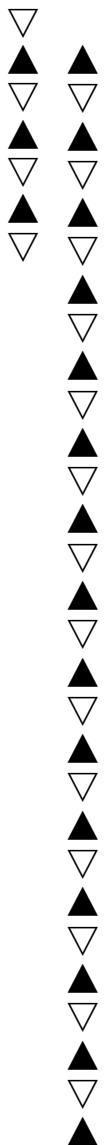
「こちらがアルフィー様のために仕立てましたドレスです」

「うわあお姫様みたい」

まあ、それは少し後回しだ。今は着せ替え人形の仕事が先決だね。オタクだったとはいえ、わたしだって女の子だ。こういういかにもなドレスには憧れてたんだよね。幼児向けのドレスってのが気に食わないけどそこは仕方ない。

……こういうのが用意されるのは、ある程度の身分がある人たちと顔を合わせる機会に備えてのことだろうか。伯爵の趣味……ではな

いと信じたい。切に。



無事着付けも終わって、わたしは与えられた部屋に戻った。ということ、早速調べていこう。

と言っても、人を使って調べるなんてできっこない。わたし一人でやれることにも限りがある。

部屋の外にはいつでも万全に準備を整えた使用人の人たちが待機してるけど、調べる対象が対象だけに彼ら彼女らの力を借りるわけにもいかない。

じゃあどうするか？ 答えは一つだ。

「ネヴァーフエード」

手元に弓と矢が現れる。ルビーのような光沢を持つ赤い弓は、二年ぶりのスタンド「コンフィデンス」。そして出てきた矢は、眠りにつく直前に生まれた四つ目の矢。

鏃に刻まれた紋様は、雫だ。この矢をつがえ、わたしは屋敷に撃ち込んだ。

けれど、屋敷に物理的な衝撃は伝わらない。この矢には攻撃能力は一切ないのだ。その点では、回復能力である「センド・マイハート」と同じと言える。

だけどこの矢の効果は、回復じゃあない。わたしは屋敷に刺さった「ネヴァーフエード」に歩み寄って、しばらく様子を見たあとそれを引っこ抜いた。

鏃を顔に近づける。そこにある雫の紋様の色が変わっていた。黒だったそれが、白く。

「ええ……こんな短時間で終わるの。【ムーディーブルース】が涙目じゃあないか……」

そうひとりごちながらも、わたしは「ネヴァーフエード」を自分の頭に突き刺した。

するとその瞬間、わたしの脳裏に記憶が流れ込んでくる。「ネヴァーフエード」が抽出した、ルベルクラク伯爵邸の記憶だ。

どうやら制御がまだうまく行かないみたいで、この屋敷が建てられたところから今日に至るまでの記憶が一気に流れ込んできた。あまりにも大量の記憶が一気に来たものだから、頭痛が走って思わず頭を押さえる。

……これ、わたしが人間だったら頭パンクしてたんじゃないだろうか。物理的に。これでもかなり条件を絞った記憶だけを抽出したつもりなだけだな。物理攻撃力はないってさつき言ったけど、訂正しよう。使い方次第では攻撃手段になるかもしれない。

……でも怖いなあこれ。検証してみたくはあるけど、何が起こるかわからない。申し訳ないけれど、小動物で検証するところから始めたほうがいいんだろうな。

と、そうこうしてるうちに記憶の流入が終わった。「ネヴァーフエード」を抜くと、そこにある雫の紋様は黒に戻っていた。

「……うーん、シロだなあ。なんで伯爵はあんなこと言ったんだろう？」

その記憶によれば、伯爵は別に子供に対して性的な虐待はしていない。というかこの屋敷が建てられて三百年ほどが経ってるみたいだけど、その間この屋敷の中でそういう非道が行われた形跡はなかった。

わたしの勘違い……というか、伯爵の言い方が悪かっただけなんだろうか。

……いや、そう決めつけるのはまだ早いぞ。ルベルクラク伯爵家の不動産は他にもまだまだあるはず。つまり他の場所でそういうことが行われてる可能性はあるはずだ。

他の場所に行き機会があったら、そこも調べて行こう。うん、そうしよう。

「それにしても……これまたわたし得な矢ができたなあ」

手元から「ネヴァーフエード」を消しながら、思わずつぶやく。

いやだって、わたしの記憶を他人に与えたり、射貫いたものから記

憶を引き出せる。しかもその対象はわたし自身も含まれるんだよ？
そんなの、実質タイムテレビみたいなものじゃあないか！

建物に使えるってことは土地にも使えるだろうし、道具にだって使えるはずだ。つまり、それらが歩んできた道のりを、追体験できるってこと。

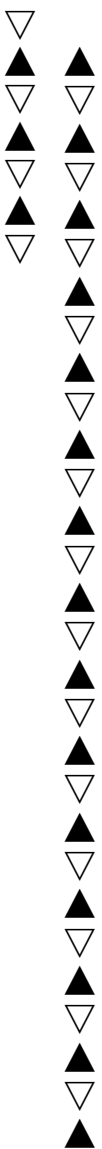
完全にわたし得がすぎる……！

いやうん、わかってる。眠る直前、大ダメージを受けたときに生まれた能力だから本質はそこじゃあない。この能力の本質は、あくまで情報の伝達のはずだ。

これさえあれば、口で説明しなくても見たもの聞いたものをそのまま伝えられる。敵の情報だって一瞬だ。事件が起きたら、犯人をすぐに見つけることだってできるだろう。

あるいは、パスワードとか知られちゃいけない隠し場所とか、そういうのを暴くのにだって使えるだろう。悪用しようとしたらいくらでも使える能力だと思う。

……でもなあ、悲しいかなこの能力の持ち主はわたしなんだよなあ。もうね、手に取るようにわかるよ。未来のわたしが、大英博物館の展示品に片っ端から「ネヴァーフエード」する光景が……！



それからさらに数日。わたしは色々な方法で「ネヴァーフエード」の検証を行った。

方法は割愛するとして、わかったこととしてはこの能力、記憶を抽出するためには対象に矢を撃ち込む必要があるんだけど、自動では戻ってこない。だって刺さって止まつてるもの。軌道も操れない。

つまりしつかり記憶を取り込みたいなら、自分で取りにいかなきゃいけない。おまけにちゃんと情報を受け取るには、頭に刺さないとほとんど効果が出ない。

なんというか、妙なところで使い勝手が悪い。おかげで博物館では

使えないだろう。とっても残念だ。

ただ、情報の伝達手段としてはものすごく優秀な能力だ。何せ抽出する記憶の選定はかなり細かく条件付けして取り出せるのだ。適当に「性的虐待」で検索かけるだけでも十分絞り込めるんだよね。人に伝える場合も同様で、スタンドが法廷での証拠能力を認められたとしたらものすごくヤバイスタンドに早変わりするだろう。

まあまだそんなに多く条件はつけられないんだけど、訓練を積み重ねるとなくできそうな気がする。スタンドでできるって思うのは大事なことだ。

そして懸念していた攻撃能力についてだけど、使えないことはないけど微妙、って感じかな。

この世界には、限界というものがある。特に生き物には、それが顕著に存在する。

記憶も例外じゃあない。覚えていられる記憶には限度というものがある。世の中にはサヴァン症候群なんてのもあるけど、それはともかく。

ところが「ネヴァーフエード」は、この限界を短時間で一気に飽和してしまっただけの記憶を対象に与えることができる。できてしまうのだ。

するとどうなるか。これが恐ろしいことに、懸念した通り頭が物理的にパンクする。

するんだけど……さっきも言った通り、しつかり情報を渡すためには頭に刺さないといけない。これは攻撃に使おうと思っても同じだ。つまりヘッドショットできないとパンクはしない。

でもね、普通の生き物は「コンフィデンス」の通常の矢でも、頭にぶち込まれたら大体死ぬんだよ。なんならわたしが全力で放つ矢は普通にコンクリートを破壊できるから、お腹に当たるだけでも致命傷に持っていける。わざわざ「ネヴァーフエード」という別の能力を使っただけ、頭を破裂させる必要性がなさすぎるんだよね。

さすがに一万年以上生きてるわたしの記憶を全部ぶち込めば、頭以外のところに刺さっても多少効果があると思うけど……それにし

たつて普通の矢を射ればいいわけで……なんていうか、攻撃能力としてはすこぶる微妙つてわけだ。

これを攻撃として使うメリツトって言ったたら、傷跡が外傷じゃなくて中から破裂した形になる分、殺人と思われにくいってくらいじゃあないだろうか。でもそれにしたつて、スタンドを使えばいいかりやく。

まあ、現状でできないからつてあんまり嘆くことでもない。スタンド能力は成長するのだ。もしかしたら、もつと使い勝手がよくなつていくかもしれない。

そのためには、スタンド能力の修行も欠かせない。今までもやつてはきたけど、しばらくは「ネヴァーフエード」に比重を置いて訓練していくことにしよう。

と、そう決意したところで、いよいよロンドンに行けることになつた。

「おおー、これがこの時代の車ー！」

そのための足は、自動車だつた。

自動車の歴史はそこまで詳しくないんだけど、大衆車が広まるきっかけになつたフォードのT型が確か二十世紀初頭の製品だ。1930年代ともなれば相応の進歩をしていて、見た目は前世のわたしが生きてた頃のデザインにかなり近くなつていて。なんなら博物館で見ることがあるやつだ。それが実際に動いてるところを見れて、しかも乗れるなんて感動だ！

「初めてお乗りになるでしょう？　ドライブを楽しみながらゆるりと参りましょう」

まあ、伯爵と一緒に後部座席に並んで座ることになつたときは、どうしようかなとも思つたけどね。でも何もなかった。

そんな感じで、カーデیفからロンドンまで車で揺られること……えーと、何時間だつたかな。1930年代の風景をずっと眺めてテンションぶち上げてたから、そこらへん曖昧なんだよね。

なんだか周りからはとても微笑ましいものを見るような目で見られてたような気もするけど、それは気のせいだと思いたい。でもあとでカメラは買ってもらおう。

というわけでやってきたロンドンのルベルクラク別邸。本邸にも劣らない随分と立派な建物だったよ。

門の近くではためくルベルクラクの紋章入りの旗が印象的だ。あ、ちなみにルベルクラク家の紋章はカーバンクルがモチーフだ。そのものずばりって感じだね。

「アルフィー様に於かれましては、こちらのお部屋をお使いください」
案内されたのは、歴代の嫡子が使ってきた部屋……ではなく、ゲストルームだ。

嫡子の部屋とかそんな内外に明確な意味を持つ部屋を使うなんて、あとあと絶対面倒なことになりそうだったからね。わたしとしては書斎でもよかったんだけど、それは伯爵が申し訳ないってことで、間を取ってゲストルームに入ることになった。普通の部屋は、子だくさん（前にも言った通り全員養子だけど）なこともあって埋まってるんだよね。

「……ゲストルームってレベルじゃあないよね。もしかなくても一番いい部屋なんだろうなあ……」

「もちろんでございます」

というやり取りもあったけど、これはもう慣れるしかないんだろうな。既にわたしは、世間的にはイギリス貴族の一員なわけだし。

「長距離を移動してきましたのでお疲れでしょう。お風呂と食事の用意をいたしますので、しばらくお待ちください」

「いつもありがとうございます」

「いえいえ、それが我々の存在理由です。……では何かありませんら、本邸と同じく使用人を控えさせておりますのでそちらまでお願いいたします」

「ん、わかった。また食事の席だね」

「はい、お待ちしております」

「さて……」

ばたん、とドアが閉じて伯爵が消えた。

広い室内を見渡す。見える範囲では特に気になるものはない。耳で聞こえる範囲も。

では、早速この屋敷の記憶も確認させてもらおうかな。伯爵が何も悪いことをしてないと信じて……！

「ネヴァーフエード！」

そしてわたしは屋敷から記憶を取り出し、いつものように自分に移す。

だけどやっぱり、伯爵が悪事を……性的虐待をしているような記憶はどこにもなかった。歴代においても同様だ。まあ、たまにゲストルームに泊まった別の貴族がそれっぽいことをしてたのは、見なかったことにするとして。

「……やっぱり、わたしの勘違い？ いや、勘違いだとしたら伯爵も言い方が悪いよなあ……」

ちよつとむくれた顔をしながら、わたしは「ネヴァーフエード」の鍬をジト目で見つめる。

なんだろうな、この肩透かし感。いや、いいことなんだけどね。いいことなんだけど。

6. あれえ!?

「大！ 英！ 博物館カーンっ!!」

ロンドンに越してきて数日後、わたしは遂に大英博物館に足を運んだ。そしてその入り口を見上げて大きく手を掲げて跳びはねた。

遂に！ 遂にここに来ることができた！ 前世では行きたい行きたいって思いつつも、ついぞ来ることができなかった世界一の博物館！

この……この神殿のような外観！ 最高かよう！

「はくしゃ……じゃない、お父様！ お母様！ 早く入ろう！ わたしもう我慢できない!!」

「はいはい、わかりました」

振り返れば、ルベルクラク伯爵が夫婦並んでニコニコしながら近寄ってくる。

一応戸籍上は親子ということになってるので、今日は彼らにエスコートを頼んだ。もちろん周りには、ルベルクラクの屈強なガードマンもいるけどそれはそれ。親子のお出かけという体裁なのだ。

彼らを親と呼ぶのは少々気恥ずかしいんだけど、そんなことより博物館が楽しみすぎるのでここまで来たらもうどうでもいい。

あ、ちなみにわたしの普段の身体は褐色なんだけど、一応まだ人種差別がかなり強く残ってる時代ということで、コーカソイド系の色に擬態してる。髪もだ。ぱつと見は、純粹にイギリス人っぽい感じになってるはず。角だつて当然隠してある。

まあそんなことはいいんだ。どうでもいいんだ。

入ろう！ 大急ぎで入ろう！ 大英博物館は常設展示品だけでも十五万点以上あるんだぞ、時間なんてどれだけあっても足りないよ！ それに、わたしの意思としてルベルクラクが代々収集してきた歴史的文物なんだけど、これ、実は今その大半がここにあるらしいんだよね！

というのも管理の手間とコスト、さらには相続に関するゴタゴタから、大英博物館の設立時にほとんどを寄贈してしまっただけらしい。当時

の王室への忖度もあったみたいだけど、ともあれそういうわけで、残念ながら家にはあんまり興味を引くものは残ってなかった。

伯爵からは首を差し出して謝罪すると言われたけど、いつも通り却下。そりゃあちよつと残念ではあるけど、つまり見に行けばいいんだよ。つてことで、大英博物館だ！

まあ、寄贈したルベルクラク遺産はほとんどはバックヤードにあるみたいだけど、同時にルベルクラク家は大英博物館の大口スポンサーでもある。その権限で見に行けばいいんだよ。

仮に見れないとしても、そのときはそのときだ。歴史好きとしてはわたしが集めさせた史料が後世の歴史学に少しでも寄与してるなら、それ以上は望まないさ。

それに、特に価値のあるものはちゃんと隠してあるらしいし。専用の場所に隠してあるらしいからこれもすぐには見れないけど、一気に出されてもそれはそれで困るし、そのほうがよかったのかもしれない。お楽しみは最後に取っておこうと思う。

というわけで、大英博物館！ 早速入場しよう！ 入館料はなんとタダだよ！

とはいえ、これだけの品を抱えてる以上はお金は必要。だから博物館は常に寄付を募ってる。どこの国のお金でも構わないって言われてるから、みんなも博物館に行ったときは少しでも寄付しようね！

「はい、これ寄付します」

「ええ……」

その寄付の受付で、当面のお小遣いとして渡されたお金の半分を差し出したら、受け付けのおじさんにドン引きされた。解せぬ。

おじさんは本当にいいのか、みたいな顔で伯爵夫妻を見たけど……二人とも、苦笑しつつも頷いたのでおじさんはさらにドン引いた。金持ちの考えることはわからねえ、みたいな感じだろうか。

そんな一幕もあったけど、まあ、まあ、ともかく博物館だよ。

「どこから行くのかな！ どこがいいかな！」

「ここから、あまり走ると他の人に迷惑だよ」

「だってだって！」

そんなような会話を、さて何回しただろう。

わたしは彼らの注意もそこそこに、館内をあっちへこっちへ動き回って展示をなめるように眺めていく。

ありがたいことに今の身体は優秀で、展示の文章も案内もすべてネイティブレベルで理解できる。これがまた嬉しいのなんのってね！

おまけに、人間だったらずっと立ちっぱなしは厳しい。一度大雑把に流し見してから、気になってたものところに戻ってじっくり見るのが一番無難な見方だって言われてたくらいだ。

だけど今なら、そんなことをしなくても一つ一つをじっくり堪能しながら見て行くことができる。そうしてもなお、身体は悲鳴を上げない。これがどれほど嬉しいか！ 色々悲しいことやつらいこともあったけど、この身体の強さをここで実感できるだけでも生まれ変わってよかったって思える……！

おほー！ モアイだ！ でかああああい！ 説明不要ツ!! そうか、これももうこの時期既にあるんだね！ すごいぞー！ かつこいぞー!!

モアイがあつたイースター島は前世含めても行ったことないし、イギリスからも遠いから情報がないんだよねえ。この世界でもあの辺りの島々の謎はよくわかってないんだらうなあ。

こんなときは「ネヴァーフエード」の出番だ。出番だけど、刺したあとの矢を抜きに近寄らないといけなから我慢するしかない。いつかイースター島にも行ってみるか！

ひゆう！ ロゼッタストーンだ！ 碑文の内容が全部読めてしまっうけどむしろそれはご褒美だね！ それにどうせ百年くらい前に解読されてるんだし、気にする必要はないよね！

それよりもむしろ、わたしが知ってる前世のそれより残ってる部分が多いのはどういうことかな!? 素晴らしい！ よくぞ残ってくれました！

おおお！ ラムセス二世（オジマンディアス王）の巨像！ おつきい！ 素敵！ 抱いて!! 思わず拝んじやった！ 偉大なる太陽だ

から仕方ないよね!!

……いやまあ、わたしこの世界だとご本人と面識あるんだけどね。本人にも同じこと言った覚えがあるけど、子供には興味ないって言われたよ! ごめんなちんまくて!!

「おお、エルギン・マーブルだ。すごい……ちゃんと残ってる……。わかってはいたけど、やっぱりふつくしい……」

ギリシャの有名なパルテノン神殿に飾られていた彫刻ですね! まあ二千年以上前に現地で直接見てるから、これに関してはこちらとだけテンションの上がり幅は小さくならざるを得ないな。

それでも悠久のときを越えて今ここにあるこの彫刻群は、今見てもとても美しい。この極彩色に彩られた艶姿は、その完成度もあってあまりにも存在感がすごい……ん?

ん? あれ、なんかおかしいぞ。今……今って1934年だよね。そのはずだよね……。

「どうかしましたか?」

「え? あ、うん……えっと、今って本当に1934年だよね?」

「? そうですが、それが何か?」

「いや……いや、うん、なんでも。ただ……この彫刻、なんでまだ色が残ってるのかなって思ってた」

そう、エルギン・マーブルと呼ばれる一連の彫刻は、わたしの前世ではすべて下地である大理石の純白を完全に表にさらしていた。それには色々な経緯があつて、残っていた着色がすべて削られてしまったからこそなんだけど……それがなされたのが1930年だったはずだ。あれは前世でも博物館学などではよく話題に上がる、考古学における大スキヤンダルだったからよく覚えてる。そんなことをしていいはずがないって、講義中に激怒した覚えも。

だけどこの世界では、1934年になつてもまだ色が残ってる。これはどうということなんだろう?

そう思つてたら、伯爵は得心したという顔で解説を始めた。

「そのことですか。ええ、確かにこの彫刻は四年ほど前に研磨されそうになったことがありますな」

「……わたしの観測した未来では、完全にされてたんだけど……誰かが阻止したの？」

「ええ、その通り。何を隠そう我々がスポンサー権限でストップをかけたよ」

「でかした!!」

なんだよファインプレイかよう伯爵!!

「我々は二千年前から、歴史的文物の保管も使命としてきましたからね。それは絶対に認められないよ」

「ありましたねえ、そんな騒動も。研磨すべきだと主張する同じく博物館の大口スポンサーと激しく口論しましたよ」

「お手柄だよ二人とも！ うん、そうだよ。過去のもは当時の姿であるべきだよ。後世の人間がこうだったに違いない、このほうがいいはずだ、なんて思ってた手を加えるなんて絶対に許されないもの！」

「とはいえ、一番のお手柄は我々ではないでしょうな」

「？ そうなの？」

「ええ。何せ我々が事実を知るよりも前に、職員たちが清掃作業で研磨しようとしておりましたからな。ですがそれを、直前で止めてくれた方がいたので」

「……なるほど、その人がとめてなかったら」

「そうですね、これほどきれいな状態では残っていなかった可能性が高いです」

「はあー、ちゃんと心ある人はいるんだなあ……」

改めて目の前のエルギン・マールブルに向き直って、わたしは思わずため息をついた。

わたしがいることで、少しでも多くの人を助けられたらいいなと思ってる今まで生きてきたけど……こういう歴史学考古学の分野でも少しだけいい影響があるなら、それはとつても嬉しいことだなって。

と、思ったところで。先ほどから後ろに立って、何やら話しかけるタイミングをはかっていたものすごく大柄な人が声をかけてきた。

「そう仰っていたら、光栄です」

……ん？

人がいたのは気づいてたけど、この声……聞き覚えがある？ どういうことだろう？

そう思いながら、伯爵夫人と一緒に振り返る。そこにいたのは……。

「どうもこんにちは、ルベルクラク卿。ご無沙汰しております」

「これはこれは、ジョースター卿。こちらこそご無沙汰で申し訳ない」「フアツ!」

そう、そこにいたのは。

第3部のジョセフに非常によく似た、四十代くらいの大柄な男性だった!

そして彼はにこりと微笑むと、ゆっくり腰を下ろしてわたしに視線を合わせる。そのまま、完璧な所作でわたしの手を取って口を開く。「初めまして、お嬢さん。僕の名前はジョナサン・ジョースター。どうぞお見知りおきを」

「ふえあつ!? あ、お、あう、あ、アルフィー、アルフィー・ルベルクラク、です、よ、よろしくおねがいしましゅー!」

かんだ。めっちゃかんだ。

でも、でも仕方なくない!?

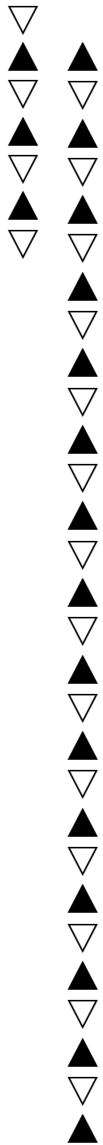
だって! だってここに、死んだと思ってたジョナサンがいる!

しかも声を掛けられるだけじゃあなくて、挨拶までされて! いきなり推しにこんなことされたら、ファンの心臓がとまるやーっ!!

だけどおかしい、こんなのおかしいぞ!

なんで、なんでここにあなたがいるんだ、ジョナサン・ジョースター! あなたは五十年近く前に死んでいるはずでは!?

どういうことなんだ! これは一体、どういうことなんだよオオーッ!!



その後わたしが完全にポンコツになってしまったので、心配した

ジヨナサンが気を利かせてくれて、バックヤードで休んでも構わないからとそちらに案内してくれた。

道中、清掃中の恐竜の化石とか、どこかで見たことのある壺とか、武器とか、色んなものの横を通過したけどそれが気にならないくらいにはわたしは動転していた。

「はいお嬢さん、こちらよかったですら」

「ふあい、あい、ありがとごさいましゆ」

ジヨナサンから手渡されたのはココアだった。わたしに死ぬと？

ジヨナサンの手が大きすぎて、マグカップがドチャクソ小さく見える。尊い。しぬ。

「ふふ、かわいらしい子ですね。こちらはもしや、先日迎えたという……？」

「ええそうです。いや、普段はもつと聡明な子なのですがね」

「ああー……見ての通り僕は大柄ですからね。驚かせてしまったかもしれません」

「そういう感じではなかったように見えますが……」

うん、そう、その通り。そういう意味でポンコツしてるわけじゃないのよ。違うんだ。

推しが目の前で生きて会話してる、これほど嬉しいことはない……。こんなの見せられたら、死ぬるに決まってるじゃあないか……。

いや待て、このままだと本当にただのダメな子供だ。気合いを入れて、しっかりと状況を見極めるんだ。そうすべきだ。深呼吸して……よし、ちよつとだけ落ち着いた。

「アツ、好き。」

「……じゃ、ないよ！ 何してるんだわたし！ ふー、ふー。」

よし。今度こそ！

……こうして見ると、本当に3部のジョセフによく似てるなあ。なるほど、原作でもうり二つって言われてただけのことはある。彼より若く見えるのは、波紋の影響だろう。

でも今は波紋を使ってる気配がない。普通の呼吸だ。もう使っていないのかな？ ジョセフも3部では普段からは使ってなくって、ファンの間ではスージーQと一緒に時間をすごすためにあえてやめた、みたいな考察がされてたけど……ジョナサンもそうなんだろうか。

2部のエリナさん、結構なおばあちゃんだったものなあ。今がその四年前ってことは、このジョナサンを横に並べても夫婦には見えないだろう。ジョナサンの性格なら、それは嫌いそうだなあ。

「落ち着いたかい？」

「はい、なんとか」

伯爵に声をかけられた。その声音は、心配するより呆れてる割合のほうが多いように聞こえた。何も言い返せないね！

「改めて、紹介しようか。こちら、ジョースター卿は我が国における考古学の第一人者の一人でね。普段はこの博物館に勤めておられるのだ」

「……あの、改めまして。アルフィー・ルベルクラクです。先ほどは目汚し、失礼いたしました」

紹介されたので、わたしもココアを置いて立ち上がり、カーテシーを決める。汚名は返上だ！

それにしても、考古学の第一人者、か。なるほどそう来たか。

確かにジョナサンは、元々大学で考古学を学んでいた。その論文も絶賛されていたほどだ。それなら、彼が生き残ったなら大英博物館に勤務していても何もおかしくはない。

そんな彼が、不適切な「清掃」をしようとしていた職員をとめてくれたのか。うん、実に彼らしいエピソードだ。彼なら確かに、やるだろう。

「いい名前だね。うん、ではこちらも改めて。ジョナサン・ジョースターだ。よろしくアルフィー君」

うん、と頷く彼にまた色々やられそうになる。だけど我慢だ。何度も醜態をさらすわけにはいかない。一応神様ってことになってるんだし、威厳が……いや元々ないけど、これ以上上げるわけにはいかないよね。

「……それにしても、アルフィー君は随分と歴史に詳しいんだね」

「え。あ、はい。大好きなんです」

「そうかそうか、これほど将来有望な若者に会えるなんて今日は運がいいなあ」

ああもう、なんてさわやかな笑み。一体それで何人の女性を殺してきたんですかあなたは！

というか、こんな見るからに子供なわたしに普通に成人と接するように対応するあなたは、本当に紳士なんだね……。これ、絶対女の争いが裏で起きてるでしょ……。

「……ええと。ジョースター卿に感謝を。貴重な文物が失われることを未然に防いでくれて、ありがとうございます」

「僕は歴史に携わる碩学の一人として、当然のことをしたままでよ。けれど……うん、君の感謝はありがたく受け取ろう。どういたしまして」

「……あまり嬉しそうではなさそうですけれど」

「わかるかい？」

「ええ、まあ……」

頷くわたしに、ジョナサンは苦笑する。

「……王家に仕える身でこのようなことを言うと、叱られてしまうのだけだね。僕はエルギン・マーブルはここにあってはいけないものと考えているんだ」

「なるほど、そういうことでしたか」

「あれだけじゃあない。この博物館には、我が国が他国から略奪してきたものも多く収蔵されている。そうしたものは返却すべきだと……そう考えているんだ」

「わかります。あるべきものがあるべきところへ。それが正しいとわたしも思います。……けど、そういうわけにもいかないですよね」
「そういうことだね。これは国家間の政治的な問題でもあるし……国によっては、博物館のような施設を適切に運営するだけの国力がまだないところもあるから……」

「ちゃんと保護できなかつたら、風化するだけですもんね。ここに色

んな分野のものが集まっているからこそ研究が進む、っていう見方もできますし……」

こくりとジョナサンが頷いた。

そんな彼を見ながら、わたしの隣で伯爵が苦笑する。

「おほん、それについては聞かなかったことにいたしましたしょう」

「ありがとうございます、ルベルクラク卿」

その言葉に同じく苦笑して、ジョナサンが頭を下げた。

うーん、この辺りはやっぱり二十一世紀のほうが色々自由なんだなあ。

とはいえ前世でも、この辺りの問題は二十一世紀になっても解決はしてなかったんだよね。件のエルギン・マールブルなんて、ギリシヤ政府とかなりもめてたはずだし。

……まあでも、これについてはわたしにどうにかできる範囲を超えている。これは完全に、政治家の仕事だ。その辺については……。

「……………」

ちらり、と横目で流し見たわたしに、伯爵は頷く。わたしの意図が伝わったようで何よりだ。

うん、そう。彼は直接イギリスの政治に関わっているわけではないけれど、影響力はある。そこから少しずつ話を進めていくようにしてくれれば、もう少しこの国の問題も減るだろう……。

7. この世界のジョースター家

大英博物館では、その後ジョナサンと歴史談義で盛り上がった。うん、盛り上がってしまった。

元々彼はわたしを子供扱いせず、一人の人間として接してくれていたけど……おかげで途中からは完全に大人と話し合うような感じになっただよね。

なおそんな彼の専門分野は、中米史らしい。より具体的に言うと、サンタナ王国。これ以上は詳しく聞けなかったけど、たぶん石仮面についてだと思う。きっと彼は今も、石仮面を追っているんだろう。

ただここ十年ほどは、ローマに関心を移している……ということみたいだけど。あのこれ、もしかしてカーズ様たち既に発見されてる感じですか？ ジョナサンが今生きてるってことは、まだ起きてはいないんだろうけど、心配は心配だなあ。

……実のところ、石仮面についてはわたしが大体答えられるわけなんだけども。それはまだ話す時期じゃあないんだろうな。

とはいえ彼とは戦うなんてことになったらすごく嫌だし、そういう立場でもないと思ってるつもりだ。彼とは関係を深めて、四年後の戦鬪潮流に備えたい。

まあ、おかげで伯爵からは色々と問い詰められたけどね。どうやらわたしが一目惚れしたと思っただけらしい。

あながち間違いではない。ないけど、そんな事情は話せない。だから将来的に世界の平和にかかわってくる人だっただけで答えておいた。うん、嘘じゃあないよね。

そんなことがあってから数日。わたしは足しげく大英博物館に通って常設展のすべてをじっくり堪能した。

見て回ってるだけで幸せな場所だったけど、たまに仕事の合間にジョナサンが案内してくれて死ぬかと思ったよね。

もちろんただポンコツしてたわけじゃあなくて、色々調べたりもしてたんだよ。主にジョースター家についてね。伯爵たちがだけ。

その調査によって明らかになった、表向き語られている情報だけで

もフロントムブラッドが起きていたことははっきりとわかった。何せジョースター家にあるとき養子が入ったとか、ジョースター邸があるとき全焼したとか、ウィンドナイツ・ロットであるとき大量の行方不明者が出たとか、そういう話がすぐに出てきたからね。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……でも変わらないところもある」

次にわたしは、別の報告書を手に取る。

「ジョージは……やっぱり助からなかったんだね……」

そこに書かれていたのは、ジョナサンの息子であるジョージ・ジョースター……いわゆるジョージ二世についてだ。

ジョージの妻はエリザベス・ジョースター。彼女はジョースター家の養子とのことで、客船事故の生き残りということになっていたので、多分彼女だろう。

そしてジョージはこの世界でも空軍のパイロットになって、第一次世界大戦で活躍。1920年には第一子ジョセフが生まれるものの、その年に飛行機の事故で亡くなっている。

同年、ジョージの妻エリザベスがイギリス空軍司令官を暗殺。現在は行方不明で、国際指名手配は継続されていて捜索が行われている……と。

つまりこの二人に関しては、ほぼ原作通りみたいだ。というか、ジョナサンに関してても兄がいたことと、彼が代わりに死んでいる以外は、どうも原作通りのような気がする。

ちなみにこの事件の影響で、兄が継ぐはずだった家業を急遽継いでどうにかこうにか貿易商としてやっていたジョナサンは、犯人の親として色々苦境に立たされたらしい。ほとんどの上流階級からつまはじきにされた挙句、最終的にジョースター家の資産のほとんどは没収され、貿易商としての仕事もかなり安い値段で他人に売り払うことになってしまったらしい。

そりやあ国の要人を暗殺した人間の関係者となれば、それも仕方ないような気もするけど……いくらなんでもやりすぎでは？　そういうところだぞイギリス。

でも中流階級以下の人たちからは慕われていて、大英博物館の学芸員に就職できたのもその伝手らしい。見る人は見るといいうか、彼の人柄がなせる技かな、この辺は。

ちなみついでにもう一つちなんでおくと、ルベルクラク家はジョースター家を支援した数少ない上流階級らしい。まあ、それもジョナサ

ンが波紋使いであるから、という理由らしくはあるんだけど。これに
関しては結果オーライかな。

……だいたいがずれてしまった。本筋に戻そう。

ジョージとエリザベスの夫婦が原作通りに推移したということとは、
少なくとも第2部戦闘潮流に関しては原作とほぼ同じ道筋になる
……と思う。物語の中核になる部分は、今のところほとんど変わって
いないからね。

例外はサンタナの辺りだ。あの辺りのエピソードがどうなるのか
ちよつとわからないけど……それにしたって、カーズ様たちが目覚め
てからの流れはさほど変わらないはずだ。問題はそのあとだよなあ。
「……まあでも、今はそれよりも戦闘潮流をどうにか生き延びるのが
先か」

そこが目下のところの壁だ。そこで死んでしまったら、3部もクソ
もないもんね。

さて、となるとどうしたものか。つい最近までおおむね原作通り進
んで今に至つてると思つてたから、わりとのんきしてたんだけど……
これは、原作通りだろうと思ひ込まずにしっかり調べなおすべきだろ
う。

そのためには、人伝えに聞くだけじゃ限度がある。わたしが現地に
直接足を運べば、「ネヴァーフード」で正確な情報がわかるもんね。
まずはジョースター家が今どうなつてるか、だ。ジョナサンが生き
残つてることジョセフにどういふ影響があるか、辺りは見ておいた
ほうがいいだろう。

もし彼が原作と違う性格になつてたとしたら、心配な戦いが2部に
はいくつもある。というかほぼ全部か。そこは確認しておきたい。

あとは、ジョースター家がアメリカに移住するのかどうか、も調べ
ておいたほうがいいかな？ SPW財団の状況も気にしておいたほ
うがいいかもしれない。

それとこれは調べるとは違うけれど。わたしの正体について、いつ
明かすか……あるいは明かさなままにするのか、も考えておくべき
か。どのみちカーズ様たちが復活するタイミングで明らかになるこ

とはあるけど、その段階で知っているかどうかでも色々と変わってきそうな気がするんだよなあ。

「……よし。まずはジョースター家に行ってみるか」

まだジョセフと顔を合わせないほうがいい気がするから、動物に変身して遠目から確認する方向で。

「というわけで出かけて来るね」

「畏まりました、お気をつけて」

「というやり取りを挟みつつ。」

カラスに変身して飛び立つ。後ろからだいぶ驚いた気配が伝わってきたけどそれは気にしないことにした。

場所はちゃんと把握してる。聞いたし書類でも確認してるとも。

ジョースター家の今の所在地は、イギリス東部。行政区分的にはロンドンに隣接するエセックス地域にある。その州都とも言うべきチェルムスフォードの郊外がその所在地だ。その中でも海に近い位置に住んでいるのは、かつてジョースター家が海上貿易をしていた名残だろうか。

「……でもそこまで広い土地に、大きな家に住んでるわけでもないんだなあ。一度焼け落ちたし、資産も没収されてるし、仕方ないのかもしれないけど」

空から眺めるジョースター家は、敷地も建物も想像していたより小さかった。ルベルクラク家が大きすぎたというのももちろんあるんだろうけど、わたしがつぶやいたような理由も絡んでそうだな。

とはいえ、それでも中流階級の富裕層くらいの規模はある。おまけに少ないけれど使用人の姿も確認できるから、決して貧乏ってわけじゃないんだらう。スッピートの援助もありそうだけど。

「お、ちようどいいところがちようどいい木があるな」

その敷地内に、いい具合の木があった。そこに降りて、枝にとまる。

……変身しても体重が変わらないから、下手な木だと普通に折れるんだよね。その点この木はかなり大きくて、枝も太い。なんとかわたしの体重を乗せてもいけそうだったし、実際いけた。

さて、ここからジョースター家の様子を観察だ。壁とか諸々がある

から見えないけど、声は聞き取れるだろう。その程度の距離まで近づいてるし、そもそも種族柄耳はいい。耳をすませばなんとか行けるでしょ。

ジョセフいるかなー？　なんて思いながらしばらく耳をすまして微動だにしないでいると……色々と聞こえてくる。どうやらジョセフ、エリナさんに怒られてるところだったらしい。

内容は、ケンカで相手を必要以上に痛めつけたとか何とか。そういえばジョセフ、ケンカか何かで何回も投獄されてるんだっけ？　ジョナサンを見習ってほしい。

でもジョセフの言い分は聞いたうえで、やっていい範囲を見極めてやりすぎではないけないと諭すエリナさんはなんだかんだで女傑だと思おう。範囲を見極めてやりすぎることとは、要するにその範囲の中ならやっていいってことだよな……。

エリナさんのお説教が終わった後は、何やら罰としてジョナサンに引き渡された。何されるのかなー、なんて思ってた耳をすまし続けていると、ある意味予想通りではあるけどそれでもわたしは驚いて、思わず顔を上げた。

エリナさんがジョセフ少年に言い渡した罰。それは、祖父ジョナサンによる波紋の特訓だった。これは……もしかしなくても、戦闘潮流が始まる前に既にジョセフの波紋がかなりの水準に達してるのでは？

なおジョナサンの特訓は、ツエペリさんのそれが基準になってるせいでめちゃくちゃハードな模様。もちろん子供に対して与えるものだから、あれよりだいぶマイルドだけど……それでもキツイものはキツイと思う。

でもそれもある意味仕方ない。ジョナサンにしたって、正式な修行場で修練を積んだわけじゃあないもんね。波紋に関する資料を読む機会がどれほどあったかも疑問だし……どうしても基準になるのがツエペリさんしかないとなると、色々と手探りなどところもあるんだろう。

……おや、終わったのかな？　あ、ジョセフが出てきた。

「くうく……ッ、相変わらずおじいちゃんのシゴキはキツツイぜ……」

おじいちゃんはすごい人だし、尊敬はしてるけど……やっぱり十九世紀の人だよーッ、チョッピリ考えが古いんだよーッ」

何やらぼやきながら、頭をがしがしとかいてる。もう片方の空いてる手には……あれは、本？ タイトルは……手品？

あー、そういえばジョセフって手品好きだったなあ。彼のロープマジックは2部の中でもなかなか印象深い技の一つだ。それで潜り抜けた窮地も一つや二つじゃあない。なんなら3部になっても、彼のスタンドは縄のように茨を操る能力だった（それがメインではないけれど）し、よっぽど思い入れがあるんだろうな。

「これからの時代、いかに要領よく、少ない労力でたくさんのリターンを手に入れられるのが重要よ。努力も気合も否定はしねーけどオ……それだけじゃあなーッ」

いかにも今どきの若者って感じだなあ。言わんとしてることはわかる。わかるけど、やり方を間違えるとそれはカーズ様みたいな勝てばよかろうなのだ精神に繋がっちゃうぞ？

とか思ってたなら、わたしがとまってる木に歩み寄ってくる。うーん、そのままこっちに来られると気づかれるな。わたしの変身能力、如意転変の流法モードはかなり万能な変身能力だけど、どれだけ小さくなるうと思っても一メートル以下にはなれない。つまり、クソでかいカラスが関の山。この辺じゃ普通じゃない。

仕方ない、ちよつと移動するか。屋根の上に、つと。
「なんだア、でっけーカラスだなーッ!？」

いえ、大きいだけで無害です。わたしのことはお気になさらず、どうぞどうぞ。

「……おかしなカラスだな。ま、邪魔にならねーならなんでもいーけど」

一応ちよつとは気にしたみたいだけど、すぐに意識から外したらしい。ジョセフは頭をかきながら、木の根元にどつかと腰を下ろした。

そして腰のポケットからロープを引っ張り出すと、開いた本の中身を何度も確認しながら手でロープの結び方を勉強し始める。

「これが……？ ああ、こーなってるのか。で、こうすると……なー

る、こうなるってエわけだ！　ヘーツ、おもしろ〜！　もつと早くやれるようになりやあ、おじいちゃんもおばあちゃんもきつと驚くぜー！　よーし！」

……なんだ、普通に努力してるじゃあないか。何度も同じ仕掛けを組んで、解いてを繰り返し……。それは世間では努力って言うし、気分転換に顔をたたいて「よし！」なんて声を上げるのは世間では気合いって言うと思うよ。

あれかな、好きなことだと勉強や練習も努力って感じないタイプなのかも。

「あれ待てよう？　これをこう、組み合わせたらもしかして……お、お？　いい感じなんじゃあないのお？　へへっ、俺ってばひよつとして天才かも？」

とか思いながら見てたら、うわ、ロープマジックをいくつか組み合わせせてオリジナルの作品作っちゃったぞ。

普通なら思い上がるなどか言いたくなるセリフだったけど、この短い間にそれを思いつくのは確かに天才って言っていいかもしれない。しかもどんだん手際よくなっていくし、素直にすごい。

なるほどなあ、あれがカーズ様の目すら欺いたジョセフのロープマジックか。この目で見て納得だ。今はまだぎこちないところもあるけど、もつと練習したら普通にプロも裸足で逃げ出すレベルになってもおかしくない。

「これなんてこうしたら、トラップにできちまうな……やべー……自分の才能が恐ろしいぜ……」

……それは人に対して使わないようにね。どうなっても知らないよ。主にエリナさんとか。

8. そうだイタリア行こう

それからしばらくの間、何回かに分けてジョースター家の様子を探ってたけど、ジョセフはほぼ原作通りだったので安心した。お調子者で、ずる賢くて、でも家族想いで、筋の通らないことは嫌いで、やるときはやる男。それがジョセフだ。

ただ、原作との違いはほとんどなかったけれど、第2部の四年前の現時点でローマの基準で言う真ん中手前くらいの腕前があるのは普通にヤバいなって思う。

だってまだ十三歳でしょ彼。それであれって絶対ヤバイよ。たぶんだけど、原作の戦闘潮流開始時点くらいは普通にある気がする。ここからまだ伸びるだろうことを考えると、どこまで行くことやら。さすが生まれつき波紋が使えた申し子、心強い。

それからこのジョースター家調査の間にわかったこととしては、SPW財団の今についてもある。

スッピ―は原作通りテキサスで単身油田を見つけて大富豪になっていて、設立した財団で色んなことをしてるようだ。けれど今も、ジョナサンとは友人として親交がある。

原作ではジョナサンが死んでるからこそ、あれだけジョースター家に親身になってる……と思ってたけど、この世界でも普通に親身だ。普通に家族ぐるみの付き合いがあつて、あなた本当にアメリカに住んでる？ つてくらいの頻度でジョースター家に来てる。

おまけにイギリスに戻ってきてるときは、必ずジョースター家に泊まるくらいには仲がいいらしい。ジョセフからも普通に家族みたいな扱いをされてた。この世界でも独身らしいけど、それはなんでだろうね？

そして重要なこと。スッピ―はジョナサン健在なこの世界でも、ちよくちよくアメリカに来ないかってジョースター家を誘ってる。どうやら例の資産没収などで、ジョースター家の立場がイギリスにおいてあまりよくないことを気にしているらしい。

ジョナサンはそれでも故郷を離れたいと考えているようで、アメ

リカ行きには消極的だった。尽くすタイプの女性であるエリナさんは彼に同意で、ジョセフは昨今成長著しいアメリカに興味津々、って感じかな。

どうやら戦闘潮流に至る流れはちゃんとおあるらしい。あとは、四年後に彼らがアメリカに行くことになるかどうかだけ……ここで大丈夫そうだって思うのは油断だろうな。

うん、伯爵に頼んで裏から手を回してもらおう。そうだな、ジョナサンは考古学者だから……アメリカの一流大学に教授として引き抜き、辺りが一番違和感がないかな？ 帰ったら相談してみよう。

そう思いながら、今日の盗ちよ……調査はこれくらいで終わっとこ
うかなー、なんて思ってた。

明らかに人を避けた様子のジョナサンとスッピーが、書齋に入って
いくのを見てしまった。

あやしい……あれは絶対何かあるやつだ。

だからわたしは、できるだけその書齋の近くまで寄って彼らの会話を
聞くべく耳をそばたてる。

すると聞こえてきたのは……。

「どうだいスピードワゴン、エア・サプレーナ島のほうは？」

「安心してくれジョースターさん、誰にもバレちゃあいないぜ！」

「それならよかった」

んんんんん!! エア・サプレーナ島!! それって波紋の修行場がある
ところでは!?

なんでジョナサンがそれを……いや、そうか。リサリサ……イギリス
によって国際指名手配を受けたエリザベスをかくまい、その痕跡を
徹底的に消したのはこの世界でもSPW財団だった。

そしてその総帥は、スッピーだ。ジョナサンが生きてるなら、この
件をジョナサンには伝えていてもおかしくないか……。

そしてだとするなら、彼が1920年以降に研究テーマを古代ロー
マに移してるのも納得だ。現地調査って名目で何度もローマに足を
運んでるようだったけど、つまりこれは義理の娘に会うためのカムフラ
ージュってことか。

……エリナさんはこのこと、知ってるんだろうか。原作だと、ジョナサンがいないからほとんど知らされてたみたいだけど……。

……いや、この件については下手に触らないでおこう。藪をつついてヘビを出すことになりかねない。

「ジョースターさん、それで次はいつ頃イタリアへ？」

「行きたいのはやまやまだけど、今度学会があるからね……あまり長時間国を離れるわけにはいかないんだ」

「しまった、それがあつたか！ こいつはうつかりだ」

スッピーがなんかうつかり八兵衛みたいなこと言い出した。

ていうかスッピー、ジョセフとかがいるところだと2部通りの穏やかな老人って感じなのに、ジョナサンといるときだけ1部のチンピラ口調になるのなんなの？ 腐った人たちが見たら絶対勘違いされるやつだから、気をつけたほうがいいよ本当……。

「そういうわけだから、ジョージたちにはいつも通り今年の後半くらいになりそうだって伝えておいてくれるかい？」

「合点ですぜツ！」

んんんんん!?

ま、ちよ、ちよつと待った！ 今ジョージって言った？ え？ 嘘

？

もしかして、まさか、まさかだけど、ジョージ二世、生きてる!?

話から言って察するに、エア・サプレーナ島にいる!?

こ、こ、こ、これは……緊急調査案件だー!!



というわけで、大急ぎでイタリアにやってきた。行先はもちろん、エア・サプレーナ島だ。

この島、前世には存在しない。タルカスやブラフォードもそうだったけど、荒木先生ついていかにも存在するっぽいけど存在しないものを出すのが上手いよね。

だけどここの世界には存在する。場所は原作と同じく、ヴェネチアから船で北東に進んで約三十分。この辺りではちよつと見ない塔があるから、空から見てもわかりやすかった。

「うわあ、本当にエア・サプレーナ島だ。すごい。マンガの世界にいる。今更だけど」

海鳥に変身した状態でそこに降り立ったわたしは、思わず感動していた。

今いるのは、原作でジョセフとエシデイシが戦った針山があるほう。ここから少し離れたところに橋でつながっているほうが、この島の本土とも言うべき場所だ。

そちらを確認するために、改めて空に上がる。そうしてちよつとだけ飛んで……おっと、人が修行してる。時期的には、メツシーナとロギンズ辺りかな……。

「まだまだ踏み込みが甘いぞシーザー！ もつと深く、懐まで来るんだ！」

「はいジョニー師範代！」

むせた。思わずむせた。

いや、だって、ええ!? おかしい、絶対おかしい！ こんなのありえない！

シーザーがいるのはいいよ。ジョジョで何度も見た、けどちよつと幼いシーザーを遠目にでも見れたのは感動すらある。

だけど彼が今組手してる相手！ 相手が問題だよ！

ジョージだ！ どこからどう見てもジョージ二世！ なぜかジョニーって呼ばれてるみたいだけど、それはまあ、たぶん偽名だろう。なんでわかるかって？ だって顔がジョナサンやジョセフにそっくりなんだもん！ あれで赤の他人ですなんて言われても、普通は信じないね！

しかもジョージ、波紋に目覚めてる……。リサリサと一緒にこの島にいる時点で、もしかしてとは思ってたけど……。ガチだったか……。

ローマの基準で見る限り、今のジョージは並より上。少なくとも、そこらへんの吸血鬼くらいは余裕で倒せるくらいには使いこなして

る。すなわちジョセフより普通に格上。

なんてことだ……。波紋戦士側がめっちゃ強化されてる……。
ジョナサンが生き残っていると、ここまで歴史は変わるのか……。

いや表の歴史に変化はないんだけど、裏の……これちよつとひどくない？ ちようちよ羽ばたきまくってるじゃん……。

それにしても、なんでジョージも生きてるんだろう？ そりやあ死んでいてほしかったはずなんてないけど、今までの情報で言えば間違いないく死んでるはずなのに。

……何かがあつて、助かったのか。そして生きてると色々と問題があるから、死んだことになった……？

うーん、これはなんとかして当時の状況を知りたくなってきちゃったな……。でもなあ……。作中でジョージが殺された場所がわからないから、知るとなると【ネヴァーフエード】するしかない。

でも生きてる人間から記憶を取り出すのは、できればしたくないんだよなあ。それやったら、なんかプッチ神父に近づくような感じするし……。

なんて、海鳥の姿でわたしが考えてたときだ。一人の男性がやってきて、組手をしている二人に声をかけた。

「おいジョニイ、シーザー。そろそろ休憩の時間だぞ」

「おおマリオ。もうそんな時間か……よし、今日はここまで！」

「ありがとうございます！」

……待つて。

待つて待つて、これ以上わたしを混乱させないで!?

マリオ？ マリオつて、あのマリオ？

いや、双子の弟と一緒に配管工をやってる実は二十代半ばの国際的大スターの彼ではなく。

シーザーの！

父親の!!

マリオ・ツエペリさんですかー！ツツ!?





そのマリオさんだった。普通にシーザーから父さんって呼ばれた。嘘やん。

つまりなんだい。この世界では、ジョナサンもジョージも、おまけにシーザーの父マリオまで存命と仰るか？

おまけにマリオ、ジョージと同じくらいには波紋の技術があるっばいぞ。波紋戦士として十分に一人前だ。

そしてメツシーナとロギンズも普通にいた。しつかりリサリサの召使いしてる。してる上で、二人もジョージやマリオと同じくらいの力量がある。

うん……完全に戦力過剰では？

いや、いくら波紋戦士として一人前とはいえ、あれくらいではまだカーズ様たちを相手する場合は力不足なただけ。少なくとも、吸血鬼の群れ相手には苦戦しないだろう。嬉しい誤算が過ぎる。

そしてな……シーザーがマリオと仲良く食事してるシーンがな……尊みあふれて死ぬかと思っただんじや……。原作ではすれ違っただけだった親子が、ああして笑顔を見せあつて……ふふ……死ぬる……。

あとジョージとリサリサが仲良く食事してるシーンでもな……死ぬかと思っただんじや……。思わず拝んだ……ありがとうブツダ……。いやしかし、本当なんでこんなことになってるんだろう。すごく気になる。これはちよつと調べてみよう。

放つておいても構わないと言えは構わないけど、これはさすがに原作と乖離しすぎてる。ジャイロのように、納得がすべてに優先するとまでは言わないけど、これは納得してから先に進みたい。

幸い、というかなんと言うか。マリオが原作で死ぬ場所は、ジョージと違ってどこかはつきりとわかっている。だからそこに行つて、【ネヴァーフエード】で土地の記憶を引き出せば真相もわかるはずだ。

……かくしてわたしは、慌ただしくエア・サプレーナ島を後にした。次の行先は決まつてる。イタリアの首都、古の遺跡が多く眠るロー

マダ。その地下にある共和政ローマ時代の遺跡が、マリオが死ぬところになる。

そしてそこは、カーズ様たちが眠っている場所でもある。

彼らがこの段階でどうなっているのか……それを知るのも兼ねているなら、無駄なことじゃあないだろう。

……まだ起きてないよね？ 既に起きてるなら、わたしが呼び出されないのはおかしいはずだし。でもこれだけ原作と違う状況が連続していると、かなり不安になるよね……。

というか、実のところ最悪なのは今このタイミングでカーズ様たちが目覚めることかな。こんな中途半端な時期に目覚められたら、考えることが全部吹っ飛んじやう。

どうかまだもう少し寝ていますように……！ わたしはそう思わずにはいられなかった。

9. そのとき何があったのか

誰もいない夜の地下道を、音もなく歩く。

そう、ここはローマの地下道だ。コロッセオから地下に下りる場所がわからなかったから、真実の口から入った。

しばらく歩いたけれど、人の気配はまったくくない。ないけれど、確かにナチスはここを見つけてるはずだ。戦闘潮流の半分くらい、1939年の1月頃に「五年前に見つけた」という言及があったはずだから……そこから五年さかのぼると1934年の1月。今は同年の7月……うん、発見されてるだろう。

実際歩いてると、ところどころに人が行き来した痕跡ははつきりと残っているのが見える。それも、かなり最近のものだ。つまり、誰かが定期的に入入りしていることは間違いない。

そして、この真新しい痕跡を辿る形で歩くことしばし。わたしはそこにたどり着いた。ハーケンクロイツの旗がはためくその場所にいるのは……。

「……カーズ様」

明かりは必要ない。暗闇を見通せる今のこの身体は、闇の中に沈む彼らをしっかりとらえることができる。

原作通り、ダイヤモンドを手にした状態で壁に半身が埋まるカーズ様。そしてエシデイシ、ワムウの三人がそこにいた。

ナチスが作ったと思われる規制線をひよいと乗り越えて、そこに近づく。

「まだ……か。今ここで目覚めるってことはなさそうだな」

目の前の三人の様子をしばらくうかがって、ふうと息をつく。わたしだって、今は彼らと同じ生き物。目が覚める直前の気配は、なんとなくわかるのだ。

この様子なら、まだ覚醒には数年かかるはずだ。たぶん、四年半くらい。それは原作が始まる時期と大体一致する。

どうやらその点に関しては原作通りのようだ。安心した。心底安心したよ。

「……それじゃあ、ここに来た目的の残り半分を終わらせようか」
気を取り直して、わたしは「コンフィデンス」を取り出す。そして
【ネヴァーフエード】の矢をつがえると、足元に向けて放った。
無音で床に突き刺さる【ネヴァーフエード】。それを引っこ抜いて、
躊躇なく自分の頭に突き刺した。

「……！ これは……」
すぐさま頭の中に、この場所の記憶が入り込んでくる。
そこでわたしが見たものは……。



静寂が支配しているその場所に、かつん、かつんと足音が響いてく
る。

音の主は、まだ若い少年だ。いや、少年と青年の狭間にあるもの、と
言うべきか。

ともかく彼は、周囲の様子をうかがいながら入ってきた。

「な……なんだ？ ここはー」

そんな彼の目の前に、三人の人間が彫刻された壁が現れる。

まだそれに気づかない彼は、やはり周りを見回しながら踏み込んで
いく。

「あの野郎どこに行った？」

だが部屋の半ばも過ぎたところまで踏み込んで、彼は気づいた。そ
こにあるものに。

そしてそれが、輝く宝石を抱えていることにも。

彼はそのかすかな輝きに吸い寄せられるように、壁へと近づいてい
く。

「この壁の石像……光輝く部分があるぞ。ダ……ダイヤだ。ダイヤモ
ンドが埋まっている！」

宝石の眼前まで顔を寄せて、正体を察した彼は驚きと共に手を伸ば
す。

人として、当然とも言わなければならない感情。好奇心と少しの欲望。それに誘われるように……。

が。

「危ない小僧！　ここで何をしているツ！　その壁面の宝石に触るんじゃない！」

「何!?　貴様！」

そこに、壮年の男が一人飛び込んできた。とまることを考慮していない、全力疾走だった。

それを受けて、少年は押し出されるように吹き飛ばされる……直前。壁に規則正しい亀裂が走り、どこからか銛のような刃を持ったワイヤーがいくつも飛び出してきた。

「な……なんだこの壁は!？」

「逃げろーツ!!」

だがあわや、というところで少年は男に突き飛ばされた。

結果、ワイヤーにからめとられたのは男一人となる。

「ぐあつ!!」

「ああつ!？」

ワイヤーについていた刃は、一つたりとも致命傷になるものではなかった。男の鍛え抜かれた身体はほとんど貫かれておらず、出血もわずかだ。

しかし、この仕掛けは刃によって殺すものではなかった。刺さった刃は、銛のようになっていく。それは貫いたものを離さないという意思の表れだ。

その意思に従うように、刃はどれも抜けることなく残る。そしてワイヤー部分が、男の身体をがちりをはらめとったのだ。

ここまで来れば、仕掛けは半分以上その目的を果たした。あとは獲物を壁に引きずり込み、そこに眠る存在に捧げるのみである。

そんな一瞬の出来事を、少年は突き飛ばされたままの状態でただ眺めていることしかできなかった。何が起きているのか、さっぱりわからなかったのだ。

何より。

「ち……近づくなッ！ こ……これはこいつらの罠なんだ！ 近づくものの好奇心を利用し、眠っている間の栄養分とする罠なのだ!!」
「そう言い放つ男の身体が、壁に飲み込まれようとする様を見せられては。」

近づくなと言われようが、そもそも動くことすらできなかったのだ。得体のしれないものに対する恐怖が、彼の身体を縛っていた。そして男は、そのまま壁の中に取り込まれて命を散ら……さなかつた。

コオオオオ……と、特徴的な音が響いた。同時に、男の身体に黄金の輝きが走る。さながら電撃のような、力にあふれる輝き。

これが男の身体を覆い、壁に取り込まれることを拒んでいた。今のままでは動けないことには変わりないが、それでも確かに、男が取り込まれるのはとまった。

「マリオー！」

「マリオ君ー！」

そしてそこに、新たに二人の男が走り込んできた。

二人は似た顔立ち、身体つきをしていた。しかし片方が男と同じ壮年の男なのに対し、もう一人は老年期に片足を踏み入れている。

「ジョニー！ ジョースター卿！ すまない、しくじった……！」

「その話はあとだッ！ まずはお前を引っ張りださねば！」

「少年、大丈夫だったかい？ 何がなんだかわからないとは思うけれど、もう少しの辛抱だ」

「彼を今から助けたい。すまないが、少しだけ離れていてくれないか？」

入ってきた二人は、混乱しっぱなしの少年を優しく抱き留めながらそう言ってくる。

怒涛の展開にもはや言葉もなかった少年は、ただ何度も頷きながら後ろへ下がることしかできなかった。

そんな彼の目の前で、二人の男が顔を合わせて立ち上がる。

とても大きな背中だった。そして、二人の男の同じ場所に……うなじの部分に、星の形のあざが見えた。それがどうにも、輝いて見えて。

「父さん！」

「ああ、やるぞジョニー！」

次の瞬間、特徴的な音と共に二人の男の身体が黄金に輝いた。

同時に、男たちの身体が躍動する。それはさながら、筋肉が膨張して身体が巨大化したように少年の目には映った。

「うおおおおーッ!!」

「はああああーッ!!」

そうして二人がつかんだのは、ワイヤーだ。

少年には、とても頑丈そうに見えたワイヤー。実際頑丈なのだろう。ちぎれることはない。

けれどそれは、やがて悲鳴を上げ始める。そのまま二人が力を籠め続けていると、果たしてワイヤーは早々に悲鳴を上げた。破滅的な音を響かせながら、ワイヤーが次々にちぎれていく。

やがて最後の一本がちぎれて、男が壁面から落ちる。

「はあッ！ はあッ、はあッ、はあッ、二人とも申し訳ない……助かった……」

「まったく、一人でいきなり走り出すから何事かと思ったぞ！」

「そう責めてはいけなよジョニー。彼はきつと、この少年を助けようとしたんだ。そうだろう？」

「はは……面目次第ありません。大きな迷惑をかけてしまつて……」

汗を手でぬぐいながら、なんとか立ち上がる男。

彼は二人を順繰りに眺めたあと、改めて自身が突き飛ばした少年に目を向ける。

「……まったく、危ないところだったな小僧。これに懲りたら妙なことに首を突つ込む……の、は……」

そして、言葉の途中で言葉を切った。

彼の顔は驚愕に染まっていた。目は大きく見開かれ、視線は目の前の少年に固定されている。

彼の様子にあとからきた二人は怪訝そうに左右から顔を覗き込もうとする。

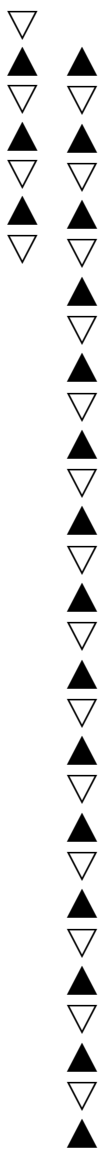
が、それより早く、男は絞り出すように声を上げる。

「シー……ザー……？ まさか、お前、シーザーなのか？」

「父さん！ ……うう……うお……あ……あああ！」

二人の言葉を聞いて、後からきた二人の男も吃驚する。

だが涙を浮かべて抱擁を交わす二人を見て、気を取り直すと視線を交わす。そして二人はしばらく、目の前で行われる親子の対面を眺め続けていた……。



「……オーマイガーッ！」

思わずジョセフみたいなセリフが出た。

いやもう、本当オーマイガーだよ。そんなことがあったなんて……。

この時点で、既にマリオもジョージも波紋を身に着けていたのか。だからこそ、カーズ様の仕掛けにかかっても取り込まれずに済んだと。

取り込んだ記憶は、このあと何が起きていたのか、何を思っマリオが家族を捨てたのか。それを語ってシーザーと和解する様子が続く。

そして、「こんなことに関わるな」と怒り、不器用な親の心情を発したマリオに対して、ジョナサンが「だから言ったじゃあないか、マリオ君。こういうことは、先に話しておくべきだったんだ。子供を巻き込みたくないという君の気持ちはわかるけれど、残された側の気持ちはしっかりと酌んであげないと」と論じていたのが印象的だった。

フロントムブラッドの頃は若者らしいまっすぐさがあつたジョナサンだけど、もう七十近い。年長者として、また親の先達として、あまりにも的確な言葉だった。

その隣で、視線をずらして頬をかいていたジョージの姿もなかなか印象的ではあつたけれど。

ともあれジョナサンの言葉を受けて、マリオはシーザーに対して「来るか？」とやはり不器用に誘い、シーザーもまた「じいさんや父さんの跡を継ぐ！」と宣言して、その手を取った。

シーザーはそのままマリオやジョージと共にエア・サブリーナ島に引き取られて波紋の修行を始めたようだ。そこだけは原作通りだったわけだね。

ちなみにその後の会話からして、マリオがこの時点で波紋を習得していたのはジョナサンのおかげらしい。家族を置いて出奔したマリオを、柱の一族について調べていたジョナサンがたまたま見つけて、ならばと修行に誘ったからだとか。おかげで原作では死ぬシーンでマリオは生存することができた、と。

あまりにもファインプレーが過ぎる。さすがジョナサン、わたしにはできないことを平然とやってのける。

いやーそれにしても、すごいものを見てしまった。感動だった。

「……それにしても。このイベントにジョナサンが絡んできてるってことは、彼は間違いなく柱の男を知ってるわけだよな」

腕を組んで、カーズ様を見上げながらひとりごちる。

ジョナサンが柱の男に気づいていて、対策を練っている(と思う)っただけでも相当安心感があるなあ。そりゃあ彼はもう全盛期ではないだろうけど、それでも彼なら……彼ならなんとかしてくれそうな気がする。

……いや、それはわたしが彼を一番推しているからかな。でもひいき目抜きに見てもジョナサンって肉体的、精神的にも一番強いジョジョだと思っただけ……。

「いやうん、そういう話はあとにしとこう。ともかく今、戦闘潮流に三人のジョジョが参戦しそうだってことが確定したわけだ。それは間違いない。それはすごく大きいことだ」

腕を組んだ状態で、誰にもなくうんうんと頷く。

ここからどうやってカーズ様たちを追い込んでもらうべきか。彼らが復活してからは、わたしはあまりジョジョたちと一緒に行動できないだろうからね。決戦のときが来れば重要な局面で行動するこ

とになるけど、逆に言えばそれ以外の場面ではカーズ様たちの側として行動せざるを得ないわけで。

となると……戦闘潮流が始まるまでに、準備を整えておかないといけないよね。それまでにわたしができることって言う……。

「……そうだ！ エイジャの赤石！ あれが波紋増幅装置だつてことは伝えておいたほうがいいよね！」

なんならただの火の光ですら何倍にも増幅して、わたしたちの身体にダメージを与えられるレーザーに変えることすらできる。実際に食らったことがあるから間違いない。

原作のエイジャの赤石は、石仮面の完成に必要なものでカーズ様たちが狙っているアイテム、としか基本的に描写されてこなかった。

ジョセフが赤石を知ったとき、「破壊しちゃえばよーやつら泣いてくやしがるぜ」つて言つてたけど、リサリサはこれを壊すと「やつら三人を倒せなくなるの言い伝えがある」と答えて拒否した。

けれどなぜそんな言い伝えがあるのか、までは伝わっていない……物語の途中で明らかならなくて。最後の最後でようやくそれが判明するんだけど……これを最初から知つてれば、他にも戦い方があつたはずだ。

たとえば、波紋使いは遠距離攻撃手段が乏しい。でもエイジャの赤石があれば、それを解決できる可能性があるんだよね。

……まあ、この世界ではその辺が普通に今まで伝わってる可能性もある。それならそのときは説明が省けたと思えばいいや。

問題は、それをいつどうやって伝えるか、か。いきなり言いに行つてもなんだつてなるだろうし、正体を明かしたとしても戦う羽目になるだろうし……。

「……一旦ロンドンに帰るか。ここに立つてたつて名案が浮かぶわけでもないんだし」

うん、とりあえず帰ろう。ナチスに見つかつても面倒だしね。

そうと決まれば善は急げだ。わたしはそつと、だけど全速力で地下から抜け出すと、一気に夜の空に舞い上がるのだった。

10. Knight at the Museum
(ナイトミュージアム)

ポール・デイリーは自分のことを不幸な男だと考えている。昔から、ここぞというときにドジを踏む。思えばそのジंकスは幼少の頃から始まっていた。

いじめられている女の子を助けようとしたポール少年は、颯爽と駆けつけるべく高所から飛び降りて全治一ヶ月の怪我を負った。女の子から呆れられるというおまけつきで。

小学校ではみんなの笑いを取ろうと思いついてあえておかしな着こなしで登校したら、教室のドアで小指を挟んでそれどころではなくなり、笑いではなく噛みを取る羽目になった。

中学校では風邪でテストを休んで留年したし、大学の試験など地下鉄がストを起こして参加すらできなかった。学校の成績は悪くなかったのに、おかげで夢のキャンパスライフを失い、就職せざるを得なくなってしまったのだ。

それでも必死に働いて、なんとか家庭を持つことはできた。子供もできて、人並みの幸せってやつを噛み締めていた。

だというのに、勤め先が倒産した。三人目の子供が生まれて、いよいよ家計の出費が厳しくなるなど、ボヤキながらも笑っていた矢先いだ。何がどうなってるんだと、思わず酒を飲まずにはいられなかった。

だから今回、そんなポールを見かねて仕事を持ってきてくれた親戚のおじさんには本当に感謝している。

しかも、新しい仕事場は天下の大英博物館だ。内容自体はなんの変哲のない夜警にすぎないが、それでも祖国の誇る博物館に勤められるというのは、イギリス人として昂ぶるというものだ。給料も、潰れた前職と比べて遜色ない。

「やあ、君が新しく夜警に入ってくれたポール君だね？ 僕はジョナサン・ジョースター、ここで学芸員をしている。よろしく頼むよ」

おまけに、出勤初日にお貴族様に名前を覚えてもらえた。しかもあのジョースター卿にだ！

ジョースター卿と言えば、ロンドンっ子で知らぬものはいない有名な貴族だ。様々不幸が重なって今は往年の隆盛はないとはよく聞かすが、それでも身分や立場に関係なく人と接する人格者で、面倒見もよい紳士として知られている。

彼との知己が得られただけでも、この就職はまったく幸運だった。ポール史上最高にツイている！

「はっ！ ポール・デイリーです、よろしくお願ひしますジョースター卿！」

「なんだい、堅苦しいじゃあないか。立場は違えど僕たちは同じ職場で働く同僚なんだ、もつと楽にしてくれて構わないさ」

「はっ、恐縮であります！」

「ふふ、君もなかなか頑固らしい。いや、これ以上は強いことになるかねない、やめておこう。……と、挨拶はこれくらいにして。今日は初日だからね、まずは軽く館内を案内がてら巡回ルートを説明しよう。こつちからだ」

「はっ！」

ジョースター卿は、噂に違わぬ人格者であった。世間的には落ち目と口さがなく言われるが、そういう貴族にありがちな妙なプライドはまったくなく、気さくだ。案内も丁寧でわかりやすいし、ポールがこの場でメモを取ることも許してくれた。

もちろん機密に関わる部分は許されなかったが、それはここに勤めるもの全員に課されることだ。彼とは関わりがない。

おまけにその道のプロだからか、たまに挟まれる歴史的なうんちくも深く、それでいてわかりやすかった。ポールはまるで、自分が大学の生徒になったかのような知識の高まりを感じていた。

「とまあ、こんなところかな。どうだったかな？」

「想像以上に広くて、驚いております。実は恥ずかしながら、博物館に客として来たことがなくて……」

「ははは、地元にある観光地ってなかなか足を運ばないものだよね。」

僕も覚えがあるよ」

一通りの案内を終えた頃、ポールはジョースター卿の隣にこそは恐れ多くて並べなかつたが、いちいち身体を固くして返答をしないくらいには打ち解けていた。

「じゃあ、次はバックヤードだ。いわば職員だけが入れられるスペースだね。休憩室などがある。ただ、その分あまり余人に触られては困るものも表より多いから、そこは気をつけてほしい」

「はっ、よろしくお願いしますー！」

そうして案内されたバックヤードは、ポールにはカオスな場所に見えた。表はやはり、人に見せるため相当整理整頓がされているのだな、と素直に思えたほどだ。

だというのに、先ほどのジョースター卿のうんちくのおかげで、すっかり歴史学に興味を持ってしまったポールはそれらの一つ一つが気になっていた。

とはいえ迂闊に手を出してせつかくの就職をファイにするほど、死にたがりではない。目で追うだけに留めて、ジョースター卿に続く。

やがて案内が終わったあと休憩室に入ったポールは、先に詰めていた二人の先輩たちとも挨拶をして、ジョースター卿と別れた。

「それじゃあ、夜の博物館をよろしく頼むよポール君」

最後にそう言いながら、力強く肩を叩いてくれた卿の期待に応えねば。そう一人発奮して、ポールは初日の仕事を開始した。

同僚となった二人の先輩たち——セシルとフレデリックもおおむね気のいい人たちで、聞けばみなジョースター卿に触れて励まされ、日々頑張っているのだと言う。

やはり卿はすごい人であつたと感心すると共に、あれぞ祖国が誇る紳士のあるべき姿なのだろうと、今までよく知らなかつた上流階級への畏敬を新たにするポールであつた。

「……ん？　今、バックヤードのほうから何か聞こえてこなかつたか？」

そのままセシルとの巡回を終えようとしたとき、彼が少し上に視線をさまよわせながらつぶやいた。

彼にならうようにポールも耳をすませたが——確かに、何か聞き慣れない音が聞こえてきた。

「確かに。なんの音でしよう?」

なのでそう返したところで、派手な音が聞こえてきた。

「何かが倒れたような音?」

「ちよつと普通じゃなさそうですね。空き巣でしようか?」

「かもしれない。行くぞポール!」

「はい!」

その音に、不穏な気配を感じたポールたちは急いでバックヤードに向かう。

その途中にも、なんだかものが倒れる音やざくりという不思議な音が続いており、これはいよいよただ事ではないぞと思っていたポールの前に、それは現れた。

「……やつと獲物が来たな。物など斬つていても気分が上がらなくて困っていたところでああ!」

素人目に見ても素晴らしい出来栄えの刀を手にした、フレデリックだった。明らかに目がイっちゃって、正気とはとても思えない。

その彼が、ポールたちが何かを言うよりも早く踏み込んできて——刀が振るわれる。

ポールがそれを回避できたのは、偶然以外の何物でもなかった。フレデリックのあまりの変貌ぶりに怯えてしまい、腰を抜かしたからに過ぎない。

だが、結果的に彼は助かった。たとえそれが数秒の延命であつても、確かに彼は助かったのだ。

何せ彼の隣にいたセシルは、二人を同時に狙った横薙ぎの一閃で、ばつさりと胸元を切り開かれてしまったのだから。

雑巾を引き裂くような悲鳴とともに背中から倒れる先輩を見て、ポールもまた悲鳴を上げる。

「……ひつ、ひ、ひええええええくっツ!」

「チィ、一人外したか。運のいいやつ……だがそんな幸運はもう起きんだろう? 大人しく俺の練習に付き合ってもらうぜーッ!」

「あああああああ!!」

そして迫り来る切っ先に、ポールは死を悟り……けれど、それには訪れなかった。

「大丈夫だったかい!」

「じ……ジョースター卿!」

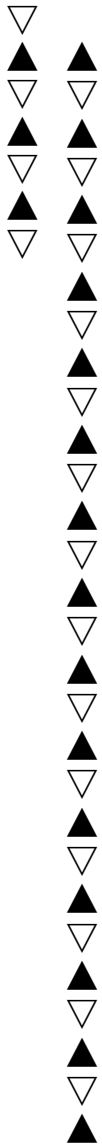
そこには彼がいた。年齢をまったく感じさせない巨体から繰り出された、丸太のような脚の蹴りがフレデリックを吹き飛ばしていたから。

助かった。そう思う間もなく、物陰からフレデリックがゆらりと現れる。

ジョースター卿の蹴りを受けて、ピンピンしているその姿はどう見てもまともではなかった。

「不意打ちとはやってくれるな……だが、その攻撃……覚えたぞ」

そしてフレデリックはぎらりと光る目をぎよろりと動かして、ポールの前に立ちふさがったジョースター卿をにらみつけた。



ジョナサン・ジョースターは困惑していた。今、目の前で収蔵品の刀を握っている同僚の変貌が、あまりにも理解しがたくて。

しかし、それにかまけていられるほど彼はぬるい人生を送ってはいない。原因はともかく、まずは相手をとめねばならぬとネクタイを緩めつつ、身構えて相手の動きを観察する。

そこに刀が襲ってくるが、その動きにジョナサンは即座に対応する。どう見ても素人な立ち姿から放たれる、どう見ても素人とは思えない動きにやはり驚くも、鍛え抜かれた身体は自然それについていく。

(一撃は鋭い……が、連続した動きとなると、そこまででもないな)

これなら波紋がなくても対応できそうだと考えながら一気に距離を詰める。攻撃を終え、刀を返そうとした一瞬の隙について、猛然と

突進する。

その動きを真似できる同年代は、絶対にいないだろう。年齢と巨体に反した、ものすごい速さのタツクルだった。

「速——グアッ!？」

「まずはその刀を離してもらおう!」

そして相手の刀を持つ軸となるほうの腕をつかみ、力を込める。見た目通りの力を発揮した彼の手は、そのまま万力のように締め上げて刀を取り落とさせる。

考古学者としては刀が床に落ちるときに受ける衝撃が気になったが、今はそんなことを言っている場合ではないとも理解していた。

「……あ。あ、あれ? ジョースター卿? これは、一体?」

「む……君、今まで何をしていたのか、覚えていないのかい?」

そして、刀から離れたフレデリックは、我に返った……文字通り、自らを取り戻したように、目を何度も瞬かせてきよとんとしていた。

これまたあまりの変貌に、ジョナサンもまた驚く。

だが、このような状況でも彼は冷静に頭を働かせる。ひとまず状況を理解できていないフレデリックを念のため縛ることにした。

襲われていた夜警……ポールには、刀をしまうために鞘を探してくるよう伝えておく。

それからフレデリックの手をネクタイで縛り、さらに上着で足も縛る。縛りながら、何が起きていたのかを説明する。

されたフレデリックは死ぬほど驚いて、何も覚えていないしそんなつもりもないと訴えた。ただ声が聞こえたような気がして、封印されていた柵の一つを、なぜか開けないといけないような気がしたとだけ付け加えて。

恐らく普通の人間であれば、それを犯人の言い訳と思うだろう。この状況で言い逃れなどできるはずがない、と。

だが、ジョナサンはそうとは思わなかった。奇妙な冒険をくぐり抜けたことのある彼の勘が言っていた。そうではないと。

(まさか、問題は刀のほうか? 確か日本には、持ち手を操る妖刀などの民間伝承があると聞くが……)

ほどなくその発想にたどり着いたジョナサンは、足元に転がっていた刀に目を向ける。

……が。

「!? 刀がない……どうした!?」

そこにあつたはずの刀は、なくなっていた。慌てて周りを見渡すが、それらしいものもない。

しかし、恐らくは血にまみれた刀身から伝わったであろう赤黒い痕跡が、点々と続いていて……さらに、ポールの姿が消えていた。

「まさか……」

事態を理解したジョナサンは、ごくりとつばを嚥下しながら注意深く周りに意識を向ける。

と、その直後。

「そのまさかだよオーツ!!」

ジョナサンの死角から、ポールが躍りかかってきた。手にはやはりあの刀が握られていて、美しくも妖しい刃が一直線にジョナサンを襲う。

だが、彼はそれを見抜いていた。足元の血だまりにわずかな波紋を流し、探知器にしていたのだ。

波紋を与えられた血が起こすかすかな振動により、敵の接近を完全に察知していたジョナサンは、狙いすました刺突を最小限の動きで避ける。そのまま肉薄してきていた相手の鳩尾に、肘を叩き込んだ。

「ふんッー」

「ぐばあッ!?!」

派手な打撃音が響き、大の大人の身体が吹っ飛んでいく。その様子を、転がされていたフレデリックは信じがたいものも見るように目を丸くしていたが、それはともかく。

「……今の一撃を受けて気絶しないとは。ポール君は何か特別武道を嗜んでいるわけでも、身体を鍛えているというわけでもなかったはずだが……君は一体何者だ?」

多少ふらつきつつも、確かな足取りで再び現れたポールにジョナサンが問う。返答は、怪しい笑いから始まった。

「ククク……さあて、誰だろうな？ 当ててみな……その前に死ななきやだがなあ！」

答えになつていない答えとともに、再び攻撃が繰り出される。先ほどから何度も放たれていた横薙ぎの攻撃。その始まりを見て取ったジョナサンは余裕を持つてかわそうとする。

しかし。

「なッ!? 先程より鋭い!」

同様に回避しようとしたのに、ジョナサンはシャツを切り裂かれた。もちろんそれで終わるはずもなく、その下にある肌にも横一文字の朱線が刻まれ血が噴き出す。

その攻撃は、ジョナサンの想定を遥かに上回っていたのだ。

「ククク……当然！ 何せお前の動きはもう覚えた……一度闘った相手には！ 絶つ……対に負けんのだアアッ!!」

「フム……どうかな？ やって見たまえ！」

傲慢とも取れる言葉を受けて、ジョナサンは筋肉に力を入れる。盛り上がった筋肉が傷を強引に押し込め、血が止まった。

と同時に、ポールの攻撃が始まる。それはやはり、今までより明らかに速く鋭くなっていた。

それでもなお、ジョナサンの心に焦りはない。

コオオオオ……と、特徴的な呼吸音がかすかに響いた。刹那、ジョナサンの身体に力がみなぎっていく。先ほどまでより遥かに大きなエネルギーが、その身に宿る。

すると、それまで回避に集中せざるを得ないほど追い込まれていたジョナサンが、再び相手を圧倒するように動き始めた。

振るわれる刃をかわし、ときにはいなし、少しずつ距離を詰めていく。達人技の見切りと、怪我を恐れぬ不屈の闘志。それがどんどん相手を追いつめていく。

ポールの動きもどんどん良くなっているのにも関わらず、ジョナサンをとらえることができない。それはポールにとって想定外の事態らしく、正気ではない目を焦らせて声を張り上げた。

「くっ、なんだこのジジイは!?! なぜそこまで動ける！ なぜ！」

「答えたら君は刀を置いてくれるのかいッ?」

「もちろん、断るッ! 俺の持ち手は俺が決めるッ!」

「ならば僕は、それを止めてみせようッ!」

そして遂に、ジョナサンは大きく前に出る。彼の太い腕がうねり、強烈な拳が放たれた。

だが、それを見たポールの口元が歪む。

「甘アアい! その攻撃はもう覚えた! 勝負を焦ったな!」

すぐさま刀が動き、パンチを避けながら必殺のカウンターを見舞おうとする。

「覚えた? 覚えた、だってッ?」

「うごふッ!」

が、避けられたはずの拳が突如として伸び、鳩尾に刺さった。さらにそこから、まったく予期していなかった衝撃がポールの全身に走る。

それは雷のような衝撃だが、真実はまったく異なる。黄金に輝くそれは、太陽の衝撃だ。

「あ、が……ば、バカ、な……!」

その衝撃に耐えきれず、ポールの身体は麻痺して刀を取り落す。刀身が床の大理石に当たって、からりと虚しい音を立てる。

同時にポールの身体は地に伏して、どすんと鈍い音が響いた。

それをちらりと横目に見ながら、ジョナサンは留めていた言葉の続きを口にする。

「ズームパンチは今、初めて見せたはずだよ」

彼に応えるものは、そこには一人もいなかった。

ただ、縛られたまま放置されていたフレデリックがぼつりと、「すげえ」とだけはつぶやいていたが。

11. アヌビス神

夜。わたしは伯爵の部屋に呼び出されて、わたし用のパスポートを受け取っていた。

こないだイタリアに密入国したように、どうとでもできるだけの手段がわたしにはある。とはいえ、正規の手段で移動しなきゃいけない場合も出てくるだろうからね。

少なくとも、大西洋を挟んだ向こう側にあるアメリカ大陸に行くとなると、わたし自身が飛んでいくのはいくらなんでも厳しい。冬季の北極が凍つてるときしか行けない上に、二ヶ月近くかかるもんね。それなら使えるものは使うべきだ。

とりあえずは一度、サンタナ王国を見てみたいし、可能なら日本に行つて和食が食べたいところだけど……。

なんて思いながら、伯爵とスケジュールの調整をしていたときだった。屋敷内がにわか騒がしくなる。

何かと思つてたら、ロンドン市警の庁舎内で暴漢が刀を持って暴れているとか何とかで、PMCとしてのルベルクラクに鎮圧の協力要請が来たらしい。

夜なのに大変だなあ……。

「どうやら中では、ジョースター卿が暴漢を抑えているそうで……」

「ジョナサンが!?!」

と思つてたら、なんかとんでもないことになってるっぽい。何が何だかわからないし、ジョナサンならただの暴漢くらいわけないと思うけど、心配だ。

いつ出発する? わたしも同行する!

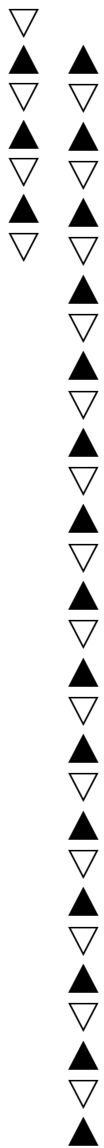
「いえ、アルフィー様のお手を煩わせるほどでは……」

「それなら見てくるくらいいいでしょ? 邪魔はしないからさ。ねっ?」

「畏まりました、仰せの通りに」

かくして、わたしは夜のロンドン市警へと足を運ぶことにした。

そして、そこで行われている戦いを見て、心底驚くことになる。



ジョナサン・ジョースターは怒っていた。次々と人の身体を操り、無差別に殺人を繰り返す謎の刀にだ。

同時に、警察に証拠品として刀を預ける際にもっと強く諫めておくべきだった、と後悔もしていた。

博物館での出来事を証言するため、刀共々庁舎に連れてこられたのは、不幸中の幸いだろうか。もしそうでなかったら、きっと今ごろこの庁舎内に生きた人間は一人も残っていなかっただろう。

だが、いくら持ち手を気絶させても、刀はあの手この手で持ち手を次々に変えてしまう。理屈はわからないが、ただ人を操るだけではなく、自分を持ちたくなるように誘惑する術も持っているようなのだ。これがまったく厄介で、もはやあの刀を破壊するしかない。ジョナサンは判断していた。

そして実際、その刀身を折っても見せた。だというのに、あの刀は半分になってもなお人を操っている。吸血鬼に勝るとも劣らないトングデモっぷりだと、内心でぼやく。

「フハハハハ！ 動く、動くぞ！ お前のおかげでようやく身体も暖まってきたぜ！」

半分になった刀を振るいながら、警察署長が叫ぶ。その目はやはり正気ではなく、そして振るわれる攻撃は最初の頃とは比べ物にならない。

ジョナサンにはまだかろうじてそれを認識できるが、できなくなるのも時間の問題だろう。

彼はもはや接近戦をほとんど望めなくなっており、今となつては物陰に隠れつつ警官たちから拝借した拳銃で対抗するしかなくなりつつあった。

（くっ、射撃の名手だったニコラス兄さんならなんとかできたのかも。しれないが……！ 僕の腕ではもう牽制程度にしかならないか！）

「遅い遅い！ そんな豆鉄砲ではもはや俺は止められんわーッ！」
遂に弾丸が刀で斬り裂かれる。真つ二つになって足元に散らばる弾丸が、悲しげに音を響かせる。

「効かないなら仕方ない……どうあっても前に進むしかないようだ！」

だがその隙をついて、ジョナサンは物陰から飛び出した。物陰、というよりはバリケードと化していたものの中から大きな金属製のデスクを盾にして押し込んだ、と言ったほうが正しいかもしれないが。そしてそれを、一定の範囲まで踏み込んだところで大きく跳ね上げ、顔を狙う形でぶん投げる。ついでに、弾も切れた拳銃を急所めがけてぶん投げておく。

それに続く形でジョナサンの制御から離れたデスクは、引き出しを撒き散らしながら飛んでいく。当然それは有効打になるものではないが、異なる軌道でバラバラに飛んでくる複数の障害物というのは、それだけで対処が難しくなるものだ。

無論、それらが難なく斬り捨てられることはジョナサンも承知の上だ。

実際、すべてがあっさりとは斬り捨てられ、きれいに切断された残骸がそこら中に散乱する。

その中の一箇所に、ジョナサンは潜り込んでいた。障害物を一通り斬り捨てたあと、近づいていた相手に反撃するなら、取り得る軌道は一つしかないという絶妙な位置取りである。そこにジョナサンは、正面から向き合う形で立っていたのだ。

「これで終わりだ！」

「いいや、まだまだ！」

ジョナサンに対して、から竹割りに振り下ろされる神速の刃。それは、今までで最も速い攻撃であった。しかし、そうあるように誘導された攻撃でもある。

ゆえにこそ、その一撃を。

ジョナサンは、多量の波紋を込めた両手でもって、左右から挟み込む形で受け、ぴたりととめてみせた。

「な……!? し、白刃取り、だと!？」

生身の人間では到底かなわぬその神業は、長く心身を鍛えることで養われた驚異的な身体能力と、精神力。そして膨大な量の波紋によって成し遂げられたものだ。

波紋には、はじける正の波紋とくつつく負の波紋、二つの性質がある。ジョナサンはこのうち、くつつく負の波紋を手のひらに集中させ、それで左右から挟み込むことで刃の動きを触れる前から大きく制限。そして触れたのちは、波紋で両の手のひらに強烈に吸着させることでこれを実現したのだ。

そして通常であれば、この姿勢になったら動くに動けないものである。刀をとめているだけでも相当な負担になるからだ。

しかし波紋使いには、それは当てはまらない。触れたからには、その刀こそが波紋を伝える道となる。

「君の狼藉もここまでだ……! 神妙にしたまえ!」

コオオオオ……と、波紋の呼吸音が響く。今までより遥かに多い波紋が、ジョナサンの身体から溢れ刀を伝わり始める。

「行くぞ鋼を伝わる波紋疾走! オーバードライブ 銀色の波紋疾走!」

「うぐああああああー! ツツ!」

水や油より波紋を伝えにくい金属への波紋疾走だったにもかかわらず、迸った波紋の量はまさに規格外だった。

それは的確に刀……を持つ警察署長の身体を貫き、即座に意識を奪う。

ジョナサンはそれに応じて手首に手刀を入れ、ようやく刀は床に落ちた。

「……はあ、はあ……あ、危なかった……! これほど連続した戦いは、デリオと戦ったとき以来、だ……!」

それを見届けて、ジョナサンはようやく一息ついた。既に呼吸はかなり上がっている。いかな彼とて、ほとんど絶え間のない長時間の連戦はすさまじい疲労だった。

しかし、まだ完全には終わっていない。

「……入るだろうか……?」

彼は腰に差ししていた鞘を取り出すと、落ちた刀に触れないよう、慎重に慎重を重ねて少しずつ納めていく。

手で直接接触っていないので、簡単にはいかない。しかしそこに散らばった様々な瓦礫などを駆使することで、どうにかこうにか納めることに成功した。

ここに至って、ようやくジョナサンは本当に張り詰めていた神経を緩めた。それでも完全には緩め切っていないのは、この刀の恐ろしさを理解したからこそといえよう。

「ジョースター卿！」

と、そこにルベルクラク伯爵が屈強な部下を連れて踏み込んできた。全員がほぼ最新の武器で武装しており、かの家が従える傭兵たちがやってきたのだと理解したジョナサンは、空いた片手を挙げて見せて応えた。

「ルベルクラク卿」

「何やら激戦があったようで……ご無事ですかな？」

「鍛えていますので、おかげさまでなんとか」

「左様ですか。しかしこれは、一体何が……？」

傭兵たちに指示を出しつつ、周りを見渡すルベルクラク伯爵にジョナサンは経緯を説明する。信じてもらえるとは思っていなかったが、それはそれとしてまずは口にすべきだと思ったから。

「……持ち手を操る刀、ですって？」

案の定、そこにいた全員が怪訝な顔をしていた。

……いや、一人だけ深刻な顔をして口元に指を当てた女がいる。見たことのない顔だったが……その女が、驚くべきことを口にした。「僭越ながらジョースター卿。その刀……もしかして、戦えば戦うほどに強くなつていったのでは？」

まるで戦いを見てきたかのような言葉だった。これにはジョナサンも、思わず驚く。

「そ、その通りだよ。よくわかったね？」

「いえ、これは……って、それより！ その刀ですけど、今はどのようなの？」

「今？　今はこの通り、なんとか鞘に納めて落ち着いたところだが……」

「いえそうではなく、刀の状態です！　刀身、折ったりしてませんか？」

なぜか食い気味に顔を寄せてくる女に、ジョナサンはやや気圧されながらも答える。

「あ、ああ。戦いの最中、仕方なく折ったね。だからこの鞘の中にある刀は真ん中くらいから先はなく……」

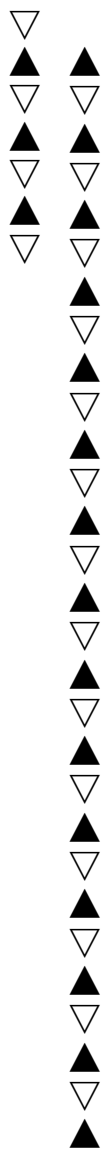
「その先は!?　折ったあとの切っ先は今どこに!?」

「た……確か、この三階の廊下辺りに……」

なおも食い下がらない女に、そう答えた瞬間。

女は顔を青ざめさせて、大慌ての様相で叫んだ。

「……まだだ！　まだアヌビス神は終わってないッ！」



「……まだだ！　まだアヌビス神は終わってないッ！」

わたしがそう叫んだ瞬間、上のほうで濃厚な殺気が発生した。

それは直後に階下……つまりこの場所に向けて放たれる。向かう

先は……ジョナサンがいる。

し……死なせるものか！　死なせてなるものか！

「ッ！」

「おっと……、ッ!?!」

わたしは後先考ええず、ジョナサンの身体を押しつけた。

しかしこれは予想されていたようで、ジョナサンには押しとどめられてしまう。

なんとかこれを、種族のパワーで強引に押し出す。ジョナサンにはものすごく驚かれたけど、そんなことはどうでもいい！

そしてそう思うや否や、天井をすり抜けてきた刀の切っ先半分が、わたしの身体に直撃する。

本来なら、わたしたち一族の身体に波紋なしでダメージを与えることはほぼ不可能だ。けれど、十分なスピードや威力があれば決して不可能でもない。

そして今、わたしに飛んできた切っ先……アヌビス神の上半分には、わたしの身体にダメージを与えるに足る威力が込められていた。

「うぐう……!」

「なッ!」

鋭利な刃がわたしの上半身を切り裂き、血がほとばしる。

と同時に、痛みをトリガーとしてわたしの変身が解ける。大人の姿に変わっていたわたしの身体は、元の130センチ程度の身体へとしぼんでいく。

「あ、アルファイ君……!?!」

その瞬間を、目の前で見られた。一応は部外者であるジョナサンに。

だけど、明らかに普通じゃないこんな状況であっても、彼は縮んで服がダボついて倒れかけるわたしを優しく抱きとめ、助けようとしてくれた。

ああ、それで十分だよ。主人公に、始まりのジョジョに、氣遣ってもらえた。それだけで……。

「それだけで……! 向こう十年は戦える……ッ!」

オタクなめんなよ! 推しに心配させるなんて不本意だけど、それはそれとして推しの視線を今この瞬間だけでも独占できている高揚感ッ! これだけあれば戦えるんだよオオーッ!!

「ふんぬっ!」

身体をたわませる。ぐにやぐにやと全身を……文字通り全身を動かし、わたしを半分こ怪人にしようとしているクソ生意気な刀の勢いを全力で弱める。

確かに波紋がなくてもわたしたちにダメージは与えられる! だけど! どこまでいっても普通の物理攻撃には耐性がある身体なんだよ!

たわんだ肉体は、今まさに斬り裂かれたところからがばちよと開

き、刀身を包み込んでいく。これでさらに衝撃を吸収する。

めちやくちや痛いけど！ そんなもん知るか！

柔らかいということは！ ダイヤモンドよりも砕けないッ！！

『いや、ニヤニイイイーツ!?』

そんな明らかに人間ではありえない現象に、刀身から驚愕の音が聞こえてくる。アヌビス神のスタンドだな！

ふふふ、このまま身体の中で粉々にしてあげようじゃあないか！

鳥やワニが消化を助けるために食べる石がするように、砕いた刀身同士をごりごりぶつけてすり潰してしまおう！

そう、わたしは胃！ 全身が胃！ 全身でぜん動!! 見た目のキモさは見なかったことにしてほしいッ!!

もちろん身体の中でやってるから普通にクツソ痛いんだけど、アヌビス神がどれくらい刀身を砕けば機能停止するかわからないから、ここは我慢する！ 今ばかりはあれこれ鍛えてくれたカーズ様とエシデイシに感謝だね！

では……いざッ！

ごきんばきん、と金属が碎ける音がわたしの体内から響き始める。金属同士がぶつかり、削れる音がそれに続く。すると、とても慌てた声が聞こえてきた。

『くつ、クソッ、なんだこのメスガキ!? あ、操れないッ!? 何がどうなってるんだーッ!』

どうやらアヌビス神は、わたしを操ろうとしているらしい。確かにさつきから頭に妙な感覚が来てるけど……効かないなあ！ ジョナサンから精神的ブーストをかけられた今のわたしに、その程度の洗脳が効くと思うなよ！

というか、アヌビス神の洗脳能力は作中の描写から言って、複雑な動物であればあるほど効きづらいものだと思われる。ネズミなんかは一瞬で大量に洗脳していたのに、人間となると直に触れている一人にしか使えなかったし。

なら、人間よりハイスペックを誇るこの身体を洗脳するのに、どれほどの手間がかかるかという話だよ。こちとら人間の上位種である

吸血鬼の、さらに上位種だぞ。

まあ中身は一般人だから、一抹の不安はあるわけだけど。だからこそなおさら、万が一にもやられる前に、遠慮なく行かせてもらおう！

そーれマツシユ！ マツシユ！

『ああああーッ！ くそう！ こっちの刀身はもうダメだあ！』

おっと、アヌビス神の反応が消えたぞ。どうやら、鞘に納まつてる大元のほうに戻ったらしい。アヌビス神のこの辺の所在って、曖昧だよな。原作でもそうだった。

でもまあ、念には念を入れてこっちは最後まですり潰しておこう。ごりごりごりごり。

そしてもうこれ以上は碎けないところまで来たら、外に「ぺっ」する。これでよしと。

「……あ、アルフィー君？ 大丈夫なのかい？」

「ええまあ、これくらいで死ぬ身体じゃあないので、心配はいりませんよ」

どこことなく引きつった顔のジョナサンに笑いかける。うん、大丈夫。これくらい痛み、ヘーキヘーキ。我ながら痛みにも慣れたものだ。前世だったら確実にもうショック死してる。

……伯爵がドン引いてるのも見えたけど、それは見なかったことにしよう。

それからわたしは、ジョナサンがまだ手にしていた刀に目を向けた。そのままお願いして、これを手元に譲り受ける。

するとつかんだ鞘の中で、犬頭のナニカが「ひえっ」と声をあげたのが見えた気がした。

その存在に、わたしは「コンフィデンス」を通して話しかける。

『逃がさないよ？』

『何イイイイーツ!?』

めっちゃ驚かれた。そんなに驚くことかなあ？

『な、な!? お前、この状態の俺がわかるのか!?』

『まあね。アヌビス神のスタンドだね?』

『お、俺の銘まで知っている、だと……!? お、お前、一体何者だ……』

!？」

『ただの古代人だよ』

『嘘つけエ!』

嘘じゃないんだなあ。

『まあそれは置いといて。そういうわけで、わたしはあなたのことを色々知ってます。あなたが450年ほど前にエジプトで作られたことも、その作り手がキャラバン・サライという名前ってことも知ってます』

『?! ……?!』

あ、白目むいてる。気絶はしてないみたいだけど。やっぱり得体の知れない挙動した上、自分のことを見透かしてるやつとか怖いよね……。

でも随分と暴れてくれたみたいだし、わたしがここで手加減することはないのだよ。覚悟してくれたまえ。

『このままだと、わたしはあなたを破壊するか海に沈めるか、そういう選択をするしかないわけなんだけど』

『なツ!』 は、破壊するならともかく、海に沈めるだ?! おま、お前! いくらなんでも外道すぎるぞ! 人の心はないのか!』

失敬な。わたしほど人の心を持った柱の一族はいないというのに。……ていうか、壊されるより海に沈められるほうが嫌なのか。基準がよくわからない。壊れてもいないのに錆びていて、刀としての本分が発揮できないのが嫌なのかな？

それとも、孤独なのが嫌なのかな。原作でもナイルの底に沈んだあと、孤独に震えてたし……案外寂しがりやなのかもしれない。長年博物館でしまいこまれてたわけだし。

ん? だとすると、少しばかりもったいない精神を出してもいいのでは……。

『……もちろんあるに決まってるよ。だからここから先は取引だよ。このまま大人しくわたしに捕まって、わたしの下にいてくれるなら話は別だけど。どう?』

『な、て、テメエ! 俺を脅すのか!』

『これでも寛大だと思っただけだ。わたしがここで手を下さなくて、たくさん人を殺したあなたがこれから人間たちに何をされるかは容易に想像がつくと思うんだけど?』

なのでちよつと方向転換してそう言ったら、アヌビス神は顔色をなくした。

うん、ここまで来る道中にたくさんのお巡りさんの死体が転がってたからね。ジョナサンがだいぶ逃がしてくれたみたいだけど、それでも被害を受けてしまった人はいる。

それだけの犠牲が出たなら、人間なら……まあ、死刑だよな。よくって無期懲役だ。

そう伝えたところ、アヌビス神は震えながらわたしの下につくことを了承した。

『嫌だー!! 死蔵され続けるのはもう嫌だアアーツ!!』
とのことで。

どうも聞く限り、この世界のアヌビス神が日の目を見たのは、エジプトからイギリスに運ばれたときのただ一度だけらしい。以来実に400年以上もの間、ずっとしまいこまれて放置されていたとのこと……なるほど、そりゃあ寂しがりやにもなろうというものだ。

なんでこうなったかっていうと、原因はどうかやらわたしだ。わたしのメツセージに従ったルベルクラク家が、キャラバン・サライ存命中から彼の刀を根こそぎ買いあさっていたみたいだね……。

おかげで原作と違ってアヌビス神は暴れた経験がほとんどなかったように、スタンド使いでもないジョナサンが何回も勝てたのは原作よりだいぶ弱かったからだと思われる。いや、単にジョナサンが鬼のように強かった可能性もかなりあるけど。

わたし? いや、わたしはジョナサンのおこぼれに預かったただけだからノーカンだよノーカン。ジョナサンがすごかったんだよ。うん。ちなみに、今イギリスにはキャラバン・サライ作の刀のおよそ98%があるらしい。そしてそのほとんどは、大英博物館に寄贈済みとのこと……なんというか、これぞバタフライエフェクトかって感じだ。承太郎たちの負担を減らそうと思っただけだったんだけど、ま

さかこんなことになるとは。

かくして、わたしはアヌビス神を手に入れた。警察がかぎつける前に、ルベルクラクの力をフル活用して隠蔽。ひとまずは「スターシツプ」でスタンド空間に入ってもらうことになる。強敵と戦う機会が巡ってきたら、力を借りようと思う。

残る問題は……。

「アルフィー君……君は一体、何者なんだい？」

「ジョナサンにどう説明するか、か……。」

12. 同盟結成

「ジョナサンの質問に答えるべきか？」

少し悩んだけど、これは答えるべきだろう。元々、彼には話をするタイミングをうかがっていたところなんだ。人間では説明のつかないことを目の前でした以上は、下手にごまかさずにここで言うべきなんだと思う。

まあその前に、彼は事情聴取でしばらく身動きが取れなくなったわけだけだ。

わたしは変身してたから、この場にはいないことになっている。だからお先に失礼して、去り際にルベルクラクまで来てもらえないかとお願ひした。

幸い彼は警戒しつつも頷いてくれたので、わたしは内心ちよつとうきうきしながら出迎える準備をすることにした。

「……アルフィー様、なぜあのようなことをなされたのですか？」

同じく事情聴取を受けていたものの、色んな理由で一足先に解放された伯爵が問うてきた。

その意図が読めなくて、わたしはおうむ返しに聞き返す。

「あのようなことって？」

「正体が露見するようなことをしてまで、なぜ彼を助けたのかということ。ええ、いずれ彼の存在が大きな意味を持つのでしょうか。ですがそこまでする必要がありましたか？」

「なぜって……逆に聞くけど、なんで助けないなんて選択肢が出るの？」

「質問に質問を返さないでいただきたい」

言われてやつと意図を理解したわたしは、考えるより早くもう一度聞き返していた。

そしたらジョジョ特有のレスポンスが返ってきて、思わず笑いそうになった。そんなレスポンス普通ある？ 前世じゃあ一度もお目にかかったことはなかったのにねえ。やっぱりここはジョジョの世界なんだな。

まあそれはともかく。

「目の前で死にそんな人がいて、それを自分なら助けられるなら普通助けることない？ それ以上の理由なんてないよ」

真顔でこちらを向いてる伯爵に、わたしは言う。

言いながら、なんとなく思う。これもきつと、わたしを見極めるためにあえて聞いたんだろうな、って。

もちろんジョナサンだったからこそ、あれだけ奮起したってのはある。けれど、あそこにいたのが別の誰かでもわたしは動いただろう。偽善でもなんでもいい。ただの自己満足だって言われようが構わない。救われたいから、という自己愛が根本にあることも否定しない。

けれど、それでも。

わたしはあの日、そう生きるって決めたのだ。柱の一族ではなく、人間として生きたいと心が叫んでいるから。

「……お考え、よくわかりました。出過ぎたことを申しました」

それをどう思ったかはわからないけど、伯爵は恭しく頭を下げた。

「とんでもない。むしろこれからも、何か思うところがあつたらどんな言っしてほしいな。わたしなんて間違っただけだもん」

「知の神ともあろうお方がそうご謙遜なさらずとも」

「本気だよ？ そもそも神様なんて、わたしには荷が重いよ。人の上に立つ器でもないし……」

この点に関しては、わたしより間近でわたしを見てる伯爵たちのほうが実感としてあるはずだ。じゃなかったら、あんな会話はしなかったらどうしね。

「……そうですね。申し訳ないですが、普段のアルフィー様を見ていると子供を見ている気分になるときがあります」

そう思っただら、そのものズバリとばかりに指摘された。思わず笑っちゃったよ。

「でしょ？ だから伯爵、遠慮しなくていいからね。言いたいことがあつたら、どんどん言っしてほしい。今はわたしが養ってもらってるんだしさ」

「畏まりました、そのように」

伯爵はそう言つて、もう一度頭を下げた。そして頭を上げるなり、改めてとばかりに口を開く。

「では早速お聞きしたいのですが……アルフィー様は、ジョースター卿にどこまで話されるおつもりですか？」

「ほぼすべてかな……」

「そのお心を教えていただいても？」

再び伯爵から真顔を向けられる。今度は探る視線を隠していない。カーズ様とかなら機嫌を悪くしそうだけど、わたしはむしろ嬉しい。やっぱりわたしは、神様になんて向いてないなって確信するよ。

「うーん……うん……もうこの際だしいつか。あのね。わたしはね。カーズ様たちを倒そうと思ってるの」

「は!?!」

おっと、ものすごく驚かれたぞ。今までなんだかんだで取り乱すことのない伯爵がここまで驚くなんて、これはよっぽどのことなんだろう。

でもそりやそうだろうな、とも思う。だってカーデイフの地下礼拝堂にあったものは、わたし以外の柱の男たちも神として崇拜されていたことを物語っている。

おまけにあの絵や彫刻は、常にカーズ様が一番上として扱われていた。わたしはワムウよりかは上に据えられていたけど、カーズ様からしたら明確に格下だった。

そんなものを崇めている人に対して言うこととしては、甚だ不適當だろうなっと思ふよ。

でも、わたしは知っている。知ってしまったらね。

「な、なぜ、そんな、ことを……!?! 今ご自分が何を口にしたのか、ご理解しておられるのか!?!」

「もちろんだよ。むしろわたしは、なんでカーズ様たちが崇められているのかわからない。だってカーズ様にとって人間って、餌か家畜だよ? それもサンタナと違って、理不尽に殺しにくる人なのに」

「……それは」

「二千年前とか、ローマに攻め込むときに囹用(ろうりよう)に街一つ吹っ飛ばそうとしたくらいだもん。将来邪魔になりそうなら子供でも容赦(ようしゃ)ないし……それに……」

わたしはそこで一度言葉を切る。

どうしようか、とも思っただけど……これを言ったからには、もっと踏み込んでもいいだろう。そう思って、続きを口にする。

「……それに、人類に神々はもう必要ないんでしょ？」

「……いきなり何を仰るかと思えば。そのようなことは……」

「隠さなくてもいいよ、あの日の会話は聞こえてたから」

「……失礼を承知で申し上げますが、聞き間違いでは？」

「だよ、そう来るよね。まあ、それでもいいよ。ともかくカーズ様たちに人間と共存する気はないんだよ。目的のためには手段を選ばず、どんなに残忍なことだって平気でするもの。でもね、それがわたしには耐えられないんだ」

「……と、いうと？」

あ、伯爵、今明らかにほっとしたね。ものすごく巧妙に抑えられてたけど、聞こえたよ。

まあ、それを指摘して話を蒸し返すつもりもないからいいんだけど。……わたしは、人を殺すの嫌なんだよね。カーズ様といると、それをやらなきゃいけない。今までだって、かなりの人を殺してきた。わたし、それが耐えられないんだ」

今でも覚えてる。殺さないでって嘆願する人たちの必死な顔や、声を。それが聞き届けられないと知ったときの絶望した顔や、声を。この身体の記憶力はすごい。もはや一万年以上前の前世の記憶すら、色あせることなく覚えていられるほどには優秀だ。

でもそれは、忘れられないってことでもある。普段は考えないようになっているし、実際忘れるに近い状態まで持っていくことはできるよ。けれど完全には忘れてはいなくて、何かあると思いつくんだ。そのたびに胸が苦しくなる。

したくてしたわけじゃあないけど、それでも実際にやったのはわたし

しで……。そう思うと、心と身体が痛むんだ。

ブツダに諭されて、生き方を決めてからは落ち着いてるけど。それでも忘れたわけじゃあない。

「……だからわたし、決めたんだ。いつかカーズ様を倒すって。人間と一緒に生きていくためには、それしかないって」

そう締めくくって、伯爵を正面から見据える。……と言っても、身長差がすごいからわたしは見上げる形になってるけど。

けれどその顔は、驚きながらもどこか納得したような顔だった。

彼はそうしてしばらく考え込んでたみたいだけど……やがて、普段わたしには絶対見せないニヤリとした黒い笑みを浮かべて、口を開いた。

「……なるほど。アルフィー様、あなたは知の神ではなく、プロメテウスやグリゴリの類だったわけですか？」

「うーん、盗人とか墮天とかの扱いはなんだかちよつと。どっちかって言うと、邪神側から主神側に寝返った悪魔、くらしいのポジションだと思うよ？」

その言いように即答して、わたしも薄く笑う。

それが何やらツボだったのか、伯爵は声を上げて笑い出した。そのまましばらく笑って、笑って……笑い終わってから、彼はわたしの前に膝をついた。

今までの、ひざまずくようなやり方じゃあない。どちらかという、対等の相手にするような、そんな形で。

「失礼。確かに、我々もはやあなた方に対する信仰を大部分失っている。あなたに対してはそうでないものもそれなりにいるが、少なくともわたしはあなたのこと崇めてはいない。ゆえにこそ、神話から脱却したいと願うのだ。あなたは神として祀られながら、それを許容すると仰るか？ あまつさえ、手すら貸すと？」

「もちろん。そのときはぜひ、わたしを神様じゃなくて普通の人と同じように接してほしいな」

「即答と来たか。本気なのだね。本気で神であることを捨てると。よろしい。ならば……我らルベルクラクの忠誠は、今しばらくあなたに

預けておきましょう」

「ええ……そこは対等には接してくれるところじゃないの？　こう……『手を組もう』とか、そんな感じでさ」

「そのつもりだったのですがねえ。今日のアナタの戦い……短い間ではありましたが、あれを見せられてしまうといやはやどうもね。まだ我々はあなた方には勝てそうにないと思ってしまったもので」

ひざまずく形に移行しつつも、あまりにもあけすけとした言い方に、わたしはまた笑ってしまう。

何それ、現金。でもまあ、人間ってそういう生き物だよ。それがたまらなく愛しく思えてしまった。この人、わたしの性格把握してるなあ。

だがそれがいい。

「ふふ……それならわたし、みんなが忠誠を捧げるのに相応しい人間になれるようにがんばるよ」

「ええ、そうしてください。今のままでは、カーズ様……いえ、カーズを倒すくらいまでしか続きそうにありませんから。ぜひとも精進していただかねば」

「うん、がんばる。……じゃあ伯爵、改めて、これからもよろしくね？」
「こちらこそ」

かくしてわたしは、伯爵と握手を交わした。

今ここに、ルブルム商会の頃からあった神と人の関係は打ち切られ、新たな関係が始まる。

……そうであると嬉しい。

「さてうまくまとまったところで、アルフィー様。ジョースター卿の件ですが……」

「ああうん。わたしたちが太陽に弱いのは知ってるよね？　波紋がそれと同じ性質ってことも」

「もちろんです。なるほど、彼をカーズにぶつけると？」

「うん。正確には彼ら、かな。波紋戦士はこの時代にも残ってるからね。ジョナサンはそのリーダー格、ってところかな」

「結構です。それならば我々から言うことはなさそうですね」

顎に手を当てて頷く伯爵。

と、そこにノックの音が響いた。

「旦那様、ジョースター卿がいらつしやいました」

「おお、ちようどよかった。すぐにお通ししなさい。くれぐれも失礼のないようにな」

「かしこまりました」

「どうやら、ジョナサンが来たようだ。」

さて、ここからがまた一つの正念場かな。とりあえず、わかりやすくわたしは元の姿に戻っておくだけでなく、角もしつかり出しておう。これなら明らかに人間とは違うってわかるだろうし。

「ルベルクラク卿、失礼します」

そして使用人に案内されて、ジョナサンが室内に入ってきた。

彼は軽く目礼をしたあと、こちらへ、と椅子を勧める伯爵に従いながら……わたしを見て、一瞬動きを止めた。

「ジョースター卿、よくお越しくできました。わざわざ我が家まで御足労いただき、恐悦至極」

「いえ、とんでもない。僕としても、一度ご挨拶には伺わねばと思っていたところですよ」

とまあ、そんな迂遠なやりとりはともかく。伯爵も早めに切り上げて、どうぞとわたしに話を振ってきた。

ジョナサンからの視線を受け止めながら、わたしは胸を張る。

「改めて、自己紹介させてください。わたしの名前はアルフィー。あなた方が柱の男と呼ぶ一族の一人であり、あなた方がローマで監視している三人の間です」

そしてそう言った瞬間。ジョナサンの視線が鋭くなった。

「けれど安心してください。わたしはあなた方と敵対するつもりはありません」

「……どうということだい？」

「単刀直入に言えば、わたしは彼らの裏切り者、ということですね」

裏切り者、という言葉にジョナサンの眉が動いた。彼にとってはあまり喜ばしくない言葉かもしれない。

けれどそこは見なかったことにして、わたしは説明する。内容は、おおむね伯爵に語ったのと同じようなものだ。カーズ様のやっつけていることに耐えられなくて、人と同じように暮らしたいから、というね。だから詳しくは割愛。

その間、ジョナサンは何も口を挟まなかった。ときおり様子をうかがっていたけど、そのたびに続きを促されたから最後のほうはとまることなく話し続けることになった。

そしてひとまず区切りをつけたところで、彼はようやく口を開く。「……なるほど、話はわかったよ。そうか……つまり君は、身体は柱の一族かもしれないが、魂が人間なんだね」

「……ッ」

思わず言葉に詰まった。まさかかつてブツダに言われたことを、もう一度聞くことになるとは思ってなかった。

けどそれがなんだか嬉しくて、思わずわたしは表情を崩す。

そしてジョナサンは、やっぱり紳士だ。わたしの変化を見て、慮るように声をかけてくる。

「ひよっとして、今の表現はまずかっただろうか？」

「いえ……むしろ逆です。わたしの在り方を人間って言ってくれたところが嬉しくて」

だからそう返したら、彼は一瞬驚いた顔を見せたけど……すぐに優しく微笑んでくれた。

そんな彼を見て、わたしは居住まいを正す。

ジョナサンもまた、わたしの態度に表情を引き締めた。

「……ジョースター卿。そういうわけです。どうかわたしと一緒に、彼らと戦ってください」

「本当にいいのかい？ 確かに僕たち人間と彼らは、悲しいことに生存競争をする定めにあるのかもしれないが……かといって、君にとつては長年共に過ごした仲間だろう？ いや、よしんばそれを承知しているとしても……僕たちは君と同じ時間を生きることができないんだよ？ 誰もがいずれ必ず君を置いていくだろう。それでもいいのかい？」

ああ、やっぱりジョナサンは優しい人だ。カーズ様たちとの戦いを予期しているなら、使える戦力は手元に置きたいはずなのに。

なのに彼は、わたしの心配をしてくれている。同じ時間を生きた仲間を殺すのに手を貸すことに対する罪悪感や、同族が自分だけになる孤独感をあり得るものと気づいていて……だからこそ、そこを指摘してくれる。これを優しいと言わずしてなんと言おう。

彼の言っていることは正しい。そして、器の小さいわたしはそれを感じし続けるだろう。ならば、元の道に戻ることで十分選択肢の一つになり得る。

けれど結局、わたしはどちらを選んでも後悔するのだ。間違いない。わたしはそういうやつなのだ。

それに……たぶん、わたしは一人にはならない。この世界のサンタナは……きつと、わたしと一緒にいてくれるはずだから。た、たぶん。だから。選ぶなら、わたしはもう、人を殺さなくてもいいほうを選びたい。

「覚悟の上です」

だからわたしは、真正面からジョナサンに答える。

わたしたちはそのまましばらく、黙って視線を合わせ続けた。まるで視線で言葉を交わすような感覚がした。

そうしてどれくらい黙っていただろう。けれど、ジョナサンがそれを破った。

「……わかった。君の覚悟、確かに受け取ったよ。こちらこそ、ぜひとも君の力を貸してほしい」

言いながら大きく一つ、頷いて。

彼はわたしに、その大きな手を差し出してきた。

その意味するところを理解して、わたしも手を差し出す。まるでサイズの違う二つの手が、しっかりと重なった。この手はしばらく洗わないでおこう。

直後、そこにもう一つ手が伸びてきた。今までわたしたちの会話を黙って聞いていた、伯爵のものだ。

思わず、といった具合にわたしとジョナサンの視線が彼に注がれ

る。

「その話、我々ルベルクラクも入れていただきたく。我々もまた、柱の一族を打倒せんと願うものでしてね」

「ルベルクラク卿。ではやはり、あなた方は」

「ええ。古の時代、彼ら柱の一族に仕えていたものの末裔ですよ。ですがそれは正しくない。我々は、アルフィー様に仕えていたのです。彼女以外の神々は、元々必要がありませんでした」

彼はにやつと笑いながら言う。

「そのアルフィー様は、人としてありたいと願われた。ならば我々は、神話が終わりを迎えるそのときまで……あるいは迎えても。彼女をお支えする次第です」

「……わかりました。共に力を合わせてがんばりましょう！」

最後は伯爵においしいところを持つていかれたような気もしたけど、ともかく話はまとまった。

カーズ様たちが目覚めるまで、あと四年と少し。カーズ様……手向かいさせていただきます！

13. 蝶はどこでもはばたく

そのあとわたしたちは、今後の予定について話し合うことになった。

まず前提として、わたしの存在をどこまで話すか。これについては、現状を維持するということで話がついた。

「アルフィー君の立場は、要するにスパイということになるだろう。であれば、それを知っている人間は少ないほうがいいと思うんだ」

「敵を欺くにはまず味方から、ということだね」

「東洋のことわざだね。その通りだよ」

「では、繋ぎは我々ルベルクラクが担当するということではいかがでしょう。我々の傭兵としてのネットワークはヨーロッパはもちろん、アジアやアメリカなどにも存在しますので」

という感じだ。

あ、わたしのタメ口に関しては許可をもらってる。というか、ジョナサン自身が自分より年上だし敬語はいらなくて言ってくれた。恐れ多かったけど、わたしも今は一応人の上に立つ身。なのでお言葉に甘えさせていただいて、代わりにわたしのことも今まで通り扱ってもらおうようお願いした。二つ返事でOKだった。さすが器が大きい。好き。一生推す。

それはともかく。

わたしはカーズ様たちの復活後、基本的に彼らと行動を共にすることになるだろう。原作通りなら赤石探しはそれぞれに分かれてすることになるだろうけど、それ自体はこの世界でもかつてやっていたことだ。

何より今の時代は遠距離通信の手段があるわけだから、そこは気にしないでいいだろう。そして情報を波紋戦士側に流すと同時に、少しずつ状況を誘導していくわけだね。

次に、サンタナについてだ。彼は少なくとも二千年と少し前に会ったときは、わたしと同じくカーズ様に反旗を翻すつもりでいた。

カーズ様を倒したあとの生き方は、恐らくわたしと違う方向に行く

ことになるだろうけど……少なくとも、それまでは一緒に戦えるはずだ。

ところが、それを聞いて顔を渋くしたのは伯爵だ。

「それは少々まずいですな。かの国の陛下は、サンタナ様を排除したがつております。サンタナ様を除き、人の手で国を運営したいと。サンタナ様の指示で動くのは嫌だと、そのような考えで」

「ああ、それは僕も噂で聞いたことがありますね。今かの王国が軍事費を多く取っているのは、神を殺すためだという噂です。ちまたでは笑い話扱いだけれど……」

「……波紋もスタンドも使えない人にはさすがに殺されないと思うし、人類が携行できる武器で殺すのもまだ不可能だと思うけど。とりあえず、サンタナが目覚めるタイミングには事情を知っている人が一人はいないと色々と面倒なことになりそうだね」

状況次第ではあるけど、これには基本わたしが行くことになった。わたしが何らかの形で動けない場合は、ジョナサンが出張ることになる。

そして万が一ジョナサンが動かなければならなくなったときのために、ジョナサンにはアメリカ大陸にいてもらおうということにもなった。現状では、柱の一族を単独で相手取れるのはジョナサンくらいだろうからね。勝てるかどうかはさておき。

ならば万一駆け付けようと思ったとき、距離があっても同じ大陸にいるのと大西洋を挟んだ別の地域にいるのでは、さすがにかなり差が出るからね。

個人的にだけど、この辺り原作通りに状況を整えておきたかったから、この提案が伯爵から出たときは拍手しそうになった。ついでだから、家族で揃ってアメリカに移っておくといいいんじやあないかって言っておいたよ。

ちなみに、たびたびスピーに誘われているアメリカ行きに便乗することになるだろうけど、ジョナサンは実はそこまでアメリカ行きが嫌ではないらしい。少なくとも、十分選択肢の一つにはなっているという。

なのになぜイギリスを離れないかと言えば、カーズ様たちがローマにいるかららしい。ヨーロッパにいる数少ない波紋使いとして、できるだけ近くで警戒したかったから、とのことで。

とはいえ、これに関しては息子夫婦の安否を確認するのを兼ねてのことでもあるらしい。リサリサの実力を考えれば、必ずしもジョナサンが警戒のために足を運ぶ必要はそこまでないので、これは単にジョナサンの親としてのわがままもそこそこ入ってるようだ。気恥ずかしそうに頬をかいていた姿に、わたしはエモさの塊で天に召されそうになったよ。

「カーズたちが目覚めたあとは、どうするつもりだい？」

「行動を誘導したい。行く先をこっちで決められれば、罨を張ったりとかできるだろうし」

「できるのですか？ ものすごく難しいのでは……」

「カーズ様の当面の目標はエイジャの赤石を手に入れることだから、それに関する情報を使えば行けるはずだよ」

「エイジャの赤石……波紋法に伝わる伝説の宝玉のことかい？」

「たぶんそれ。それがどこそこにあるらしい、って話をすればある程度動きをこっちで決められると思うんだ」

「なるほど。となると、先手を取るためにも赤石を探さないといけな
いか……」

「そう、探さないと……ん？」

「おや？」

「今、なんかおかしいなことを聞いた気がするぞ？」

「……赤石ならそちらが持つてるんじゃないの？」

「え？ いや、ないけれど……」

「えっ」

「えっ？」

「ない？」

「え？ そんなバカな？」

思わず言葉を失い、その状態で見つめ合うわたしとジョナサン。
そこに伯爵が割って入る。

「赤石なら、我々が今も相当数保持しておりますが……」

彼の言葉に、ジョナサンがほっとした様子を見せる。

けど、違う。それじゃあたぶん、カーズ様が求めている水準を満たしていない。

だからわたしは首を振る。

「カーズ様が求めている赤石は、大きくて一点の曇りもないスーパーエイジャとでも言うべきものなんだよ。それじゃないとダメらしいんだ」

そして言いながら、大まかなサイズを手で示してみせる。

「……むう、確かにそれほど大きなものはありませんな。あつたとしても、質が低い」

「駄目ですか……」

「でしょ？　というわけで、話は戻るんだけど……本当に波紋使いたちの手元じゃないの？」

どこにも？　わたしの観測だと、あなたたちが持つてるはずなんだけど」

「ああ、ないよ。僕も柱の一族について知ってから、色々調べたけれど……ローマ時代に存在していたことはわかったものの、その後どこに行ったかはわからずじまいなんだ」

「な……なんてことだ……」

思わず言葉を失ったよね。立ってたらその場に崩れ落ちてたと思う。

「ええと……観測、というのは未来予知ができる、ということかい？」

「……少しね。そういう能力があつて……」

そういうことにしてある。そうしておかないと、色々と面倒だからね。

「……でも絶対じゃあない、ということだね。うーむ……」

「……………」

行き詰った。どうしよう。

三人で腕を組んではみるけど、どうにもなりそうにないよこれ。

「……ちなみに、ジョナサンが調べた限りだと、どこまで辿れるの？」

ふと思いついて、聞いてみる。

最悪、地道に消息を辿ってその地域をしらみつぶしに探すしかなくなるけど……場合によっては「ネヴァーフエード」でなんとかなる可能性もあるからね。

「文献上、その赤石と思われるものが登場するのは、波紋法の再興に力を貸してもらおう対価としてローマ皇帝に献上した、というのが最後だったよ。ハドリアヌスの頃だ」

「五賢帝の一人だね。ローマの分裂や滅亡のタイミングで散逸したと思ってたけど、それよりも遡るんだね。ということは三世紀の危機で失われた……？」

ローマの隆盛っぷりを実際に見てきた身としては、知識として知ってても信じがたいものがある。でも五賢帝時代が終わったあとのローマの凋落ぶりは本当にすごいからなあ……。

「あっ」

「ん？」

「伯爵？」

とここで、伯爵がいきなり素っ頓狂な声を上げた。

そのまま虚空に目を向けて固まったので、わたしとジヨナサンは声をかける。

それで我に返った伯爵は、少し失礼して、と断りを入れて慌ただしく部屋を出て行った。

彼が扉の向こうに消えるのを見送って、わたしたちは顔を見合わせて首を傾げる。

けどそのまましばらく、伯爵は戻って来なかった。おかげで手持ち無沙汰になったから、どちらからともなく歴史トークをし始めて盛り上がる。

その過程で、わたしがケルト神話とアステカ神話（この世界のアステカ帝国は動乱期のその他大勢扱いなので、サンタナ神話と呼称されるべきだけど）に神として登場していることを知って、頭を抱えることになったけどね！

双方の神話で人々に知識を授け未来を見通す神として扱われてい

て、その異常なまでに似通った設定が歴史学者の間では色々言われているらしいよ。ケルトのほうは、正しくはウェールズ神話を中心に、らしいけど。

なんか、主神のわりに出番の少ないダヌに代わってあれこれ英雄を助ける役どころらしいよ、わたし。夜の神様なんだったよ。

なんならアーサー王物語でも、アーサー王に聖剣を授けるのがわたしに差し代わってた。湖の乙女エ……。

ジョナサンがわたしの名前に「いい名前」と評したのは、そういう意味もあるらしい。歴史好きとしては、立場を乗っ取ってしまったということについて思うところがあるけど……。

「お待たせしました。突然の中座、申し訳ありません」

と、ここで伯爵が戻ってきた。その手には、筒状に丸められた紙がたくさん。……紙だけじゃあないな、羊皮紙もある。いずれにしても、どれもこれも年代物だ。

「早速ですが、こちらをご覧ください」

「これは……俗ラテン語に見えますが、文法が違いますね。古フランス語ですか？」

「そうです。英仏百年戦争の頃に、今のブルターニュ地方で押収したものです……こちら、ええと……こちら、こちらを……」

思ってたより長かったみたいで、紙を広げながらも何回か連呼する伯爵には申し訳ないけど笑いをこらえるのに苦労した。

それはともかく、現れたもの。それは地図だった。ものすごく大まかだし、方角を確定させるものもないし、なんなら一部に明らかに意図的と思われる空白もある。そして書かれた文字は、全体のごく一部でしかなかった。

「この地図は一体……？」

「見た感じ、宝の地図みたいだけど……」

「宝の地図ですか、言い得て妙ですね。確かにその一面はあるでしょう。というのもこの地図は、かつて我々ルベルクラクと敵対していたルージュフィシユーの隠し宝物庫を示したものだからです」

「隠し宝物庫……？」

はい、と領き伯爵はさらに別の紙筒を広げ始める。

こちらに書かれていたのも地図だったけど、古フランス語の近くに注釈のように英語が書き加えられている。とはいえ、こっちの英語も古めかしい。中世とまではいかないけれど、近世くらいのもものだろうか。

「ルージュフィシユーは我々と同じく、かつてのルブルム商会の半分がその前身です。ですが分裂してもなお、その存在意義は共に忘れておりませんでした。それこそ神……すなわち、柱の一族に捧げるための歴史的文物の収集と保全です。ただ我々は厳に慎んで手段を選び、彼らは力を誇示して手段を選ばなかった。両者の違いはその程度のものです」

言いながら説明する伯爵は、さらに、さらにと地図を広げていく。中身の文章がだんだん現代に近づいている辺り、順番に広げているんだろう。

「そして我々もルージュフィシユーも。手に入れたものの中でも、必ず献上すべき特に価値の高いものは、ときの権力者の目に止まらぬよう徹底的に秘匿してきました。これらはその在りかを示すものなのです」

「なんと……」

「急に冒険ロマンみたいな感じになってきた」

なんか物語としてのジャンルが変わった感じする。いや、わたしが指示して隠されたものだから、マッチポンプ感がすごいけども。

そう考えるわたしをよそに、伯爵が続ける。彼は同時に、この場に広げられた地図を二つに分け始めた。

わたしから見て右に行くのがほとんどだけど、たまに左にさばかれるものもある。最初に出された地図は、左だった。

「そして我々は、ルージュフィシユーから押収したほとんどの地図を解読し、そこにあったものも既に回収しております。それを利用して長年イギリスでの立場を保持してきた面もございます。しかし、解読ができなかったものもいくつか残っております……それがこちらになります」

仕分け終わった伯爵は、わたしから見て左に仕分けた地図を平手で示した。

それを受けて、わたしとジョナサンはそれぞれに頷いた。

「なるほど。ではルベルクラク卿は、この中のどこかに赤石があるとお考えなのですね?」

「確証はありません。ですがルージュフィシユーから押収した記録には、通常のエイジャの赤石とは明確に区別された『赤き御魂』という単語がたびたび登場します。そしてそれらは、神々の手に還るまで秘匿する、とも。私はこれこそ、アルフィー様の仰られているスーパーエイジャなのでは、と考えた次第です」

「可能性は高そうだね」

伯爵の視線を受け止めて、わたしはもう一度頷く。

うん、ファインプレイだ伯爵! やっぱり史料になるものは残しておくべきだね!

「ネヴァーフエード」

わたしは【コンフィデンス】を取り出して、雫の紋様が刻まれた矢をつがえる。

取り出す記憶の条件は……地図が作られているときに絞ろう。その中からさらに、エイジャの赤石に関わるものをピックアップする。

条件を決めたらあとは矢を地図に放ち、しかるのち自分の頭に突き刺すだけだ。ルベルクラクが未発見の地図一つ一つに「ネヴァーフエード」を放っては、自分に突き刺すを繰り返す。

その動きを、二人は不思議そうに見ていた。

「見えない? これはね、波紋使いたちが言うところの幽波紋ってやつだよ」

「幽波紋!? 実在するのか! 波紋を極めたものだけがたどり着く、一つの境地と伝え聞いてはいるが……」

受け取った記憶を整理しながらわたしが顔を向けると、ジョナサンは驚いていた。これまた聞き覚えのあるやりとりだな。

「別に波紋からでなくとも覚醒することはあるよ。波紋はそこに至るための方法の一つっただけで」

「なるほど……」

「でもってわたしはそれを使って、人やものの記憶を読むことができ
るんだよね。今、この地図の記憶を順番に読み込んでると……あ、
ちよつと待って、それらしいの見つけた。二人にも分けるね」

説明しながら、わたしは今しがた手にしたばかりの記憶を「ネ
ヴァーフエード」の矢に移す。

そこに込められたのは、まさにわたしがジョジョで見たあのエイ
ジャの赤石だ。あるいは、アルキメデスの家から発見したスケッチに
描かれたものと同じ姿の。それが安置された祭壇を仰ぎながら、地図
を記す人物の姿。

わたしはそれを、二人に順次撃ち込む。

「こ、これは……!」

「お、おお、おおおお……!」

そしてどこからともなく記憶を与えられた二人は、それぞれの反応
を示した。

ジョナサンは驚愕が大半で、歴史的文物を目の前で見たかのような
記憶を得たことに対する、感激の色が見て取れる。

伯爵はむしろ驚きは少なく、彼のリアクションで大半を占めている
のは恐らく畏敬。モノから記憶を抜き取り他人に分け与える、という
行為が恐らく彼的に神様ポイントが高いんだと思う。

別にスタンドってわたしだけのものでもないんだけど、身近にスタ
ンド使いがいらないとそうなるんだろうな。スタンド使いの周りには
自然と集まるから、いるところにはかなりいるはずなんだけど。

「見えた?」

「ああ。これは、すごい力だね……」

「ええ。やはり神と呼ばれていたのには、確かな理由があったのです
ね」

「共和政ローマの波紋使いには、もっとすごい能力を持つてる人もい
ただけだね。まあそれは置いといて」

ものを横にどかす仕草をしながら、わたしは改めて二人に話しかけ
る。

「二人が見た光景にあった、赤い宝石。あれがスーパーエイジャだと思おう。で、この記憶を取り出せた地図がこれ」

言いながらわたしが手に取ったのは、伯爵が最初に出した地図だった。

「……では今後は、この地図が示す場所を探すことに重点を置く、ということだね。しかるのちにスーパーエイジャを取りに行く、と」

「うん、そうなるね。人手がいるときは、伯爵。力を借りるね?」

「お任せください。人海戦術は我々の本業ですので」

そういうことになった。

とはいえ、ジヨナサンには本業がある。なので彼の担当は主に地図の解読などの頭脳労働で、現地に探検に行くのはわたしの仕事だ。

彼は、「冒険小説みたいな旅もしてみたかったけどね」と少しだけ残念そうにしていた。やはり彼は、不思議なことには首を突っ込みたくなる性分なんだろう。そうじゃなかったら、奇妙な冒険は始まらなかつただろうしね。

まあでも、地図の解読は「ネヴァーフエード」があればかなり短縮できる。

地図自体は正しい答えを記憶してるわけじゃないから、即座に答えを知ることとはできない。だけど、地図を作っている過程は全部読めるのだ。つまり、作り手の意図は概ね読み取れるわけで、半分くらい埋まったクロスワードをするようなものだった。

果たして解読はあっさりと一日ほどで終わり、示された隠し宝物庫はエジプトのアレクサンドリアにあるらしいということがわかった。

アレクサンドリアと言えば、ルブルム商会の本店があつたところだ。なるほどと思える配置である。

というわけで、ルベルクラクの傭兵たちを伴って、はるばるエジプトはアレクサンドリアまでやってきたわたしは。

かつて入り浸っていたアレクサンドリア図書館の面影を思い出しながらも、地図に示された場所まで行つて。

「うーん……このはず、なん、だけでも……」

何もない砂丘の上で立ち尽くすことになった。

14. 三步進んで二歩下がる

突然だけど、イタリアのローマや日本の奈良みたいな歴史のある街は、迂闊に開発ができない。なぜなら、ちよつと地面を掘ると何かしら遺跡が出てきて、そのたびに作業の中止を余儀なくされるからだ。

何が言いたいかというところ、遺跡というのは大体地下にあるってこと。これはつまり、放棄された施設や設備というのは、月日と共に降り積もる砂や土の積み重ねによつて次第に埋まっていくからなんだけど……それが今回探している隠し宝物庫にもばつちり当てはまつたらしい。

つまり場所の特定はできたのはいいけれど、肝心の宝物庫は完全に地面の下に埋もれてしまつていたわけだ。これには参つたよね。

仕方ないから掘り起こすことになるわけだけど、紀元前ならともかく二十世紀に勝手にその辺の土地を掘り起こすわけにはいかない。しかるべきところに申請して、許可を得る必要がある。

まあこの時代のエジプトは一応独立国家ではあるけど、ほとんどイギリスの支配下にある。なので申し訳ないけど、元宗主国の権限を振るわせてこの辺りを買ひ上げることになった。そのうえで発掘作業を始めることになつてしまつた。すごく手間！

でもね、元歴史学を修めていた身としてはね、こうして発掘作業ができるのは素直に嬉しかったりする。発掘作業をする羽目になつた傭兵の皆さんにはちよつと申し訳ないとは思うけどね。

前世でわたしがやつたのは歴史学の中でも主に民俗学（文化や風俗、習慣について）で考古学ではないんだけど、そこはジョンナサンが書いた論文や学術書を引用する形でなんとかした。

それでも慣れないことをやつてることには変わりがなくて、最初はあんまり進まなかつた。わたしは種族スペックのゴリ押しですぐに慣れたんだけど、やつぱり傭兵たちがどうしても、ね。いきなりやつたこともなければ興味もないことをやらされてるわけだし、仕方ないとは思うけども。

「……ヒトラー首相に大統領の職能が付与される、か。歴史にいわく、

「総統閣下の誕生ってわけだ」

そんなある日。発掘作業の休憩中に、ためこんでいた新聞を一つ一つ読みながら、わたしはひとりごちていた。

そう、然る八月十六日、遂にナチスドイツにアドルフ・ヒトラー総統が誕生した。表側の歴史は、やはりおおむね前世通りに進んでいるみたいだ。

逆にわたしのほうは、あんまり順調じゃあない。二か月近くかかってても目的の入り口まで到達できてないんだよね。これがあとに響かなければいいんだけど。

「今まさに歴史が動いているなあ……この辺りの記事はスクラップにしておこう。総統閣下シリーズがはかどるぞ。……それはいいんだけど……うーん、ドイツとサンタナ王国が技術に関わる協約を締結、か……」

別の新聞を手にとって、うなる。

サンタナ王国の王様はサンタナを殺す手段を探しているみたいだけど、ここでドイツと手を結んだか……。

ドイツはドイツで既にローマでカーズ様たちを発見しているわけで、歴史の裏舞台で利害が一致している両国が接近するのは時間の問題ではあったろう。それにしたって、ヒトラーの権力が確立すると同時に締結とは、いくらなんでも早すぎる。これは前々から水面下で話が進められてたやつだろうな。

うーん、サンタナ大丈夫かなあ。機関銃程度じゃわたしたちは殺せないけど、何せあのシュトロハイムを作るのがナチスドイツだ。紫外線照射装置だって、小型化はSPW財団だけど大元はナチスドイツが作ったものだし、心配だ。

やっぱりサンタナが起きるところには、わたしが行ってあげたいな。そうでなくても久しぶりに会いたいもの。

「アルフィー様！ 入り口が見えました！」

「んんっ!? ホント!?!」

新聞を前に腕を組んで唸ってたら、慌ただしくテントに跳び込んできた傭兵の言葉に椅子から転がり落ちそうになる。

これはのんきに休憩してる場合じゃあないぞ！

「案内お願い！」

「ハッ、こちらですー！」

そのまま発掘現場に案内される。

それなりに広くスペースを取った上で、真下に掘り下げられた穴の奥に下りていく。そこからさらに奥に進めば……。

「おお……すごい、これはいかにも遺跡な感じだ……！」

わたしの前に現れたのは、巨大な石造りの壁と扉だ。まるでインカ帝国の石積みのように、ぴつたりと閉じられた扉が高い技術力を感じさせるね。石の種類には詳しくないから、見ただけで何でできてるかはわからないけど！

というか、完全に発掘されてるじゃあないか。頭のほうが見えてきたとか、そういうんじゃなくて。そこまで気を使ってくれなくてもよかったのに。

……ん？ でもこの扉、取っ手の類がどこにもないな。それらしいものがついていた形跡っぽい穴はあるけど、球形のようなものをはめ込めるような感じのくぼみだ。しかも大きくない。これじゃあ手どころか指だってあんまりひっかからないよ。

「どうしましょう？」

「うーん、とりあえずわたしがやってみるよ」

ぐにより、と手の形を変えて、取っ手(?)の跡に滑り込ませる。我ながら人間離れしてるなと思うけど、こういうときは素直に便利だ。周りはルベルクラクの人しかいないから、こういうことしても問題にならないのは気が楽だよ。

では動かしてみよう。

「んぐぐぐぐぐ……！」

どう動かしてもびくともしない！ そんな気はしてたけど！
ていうか、この形状だと引き戸だったらどうにもならないぞ。引つ張れないもの。

「……うーん、わたしは一族でも非力なほうだけど、それでもただの石の扉なら開けられるはずだけど。鍵でもかかっているのかな？」

「かもしれませんね」

「でも鍵穴とかそういうの、見当たらないですよね……？」

言われるまま改めて壁を上から下までじっくり眺めてみる。くぼみ的な穴なら上と下にもあるけど、鍵穴ではないだろうし。それらしいものは何にもない。

「……うーん」

「爆薬の用意ならありますが」

「それはダメ！ 遺跡はできる限り保全したいもの！」

なんて物騒なことを言うのやら。

どんなものであっても、当時の様子は可能な限り残しておかないのだよ！ シュリーマンじゃあるまいし、発掘のために破壊するとかそんなの許されることじゃあないんだよ！

……とはいえ、それは最後の手段として選択肢に残っている。恐らくここにスーパーエイジャがあると知れば、カーズ様ならまず間違いなくなんの遠慮もなく破壊して中に入るだろうからね。そんなことをされるくらいなら、最小限の破壊で留めるためにわたしが自分の手でやるしかない。

でもそれはしたくない。

かといって、この大きさだと「スターシップ」には収納できないだろうな。サイズのアウトか、重量的にアウトかまではわからないけど。あるいはどっちもか。

え、如意転変？ いや、あれは液体や気体には変身できないから、カミソリ一枚も入りそうにないこの扉には入り込めないね。

だからまずは正攻法を調べるしかないだろう。

「【ネヴァーフエード】」

ということで、出番だ第四の矢！

わたしは【コンフィデンス】を構えて、雫の紋様が刻まれた矢をつがえる。それを扉に向けて発射して……記憶を取り出した矢を自分の頭に刺す！

「むむむ……」

するとすぐに記憶が流れ込んでくる。それを参考にすれば開け方だつて……。

「……えっ、めんどくさい……」

えっ、めんどくさい。思わず口でも内心でも言っちゃうくらいにはめんどくさいぞ！

扉の一番上に目を向ける。そこには、さっきも眺めた穴が開いている。穴と言っても遺跡の中に繋がる穴じゃあなくて、扉にもあるくぼみだ。

続いて扉の左右を見る。今しがた取っ手の跡だと思つて手を入れた、くぼみがある。

さらに扉の下半分。上のほうにあるくぼみのちょうど真下にも、同じようなくぼみがある。

どれも同じようなものだけど、地味に少しずつ形が違う。つまり一つ一つが違うものをはめ込むもので……。

「……アルフィー様？」

「あのね。あそこと、ここと、それとここにくぼみがあるでしょ？」

「ありますね」

「この合計四つのくぼみに、正しい鍵をはめ込むと開く準備が整うみたい」

「はあ……っ？」

うーん、なんていうか随分とRPGみたいな扉だな……。ルージューフィシユーは何を思つてこの仕掛けを作つたんだろう……。

おまけにあれだ。ここにきて、振り出しに戻つた感じするぞ！

「……で、このくぼみにはめ込む鍵とやらは……っ？」

「……どこにあるんだろうねえ？」

つてことだよ！

スーパーエイジャを手に入れるために発掘した遺跡に入るために必要な鍵を探すために他の遺跡に入るために必要な鍵を探すために……とかつてエンドレスしないだろうね!?

「……とりあえず、描くか。紙とペンくれる？」

「はい、どうぞ」

「ありがとう。よおし」

自分に取り込んだ記憶を基に、そのイラストを描くでしょう。大昔からやっててよかったスケッチ。

しゅしゅしゅしゅしゅ……っ！

「……こうして絵にすると、改めてRPGっぽいな……」

やがて仕上がった四枚のイラスト。それは、四つの丸い赤石だ。色はつけてないから、ぱっと見は赤くないけど。

ただし、それぞれに違う形の紋様が刻まれている。それで指定の位置を判断しているんだろう。よくよく見ると、くぼみの中にはその形の出っ張りがある。そこに紋様を当てる形ではめ込むようだ。

「……で？　これが今、どこにあるって……？」

思わずつぶやいたけど。

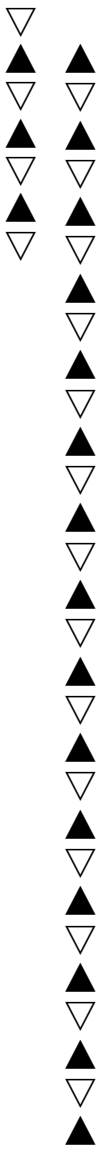
これ、振り出しどころかマイナスになったのでは……？　探すべきものが四つに増えてるんですけど！

「……とりあえず、くぼみを型取りして模型作ってみるかなあ。完全にダメ元だけど……」

ちら、と扉の上にあるくぼみに目を向ける。そこには、太陽のような模様が浮き出ている。

【ネヴァーフエード】で見た記憶通りなら、この仕掛けはただはめ込むだけじゃ動かない。すべてはめ込んだ上に、さらに太陽の光を取り入れて赤石にそれを増幅させることでようやく扉が開く仕掛けになっているんだ。だからただの模型じゃあ動かない。

でも、試してみても損はないだろう。もしかしたら、っていうこともあるだろうしね。



闇に包まれた空間に、一つの灯火がある。それが作り出す光はあまりにも頼りなく、今にも消えてしまいそうにも見えるほどだ。

しかしここにいる二人にとっては、その程度の明かりでも問題はな

いようだった。いずれも明るさなど気にした風もなく、話をしている。

と。

そこに、きしむ音を響かせて空間に光が差し込んできた。扉が開かれたのだ。そこから月のさやかな光が差し込んできている。

二つの視線がそちらに集中する。それを平然を受け止めながら、新たに二人が入ってくる。

「……遅かったわね」

扉が閉まる音と共に、先にいた二人のうち大人の女——東洋系の顔だ——が口を開いた。

それに対して、後に入ってきた二人のうち前に立っていたほうの男が答える。

「すまん。何分エジプトは遠くてな……しかし収穫はあったぞ」

口元から牙をのぞかせて、男は笑う。マントにつけられたフードを外して現れたのは、スラブ系の顔立ちだった。

「ということは？」

女がさらに問う。

男は彼女に、連れていたもう一人の男を示して見せた。

これを受けて、示された男もフードを外しながら大きく頷いて見せた。こちらは、ゲルマン系の顔立ちである。

「はい、確かにアルフィー様でした。ようやくお目覚めになられたようです」

その答えに、女がおお、と感嘆する。今まで口を開いていなかったほうの先客……小柄な少女もまた、嬉しそうに顔をほころばせていた。

「ではやはり、最近になってルベルクラクの動きが活発化していたのは、そういうことなのね」

「だろうな。喜ばしいことだ。しかし、いつまでも彼女をルベルクラクに任せておくのも癪な話だ」

「けれど、ある意味では仕方がないわ。何せ私たちは五百年以上に彼らに負けて滅ぼされたのですものね」

「だが、今しばらくの辛抱だ。どのみちスーパーエイジャに至るために必要な鍵の所在は、我らにしかわからんのだ。焦ることはない」
「そうね……私たちはそれをゆっくりと回収していけばいいだけだわ」

「あまりゆっくりはしておれんぞ？ アルフィー様が目覚められたということとは、カーズ様たちの目覚めも近いということだからな」

「わかっているわ。スーパーエイジャの回収はそれまでに、よね」

改めて、女と男は頷き合う。

「担当は今まで通りでいいな？」

「ええ。私たちにヨーロッパの土地勘はあまりないもの。こちらはあなたの方に任せるわ」

「うむ。ではアジアのほうはお前たちに任せよう」

そうして二人は握手を交わす。

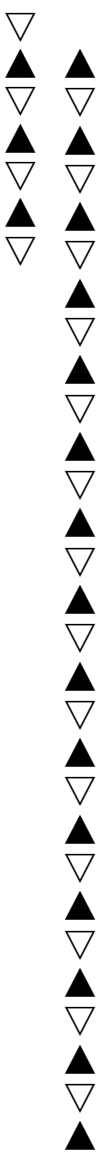
それから、胸元から取り出した逆十字を眼前にかざし合う。中心に、赤い宝玉があしらわれた逆十字。

二人の近くに控えていた少女と、もう一人の男も同様に続く。

「二「我らルージュフィッシューに、神々の加護があらんことを」」

四人の唱和が、その空間に響く。

ひび割れた赤い宝玉が、現代に再び現れようとしていた――。



「……やっぱり模型じゃあダメか」

知ってた。そりゃそうだ。

はあ……まったく厄介な仕掛けを施してくれたものだなあ。

これ、どうもはめ込む赤石が増幅して放射する光のパターンで鍵の認証してるみたいで、別の赤石に紋章を刻み込んでも作動しなさそうなんだよなあ。

というのも赤石は、ものによって光をどう増幅するか、どれくらい増幅するか、そしてどこから射出するか、どのように射出するかが微

妙に違ってくるのだ。

スーパーエイジャは曇りも不純物もないから確実に一条の光線を発射するけど……普通の赤石じゃあそうはいかない。その性質を逆に利用した仕掛けだ。よく考えられてるし、よく作り上げたものだ。千年以上前のものだっていうのに、素直に感心するよ。

でも開ける側としては面倒極まりない。絶対に特定の鍵となる赤石を持ち込まないと開けられないとか、勘弁してほしいよ。

仕方ない、一旦イギリスに戻って伯爵たちに相談するか……。

15. 先攻、ルベルクラク

イギリスに戻ってきておおよそ一ヶ月。そろそろ冬も間近な十月のある日、わたしは経過報告を受けるために伯爵やジョナサンと一緒にテーブルを囲んでいた。

そのテーブルの上には、いくつかの地図が並べられている。

「……というわけで、鍵になる四つの赤石が隠された場所の特定が済みました。現代で言うフランス、ドイツ、中国、そしてスペインです」伯爵の言葉に、わたしとジョナサンは黙って頷く。

いやー、思ったよりかからなかったね。伯爵が持ってたルージュフィッシュの地図の中に全部あったもんね。どの地図もかなり難解な謎解きゲームみたいな、十分すぎる仕上がりがりだったんだけど。

それというのも「ネヴァーフエード」が強すぎた。スーパーエイジャがあるだろう遺跡を特定したときもそうだったけど、やっぱりものから記憶を取り出せるというのがあまりにも強すぎる。未解読の地図の中から必要なものをピンポイントで見つけられる上に、作成過程が見えるんだからはつきり言ってチートみたいなものだね。

おかげで謎解きとかをしてる感じが全然なくて、こう、なんていうか、一生懸命隠したルージュフィッシュの面々には申し訳なさすらあるよ。

でもまあ、あえて苦勞する趣味はわたしにはないし、そこそこ急いでるし……というわけで、全力を出した結果がこれだ。

ただし、すべての鍵の場所がわかったわけじゃあない。わかったのは、あくまで鍵が隠された場所だ。

つまり何が言いたいかというと、

「うち二つは既に暴かれておりました」

ということだよ。残念ながら、すべてが無事だったわけじゃあないってことだね。隠されてから千年以上経ってるんだから、それも仕方ないだろう。

ちなみに、暴かれていたものの中の一つは既に過去のルベルクラク家が回収していたから、わたしたちが解読する必要があったのは三つ

だけだった。一か月程度で全部特定が済んだのも、この辺が影響して
る。

「暴かれていたのはフランス、ドイツ、中国のものです。一方スペイン
のものは未発見であったため、現在当家の傭兵団を派遣して諸処の手
続きを行なっております。幸い、と言って良いかどうかはわかりませ
んが、まだまだ不景気が続いていて当家も人手が余っているのですほ
ど時間もかからず進められると思います。まあ、スペインはいまだ世
界恐慌の被害を抑えきれておりませんから、その辺りでもめる可能性
はありますが」

この時期のスペインというと、軍事政権と王政が倒れて第二共和制
になってるところだったかな。それもあんまり振るわなくてやがて
スペイン内戦に突入するわけだけど。

そんなときに外国のチームが遺跡見つけたっぽいから発掘したい、
なんて言っても乗ってくれるかなあ。いやまあ、状況が状況だから、
現地の失業者を雇うとか言えばなんとかなるかもだけどさ。

こうして見ると、なんだかんだでやっぱり世界恐慌はあつちこつち
で影響があつたんだなって改めて実感できるね。

まあ、前世では一度も好景気を経験したことがない世代なだけに、
今の世界経済を見てもそんなに危機感がわかないのは我がことなが
らどうかと思う。生き延びたらバブル崩壊はなんとか防ぎたいね。

「こちらの隠し宝物庫については、ある程度発掘を進めたところで中
米史の事物と極めて類似性のあるものが見つかった、という触れ込み
でジョースター卿にお越し頂くこうかと思っております」

「いい案だと思います。ヨーロッパで中米史を専門としている人間
は、僕含めてもそう多くありませんからね」

「石仮面がある可能性も考えると、何も嘘は言っていないしね」
うんうんと三人で頷きあつて、詳細を詰める。

とはいえ、こちらについてはジョナサンに一任することになると思
う。彼には本業の傍ら、鍵となる赤石を探してもらおうことになる。

「問題は既に暴かれてしまっているほうですね。ルベルクラク卿、足
取りはつかめているのですか？」

スペインにおける話に区切りをつけたところで、ジョナサンが振ってくる。わたしも彼に続く形で伯爵に目を向けた。

「過去のルベルクラクが発掘したフランスのものに関しては、はっきりわかっておりますよ。二百年ほど前に、当時の王家に献上した記録が残っております。そして現在も、ウィンザー王家に所蔵されていると判明しております」

「う、場所がわかってるのはいいけど、なかなかやりづらいところにあるね……」

「陛下のお手元にあるとなると、尻込みしてしまうなあ……」

由緒正しいイギリス貴族のジョナサンには、ちよつと手出しできないだろうなあ。

かくいうわたしも、前世で庶民だったこともあつてかなり気後れしそう。

ここは王室に強いコネのある伯爵になんとかしてもらうのが、一番無難かなあ。

「ええ、色々と考えてみますよ」

伯爵はそう答えて、苦笑した。

あ、やつぱり簡単にはいかないんだね……。何かあつたら全面的に振ってくれていいからね……。大体のことはするから……。

「……それと途中までは足取りがつかめているものが、中国にあつたものですな」

「中国……ルージュフィシユの拠点だったフランスからはだいぶ遠いですが」

「鍵となる赤石を隠すためだけに分派したものがいたようです。現代まで続いているかまでは調べ切れませんが……可能性はありそうですな」

「滅んでなかった可能性が出てきたんだね」

はい、と頷く伯爵に内心でまず間違いなく存続してるだろうなつてつぶやく。

いや、根拠はなんにもないけどさ。こういうのつてお約束じゃない？

実際にあるかどうかはさておき、邪魔が入るだろうって想定しておけば万が一のときの被害も抑えられるだろうしね。保険はかけないと損はないよね。

「この中国ののですが、明から清に移り変わる時期に暴かれたようですな。そして康熙帝の時代、皇帝に献上されたと記録に残っていましたが……日清戦争の折、賠償金に充てるため日本に譲渡されたそうです」

「日本！」

わあ、ここで日本が出てくるとは思ってなかった！ 前世が日本人なのに、寝る前は日本とはまったく縁がなかった（そもそも当時の日本列島に国がなかったけど）だけになんだかワクワクする。その名前を聞くだけでなんだかテンション上がってきちゃった。

「……遠いですね」

「ええ。おまけに日本に渡ってからの足取りは不明です。情報もなかなか届きません」

「地球の裏側だもんねえ……。まあでも、そういうことなら日本に直接行ったほうが早そうだね」

「かもしれません」

「ちようどいいや。そういうことなら日本にはわたしが行くよ。わたしのスタンドがあれば調べるのも簡単になるし、やりたいこともあつたしね」

そう言いながら、わたしはすぐ横に立てて置いていた刀の柄をなでた。そこに二人の視線が集まる。

『なんだ、俺に何かあつたか？』

そこから犬頭のヴィジョン……アヌビス神がにゅっと顔を出す。もちろんこれはわたしにしか見えないわけだけど、刀の力は二人も知っているからそこは問題じゃあない。

彼には刀を打ち直せる機会が来そうだって伝えて、喜ぶ彼をよそにわたしは二人にも説明する。

あれ以来、わたしは禁止されていない限りは基本的にアヌビス神を携行している。ずつとぼつちで博物館にしまわれてた彼をスタンド

空間に置いてくのは、かわいそうだったからね。

いやその、空間内に置かれてるわたしの古道具コレクションに憑いてる、自我のないスタンドたちを同類だと思っただけで一方的に話し続けるはシカトされてると思ひ込んで凹んだのが、もうかわいそうでかわいそうで……。

まあ武器としては優秀だし、いざってときは頼りにしようって打算もあるんだけどね。武器として使う機会は今ところないけどさ。

それでもそういう機会がきたときに、刀身が折れたままっていうのもね。そりゃあアヌビス神の能力があればこのままでも十分戦えるけど見栄えのこともあるし、何より折れた断面から錆ついたりしてもいやだからね。

でも剣ならともかく、刀を扱える人がヨーロッパにいるはずもなくって、今まで放っておくしかなかったんだよ。

「なるほど、日本は刀と侍の国だったね。この現代でも作っている職人がいるのか」

「いるはずだよ。高級将校は刀持ってる国だからね」

「そういうのもありましたな。わかりました、では極東のことはアルフィー様にお任せします。日本には当家の傭兵はおりませんが、知日家の部下はおりますので案内役として手配いたしましょう」

「ありがとうございます、伯爵」

やった、日本に行けるぞ！

この時代はもう、イザベラ・バードが深い感動を寄せた江戸時代の風景はほとんど残っていないだろうけど……それでも、かつてのわたしには絶対に見ることのできなかつた景色をこの目で見るチャンスだ！

それに、昔のことを知りたかったらスタンドがある。いや本当、わたしは能力に恵まれたなあ。つくづくそう思うよ。

「この機会に日本にも進出しますかなあ」

「あ、それは難しいと思う。次の戦争、日本は英語圏を敵に回すだろうから……」

「む。ではやるなら戦後ですかな」

「それもどうかかな……わたしの観測した未来だと、軍隊を持たない国になるし……」

「……？ そんな国が成立し得るの？」

「ああうん、帝国主義の現代じゃ考えられないよね。まあ色々あつてね……」

つて、話が逸れてる。本筋に戻そう。

「ところで、残る一つのほうは？」

「それなのですが……これがまた問題でして。というのも、ナチスが軍を使って周囲を封鎖しているために近づくこともできなかつたとのことでした」

「なんですって、ナチスが？」

「ええ。どうもナチスが結党した前後くらいに、地元の農民たちによつて発見されてしまったようで。そこから国に話が行つて、その国が今や……というわけですな」

あらら、間が悪いなあ。わたしが起きるのがせめてあと十年早ければ、先手を取れただろうに……。

「封鎖している、というのが僕には気がかりです。確かに歴史的に大変価値があるでしょうし、中にあるだろう事は現金にしても相当の値がつくでしょうが……軍を使って封鎖まですることでしょうか？」

「その辺りは私もよくは……アルフィー様は、いかが思われますか？」

「んー、推測でしかないけど、たぶん不老不死になりたいんじやあないかな。古今東西、権力を確立した独裁者が望むのはそれだし、石仮面があればそれも実現できる。どこでそれを知ったかはさておき、ルージュファイシユーの隠し宝物庫なら残つてもおかしくないだろうし……」

まあ生きるのに疲れたら死ぬから吸血鬼も不老不死ではないんだけど、と付け加えて締めくくる。

前世における総統閣下がどうだったかはさておき、少なくともジョジョにおけるヒトラーは不老不死を求めたとされていた。それを考えれば、さほどの外れな推測ではないんじやあないかな。

ただ、どうやってそこにたどり着いたのか、というところが見えて

こないんだけど……。そこはまあ、いずれあのシュトロハイムを造る
ジョジョ世界のナチスだしなあ。何があつてもなんか一定の説得力
があるんだよね……。

「なるほど、それは大いにありえそうですね」

「石仮面がもたらす不老不死は、とても認めがたいのだけれど……確
かに、あれが生み出す闇について知らなければ、大抵の人は飛びつい
てしまうかもしれない」

二人も得心した様子で頷いていた。

しかしさて、どうしたものだろう？ わたしなら潜り込むこともで
きるだろうけど……。

「軍が関わっているとすると、我々も動きづらいですよ」

「個人で軍に対抗できるものなど、それこそ吸血鬼か柱の一族くらい
だろうし……」

「伯爵はイギリス王家、ジョナサンはスペイン、わたしは日本とそれぞ
れがやらなきゃいけないことがあるし……人手が足りないなあ」

そこで会話が一旦途切れた。

一応、リサリサやジョージ二世たちも人数に入れていいとは思っ
ただ、いくら波紋戦士とは言っても現代の発達した銃火器に対抗する
のは非常に難しい。

ましてや相手はナチスドイツ軍。

ただのナチスドイツ軍じゃあない。あのシュトロハイムや紫外線
照射装置を造った、ジョジョ世界のナチスドイツ軍だ。何をされるか
わかったものじゃあない。

波紋を科学的に研究したい、つて言及されていたし、最悪実験体
される可能性すらある。そんなところに、せっかくこの世界線では生
き残っているジョージ二世たちを送り込むのはいくらなんでもま
ずい。

「……うん。まずはわたしがドイツに行くよ。日本に行くのはそのあ
とにしようと思う」

なので、そういうことになった。

かくしてわたしは、伯爵たちと分かれてドイツに向けて旅立つ。

さーて、鬼が出るか蛇が出るか。どうなることやら。

16. スピード解決

少し時間は飛んで、十二月半ば。わたしはドイツのハノーファーにいた。

現在のイギリス王室、ウインザー家の直接の祖たるジョージ一世の故郷にして当時の王朝、ハノーヴァー朝の始まりの場所だ。今回の作戦最大の目的地でもある。

ま、そこら辺の細かい説明は世界史の教科書に譲ろう。わたしが語るに長くなるからね。

というわけで、ドイツはザクセン地方の街ハノーファー。ライネ川沿いに建つこの街は運河が市内を走る交通の要とも言える場所で、鉄道の中継地点でもある。おかげで商工業の発達した、ドイツ屈指の商業都市だ。

そんなところにわたしがどうしているのかと言えば、ずばりこの辺りに例の遺跡があるからだ。正確に言うなら、遺跡から回収されたものの保管と調査をしている施設がここにあるから、だね。

とはいえ、ここにすぐに来たわけでもなければ、ここに来てすぐに行動を始めたわけでもない。

というのも、少し前までイギリス王室からどうやって赤石をいただくかの打ち合わせや手伝いで、あれこれやってたからね。わたしは主に資材の運搬とか、密会場所の提供を担当していた。

おかげでなんとか作戦のめどは立ち、年明けくらいに実行される予定だ。

内容は話すと長くなるから、割愛。たぶんドイツでの仕事が終わったあとの日本への道中で世界的な大ニュースとして大々的に報道されるから、そのときにでもってことで。

そんなわけで少し遅れてドイツまで来たわたし。今回はパスポートを使って正式に入国している。

となると当然、わたしはルベルクラク令嬢としての入国なわけで、使用人たちを従えての行動になる。

そんなわたしの表向きの目的は、ドイツの歴史や文化に関する

フィールドワークだ。ドイツ国内の歴史ある地域を巡り、写真を撮ったり史料を探したり、そういう旅に熱中しているお嬢様という体裁になっている。

全力で趣味に走ってる自覚はあるけど、これなら目的地だったハノーファーに無理なく入り込めるし、長期間滞在しても言い訳が立つ。

あわよくばわたしも趣味に浸れて万々歳！　ってわけだね！　一挙両得ってやつさ！

というわけで、北から船で入国したわたしは、キールやハンブルク、ブレーメンと言ったハンザ同盟で名を馳せた街を経由して南下して、ハノーファーまでやって来た。最高の旅ですね！

……いや、言い訳をさせてもらうなら、ハッスルしまくって到着が遅れたわけじゃあないんだ。本当なんだ。してたのも本当ではあるんだけど。節度は守ってたよ。本当だよ。

実は今回目当ての遺跡……と、その調査をしている施設、ものすごく警備が厳重なんだよね。こないだ受けた報告は誇張でもなんでもなく、ドイツ軍がかなり厳戒態勢を敷いているんだ。

そこに潜入するに当たって、柱の一族の身体スペックならわりとなんとでもなるとは思ってる。スタンドもあるしね。

とはいえ、気づかれないほうがいいのは間違いないわけで。そのために、わたしはクリスマスを狙って潜入するつもりなのだ。

クリスマスは、キリスト教圏では非常に重要なイベントなのは誰もが知る通り。日本のお祭り全開なそれとは違うんだよね。

確か、昔のヨーロッパではこの日だけは戦闘行為を忌避する風潮があったはず。なんなら第一次世界大戦中でさえ、この日は一時休戦されたこともあったし。

……いや、一次大戦のあれはそんな微笑ましいものでもないんだけど、それはともかく。

そういうわけで、クリスマスは警備も緩むはず。それを狙って、スケジュールを合わせているのだ。

もちろん憶測で言ってるわけじゃあない。ちゃんと裏付けだって

取ってる。クリスマス当日は、普段の七割くらいしか人がいないって調べはついているのだよ！ それでも七割かよとも思うけど！ まあだいたいぶマシだよね！

……というわけで、わたしはクリスマスを待ちつつハノーファーの観光に繰り出すのだ。そして写真を片っ端から撮りまくる！

観光施設なんてこの時代にはほぼない、だって？ 正気ですか蛍原さん!? そちら辺に素晴らしい街並みがいくつもあるじゃあないですか！

現代のものもたくさんある？ バカバカおバカ！ 今のものと昔のものが融合してる景色も最高の高でしょうが！ どっちもおいしくただけてこそその歴史オタクだよ！ この街を眺めてるだけでも半月は余裕で潰せるね!!

おまけにこの世界、コダックに先駆けてライカがカラーフィルムを一般に販売していたおかげで撮影がはかどるはかどる！ もちろん驚いたけどさ、それ以上に喜んだよ。まったくもってツイてる。

まあ、ジョジョ世界のドイツはやっぱりなんかどこかおかしんじゃないやあなかるうか、とも思ったけど……そこはドイツの科学は世界一イイイ!! だもんね。別におかしいことは何にもなかった。

うん、なかったたらなかった。

「……にしても、いい景色だなあ」

パシャリという音が響いたのを確認して、構えを解く。

ここはハノーファーの街はずれ、現代的な建物がまだほとんどない地区だ。目の前に広がる歴史情緒ある石造りの街並みと、そこに付随する運河の音のない穏やかさがとても心地いい。しんしんと降る雪がまた、よりムードを盛り上げてくれてるぞ。夏にもぜひ来たくなくなっちゃうなあ。

でもこの景色も、住んでいる人にはなんてことのない日常の風景なんだろうな。誰もが気にしない、名前のない瞬間。

けれど、わたしにとっては貴重な歴史的一幕だ。かつては絶対に見ることのできなかつた風景であり、こういう名もなき人たちが生きる何気ない時間こそ、わたしが最も知りたいと望み学んだものなのだ。

もちろん有名な人たちの偉業も大好きだけど。歴史は、こういう何気ないものの積み重ねだというのがわたしの持論なのだ。好き。

……でもこの街、第二次世界大戦で三分の二が焼失するんだよなあ。そういう意味でも、今のうちに写真残しとかないとね。

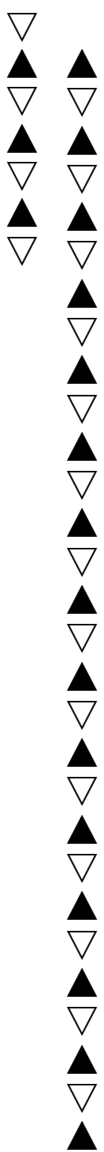
「お嬢様、もうフィルムが残り少なく……」

「またまたご冗談を」

「本当です。持ち込んだものはそれで最後です。そろそろご自愛くださいませ」

「そんなり!? わたしに死ねと!?!」

早くデジカメがほしい!!



結局フィルムは買い足すことになった。多めにお金持って来てて正解だ。まあ、わたしのお金じゃあないんだけど。

……うん、いつまでもお金を伯爵から恵んでもらうのは良心が痛むし、何かわたしも自分で稼げるようになっておきたいところだな。

なんて思いながらも、時間は過ぎてクリスマス当日。の、夜。

わたしは予定通り、一人ホテルを抜け出して問題の施設までやってきた。この街で一番高いビルで、周りは低い建物で囲まれてるから普通は上から入るのは難しいだろうな。

出入り口も、クリスマスにも関わらず嚴重な警備が敷かれてるけど、わたしは飛べるので屋上から入らせてもらう。

見張り台みたいに改造された場所があって、そこにも兵士が歩哨に立ってたので、ごめんなさいしながらその人には気絶していただく。

そしてさらにごめんなさいしながら、服をひんむく。

別にそういう趣味があるわけじゃあない。単に変装用だよ。新品の軍服なら用意できるけど、そんなの変装用には向かないでしょ。

だからむきながらわたしはこの兵士に変身して、服を着る。

……くさい。

それはともかく、真冬のドイツで、しかも夜のほぼ屋外なんてところに気絶したまま裸で放置したら間違いない凍死するので、一旦スタンド空間に入って縛っておく。

ついでに記憶を読んで、符丁とか性格を把握して。後は見張り台に戻って交代に来る人を待つだけだ。

その交代も、一時間経たずにやってきたので何食わぬ顔で交代して建物の中に入る。

中の構造や人の行き交うルート、そのタイミングなどはハノーファーの滞在中に興味に並行して大体集めてあるから、さくさく行く。ここにシュトロハイムとか、知ってるキャラがいるなら寄り道も考えるけど見知らぬ人しかいないみたいだしね。

というわけで、人に見つからない最短のルートで収蔵庫に向かう。「着いた」

あっさり行けたのは、やっぱり時代の差かな。これが二十一世紀だったら、コンピューター制御のトンでもないセキュリティとかあっただろうけど。いかにジョジョ世界のドイツとはいえ、まだそこまで理不尽な技術はないらしい。

そして収蔵庫にはかなり嚴重な鍵がかけられていたし、扉も大きくて重くて、ものすごく頑丈な仕上がりになってたみたいだけど……残念ながら、空気供給管だか換気口だかをつけていたのが運の尽きだ。その程度の隙間があればわたしは中に入れてしまうのだ。

なんならわたし、元が小柄だからか、全力で身体を折りたためば二センチ半くらいの隙間にも入り込めたりする。エジプトのあの遺跡みたく、完全な密閉空間にしないとわたしの侵入は防げないぞう。

さて、それでは肝心なものはどこにあるかな？

暗い？ 関係ないね、何せ元は夜行性の生き物ですの！

ふむ。見た感じ、中世初期の物品がかなり多いかな？ しかも状態がいいとなると、これは相当考古学的価値は高いなあ。

それにこの時代は歴史的には暗黒時代扱いされることもあるくらいで、なかなか当時の品がちゃんとした状態で見つかることって多くないから、その道の人に見せたら金に糸目はつけないんじゃないか

な。正直わたしも、のどから手が出そうですね！ でも我慢。今回はそれは目的じゃあないんだから。

他に目を引くのは、宝石類かな。加工の有無に関係なく、宝石……あるいはそれがあしらわれた品がかなり多い。それもルビーやカーネリアンのような、赤系統の宝石がやたら目立つ。単純に金銭的な意味でも、ものすごく高値が付くようなものばかりだ。

これはルージュフィシユの前身であるルブルム商會が、宝石を中心にした高級品を扱う商會だった影響かな。

赤ばかりなものも、そういうことなんだろう。エイジャの赤石を利用したアクセサリーなんかも、当然のようにあるみたいだし。

……石仮面は置いてないな。調べた限りだと、出土品の目録の中には石仮面もあったはずだけど。あれはちよつと方向性の違うものだし、他のところに回されたのかもしれない。

まあ、ないならひとまずは考えても仕方がない。今は目的のものだけに集中しよう。

「みつけ。覗いた記憶通りの形だなあ」

そんな中から、わたしは目当ての赤石を手取る。ちよつど原作のスーパーエイジャのような、表と裏双方がドーム状にされたダブルカボションカットの赤石。その片方に、稲妻の形が浮き上がるように彫られていた。

これこそエジプトで見つけた遺跡、その扉を開けるための鍵の一つだ。

これさえ手に入れば、もうここには用はない。早速スタンド空間に収納して、ずらかるとしよう。

……あ、でも石仮面がどこにあるのかは調べておきたいかな。ここにあるならここで破壊していくつもりだったけど、ないんだもんね。調べられるだけ調べておかないや。

そう考えて、一時間ほどスニーキングミッションに精を出した結果、ベルリンの研究施設に運ばれたことがわかった。ここに詰めてる兵士たちは特殊な研究施設としか聞かされてないみたいだけど、まあ、十中八九不老不死の研究だろうなあ。

そして場所も一部の人間にしか知らされていないみたいで、ここに
いる兵士で位置を認識してる人はいなかったから、これでもう完全にこ
こでの用事は終わったな。今度こそ帰るとしよう。

と、その前に気絶してもらった兵士さんを返してあげないとね。
まだ気絶してたから、仮眠室に寝かせておく。

「これでよし、と。それじゃ、てっしゅー!」

かくしてわたしは、至極あっさりと目的を達成したのだった。

17. 後攻、ルージユフィシユー。それと

「おのれルベルクラクめ……！」

ロンドンのとあるホテルで、スラブ系の男がいきり立っていた。彼は剛腕をうならせて机に拳をたたきつけようとしたが、しかし寸前で思いとどまってピタリと手を止める。

そんな彼の前で控えるゲルマン系の青年は、下手に弁償をしなくて済んだという安堵で軽く息をついた。

「どうされますか、マスター？ このままではヨーロッパにある鍵はすべてルベルクラクに押さえられてしまいます」

「わかっている……なんとかして奪取し、我らルージユフィシユーの名で神々に献上せねばならん」

そう、彼らこそルージユフィシユーであった。彼らはスーパーエイジャに繋がる四つの鍵をすべて把握しており、それを回収して神々に捧げることで復活せんと企図していた。

しかしその目論見は、早くも瓦解しかけている。それというものも、ルベルクラクの動きがあまりにも早かったせいだ。

ルベルクラクの動きは、男の考えを大幅に上回っていた。勝者となつてもなお驕らず研鑽を続けたルベルクラクと、敗者となつて五百年間の隠遁を余儀なくされたルージユフィシユーの格差は、彼らが認識しているよりもなお巨大であったのだ。

だが彼らにも意地がある。隠れながらも構築した情報網や伝手は存在しており、彼らはルベルクラクの動きをほぼ正確に把握することには成功していた。

「……まずドイツは諦める。アルフィー様が直々に出向かれたのであれば、我らが何かするまでもない。神々の下僕たる我々が、神々の道行きを邪魔するなどあつてはならんことだ」

「やはりそうなりますか。ではスペインはいかがします？ こちらには大規模な調査隊が送られていますので、手のものを多く潜り込ませています」

「木っ端どもに過度な期待せぬほうがよいだろう。お前が行き、直に

確認するのだ。念のため、あそこの内部地図を持っていき責任者の気を引け」

「畏まりました」

「ああ。だがジョースターが行くという情報もある。やつには気をつけろよ。石仮面や神々について詳しい上に、波紋の達人でもある。間違ひなく今回のことにも一枚噛んでいるはずだ」

「もちろんです。ですが、仕留めてしまっても構わないのでしょうか？」
「構わん。どうせ生きていても我々の邪魔にしかならんからな。……構わんが」

そこで男は、青年に目を向ける。

両者の視線がぶつかり合い、青年の視線に反抗期らしい若い苛立ちが一瞬だけ浮かんだ。

「ジョースターを甘く見るな。あれはあのディオを討ち果たした男だ。老いたとはいえ、先日も派手に暴れて見せた。どれだけ警戒してもやりすぎということはない」

「……畏まりました」

しかしそれを押し込んで、青年は頭を下げた。

彼に対して男は満足げに頷くと、どかりとソファに腰を下ろす。

「それでいい。スペインは任せたぞ」

「お任せください。……マスターはイギリスを？」

「ああ。イギリス王室にある鍵は、悪趣味なことに蛙食いの泥棒に回収させるらしいからな。それに便乗するつもりだ」

だが、そう答えた男の表情は渋い。

「ルベルクラクの整えた舞台で踊るのは気に食わん。気に食わんが……私の心情よりも今はルージュフィッシュを再び神々にお認めいただくことが先決だから……」

既に何歩も後れを取り、挽回が難しい局面であるのだが、男はそれを口にはしなかった。理解はしていたから。青年もまた同様である。
「……ああそうだ。業腹だが、この件はアジアのほうに伝えておかねばならん」

「ですね。……アルフィー様の動きについてもお知らせしようと思

ますが、構いませんね？」

「そうだな、それはすべきだろう。日程だけでなく、どこに寄港するかも含めて漏れのないようにな」

「畏まりました」

青年は男に一つ頭を下げると、マントを取って部屋を出ていく。

彼の背中を見送り、ドアが閉まるのを見届けた男はかすかにため息をついた。次いで、顎をさすりながら窓の外に目を向ける。

真冬のロンドンには、雪化粧を纏っている。上空に佇む白い月はどこまでも透徹な表情を浮かべていた。



中華世界にありながら、アヘン戦争によって清国より切り離されて以来、独自の歩みを進める街、香港。

その場末に連なる飲み屋に、二人組がふらりと入り込んだのは1934年も残るは一日となった年の瀬であった。

二人組の片方は妙齡の女。もう片方は、年端もいかない少女である。

傍目には姉妹かあるいは親娘かと言ったところか。しかし女が純粹に東洋系なのに対して、少女はコーカソイドとの混血が伺えた。

しかしそれがどうあれ、両者が血縁であることは疑いようがない。

何せ二人の顔立ち、特に目元や鼻筋の類似は誰の目にも明らかだ。

そんな二人組は飲み屋の奥まった席へ着くと、あからさまに適当な注文をさつさと済ませて顔を付き合わせた。

「……当てが外れたわ。まさか欧州の鍵がこうもあつさりルベルクラクに押さえられるなんて」

そう、彼女たちはアジアを担当することになったルージユフィシューである。

「えええ！ 大変です！ ど、どうするんですかつ？」

「どうもこうも、今から欧州のことのできることもなうないわ。

「あちらはあちらに任せるしかない」

「じゃあ、予定通りにしますか？」

「……いえ、こちらでも変更よ」

女の断言を受けて、少女はこてりと首を傾げた。

「あちらからの連絡によれば、アルフィー様は年明けにも船で日本に向かうそうよ」

「えっ、うそ、じゃあ、鍵が大陸にないことわかつちやってるってことですか？」

「どうやったかはわからないけれど、そう見るしかないでしょう。ルベルクラクには相当優秀な情報屋がいると見ていいわ。けれど、この機会を逃すわけにはいかない」

と、女はここで言葉を切った。少女は再度首を傾げたが、すぐさま店員が酒を持って現れたため一人で勝手に得心する。

やがて店員が立ち去ると、それを見計らって改めて女が口を開いた。

「……ルベルクラクは日本に拠点を持っていない。もちろん出来る限り有用な人間を出すでしょうけど、それでも現地の人間以上の人材は出てこないはずよ。だから日本に拠点を持つ私たちが先回りして、それとすり替わるわ」

「なるほどー！　じゃあ、わたしたちは日本でアルフィー様をお出迎えするんですね？」

「その通り。そして鍵の下まで案内して、アルフィー様に取り入るの。そこからルベルクラクに楔を打つ」

「ルベルクラクをやつつけるんですね！」

「いえ、滅ぼしはしないわ。ルベルクラクが作り上げた組織自体は、間違はなくアルフィー様やカーズ様たちのためになる。だから首から上を私たちにすぐ替えるのよ」

「な、なるほどー？」

「……あなたは深く考えなくていいわ。私の言う通りにすればいい」

「えっと……はい、がんばります！」

「ふふふ、いい子ね」

「えへー」

盃片手に少女の頭をなでる女。すると少女ははにかんで、純粹な喜びで顔を染めた。

女のほうも、そんな少女を慈しむように微笑んでいたが……ほどなく表情を引き締める。

「……そういうわけだから、私たちも年が明けたらすぐに日本に渡るわよ。日本語は覚えてるわね？」

「はいー」

「よろしい。日本に着いたら、鍵の手配を急ぐわよ。それと人間の文化を愛されているアルフィー様のために、情報集めもおきましよう。アルフィー様が好みそうなものや場所をピックアップしておくこと。いいわね？」

「はい。……あれ？ でも、そんなことしなくっても、お母様は昔日本に住んでたんじゃ」

「いつの話をしているの？ 三十年も経てば色々変わるわ。ましてや大きな震災もあつたわけだし、当時の知識なんてあまり当てにならないわよ」

「そういうものですか……？」

「大人になればわかるわよ」

納得できない様子の少女に対して、女はくすりと微笑む。

彼女は続けようとした「それまでもう三十年ほどかかるだろうけれど」という言葉を、酒とともに飲み干した。

それから二人は、他愛ない話に終始した。

そうして、少女の盃が空になったのをきっかけに、飲み屋を後にする。

店主に小銭を投げてよこした女は、少女を従えて香港の雑踏に消えていく。

そんな二人の道行きを気にかけるものは一人としておらず、やがて二人は完全に街の景色に溶け込んでいった。





同時期、チベットの山深い秘境にて。

人目を避けるように築かれた宮殿めいた建造物に、遠くヨーロッパから来客があった。

ただし、それは招かれざる客である。普段であれば静謐に包まれ、太陽の呼吸を修め生命を極めんとするものたちが修行に打ち込むはずの場所はこの日、完全武装した軍隊によって踏み荒らされていた。しかし彼らは徹底した規律によって統制され、殺戮どころか不用意な発砲すら慎むという最低限の礼儀も持ち合わせていた。

故に、彼らの来訪を認識したその男は、下手に反抗して刺激することを避けた。すなわち、弟子たちを下がらせ、最高責任者たる自身のみが出迎えるという判断を下したのである。

軍隊の側も、そうした判断を察したのだろう。修行場を制圧したのちは、部隊の最高責任者たる男自らが先頭に立って最奥まで踏み入ってきた。無論、その後ろには大人数の兵士が銃を構えて隊列を成していたが。

「……遠路はるばる、ようこそ。まずは名前を伺っても？」

「バカラシン・イイノデビツチ・ゾル。偉大なる総統閣下より、誇り高きライヒスヘーアの少佐を拝命するものである。波紋法継承者、ストレイツォ殿とお見受けする」

「いかにも、私こそチベット波紋法のストレイツォ」

軍人……ゾルの問いに頷き、男……ストレイツォは長年親しんだ形式で挨拶をする。対するゾルもまた、形式は違えど軍の敬礼で応じた。

さらに彼は、あまりにも不調法かつ突然の来訪を詫び、軽くではあるが頭も下げると共に、兵士に構えを解かせても見せた。

そんなゾルに、ストレイツォは警戒を続けながらもあえて気を利かせた様子で椅子を勧めたが、ゾルは謝辞を告げつつも、軍人にその気遣いは無用と断った。

ゾルはそのまま、直立不動でストレイツォに相對する。

「性急で申し訳ないが、早速本題に入らせていただきたい」

「聞きましょう」

「単刀直入に申し上げます。ストレイツオ殿、貴殿らが修める波紋法を、総統閣下がお求めだ。ドイツまで波紋使いを数人、派遣して頂きたい」

言葉通りにズバリ放たれた言葉に、ストレイツオはかすかに眉をかめた。

「……このような山奥にいるゆえ、どうにも欧州の情勢には詳しくないのだが……その、総統閣下？ とやらは、何ゆえ波紋法を求められる」

「無論、我らアーリア人の優れた遺伝子をより優れたものへと昇華せしめるためである」

「……人種の優劣についてはあえて語りません。しかし、波紋を用いて遺伝子を？ 波紋はあくまで技術です。遺伝子とは関係がありませんので、代々受け継がれるものではないですが……」

「そんなことは我々として百も承知。そうではない。そうではないのだ、ストレイツオ殿。我々が目指すところは、波紋法の一般への普及である」

「一般への普及……ですと？ それは不可能だ、少佐。波紋とは、長きに渡る修練によって身につける技術。そこには才能による格差が厳然として横たわっている。誰もが扱えるものでは決してありませんぞ」

ストレイツオの物言いに、それまで真顔を貫いていたゾルがわずかに笑った。

いや、これは嗤ったのか。ストレイツオはそう認識した。

「不可能ではない！ なぜなら、我がナチスドイツの科学は世界一！ それがたとえ神秘の中にあるものであろうとも、余すところなく解析しッ！ 当たり前前のものへと落とし込んで見せよう！ 必ずやッ！」

その言葉に、嘘偽りはなかった。いや、信じているからこそその断言と言うべきか。

ともあれストレイツオは、語気を強めたゾルの言葉に、彼が心底祖国の力を信じていることは理解した。

そして、そのために波紋というものを科学的に調べようとしている、ということも。

できるのか？

いや……問題はそこではない。

自らが苦勞して身につけ、この道を長く歩んできた。迫り来る老いから逃れようと、今ももがいている。

——にも関わらず、なんの努力もしていない人間がその道を踏破したいだと？

そんなことは到底認められるものではなかった。

だが。

「……そういうわけだ、ストレイツオ殿。だがそのためには、まず波紋法とはなんたるかを知らねばならない。だからこそ、波紋使いを貸していたいただきたいのだよ」

再びゾルが、にやりと笑って手を横に掲げる。

瞬間、すべての兵士が鉄の規律でもって、同時に銃を構えた。

「何、トップである貴殿に来说いと言っているわけではない。そうであれば非常にありがたいが、我々も鬼ではない。それなりの使い手を、せいぜい数人で良いのだ。……賛同していただけますな？」

四方八方から向けられる、無数の銃口。その前では、肉体を極めた波紋の継承者であろうと口をつぐむしかなかった。

18. ロンドンのジョセフ・ジョースター 上

近衛兵と警察により、厳戒体制が敷かれたバッキンガム宮殿。夜にもかかわらず煌々と光が交錯し、さながら真昼の様相を呈している。なぜ年明けのバッキンガム宮殿で、ここまで厳重な警戒網が敷かれているのか。

答えは簡単だ。王室の資産の中からとある宝玉を盗む、という内容の予告状が届けられたからだ。そして指定された日時こそが今日なのだ。

暗号めいた予告文は難解なもので、近衛隊も警察も解読に時間を要したものの、時間切れの前には間に合い、こうして警戒網が敷かれたというわけである。

だがこれがただの予告状であるなら、ここまで警戒されることはなかっただろう。仮に王室のものが狙われているのだとしても、もう少し穏当なものになっていたはずだ。

そうならなかった最大の理由は、差出人にある。踊るような達筆の末尾に記されていた名前は、すべてのヨーロッパ人にこれほどの警戒をするに値する、と思わせるに十分だった。

アルセーヌ・ルパン二世。それこそ、送り主の名前である。

このことは厳に秘匿され、一部の人間が知るにとどまるはずだった。しかしルパン二世は、同様の予告状を王室のみならず報道各社にも送りつけており、ゆえに今回の件は完全に熱狂的な騒動へと発展した。

かつて世間を賑わせた、フランスの大怪盗アルセーヌ・ルパン。何度も逮捕されながらもその度に脱走し、正体が明確には暴かれていない希代の怪盗が戻ってきたのだ。メディアも大衆も黙っているはずがない。

しかも、これ見よがしに追加された「二世」の文字がより人々の想像をかき立てる。

おかげでここ数日の新聞各社は、連日一面記事をルパン特集で埋め尽くしており、政治的なニュースなどはすっかり後ろへ追いやられて

いる始末だ。

結果、メンツを既に潰されかけている警察は殺気立って宮殿に入ろうとし、近衛兵たちと一悶着もあったが、それはともかく。

王室を守る近衛兵も、最終的な目的は同じである。多少の紆余曲折はあったが、両者は協力してルパン二世に対することとなったのだった。

今この場を満たしているのは、緊張感。ほとんどのものが物々しく、鋭い目で周囲を見張っており、誰にも気づかれることなくここに侵入、あるいは脱走できるものなど、一人もいないだろう。

しかし。

ふわり、と人影が上空を駆ける。夜闇に馴染む黒の夜会服に、同じく黒のシルクハット。そして顔を隠す銀色のマスカレイドマスク。あまりにも特徴的すぎ、平素であれば確実に人目を惹く影は、背中にハンググライダーを負っていた。

アルファイが見たら前世と違うと思うだろうそれが、緩やかに宮殿の上に降り立った。同時に、微かな音と共にハンググライダーが閉じる。

「ひゅー、まさかここまで人が集まるとはなあ。最後に親父が活動したのは十年以上前のはずなんだがねえ……ルパンのネームバリユートてなあここまでのもものなんだな」

人影……ルパン二世が驚きと誇らしさをないませにした口調でひとりごちる。

まさに今、彼の視界はほぼすべて人で埋まっていると言っている。そのすべてがルパンの名前によって動かされているのだから、彼の言いようも無理からぬことだろう。

だが、仮面に隠れていない部分が若くとも。実際その見た目通りの若造であっても、彼は大怪盗ルパンの技を受け継いだ男だ。気負いはない。

彼はすぐさま動き、するりと宮殿の中へと潜り込む。近衛兵の一人を物陰に引きずり込むと、瞬く間にその顔を模倣して成りかわる。

やがて、夜であればまず見間違えることのないレベルの変装をま

とつたルパン二世は、悠々と警備の輪の中に加わった。

加わりつつも少しずつ輪から外れるように立ち回り、どんどん目当ての場所に近づいていく。

気づかれた様子はない。彼はなおも宮殿内を進み続ける。その足取りに迷いはない。

何せ、今回は様々な事情から宮殿内の地図や巡回ルートなどが筒抜けだ。既にアルセーヌ・ルパンを襲名している二世がヘマをするような状況ではなかった。

かくして二世は、余裕綽々で宝物庫までたどり着く。こちらも嚴重に固められているが、彼の予想を上回るものではなかった。むしろ相次に緩い。

だがこれも仕方ないところがある。というのも、暗号解読に時間がかかった警察は、何が狙われているのかが本当に直前までわからなかったのだ。なんとかものがわかったとしても、今度はそれがどこにあるのか、どういう形で保管されているのか、確認するのにまた戸惑った。動かすべきか否かでも揉めた。

これについては警察側と宮殿側の連携不足によるものだが、いずれにせよ二世は運が良かった。幸運の女神は今、確かに彼に向けて微笑んでいる。

「これか……なるほど、美しい紅玉だぜ。細工も素晴らしい」

そして彼が手を伸ばしたものだ。それは、太陽の形に浮き彫りを施された赤い宝石だった。

ルパン一家に対する貸しを許容した依頼主によれば、その名をレツドサン。まさに名前通りの逸品であった。

だが二世は、その美貌に見惚れて我を忘れるような二流ではない。すぐさま特注の布で二重に覆って懐……から取り出した深緋の本に入れると、急ぎながらも急ぎすぎないペースで宮殿から脱出する。

帰路について、特筆すべきことは何もない。往路と同じく鮮やかで、芸術的な移動とだけ言えば十分である。

だが、屋上からハンググライダーで飛び立ち、宮殿から少し離れたところで二世を襲った出来事は、まったく埒外のことであった。

「!?」

何かが二世の横を猛烈な勢いで通り過ぎ、ハンググライダーに穴が開く。結果、彼は墜落することになった。

無論、彼は慌てることなくハンググライダーを切り離れた。足からの着地はできなかったが、父譲りの受け身で二階ほどの高さから飛び降りる程度まで衝撃も殺して済ませる。

しかし、解せぬと彼は眉を潜める。立ち上がりながら周囲を見渡せば、そこはかつて食屍鬼街オウガイストリートと呼ばれていた場所だった。街灯の類はまだ少なく、全体的に暗い。積もった雪もほとんどそのままになっており、移動するには少々面倒だろう。

そしてひとしきり確認を終えた二世が異質な気配を感じて振り返れば、そこには真紅の瞳をキラキラとたぎらせて佇むアラブ系の男がいた。

「……何者だ?」

「答える義理はないな。何せ、これからお前は死ぬのだから」

問答は無用であった。男は二世にはまるで取り合わず、一気に距離を詰めて貫手を放ってきたのだ。

その勢いはまるで銃弾のようで、とても常人に認識できるものではなかった。

だが二世は、多少の幸運と培った技術によってギリギリで対処して見せた。

対応する方法は知っていた。父仕込みのジパングの技が冴えたのである。

しかし、タイミングはほとんど偶然であった。

「ぐう!?!」

そして彼は、その偶然に感謝することになる。かすりすらしていないのに、全身に強烈な衝撃が走ったのだ。

彼の身体は大きく吹っ飛び、街路灯に背中から激突する。明らかに人間の力ではなかった。

「て、テメー……吸血鬼か! 親父から聞いたことはあったが……まさかこんなところで出くわすとは……!」

「今の攻撃を避けたことは褒めてやろう。俺様の正体を看破したこと
もな。だが幸運は続くものではない。だからこそ幸運と言うのだ」

男が近づいてくる。真冬であるにもかかわらず、吐息がまったく白
んでいない姿は異様だった。にたりと笑った口元からのぞく牙も。

しかし、二世は恐怖しない。諦めない。相手が吸血鬼だろうとなん
だろうと、こんなところで終わるなど、己の家名はもちろん矜持が許
さなかった。

だから彼は立ち上がる。化け物相手であろうと不敵に笑って見せ
る。

そして、啖呵を切って見せるのだ。

「吸血鬼」^{（一）}ときが粹がるんじゃあない。ふん、ちようどよかった。初
仕事があんまりにも簡単に退屈していたところだ、ちよいと遊んでや
るからかかってこいよー！」

同時に彼は、「怪盗『紳士』」と呼ばれた父のように振る舞えない
なあ、と思いつながら懐からあるものを取り出す。

吸血鬼は彼の啖呵を嘲笑って、それをとめることはなかった。

その慢心を見て、二世は勝利を確信する。ただし口にも、態度にも
出すことはなく。

代わりに彼が出したもの——懐から取り出したものは、一見すると
本のものであった。

いや、実際それは本の機能を持つ。だがそれはメインではない。こ
れの最大の機能は、そうではないのだ。

「トレジャー・オブ・タイム」

二世がその名を告げる。同時に、深緋の表紙に描かれた紋章に手の
ひらを当てて、すぐに離す。

『こんばんは、アルサーヌ様。お会いできて嬉しいです』

すると、どこからともなく女の声が響いた。フランス語だ。

直後、勢いよく本が開いて無数のページが自動でめくられていく。

それを見て、吸血鬼は目の色を変えて身構えた。明らかに超常の変
化だったから、無理からぬことではあるが。

しかしもう、遅い。

二世は、その中の一ページに指を挟みこんで動きを止めた。

『はい、旦那様。ルパンコレクション、第三十三番。【プロンジー】起動します』

再び女の声が響く。

すると次の瞬間、本の中から紫色を基調としたイルカのような、機械的なフォルムの物体が三体现れた。いずれも生命力の像（サイジョン）であり、知るものはこれをスタンドと呼ぶ。

対する吸血鬼は、身構えたのに何も起きなかったことに怪訝な表情をする。

当然だ。なぜなら、スタンドはわずかな例外を除いて、スタンド使いにしか認識できないのだから。

そしてこの吸血鬼は、そうではない。

二世もまた、反応を見てそうだと判断した。

だからと言って手加減などしない。彼は指で鉄砲を形作ると、立てた人差し指を吸血鬼に向けた。

「行け【プロンジー】！」

同時に指示を下す。

瞬間、三つの像が勢いよく飛び出し、吸血鬼を襲った。

「ぬう!?!」

人ならざる男は、しかし生き物ですらないそれを認識できず、後手に回る。

だがそこは吸血鬼だからか、寸前で不可視の何かがあるらしいことに気がついて身をよじった。

結果、喉元を狙って飛来した一体は狙いを外したが、残りの二体は狙いを過たずそれぞれ脇腹と膝頭を噛み砕く。

ただの人なら、これでほぼ勝負はついたと言えるだろう。片方とはいえ脚の要を砕かれてしまつては、もはや立つことも難しいはずだ。実際、男もバランスを崩してふらついた。

しかし、それだけだった。

すぐさま男の出血はとまり、怪我も癒える。そうしてぐいと立ち直り、にたりと笑って見せたのだ。

「妙な技を使うようだな……だが、所詮人間の小細工よ」

「……うーむ、さすが吸血鬼つてどこか。この程度じゃあなんともありません、ってか？」

ぎしりと男の笑みが深くなる。

だが二世としては、これくらいは想定内。だからこそ、己が繰り出したスタンドを操り、今度は絶え間なく四方八方から襲わせる。

これを受けて、吸血鬼は数秒その攻撃に対応……しようとしたが、数度の打撃を受けるや即座に防御を諦め、二世に突っ込んだ。

スタンドを持たないものが、スタンド使いに対抗する戦術として極めて正しい選択である。何せ、スタンドにはスタンドでなければ触れることすらできないのだから。

ゆえに狙うならば、本体。これはスタンドの有無にかかわらず、スタンド使いと戦う際の鉄則と言える。吸血鬼はそれをたった数秒で看破したのだ。

しかし、やはりスタンドを持たないものがスタンド使いに対抗するのは難しい。

「おっと危ねえ」

「ぬ!?!」

吸血鬼の手刀が二世の首を刎ねんと風切り音を響かせる、その直前。

二世は彼の背後に回っていたスタンドの一体に首根っこをくわえられ、かと思うとそのまま地面の中に引きずり込まれたのである。彼が地中に消える瞬間にはまるで水面のように波紋が広がって、硬いはずの石畳がかすかにうねった。

そして吸血鬼の後ろに、やはりスタンドに引っ張られた状態で、水面から跳ね上がるようにして二世が現れる。

彼はそのまま残る二体のスタンドに左右を支えられると、さながらイルカにまたがったかのような趣で地面や壁を伝い、この場から離れていく。

「あばよ吸血鬼のあんちゃん!」

「な!?! 逃げるのか! あれだけ偉そうな口をきいておきながら!?!」

「あつたりまえだろ！ こちとら泥棒なんだ、ヴァンパイアハンターは本職じゃあないんでね！」

笑い声が遠ざかっていく。あちこちに残響するそれは、彼の居場所を辿っていく手がかりには向かない……が。

「舐めやがって若造が……！」

吸血鬼には関係のないことだ。彼は全身をわななかせると、下半身に力を込めて遠ざかる二世の声に向けて飛び出した。

その先には、粗末ではあるが建物がある。あつたが……そんなものは関係ないとばかりに、吸血鬼は突っ込んだ。

轟音と共に壁に穴が空き、そのまま突き進む。途中で何人かと室内ですれ違ったが、ぶつからなければ無視し、ぶつかったならそのままついでに喰らって走り続ける。

「そこか！」

そうして、吸血鬼は二世に追いついた。吸血鬼のフィジカルでゴリ押した、とも言う。しかしそれができてしまうからこそ、吸血鬼は恐れられるのだ。

悠々と地面と壁面を泳いでいた二世は、この無茶苦茶なやり方に目を剥く。

「げえっ、マジかよ!? できるからって、普通建物ぶち抜いてくるか!?」

「些事だな！」

「大事だろ!? あーっ、親父が吸血鬼に関わるなつつつたのはこういうことかよ！ お前倫理観とかないわけ!?!」

「知らんな！」

吸血鬼の拳が振るわれる。

二世は慌ててその壁面から離れて向かいの壁面へと飛び込んだが、直前までいた壁はいとも容易く粉碎された。

（おいおい冗談じゃねーぞ！ 周りにまだ警察やらなんやらがウヨウヨしてるってのにー!）

負ける気はしない。父から受け継いだスタンドを駆使すれば、間違いなく勝てるだろう。

だが二世の目的はあくまでレッドサンの奪取と速やかな帰還であり、吸血鬼を倒すことではない。

むしろここで吸血鬼退治に精を出すと、まださほど宮殿から離れていないせいもあってすぐに見つかってしまおう。吸血鬼に至っては忍ぶつもりがまるで見られないし、やればやるほど二世の目的は遠ざかる。

(さてどうしたもんか……)

紙一重の逃亡を続けること十数秒。どのみちそろそろタイムリミットであることだし、違うスタンドに切り替えるかと考えていたときだった。

「おい！ こっち、こっちだ！」

飛び込んだ路地の辻で、二世を招く手と声があった。まだ若い二世の声よりもなお若い声で、声変わりにはしているようだが明らかに幼さが残る。

しかし強い意思を感じる声でもあった。二世の泥棒としての勘が、行けると告げていた。

だから二世は、躊躇うことなくその招きに乗ることにした。スタンドに守られながら、手が招くほうへと迷いなく飛び込む。

「こっちだぜ！」

現れたのは、やはり少年だった。ただ、少年と言うにはかなり体格がいい。発展途上のはずの肉体は既に厚く、将来は間違いなく巨漢になるだろう。

だが顔つきや、何より眼。そこに宿る、理知的ながらもキラキラと光が踊るような色合いの眼は、間違いなく少年のそれであった。

そんな少年は、二世が並んだのを見るやとも走りに始める。

スタンドを消し、本も閉じて懐にしまいながら、二世は彼に声をかけることにした。

「よう少年！ ノった俺が言うのもなんだが危ねえぞ？」

「任せとけて！ こう見えてもケツコー実戦経験豊富なんだぜ！」

「そいつあ頼もしくて涙が出るね！ だがさすがに吸血鬼との実戦経験はねーだろ？」

「ないなあ！　ないけど、知識としては知ってんのよこれが！」
にひひと笑った少年の口元から、特徴的な音が響いてくる。

音にするならコオオオオ……とでもするべきそれに、二世は覚えがあった。彼の表情が変わる。

「それは、……まさか少年、その歳で波紋を？」

「お？　もしかして波紋をご存知？」

「習得はできなかったけどな！　うちの一族は波紋とは違う流派でね！」

「マジ？　それはとつても気になっちゃうなア……ま、でもそういうのは後回しかな！」

どごん、という建物がぶち抜かれる音が後ろから響いてきた。二人してちらりと視線を向けてみればその通り、そこには吸血鬼が建物を破壊しながら猛スピードで突進してきている。

顔は凶悪に歪んでおり、正面にあるものはすべて破壊する、と言いたげな威圧感がそこにはあった。

あつたが……二世はもちろん、少年もまるで動じていなかった。そして改めて前を向き、

「ごっちん！」

少年の指示通りに、さらに狭い路地へと飛び込んだ二人。

やはりそれを、最短距離で踏破する吸血鬼。

そしていよいよ追いつかれる……となったところで、少年がしかけた。

「行くぜ！　ホラご一緒に……せーのツ！　ホップ！　ステップ！

ジャンプ！」

言うなれば一二の三、と言ったところか。

そんな調子で、二人は同時に大きく跳躍した。そして、かなりの距離を跨いで勢いよく着地する。

すると、その衝撃に反応してか、周辺に一気にロープが出現した。雪の中や物陰などに伏せられていたのだろう。その出来栄は実のところさほどではなく、第三者目線で鬼ごっこを見ていればすぐに気づける程度のものでしかなかった。

しかし鬼ごっここの当事者にとっては……特に鬼をしていた吸血鬼には、突然ロープが現れたように見えた。彼はそのまま吸血鬼は身体を絡め取られていく。

これが投石の類であれば、素直に蹴散らせただろう。しかし柔らかくしなやかなロープは単純な力で破壊できるものではなく、少なくとも臨界を迎えるまではぐにやりと動いて吸血鬼を捕縛した。

「ぐぬっ、なんだこれは!？」

「ホオー、こいつは見事だ。これは少年が？」

「まーねえ！ ちよいとロープの扱いには自信があるのよ……ひひひ」

そんな吸血鬼の姿を遠巻きに眺めながら、振り返った二人は呑気に言葉を交わす。

吸血鬼にしてみれば、まったく癩に触る光景だった。彼の額に青筋が浮かぶ。

彼は身体に力を入れた。文字通り人外のエネルギーが働き、一気にロープが引きちぎられていく。

そうして再び自由になった吸血鬼は、更に勢いづけて飛びかかった。

——が、少年は動じない。むしろ不敵に微笑み、人差し指を吸血鬼に向けて見せた。

「お前は次に、『こんな小細工をしても無駄だ』と言う」

「こんな小細工をしても無駄だ! ……はッ!？」

少年の予言めいた物言いに、吸血鬼が見事に乗せられた。しかしすぐに気を取り直して、標的を少年に切り替える。

「次のセリフは『舐めやがってお前からぶっ殺してやる』だッ」

「舐めやがって! お前からぶっ殺してやるッ!」

今度は吸血鬼も反応しなかった。

しかしそれならば、最初からしないでおくべきだった。彼は既に、少年の術中に落ちている。

少年が、いつの間にか手にしていたロープを勢いよく引つ張った。すると、ちぎれたはずのロープがぐんと伸び上がり、再び吸血鬼を拘

束したではないか！

「な……っ、何イコツこれは!?!」

「この辺は街灯も少ないからなアーツ、道端の暗がりにはちやあんと気をつけておかないと痛い目見るぜ！ 雪の中なんて特にねエーツ！」

「くっ、この……ッ！」

「さくららに〜？ ダメ押し、行つちやうよオン！」

コオオオオ、と波紋の音が響く。

吸血鬼の目が見開かれる。

「波紋疾走！」

太陽の衝撃が少年の手から放たれ、ロープを伝い、吸血鬼を襲う。

雪の中に隠れていたロープだ、水分はたつぷり吸っている。であれば、波紋が伝わるのは容易い。

「があああああ!!」

波紋が入ったとき特有の衝撃音が鳴り響き、ばたりと吸血鬼が倒れる。その身体は、既に溶け始めていた。

ひゆう、とそこに口笛が鳴る。

「やるじゃん！ 見事な手品だったぜ少年！」

「でっしょオ？」

二世の手放しの賞賛に、少年は笑って振り返る。

彼を迎える形となった二世もまたにやりと笑い、やや畏まって声をかけた。

「少年、名前は？」

「ジョセフ・ジョースター」

問われて名乗った彼は、やや乱れた前髪をぐいとかけ上げて、笑みを不敵に深める。

「J O J O っと呼んでくれ、ルパン二世さん！」

19. ロンドンのジョセフ・ジョースター 中

「オーケーJ O J O、助かったぜ。礼を言う」

名乗った少年——ジョセフに対して、ルパン二世が朗らかに笑う。「どういたしまして。俺としちゃあ、噂の怪盗さんをこの目で見てみたかったってエだけなんだが、まさか吸血鬼が出てくるとは思ってもしなかつたぜ」

「……と、言いつつまだ残してるロープは何のために使うんだろうなあ？」

頭の後ろで手を組んで笑っていたジョセフだったが、二世が言いながら足元のロープを引っ張って見せたのを受けてぎよつとした。

それは間違いなく、二世を捕獲する形で伏せられている。

「ウゲツ、バレちった？」

「仮にも俺アルパン二世様だぜ？ これくらいは朝飯前よ。……それと、これがただの見せ球のフェイクで、後ろにもう一発隠し球があることもわかってるから下手なことはせんよーにな」

「あらら……さすがは大怪盗ってトコか。ちえつ、俺が捕まえれば知名度アップ、キャワイイ女の子にもモテ放題！ だと思っただけだなアーツ」

あつさりと仕掛けに気づかれたジョセフは、ふてくされた様子で口を尖らせる。

その態度に、思わず二世はくつくつと笑った。

即席ながらも見事に二世を救っておきながら、状況が変わり次第すぐに捕まえようとしている辺り、まったく油断も隙もあつたものではない。

だが、そんなジョセフの態度は二世にはむしろ好ましく映つた。これらの悪ガキも同然と多くの人は思うだろうが、実のところ二世自身も似たようなものだ。ある種の同族意識が、二世の態度を軟化させたのだ。

「とはいえいい線は行つてたからな。もし機会があつたらまた会おうぜ、J O J O！」

「ま、しゃーないね。今回は潔く諦めてやるけど、次はとっ捕まえてやっからな！」

「ハハハ、それじゃあ楽しみにしようかな！」

そうして両者の短い邂逅は終わった。二世はばさりとマントを翻し、夜の闇の中に消えていく。

それを見送ったジョセフは、その場に残された仕掛けを解除し始めた。

が……その数分後、わりと近いところから派手な破壊音が聞こえてきて、目を点にした。

おまけにそこにまたも二世が現れたのだから、きよとんとする他ない。

「ようJ O J O、さつきぶりだな！ 早速で悪いンだが、もっかい波紋使ってくんない？」

「短い別れだったな!? いやそんなことより……」

明らかに慌てて、しかも後ろを気にした様子の二世には思わずジョセフが聞き返そうとした、その瞬間だ。

高い風切り音と共に、何かが飛んできて周辺の建物を真横に切り裂いた。

それは間違いなく、二世の首周辺を狙った軌道を描いて……しかし、寸前にかがんだ二世はなんとか無事だった。

「な、なんだアーツ!？」

「やっべ、もう来やがった！ おい言ってる場合じゃねえ、逃げるぞ！」

ジョセフの問いに答えるものはいなかった。

代わりに二世は寸前に発動していたスタンド「トレジャー・オブ・タイム」により、起動したルパンコレクションがジョセフごとこの場から消し去ったのだ。

しかし、いなくなったわけではない。二人はあくまで周囲から認識されなくなっただけで、位置は変わっていないのだ。

より正確に言うなら、二人はネズミよりもなお小さいサイズにまで縮んでいた。

「な、なんじゃあこりやあーッ!?!」

「おいコラ、あんま騒ぐな! 相手は吸血鬼なんだぞ、小さくなくても声出したら聞こえちまうだろ!」

「Oh, GOD……」

言われてジョセフは、慌てて両手で口をふさぐ。

そのまま二人、連れ立ってこの場を離れようとするが……小さい身体ではなかなか距離は稼げない。

そうこうしているうちに、それまで二人がいた場所に男が一人、現れる。フードつきのマントで顔を隠していたが、下から見上げる形になっている二世たちにはよく見えた。

スラブ系の顔立ちだった。鋭い目つきはいかにも堅気の雰囲気ではなく、この寒気の中、白む気配のない呼気がそれを際立たせる。

彼はその状態で、しばらく佇んでいたが……。

「……ネズミや虫とは異なる気配がある。瞬間移動ではないようだな」

そう呟くと、正確に二世たちのいるほうへと目を向けてみせた。

「そこか」

「ゲッ、バレてる!?!」

「どーすんだ二世さんよ!?! こんなサイズ差あったら踏まれてオシマイだぜ!?!」

「どうすっかなーッ、いやマジでどうすっかなーッ!?!」

「言つとる場合かよオーッおいーッ!?!」

二世の首根っこをつかんでがくがく揺するジョセフと、それに逆らうことなくされるがままの二世。

そんな二人を正確に狙って、二条の閃きが襲った。

直前、二人は驚異的な反応を見せて跳びすさり、それをすんでのところで回避する。がりがり石畳が削れる音が響き、大量の破片が宙に舞い上がった。

「なに……?」

「なるほど、目から発射する光線ってところか?」

「ってことね。タネわかつちったなア!」

悠然と着地する二人。ただ攻撃を回避しただけではなかった。直前の攻撃で舞い上がった石畳の破片を受けないよう、二人とも位置取りを絶妙に調節している。

その様子に、スラブ系の男も警戒を深めた。

「タネはわかったがJ O J O、どうするよ？」

「そー言いつつ、二世さんも腹は決まってるだろ？」

「そりゃあな。何せ俺は泥棒さん。戦いなんてのは専門外なもんで」

「だろうねエーツ。そんじやま、いつちよやりますか？」

「ああ。思いつきりやつてやろうじゃないの」

やけに大袈裟な身振り手振りをするジョセフに応じて、やはり大袈裟な身振り手振りで応じながらも、二世がスタンドを切り替える。

腕についていた、緑色の矢印が描かれた赤銅色の小さな盾。それが消えると共に二人の身体が元通りになっていき、同時に赤い刀身の短剣が二世の手に握られた。

「見えんが……複数の能力を使うスタンドということか。これは生まれたての吸血鬼ではどうにもならんな。我輩も油断は禁物……一気に決めさせてもらおうぞ」

言うや否や、男が一気に踏み込んでくる。彼が踏みしめた部分には靴の形状に凹み、ただの人間では到底不可能な速さへと一気に到達した。

だがそれを見るよりも早く、ジョセフと二世は同時に走り出した。男に背を向けての全力疾走。すなわち。

「全力でツ！」

「逃げるツ！」

「Ye a h h h h h!!」

この場からの速やかな逃走であった。

「ふん……いいだろう、どこまで逃げられるか試してやろう！」

とはいえ、二人ともただの人間でしかない。追いつがる男……吸血鬼の身体能力を前には、すぐに追い詰められてしまう。

だがそんなことは二人とも理解している。理解してなお逃げたのは、もちろん意味あつてのこと。

「死ぬがいい！」

「やーなーこったー！」

二世に詰め寄った吸血鬼の拳が、一直線に彼に放たれる。

だが。

「逃亡せよ
【リヴァジョン】！」

「何!？」

寸前、二世が短剣を振るったかと思うと、吸血鬼の拳は真横に方向転換した。攻撃の勢いはまったく変わらなかったで、彼の身体はそのまま流され家屋へと突っ込み、当たり前のように家屋には穴が開き、降り注ぐ瓦礫を浴びる。

そんな彼を尻目に、二世とジョセフは遠慮なく距離を開けていく。

「ヒュー、トレビア〜ン！」

「メルシーボクウ。……とはいえどうするよ？ 言われた通り行先は任せてるが……」

「ま、そこは地元民にお任せあれ、ってね……ところでそのなんか攻撃逸らしてる……技？ でいいのか？ そいつは反射はできねーの？

できたら俺もめんどっちーことしなくて済むんだけど」

「いやー困ったなーッ、もつと遅けりやできるんだけどなーッ、俺もなーッ！ でもあの速度だからなーッ！」

「ンだよ微妙だなーッ!？」

「微妙言うなコラア！ 親父から受け継いだ由緒正しいルパンコレクシオンだぞー！」

「たった二代で由緒もクソも……つと!？」

背後から、無数の瓦礫が飛んできた。その奥には、両手に大量の瓦礫を握り締めた男の姿。吸血鬼の膂力で放たれた瓦礫は、もはやショットガンにも匹敵する威力を秘めている。

だが、それも当たらなければ意味がない。二世が再度短剣を振るえば、瓦礫の雨はすべて見当違いの方向へそれていく。

しかしそれを見越してか、吸血鬼はにやりと笑いながら突っ込んでくる。再び放たれた瓦礫の弾丸を盾にするように。

「やっべ……!？」

弾丸と吸血鬼。どちらかを逸らしたら、どちらかに対処する時間を確保できないことに気づき、二世の顔が引きつる。

それでもまずは、とばかりに弾丸を逸らし……やはり追隨してきた吸血鬼に対処しきれず拳が二世を襲った。

「おっさん！ 二世ばっかり狙って、俺のこと忘れてもらっちゃあ困るぜ！」

「……い・チー！」

しかし拳が当たる直前、吸血鬼はジョセフのキックを強引に体勢を変えて避けた。

無理な動きに重心が派手にブレ、走るスピードも大幅に落ちたが、丸太のような脚に宿る黄金の輝きを前にはそうするしかなかったのだ。

「ジョセフ・ジョースター……ジョナサンの血だけでなく、波紋の才ま

で受け継いだか！ その歳でなんとという波紋量か……！」

多少の波紋であれば、男もダメージ覚悟で攻撃を続けただろう。しかしジョセフが放った波紋は、明らかに致命傷になり得る強さを持っていた。

男はそこに、かつて見た波紋戦士の姿を幻視する。タルカスやブラフォードのみならず、若くして吸血鬼としての頂点に立ったディオをも滅ぼした誇り高き戦士の姿を。

「そりゃーおじいちゃんに散ツツしごかれたからなあ！ 行くぜ、ズームパンチッ！」

ぐんと腕が伸び、分厚い拳が吸血鬼を襲う。一瞬で詰め、また詰められた距離を、しかし彼は後ろへ跳ぶことで回避する。

ジョセフはそれを追わない。回避されることは織り込み済みで、最初からこのスキに再び逃げるつもりだった。彼は二世と並んで、暗い貧民街を駆けていく。

「遠くからでは蛙食いに散らされ、近づいたらジョースターが波紋で割り込む……即席のくせにやりおる。だが……！」

再び走る速度を上げて、吸血鬼の目がギラリと怪しく光る。

「波紋への対処法は完成している……約五十年前に、な……！」

その目から光線——正史において、吸血鬼と化したストレイツオによって空裂眼刺驚と名付けられる攻撃を放ちながら、吸血鬼が一気に距離を詰めていく。

さらにその辺りの壁を手でこそぎ取り、レンガを手の中に収める。そのまま握り締めて粉々になったレンガは、次の瞬間即席の散弾として放たれた。

「危ねッ！」

「ほらよっどー！」

だが光線は二世に、レンガの散弾はジョセフによって防がれる。

ジョセフもまた逃走中、地面に積もった雪を手中に収めていた。雪に波紋を宿して空中に散布して、即席の壁としたのだ。

そして殴りにかかった吸血鬼を、ギリギリのところまで二世が逸らす。今度は横ではなく真上だ。

物理的にありえない軌道を描いて、男は空中に跳ね上がる。空中を移動する手段を持たない以上、それは明確なスキだ。

「ぬううううー！」

しかし男も吸血鬼。踏ん張りが利かず、身動きの取れない空中であつても首から上を動かさず、視線を使って攻撃を放つ。

スペースリバー・ステインギアアイズ
空裂眼刺驚。高圧の液体が、袈裟切りに二人を襲う。

「ど……っせえいー！」

「いでッ!？」

それが直撃する寸前、二世は跳びながら横に並ぶジョセフを思いっきり蹴り飛ばした。その反動で両者の間隔が広がり、あわやというところで直撃を回避する。

しかし完全にはかわし切れず、二世は浅くだが肩を切り裂かれた。

「二世ー！」

「これくらいどうってことねえよ！ それよりJOOJOー！」

「……！ おうー！」

二世に蹴り飛ばされ、しかししっかりと体勢を整えて地面を踏んだジョセフ。彼が立ったその場所に、吸血鬼が降りてくる。

コオオオオ……と波紋特有の呼吸音が一際大きく響く。同時に

ジョセフは、吸血鬼の完全な死角となる位置へ動き……そして、
オーバードライブ
「波紋疾走！」

斜め後ろから、吸血鬼の身体を全力の拳でかち上げた。

波紋が弾ける音が派手に響き、衝撃が吸血鬼の身体を吹き飛ばす。

「よっしー！」

その光景に、二世は思わずガッツポーズを取るが……。

「い……、いや……！ や、……やれてねえ！」

拳を振り抜いた姿勢のまま、ジョセフは冷や汗をかいていた。勝った、などとはまったく思っていない強張った顔をしている。

彼が恐る恐る姿勢を戻して殴った手を見ると、吸血鬼が地面に落ちるのは同時だったが……。

「こ、これはッ！」

「な……!?! 凍っている、だと……!?!」

ジョセフの右手が、凍り付いていた。その事態に、二世も目を剥いて驚愕する。

「ば、バカな！ こいつは、こいつはまさかッ!!」

「そのまさかだ」

思い浮かんだ心当たりでジョセフが戦慄し、それに応じる声が響く。

吸血鬼がゆらりと立ち上がり、今まさに殴られた箇所を手でさすっていた。そこに、波紋傷は欠片も見当たらない。

「気化冷凍法ッ！ だとッ!?!」

「いかにもその通り。触れた箇所の水分を気化させ……その急激な気化熱で腕を凍らせた！ お前の祖父ジョナサンを苦しめた男の技だ！」

「お前も使えるのか……！ なんてこった……!?!」

「接触部の水分を気化させる？ しかも気化熱で凍らせる!?! いやその理屈はおかしいだろうッ！ なんでもありか吸血鬼!?!」

「それを貴様が言うのか、蛙食い？ スタンド使いの貴様が?」

「確かに!!」

「納得してんじやあねーよッ!?!」

はっとした顔をする二世に、凍った手でツツコミを入れるジョセフ。

戦闘中とは思えない空気だが、それも一瞬のことだった。

「これで波紋は効かん。終わりだ！」

「……逃イイげるぞJ O J O オーツ!!」

「言われるまでもねえーツ!!」

地面を勢いよく蹴った吸血鬼に対し、二人もまた同時に地面を蹴った。

命懸けの逃走劇が、再び始まる。

20. ロンドンのジョセフ・ジョースター 下

「——で、どうするよ?」

夜闇の中、駆け続けるジョセフとルパン二世。絶賛逃亡中の彼らだが、当然闇雲に逃げているわけではなかった。

「任せてくれ。あの目からの光線は大体察しがついてンのよ。凝縮した体液を目から一気に発射ッ! 実際に昔あれを見たおじいちゃん
が言ってたんだ、間違いないだろ!」

「ほう、それで?」

「体液だぜ? それなら波紋でどうにかなるさ。だからわざとあいつに撃たせて、凌いだスキを狙う! これで決まりだぜーッ」

作戦を話し合いながら、ジョセフ主導でスラムを疾走する。

今のところ、二人に目立ったダメージはほとんどない。何度か追いつかれ、その度に二世がスタンドを駆使してあしらい、を繰り返している。

攻撃の軌道を乗り換えさせる【リヴァジョン】は既に稼働限界まで使われ、最低でも向こう一日は使えない。そういう制約のあるスタンドなのだ。

だが、汎用性については恐らくスタンドの歴史の中でも随一だろう。やりようはいくらでもある。

今もちょうど、あの小さくなる力を発動させて吸血鬼をまいたところだ。最初のときは自分たちに使ったが、今回は吸血鬼が対象である。これなら簡単に逃げられるというわけだ。

効果範囲外まで出てしまえば元に戻ってしまうので、再度小さくするにはもう一度影響下に置く必要がある他、その範囲がそこまで広がらないのは欠点だが、それでも数十メートルはほぼ一方的に離せるのだから十分と言えよう。

ちなみに、「小さいならこれで瞬殺だぜーッ!」と調子に乗ったジョセフは、踏みつけようとした足を空裂^{スペースリバー・ステインギアアイズ}眼刺^ス驚で貫かれ浅からぬ怪我を負った。小さくなっても、その威力は人を殺せるレベルであった。

むしろ小さいからこそ攻撃の瞬間を認識できなかつたわけで、逃げるに徹するほうが正解と言えた。小さくとも吸血鬼は伊達ではないということだ。

まあ、波紋戦士であるジョセフにとって痛みはごまかせるものなので、走る分には支障はないが。

「スキを狙うのはいいが、俺じゃあいつに致命打は出せねえぞ。頼みの波紋も気化冷凍法とやらで封じられてる。どうするつもりだ？」

「おいおい二世さんよ、そこはこの使いどころってもんじゃあねーか！」

問われたジョセフはニヤリと笑い、自身の頭を人差し指で軽く叩く。

「俺のおじいちゃんは、自分が着けてた手袋を燃やしてあれを打ち破ったって聞いている！ だから俺ア燃やせるものがある場所へ向かってるんだぜーッ！」

「マジかよお前のじいちゃん超ファンキーだな」

普通思いついてもやらないだろ、と肉体的には普通の人間でしかない二世は閉口した。

それについてはジョセフも、聞いたときは思ったものだ。けれど、続けられた祖父の言葉には、ジョセフも大いに納得した。

偉大な祖父は、ジョセフが尊敬するあの紳士たる男は、言ったのだ。『ここで気化冷凍法を破れなければ、ここでディオの野望を阻止しなければ、大切な仲間が、家族が……何よりなんの関わりもない無辜の人々が犠牲になってしまう。そう思ったら、自分のことは頭になかったよ』

幼くとも、表面的な態度は違っても、ジョセフとて祖父と同じく黄金の精神を宿す男だ。同じ状況であれば、自分でもやりそうだと納得してしまったことを覚えている。

しかし、だからと言ってジョセフがジョナサンと同じことをするかと言えば、厳密にはノーである。ジョセフはジョナサンを尊敬しているが、同時に考え方が古いとも思っているのだから。

なぜって、その自己犠牲こそ、ジョセフが尊敬するヨナサンが敬愛する、大おじニコラスの死因なのだ。自己犠牲の精神はすごいとは思いつつも、いざというときはそうすべきと思いつつも、生きて帰って来なければならない意味がない、とも思っているのだ。

だからジョセフは策を練る。そのためなら、どんなに無様と言われようと敵前逃亡だってして見せる。残される家族を悲しませたくないから。

「とはいえ、俺だってできれば自分の手を燃やすなんてしたくねー。だからそいつは最終手段ってやつだ。その前に試せることは全部試すぜ！」

「そーね、それがいいだろうね……」

断言するジョセフに、二世は「他に手がなかったらやるんだ……」と乾いた笑いを漏らした。

「というわけでここだ！」

「……酒蔵？ ははあ、なるほど大体わかった」

そうしてジョセフに連れて来られた建物を見て、二世はキリツと真顔に戻る。

酒。つまりはアルコールである。アルコール度数の高い酒は、ときに燃料として用いられることもある。ジョセフはもちろん、二世もそのことを知っていた。

「で、それはいいけど鍵かかってるだろ。ここ酒蔵、知り合いなのか？」

「そこは泥棒さんの出番ってことぞ？」

「……あー、そういうことね。完璧に理解したわ」

へいへい、と軽口を叩く二世。彼は懐から例の本を取り出し、さらにそこから大口徑の拳銃を取り出した。

「……あの、二世さん？」

「覚えとけJ O J O。いくら天下の大泥棒アルセーヌ・ルパンでも、秒で鍵は開けられねえんだよ」

彼は軽い調子でそう言うと、鍵を無造作に撃ち抜き破壊する。

「うん、急いでのときはこの手に限る」

「Oh, my GOD……」

さながらムンクの「叫び」みたいに両頬を手で押さえたジョセフが、信じられないと言いたげにこぼした。

まあ、右手はいまだに凍りついているので、そちら側は不恰好だったが。

「で？　どれを使うんだ？　燃料に使える酒ってなると、限られるぜ」
だが、そう言わずかずか中に入れていく二世の背中を、慌てて追いかける。

そうだ、今は緊急事態なのだ。だから俺のせいじゃないもんね……と、自己弁護しながら。

「酒のことは詳しくねーけど、とりあえずロシアっぽいやつを探せばいいんじゃないかな」

「ああ……度数の高い酒と言えばウオツカ、ウオツカと言えばロシア、ってことね」

「そーゆーこと。……あ、あとついでにワイングラスとかあったら持つてきてくんない？」

「え、飲むの……？」

「飲まねーよ！　波紋つてのはなーツ、色々できるんだぜツ！」
へへへ、と笑うジョセフに対して、二世はジト目で応じた。

いかにも悪戯小僧、と言った様子だったせいもあつてか、丸つきり信用されていないらしい。いや、戦力としては信用しているのだが、それとこれとはまた別の話である。

ともあれ、酒蔵を物色すること数分。

「おいJ O J O見ろよ、スピリタスがあつたぜ！　こいつで決まりだろー！」

「あ、悪イ二世さん……そりゃ逆に度数が高すぎる」
「おおん!？」

という一幕もあつたが、何はともあれ50度ほどの酒を確保できた。ついでのワイングラスもだ。

手に入れた酒を、酒蔵から出ながらグラスに注いだジョセフを見た二世は「やはり飲むのか……」と言いたげに、引いた顔をしていたが。

しかしそれも、注がれた酒が波紋の呼吸によって生体レーダーと化したとき、すつと引っ込んだ。

「ヤロー、こつちから来てやがんな」

「マジかよ……吸血鬼も大概だけど波紋もわりとなんでもありだな……」

奇妙な冒険に巻き込まれた男の顔には、やや哀愁が漂っていた。

が、それも一瞬。彼とてプロだ、すぐに顔を引き締めると、渡されたボトルを懐に抱きかかえて、ジョセフについて再び街の中に溶け込む。

グラスの中で渦を巻く酒は、特定のほうを示している。それは歩くにつれてだんだん激しくなり……。

「……！ 左上！」

「あいよ……とおー」

ジョセフが叫び、了承した二世ともども跳びのいたその場所を、人外のかかと落としが襲った。石畳は当然のように穴があき、いくつもの破片が派手に舞い上がる。

同時にジョセフは、酒を吸血鬼に叩きつけた。無論、酒にはたつぷりと波紋が残っている。

黄金の輝きを宿したそれを、吸血鬼は舌打ちしつつも回避せず
スベースリバー・ステインキープアイズ
空裂眼刺驚で蹴散らしながら、そのままジョセフを撃ち抜く行動に出た。

波紋を宿しているとはいえ、所詮ただのワイングラスに注がれていた程度の量。二条の直線は小揺るぎもせず、一分の狂いもなくジョセフの喉へ殺到する。

だが、吸血鬼はここで己の失敗を悟った。なぜなら、対面しているジョセフの顔が不敵に笑っていたから。

そしてそれは、現実となる。

いつの間にか、ジョセフはワイングラスを顔の前に構えていた。持ち手を逆手につかみ、グラスの口をまっすぐ吸血鬼に向ける形である。

街灯の頼りない明かりに照らされたそれは、液体と波紋によって確

かに光っていた。

「この俺に！二度同じ手を使うことは既に凡策なんだよツ！」

ジョセフが吠える。

直後ワイングラスの中に吸い込まれた光線は、その形と宿った波紋の性質により破壊の力を解き放つことができないまま、ぐるんと向きを変えて吸血鬼の頭に着弾した。

「ば……」

『そんなバカな』……と……言う！』

「そ……そんなバカな！」

「たとえば波紋が効かないとしても、目の前の波紋使いを放置するほどテーマはマヌケじゃあなかったな。だがな、一撃で仕留めようとするヤツが狙う場所なんて、大昔から相場が決まってるのよ！受けるのは簡単だったぜツ！そしてツ！」

ジョセフが前に踏み込む。彼の年齢に見合わぬ丸太のような太い足が、大地を踏みしめる。波紋の呼吸音が響き渡る。

同時に、二世が懐に抱いていたボトルをアンダースローで放る。

それを、ジョセフの左拳が——砕いた。

中身をほとんど残したボトルから、大量の酒があふれ出す。ラベルに書かれたストリチナヤのロゴがアルコールに飲み込まれ、ちようどそこを拳がぐぐり抜けていく。

そして大量の酒を浴びた拳は。

「ジョセフ・ジョースターツ！さすがジョースターの血を継ぐものと褒めておこう！だが無駄だ！気化冷凍法に波紋は——」

「食らえ！ブツ壊すほど……シユートツ!!」

「——がはあっ!?!」

過不足なく、吸血鬼の右ひじを砕いた。波紋が通る衝撃音がこだまする。

「なん……だと……!?!」

吸血鬼は目玉が飛び出すのではないかというほどに瞠目し、殴られた箇所を……ジョセフの拳を凝視する。

波紋の輝きが、凍ることなく満ち溢れていた。凍らない不自然はあ

れど、普段通りだ。間違いなく、鍛え上げられた波紋が放つ光。

しかしそれは黄金ではなく。

「赤、い……!?」

「スカーレットオールドライヴ 緋色の波紋疾走！ 炎の波紋だぜーッ！」

ジョセフが宣言する。その直後に、ようやく拳が凍り始めた。

「オタク、波紋についてわりと詳しいみてーだが、バリエーションまでは知らねーみてーだな！ 緋色はな……熱いんだぜッ！ へへーん！」

ニヤリと笑うジョセフ。手前に引いたその拳は、確かに凍りついている。しかし先に凍りついた右手に比べれば、明らかに小規模にとどまっていた。

それが意味するところを正確に理解した吸血鬼は、しかし反論することができなかった。

なぜなら、砕かれた右ひじから波紋が全身に回り始めている。このまま放っておけば、数分のうちに彼はこの世界から消えるだろう。

だから、彼は即座に撤退を決めた。左手で手刀を作ると、右腕を自切する。

同時にぼとりと落ち始めた腕を全力で蹴り飛ばし、ジョセフたちが対応したスキを見計らって近場の建物の上へと跳び上がった。

「おっ、なんだ逃げるのか？」

「……口惜しいが、今回は確かに我輩の負けだ。だが貴様に負けたわけではないぞ、蛙食いめ！」

「ハハハ負け犬の遠吠えにしか聞こえねえなあ！」

「抜かしおる……！ だが今は仕方あるまい……我輩はここで死ぬわけにはいかんのだ！ カーズ様のため、アルフィー様のためにも！」
マントを翻し、屋根の上から吸血鬼が声を張り上げる。

そのセリフに、二世が反応した。

「カーズに……アルフィーだと？ おいおい、マジかよ。まさかお前……」

「いずれ太陽の鍵は返してもらおう！ それまでせいぜい余生を楽しんでおくがいい！」

それを最後に、吸血鬼はこの場から大急ぎで去っていった。

残された二人は、しばらく相手が戻ってくるか、なんなら新手がまた出てくるのではないかと警戒していたが……やがて何も起きないことを理解して、どちらからともなくほっと息をついた。

「……どうやら終わったみてーだな。手、燃やさずに済んだな?」

「着火する前に決着ついてよかったよ。マッチは無駄になっちゃったけどなア。……はー、つつかれたア!」

「疲れたで済む怪我じゃないと思うけどな……」

「ああこれ? いや確かにそーなんだけど、なんかやらかしたときにやらされるおじいちゃん怒りのブートキャンプに比べれば、フツーよフツー」

「波紋使いつてやべーやつしかいねえのか?」

「ンマー失礼なツ。俺なんておじいちゃんに比べりゃあひよこもひよこよ。普通の人間と変わりゃあしねーヨツ」

「あのねJ O J O、よく考えて? 普通の人はね、両手凍った状態でそんな朗らかには笑えないと思うよ?」

「ハッ!」

「英才教育つても善し悪しだねえ」

いい具合に緊張が抜け、からからと笑い合う二人であった。

「……まあなんだな。今回はマジで助かったぜ」

「そりゃどーも、どーいたしまして」

「できれば何か報いてやりたいところだが……生憎と追われる身でね。いずれまたつてことで勘弁してくれよ」

「どつてこたねーよ。感謝されたくてやったわけじゃあねーんだから」

「そうだろうけど、命だけじゃなくルパンコレクションまでもらつて何もしないなんぞ、ルパンの名が廃るんでな。返礼には期待しといてくれよな」

「?? ……? よくわからんが、期待せず待つとるぜ」

と、ここで二世は唐突に畏る。誰の目にも完璧な所作で一礼をして見せたのだ。

「J O J O、お前との出会いは間違いなく黄金の価値ある体験だった。これこそルパン一族最高のお宝だ、ありがとう」

「あー、おー、おう？」

「では……いつかどこかでまた会おうぜ、J O J O！」

そして二世は踵を返し、一気に闇の中へと消えていく。

ジョセフは遠ざかっていく彼の背中をしばらく眺めていたが……ふと気づいて腕時計を見てギョツとする。

「やッベ、もうこんな時間かよ!? エリナおばあちゃんに怒られる……！」

先ほどまで人外相手に大立ち回りを演じていた勇者は、か弱い老婆の叱責を恐れ蒼白になったのだった。

21. 洋上へ日本上陸

1935年も四月を目前に控えた今日この頃、皆さんいかがお過ごしでしょうか？ なんだか久しぶりのアルフィーちゃんです。

今わたしがどこで何をしているかって言うと、香港を船で出発したところだ。

でもって、年末のドイツから今まで何をしてたかといえば、ひたすら船で移動していた、となる。

しようがないじゃあないか、ヨーロッパから日本まで移動する手段なんてこの時代、船しかないんだもん。シベリア鉄道はあるけど、ソ連とは今色々難しい時期だからさ……。

いやまあ、飛行機による長距離移動がなかったわけじゃあないんだけどね。アメリカなんかはこの時代から既に航空機産業が盛んで、輸送手段として確立している。

けどそれは国内線の話だ。国際線の確立はまだ先の話になる。

ヨーロッパに至っては、いまだに飛行船が空の主役だ。潮目が変わるのは、1937年のヒンデンブルク号爆発事件（飛行船の浮力を担保するガスに引火してえらいことになった事件）のあとからだから、こちらももう少し先の話。

と、そんな感じだからこの時代……1930年代の飛行機は、一般的には贅沢な乗り物って認識だ。それはルベルクラクの周辺でも変わらない。

一応、戦鬪潮流後も見据えて、飛行機や空母に関する話はちらつと伯爵に伝えてあるから、たぶん史実よりはイギリスの航空産業の歴史も変わると思うけどね。

だからほとんど後ろにしか攻撃できない、ブリテイッシュヨークの塊みたいな戦鬪機は出てこないはずだ。ギリギリ間に合ったはず。……そう信じたい。

話を戻そう。

そんなわけで船しか移動手段がなかったから、長々と三ヶ月近くかけて日本に移動中のわたしはぶつちやけ暇だった。

そりやあ前世じや絶対できない船旅だし、補給とかで寄港した各地の様子は垂涎モノの光景ではあつたけどさ。船の上となると話は別なわけだよ。

一応、ルベルクラク伯爵家の娘が道楽で旅行している体なので、ちよこちよこ話しかけられる機会があつたけども。そういうのって、大体ルベルクラクのネームバリュー目当ての人がほとんどで、話しても面白くなかつたんだよねえ。

むしろわたし自身がボロを出しちやわないか不安だったから、大半は「わたしそういうのわからないから！」で押し通したよ。演技でもなんでもないから、真に迫っていた自信はある。

褒められることじゃあない？

うん……そうだね……。

まあそれはさておき、そんなこんなで暇だったので、わたしは「スターシップ」のスタンド空間で写真の現像に精を出したり、スタンドの練習、あとはおっきの人たちに日本語を教えたりして時間を潰した。

現像は、最初は失敗もあつたけどそこは腐っても柱の一族。すぐに身体が覚えてくれたので、そこから先は楽しい時間だった。アルバムにするのはかどつたし、そこにつける解説文もめちやくちやはかどつた。はかどりすぎて、全部終わらせてしまったのは想定外だけだね！

スタンドはというと、あんまり進歩はない。スタンド空間内の光量を操作できるようになったのと、「ネヴァーフエード」で使い勝手のいい技を思いついたのと、センチ単位で各矢の射程距離が伸びたくらいかな。

新しい矢が出来そうな気配は、ない。これに関しては今んとこ、欲しいと思う能力がないからかもだけどね。わたしの「コンフィデンス」に付随する各能力、いずれもわたしがほしいと思つた結果生まれてるっぽいしさ。

日本語の教育は……正直難航してる。やっぱり日本語は難易度の高い言語らしい。これについてはすぐにどうにかなるものでもない

から仕方ないけど、多少なりとも日本語に触れた経験があるのは無駄にはならないはずだ。

と、いう感じで船旅を過ごしていたわけなんだけども。それでも港から出てしばらくは、多少暇つぶしのネタがある。だから出航した直後の今は、そっちに没頭することになる。

それが何かと言えばざり、寄港地で買いつけた新聞の類だ。色んな新聞を集めて、ただのんびり読み耽ったり、それぞれを並べて読み比べたりするのだ。

まあ、遠隔地のニュースはだいぶ遅れて掲載されてるから、そこはちよつと不満なだけどき。仕方ないから、それについては諦めてる。早くインターネットがほしいね。

「お……このニュースも遂に東アジアにまで流れてきたかー」

で、香港で手に入れた新聞はどんなものかなって取った新聞の一面記事を見て、わたしは感心していた。

書かれていた見出しは、「ルパン二世現る！」。

そう、かの大怪盗、アルセーヌ・ルパンの二代目がイギリスに現れたのである！

かつてヨーロッパをにぎわせた伝説の怪盗に二代目が現れるとは思われていなかったのか、このニュースは結構道中の寄港地でもちらつと聞く機会があった。イギリス植民地に寄港することが多かったからってのもあるだろうけど、それ抜きでも彼の登場は衝撃的だったんだと思う。

わたしとしては、ルパンがいるなら二世がいても不思議じゃあないな、つてすつと納得できたんだけど……そこはまあ、わたしには前世があるからね。

さてそんなルパン二世だけど、なんとも不遜なことに、バッキンガム宮殿の宝物庫から宝石を盗んでいったらしい。盗まれた宝石はレッドサンという名前で、ルビーのような赤い宝石に、太陽の紋様が浮き彫りに施された逸品だという。

……うん、自分で言ってる白々しいや。だってマッチポンプだもん。

何を隠そう、ルパン一家にこの宝石を盗むように依頼したのは外でもない、ルベルクラク伯爵なのだ。盗まれた宝石はズバリあの遺跡の鍵の一つで、初代ルパンに何やら貸しがあったらしい伯爵が、それを理由にルパンに盗みの依頼を承諾させたことで実現した。

ただし初代ルパンは既に引退を決めていたので、常々後継者として育てていた息子の襲名披露としてこの件を利用することになった……というのが今回の経緯である。

そう。ただの茶番なのだ、この一件は。

世間ではルパン二世に宮殿の警備や見取り図が筒抜けだったようだ、さすが天下の大泥棒、という風に話が広がってるけど当たり前。だって警備に関わってる傭兵の胴元はルベルクラクで、当主の伯爵は血縁関係もあつて宮殿には普通に出入りできる貴族だ。どっちの情報も簡単に手に入る立場にある。そのルベルクラクがルパン二世の協力者なんだから、ねえ。

初仕事とはいえ、ルパン二世にとっては朝飯前だったと思うよ。今頃は伯爵への引き渡しも完全に終わっていて、どこかで優雅に仕事上がりの一杯を楽しんでるんじゃないかな。

なんならヨーロッパを脱出して、アジアのほうに来てる可能性もある。というか、わたしとしては来ていてほしい。

だって、ルパンがいて二世がいるなら、これは三世が生まれてこないとおかしいでしょ！

ルパン三世の出生については作品によって設定が違ったりするものの、一般的にはフランス人の父二世と日本人の母親の間に生まれたハーフ、という形で知られている。二人がどこでどう出会ったか、なんて詳細なエピソードはないけれど、それでもフランス人と日本人がこの時代に出会うなら日本、どんなに範囲を広げても東アジア辺りが一番無難だろう。だからこそ「来ていてほしい」わけだよ。

いやー、楽しみだなー。会ってみたいなー、ルパン三世！

カリオストロ公国がこの世界にあるって知ったときからもしかして、って思っただけで、実際にその可能性を見せられたとあつちやあーファンとしてはやっぱりね、気になるよね！ 太公望とい

ブツダといい、妙に他の世界との繋がりがあつぽいこの世界なら、あつぽもおかしくないつて期待しちゃうじゃあないか！

え、お前はジョジョラーだったんじゃないのかつて？

それはもちろんイエスアイアムだけど、それはそれとしてルパン三世だつて大好きだつたのだ。自分の世界がある男の、流れ星のような美学。いいよね。いい。

……話、戻そつか。

えーつと……ああ、そうそう。遺跡の鍵についてだね。

「これで懸念があるのは日本のやつだけつてわけだ」

後付けで、ふむー、といかにも真剣に考えていますみたいな感じであごに手を当てる。周りからは微笑ましいものを眺める視線が集中してるから、だいぶ手遅れ感あるけどそれはともかく。

他の三つの鍵と違って、日本にあるやつはほとんど情報がない。今現在日本にあるかどうかも、はつきりとは断言できない。日本に賠償金代わりに流れた、までしかわからないのだ。

だから日本自体は楽しみだけど、探し物が果たしてカーズ様たちが目覚める前に見つかるかどうか心配だよ。

現段階では、スペインのやつも見つかつてないだろうけど……そつちはジョナサンに任せておけば万に一つも問題はないだろうから、何も心配はしてない。だつてジョナサンだし。初代ジョジョは伊達じゃあない。

それに、そもそも学者としてはわたしより彼のほうが上だ。わたしは一万歳オーバーのロリババアだけど、キャリアは前世で院生だつた頃の数年しかないからさ。ジョジョに対する信頼はもちろんだけど、単に学者としての信頼もあるんだよ。

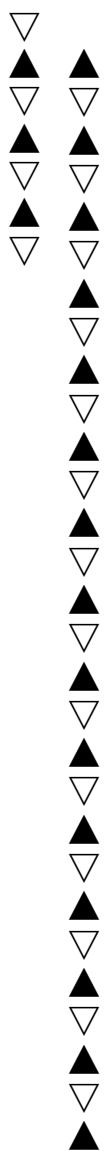
ともかくそんなわけで、わたしは日本でとつてもがんばらないといけない。ルベルクラクのサポートも日本ではほとんど受けられないから、余計にね。

だから日本を堪能するのは後回しだ。でもアヌビス神の打ち直しは、先のほうがいいかな？ 刀の打ち直しは、刀身だけで終わるものじゃあないから時間かかるだろうし……。

と、というようなことをこの三ヶ月間でわりと両手で数え切れなくらい考えてたわけだけでも。

考えた通りにできるかどうかは実際やってみないとわからないんだし、これ以上考えてもどうにもならない。所詮は机上の空論だもんね。

なのでわたしは、新聞の残りを堪能するべくページをめくるのだった。



わたしが乗った船は、特に遅れることもなく順調に横浜港に到着した。インド洋の辺りではそこそこ天気が荒れたけど、太平洋は穏やかだった。これは運が向いてきたかもしれない。

そんなことを考えながら、わたしは船を降りる。

……いや、降りようとして。直前、船上から見えた横浜の眺めに感動して思わず立ち尽くしちゃったよね。

横浜は、江戸時代を通じてただの寒村だった。だけど幕末、外国人居留地を作ることになった幕府は江戸に近い神奈川にこれを作ることを避け、代わりとして開発されることになって運命が変わる。外国向けの港として整備された横浜は、そこから発展に向けて歩き始めたのだ。

そんな経緯があるから、横浜、特に港の周辺は西洋風な建物がその多くを占めている。

だけど……それはあくまで西洋「風」なのだ。完全に同じものじゃない。一年近くイギリスで生活していたわたしにしてみれば、この光景はまさに「日本」だった。

おまけにいまだ高層建造物も少ないこの時代、船から見える景色にはそんな洋風の街並みの向こうに続く和風の街並みも含まれている。これを見て、感動しないなんて無理だった。

だってわたしは柱の一族に転生して、もう一万年以上生きている。

だけどわたしの心はいまだに人間の形をとどめていて。

柱の一族だからこそその記憶力は、前世の記憶を風化させてくれない。今でも思い返そうとすればすぐに、しかも鮮明にあの頃のことを思い出せてしまう。

この一万年で、一体何回白いご飯が食べたいと思ったことだろう。

この一万年で、一体何回日本語で語り合いたいと思ったことだろう。

この一万年で、一体何回……。

そう、わたしは——生まれ変わってもなお、どうしようもなく日本人なのだ。良くも悪くも。

その想いは、横浜の景色を見て確信に変わった。

ああ、ああ！

懐かしき我が心の故郷！

わたしの記憶にあるものとは百年近く違うけど、前世で横浜に住んでいたこともないけど、それでも！

「わたしは帰ってきたッ!!」

思わず日本語でそう叫んだわたしは、悪くない。絶対、悪くないんだ。

2.2. お前は誰だ

ぎよつとした様子の子のメイドさんたちになだめられながら船を降りたわたしは、そのまま入国手続きを済ませて港にほど近いホテルへチェックインした。

今日はここで過ごし、翌日にルベルクラクの関係者が迎えにやって来る手筈になっている。

つまり明日まではまた暇なわけだけど、周りの誰もがまったく勝手なのわからない日本で、わたし一人が一万六千年ぶりの里帰りだーなんてハッスルするわけにはいかない。長い船旅でみんな疲れてるし、さすがに自重した。

そして夜が明けて、朝食も済ませて。

優雅にモーニングテイーを楽しんでいたわたしの下に、いよいよ案内人がやって来たと連絡が。

なのでウツキウキでその案内人を招き入れたんだけど……。

「初めまして、アルフィー様。私、案内をおおせつかりましたサチと申します」

「娘のレナータです！ よろしくお願いします！」

「子連れで申し訳ありません、ですが父がおりませんのでどうにも……」

現れた女の人は、吸血鬼だった。しかも子連れで。その娘とやらも、半吸血鬼だ。どういふことなの……。

ルベルクラクは昔から石仮面を積極的には使っていないし、ルージュフィッシューのように使おうとする存在を許してこなかった。現存する石仮面は伯爵が厳重に管理してるし、今の時代に吸血鬼がいるはずがない。

ないけど……でもなあ、日本だもんなあ。地球の表と裏、とまではいかなくともすさまじい距離が離れている。長い歴史の中で、ルベルクラクが把握し切れていない石仮面がここまで流れ着いた可能性はあるだろう。

とどこまで考えて、いや待て、と考え直す。

だって、偶然で半吸血鬼が生まれるとは思えない。結構タイミングがシビアで、全体で見れば子供が半吸血鬼化しない期間のほうが圧倒的に長いのだ。そこがどうにも説明がつかない。どうなんだろうなあ、これ。

……まあ、彼女が吸血鬼であることはこの際問題じゃあないか。彼女が何を考えているのか、そして彼女が本当にルベルクラクの指示を受けてここにいいのか。それが問題だよな。

ただ、それをここで問いただして、万一暴れられたら困る。周りには普通の人間、もしくははだいぶ血の薄い半吸血鬼（ちつとも半分じゃないけど気にしないで）しかいない。わたし一人ならともかく、彼女たちに被害が及ぶようなことは避けたい。

それに何より……この吸血鬼の女性。朝だっていうのに、普通にここまでやって来た。全体的に日光を避ける服装ではあるけど、それでもただ者じゃあない。

わたしみたいに、日光をある程度克服した吸血鬼とか？ だとしたら、カーズ様が実験台として欲しがりそうだな。

あるいは、何か光に関係したスタンドでも使えるのかな？ 可能性としてはこっちのほうが高そうだけど……むーん。

……よし、スキを見て「スターシップ」だ。誰からも邪魔されないスタンド空間で、しっかりとお話しよう。

「……英語は使わなくていいよ。わたし日本語わかるから」

「!? さ、さすが、知恵の神アルフィー様……完璧な発音でいらっしやいますね」

毎度のことだけど、知恵でもなんでもなく前世の記憶なんだよなあ……。言わないけどさ。

「ちなみに文字も読めるから安心して。通訳関係はわたしより、他の子たちを助けてあげてほしいな」

「畏まりました」

うやうやしく頭を下げるサチさんとやらは、誰の目に見ても東洋人だ。名前が本名かはわからないけど、たぶん日本人なんだろうな。最初に声をかけられたとき、RとLの区別がほとんどついてなかった

し。

一方、彼女にならう形で一步遅れてペこりとおじぎしたレナータちゃん、あからさまに混血だ。でもサチさんに似たところがぼつ見えるし、親子なのは本当だろう。名前からして、サチさんのお相手はロシア人かな？

「かわいいねえ。レナータちゃんはいくつなのかな？」

「さんじ……ッ、えっと、十歳です！」

三十台の数字を言いかけたな。つまりそういうことなんだろう。

半吸血鬼の歳の取り方はおおよそ人間の三分の一だから、十歳という申告はさほど間違っていないはずだ。精神面の成長も、まったく同じではないけどわりと近似するから、普通にそれくらいの女の子として扱えばいいだろう。

「そつかそつか。チョコあるけど食べる？」

「はい！」

「ご、こちらナートチカ！」

ぱああと顔を輝かせたレナータちゃんに対して、サチさんが慌ててたしなめる。レナータちゃんもはつとして、慌てて土下座し始めた。

「ご、ごめんなさい！」

「いや、そこまで畏まられても困るんだけどね。わたし、そういうのあんまり好きじゃあないんだ。だから遠慮しなくっても大丈夫だよ。ここには身内しかいないしね」

この辺のやり取りはもう慣れたものだ。そしてチョコレートを渡すのは、わたしが二人に物理的に接近したいからなので、遠慮はしないほしい。

ということ、わたしは二人に近づくと、レナータちゃんに多少強引にチョコレートを手渡した。

すると、途端にレナータちゃんの顔がまたほころんで、嬉しそうにそして大事そうにチョコレートを懐にしまう。

「ありがとうございますー！」

「はいどういたしまして」

「申し訳ありません、アルフィー様……」

なんなら敬語もいらさないんだけど、ルベルクラクの関係者がそれは無理だろうから言わない。

にしても、ナートチカ^{レナータちゃん}、か。まがい物とはいえ神との対面の場ですぐにそれが出たつてことは、この人さては親バカだったりするのかな？

まあただの親バカなら微笑ましいけど、吸血鬼特有の感情の暴走が、シヨシヤナ並みの執着に発展しないことを願うよ。誰も得しないもん。

「……いいいいの。子供はこれくらいが一番だよ。さて、挨拶はこれくらいにして、本題に入ろっか」

ほん、とわたしが手を叩くと、二人が改めて畏まった。

そしてわたしに視線を集中させた二人は驚いた顔を……いや、レナータちゃんだけだな。彼女だけが、驚いた顔をして絶句した。

なるほど、スタンド使いはあなたのほうなのね。あなたはわたしの構えた弓と矢が見えるんだね。

サチさんはそんなレナータちゃんの様子と、弓で矢を引き絞る姿勢のわたしに不思議そうな顔をしている。警戒するに越したことはないけど、ひとまず先にスタンド空間へ引きずり込むのはレナータちゃんに決定だ。

——【スターシップ】。

「お母さん逃げ——！」

わたしが矢を放つ直前、母親をかばうように前へ出たレナータちゃんの身体から猫のような、けれど全体的に機械的なフォルムの像^{サイジョン}がせり出てきた。【ザ・フル】をよりメカニカルにしたうえで、もつと猫に寄せたデザイン^{サイジョン}の像だ。

けれどそのスタンドが何かをする余裕はなかった。それよりも早く、わたしが放った矢がレナータちゃんの腕に刺さり、彼女をスタンドごと別空間に引きずり込んだからだ。

「ナートチカ!？」

サチさんが悲鳴のような声を上げる。スタンド使いでない彼女には、娘が突然前に出たかと思ったら消滅したように見えただろうか

ら、無理もない。

彼女とは対照的に、周囲の人間は特に大きな反応はない。ここ数か月、一緒に行動していた彼女たちには見慣れた光景なのだ。スタンドは見えずとも。

「アルフィー様?! 娘はどこへ!?!」

「大丈夫、すぐに会えるよ」

うろたえながらも訴えかけてきたサチさんに、わたしは再度星の紋様が刻まれた矢を向ける。

……自分でやつといてなんだけど、これ完全に悪役の絵だな。すぐに娘のあとを追わせてやる、とかそういうやつだよ、これ。

ちやうねん……そんなやないねん……ほんまやで……。

でも今更そんなことを言っても仕方ないので、わたしはそのまま矢を放つ。スタンド使いではないサチさんは、特になんと言うこともなくあつさりスタンド空間へと消えた。

「さて……ちよつと二人とお話して来るよ。しばらく離席するね」

「はい、どうぞお気をつけて」

そしてわたしは、恭しいお辞儀を周囲から一斉に受けながら、自分に星の矢を突き刺した。

移動した先はいつも通り、スタンド空間の中央だ。そこでわたしは、不思議そうにきよきよきよしている親子に改めて向かい合う。

「やあ二人とも、わたしの世界へようこそ」

「!! あ、アルフィー様……これは一体どういうことでしょうか?」

娘をかばう形で、サチさんがこちらをにらんでくる。ここでも娘を守ろうとする辺り、娘への愛は本物なんだろう。

だとしたら、なおさら不思議だ。どうしてこの二人がわたしのところにやってきたのか。それは知っておかないといけない。

「それに答えるためには、わたしは一つあなたに聞かなきゃあいけないことがあるね」

「……?」

「サチさん、あなた吸血鬼だよ」

「ッ!?!」

「そしてレナータちゃんは半吸血鬼だ。わたしの目はごまかせないよ」

視覚で判断してるわけじゃあないから、この表現は正しくないんだけど、まあそれはさておきだ。

「でもおかしいよね。だってルベルクラクに吸血鬼はもういないはずだもん。野良の吸血鬼が潜んでた可能性は否定できないだろうけど……だったら半吸血鬼を産んでるのがおかしい。あれを作れるタイミングはシビアで、偶然見つけられるようなものじゃあない。というか、そもそも野良の吸血鬼がわたしのことを知ってるのもおかしいし……」

今ここで思いつきました、みたいに顎に人差し指を当ててみる。

ちらつと横目で二人の様子をうかがってみれば、二人とも……特にサチさんは青い顔をしていた。

そんな二人に追い打ちをかけるように、わたしは言葉を続ける。

「だからさ、答えてほしいんだ」

ぎちり、とわたしの額から隠していた角が出る。同時にわたしの頭髪は銀色へ、肌は褐色へと切り替わる。

アルフィー・ルベルクラクではなく、柱の女アルフィーとしての本当の姿で二人に問う。

「あなたたち、何者？」

「——も……申し訳ありませんでしたツツ!!」

返答は土下座だった。

……えっ、いや、自白早くない？ 普通もつと粘らない？

「恐れ多くもアルフィー様を謀ったこと、誠に申し訳ありません!! 許していただけるとは思いませんが、せめて娘は、娘だけはッ! どうか私の首で何卒、娘だけはお許しくださいッツ!!」

「えっ、あの、えっと、わたしよりお母さんを……!」

親子揃って全力の土下座である。麗しい親子愛だとは思うけど、真っ先に命を差し出してくるのには正直ドン引きだ。なんでみんなもつと命を大事にしないのか。

でも迷うことなく首を差し出すこの態度、見覚えがある。ルベルク

ラクで何回も見た。わたしに対する信仰を持つてる人の特徴だ。

ということはルベルクラクの間人間なんだろうか？

……うーん、これだけじゃあ断言できないな。

「……質問に答えてほしいなあ」

なので思わずつぶやいちゃったんだけど、二人から「ひえっ」と引くような悲鳴が聞こえてきた。

そんなに怖がらなくてもいいじゃん……。わたし、一族では一番寛容なつもりだし、なんなら転生してからこっち、全ギレした記憶なんてほぼないんだけどな……。

「わ……私は……私たちは」

息も絶え絶え、みたいな感じでサチさんが声を上げる。

おかしい、わたしそんなにプレッシャーかけてるだろうか。というか、わたし殺気とかそういうの出せないはずなんだけど、なんでそんなに怯えられるの……。

「——ルージュフィッシュの、末裔でございます」

「……マジ？」

「はいー」

平伏した彼女のつむじを見下ろしながら、しかしわたしはなるほどと大いに納得していた。

ルベルクラクとは元を同じくする集団。きつと柱の一族への信仰は同レベルだろう。首を差し出すというのもそういうことなんだろうな。

何より、吸血鬼を普通に運用していたルージュフィッシュなら、石仮面やそれにまつわる知識も継承していてもおかしくない。

それでいて、ルベルクラクの間と偽ってわたしに取り入ろうとしたのは……復権を望んでのこと、かな？

伯爵たちはルージュフィッシュは滅んでいるという認識でいたけど、今の今まで隠れてたんだだろうな。今ここにいるのは、わたしたちが起きるタイミングで仕掛けてきたってところか。

「よく生き残ってたね。伯爵は滅ぼしたって言ってたけどなあ」

「欧州を早々に諦め、シベリア周辺で生き延びていたと聞いておりま

す……」

彼女が言うには、ただ隠れていただけじゃあなくて、吸血鬼を作るのもゾンビを作るのも、かなり自重していたらしい。ルベルクラクの本拠地から遠く離れた上に、そこまでやってたならなるほど知られてないはずだよ。

で、活動を再開し始めたのは、百五十年ほど前らしい。今は東アジアを中心に、それなりの規模の商会まで持っているようだ。

ただ、あくまでそれなり。世界の半分近くに何かしらの影響力があるルベルクラクに対抗するにはまだ難しいようで、特に資金力と情報収集網はかなり差があるっぽい。

まあルベルクラクって歴史的に俯瞰して見ると、約二千年ほど失敗をほとんどしてないわけのわからない一族に見えるもんな。わたし経由で歴史をカンニングしてるからある意味当然んだけど、それだけ勝ち続けてきた彼らはもちろん力を蓄え続けて今に至るわけだから、ルージュフィシユールが勝てるわけない。

「しかしそれでも、我々は諦めておりませんでした。そしてアルフィー様がスーパーエイジャを探していることを知った我々は、ルベルクラクよりも先んじて鍵を手に入れ、それを奉じてなんとか取り立てていた。だから考えた次第でして……」

「オーケー、大体わかったよ」

戦国時代やら江戸時代やらの浪人みたいだなあ……。さしずめ例の鍵は感状か……。

ともかく、状況はわかった。じゃあどうするか、だけど……。もう一つ聞いておかないといけないことができたな。

「ちなみに、本当にわたしのところに来る予定だったルベルクラクの人はどうしたの？」

「……催眠をかけて、遠ざけました」

「遠ざけた？」

そういえば、ジョジョの吸血鬼ってそんなようなこともできたっけ？ 確か一部で、ポコがそんな感じで操られてたっけ。それ以降、そういう描写がないからよくわかんないけど……。

三部でアブドウルや花京院につけ込むときの描写がやけに大仰だけど、もしかしてあれも一種の催眠術なんだろうか。対象に強く恐怖を感じさせる的な。

でもなあ、転生後に実際に見た吸血鬼と比較して考えるに、デイトってあからさまに規格外なんだよなあ。突然変異と言うか強すぎるというか……ともかく参考にならないんだよなあ。

気化冷凍法にしたって、習得できた吸血鬼は体感で半分くらいだぞ。あのシヨシヤナですら、ディオが原作でやったことはあんまりできなかったんだから、いかにあの人がぶっ飛んでるかわかるうというものだ……。

「は、はい……わ、私は、吸血鬼としては非力なほうですが、その代わりに、血を操作したり、気化冷凍法と言った、特殊な行為が得意、できて……それで、目を合わせた相手を、催眠状態にできるという技も……ありまして……あの、その、アルフィー様？」

おっと。変なほうに思考が飛んでた。いけないいけない。話に戻ろう。

「つまり、サチさんは少なくともその人を殺してはいないんだね？」

「は、はい！……や、やはり殺しておいたほうが良かったでしょうか……あの、あまり娘の前でそういうことはしたくなかったのですが……」

え、なんでそんな今にも殺されそうな顔してるの。むしろいい判断だったのに。

「いや、それでいいよ。あのね、この際だからハッキリさせておくんだけど……わたしは他の一族と違って、殺したりするのは嫌いなんだ」
なんでそこで「え？」って呆けた顔するの。解せぬ。

「人間や吸血鬼を食べるのも嫌だしね。わたしは普通に、人間と同じようなのが食べたいの。今は白いご飯とお味噌汁が一番食べたいね！」

ぐ、と拳を握って人間と変わりませんよアピール。

「は、はあ……」

「そんなわけだから、サチさんが不必要に殺さなかったのはわたしの

にはポイント高いよ。これからもそうしてくれるとわたしは嬉しい」「それは、……ありがたいお言葉ですが……わ、私は既に、数え切れない人を……」

「ああうん、ルージユフィシユーならそうだろうね。でも終わったことはどうしようもないし、だからって今ここで死ね、なんて言わないよ。生きて罪を償うことのほうが難しいんだし……うん……それにね、これは尊敬してる人からの受け売りなんだけどさ」

「おおブツダ、あなたの言葉をお借りします！」

「まだ死んでない人なら助けられるでしょ。手をかけた人の数以上に、人を助けてほしいな。あなたがいなくても失われる命の中にある、あなたがいれば救える命を助けて……そうやって、未来に善を残して行ってくれるとわたしはとっっても嬉しいな」

「……………」

サチさんは、しばらく呆けた様子でわたしを見つめていた。

けれど少ししてから、ゆっくりと……けれど神妙に頭を下げた。

「アルフィー様の仰せのままに」

母親のその姿に、ちよつと不思議そうにしながらも続いたレナータちゃん。

そんな二人を見ながら、わたしはうんと頷いた。

「ん、おっけ。じゃあ二人とも、これからわたしのために働いてくれる？」

「もちろんです！」

「です！」

「この身命を賭して！」

「ありがとう。……でも自分の命は大事にね？ 子供のこと大事なんだっいたらなおさらだよ。できるなら、子供は親と一緒にいるのが一番なんだからね」

「…………… は、はいっ！」

わたしの言葉に、再三サチさんが平伏する。

かくして、わたしは彼女の忠誠を受け取ることになった。

23. ルージュフィッシュと昭和10年の東京

サチさんとレナータちゃんを一行に加えたわたしたちは、一路東京へ向かう汽車の中にいた。イギリスやドイツでも乗ったけど、日本の汽車ってだけでなんか特別な感じがするから我ながら現金なものだ。

とはいえ、マナーの悪さにはうんざりする。時代的に、そこかしこでタバコの煙が上がってるのは仕方ないにしても、吸い殻を放置するのは許せないし、ゴミをそこら辺に所構わず捨てていくのも腹が立つ。子供やお年寄りを強引に押しつけて席を占領するのも気に入くない。一緒にいる使用者のみんなも、これにはご立腹だ。

わたしはと言えば、紀元前を知ってるだけにそこまで気にならない……なんてことはなく。恐らく、一行で一番腹を立てていたのはわたしだろう。

わたしは日本人だ。世界線は違っても、この国はわたしの故郷だ。他の誰もが納得しなくとも、わたしはそう信じてる。

だけどその故郷が、知っている時代からたった七十年程度遡るだけで、ここまで質が下がるなんて思ってもみなかったのだ。いや、多少知識として知ってはいたけども……。

紀元前の世界を我慢できたのは、最初から期待していなかったからだろう。だって紀元前だもの。文明も文化も未発達で、最初から期待する意味がなかったってだけだ。期待があったからこそ、失望も大きいってわけだ。

早い話が、わたしは記憶の中の日本とのギャップにやられていた。

だけど同時に、一人の歴史好きとしてそのジェネレーションギャップは心地いいものでもある。いや不快な目に遭ってるからこの表現は語弊があるんだけど、こう、時代ごとの差を体感できていること自体には喜びがあるんだよね。我ながら面倒な性格だと思う。

ともあれそういうわけで、わたしは終始イライラしてたけど、かといつてこの状況は見過ごせない。

わたしの使用人はみんなイギリス人なんだぞ。彼女たちの日本株が直滑降してるのは、一日本人として許容できない。何かあったら即

ブリテイッシユジョークが飛び出てくるんだからな！

だからイライラしながらも、わたしはゴミを処理して回っていた。まずはできる範囲からだ。範を示すところから始めていこう。

おかげで横浜東京間の景色を楽しむ余裕なんてほとんどなくて、哀しみを背負うことにはなつたけど。

「東京駅だー！」

ともあれ、東京に到着だ。駅から出て振り返れば、わたしの知る時代でも残されていたその威容の、一部だけでなく全体がはつきり見える。わたしが知ってるものが遂に目の前に現れた感動は、ここまでの道中でささくくれた心を癒すには十分だ。

うん、一枚写真を撮っておこう。

「アルフィー様、ゴミは私でも処理しておきますので……」

「あ、お願い。どこにどう持つていけばいいかはさすがにわかんないし」

ものすごく申し訳なさそうにゴミを引き受けたサチさんは、指笛を吹いた。するとすぐにどこからともなく人がやってきて、彼女はそこにゴミ処理を投げる。

「……日本にはすっかり溶け込んでるんだね」

「今となつては我らの重要拠点の一つですので」

「あー、この時代のアジアで独立と経済的自立を保ってるの日本だけだもんね」

どこもかしこも植民地だもんなあ。経済活動だけならインドシナとかでもできるだろうけど、植民地経済は本国ありきだしなあ。

とはいえ、その日本も経済が強いとは言えない。おまけに今は恐慌の影響で、どこもかしこもガタガタだし。

あー、せめて15年前に目が覚めてれば関東大震災も世界恐慌も、三陸地震にも何かしら対処ができたんだけどなー。

そう思ったんだけど、どうやらそうでもないらしいことがわかってきた。

駅から移動しながら、わたしは主にルージユフィシユの現状や彼らがこの国でやっている活動について、サチさんから聞いてたんだけ

どね。

彼らが隠れ蓑にしているのは、四神工業という機械メーカーらしい。名前の通りメーカー系の企業で、扱うのは主にマザーマシン……要するに、機械を作るための機械とのこと。財閥と呼べるほどの規模ではないものの、一企業としては間違いなく日本ではトップクラスに位置しているらしい。

戦後の不景気、関東大震災、世界恐慌、昭和三陸地震に農業恐慌と、ここ十年ほどの間に経済的な大事件が連続してるせいで、最近は業績を落としてるみたいだけど、何せ作ってるのがマザーマシンだ。メンテナンス業務で最低限食いつなげているという。

そう、この世界の日本は史実よりがんばってる！ しかも、わたしに端を発するバタフライエフェクトの最たるものの一つとも言える、ルージユフィシユールがそれを担っていると、思わず嬉しくなるよね。

でね、その本拠地。なんと東北地方にあるらしい。母体がシベリアから出てきたルージユフィシユールであることを考えると、決して突飛でもないような気はするけど……本来であればこの時代、日本の東北地方には後世に名を残すような大企業は存在しない。

だけどこの世界では、たまたまルージユフィシユールが東北の余りまくっている労働力に目をつけて、この地域で開業した。この結果、史実よりも東北地方は豊かになってるようだ。

さらに、だ。

東北地方が史実よりにぎわっていて、その中核が工業メーカーということもあつてか、史実では華麗にスルーされた東北帝国大学から世界に羽ばたいた大発明、八木・宇田アンテナも大々的に研究されているらしい。

これは快挙ですよ！ この研究が早い段階から進められてるってことは、間違いなく日本におけるレーダーの研究も進む。このままいけば、軍事技術としてのレーダーも二次大戦に間に合う可能性が高い。

まあ、だからと言って日本がアメリカ相手に勝てるはずはないんだ

けど、それでも史実ほどボッコボコにされる可能性は下がるはずだ。戦争が起こるのは仕方ないにしても、亡くなる人は少ないに越したことはないからね。

そんなわけでわたしとしては、素直にでかしたと思う。何せ財閥やら政府やらの思惑や結びつきのおかげで、東北地方より朝鮮半島や満州の開発のほうが優先されがちだったからね……。

結果論ではあるけれど、朝鮮半島を手に入れたのは悪手だと思うんだよなあ。開発すべき地域が増えたことで、内政が広く浅くになってしまった遠因だし。

だからわたしは、早く目が覚めて日本に来てたら、まず東北地方に資金を投入して開発。そうして日本の国力を増強させて、資源と経済を巡って勃発する第二次世界大戦を防ぐ……ないしは軽傷に収めようって考えてたんだよね。

今からじゃそれは遅いって思ってたけど……それを偶然とはいえやってくれたのは、本当にいい仕事をしたと思う。

伯爵たちには悪いけど、これだけで十分ルージュフィッシュのことは信用するに値する。

それと、個人的にルベルクラクに依存しない資金源が欲しいって思ってたから、これはもしかしなくてもチャンスだと思う。

この機会に、サチさんとレナータちゃんはしつかりわたしの側になってもらおう。

「さあ着きましたよ。四神工業の東京支店へようこそ、アルフィー様」
そうしてサチさんに連れてこられたのは、なんと皇居にほど近い……というか、目と鼻の先の街中だった。

ここまで来ると、さすがに全体的な雰囲気はわたしの知る時代と近しいものを感じる。車だって行き来してるし……なんならわたしたちも車でここまで来たくらいだ。

それでも建物の高さやデザイン、行き交う人の姿を見るとまだまだ違いは大きいね。

まあそれはともかく。

サチさんに案内され、多くの人に出迎えられたのは、迎賓館と呼ぶ

に相応しい優雅な洋風建築だった。

ただ、この建物に会社機能はないだろう。隣にこれぞと言うしかない四階建てのビルがあるし。

このビルも、営業用の拠点なんだろう。工場は敷地が必要になるから、こんな東京の一等地にあるわけないもんね。

だからこの迎賓館っぽいのは、本当に人をもてなすための場所なんだろうけど……いやその、なんていうか、皇居のすぐ目の前にある迎賓館的な洋風建築って、心当たりが……。

「……鹿鳴館では？」

「ご、ご存知でしたか……さすがですねアルフィー様」

「ビンゴかよう！」

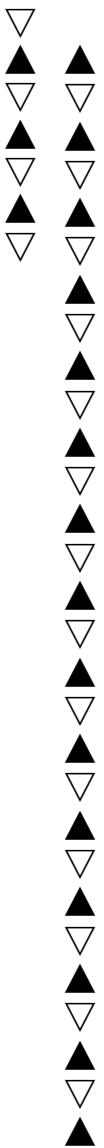
そのものズバリだった。

うっそだろ、今わたしあの鹿鳴館の中にいるのか。セットでもなんでもない、本物の鹿鳴館に!?

「……アルフィー様？ そのカメラは……」

「ごめん。まずは撮影させて！ 外から中から隅から隅まで！ この歴史的建造物を！ 一ミリたりとも見逃すわけにはいかないんだツ!!」

歴史好きの本懐イイ!!



……何はともあれ、鹿鳴館（来賓用宿泊施設として中はかなり改装されていた）に落ち着いたわたしたちは、改めてサチさんと今後のことについて話し合う。

まず一番肝心な赤石製の鍵については、わたしが来る少し前から既に搜索を始めていたみたい。もちろんあからさまに非合法なこととはできないし、ルージユフィシユーという概念は会社の幹部しか知らないみたいで、なかなか進んでいないようだ。

それでもサチさんによる催眠術などで、普通にやるよりは効率はい

いらしいんだけど……国の記録を探らないといけないから、それも限定的らしい。

わたしはこの穴を埋める形で動くことになる。「ネヴァアーフェード」ならそれが可能だからね。

それとは別に、わたしが刀を直したいと告げたところ、府内（この時代の行政区分は東京府である）でそれなりに名の知られた刀工を数日以内に調べてリストアップしてくれることになった。

ありがたい。これでやっとアヌビス神を整えてあげられる。彼には今後の活躍を期待してるし、この機会に刀身だけじゃあなくて拵こしらえも含めてきれいにしたいとあげたいところだ。

あとは仕事とは関係ないんだけど、「よろしかったら」と前置いて観光地案内の束を手渡された。わたしが人間の文物が好きってことは、ルージュフィッシュもしつかり伝え継いでいたらしい。

思わず苦笑しちゃったけど、今まさに鹿鳴館に対してそれを全開にしちゃったわけだし、ありがたいと受け取ることにした。

とりあえず、東京大空襲で焼ける前の東京……特に下町は重点的に見て回りたいので、予約を入れておく。

京都も見ておきたい。あとは名古屋も見ておきたいな……名古屋城が確か空襲で焼けてるはずだ。しかしそうなってくると、神戸や大阪も……。

「……あの、アルフィー様って普段からこのような感じなのでしょうか？」

「アルフィー様は歴史的文物が絡むと大体このような感じですね。ドイツではそれはもうはしゃいでおられました」

サチさんとメイドさんがなんかぼそぼそ話してるけど、聞こえてるんだからね。

「アルフィーさま、わたし浅草に行ってみたいです！」

「ナートチカ!?!」

レナータちゃんはかわいいなあ！

子供はこれくらい遠慮がないほうがいいよね！

「よし、東京の下町巡りは浅草中心にしよう」

「アルフィー様!？」

と、そんな一幕もあつたけど、とにかく日本での活動はこうして始まった。

なお、その日の夕飯はフレンチダイナーの予定だったらしいんだけど、今朝方にわたしの魂の叫びを聞いたサチさんの鶴の一声で急遽和食に切り替えられた。

そして使用人のみんなが慣れない和の道具や味に苦戦する中、わたしは一人号泣しながらすべてを完食した。一万六千年ぶりのごはんとみそしるは、魂を砕くような美食だった。

やっと本当の意味で帰ってこれた気がした。

ああ、やっぱりここがわたしの故郷なんだ、って心の底から思ったよ。

みんなドン引きを抑えきれなくて、顔が引きつってたけどね……!

24. 死神のいる街 1

東京に着いて四日後。手近なところから調査を始めていたわたしは、サチさんから刀工のリストを受け取った。そして様々な情報を加味して熟慮した結果、鍵の調査は彼女に任せて一人山手線に揺られることになった。

山手線はこの時代、すでに環状運転が実施されている。それどころか、これ以降山手線に追加される駅は1971年の西日暮里駅と2024年の高輪ゲートウェイ駅、二つしかない。

つまり1935年の現在、その形態は既に完成していると言っても過言ではない。使われている車両は当然電車じゃあないし、あのわかりやすいウグイス色もまだないけど、間違いなく山手線だ。

2010年代にこれに乗っていたわたしが、1935年にこれに乗ってるなんて不思議な気分だ。わたしは鉄オタじゃあないけど（歴史好きとして鉄道の歴史そのものは多少知っている）、それでも乗っていてワクワクする。

だけど今向かっている町のことを思うと、気分が盛り下がっていくのが自分でもわかる。

いや、今のわたしは人間じゃあないんだけど、そんなことお構いなしにヤバそうな気配を感じているのだ。何せある意味伝説の町だから、不安にもなろうというものだ。

なんでって？

そりゃあ決まってるじゃあないか。

だって、わたしの今の目的地は……。

へ米花町ー、米花町ー。お降りのお客様は……

「!? おい大変だ、外人の嬢ちゃんが米花町で降りようとしているぞ!?!」

「ウソだろ!? ……マジだ!?」

「おいあんた、正気か!?!」

「早く戻るんだ! まともな人間はこの町には近づかんぞ!?!」

「オギャア! オギャア!」

……と、車両から降りようとしただけでこの騒動である。

しかし彼らのリアクションも無理もない。だってこの町は日本一……いや、下手したら世界一危険な町なのだから。

けれどわたしは、親切な彼らの言葉を無視して駅のホームに降り立つ。日本語がわからない体で首を傾げながら振り返り、英語で答えておく。

『……心配なく……殺す側ですから……!』

実際の殺害人数で言ったら、わたしは間違いなく人類史上最悪のジェノサイダーだ。本来の歴史でカーズ様たちがやつてたであろう殺しも、なんだかんだでわたしに押し付けられてたっばいから、柱の一族の中でもたぶんわたしが一番だと思う。なんの自慢にも名誉にもならないけど。

いや、実際に殺すなんてしないししたくないし、今からここで殺人をするつもりもないわけだけでも。自虐というか、ある種の戒めってことだね……。

「……来てしまった」

駅から出て、駅舎を振り返る。そこには大きく、「米花町」と書かれていた。

米花町。言わずと知れた日本のヨハネスブルグである。

間違えた。

言わずと知れた名探偵コナンの舞台である。

東京の都心にも近く、複合商業施設や各種娯楽施設、ホテルなども充実している、二十一世紀の日本の豊かさを象徴するような立派な街だ。

さすがにこの時代はそういうものはほとんどないけど、山手線の駅があるこの街が田舎であるはずもない。駅舎に背中を向ければそこには、賑やかな街並みが広がっている。間違いなく、この時代においても栄えている街と断言できるだろう。

しかし問題はそこじゃあない。何が問題かと言えばそれは、この街の異常なまでの犯罪発生率だ。

なんでって……だって名探偵コナンは、様々な事件を主人公のコナ

ン君が解決していく作品だ。だから仕方ないんだけど、この作品では彼の行く先々でとにかく事件が起こる。

しかもこの作品、作中の出来事はすべて一年以上過ぎていない、という設定が作者から明言されている。おかげで作品を通して見ると、二日に一回は絶対に誰かが殺されていることになり、結果ネットでは面白おかしく日本のヨハネスブルグと呼ばれるに至った。

そんな街が、さあ。

まさか実在してるなんて思わないじゃん！

しかも山手線の中にあるとか普通思わないでしょ!?

高田馬場駅はどこに行ったのか！

確かにあの高田馬場は駅名がそのまま地名になった街で、本来の高田馬場は違うところにあるけど！

だからってなぜ米花町が存在するのか！

そりやカリオストロ公国がある時点でもしやとは思ったけど、でもヴェスパニア王国なかったじゃん！

そして存在したらしたで、時代が違うのになぜこの時代から既にコナン本編ばりの犯罪発生率なのか！ わけがわからないよ!!

……じゃあなんで来たんだって思われるかもしれないけど、それについては怖いもの見たさの心理があったことは否定しない。オタクとして、時代は違えど米花町を見ておきたかったってのもある。

だけど一番は、この米花町に宮本包則みやもと・かねのりの最後の弟子がいると知ったからだ。そうじゃなかったら、いつかは来たにしても今来ようとは思わなかっただろう。

宮本包則。近代日本を代表する刀工の一人だ。幕末から明治、大正とかけて長く刀を作り続けた人物であり、その作品は孝明以降の天皇の御剣も含まれるという巨匠だ。さらには、美術工芸の名人を顕彰する帝室技芸員に、たった二人しか選ばれなかった刀工の一人でもある。

そんな人の弟子がいるとなれば、行くしかないだろう。何せこの人、弟子がみんな早逝していて、歴史上後継者はいないことになっているのだ。

史実でもいたけど表に出てこなかったのか、あるいは大成できなかったのか。それはわからないけど……少なくともこの世界には、技術を受け継ぐべく実際に師事した人物がいて、存命なのだ。これこそ行くしかないでしょ！

……まあ米花町の危険性を抜きにしても、妖刀の専門家、というあだ名がある人らしいから、行くかどうか迷ったのは本当だ。

だけど扱ってほしいのがまさにその妖刀、アヌビス神だからさ……。本当ならこれ以上の人はいないだろうと思って、来ることになつたってわけ。

ちなみに同じく帝室技芸員の刀工、初代月山貞一の流派は二十世紀まで存続してるので、この時代でも頼ることはできる。

だけど彼らは奈良県に住んでるので、あんまり気楽に行けないんだよ。二十一世紀でもアクセスがよくない奈良県なのに、1935年だよ。一体何日がかりの旅になることやら。

「……アルフィー様、その、本当によろしいのですね？」

「うん……色々、ね……知りたいこともあるから……。でも万が一もあるし、行くのはわたしだけにするよ……」

なんていうやり取りがサチさんとの間にあったけど、そうしてでも行く価値があると判断したのだ。

というわけで現在、わたしは外見年齢を上げて一人、米花町にやって来た。住所は聞いて来てるので、あとはそこに向かうだけだ。

マップアプリなんてのはないから、その辺りの通行人にでも声をかけて、道案内してもらおう。

……と思つた矢先に、目出し帽から血走つた目を出した男が銃を持つて銀行に入つていくのを見てしまい、ドン引きした。

嘘でしょ……米花町に降り立つてまだ三十分も経つてないのに……怖……これが日本のヨハネスブルグ……。

でもそいつはわたしがドン引いてる間にもためらうことなく中に入つていった拳銃、流れるように強盗を始めたので、「ネヴァーフエード」を軽く撃ち込んで気絶させておいた。巻き込まれたくはなかったけど、かといつて見過ごすわけにもいかなかったからね……。

でも船の中でスタンシヨットとでも言うべき技を見つけてなかったら、こんなにスムーズにはいかなかっただろう。あの暇な時間は無駄じゃあなかった。

いやね、わざと頭を外して撃ち込むと、情報の伝達に抜けが出る代わりにかかなりの量を放つても気絶くらいで済むつてのがわかってき。おかげでスタンガンの要領で使えるようになったから、「ネヴァーフェード」の評価はわたしの中で急上昇中である。

なお、般若心経一卷分をまじめに読経したくらいの記憶が、人が気絶し始める情報量のボーダーラインだ。それ以下だと頭痛や吐き気でとどまる。

……強盗は警察に任せておこう。下手に事情聴取とかに巻き込まれても面倒だし。

ということ、その場を後にする。

「……外人さん、本気かい？ やめといたほうがいいと思うけどねえ……」

で、そこらで通行人に行き先を尋ねたら、少し引いた様子でとめられてしまった。そんな人としてヤバい人なんだろうか……。

ちなみにお巡りさんは忙しそうにしてたので、申し訳なきすぎて声をかけられなかった。なんならほとんどの駐在所が不在だったしね！

怖いわ米花町!!

「悪い人じゃあないんだよ。包丁とかクワが欠けたりしたら、ちやあんと直してくれるし。ただ……あの人に刀を打たせると、ね……呪われちまうんだよ」

おっと、話を戻そう。

周りを窺いながら、声を潜めてわたしにそう言ったのはいかにも噂好きな感じのおばちゃんだ。

「なんかね、先生んところで刀を打ってもらった人は、みんな意識をなくしちゃもうらしいんだよ。いや、そうなるのは先生んところに顔を出してから何ヶ月も経ったあとだから、偶然とは思うんだけど、何せその数が多いしねえ……」

おばちゃんの話してくれた内容は、事前に聞いていた話と一致する。地元の人がそう言うということは、やはり妖刀の専門家、というあだ名はガチなんだろう。

でもこれ、コナンの世界なら単に死神呼ばわりだろうけど、ここはジョジョの世界だ。なんか少しずつ色々混ざってるっぽいけど、そこは間違いない。

となると、その意識不明は……もしかしなくてもスタンドでは？

ダービー兄弟みたいな、魂を抜き取るタイプの。

だとすると、わたしがここに来たのは必然だったのかもしれない。スタンド使いとスタンド使いは引かれ合うのだから。

……いや待てよ？ この街の異常なまでの犯罪発生率も、もしかしてスタンドなのでは？

……どうやら考えないといけないことが増えたようだ。街をどうこうするのは現状優先順位としては高くないけど、頭の中のメモにはつけておこう。

さてこの噂を聞いた上で、行くかどうかだけど……まあ行くよね。最初にも言ったけど、わたしが直したいのはまさに妖刀そのものであるアヌビス神。彼を任せるなら、そういうものを扱い慣れてる人にお願いたいたいからね。もちろん、できる限りの警戒はしながらだけど。

そんなわけで、わたしは米花町在住の刀工、二枚屋^{にまいや・とうご}刀語を尋ねたのだった……。

25. 刀鍛冶の刀語 上

刀工、二枚屋^{にまいや・とうご}刀語の家は純和風の建物で、けれど全体的にこじんまりとしていた。敷地内に併設された、鍛冶場のほうがよほど大きく見える。

「ごめんください」

と顔を出せば、奥さんか下女と思われる女性が現れ、用件を告げるとその鍛冶場へとすんなり通される。

「へえ、外人さんがおいらんトコに来るたア珍しいことがあつたもんだ」

出迎えてくれたのは、日本人としては大柄な男性。百八十くらいはあるんじゃないだろうか。身体つきもなかなかがつしりしている。

歳の頃は四十代前後つてところかな？ なかなか愛嬌がある顔をしているからか、若く見える。

「イギリスより参りました、アルフィーと申します。あ、こちらつまりないものですが……」

「こいつアご丁寧に。二枚屋刀語と申しまさア」

向かい合つて挨拶を交わしながら、スタンドがないかさりげなく警戒する。

とりあえず、この鍛冶場自体がスタンドということはなさそうだ。それ以外にも気配は……今のところ感じられない。

何もされていない現状、こつちから攻撃するわけにはいかないけど……スタンドつてやられるときは一気に来るからなあ。どれだけ警戒してもやりすぎつてことはないだろう。気をつけないと。

「で、本日はどういったご用件で？」

「はい、実は先生に刀を直していただきたくて参りました。こちらです」

とはいえ、わたしは依頼をする側でもある。問われるままに答えて、アヌビス神を差し出した。

「拝見いたしやす。……こいつアまた……随分と派手にイキやしたね。……あ、いやでも、綺麗にイってやがんな……これを折つたや

「つア相当な手練れですぜ」

へえ、プロの刀工がそう言うならそうなんだろう。ジヨナサンが褒められたのが嬉しくて、思わず顔が緩みそうだ。

「しっかしこいつア……見たことのねえ出来だ。日本の刀はたくさん見てきやしたが、とんと心当たりがねえ。アルフィーさん、恥を承知で聞きやすが、どこの刀なんで？」

「およそ四百五十年ほど前のエジプトです。打ち手はキャラバンサライ、刀の銘はアヌビス神です」

「エジプト!? こいつア驚きだ、そんな遠いところでこれほどの刀を作る御仁がいるたア知らなかった! いい仕事してやがるぜ……!」

感心した様子で、様々な方向からアヌビス神を観察する二枚屋さん。その仕草に淀みはなく、さすがプロといった雰囲気だ。こうやって見ただけで、少なくとも日本の刀ではないと見抜けるのもさすがだよなあ。

彼はそのまましばらく観察を続けていたけど、やがて思い出したようにハツとすると、小さく咳払いをして畏まった。

「失礼、珍しいモンが見れたんで、つい我を忘れちまいやした。それで話を戻しやすがね、アルフィーさんはこいつを直したいと言いやしたが、切っ先はどうされたんで？」

あー……まあ、そりや聞かれるよなあ。

「……残念ながら残ってないんです。粉々になってしまつて……」

わたし自身がやったことだから、間違いない。本当に文字通り粉々になってしまつてるので、どうしようもなかったんだよね……。

それを聞いた二枚屋さんはなんでと言いたげに首を傾げたけど、すぐに真顔に戻った。

「となると、脇差や短刀に仕立て直すのは不可能ですぜ。かといつて、残った部分がこんくらいだと、刀として作り直すのもできねエ話でさア」

「あー、やっぱりそうですか……。いや、わかつてはいたんですよ、いっそ新しい刀のほうがいいってことは。でもこの刀がいいんです。この刀をまた使いたいんです」

この刀、というかアヌビス神を、なんだけど。彼がこの刀に宿るスタンドである以上、他の刀を使うのは論外だ。だからこそ、どうかにしてこのまま使いたいんだけど、どうかなあ……。

「このまま使うとなると、ナタにでもするしかありやせんぜ？ それほそれで、元とはだいぶ見た目も趣も変わっちまいやすが……」
「ですよねえ……」

どうしたもんか、と言いたげにわたしはため息をついた。

とはいえ、この辺りのことは既に決めている。昨夜、アヌビス神とはどうするか話し合っておいたのだ。

彼曰く。

『俺は刀だ。あらゆるものを斬るためにある！ だが俺を作った男はそれ以上に、俺が刀であることに意味を求めていた！ すなわち、この世のすべてを、霊だろうが神だろうが、なんでも斬る伝説の刃！ それが俺に求められた姿だ！ だから俺は、俺という存在がなくなっても構わん！ ナタやナイフなどにされるくらいなら、いつそ錆びつくして朽ちたほうがマシだぜーッ！』

……アヌビス神は、あくまで刀であることにこだわったのだ。そう断言したとき、そこにぼつちを恐れるちよつとイキリ屋な彼の姿はなかった。

そして彼は言った。今のまま刀に戻ることが不可能なら、一度溶かして作り直せと。

そうしたとき、彼がアヌビス神であり続ける保証はどこにもないのに。けれど、彼はそれでいいと言った。乗り越えてみせると言ったのだ。

これだよ。ジョジョの登場人物って、敵味方関係なくこういうところあるよね。

目の前に無難な道があるのに、それを選ばない。己の矜持に相応しい道しか選ばない。それがどれほど険しかろうと、そもそも道としての体をなしていなくとも、そこが自身の行くべき道だと信じたら殉じるのだ。

わたしが憧れた生き方だ。ただの一般人だったわたしには、とても

じやないけどできなかつた生き方。

けど今は……今なら、少しだけわかる。ただの憧れじゃあなくて……実践すべき、自分が行くべきものだど、少しだけど理解している。そのつもりだ。

だから、それを目の前で見せられて、否とは言えなかつた。
だから。

「……でしたら、作り直していただけませんか。他ならない、この刀自身がそう望んでいるんです」

そう言った。自分でも驚くくらい、穏やかな声だった。

対して、二枚屋さんは深い笑みを浮かべた。好戦的な笑みだ。肉体に比べて顔は愛嬌があると思ってたけど、とんでもない。

この人はきつと、刀のために死ぬる人なんだろう。そういう、修羅か羅刹かというような笑い方だった。

「……本当にいいんですね？ 刀を、こさえやすぜ。構いやしねエですな？」

「はい、構いません」

「合点承知」

そして最後の確認を済ませた彼は、一度席を立って戸棚に向かい、そこから書類を引つ張り出してきた。

「こちら、契約書ですア。よろしければここに、署名を……あーつと、外人さんにはどう言やいいんだ……全部、全部まるつと書いてほしいんですがね」

「フルネームでつてことですね、わかりました」

……ちよつと驚いた。こういう職人さん、しかも戦前のこの時代に、しっかりとした契約書を持ち出してくると思つてなかつたもの。

書かれている値段も、相場は詳しくないけど、それはそれとして払えない額でもない。

おかしな文言も特には見当たらない。むしろ精魂込めて刀を打ちます、と添えられた一文には、職人としてのプライドを感じれるよね。そして、スタンドの気配もここに至るまで感じない。考えすぎだつ

たのかな……？

でも念のため、本名を書くのはやめておこう。承太郎や花京院も、あやしいと思ったエンヤ婆に対しては偽名を使ってたもんな。

「……書きやしたね」

「はい、よろしくお願いします」

「書きやしたねッ！」

「!?」

その瞬間。

わたしの胸元から腕が生え、その手に魂が握られていた。頭で考えるよりも早く、それを理解する。

どうやら全部は掌握されていないようだけど……それでも身体がほとんど動かない。油の切れたブリキ人形みたいに、ぎこちない動きしかできない。

「な、な……う、うそ、いつの間に!? どこからッ!?」

がんばって後ろに顔を向ければ、そこには狐頭で筋骨隆々な人型の像があつて、わたしの身体を腕で貫いていた。

スタンドだ。間違いない。

そんな、できる限りの警戒はしてたのに！ なのに前兆は何も感じられなかった！

「おやア？ アルフィーさん、見えるんで？ こいつア驚き桃の木山椒の木だ」

二枚屋刀語が、鬼のような笑みを浮かべて槌を取った。

「だがそいつア運がいいですぜ！ アルフィーさんに相応しい最高の刀をこさえてみせやすから、よおツく見ていておくんなせエ！」

その凄惨な姿にわたしはなんとか逃げようとしたけど……やっぱり身体はろくに動かない。

ダメだ、逃げられない！

そう理解したわたしは、なんとかこの状況を打開するために口を開くことにした。

「な、なんで……！ どうしてこんなことを!?」

「なぜ？ なぜとお聞きになりやすいか？ そんなの決まってるア、

最高の刀を作るため以外に何があるってんだイ！」

二枚屋が言う。さながら演説するように。

「おいらアガキの頃から刀が大好きですよ。たつくさんの刀を家に並べて……いんやア、侍らせるのが夢だった！ けど今のご時世、軍人さんでもないのに刀なんざア簡単にや持ち歩けやしねエし、持つことだって難しいときた。難儀な世の中だぜエ」

「それは……時代が変わったとしか、言えないでしょ！」

でもちよつと気持ちはわかる。刀って一種のロマンだね。家に一振りほしいなつて、わたしも考えたことはある。

「だから刀鍛冶になったのさ！ 刀鍛冶なら、好きだけ刀を触れる！ 造れる！ 並べられる！ こんな夢のような仕事、他にあるかってんだイ！」

それもまあ、ちよつとわかる。自分が好きなものをつくる仕事はなかなかなるものでもないけど……だけどそれは、多くの人が憧れる生き方の一つでもあるだろう。

「とはいえおいらも仙人サマジやあねエ。腹も減るしクソもする。となりやあ、癩だが誰かのために刀をこさえてやらにやあ生きていけねエ。だけどよォー……そんな刀でも、やるからには全力だ！ 生半可な刀なんざアおいらが許せねエ！」

だが打つのは人様の刀だ。人様が望む、人様のための刀だ。その人様のためだけの、正真正銘一品モノをつくってやらにやア、おいらの名が廃るってエもんだ！」

んー、あー、まあ、これもまあ、一応……一応わかる……かな……うん、たぶん……！

こう、クライアントの要求に完全に応えるってのは、仕事人としては目指すべき境地だろうし……？

……くそう、それにしてもなかなか身体動かないなあ！ 聞きながらもがいてるけど、ろくに動かない！

露伴先生に初めてへブンズドアを食らったときの康一くんの気分つて、こんな感じだったのかなあ!?

「だから！ おいらア刀に、その人様の魂を写し取るツ！ その人様

と同じ魂を持った刀！ それこそがその人様にとっての最高の刀なのさア！」

「いやそのりくつはおかしい!!」

発想の飛躍がすぎる!!

けど、なんとなく食らったスタンドの力は見えてきたぞ。はからずも、わたしが予想した通りダービー兄弟のようなスタンドなんだろう。

彼らと違うのは、コレクションするために魂を取り出すのではなく、あくまでその人のために思つての、親切心で魂を取り出してるところか。

恐らくこの取り出された魂は、そのまま刀の中に込められるんだろう。そうなった魂がどういう形になるかはわからないけど……ダービー兄弟の例を見る限り、恐らく最低限の自我や意識程度しかない状態にさらされるんだと思う。刀を作ってもらった人が意識不明、つてのはそういうことだと思えない。

そうなるのがしばらくしてから、というのはちよつとわからないけど……もしかして、刀が完成に近づくにつれて、段階的に抜かれていくのかもしれない。刀を作る工程ってかなりたくさんあるし、研ぎとか拵えまで全部含めると結構な期間が必要になるはずだし。

とはいえ、どう転ぼうがこのまま魂を取り出されるわけにはいかない。なんとかして抵抗しないと……!」

「まあみんなそう言うんで、わかってもらおうなんざア思っちゃいやせんがね！ それより、早速仕事に取りかかりましょうかッ！ ちよいとアルフィーさんの魂、借りやすぜ！」

「……!」

わたしの背後に立つスタンドが、力を込めてきた。わたしの魂がついに掌握され、完全に身体を乗っ取られ……なかった。

……あれ？

「……アア？」

二枚屋自身も、首を傾げている。どうやらこの状況、彼も想定外のようにだ。

よくわからないけど、チャンスだ。確信していた現象が起こらず、不発に終わったことで心が揺らいだんだらう。わたしを縛っていたスタンドの支配が緩んだ。

「スター……シップ！」

このスキに、わたしは星の矢を取り出す。けれど「コンフィデンス」は出さない。今のわたしには、弓を引く余力がないから。

だから今わたしがやるべきは、本体への攻撃じゃあない。今一番狙うべきは、スタンドのほう！ さらに言うなら、矢を刺すべきは！

「！ 手前エ……あん？」
わたしだ！

自分に矢を突き刺したわたしに二枚屋はきよとんとしたけど、もちろん自殺するつもりはない。ちゃんとした作戦だ。

まあ、久しぶりに痛みが走ったけど。最近はダメージなしで収納できるようになってただけど、力みすぎたかな。

とはいえ、これでいい。

何せ、「スターシップ」は刺したものと、それに触れているものをスタンド空間に収納する矢。それはスタンドであつても例外ではない。例外は、重量やサイズが大きすぎるものだけだ。

かくして、わたしは痛みで元の姿に戻りながらも、二枚屋のスタンドごとスタンド空間に入った。

本体の彼はついてこない。だってわたしやスタンドと接触してなかったから。

こうなつたら最後、本体から離れているスタンドであれば完全に切り離せる。それは太公望と戦ったときに実証済みだ。

そしてここで本体から引き離されたスタンドは、はっきりとした自我を持たないタイプは動けなくなる。そうでなくても、行動には非常に大きな制限がかかるのだ。

ここでも動けるのは、それこそ「セックスピストルズ」のような、最初から明確に自我を持って行動できるスタンドくらいのもの。

はたして目論見は成功して、わたしをつかんでいたスタンドは停止した。

「……で、でも魂はつかまれたままなのか……」

何もできなくなつたとはいえ、最後に下されていた命令は遵守して
るわけだ。

でも身体はだいたい動くようになった。ここまで来れば、なんとか対
抗できるはず。

「ネヴァーフエード！」

使うのは、雫の矢だ。攻撃してきたとはいえ、やっぱり殺すわけに
はいかない。甘いかもしれないけど、技術はありそうだからひとまず
アヌビス神をちゃんと直せるかどうかは見ておきたいんだ。

だからこれを、頭以外のどこでもいいからぶち込んで気絶させる！
邪魔の入らないここで、とまってるスタンドが相手なら外すはずも
なし！

『……!!』

矢が刺さつた瞬間、相手のスタンドはびくりと一度だけ震えて完全
に沈黙した。

同時にそいつの手が開き、わたしの中に魂が戻ってくる。

けど念のため、自分をあちこち確認して……もう大丈夫だろう、と
判断してから、わたしは脱力してその場に座り込んだ。

「……はあー！ よかった、なんとかなつた……！」

ダービー兄弟みたいに、条件を満たしたら即ゲームオーバーなスタ
ンドじゃあなくてよかった。そうだったら、わたしは間違いなく死ん
でいた。

ジョジョでは、あれだけ警戒してるのになんでそんなにあっさり攻
撃にかかったりするのかってシーンもあつたりするけど、なんかわか
かった気がする。スタンドって千差万別あるけど、特定の条件を満た
したときにのみ仕掛けてくるようなタイプって、能力を行使される瞬
間まで本当にまったく、全っ然わからないんだな。

代表的な例だと、ダービー兄との博打勝負でポルナレフが負けたと
きか。彼は確かに抜けたところもあるけど、戦士としては一流だ。同
行していたジョースター一行も同様に。

なのにオシリス神が発動して魂を抜き取られる瞬間まで、誰もその

発動に……それどころか存在にすら気づいてなかった。あれと同じような状況だったんだろう。

今まで、なんだかんだで純粹に戦闘向きのスタンドとしか出会ってなかったから意識の外にあったんだけど……身をもって体験したことで、頭じゃあなくて魂で理解したよ。スタンドは油断どうこう関係なく、初見殺しを斜め上から叩きつけてくるものだ、って。そのわからなさもね。

この手のスタンドは四部以降は特に増えるけど、いや本当、主人公たちってすごいな……。こんなのことあるごとに戦ってたら、文字通り命がいくつあっても足りないぞ。目的はちよつと違うけど、ディアボロが危険を徹底的に避けてたのもなんかわかるような気がする。それでもどうにかなったのは、まあ、自分で言うのもなんだけど運がよかったんだろうな……。そうとしか思えない。

でもどうしような、ホント。こんなの防ぎようがないぞ。敵だって確証のない人をいきなり攻撃するわけにはいかないのに、どうしろって言うんだ？

「……と、とりあえず、外に出よう。このまま中途半端にしとくわけにもいかないし」

というわけで実空間に戻ってくると……二枚屋は、白目を剥いてうつ伏せに倒れていた。

スタンドと本体は、ダメージを共有する。スタンド空間に隔離されていてもそれは変わらない。うん、すっかり「ネヴァーフエード」のスタンショットは効いたようだなにより。

まずは彼を縛ろう。スタンドはまだ隔離してあるから大丈夫だとは思うけど、念のためね。うん……。

26. 刀鍛冶の刀語 下

「いやー参った参った。まさか力づくで逃げられるたア思ってもみや
せんでしたぜ。お見それしやした!」

やがて意識を取り戻した二枚屋刀語は、縛られた状態にもかかわら
ずカラカラと笑って見せた。

やだ凶太い……あれだけのことやったつてのに、全然気にしてない
……! 確かにそういう性格でないとスタンドは使いこなせないだ
ろうけど、改めて目の前で見ると引くよ!

「で、おいらの相棒はどうしたんで?」

「封印しました。あのままだと命にかかわると思ったので」

「そいつア困るなア! 返しておくんなせエ!」

悪びれないなあホント!

というか、まったく悪いことしたつていう自覚がないやつかなこれ
!?! 自分が悪だと気づいていない、最もドス黒いやつか!?

「返すかどうかはわたしが決めます! いいですか二枚屋さん! あ
なたが今まで作った刀で、たくさんの方が意識不明になってるんです
よ! 刀に魂を移してるからそうなるんです!」

「ンンン? そいつアおかしい。確かにおいらア、刀打つときに人様
の魂を一度借りやすがね。刀がある程度できたら戻してますぜ?」

「……んん? でも、あなたに刀を頼んだ人の多くが意識不明になっ
てるつて……」

「そんなバカな。おいらの刀にそんな効果はないはずですよ。確かに
持ち手の魂を写すようにはなりやすが……」

「いや、それでしょ? 魂を移されたら誰だつてそうなるよ」

「いやならないでしょ? 写すだけなんだから」

「?」

「??」

「??」

わたしたちは視線を合わせて、二人同時にきよとんと首を傾げた。

なんか話がかみ合わない。どうなつてるんだ?

……いや待てよ。

移す。

うつす？

まさかこれ……。

「……二枚屋さん、確認ですけどあなたの言う『うつす』って、どの文字ですか？」

ものを別の場所に移動させる意味で移す。

字や絵を元のように描き取る意味で写す。

反射や投影のして姿を現わす意味で映す。

わたしがすぐに思いつくのはこの三つだけ……。

「そりゃア、ワかんむりに与えるの写すですぜ」

「あつ」

察し。

なるほど。これ、つまりあれかな？ スタンドが本体の意図した通りに発動していないパターンかな！

何を当たり前なことを、と言いたげに答えた彼の反応から言って、恐らく本来意図されていた「うつす」は、持ち主の魂を刀に転写する意味の「写す」だ。わたしの「ネヴァーフエード」がそうするように、あくまでコピーペーストが本来の作用なんだろう。

確かにその通りにしっかり働いているなら、たぶん誰も意識不明にはならないはずだ。元の魂はそこにあり続けるわけだもんね。

……写したほうの魂がどういう風を感じてるかは、ひとまず考えないことにするけど……ともかく、最初に魂を抜き取ろうとした意図はまだわからないけど、少なくとも「返している」という言葉を信じるなら、その段階では完全に意識不明のままってわけじゃあないだろうし。

そしてその懸念は、どうやら当たりのようだ。

わたしが予想を語ったところ、彼はみるみる顔を青くしたのだ。

「そんな……じゃアなんですかい、おいらア今の今まで人様の魂を奪うような不良品を作ってたってエことですかい……？」

そして震え声で聞いてきた。

いや、人の命を奪ってるんだぞ。

……とは思ったけど、あれだけ刀に執着していた人間のセリフとしてはらしいだろう。ブレないなあ。

でもだからこそ、本当のことを伝えることにためらう必要はなさそうだ。なので、わたしは堂々と切りつけることにした。

「そうなるでしょうね」

「なんてこった……！ これじゃア師匠に顔向けできねエー！」

師匠よりも先に、お天道様とかお釈迦様とか、顔向けできない存在はたくさんありそうだけどな……言っても話が進まないから、一旦置いてくけどさ。

「ねえ二枚屋さん、あなた今まで自分が刀を打った人に会いに行ったこととかある？」

「え？ いんや……本人からの苦情がないってエことは満足してもらえたモンだと思って納得してやしたが……」

「やっぱりなあ……。えっと、一度そういう人たちに確認取ってみたほうがいいんじゃないかな。わたしが言ったのはあくまで推測だから、本体のあなたが直接被害者を見たほうが正しい答えに近づけると思うし」

「そうさせていただきやすッ！」

「あ、でもスタンドはまだしばらく封印するよ。その状態でも自分のスタンドが引き起こしたことの因果や仕組みは理解できるはずだからね。解決したら返します」

「わかりました……」

どうやら、本体である二枚屋……さんは、本当に悪意はなさそうだ。善意だけであれだけのことができる、っていうのは恐ろしいけど……いや、地獄への道は善意で舗装されてるんだったかな。

ともあれ、スタンドがない今、これ以上何かできることはないだろう。

だからわたしは、わたしの同意を受けてがくりとうなだれた彼の縄を解いた。

彼はすぐに立ち上がらずのそりと上半身を起こすと、縛られていた

部分を気だるそうにさする。

「……ところでアルフィーさん。そのすたんど、ってエのはなんなんですかい？」

「ああ……あなたやわたしが使ったような奇妙な超能力を持つてる人はわりといるんだけど、中身は人ごとに違うの。でも基本的な法則は同じだから、そういうのを総称してスタンド、っていうんだ。英語でそばに立つもの、あるいは立ち向かうもの、を意味する言葉から取られてる」

「ははア、なるほど……じゃアアルフィーさんが縮んだのも？」

「いや、そっちはまた別。わたしの力は弓矢を出して撃つことだよ」

「ああ……そっちですかい……」

「あなたのはさしずめ……魂を取り出してそれを利用する能力ってところ？」

「当たらずも遠からずってエところですかね。正しくは取り出した魂を宿した相棒に、相槌をさせるモンですぜ。その過程で、持ち手の魂を少しずつ写し取るための素地を刀に叩き込むでさア」

「……なるほど、あなたらしい」

だからある程度終わったら返す、ってわけか。

けど、そうやって鍛えられた刀が奇妙な力を宿すのも、不思議じゃない。どんな奇妙なことでも、スタンドにかかれば起こり得るのだから。

「ちなみに、あなたのスタンドはなんて名前なの？」

「相棒としか呼んでないんで、特にはねエですが……なんですかい、あつたほうがいいんですかい？」

「いや、単に会話中わかりづらいからさ」

「そういうもんですかい……。まあでも確かに、おいら以外にも見えるお人がいなさるってエと、いざってエとき不便かもしれねエですかい」

これがHUNTER×HUNTERの念能力とかだと、名付けにも明確に意味が出てきたりするんだけどね。残念ながらスタンドにそういう性質はないから……。

「ちなみに、わたしが直してほしいって言ったこの刀もスタンドを持ってる」

「は!? マジですかイ!?」

「マジ。【アヌビス神】、顔出していいよ」

『あいよ』

「!?」

あ、ものすごく驚いてる。まあそりやそうか。

「実のところ、この刀を打ったキャラバンサライ自体がスタンド使いでね。あなたと同じように、能力を駆使して最高の刀を目指していたらしいんだ。で、できあがったのがこの刀ってわけ」

『トーゴとか言ったな! この俺を打ち直す名誉をくれてやる! その代わりに俺を今以上に斬れる最強の刀にしろ! さもなくば許さんからな!』

相変わらずやけに上から目線なアヌビス神である。まあ現状は暴れるつもりがないから、微笑ましく見てられるんだけど。

ところが、上から目線で言われた側の二枚屋さんは、なぜか感極まった様子でわなわなしていた。

「な……なんてこったい!」

そして突然大声を出した。急だったので、イキリ中のアヌビス神はもちろんわたしもびくつとした。

「おいらが目指していたのは、文字通りとつくの昔に通過された道だったってエのかイ! ははは……はっはっは! こいつア傑作だ!」

『こいつは一体何を言ってるんだ』

「サルが支配する未知の惑星だと思って探検したら、実は地球だったことを知ってしまった的な気分なんじゃあないかな」

『お前も一体何を言ってるんだ』

おっと、猿の惑星はまだこの世界には存在しないんだっただけかな?

まあそれはともかく……。

「だって言うのに、こいつアおいらの理想に一番近い刀だア! つてエことはあれかイ! おいらが最高の刀を作ったって胸エ張るに

は、最低でもきやらばん何某とやらが作ったこの名刀を超える逸品を作らにやアならねエと！　そういうこつてすねッ!？」

「まあ、はい、そうなる……のかな……?」

「くつくつく……ようござんしよう、請け負ったア！　すたんどを宿しッ、魂も持ち、持ち手と共闘する刀……なんてエ難しい仕事だア！　だが燃える！　燃えるぜエッ！　こいつア刀鍛冶冥利に尽きるツ!!」

『よくわからんが、今を超える出来になるならまあいいか。トーゴとやら、任せたぞ!』

「合点承知の助だア!」

なんだか一人で盛り上がる二枚屋さん。

まあうん、難しい仕事に燃える気持ちはわたしもわからなくはない。職人さんってそういうところ強い人種だと思っし。

しっかし、現代の刀工である名工みやもと・かねのり宮本包側の弟子でもキャラバンサライの作品はまだ超えられないのか。いや、それともアヌビス神が特別出来のいい逸品なのか……。

ふーむ、今度イギリスに戻ったら、大英博物館に収蔵されてるキャラバンサライの刀を一通り見てみるのもいいかもしれない。もしかして掘り出し物とかあるかも？

「アルフィーさん、この仕事に感謝しやすぜ！　これ乗り越えたとき、きつとおいらア新しい境地が見えるツ！　そんな気がするんでエイツ!!」

このあとめちやくちや感謝された。その勢いは、どこかの熱血テニスプレイヤーの軽く三倍は超えてたと思う。

おまけにこのあと、すぐにでも作刀を始めようとして、けどスタンドがないことを思い出してわたしに言い募ってくる始末。

もちろんスタンドを返しはしなかったけど、ならばとばかりに槌を手渡され、散々相槌を打たされる羽目になった。

日が暮れるまで、冗談抜きに休憩なしですよ。ものすごく疲れまし
た。

いやまあ、彼の腕はわたしが思ってたより高かったし、それをすぐ

目の前で見れたのはわたしも収穫だったけどさ。

ただ、力もあるし筋もいいと褒められても違うそうじゃない、としか。そもそもわたしは柱の一族なんだから、ある意味当然だし。どちらにしても、こんなに素直に喜べない褒め言葉もなかなかないよね……。

なお、そうしてる間に彼の心境の変化が影響したのか、それとも能力が成長したのか……それはわからないけれど。ともかく、刀に魂を奪われていたと思われる被害者のほとんどが、なんと突然意識を取り戻したという。

わたしがそれを知ったのは、およそ半月後だ。それまで勝手に興奮して、ひたすら刀を打ち続けていた二枚屋さんがようやく落ち着き、自分の刀の犠牲者のことを思い出してからのことである。

慌てて方々を訪ねて回った彼はそこでわたしの推測が正しかったこと、そして最近起こった状況の変化について知り、報告のため四神工業東京支店に直接足を運んできたのだ。

とはいえ、助かったのはここ数年に刀を打った人だけだ。それ以前の人は、既に魂が戻る肉体が死んでしまっていたため、解放こそされたもののそのまま天へと昇っていったようだ。

それを見た二枚屋さんは決意を新たにしたのか、もう二度と持ち手の魂を奪うような刀は作らないと約束してくれた。

その上で、改めてアヌビス神を自分に任せてほしいと言ってきた。スタンドは本体の精神力の現れで、それを用以て振るう力だ。だからこそ、本体の考えていることや思っていること、思想や信念、宗教観などが明確に影響する。

ならば、土下座してまでわたしに決意を表明した今の彼なら、能力を暴走させることはないだろう。

わたしはそう考えて、今度こそアヌビス神の作り直しを彼に依頼することにした。

かくしてわたしからスタンド——アニマロッサ（わたし命名）を返却された二枚屋刀語は、作刀作業のため飛ぶように米花町へと帰っていった。

27. 杜王村へようこそ

アヌビス神の直しを依頼してからしばらくは、地味な作業が続いた。夜中に色んなところに忍び込んで、「ネヴァーフエード」を使って赤石の鍵の行方をひたすら追っていくという、地道すぎる作業だ。

だって本当にどこに行ったのかわかんなくなってたからね。完全に力業に頼るしかなかったんだよ。

とはいえ、色んな人のところを転々としてるみたいで、今現在の所在地を見つけるまでにそれこそわたしたちもあつちこつちを転々とする羽目になった。

まあ、わたしとしては合間合間に挟まれる観光が楽しかったから、そこはいいんだけどね。

でもちよつとはしやぎすぎたので、既に持ち込んだフィルムがほぼ全滅してる。我ながらやりすぎた。

残るは一つだけで、補充も東京のごく一部でしかできない上に、その値段もヨーロッパで買うより驚くほどお高い。まだ出たばかりで、日本で製造できないから仕方ないんだけどさ。

でも根が小市民のわたしは、遠慮なく買い足せるほど精神が凶太くない。なので、最後の一つは本当に節約しながら使わないといけないだろう。

とまあそういう話はさておき。

日清戦争で賠償金の一部として日本に引き渡された赤石の鍵——雫が刻まれているらしいのでレッドティアーと名づけた——の行方だけでも。

まず最初の持ち主である日本政府は、これを現金にするため国内で競売にかけた。その権利を見事獲得したのは、その名も知られた三大財閥の一つ、三菱財閥だ。

けど三菱はこれを、かなり早い段階で手放している。どうやら手元に置いておくより、転売したほうがいいと見たらしい。

その後はしばらく三菱と関係のある地方財閥の所有物だったみたいだけど、第一次世界大戦後の十年以上続く不景気で倒産。レッド

ティアーは放出され、その後は各地を転々としていたようだ。そうして最後にたどり着いたのがここ、東北地方である。

史実と異なり、四神工業を中心に現金収入を得る手段が多いからか、この世界の東北は比較的元気だ。その四神工業も不況を耐え抜いてるし、財力に余裕のある人もいたらしい。

というわけで、わたしたちは最後の、そして現在の所有者からレッドティアーを譲ってもらおうべくここ……宮城県の海沿いの村へとやってきた。

「……これも運命かなあ」

仙台市から車で移動する道中、わたしは思わずつぶやかずにはいられなかった。

なぜって？

そりやあズバリ、この村の名前が杜王村だからだ！

自治体の名前は違うけど、海沿いに位置するこの村の地図、わたしが見間違うはずもない。間違いなく、ここは過去の杜王町だ。

今回泊まる予定のホテルも、名前は杜王グランドホテル。四部で承太郎が長期滞在していたホテルだ。歴史のあるホテルと言われているから、間違いないだろう。まさかの六十年以上早い聖地巡礼である。

恐らく、残しておいた最後のカラーフィルムはここで使い切るのだろう。そんな確信があった。

そして運命はもう一つ。

「吉良さん、すぐに取引に応じてくれるといいのですが」

「……本当にねえ……」

そう、杜王村に住む吉良さん。ジョジョラーであれば反応すること間違いなしな名前の人物こそ、レッドティアーの現所有者なのだ。

とはいえ軽く調べた限り、今のこの村にはわりと吉良さんがたくさんいる。時代柄だろう、本家と分家に分かれてそこそこ広く分布しているみたいなんだよね。

今から向かう吉良さんは本家なわけだけど、だからといってそこがあの吉良吉影直系の家かどうかはわからない。

仮にそうだったとしても、現段階では吉良吉影は生まれていないし、父親の吉廣はいるだろうけど、そちらにしても子供だろう。何もしてない子供を告発したところで正気を疑われるだけだ。

いやまあ、未来の連続殺人鬼の親という色眼鏡を外しても、吉廣という人物はだいたい悪党が板についていた。だから既に何かしらやらかしてる可能性はある。

あるけど……スタンドを使っていない普通の犯罪は、それこそ法に任せるべきだからなあ。わたしが首を突っ込む案件でもない。

ということわりと何もできない。

ただ、調査自体は軽くでもここでやっておきたいとは思ってる。六年以上意味をなさない調査だけど、無駄ではないはずだ。

調査といえば、東家も調べておきたいところだ。こっちはこつちで、仗助はもちろんその祖父良平すらまだ生まれてないから、できることはほとんどないだろうけどね。

「わー、大きなホテル！」

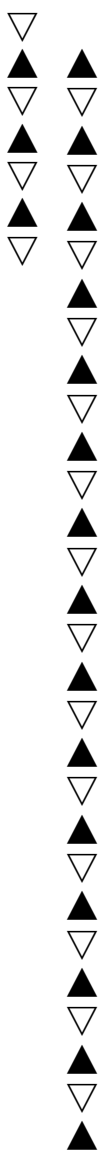
……おっと、ホテルに到着か。うーん、原作で見たのとはちよつと外観が違うようだけど、これは単に時期の問題かな？

とはいえレナータちゃんと言う通り、立派なホテルなのは間違いない。さすがに東京や大阪、名古屋、福岡と言った重工業地帯にあるこの手のホテルよりは小さいけど……史実より豊かとは言え、やはり出だしの遅れた東北はまだそういう地域には及ばないんだろう。

「ではアルフィー様、チェックインを済ませて参りますので」

「うん、お願い」

ともあれ、わたしは遂に杜王町の土を踏んだのだった。



さてホテルで一晩を明かし、翌日。わたしたちは事前のアポ通りの時間に、吉良家を訪ねた。もちろん姿は大人の状態でだ。

「ようこそおいで下さいました。わしが当主の吉良吉尚よしなおでございます」

出迎えてくれたご老人はそう名乗った。がっしりした身体つきで、たぶん一般的には歳を感じさせない雰囲気なんだろうけど……。

ジョナサンを見てるからかなあ……これでもまだ歳相応くらいに見えちやうの、なんかのバグかな？

しつつかし、名前に吉の字がある……ということは、この本家こそ吉良吉影に繋がる家系の可能性が高いような気がしてきた。顔つきも、どことなく吉良吉影っぽいような……いや、どうだったかな……自信がない。

ともかくわたしたちは丁寧に挨拶を重ねて、時節のやり取りを経て本題へ移る。

この手の交渉は基本的にサチさんに任せてる。わたし、こういうのそんなに得意じゃないもん。お金の出どころも半分くらいはルージユフィシューの隠れ蓑である四神工業だし、下手に会社が傾くような金額で領くわけにはいかないしね。

「ふむ、あなた方がほしいと仰られるのはこの赤涙石のことですか？」

と、ある程度話が進んだところで、吉尚さんが床の間に置いてあった小さい桐箱を出してきた。

彼がそこから丁寧に取り出したのは……間違いない、わたしたちが探していたレッドティアーだ。長年、というわけではないけれど、急いで探していたからか、思わず感嘆に似た声が漏れる。

「確かに……これです。どうか譲っていただけませんか？」

「……………」

サチさんの問いに、吉尚さんはあご髭を撫でさすりながら少しだけ瞑目した。

けれどすぐに見開くと、庭のほうへ視線を向けて、どこか遠い目で話し始める。

「……わしは若い頃から骨董集めが趣味でしてな。その昔、父に連れられて赴いた政府の競売でこれを見て、一目惚れをしたのです。もう四十年近く前のことです」

わたしたちは彼の横顔を見つめながら、その言葉を聞く。

「心底欲しいと思いました。しかし当時まだ若かったわしは自由に使える金も少なかったし、社会的な立場も大したことがなかった。ましてや落札したのは三菱の岩崎さんだ。田舎の士族くずれの手に届くものではなかった」

へえ、あの当時競売に参加できたのか。ということは、この吉良家は相当裕福だったんだろうな。今も純日本家屋の屋敷は豪勢だし、まさに地元の名家ってところか。

「その日から必死に蓄財に励みましたよ。最初はなかなかはかどりませんでした。大戦の戦争特需に乗って家を盛り立てることができました。そうこうしているうちに不景気になりましたが、なんとか逃げ切って……逆に赤涙石を持っていた家は没落して売りに出されました。複数の人の手を渡り歩きはしましたが、最終的にはわしが手に入れることになりました。蓄えの多くを吐き出すことになりましたが……」

彼はそこで一息つくくと、ぎらりとこちらに目を向けてきた。文字通りの真剣勝負に挑む武士のような、殺気すら感じられる目だ。

「……そうしてわしが手に入れたものを、譲れと申されるか」

「はい。虫のいい話とは思いますが、どうか」

しかしサチさんも負けていない。即答だった。レナータちゃんはごくりとつばを飲んで固まったけれど、吸血鬼にしてみれば大したものじゃないのだろう。

サチさんは、吉尚さんの視線を真正面から受け止め続けた。そのままこの場には痛いほどの沈黙が満ちあふれ、二人はただただ見つめ合う……いや、にらみ合う時間が続く。

しかし永遠は存在しない。やがてこの均衡を、吉尚さんが破った。

「……ふ、そこまで熱心に申されるなら、わしもただ突っぱねるわけにはいきませんな」

彼はふつと表情を崩すと、レッドティアーを元の通りにしまい直す。

「交換というのはいかがですか。最初に申した通り、わしは骨董集めが趣味です。この赤涙石に匹敵する品を用意できるのであれば

……それと交換。いかがです？」

「……わかりました。あなた様のお眼鏡に適う品を用意して見せましょう」

この日の顔合わせは、こうして終了した。

「どうでしょうか？ 夜中に忍び込んで来ましようか？」

だけど帰りの車中、車が動き出した直後にされた提案にわたしは思わず吹き出した。

「あれと交換できるような品を今から集めるなど、簡単なことではありません。そんなことに時間とお金を使うのであれば、実力行使に出たほうが効率的ではありませんか」

引いた顔でサチさんを見れば、彼女は悪びれることなく言い放った。

うーんこの、吸血鬼らしい発想……。一見すると原作に出てくるようなぶっ飛んだ人には見えないけど、やっぱりこの人も吸血鬼なんだな……。倫理観エ……。

「……ダメだよ。約束は約束だもの」

ともかくサチさんをなだめる。この人に育てられてるレナータちゃんが心配だ。

というかそもそも、今回言われた条件はそんなに悪い条件じゃあない。

「？ どういうことでしょうか？」

「わたしは紀元前の貴重品を大量に持つてる。そういうことだよ」

まさかここに来て使う機会が来るとは思ってたけどね。

そう、わたしはスタンド空間に大量の骨董品を保管している。時代も有史以前から共和政ローマまでと幅広いし、なんなら少し前に伯爵から博物館に寄贈してなかった細々としたものをもらって、さらにライナップは充実しているのだ。

この中から好みのものが見つからないなんてことは、ほぼないだろう。むしろ目録を作るほうが時間かかるまである。

ふっ、この勝負勝ったな！





そして目録を作って二日後、改めて吉良家を訪れることになったのだけでも。

「おっほほほおほおほおっ！」

吉尚さんは超高速で陥落してくれた。即墮ちニコマよりひどいや。フラグ？ そんなものはなかったね！

いや二枚屋さんのこともあったし、わたしかなり警戒してたんだけど……本当に何にもなかったんだよ。拍子抜けだ。

こういうのが繰り返されることで油断に繋がるんだろうけど、かといって常に警戒してるわけにもいかない。三部でちよくちよく奇襲されてるのは、そこら辺の心理を突かれてたのかもね。

ちなみに吉尚さんがレッドテイアーの交換相手に選んだのは、ローマ時代にシヨシヤナがエジプトの王族からプレゼントされたのを、右から左にもらった装身具一式だ。衣装の他にも黄金や小さい赤石が大量にあしらわれた豪華なもので、けれど肝心なところはほとんど隠せない夜の装身具一式。

シヨシヤナったら、自分をわたしの所有物だと思ってたから、もらったものはまず最初にわたしへ譲ってたのよね……。まあ、わたしに着せて夜の大運動会をしようとした節もあるけど……。

いやそれはともかく。

夜の、というだけあってこの装身具、布面積は驚異的な狭さである。なんならちよつと透けてるまでである。にもかかわらずそんなところにも当時の最先端技術で精密に編み込まれた模様は美しく、男性的にはきつと実用性も高いだろう。

もちろん、ここまではすべてが揃った品は現代にはまずない。単に貴金属や宝石による即物的な価値にとどまらず、考古学的にもめっちゃちや貴重なはずだ。吉尚さん、お目が高い。

まあものものだけに、一番の決定打がなんだったのかちよつと邪推しちやうけどね。

でもわたしは、これが選ばれたのがちよつと嬉しかったりする。

シヨシヤナもわたしも使わないまましまい込んだものだったけど、それでも彼女との思い出が少しでもあるものが巡り巡って役に立ったんだもの。それがなんだか、今も彼女が近くにいるような気がしたんだ。

……まあ何はともあれ、無事に目的は果たした。これでようやくスーパーエイジャが手に入るぞ！

——そう思っていた時期がわたしにもありました。

28. ホーリー&ブライトとザ・パヴァート 上

吉良吉尚よしなむさんちを辞したわたしたちは、すぐに東京へ帰る……ことはせず、もうしばらく滞在することにした。

というのも、やはり吉良家と東方家について調べておきたかったからだ。前回言った通り六十年以上使わない情報にはなるんだけど、それでもここで何かしら情報なり伝手なりを手に入れておくことは無駄にはならないはずだ。

そのためには戦鬪潮流を生き残らないといけないけど……まあ、最悪何かあっても黄金の精神の持ち主たちなら活用してくれるだろうし。どっちにしても、まったくの無駄にはならないはずだ。そう思っ
てね。

と言っても、そんなに大掛かりなことではない。

……んだけど、この世界の東北地方で四神工業の名前はかなりの威力があるらしい。その創業家一族（違うけど違わない）のサチさんが持つネームバリューは相当で、多くの人がすんなり答えてくれた。

あとはまあ、時代柄かセキュリティ方面が緩いつてもあったかな。二十一世紀だったら、戸籍関係の書類を恩のある企業の人間と言っても身内じゃない人に見せるなんてあり得ないよね。

でもおかげで順調に調査を進められてるし、これはこれとして受け入れようと思う。

と、いうことでわたしは、村役場で吉良家と東方家の戸籍情報に目を通していた。この時代の戸籍、文字が完全に手書きだから読みづら
いんだけど……そこは前世で取った杵柄。平安時代とかより古い時代のはともかく、江戸時代から明治にかけての毛筆くらいは普通に読めるのだ。

毎度のように、サチさんからは知の神扱いで大層持ち上げられたけどね！

いやともかく。それはともかくだよ。

吉良家の情報を読み込むときに、それは起きたのだ。

「アルフィー様、お取込み中に大変申し訳ないのですが……」

「ん？　どうかした？」

「はい……ナートチカが熱を出してしまったようで……なにとぞお知恵を授けていただきたく」

サチさんが困った様子でやってきた。腕の中には、ぐったりした様子のレナータちゃん……。

「……え？　でも、あなた三十年子育てしてるでしょ。こういうときの対処法って……」

「いえ、それが……お恥ずかしながらよくわからなくて。半吸血鬼は身体が丈夫な分、今まで病気などなかったものですから……。それに私も人間だったのはもう三十年前のことですし、子供の頃のこととなるともっと昔であんまり記憶にないもので……」

「あー……」

言われてみればそうか。半分とはいえ、吸血鬼の生命力を受け継いでるんだ。赤ん坊特有の様々な症状ですら、経験してないだろう。

「……アルフィーさまあ……わたし……しんじやうんですか……？」

「いやそんな。そりやあ確かに熱病で命を落とす人はいるけど、それはよっぽどのことだよ。あなたは半吸血鬼なんだし、生半可な病気なんて……」

……待てよ？

よく考えるとこの状況、おかしくない？

わたしが今まさに言ったように、半吸血鬼は生半可な病気になんてかからない。ただの風邪なんて、生命力がかげげる老年期に入っても絶対にかからない。インフルエンザだってかからないし……狂犬病にはさすがにかかるけど、それですら人間と違ってわりと治るんだぞ。かつてローマの時代、ケルト周辺に半吸血鬼を導入した張本人が言うんだから間違いない。

それが、急に熱が出た？　まさか……まさかとは思うけど、これ、ス Tand 攻撃だったりしないだろうな……？

「あ、あの……？」

「ああごめん、ちよつと別件で気になったことがあってね」

おつと、いけない。それはそれとして、生まれて初めて発熱を起こ

して弱気になってるレナータちゃんの不安をあおってしまったよう
だ。

ともあれ彼女をなでてあげて安心……うわ、これ結構熱出てるぞ。
半吸血鬼でこんなに熱が出るって、ますますおかしい。

そう思つてレナータちゃんの身体を念のため検めたところ……。

「……！」

彼女の背中に、とある模様が浮かんでいた。それは、真つ黒な円の
中を横切る白い線が二つ引かれた形状をしている。

普通の人はこれを見ても、何かのマークとしか思わないかもしれない。
だけど歴史マニアのわたしには、これが何を意味するのかがわか
る。わかつてしまう。

足利二つ引。室町幕府を開いた、足利尊氏の一族が用いる家紋だ。
問題なのは、この家紋が決して足利尊氏の嫡流だけが用いるもの
じゃあないということ。彼に端を発する、足利一族全体が用いたとい
うことだ。

そして……その足利一族の中に。

——吉良家は該当する。

まさか？ まだ吉良吉影のいないこの時代に、まさか……。

いやでも、あの吉良家が歴史に出てくる吉良一族と関係してるとは
まだ断定できないし……。

「アルフィー様？ この紋章は一体……」

思わずごくりと喉を鳴らしたわたしに、サチさんが問いかけてき
た。

いけない。嫌な想像を振り払って、彼女の言葉を吟味する。

親として、日常的にレナータちゃんに接してる彼女が……なんなら
昨夜も一緒にお風呂に入ってた彼女が、これを見たことがない？

ということは間違いない、これは今日になって何者かからつけられ
たものだ。付け加えるなら、レナータちゃんは子供と言えど半吸血
鬼。気づかれないようにこんなくつきりした家紋を背中につけるな
んて、普通の人間には絶対に不可能。

なら、これは。

「……二人とも気をつけて。たぶんだけど……スタンド攻撃だ。誰から、どこから、あるいは動機も何もわからないけど、攻撃を受けてる可能性がある」

「えッー」

「そ、そんな……」

それぞれの態度で愕然とした二人に、わたしは追って問いかける。「レナータちゃん、悪いけど。あなたの記憶を探らせてもらうよ。いいね?」

「はい……お願いします……」

とろんとした目のレナータちゃんが頷くと同時に、わたしは【ネヴァーフエード】を取り出した。即座に彼女の頭に刺して、今日一日の彼女に範囲を絞って記憶を抽出。そしてそれを自分の頭に刺すことで獲得する。

いつものように記憶が一気に頭の中を駆け巡る。身体のスベックでごり押しして、その中からスタンドに関わっていそうなものを探す。

「……これは」

そして見つけた。

村役場の書庫に案内されてる最中のわたしたち三人の中で、子供らしい好奇心で役場内のあつちこつちを興味深そうに眺めていたレナータちゃんが。

壁——それも彼女くらい的身長の人間の視線と重なるくらいの低いところ——にとまっていた蝶を見つけて。

見たことのない色と、例の足利二引きの家紋が描かれた羽をしたそれに、思わず手を出して。

手を触れた瞬間——火の粉を散らすようにして、かすかな燐光がふわりと巻き上がり……どこにでもいるモンシロチョウに変わっていた。

記憶の中のレナータちゃんは、不思議そうに首を傾げていたけど……やがてわたしやサチさんと距離があいてしまったことに気づいて、慌てて追いかける。そんな彼女を尻目に、解放されたモンシロ

チヨウはどこへともなく飛んでいく。

……これだ。恐らくこの蝶は、スタンドによって何らかの能力を与えられていた。

この感じは、遠距離操作型……いや、自動操縦型の可能性もあるか。ともかく、純粹な戦闘力で勝負してくるタイプではない……はずだ。奇襲される側としては、近距離パワー型のほうがわかりやすく、少しだけやりやすいんだけど……よりにもよって、一番本体を探しづらいタイプとは。

「……レナータちゃん、今日ここに来る前に、不思議なちようちよを触ったでしょ？ わたしの「コンフィデンス」のような、宝石みたいな赤色の羽をして……その真ん中にそれぞれ丸の中に二本線がある感じの模様がついたちようちよ」

「あ……はい……見たことのないちようちよさんだったので、つい……」

「……アルフィー様、ではッ!？」

「うん、それが元凶だね。だけど記憶からはそれ以上はわからない。スタンドは基本、本体が意識しないと能力は解除されないから……このままじゃまずい。なんとかして情報を集めない」と

「情報ですね……! わかりました、すぐにッ!」

「あ……、待ったサチさん!」

わたしの言葉を聞くと同時に、飛び出そうとするサチさんの手首をつかんでとめる。

「とめないでくださいアルフィー様! このままではナートチカがッ!」

「気持ちわかるけど落ち着いて! まだ昼間だよ、吸血鬼のあなたがレナータちゃんなしで外に出たら即死する!」

「あ……!」

わたしが指摘したことによろやく気づいたサチさんが、がくりと脱力する。

そう、今は昼なのだ。吸血鬼のサチさんにとって、もったも動けない時間である。

にもかかわらず彼女がわたしと一緒に活動できるのは、ひとえにレナータちゃんのおかげだ。レナータちゃんの光を操るスタンドがなかったら、今日までの彼女の活躍はなかったと断言できる。

「サチさん、あなたはレナータちゃんと一緒に「スターシップ」の中にいて。それで、気化冷凍法を軽く使って彼女の身体を冷やしてあげるんだ。対症療法ではないけど、無意味じゃあないはずだよ」

「し、しかし！ それでは外にいるアルフィー様と連絡が取れません！ 娘の容体が急変したら……！」

「う、た、確かに。でも、高熱に冒されてる今のレナータちゃんが、満足にスタンドを使えるなんて思わないほうがいい。あれは精神力で動かすものなんだから」

「う、ううう……！」

どちらに転んでも、娘に危険が及ぶ。

その事实に、サチさんは苦悩を深めて親指の爪を激しく噛みしめた。

「……だ、大丈夫だよ、お母さん……」

そこに、ぐったりしたままのレナータちゃんが声を上げる。

「わたし、がんばる……だから、絶対大丈夫だよ……」

「ナートチカ……！」

誰の目にも虚勢だつてわかる笑みを浮かべたレナータちゃんに、サチさんが悲鳴に近い声を上げる。

その腕の中で、レナータちゃんがスタンドを繰り出した。メカニカルな猫のような姿の、四つ足の像^{サイジョン}。わたしが「ホーリー&ブライト」と名付けたそれは、しかし普段と違ってはかなげに揺らいでいる。

やっぱり、今のレナータちゃんの体調が思いつきり反映されちゃってる。これじゃあ普段のように、サチさんを日光から守れるかどうかわからない。

「影響受けちゃってるね。【センド・マイハート】でレナータちゃんの自己治癒力や免疫を強化しておくよ。わたしと同等の治癒力になるんだから、スタンド攻撃とはいえだいたいよくなる……」

……はず、だったんだけど。

どれだけ経っても、レナータちゃんの症状がよくなることはなかった。

「ど、どういうことなのでしょう!? なぜ、アルフィー様のお力が効かないのです!?!」

「これは……ウイルス系のスタンド攻撃じゃあないってことか……!」

わたしの【センド・マイハート】は、本来生命力を譲渡するだけの能力だ。ただ、譲渡する生命力が柱の一族であるわたしだからこそ、驚異的な回復力を発揮するだけのことで。

だから身体の免疫機能に由来する症状であれば、回復できる。つまりウイルスによるスタンド……発熱するものじゃあないけど、たとえば驚異的な殺傷力を持つ【グリーン・デイ】や【パープル・ヘイズ】であつても、ウイルスである以上即死しない程度には対抗できるはずなのだ。

しかし逆に言えば、そうでない症状……たとえば、炎など高温の物質に接近したことで生じるただの体温の上昇は、一切防げない。しいて言えば、身体が焼けてもすぐに治るのと、体力が補充されるから我慢できる時間が伸びるだけだ。

この現象に対抗するには、基本的に一つしか方法はない。原始的で、しかしずっと人類がやってきた方法。

つまり、物理的に外から冷やす。これしかない。

「……ッ、サチさん、気化冷凍法を！ あなた得意でしょ？ 体温を多少下げる程度に調整して、レナータちゃんを冷やしてあげるんだ。それで少しは上向く……はず」

「はー、はい、畏まりました!」

返事と同時に、気化冷凍法を開始したんだろう。彼女の身体からうつすらと冷気が漂い、レナータちゃんの顔色が少し上向いた。よかった、これでひとまずは動かせるかな？

ただ気化冷凍法は、気化熱で水分を蒸発させることで行う技。レナータちゃんから水分を奪っていることには間違いないのだ。継続してかけ続けては、命にかかわる可能性が高い。

そうなる前にあの蝶のスタンド本体を見つけて、決着をつけないと。

わたしはそう決心して、何はともかく書庫を出ることにした。

「おや、どうされました？」

書庫の利用を中断する旨を伝えに行った役場の職員さんが、不思議そうに聞いてきた。

無理もない、まだ書庫に入ってそんなに時間が経ってないんだ。目的のものを見つけられたとは普通思わないだろう。

ちなみに戻ってくる道中、レナータちゃんが例の蝶に接触した地点に「ネヴァーフエード」を使ったけど、案の定目ぼしい情報は手に入らなかった。恐らく、ただの蝶を媒介にしてるだけで本体はまったく関係ないところにいるんだろう。

これで自動操縦型なら、なお面倒だ。あれは本体が状況を関知しない代わりに、無限に匹敵する射程距離を実現する。おまけにスタンドを攻撃しても、本体にダメージがフィードバックされない。仮に「スタープラチナ」が殴ったとしても、本体は毛が刺さるほどの痛みもない可能性が極めて高いのだ。

くそっ、何もかもが面倒な相手だな！　せめてスタンド使いがもう一人いれば……！

「いえ、実は娘が熱を出してしまいました……」

「なんと、それは大変ですな。あ、ですがうちの村は小さいながら腕のいい医者がおります。まだ若いですが、東京で医学を学んだ方でして腕は確かですよ」

「ありがとうございます。ですが……」

いや、悔しがってる場合じゃあないな。早くなんとかしないと！

「サチさん、待って。……すいません、そのお医者様はどちらに？」

「アルフィー様？」

「はいはい、こちらが住所です。それと、うちの村の人間なら『小田原医院』のことは誰でも知ってますんで、何かあれば聞いてみてください
い」

「小田原医院……ですね、はい、ありがとうございます」

職員さんから住所他、情報を受け取ったわたしたちは、急いで役場を後にした。

そして今までとは逆に、わたしが車の運転席に入る。サチさんに運転させて、レナータちゃんの症状に影響したら困るからね。

前世ではAT限定免許しか持つてなかったから、この時代の運転はまだ慣れてないんだけど……それでも多少練習はしたし、何より覚えが抜群にいい今の身体なら問題ないはずだ。

「その小田原医院に向かうよ」

「は……ですがアルフィー様、なぜ？ この症状がスタンドによるものなら、医者にかかっても意味なんてないのでは……」

熱に冒されながらも、光を制御して母親を守るレナータちゃんと、そんな娘に何もしてやれないことを悔やんでいるのか、ずっと苦しそうな顔をしているサチさん。

そんな状況だからか、彼女は相当にテンパっているんだろう。思考がほとんど回ってないように見える。

「この症状は、パツと見ただけじゃあただの病気にしか見えない。それならもしこの村で他の同じ症状が出ていた場合、みんな医者にかかると思うんだ。で、どうせかかるなら腕のいい医者にかかりたいのが人情でしょ。たとえば、村の人間なら誰でも知ってるくらいの医者とかね。」

だからそういう医者なら、村のことには絶対詳しいはずだ。何か知ってるかもしれない。情報収集先としては、かなり信用できると思わない？

……あとついでに、場所を聞くために違和感なく、そこらへんの人にも声かけられるしね」

「な、なるほど……」

いや、これくらい誰でも思いつくと思う。というかわたしでも思いつくんだから、むしろ難しい話でもないと思うんだけど。

心配なのはわかるけど……スタンドの脅威を知ってるからこそ、余計不安なんだろうけど……でも、今はふんばるところだよ、お母さん。

大丈夫、わたしがなんとかする。してみせる。

わたしはそのために、人間として生きるって決めたんだ。
だからサチさん。

ホリイさんが倒れたときのスージー・Qみたいに、どっしり構えて
信じていてほしい。

29. ホーリー&ブライトとザ・パヴァーアート 中

小田原医院とやらはわりとすぐ見つかった。やっぱり名の知られた人みたいで、本当に行き先を尋ねた村人全員が場所を知ってたんだよね。口々に褒めてたし、評判もいいらしい。

ただ、それとは別に気になることがある。

レナータちゃんに出た症状……それに伴う足利二つ引の家紋も、村人全員が知っていたのだ。

しかも小田原医院の先生はこれを治す方法を知ってるみたいで、なんと一晩のうちに治してしまえるとか。

それを聞いて思ったことは、ただ一つだ。

「あからさまに怪しい」

医院の中に入りながら、思わずつぶやく。

うん。どう考えても怪しい。

そりゃあ、確かに何も事情を知らなければ名医で終わるだろう。だけれどわたしは、これがスタンドによるものだということがわかってるんだ。

そんな症状を、たった一晩で治す？ そんなの、マッチポンプにしか見えないじゃあないか。もちろん証拠はないから、今はまだ警戒するしかないけどさ。

ただ、まったくわからないこともある。なんでスタンド攻撃を受けたときに出るのが、足利二つ引なんだろう？

村の人たちから聞いた限りじゃあ、小田原医院の先生は足利どころか吉良とも血縁がないらしい。その他の足利の分家ともだ。

なのになんで？

スタンドの姿形や、能力のデザインなんて本人の意思でどうにかなるものでもないだろうけど……それでもまったく無関係ってわけではないし、何かしら理由はあると思うんだけど……。

「レナータちゃん、診察室へどうぞ」

おっと。何はともかく、今はレナータちゃんだ。わたしとサチも、看護師さん（三十代くらいの女性だ）に促されて診察室へ向かう。

恐らくはこの未知のスタンドの、ホームグラウンドと思われる場所だ。油断はしない。

「いらっしやい。今日はどういう病気で？」

対して、出迎えてくれたのはやはり三十代くらいの男性。小田原よと名乗った彼はいかにも白衣を着ているけれど、やや小太りに見える。

にも関わらず、体格がいいからかパツと見ただけじゃああまり太くは見えない。太目だけがっしりした体格、ってなんか不思議だけど、ジョジョの世界なら別におかしくもない気がしてくるから不思議だ。

それと診察室自体は、たぶんなんの変哲もない診察室なんだろうけど……何せ転生してからこっち、病気とは縁がない。おまけに前世とは時代が違うから、差がわからないなあ。歴史好きとしては、素直な気持ちで眺めたかったよ。

「実は……」

わたしが観察している間に、サチさんが説明をする。

最初はカルテに書き込みながらうんうんと頷いていた小田原医師は、サチさんが「背中に家紋が……」と言った途端に確信に満ちた表情で言葉を遮った。

「なるほど、吉良熱だな」

「吉良熱……ですか？」

「ああ。原因不明の熱病で、放っておけばやがて死に至るのだが……罹患したものには必ず身体はどこかに吉良家の家紋が出るのだよ。だから誰からともなくそう呼ばれるようになったというわけだ。別に吉良さんたちが原因というわけじゃあない」

「ですが、家紋が出てきているのは事実でしょう？」

吉良さんも迷惑だろう、と付け加えた小田原医師に、看護師さんがキツめの口調で言った。

「そりゃあそうだろうが、証拠はどこにもないんだぞ。憶測をいたずらに吹聴するものではないぞ。第一この病気が見つかったから十年近く経つが、その間に吉良さんもだいたい家計が苦しくなったと聞く

ぞ。評判を落として、おまけに財産も失うなんてまっとうな感覚の間なら普通しない」

「いや、家計に関してでは自業自得でしょう？　骨董狂のじいさんが派手にお金を使うからそうなんですよ」

「まあ、それもあるだろうがね……」

「そんなことよりッ！」

雑談じみしてきた小田原医師と看護師さんの会話を、サチさんが強引に遮った。その剣幕に二人は驚いた顔をしたけど、サチさんとしてはそりゃあそうなるよね。

「娘は、娘は助かるんですか!？」

「……助かるとも。大丈夫、特效薬があるから」

「ほ、本当ですか!？」

なだめるように、けれど絶対の自信をにじませて断言した小田原医師を、サチさんはすかるように仰ぎ見た。

「もちろん。安心しなさい」

さらに彼はそう付け加えたけど……わたしはまだ信じきれない。

「……本当ですか？　あなたさつき原因不明って言ってましたけど、それなのに特效薬があるっておかしくないですか?？」

「ああ……実は見つかったのは最近でな。まだ原理が解明できていないのだ。ただ、効果は間違いなくあるから、この病気が駆逐されるのも時間の問題だろうよ」

「……ですか」

一応……おかしくはない、かな……?？」

それでも、わたしは自分がジョースター一族やその歴代の敵対者みたく、とつさの機転とかに優れているとは思ってない。何か見落としうる可能性はある。

だから仮に見つけられてないにしても、せめて警戒はしておこう。おかしな動きを見せたらすぐに踏み込むつもりで。

「では薬だが……実は注射でね」

「ちゅーしゃ」

けれど小田原医師の一言に、今まで黙って成り行きを見守っていた

レナータちゃんが引いた声でつぶやいた。

半吸血鬼に注射の痛みが耐えられないはずはないだろうけど……これは理屈じゃあないやつかなあ。

「それと、どうもこの特効薬は雑菌と簡単に反応して効果を失ってしまふようだな。処置は奥の無菌室で行う。保護者のお二人には申し訳ないが、こちらでお待ちを」

「……わかりました、娘をどうかよろしくお願いしますー！」

「もちろん。それが我々医師の使命だ。……蒔田、あとは任せる」

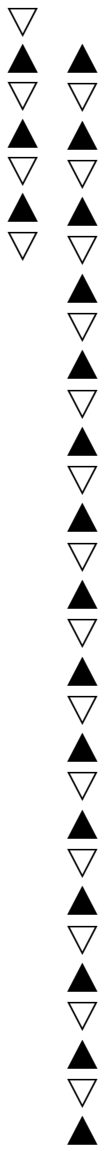
「はあ〜い」

というわけでレナータちゃんは小田原医師に連れていかれ、わたしたちは蒔田というらしい看護師さんと待つことになったわけだけども……。

恐らくはスタンド使いと思われる相手と、部屋の中で二人きり。誰の目にも危険だ。何かあったらすぐに踏み込めないかもしれない。

だから、レナータちゃんにはもしものときは遠慮せず抵抗しろと伝えることにした。熱で弱体化しているとはいえ、彼女のスタンドは攻守に優れたスタンドだ。敵は二枚屋さんのアニマロッサと違って特殊なタイプではなさそうだし、わたしが助けに入るまでの時間は稼げるだろう。

それでも心配は心配だけ……。



小田原に連れられて無菌室に案内されたレナータは、熱と不安で終始落ち着かない様子であった。促されるまま椅子に座りはしたが、心細くてたまらない。思わず二人がいるであろう方向に目を向けてしまふほどだ。

しかし、それでも彼女はルージユフィシユアの末裔。がちやりと内側からかけられた南京錠に、緊張を強めて凝視する。

「……せんせい？　なんで、カギかけたんですか……？」

「そりやあもちろん、逃げられないように、だ。何せ小生、注射を嫌がらない子供を今まで見たことがないのでね」

「う……」

——そうだった。今から注射されるんだ。

その事実思い至ったレナータは、緊張を忘れて縮こまった。

……彼女は注射というものを、痛いらしい、ということしか知らない。あとはせいぜい、薬を体内に直接入れられることくらいか。病気をほとんどしないのだから、当然と言えば当然だが。

半吸血鬼の彼女にとって、それは決して問題ではない。むしろ痛みなど、気になるものでもないのだが……同年代（この表現が正しいかは微妙なところだが）の子供たちからの伝聞でしか注射を知らないからこそ、より怖く感じるのだろう。

あとはアルフィーが推察した通り、理屈ではないということもある。知らないからこそその補正もありそうだ。

「さて、それじゃあ処置を始めるので……裸になろうか」

「……ふえ？」

しかしレナータは、予想とは異なる指示に注射への恐怖を忘れた。きよとんとした顔で、小田原の顔を見上げ……。

「聞こえなかったか？ 裸になりなさい。脱ぐんだよ、上も下も全部な」

そこで、今までほとんど見たことのない——見たとしても、母にか向けられたことのない顔をした男がいるのを見て、「ひっ」と悲鳴を上げた。

齡三十を越えるとはいえ、精神的に幼いレナータはその表情の意味を理解していない。しかし不快だとは思っていたし、母の反応も同様だったから、ろくなものではないとは考えていた。

それが今、まさに自分に向けられている。そう悟ったレナータは、逃げようとしたが……目の前で小田原がズボンも下着も下ろし、完全な臨戦態勢に入ったのを見て、その意思にくさびを打ち込まれて硬直してしまった。

「くつくつく……いいなあ、やはり幼女は最高だ！ 特に怯えて震え

る姿はこの世のどんなものより素晴らしい！」

その様子を見た小田原は、呼吸も荒くにじり寄ってくる。性的な興奮で顔を醜く紅潮させて、レナータの服をひん剥こうと手をかける。動きに合わせて左右に揺れる男の一部が不気味だった。

「心配するなよ、痛いのは少しの間だけだ……最高の初体験をプレゼントしてやるから！ さあ!!」

「い……いやあああー!!」

あまりの恐ろしさに、悲鳴を上げるレナータ。もはやスタンドを出せる精神状態ではなかった。

「お、お母さん！ アルフィーさまあ！ 犯されるう!!」

「くつくつく、叫んでもムダだ。ここは防音処理がしてあるからな……聞こえやしない。ま、完全なものじゃあないから漏れ聞こえることもあるだろうが……何せ小生がしようとしているのは注射だからな。」

そう、今からするのはただの注射、ただの医療行為だ。針はちよいと大きいし、小生の身体の一部かもしれないがね。君の股間に刺すしちよいと薬液は白いが、注射なのだよ。子供が注射を嫌うのは世の常、誰も気にしやしないさ……蒔田もいるしな……!!」

「ひっ……」

助からない。

そう思ってしまったレナータの下半身が、じわりと不快な液体でにじみ始める。

「ああもつたいない！ 聖水がムダになってしまっ！ 大丈夫だよお、おじさんが全部飲み干してあげるからねえ!!」

だがそれを見た小田原は、大興奮に大歓喜を重ねて勢いよく距離を詰める。舌を猛烈な勢いで動かしながら、「ペロペロ！ 幼女の聖水！ ペロペロ！」などとわけのわからないことを言いながら、レナータの下半身を舐めようとしてくる。

それを。

「や……やだあああー!!」

レナータは。

「ドウブツハアアアアア!？」

半吸血鬼特有の強靱な膂力でもって、思いつきりはたき飛ばした。
……読者諸君にとつては既知のことだが、半吸血鬼とは人間と吸血鬼の中間の形質を持った生き物である。それは膂力という点においても同様だ。

そして吸血鬼は素手で、しかも格闘のイロハもわからぬごろつきの、無造作にすぎるパンチでさえ、レンガ造りの建物を容易に破壊することができる。

そんな力、人間と混ざって半減したところで……怪力と表現するに何も問題がない。

つまりどういふことかと言えば、

「……あ、あれ？」

嫌なものを振り払うという本能に従った、何気ない幼女の無造作なビンタであっても、大の大人に対して致命打になりうる。それだけのことである。

ただ、本人は突然の変態にそれを忘れていたのだ。だからこそ、ただの人間に押し負けそうになっていたのだが……。

「……そっか。そうだよね……わたし、人間じゃあないもんね……」

その事実に変更して気づいたレナータは、少し寂し気に手を開いて閉じてを数回繰り返した。

——既に小田原への恐怖は消えていた。

むしろ、これからやってくるだろう母たちに、少しとはいえ粗相をしてしまったことをどう伝えるべきか。そして伝えたら伝えたらで、どう怒られるだろうか、まったく別種の恐怖にぶるりと身体を震わせるのであった。

30. ホーリー&ブライトとザ・パヴァート 下

レナータちゃんの悲鳴が聞こえた瞬間、わたしとサチさんは同時に立ち上がった。何かあってもいいように、二人とも耳に意識を集中させてたからね！

ただそれでもほとんど音は聞き取れなかったから、二人して心配してたんだ。距離にしてはやけに小さく聞こえるのは、何かしらの防音設備があると見ていい。

でも無菌室にそんな設備、必要？ いらないよね？ ますます怪しい！

だけどそんなわたしたちを、看護師さん……えーと、蒔田さんが止めに入った。

「お二人とも心配なのはわかりますけどお、落ち着いてくださいな。ただの注射ですよ。痛いものは痛いのでえ、やっぱりどうしても子供さんには嫌われちゃうんですけどお」

ただどうにもその顔は、全力の愛想笑いにしか見えないんだよねえ……もしかして、二人はグルなのか……？

「本当にあの子に何かあったとしたらどうするんですかッツ！」

レナータちゃんを心配するあまり、ヒステリックに叫ぶサチさんは……まあその、一般人が吸血鬼化したとき特有の感情の暴走だろうなとは思うんだけど、今回に関してはサチさんのが正しいとわたしも思うよ。

ともあれ、これだけ前のめりに言い寄るサチさんを落ち着かせるのは至難の業だ。力がどうこうってより、勢いとかそつちがね。ぶつちやけて言うともんごい。

なので、彼女が蒔田さんを引き付けている間にわたしは先に行かせてもらおう。

そう思った瞬間、無菌室のほうから大きな衝撃音と、連動して破壊音が聞こえてきた。三人で同時に音のしたほうへ顔を向ける。

「ナートチカッ！」

サチさんが、いの一番に飛び出していく。もはや周りは見えていな

い様子で、吸血鬼としての身体能力を隠していない。

「あッしま、ちよ、ちよつとオー！ 待ちなさいよアンター！」

それを、蒔田さんが大慌てで追いかける。

彼女の様子にやはり不審なものを感じつつ、わたしも続く。まあ、わたしも人間じゃあないので、すぐに追い越したけど。

と、今度は破壊音が聞こえてきた。あれはサチさんの仕業かな？

なんて思いながら、現場に踏み込んだんだけど。

「……なにこれ」

そこには、破壊されて解放された扉が。部屋の中ではサチさんが悲壮な、だけど安心した様子でレナータちゃんに泣きついている。

当のレナータちゃんのほうがよっぽど落ち着いてるまでである。まあ安心した様子で母親の身体に頬ずりしてるのを見ると、怖い目に遭ったのは間違いないだろうけど。

ここまではいい。ここまでは。

問題は、彼女たちから少し離れた離れた部屋の隅。壁の真下で倒れる小田原医師だ。すぐ横の壁には、恐らく彼が激突したであろう人型に近い凹みとヒビ。

彼は完全に気絶していたんだけど……なぜか下半身を露出させて、仰向けの状態だった。

医師と患者、二人きりの無菌室。片方は男で、片方は幼女。そして男のほうはアレを出していて、幼女のほうは泣いている……。

「あ、うん……もしかしなくてもこれ、事案だね？」

誰にもなく聞いておいてなんだけど、間違いないよね。

そうかあ……そういうことかあ……わかっちゃったぞ。

さてはあのスタンド、このために使われてたな!? 女の子に取り憑かせて熱を上げて、自分の医院に誘導する。そして治療と称してえっちなことするマッチポンプと見た。

……えっ、いや、バカなの？ そりやまあ、スタンドでの殺しを生業にした「タワー・オブ・グレイ」とかよりはマシだろうけど……それでも性犯罪は心に深い傷をつける重罪だぞ。それをよりにもよって医者がやる？ いい加減にしろ！

と、そういう倫理的な話とはかく、まずは小田原医師を縛ろう。本体とスタンドは連動するし、しつかりと。まあ群体型とかだとあんまり意味ないかもだけど、しないよりはね。

まあ頭には来てるから、縛るっていうより手首と足首を後ろ手に直に連結させたけどね！

忘れがちだけど、わたしたちの一族って生き物の肉体に直に入り込めるから、その応用ね。原作だとワムウがナチス相手にやってたやつだ。

「レナータちゃん、大丈夫？」

「あ、はい……でもごめんなさいアルフィーさま、わたし……」

「いいのいいの。犯罪なんてのはするほうが悪いんだからね」

レナータちゃんは何やら悔やんでるみたいだけど、落ち込んでるわけじゃあなさそう。表情はそこまで暗くない。なんていうか、次はもつとちゃんとやるぞ、みたいな決意をした雰囲気だ。

うーん、いい子だなあ。なんていい子なんだろう。親のサチさんはちよつとアレなところもあるけど、まっすぐに育ってくれてるみたいでわたしは嬉しい。

だけどそんな風にのんきしてられたのはここまでだった。

わたしの背後で、何かがうごめいた。

何か、とは言ったものの、その正体ははつきりとわかる。

生き物の気配じゃあない。これは、この気配は！

「スタンドッ！」

「ッ、アルフィーさま危ないっ！」

わたしが迫りくる殺意に反応して身体を翻すのと、そうしていなかったらわたしを貫いていただろう一条の光線がほとばしったのは、同時だった。

「うっそおおオオオオン!?」

ざし、と音を立てて着地したわたしが見たもの。

それは、右手を切り落とされて悲鳴を張り上げる蒔田さん……と。

その前に立つ人型の像サイジョン！

「……敵は小田原医師じゃあなかったのか」

「うぐ……ッ、く、くそッ！ その子！ さてはアタシと同じものを持つているわねッ!?」

滴る血を押さえながらも押さえきれず、うずくまった蒔田さんが眼を血走らせて叫ぶ。よっほど痛むようで、呼吸がものすごく荒い。今の発言も、ところどころかすれていた。こういうケガをしたことがないだろう。……いや、普通しないか、こういうの。

ともかくそんな蒔田……に、サチさんがレナータちゃんをかばうようにして立った。

だけど当のレナータちゃんが、逆にサチさんより前に出てしまう。まだ敵が健在で、身体に受けた熱の攻撃も解けていないはずなのに。

「ナートチカ……?」

「ダメ……お母さん、わたしのために無茶しないで！ あの人スタンド使いだよ！」

「けれどナートチカ！」

「知ってるでしょ、スタンドはスタンド使いにしか見えないの！ だから、わたしがお母さんを守るの！」

まるで駄々っ子のように言うレナータちゃん。

けれどそれは表面上のもの。彼女の目は、燃えていた。

マジか。

わたしは素直にそう思った。

そりゃあ彼女は見た目通りの年齢じゃあないけどさ。でも精神年齢は見た目相応のはずなだけだ。

なのにあなたは、ここにきて戦おうなんて言うの。スタンド使いが蒔田のほうだとするなら、まだ身体の不調だって回復していないはずなのに。

わたしがその境地に至ったのは、さて何歳のことだったやら……。魂の格が違うと言われているような気がして、なんだか顔が引きつるのがとめられないよ。

「ダメよナートチカ！ あなたはまだ子供なんだから、そんな危険なことしなくっても！ そういうことは大人に任せておけばいいよッ！」

「やだ！ だって、わたしきつき失敗しちゃったんだもん！ だから戦うの！ 戦って、オメイヘンジョウするの！」

おっと。妙な感慨を覚えてる場合じゃあないや。このままだと敵前でスキをさらしまくることになる。

「サチさん！ 気持ちはわかるけど、レナータちゃんにやらせてみよう！」

「!? アルフィー様ツ！」

「子供を大事にしすぎるあまり、子供の意志を封じ込めるのは絶対にやっちゃあいけないことだよ！ 芽吹いた意志は尊重してあげなくっちゃあならないツ！ 子供はいつか大人になって、大人は子供より先に死ぬのが自然の摂理なんだから！」

「——ツツ!!」

上位者であり、仕える主であるわたしの言葉に、それでも納得できないのかサチさんが砕ける勢いで歯をかみしめている。

だけども意思が壊れるところまでは行ってないみたいだ。踏みとどまっている。踏みとどまれている。踏みとどまれている。彼女のタガは——まだ外れ切っていない！

「レナータちゃん、わたしが許すよ。何かあってもわたしがフォローする。だから思いつきりやっちゃいなさい！」

「うん！ ……じゃなくって、はい！」

わたしの言葉を受けて、レナータちゃんは両手を握ってふんすと返事する。

「ふ、ふふ、ふふふふふ！ アタシと同じ力を持つてるなんて……ああ！ これはきつと運命だわ！ お釈迦様、この出会いに感謝します！ さあレナータちゃん、アタシと愛し合いましょお！」

右手を失いながらも、いまだ像が一切ブレないスタンドと共に蒔田が立ち上がったのは、ほぼ同時だった。あちらもやる気は十分らしい。

……やる気、っていうか、なんかこう、やる気って感じるけど……え？ まさかとは思うけど、この人口リコンのレズビアン？ この医院、地獄か!?

というか、こんな出会いをあのブツダが導いたわけないだろうふざけないで！ ブツダに謝れ！

だけどレナータちゃんは負けていなかった。気持ち悪い変態の言動にひるみはしたけど、ぐつとこらえて相手を正面から見すえて、自らの半身の名を告げる。

「【ホーリー&ブライト】！」

直後、レナータちゃんの後ろにメカニカルな猫が浮かび上がった。

その像は。

確たる存在感を持って、レナータちゃんの声に応えた。

『MY A A A A A Y!!』

「えええーいつー！」

先にしかけたのはレナータちゃんだ。彼女は本体である自身とスタンド、双方が戦いに向いている。だからこそ、先手必勝で突っ込むのはそこまで悪い選択肢じゃあないだろう。

普通ならば。

確かに、蒔田はレナータちゃんの動きに対応できていない。蒔田のスタンドも、「ホーリー&ブライト」についていけない。あれはわたしですら目で追うのがやっとの速さで動けるから無理もない。

にもかかわらず、蒔田が動揺した様子はない。そして敗北を受け入れた様子でもない。あれは間違いなく、ダメージ覚悟でカウンターを狙っている……か、もしくは最初から問題ないと判断しているかだけだ。

「う……っ、ぐ、」

……どうやら後者のようだ。攻撃をしかけたレナータちゃんとスタンドの動きが、途中で明らかに鈍くなったのだ。

それでも攻撃をやめず、蒔田に退かせたのは見事な覚悟と褒めてあげなきゃあいけないだろう。蒔田は退いていなかったら、恐らく今ので足の骨を砕かれていただろうから。

「さっきもそうだけど、アナタすごいよね？ とつくに体温は四十度以上行ってるはずなのに、なんで動けるかしら！ 素敵だね、元気なのね！ きつとあっちのほうも元気なんでしょうねえ、うふ、うふ、う

ふふふふふ！ アナタに愛してもらうのが楽しみよ！ 壊れるくらい愛してくれそうで！」

「四十度!？」

ヒートアップする変態をよそに、サチさんが彼女だけ住んでる世界が違うんじゃないかってくらいシリアスに悲鳴を上げた。

わたしは驚かないけどなあ。むしろやっぱりなって感じた。本体とスタンドが目の前にいるこの状況で、攻撃の対象に攻撃——この場合は温度を上げる能力をさらに上積みすることは、想像できるもの。

たぶん、緑色の赤ちゃんみたいに距離に応じて自動で影響度が変わるんだろうけど、それはともかく。

レナータちゃんがするべきは、まず遠巻きにレーザーで面制圧することだった。確かに触れることが能力発動の鍵になっているスタンドは多いけど、そうじゃあないスタンドだって多いんだ。見た感じ近距離。パワー型だし、近づいたのは迂闊だったね。

この辺りは、経験不足が響いた感じかな。そもそもの話、近距離。パワー型でもないレナータちゃんが、スタンドと一緒に前に出る必要はなかったわけだし。

とはいえ、それを責めるつもりはない。次に活かしてくれればいい。大丈夫、わたしが死なせないし……何より、

「こ、これくらい、へいき、です……っ！」

レナータちゃんはまだ挫けていない。「ホーリー&ブライト」も、調子は悪そうだけどサイジョン 自体はまったく揺らいでいない。

まあその姿を見るサチさんの顔は、この世の終わりみたいに見えるんだけどね……。自分の子供なんだから、もう少し信じてあげよう？

「あはあん！ こんなかわいい幼女に切ってもらっちゃった！ この傷は治さずにとっておきましょう！」

レナータちゃんが荒い呼吸をつきながらも、手を振るう。いつの間にか爪が鋭利に伸びていて、生半可な刃物よりはよっぽど切れるだろうそれが、蒔田を襲う。

……襲う？ 襲ってるのかなこれ。攻撃を加えてるはずなのに、逆

に見えるの何かのバグでしょ。

いやもうなんていうか、ホントにひどいね!? ロリコンでレズビアンで、それに加えてDMなのかこの人!? とんだ三重苦があったもんだよ!

どつちにしても、まだまだ油断は禁物だぞレナータちゃん。顔が引きつつてるのは、相手が強いからとかじゃあないのは明白だけど。

「あつ、それはちよつともらいたくない愛ね!」

急所に放たれた攻撃を、蒔田がスタンドでしのごうとした。致命傷だけは回避するのか。小賢しい人だな。そこはどんな攻撃でも受ければいいのに。

しかしそれは「ホーリー&ブライト」が許さなかった。尻尾を振るってスタンドの腕を打ちすえ、足利二つ引が描かれたスタンドの手を大きくそらす。

さらにスタンドの注意が「ホーリー&ブライト」に移るや否や、「ホーリー&ブライト」が強烈な光を放った。

「きゃ!」

音はほとんどない。だけどそれは、スタングレネードと呼ぶにふさわしい光量で……スタンド越しにそれを食らった蒔田は本能的に目をつむった。つむってしまった。

このスキを、レナータちゃんが見逃すはずがない。彼女は力を振り絞ると、蒔田の鳩尾目がけて強力なパンチを叩き込ん……

「えっ!」

だが、スタンドのよどみない動きでそれを受け止めた。

人型のそれは、やっぱり近距離。パワー型なんだろう。レナータちゃんの一撃を、しっかりと押しとどめている。

「うふふふ、残念でした! アタシはね、その気になれば熱でものを認識できるのよ!」

! なるほど、つまりサーモグラフィみたいに周囲を把握できるのか。熱を操る能力なら、そういう補助的な能力を併せ持っていても不思議じゃあない。変態のくせに無駄に多芸だな!?

「でもって……うふふ、これで一旦終わりにしましょう? アタシの愛

を受け取ってちようだい！　それで、一緒にキモチイイことしましよおねえツ！」

レナータちゃんの手を受け止めていたスタンドの手。そこにあった足利二つ引がぎゅるんと回転し始めた。

恐らく、能力をさらに強くしたんだろう。これで終わり、なんて言うってことは、生き物が耐えられる温度を遥かに超える温度まで上げられるのかもしれない。

「アルフィー、さま、まって、ください……！」

一気にそこまでいくとなると、危険だ。そう思っただけに入ろうとしたんだけど、当のレナータちゃんにとめられてしまった。

「レナータちゃん？」

「は……ん、ふっ……♡　わたし、まだ、できますから……！　やれませ、から……っ！」

「何を言うのよナートチカ！」

マジか。

改めてそう思った。この子、こんなに根性のある子だったとは……。

いやでも、確かにわたしがスタンドでの戦いを教えたときも、だいぶ食らいついてきたっけか。元々負けず嫌いなのかな。いや、負けず嫌いだからこそスタンドに目覚めるのかもしれない。

「……わかったよ」

「アルフィー様!？」

正気ですか、と隣から問われたけど、正気だ。やると決めたらやる覚悟のある人間の決意に、第三者が水を指すものじゃあない。

とはいえ、このままだと危ないのは間違いないだろう。だから、

「【センド・マイハート】」

わたしはレナータちゃんに、ハートの矢を撃ち込んだ。わたしの生命力を与える矢。柱の一族と同等の回復力、耐久力を与える矢。

これがレナータちゃんの覚悟に抵触しない、ギリギリの範囲だろう。

「二分だよ。それ以上はドクターストップだからね」

「なあにそれ、かわいいそう……矢なんて撃ち込まれて……でも大丈夫よお！ アタシの力で気持ち良さに変わるからねえ！」

「はい……【ホーリー&ブライト】！」

わたしからエネルギーを受け取ったレナータちゃんが、相棒を呼ぶ。すると猫の姿のスタンドが、本体を苦しめる敵の言葉を無視してレーザーを放った。

まあ攻撃を見越してか、蒔田のスタンドは一足早く離れたけど……これでいい。今はダメージよりも、距離を取ることのほうが重要だからね。

レナータちゃんも追わない。接近は悪手だと悟ったんだろう。レーザーによる制圧に切り替えた。

ただ、やっぱり限界は近いんだろう。ぶるぶる震えていて、荒い呼吸が耳につく。おかげでレーザーと言ってもかなり威力が低くなっている、あれじゃあとても決め手にはならないだろう。

蒔田のほうもそれに気づいたようだ。ついでに、さっきの目潰しからも回復してきたらしい。嫌らしい色を浮かべた目を、レナータちゃんに向けていた。

「うふふ、がんばるわね……いいわね、その諦めてない目、ぞくぞくしちゃう！ すき!! でも……そろそろ諦めて、キモチイイことだけ考えましょうよお、ねえ!!」

そして普通にスタンドを前に出して、突っ込んできた。ほとんど守る様子を見せない上に、傷を負えば追うほど恍惚としていく辺り、やっぱりこの人ドMでしょ。わたしは何を見せられてるんだ。

対するレナータちゃんは退かない。逃げない。捕まる前に終わりにするとも言うっているかのように、レーザーを収束させて威力を上げた。

それは確かに蒔田の身体をとらえたけど……敵もさるもの。太ももに大きな穴が空いたのに、最初と違って悲鳴すら上げない。

そして——遂に、レナータちゃんの頭にスタンドの手が触れた。

「終わったね」

「ナートチカアアツ!!」

「……!?!」

反応は三者三様。

しかし、納得しているのはわたしだけだった。サチさんは娘の死を幻視したのか絶叫をあげたし、蒔田は……。

——触れたはずなのに触れた感覚がなくて、うろたえている。慌てて温度感知を行ったみたいだけど、もう遅い。その能力はいい能力だけど、常時展開するものじゃあなかったのが命取りだったね。

「ぶが!?!」

次の瞬間。蒔田の頭に壊れた南京錠が猛烈なスピードでぶつかり、彼女はそのまま横へ派手に倒れ込んだ。

受け身も取れずに床を転がった彼女は……ああ、どうやら気絶したようだ。スタンドも消えた。

「勝ったね、レナータちゃん」

「は、い……!?!」

わたしは南京錠が飛んできたほうに顔を向ける。そこには、どこからともなく現れたように見えたレナータちゃんが、ものすごい荒い呼吸をしながらも立っていた。

歯を食いしばって、目には涙をためて、全身びくびく震えていて、足元には雫が滴っている……のは……あー、これ……。

蒔田のスタンド……やっぱりそういうスタンドなのか……。最初は単に、物質の温度を上げる能力だと思ってたけど……完全に薄い本じゃあないか……。

ただ真面目な話、敵として戦うとなるとわりと厄介だよね……。その、そういう気分になると集中力散漫になるし、一度昇っちゃうとかなり体力使うし、余韻も続くし……デバフとして見るとんでもなくやりづらい。

おまけにそういう感覚になるのなんて初めてだったろうに、よく耐えたなあレナータちゃん……偉い。戻ったら目いっぱい褒めてあげないとね。

でもこれ、何があったのか詳しいことは教えてないほうがいいんだろうなあ……。

「え!? え、ええ……!? ど、どういう……!?」

一方、シリアスの世界に置いてけぼりなのがサチさんだ。彼女はレナータちゃんがどうして勝利したのかもまだわかっていないらしい。仕方ない、説明しておこうか。ついでに蒔田も縛ろう。こいつも手首首を後ろ手に連結させちゃおう。

「……透明化と幻影だよね。周りには【ホーリー&ブライト】を使役しているレナータちゃんの姿を見せておいて、自分自身は透明になって場所を移した。そしてスキを見て適当なものを頭にぶん投げた、と」「は、い……『その気になれば』、って、言って、だから……わたし、を、見えてるなら、引つかかって、くれる、って、思い、ました……♡」「いい判断だったと思うよ。あれだけ追い詰められた状況で、それができたなら上出来だ。わたしよりもよっぽどすごいよ」

「で、でも、アルフィーさまには、わかっちゃい、ました、し……。わたし、音も気配も、頑張つて、消した、つもりなんです、けど……♡」「わたし、というかわたしたちの種族はこの距離なら全員の心音聞き分けられるからね……単に身体スペックの暴力だよ」

「あはあ……さすがは神さまです……♡」

わたしが目を逸らしながら答えれば、納得したのか満面の笑みと尊敬の眼差しを向けてくるレナータちゃん。

ただ……うーん、状況が状況だけに仕方ないとはいえ、すごい色気だ。

顔なんてすごいというか、素直にエロい。とてもに肉体年齢十歳には見えないぞ……目の毒だよこれ。わたしですら一瞬見惚れそうになったんだから、その筋の人に見せたら他のこと何にも考えられなくなるんじゃないかなあ。

……なんか心底複雑な気持ちになったけど、とりあえずそういうことを考えるのはやめておこう。うん。

「身体はまだ熱い?」

レナータちゃんが首を振る。

ということ、今は昂った身体が余韻に支配されてるだけで、敵スタンドの影響からは脱したのかな。それなら、【センド・マイハート】

もまだ刺さってるし、彼女はサチさんに任せてしまっていていいだろう。わたしは犯罪者二人の余罪を追及しようかな。

「ナートチカ、大丈夫だった!? 身体は悪くない!」

「ひゃあん!? お、おかあさん、いま、ちよつと……ちよつとだけ、そつとしいてほしいの……なんかね、からだがね、びくんびくんするから……♡」

「は……!?!」

……任せないほうがよかったかもしれない。最後の最後でやらかした。

そうだよねえ、それがどういうものか、サチさんは普通にわかるよね……。それでいて親バカとききたもんだし……。

うん……見える。見えるぞ。サチさんの周囲に、「ゴゴゴゴゴ」って擬音語が見える……!

「わ、私の、私のナートチカに……ツ、あの色情魔ども……ツツ」

「あー……サチさん。なんていうかその……うん。半分だけ許可する」

「……はいツツ!!」

……この日、小田原医院から「WRYYYYYY!!」という雄叫びが響き渡ったのを知るものは少ない。

何はともあれ、レナータちゃん初の実戦は辛勝という形で幕が閉じたのだった。

3 1. 冥刀・神狼姫

杜王村の後始末には、それなりの時間を要した。

何せあの二人、およそ十年の間に数えきれないほどたくさんの子供に手を出していたんだよ。調べれば調べるほど被害者がぼろぼろ出てきて、これが泥沼かと思っただくらいだ。

しかもただの犯罪じゃあない、性犯罪だ。それだけの被害者がいれば、いくら被害者が子供とはいえ、妊娠してしまった子もそこそこいて……。

おまけにタチの悪いことに、彼女たちからは被害の記憶がほとんど残されていなかった。あのスタンド、そういう能力も持っていたらしい。まさに犯罪にうってつけのスタンドだったわけだ。

それでどうなったかといえ、彼女たちにしてみれば何にも身に覚えがないのがある日突然妊娠した、という怪現象に見舞われていたって形になってたんだよね。完全に薄い本案件だ。呆れてものも言えない。

けどそんな妊娠を素直に受け入れられる人間なんて、そうはいないわけで。いくら二十一世紀よりは性的に奔放な時代とはいえ、謎に包まれた現象には忌避感を抱くのが人情なもの。こればかりは仕方ない。

仕方ないけれど、結果として悲惨な末路を辿った子供たちのなんと多いことか。これが吐き気を催す邪悪というものかと、頭が沸騰しそうになったよ。

そんなわけでわたしたちは犯人二人には然るべき処置を施した上で、二人の被害に遭って、かつ今までまっとうに扱われていなかった子供たちを引き取ることにした。その辺の手続きなんかは手間取ったおかげで、東京に戻るのには予定よりだいぶ遅くなってしまった。

でも後悔はしてない。わたしの過ぎた力は、誰かを助けるためのものだから。……まあ、社会的な力はあるまりないから、そこはサチさんたちルージュフィッシュに助けてもらったわけだけだね。

そんなわけで諸々済ませてやっと東京に戻ってきたわたしたちは、

そこからさらに連れてきた子たちに関わる諸々の処理もやることになったから……えーと、一か月くらい？ この件に関係したことに忙殺されてたわけだよ。そういう意味でもあの二人、許すまじ。

まあでも、アヌビス神の打ち直しが終わるまではどっちみち日本を出るわけにはいかなかったし、この辺は結果オーライだろう。時間があつたらあつたで、どうせ観光しかしないだろうし。

で、六月も終わりに近づいたある日。イギリスに戻る手配をしていたわたしたちに、二枚屋さんからアヌビス神の打ち直しが完了したという知らせが届いてね。これはすぐさま取りに行かねばということ、わたしは再度米花町を訪ねることになった。

なつただけ……駅を出て少ししたところで野次馬に囲まれた建物と、彼らをさばくお巡りさんたちの姿を見て、わたしはスンツと真顔になった。

「何かあつたのでしょうか」

「米花町だし、殺人事件だろうなあ……」

サチさんの問いに答えて、ため息をつく。

……あ、うん、今回はサチさんたちも一緒だよ。目的だった遺跡の鍵は手に入れたし、彼女たちと別行動する必要もないからね。

ともあれ、その辺りにいた人にそれとなく聞いてみたら案の定、殺人事件らしい。喫茶店で人が殺されたんだとか。

なんというか、さすが米花町って感じだよ……。こうもポンポン人が死ぬとかホントもう……。もうねえ……。

まあでも、巻き込まれなかつただけよしとするべきなのかなあ。うっかり容疑なんてかけられようものなら、どれだけ拘束されるかわかんないもんね。「ネヴァーフエード」があれば犯人は捜せるだろうから、最悪の事態にはならないだろうけど、それでもねえ。

……実を言えば今回、二枚屋さんを訪ねるに当たってアポの時間ちようどくらいに到着するよう、調整してやってきたんだよね。わたしとしては早めに行動したいんだけど、迂闊に米花町で時間を潰すと何かしら事件に巻き込まれると思ったからさ。

最初は考えすぎかなあつて思ってたんだけど、結果としてその予測

は見事に当たってしまった。喫茶店とか、時間潰しの選択肢として十分じゃあないか。立地的にも二枚屋さんちへの道中だし、早く来てたらかわたり絶対ここで時間潰してたと思う。当たっても全然嬉しくないけど。

……人が亡くなってることに對しては、思うところもある。でもそれにしたって、既に警察がこうして大々的に動いてる状況で一般人がしゃしゃり出るのはお門違いだ。亡くなられた方のご冥福は祈るけれど、この場はスルーさせていただくとしよう。

「またタワノビッチの小僧か……これで何回目だ？」

「知らないわよ。本人も知らないんじゃない？ さすが死神って感じよねえ」

「怖い怖い。あいつの周りにいたら命がいくつあっても足りやしないぜ」

……野次馬の後ろを通り過ぎる途中、気になる単語が聞こえた。

死神、死神かあ。まさかとは思うけど、コナン君みたいに行く先々で事件が起こるような人がいるんだろうか。この時代に既に？ 探偵さんとかだろうか？

……いやでもそれより、コナン世界ならともかくここはジョジョ世界だ。この世界で、行く先々で事件に巻き込まれてるんだとしたら、それはもはやスタンドを疑うべきだよな。

そもそも、こんな頻繁に事件が起こるのがまずおかしいんだ。前に来たときも思ったけどこの街、やっぱり何かしらあるんじゃないだろうか。

個人のスタンドなのか、現象としてのスタンドなのか。あるいは何らかの意図があるのか、ないのか。それらによって対応も変わってくるけど……もう少ししたらイギリスに戻らなきゃいけない。すぐに行けることはないよなあ。

でも、いずれしつかりと確認したほうがいいかもしれない。人の死にまくる街とか、普通に嫌だもん。

まあ、原因がわかったところで解決できるかどうかはまた別なんだけどね。カツアゲロードの「オータム・リーブス」みたいな自然現象

系のスタンドだと、どうにもならない可能性すらある。この辺はフタを開けてみないとわからないんだよなあ……。

……と、そうこうしてるうちに、目的地に到着だ。前回と同じく、女性に案内されて鍛冶場に入る。

「おオ、アルフィーさんいらつしやい。ようこそおいでなすつたねエ」
出迎えてくれた二枚屋さんは、以前見たときより少し痩せたようだった。だけど目の力はむしろみなぎっていて、前より輝いて見える。

「こんにちは、二枚屋さん。調子はどう？」

「へへッ、おかげさまで絶好調でさア。相棒も前より動きが良くなつたし、今はもう刀をこさえるのが楽しくて仕方ねエ」

そう言つて笑う彼の様子は、どこからどう見てもヤバい人だ。見た目で損してるというか、見た目に頓着がないからこそなんだろうけど、普通の人はなるほど妖刀の専門家だつて納得しかないだろう。

一方、初めての鍛冶場にサチさんとレナータちゃんは興味深そうに周りを見渡している。特にレナータちゃんは、持ち前の好奇心で目がキラキラしてる。うんうん、その気持ちは今後も持ち続けてほしいもんだね。

さて、それはともかく。

「それじゃあ二枚屋さん、見せてもらえる？」

「へい！……こちらでございやすー」

わたしに応じて二枚屋さんが出してきたのは、漆によるのか美しい黒で彩られた鞘に納まる一振りの刀だった。

その鞘には、手の込んだ繊細な金細工が施されている。細工自体は少なく、その範囲も規模もささやかではあるけれど、その実態はとてつもない技術がいるだろう繊細なものだ。実に日本らしい美意識を感じる。

柄も同様に黒いけれど、覆う柄糸は鮮やかな赤だ。それは間違いなく糸のはずなのに、まるで宝石のように輝いて見える。これは間違いなく、名の知れた職人の仕事だろう。

これらの装飾に合わせたのだろう、鍔は柄と鞘の間を取るような

……いや、とり持つような穏やかな風合いだ。派手ではない。ないけれど、装飾は鞘よりも凝っている。カーバンクルらしき文様の地透かしは人の目を惹くだろう。洗練された構図に垣間見える確かな技術が光っている。

これだけでも、いかにこの刀に力が入れているかがよくわかる。わかるけれど、やっぱり刀の主役は刀身だ。

「名付けて『冥刀・神狼姫』。元の姿を残しつつ、アルフィーさんに合うように誂えやした」

二枚屋さんの説明もほどほどに、わたしは引き寄せられるように、けれど静かに、丁寧に刀を……神狼姫と新しく名付けられたこの刀を抜いた。

「おお……」

「わあ……きれい……」

途端、サチさんとレナータちゃんが心を奪われたように嘆息した。無理もない。それだけこの神狼姫は美しかったのだ。

見た目の印象で言えば、三日月宗近が近いかな？ やや細身で、反りが高め。踏ん張りも強いようで、立ててかざして見るととても優美な姿をしている。

けれど刃文は宗近と違って三本杉で、波打つ乱れは三本ごとに高さ飛び出すような文様となっていた。

これが光を受けて、カーズ様の輝彩滑刀のような輝きを放つのだ。見た目は間違いなく、満点と言えるだろう。前世からそれなりに知識のあるわたしだって言葉を失ったんだもの、サチさんたちはなおさらだよな。

いやそれにしても、元のアヌビス神も輝くばかりに光を反射する名刀だったけど、生まれ変わったこの刀も負けていないぞ。趣が日本刀のそれになったから、単純に比べにくいというのもあるけどね。

『アヌビス？』

抜いた神狼姫を構えながら、スタンドを通して問いかけてみる。しかし返事はなかった。なかったけど……。

なんでかな。彼がそこにいる、ということは何んとなく確信でき

た。不思議な気分だ。

眠ってるのかな？ まあいいや、いるのが間違いないなら、とりあえずは。

次は神狼姫を振ってみる。わたし自身は剣術の心得はほとんどないから、それっぽく、だけど。

それでも、柱の一族の腕力に負けずびたりとついてくる。いい感じだ。この力に負けるようじゃあ、実用はともできないもんね。

と、そこに二枚屋さんが和紙をふわりと空中に巻き上げた。薄い、向こう側がほとんど見えるほどに薄い紙だ。

それを見たわたしは、なるほどと一人納得しつつ、その和紙へ刃を振り下ろす。

すると和紙は、音もなく真つ二つになった。すさまじい切れ味だ。思わず「おお」って言っちゃったよ。

「……すごいね。これは元のアヌビス神を超えたかもしれない」

「ふふふ、今のおいらアが出せる全力でこしらえましたぜ。当然っちゃア当然でさア！」

満足したわたしは、刀を納めて改めて二枚屋さんに向き直る。彼はあの修羅のような笑みを浮かべて、けれど自信たっぷりに頷いてくれた。

「ちなみに、宿つてたスタンドは……？」

「今は休眠中でした。転写されたアルフィーさんの魂と同居できるように馴染めば、自然と目覚めるはずですが。それまでは、なるべくアルフィーさんがこいつを持ち歩いてしつかり馴染ませてやってくだせエ」

「なるほどね。よくわかったよ。ありがとう二枚屋さん、素晴らしい仕事だった」

わたしの掛け値なしの賞賛に、二枚屋さんはあの笑顔のまま頭を下げる。

そんな彼を前に、わたしはサチさんに目で合図した。

彼女はすぐに応じて、持ってきたケースからお金をすべて二枚屋さんに差し出す。これで本来の報酬に、さらに色をつけた額だ。

念のため多めに持ってきて正解だね。それだけの価値があるって
確信できる出来栄えだった。これで出し渋るなんて、ただでさえ威厳
のないわたしの沽券にかかわるもの。ここは大盤振る舞いだ。

「……確かに、頂戴いたしやした」

かくして、アヌビス神は生まれ変わったのだった。

3.2. 死神のいる街 2

冥刀・神狼姫を受け取りほくほく顔のわたしは、サチさんたちを引き連れて気分良く米花駅に向かっていった。日は既に暮れていて、日光を気にしなくてよくなってるのもテンションを上げる一因だ。

ところがその途中、川にかかった橋の欄干に両手をかけて川面を覗き込んだまま動かない少年に出くわしてしまい、冷や水を浴びせられたようにテンションは急降下した。

なんだってこんなタイミングで……とは思ったけど、あのまま川に飛び込んだりしたら寝覚めが悪い。わたしは思わず声をかけることにした。

「ちよつと、早まらないで！ 死んで花実が咲くわけがないんだから！」

「わああああーっ!?!」

「わっやっば!?!」

どうやら周りのことは完全に意識外だったみたいで、わたしに声をかけられた少年は派手に驚き、そのまま橋の欄干を越えかかった。

大慌てで腕を伸ばして（文字通りぐーんと伸ばした）引き止めたけど、心臓が悪いよ！

「だ、大丈夫?」

「は、はあ、はあ、はい……ああびつくりした……」

それはわたしのセリフだよ、とは思ったけど、確かに後ろから声をかけたわけだし、これについては何も言うまい。

それよりも、だ。

「何か思うところがあるみたいだけど、自殺なんてしちやダメだよ？

辛いことがあるならお姉さんに言ってみて?」

「え……いや、死ぬつもりはまったくないですけど……」

「ええ……じゃあなんで川を覗き込んでぼーつとしてたの……」

「ちよつと考えごとを……」

「……本当に死ぬつもりはないんだよね?」

「ないですよ。病弱な妹を残して死ぬなんてできません」

少年は強い眼差しで断言した。

したものの、すぐに語調を弱めて苦笑する。

「……ただ、今日アルバイトをしていたお店をクビになってしまいましてね……これからどうしようかな、と」

「あー……」

「いや、生活できないわけじゃあないんですけど。妹のことを考えると、稼ぎは多いほうがいいだろうと思うんですよ」

「なるほどね……」

彼の言うことが本当なら、確かに悲観して死を選ぶほどの状況には思えない。どうやら、本当に余計なお世話だったみたいだ。

とはいえ、バイト先をクビになるというのは穏やかじゃあないな。普通、よっぽどのがないとかクビになんてならないと思うけど。

「ちなみになんでクビになったの？」

「……ぼくが勤め始めて半月の間に、お店の関係したところで三件殺人事件がありました……」

「……は？」

なんて？

「今日なんて、遂にお店の中で殺人事件ですよ……。血まみれの女の人が便所で亡くなってましてね……。犯人は捕まりましたけど、それはそれとしてというやつです……」。

ふふ、どうせぼくは死神なので罵倒されるのは慣れっこですが、最初は気にするなって言って雇ってくれた店長が、今日はすっかり怯えていたのにはなかなか心に来ましたよ……」

フツと自嘲全開で笑う少年に、わたしは思わず引いてしまった。

これ、もしかしなくても今日駅を出たところで騒ぎになってたやつでは？

いやマジか、あの野次馬の会話、ガチだったのか。つてことはこの子、他にも行く先々で事件に？　なんていうか、同情しちゃうな……」。

いやでも、ということとは、

「じゃあ、もしかしてあなた、タワノビッチさん？」

「ええまあ……イワン・タワノビッチと言います。米花町の死神とは

何を隠そう、ぼくのことですよ……」

「おお……」

もう一度自嘲全開で笑ったイワン君に、わたしはどうリアクションすべきかちよつとわからなかった。

同じ死神でも、小五郎のおつちゃんみたいなお調子者じゃあないみたいだし、コナン君みたいな普段は気にしていない風というわけでもなさそうだ。

自分が死神呼ばわりされていることは受け入れてはいるけれど、それに動じないわけでも気にしないわけでもない。等身大の少年といった様子だ。

そんな少年に、どんなことを言えばいいのか、即断しかねたのだ。「ぼくを……存じないということとは、よそから来られたんですよね？」

あまりぼくに関わらないほうがいいですよ……ぼくの周りではね、昔から人が死ぬんです。信じられないかもしれませんが……そうなんですよ。ぼくは……ぼくは、悪霊に憑りつかれた死神なんです」

「……それは」

違うんじゃないか。

そう言おうとした瞬間、橋の向こうからやけに大きな音を響かせて車がやってきた。

「だ、誰かー！ ブレーキが利かないんだッ！ ドアも開かないんだよオオーツ！！ たっ、助けてくれー！！」

なんて悲鳴を伴いながらだ。思わず啞然としちゃったよ。

「……ほらね？」

イワン君は、肩をすくめてその車に顔を向ける。その目は、諦観の色に満ちていた。

彼はきつと、その決して長くはない人生でこういう瞬間をたくさん見てきたんだろう。それは確かに、色々と諦めてしまうのも無理はない。

そりゃあ、普通の人間はこんなところに出くわしても何もできないもんね。どうにかするにしたって、そもそも近づけないだろうし。

でも、そんなのはわたしには関係ない。

一般人の前でスタンドは使いたくないけれど、人の命がまさに今日の前で失われかけているのだ。わたしに何もしないという選択肢はあり得ない。

とはいえあの車くらいだと、運転手の人と合わせてもなおギリギリで「スターシッブ」の許容範囲かもしれない。それでスタンド空間に暴走カーが入るのはかなり困る。例の鍵も入れてあるんだ。

だけど他に彼を助ける手段は、それこそ誰もが視認できる変身くらいしかないので……。

「レナータちゃん、行ける?」

ここは素直に彼女に頼もう。たぶん彼女のほうが適任だろうしね。

「はいっ、お任せくださいー!」

彼女はこくと頷くと、すぐさま「ホーリー&ブライト」を出して暴走カーに差し向けた。

【ホーリー&ブライト】は遠隔操作型で、スタンドそのものの攻撃力は高くないけれど、動かせる射程範囲は広い。そしていくら非力とはいっても、人一人をくわえて移動するくらいの力はあるんだよね。

というわけで、

『MY A A A A Y!』

レナータちゃんの命令通り、【ホーリー&ブライト】は素早く動いて暴走カーのドアをレーザーでいい感じにくり抜くと、運転手の襟首をくわえてそこから引つ張り出した。この間、わずか三秒ほど。

「わーっ!?!」

運転手のおじさんには慣性によって勢いよく放り出されたように感じられただろうけど、そこは勘弁してほしい。

けれど実際は、スタンドによって保護されていたので見た目よりは軽症で済んでいるはずだ。傍目からもきつと。

そんな彼に、サチさんが駆け寄って抱き起こす。

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ……わ、わしは大丈夫だが……」

おじさんがそう答えるのと、制御を完全に失った車が橋の欄干に直撃した上に、勢いとまらず川の中へ真つ逆さまに落ちていくのは同時

だった。

もちろん、と言つていいかはわかんないけど……ともかく、派手な音と共に大きな水柱が巻き上がる。

「……た、高かったのに……」

そしておじさんは、がくりとその場にうずくまってしまった。

ああうん……そうだね……車はいつの時代でも基本、高い買い物だね……。この時代に自動車保険とかってあったっけ……？

そんな風に、やや場違いなことを考えていたわたしだったけれど。

「い、今のは……猫……？ 猫が、どこからともなく現れて……助けた……？ あれはまさか、レーザー？ 何が、どうなって……？ どういう法則によるものだ……？」

驚愕一色といった様子で、けれどやけに理屈っぽくぶつぶつぶやくイワン君の声に、ぎよつとした。思わず彼のほうにぐるんを顔を向ける。

そこには、やはり驚いてはいたものの、好奇心を隠せないといった様子のイワン君がいた。

まさか……まさか彼、スタンドが、見えている？

そして、ぎよつとしつつもわたしが彼を見とめた瞬間。

『イーーツー！』

ここにいる誰の声でも……それこそ、イワン君のものとも異なる声を伴って、白い触手のようなものが、イワン少年の背中から現れたのだ……！

うっそでしょ。

ここに来てそれは、ちよつと運がなさすぎない？

というか、米花町のスタンド使い率なんか高くない？ 例の矢でもあるの!?

あるの!?

それか、壁の目みたい等特殊な土地だったりするののか!?

ええいもう、とにかくスタンド攻撃をされるというなら仕方ない！

相手になろうじゃあないか！

「……！ や……やめろ！ や、やめるんだ、やめてくれ……！」
……ん？

イワン君……スタンドを押しとどめようとしてる……？ 手で無理やり押し込もうと……。

スタンドはスタンドでしか触れないのが原則だから、当然のようにそれはスカツと空振るんだけど……彼はそれも理解していないかのように、真つ青な顔でスタンドを何とかしようともがいている。

『イイーッ！』

「ダメだ！ そんな……ああ！ に、逃げて……ぼくの悪霊が彼女を襲ってしまおう！」

そして、本体であるはずのイワン君を無視して、白い触手が彼からはい出てきた。

……よく見たら像が定まっヴァイジョンていない。どこかイカっぽいけれど、胴体部分は見えずあくまで触手しか存在しないように見える。

なのに鳴き声は聞こえてきて……これは確かに、悪霊という表現がしっくり来るぞ。

来るけど……レナータちゃんを絡め取ろうとするのはNGだ。ただでさえちよつと前に薄い本案件に巻き込まれたんだ。そういう類のは完全に事務所NGですよ！

「えい」

「!? いッ、痛ッ、いったア!？」

触手を【コンフィデンス】の弓で叩き落とした。

うん、これを攻撃してイワン君にダメージが及ぶなら、やっぱりこれは彼のスタンドなんだろう。……あ、消えた。

ふむ。これが彼のスタンドだとして……それなのにさっきの様子、態度は……まさか、スタンドを制御できていない？

「イワン君、それ……」

「は……ッ！ ち、違……違う、ぼくじゃない、ぼくじゃあないんだ！ 悪霊が勝手に……！」

「悪霊……もしかして、君の周りで人が死ぬのはそういう？」

「そ、そうだ……そうだよ……言っただろう、ぼくには悪霊が憑りついているんだ……！ だから、だからぼくは死神なんだ……！」

先ほどまでの物静かどこか芝居がかった態度から一変して、イワ

ン君は震えあがって絶望的な顔をしていた。それはさながら、絶対に見つかってはいけない秘密を見つかってしまった様子で……。なるほど、彼が諦めたような顔をしていたのはこっちが原因なのか。

どうにかしようにもどうにもならない。触ることすらできない、謎の触手が人々に危害を加えている。けれどそれは他人には見えなくて……自分独りでどうにかするしかないのに、何もできない。

あの目は、そういうことなんだね。

「……サチさん、ちよつとこの場は任せるよ」

「はい？ ええと、はい、畏まりました」

そういうことなら……いや、そうでなくとも、このままじゃあいけない。最悪の場合、スタンドに憑り殺される可能性すらあるんだ。それは見過ごせない。

そう判断したわたしはイワン君の手を取って抱き上げると、集まりつつあるやじ馬たちの目を逃れるべくこの場を離れた。人間ではありえない挙動で移動することになったけど、夜だし、人の目は事故のほうに向いていた。たぶんセーフだろう。

イワン君に対しても、彼がスタンドを視認できるならごまかすことは可能だろうし。

なんて多少自己弁護しつつわたしがたどり着いたのは、人気のない雑木林。

「な、え？ え……何を……」

突然のこと過ぎて、イワン君は目を白黒させている。びつくりしたからか、とりあえず直前までのマイナスに傾いた感情は多少リセットされたみたいだ。よし。

「イワン君……その悪霊、制御できるようになろうー！」

「え……」

そして彼は、わたしの言葉にぽかんとしたのだった。

33. アルファイーちゃんのスタンド講座

制御できていないスタンドが危険なものだということは、原作でも十分描写されている。

第3部ではまさにホリイさんがそれで死にかけてし、仗助もこの夕イミングでスタンドが暴走状態になって危篤に陥っている。6部でもDIOの息子たちを襲ったスタンドの悪影響は心に来るものがあった。

さらにはあの承太郎でさえ、本体の危機にはならなかったものの、最初は「スタープラチナ」を制御できず四人を病院送りにするほどの大暴れをしていた。その際に与えた怪我は骨折だけにとどまらず、男としての急所すら潰して……というものだから、制御下にならないスタンドがいかに危険かは深く考えるまでもないだろう。本体としても周囲としても、危険しかない。

じゃあイワン君はというと……話を聞いた範囲での推測ではあるけど、どうやら周囲の人間の負の感情を増幅させることで暴力沙汰を起こさせたり、道具に不具合を起こして事故死させたりと、そういう作用を及ぼしているようだ。

もちろん彼はとめようと毎回必死になっているらしいけど、残念ながら今のところその甲斐はなさそうだ。本人が問題を認識してのどのようにもならないという状況は、承太郎の場合と似ているかも。

じゃあどうすればいいか、だけど……その、一万年以上生きてきてこの結論もなんだかなとは思っただけど、正直……荒療治しかないですね。

いやだって、しょうがないじゃあないか！ スタンドってのは本体がその精神力で動かすものなんだもの！ 必要なのは善悪に関係ない強い意志以外にないんだもの！

そして精神力なんて、簡単にどうこうなるものじゃあないでしょ。精神的な成長は現実にあるものだけど、だからって簡単に出来たら世の中もつとうまく回ってる。

その精神的な成長を強制的に促せるとしたら、それこそ生命の危機

が訪れているようなときくらいのものだ。他にもやりようはあるだろうけど、やろうとすると準備にもものすごく時間や手間がかかる。だから原作でジョセフとアヴドウルが承太郎にやったのは、奇しくも最適解なのだ。

「ちなみに、身体から完全に離れるタイプならわたし封印できるんだけど……」

一通りの説明を終えて、最後にそう言いながらイワン君を見たところ……彼のスタンドは、身体からにゆるりと出ては来るけど繋がったまま。どうやら荒療治するしかなさそうさ。

「……ダメそうなので、荒療治しようと思うんだけど大丈夫?」

「……ちなみに何をするんですか」

「殺気全開で攻撃します」

「え!」

顔芸並みの表情がわたしを凝視した。

そりやそうさ。平和に（米花町で平和もクソもないとは思うけど）生きていた少年にそんなこと言つて、普通にリアクションされるほうが驚く。十三歳くらいるとき、ハイジャックに巻き込まれたのに平然としていたジョセフがおかしいんだよなあ。

「大丈夫、殺しはしないよ。ちゃんと寸止めするから」

「ほ……本当に大丈夫なんでしょうね?! 妹が幸せになるまでぼくは死ねないんですよ!」

「大丈夫大丈夫、こう見えて実績はあるんだから」

えへんと胸を張る。

そう、わたしには実績がある。そもそもわたしは一万年以上の人生の中で、こうした暴走スタンドを多く見てきた。それが原因で死に至った人もたくさん見ている。

そのすべてを救えたわけじゃあないけれど、この荒療治を受けると決断した人はすべて暴走を止めることに成功しているのだ。

……まあ、「殺す気で攻撃するよ」と言われて「わかりましたお願いします」と返せる人は、そもそもスタンドを制御するだけの器ってだけなんだろうなとは思うけどね。

さて、イワン君はどうか……と思いつながら彼を観察する。

彼はしばらく葛藤していた。青白い顔で何度も深呼吸をしながら、小さくうろろしたり、顎に手を当てて何やらぶつぶつとつぶやきまくったり。

だけどやはり、現状を放っておくのはよくないと思っっているんだろう。最終的には決意を込めた顔で、わたしに正面から向き直ってきた。

「……よろしくお願いします。ぼくは、何より妹のためにこの悪霊を制御したい！」

「グッド！ それじゃあ行くよ」

一度びしりと彼を指さしたのち、わたしは自らのスタンドをこの手に取る。

ルビーのような、赤い輝きを放つ弓。一万年以上に渡って共に過ごしてきた、わたしの半身「コンフィデンス」。

弦を引き絞れば、瞬時に矢が現れてその鎌がイワン少年を見据える。

「……！ ゆ、弓矢……」

「そう、あなたが言う悪霊をわたしも持つてるんだよ。わたしのは、弓と矢を形成して放つもので勝手に動いたり絶対じゃないんだけど。わたしの意志で自在に動かせるものって意味では一緒だよ。……さっき言った通り寸止めはするけど、気をつけてね。当たったらシャレにならないから」

言い終わると同時に、わたしは自分にできる全力の殺気を解放した。

まあ本当にできてるかどうかは、ぶっちゃけわかんなかったりするんだけどね。だってわたし、基本誰も殺したくない人だし……そもそも元一般人に殺気がどうのこうのなんて簡単にできるはずがないでしょ？

でもさすがに、そこそこの至近距離で矢で頭に狙いをつけられてる状況は、普通の人なら殺気だって感じるでしょう。たぶん。

イワン君も先ほど以上に青白い顔で、ごくりとのどを鳴らして一歩

後ずさつてるし、ちゃんと殺気は出せてるはずだよ。うん。

「それじゃあ……行くよ。【コンフィデンス】！」

弦を引き絞っていた手を離れた。瞬間、蓄えられていたエネルギーは一気に解放され、それを乗せた矢がものすごいスピードで走り出す。

イワン君に当てるつもりはないので、軌道は少しずらして当たらないようにしたけれど。

それでも、柱の一族が放った矢だ。かなりの音と衝撃を伴ったそれは、イワン君に尻餅をつかせ、さらに着弾した木の幹を粉々にした。ずしん、と幹を途中からなくした木が音を立てて倒れ込む。

「ひ……」

「ね、シャレにならないでしょ？」

わたしの問いかけに、イワン君は無言で何度も頷くばかりだ。

心苦しいものがあるんだけど、荒療治をするときはわりといつもこんな感じだし、スタンドを制御できるようにならないと色んな意味で周りに被害が出るから、ここはがんばってほしいところだ。

「もう一発、行くよ」

「わ……ちよ、ちよ、ちよつと待つ……」

「ごめんね、待たない！ 【コンフィデンス】！」

「わーッ!？」

二発目の矢が、イワン君に襲い掛かる。

けれど……それが彼を射貫くことはなかった。

「……！ 出た！」

彼の身体から現れた四本の白い触手が、わたしの矢をすんでのところで止めたのだ。

「こ、れ、は……。悪霊が……ぼくを、守った……?」

「そうだよ。それは悪霊であって悪霊でないもの」

うじゆる、と動いた触手が総出でわたしの矢を折りにかかってきた。矢がきしむと同時に、わたしの身体もきしみ始める。

それを無視して、わたしは再度矢を放つ。が、それもまた新たに現れた四本の触手によってとめられる。

「イワン君。君が悪霊だと思つてたものは、君の生命力が作り出す力のある像ヴァイジョンなんだよ。傍に立つことから……あるいは、困難に立ち向かうことから、その名を『スタンド』と言うッ」

二発の矢をとめられてなお、わたしはとまらない。三度矢みたびをつがえ、イワン君にめがけてそれを放つ。

ごう、と音を鳴らして彼に襲い掛かった三本目の矢は、さらに彼の身体から現れた二本の触手に受け止め……られそうになるも、勢いは完全にはとまらず彼の身体を射貫かんと直進する。

そして、彼の身体に穴が開く。そう思つた瞬間だった。

「あ……ア、おおああアアーツ!!」

イワン君の身体が膨張した。同時にその全身が白に覆われていく。人間のフォルムはそのままに、けれど人間とは似つかぬ姿へと変じていく。

黒い脚部は変わらず人間のようだけれど……身体から生えた合計十本の触手は、どう見ても人間ではない。さらに顔も、人間とは異なるものへ……イカと思しき風貌となつていく。

けれど、その全身にイカのようななつてらとした光沢などは見受けられない。どこまでも白く、抜けるような色彩は何物にも染まり得るのに染まるようには思えない。その白は、一切の光を宿さない漆黒の眼窩と相まつて、確かに死神のようでもあつた。

そして彼に飛来した三本目の矢は彼の身体を傷つけることなく、甲高い音を響かせて地に落ちた。

それを見たわたしは、今度は三本の矢を同時に発射する。複雑な軌道を描いて、それぞれまったく別の方向からイワン君へと殺到する。けれど彼は、その黒い眼窩からしかとすべての矢を認識した。

直後のことだ。

マントのようにも見える身体の一部を翻したイワン君が一瞬でわたしの眼前へと移動し、触手とは別に存在する拳で反撃をしてきたのだ!

わたしはそれを、ギリギリのところまで受け止める。受け止めて……わたしの力でギリギリ拮抗するくらいの力が込められていることを

察して、内心密かに驚いた。

「……どう、イワン君？ スタンドを制御できた感想は」

「……は！ そ、そういえば……こ、これは」

彼はここで、我に返ったようにわたしからゆっくり離れた。

自身に起きた変化をまだはつきり理解していないようで、周りを見渡してみたり、自分の身体をなめるように眺めてみたり、それらに対して考察をつぶやき続けたりとで、忙しい。

そんな彼を眺めながら、わたしは彼のスタンドについて同じように考えていた。

イワン君のスタンドは、どうやらシヨシヤナと同じタイプのようにだ。すなわち、本体と同化するタイプのスタンド。恐らくだけど、この異形とも言える姿は普通の人間にも認識できてしまうだろう。

けれどシヨシヤナと異なり、攻撃力などは本体に依存しないところもありそうだ。

シヨシヤナの「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」は防御力以外はあくまで本体に依存するスタンドで、吸血鬼になる前のシヨシヤナは普通の女性と同程度の攻撃しか繰り出せなかったんだけど……イワン君のパンチは、だいぶパワーがあった。少なくとも人間よりは間違いないから、破壊力は最低でもB。

ここに十本もの触手が別に存在しているわけだから、かなり相手取るにはしんどいスタンドだろう。あれにもB相当の破壊力があった場合、迂闊に近づけないぞ。

おまけに威力を減衰させられていたとはいえ、わたしの矢が弾かれたということは、「ラ・ラガツツア・コル・フチーレ」に近い防御力もありそうだ。

さらに言えば、能力は恐らく瞬間移動だろう。射程範囲がどれだけあるのか、自分だけなのか、デメリットがあるのか、などなど気になるところはあるけれど……どう考えても敵に回したくないスタンド、という評価にかなりそうにない。

「こ、これは……？ ぼく、ぼくが、化け物に!？」

「大丈夫、落ち着いて。ゆっくりと意識を平常に戻していくんだ。そ

うすれば元の姿に戻れるはずだよ」

シヨシヤナがそんなようなことを言ってた気がする。

あ、そうそう、もう怖いことはないよってことを示すためにも、わたしもスタンドをしまっておこう。

「…………お、おお…………も、戻れた…………」

するとイワン君の姿が、まるで溶けるようにして元の姿へ戻った。彼は再び自分の身体を眺めていたけど、その表情はかなりほっとしたように見える。気持ちにはわかる気がする。

でもすぐにもう一度変身して、解除して、変身して…………を繰り返した始めた辺り、どうも彼は気になったことは調べつくしたいタイプらしい。学者とか、そっち系の気質なのかな。ちよっと親近感わくよ。

「…………はしゃいでるところ悪いんだけど、その能力について補足していい？」

「は!?! あ、は、はい! すいません、つい!」

「わたしも初めて発現したときはかなり興奮したし、気持ちはわかるよ。ま、それはともかく…………」

先ほどまでと打って変わって、血色のいい顔でこちらを向いたイワン君に苦笑しつつも、わたしは本体同化型のスタンドについて説明する。それからスタンドの基本的な法則なども、併せて説明しておく。

生粋のスタンド使いであるがゆえに、一般人と軋轢を抱えてしまう可能性はある。この世界で生きてきて、そういう人を見た経験もある。原作からして、花京院もそういう境遇だった。

イワン君がそんな風にならないように…………特に彼は妹を溺愛してるとみただし、その妹に嫌われて悪の道に走ったりしないように、注意点はしっかりと説明した。

「こんなところかな。大丈夫かな？」

「はい、問題ありません。ありがとうございます…………これでぼくは、無関係な人を殺さなくても済むんだ…………!」

ほっとした様子のイワン君は、目に涙を浮かべていた。

そうだよなあ、行く先々で人が死ぬなんて経験、普通の人には荷が重いよね。わたしも死体や殺人シーンを見るにはもう慣れてはい

るけど、かといつて完全に慣れることはないだろうし。

……何はともあれ米花町の死神は鎮静化し、本体であるイワン君の制御下にはつきりと入ったわけだ。

これで米花町の狂気の沙汰めいた事件数も、減っていくだろう……。



翌日。

「なんでさ!!」

朝刊を広げたわたしは、そこに載っていた「米花町で殺人事件、同日中に二件。交通事故も」の文字に、心の底からの大声を上げることになった。

なんなの？ ホント米花町ってなんなの!?

まさか他にも死神がいるの？ それとも、事件を増やしている原因は他にあるの？

わけがわからないよ!!

「アルフィー様!」

「今度は何!?!」

と、そこにサチさんがバタバタとやってきた。

「イギリスからアルフィー様へ連絡が届きました、こちらです」

「お、おお……ありがとね。どれどれ……」

普通にちゃんとした要件だった。事件かと思っちゃったよね。ごめんごめん。

えーつと……うん、伯爵からだ。って、なんだか随分と枚数の多い手紙だなあ。なにになに？

「……は？ ジョナサンがナチスドイツに拉致された?」

そうして手紙に記されていた一連の事件の顛末を読んだわたしは、素っ頓狂な声を上げたのだった……。

スペインで遺跡の発掘作業に当たっていたジョナサン・ジョースターの元に、ナチスドイツ軍がやってきたのは四月も終わりに近いある日のことだった。

ゾルと名乗った少佐は並べた部下たちに銃を構えさせ、ジョナサンに同行を強要したのである。

彼らの銃口はジョナサンだけでなく、無関係な作業員たちにも向けられていた。この状況でジョナサンが抵抗できるはずもなく、彼は自分以外の全員の無事と引き換えにドイツへと連行されることになった。

無論その悲報は瞬く間にルベルクラクと、さらにはSPW財団の知るところとなる。

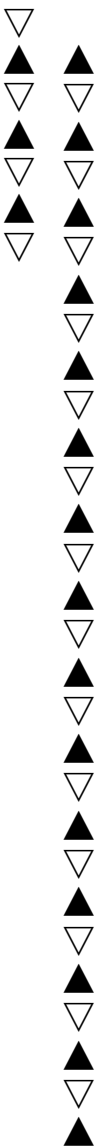
しかし悲報はそれだけではない。ジョナサンに同行する形で遺跡からの発掘品もほとんどがドイツへ運ばれたが……その中にはジョナサン、ひいてはルベルクラクやアルフィーが最も重視した鍵の赤石はおろか、複数の石仮面すら含まれていたのだ。

事情を知るものにとってこれは、悲報どころの騒ぎではなかった。関係者は誰もが大なり小なり危機感を抱いたのである。

結果、ルベルクラクもSPW財団も、それぞれの方法でジョナサン救出を計画し、互いの計画を知らぬまま人員をドイツへ派遣する。

さらには、後がない(と思っている)ルージュフィシユーもまた、同様に動いた。

かくして、軍も含めた四者の思惑が入り混じる中で、ドイツはベルリンを舞台に歴史の裏の戦いが始まろうとしていた。



ジョナサンが拉致されて少し時間が経ち、五月最初の日曜日を迎えたベルリン。この街に、SPW財団により派遣された二人の男がやっ

てきた。

彼らはスイスから国境を越えてドイツへ入国し、観光客を装って緩やかに北上。今日という日、遂にベルリンへと至ったのである。

そしてベルリン郊外のホテルに入った二人は、早速とばかりに街へと繰り出していた。

「ここがベルリンの中心か。初めて来たが、すごい賑わいだな」

「そりゃあ来年はオリンピックだからな、どこもかしこも準備で大忙しだろうさ。平時のベルリンはもう少し穏やかだと思うぞ」

「ああ、そういえば。1916年のベルリンオリンピックは大战で中止になったんだっただな……なら今度こそは、といったところか。道理で気合いが入っているわけだ」

どちらも大柄で、鍛え抜かれた筋骨隆々な男二人が小さなパンフレットを手にきよろきよろしている様は、いささか微笑ましいものがある。

「見ろジョニー！ ブランデンブルク門だ！」

「おお、あれがかの有名な。なるほどこれは噂に違わぬ見事な門だな……間近で見れたら父上が喜びそうだ」

彼らはそうやって、ベルリン市内を観光していく。

ほどなくして日が暮れば、今度は手頃な酒場を見つけて入り、ソーセージを肴にドイツビールを楽しんだ。

酒場は三件もはしごし、ホテルに戻ったのはかなり遅い時間になってからだったが……二人とも酒の影響はほぼないも同然で、特に部屋に入って鍵をかけた瞬間、彼らは観光客の仮面を剥ぎ取った。

「……さて、どう思うジョニー？」

「やはり一般人の立場ではよくわからないな。ここは素直にSPW財団に頼るべきだろう」

ジョニーと呼ばれた男は服を緩めつつ、ベッドに腰掛けて答える。それからうなじにある星型のあざの辺りをゆるゆるとかきながら、同じようにもう一つのベッドへ腰掛けた男に視線を向けた。

「君の所感はどうだ、マリオ？」

「そうだな、ドイツビールは想像よりも美味かった。ジエノヴァやナ

ポリのビールにも劣らないんじゃないか?」

「違うそうじゃあない、そうじゃあないんだマリオ……」

だがマリオの返答に、ジョニーがくりとうなだれた。

対してマリオはくつくつと笑う。

「わかつているさ。しかしなジョニー、私たちは名目上、観光目的で入国しているんだ。少しくらい羽目は外したほうがそれらしいだろう?」

「一理あるが、もうホテル内、しかも部屋の中じゃあないか……そこまです徹底しなくてもいいだろうに」

「相変わらずジョニーは真面目だな」

「規則に従わなかった同僚から死んでいったからな」

ふつと視線を遠くして口元だけ笑ったジョニーに、マリオは「それを言い出したらもう私は何も言えないじゃあないか」と両手を挙げて見せた。

軍人として世界大戦を戦い抜いたジョニーの話は、当時既に成人していたマリオにとってもセンシティブなものだ。下手につつける話題ではない。

まあ、ジョニーのほうもそうとわかっているからこそ、あえて話題の転換に利用しているのだが。この辺りは、お互い既に折り合いをつけているからこそである。

「……真面目な話」

そんな話の節目を見て、マリオも表情を引き締める。

「ドイツ軍も石仮面などの件は入念に情報を統制しているだろう。天下のSPW財団でもさすがに難しいんじゃないのか?」

「いや……SPW財団はヴェルサイユ体制下のドイツで財政支援や職業斡旋などを重ねて、相応の信用を得ている。ドイツ内でも十年以上活動しているし、我々が個人でどうにかしようとするより確実にできることは多いはずだ」

第一次大戦後に極度の経済不振に陥ったドイツを助けたのは、実はアメリカである(助けた、と評するのは人によって異なるかもしれないが)。ヴェルサイユ条約によって定められた過酷な戦後賠償を緩和

した、ドーズ案という賠償方式はアメリカによって発案されたものだ。その名も、策定委員会の委員長に由来する。

その内実については割愛するが、ともかくこのドーズ案によってアメリカ国内の投機熱はにわかにドイツに向かい、その経済不振を大いに和らげることになった。

SPW財団は、この流れに乗った投資家の中にしつかりと名を連ねていた。人類の生活と福利厚生に寄与することを目的とするSPW財団にとって、その動きは当然のものであった。

またその創設者にして総裁であるスピードワゴンにとっては、過酷な運命を背負うジョースター家を手助けするために財団の影響力を広げるチャンスは見過ごせない、という裏の理由もあるのだが。

ともかくその経緯や成果を報告される側にいるジョニー——本名ジョージ・ジョースター二世は、ドイツにおけるSPW財団の影響力を正しく理解していた。

「まあ確かに、あの財団の関係会社で働いている人間は結構多いらしいし、なんならもう何かつかんでいるかもしれないな。それじゃあ明日は財団のベルリン支部に？」

「ああ、顔を出してみようと思う。表向きは俺たちも財団職員だしな」「休暇で観光旅行に来てるのに、その国の支部に顔を出すとか末期的な仕事人間に見えるがな……」

「真面目なドイツ人には案外受けがいいかもしれないぞ？」
「ドイツ人のそういうところは理解に苦しむんだよなあ」
盛大に肩をすくめるマリオに、ジョージは真顔で首をかしげた。

「……毎度のことだがマリオ、君は本当に北部の出身なのか？」
「これも毎度のことだがジョニー、すべての北部人が心配性の恥ずかしがり屋だとは思わないことだな」

ほとんどあからさまに自分は例外だと告げるマリオに、ようやくジョージもくすりと笑う。

付き合いは年齢に比すると決して長いとは言えない二人だが、その様子は確かに気心の知れた友人特有の穏やかなものだった。

その後ホテル内でも軽く酒を酌み交わし、その後就寝した二人は翌

日、早速SPW財団のベルリン支部へと足を運んだ。

対応した支部長は、創設者スピードワゴンとそれなりに付き合いのあるアメリカ人であり、このドイツへ出向している身であった。その立場ゆえに、ジョージの事情も知る彼は二人を密談用の部屋で迎え、現時点でわかっている情報を開陳する。

「スペインからジョナサン氏を拉致したドイツ軍が向かったのは、ベルリン郊外に置かれた研究所のようです。石仮面も同様のようですね」

「郊外……と言っても、ベルリンはかなり広い街だが」

「ええ。ですがご安心を、場所は既に見つけてあります。こちらを」

問うたマリオに応じて、支部長が紙束を渡してくる。

綺麗にまとめられたそれは、ベルリン市内の地図が表紙になっていた。中には色がつけられた場所が一つあり、その周辺のカラー写真が複数、惜しげもなく添付されている。

「……これがカラー写真か。初めて見たが、すごいものだな」

「ああ。これはいづれ軍でも有効に使われるだろう」

その写真に軽く感想を交わしながら、二人はともに紙束の情報を読み進めていく。

だが読み進めるにつれて二人の表情は厳しくなっていく、すべてを確認し終えたあとはそれぞれのスタイルで唸るしかなかった。

「厄介な……」

シャーロック・ホームズハンドの姿勢で、ジョージは眉をひそめる。

彼は元軍人だ。機密を奪い合うことも戦争の一部であり、情報漏洩に万全の体制を期することは理解できる。だからこそ、この研究所で行われている警備の厚さを正しく理解できた。

できたが……だからといって、そこに侵入して情報を引っこ抜く。あるいはそこに囚われた人間を秘密裏に連れ出す方策など、思いつきはしなかった。

ジョージですらそうなのだから、元はと言えばただの家具職人ではなかったマリオに浮かぶはずもない。

「二応、ですが……我が財団の関連企業がこの研究所にものを卸して

います。忍び込むチャンスはご用意できますよ」

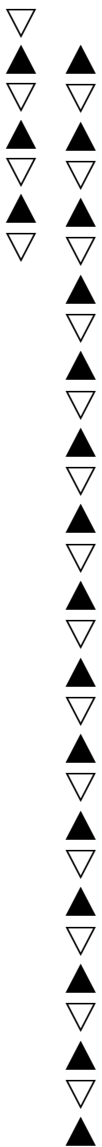
「……すまない、あなたがたのお世話になる」

だからこそ、支部長の提案に、ジョージは頭を下げるしかなかった。マリオも一瞬遅れて続く。

「次にあそこへ物資を運ぶ機会は、三日後の予定です。……どうです、行きますか？」

「ぜひ」

そして支部長からのさらなる提案に、ジョージとマリオは躊躇なく頷いたのだった。



「……さて、当日までちょっと時間が空いたな。どうする？」

「時間を無駄にはできない、一度この研究所の周辺を探ってみよう。写真だけでなくこの目で見ておきたい」

「言うと思ったよ……私はもう少し観光に専念したかったがなあ」
そう言いつつも、マリオはジョージに続く。

観光客を装って地図を片手に、周りをきよろきよろしながら。有名などころ、そうでなくとも人目を引くところを眺めながらの緩やかな移動である。

それでも少しずつ、確実に目的地へと進んだ二人はやがてそこにたどり着いた。

「……本当に 심각한警備だな」

「ああ、ここに密かに忍びこむのは不可能だろう」

カフェテラスで休憩している体で、問題の研究所を眺めて交わし合う。

二人の視線の先にある研究所は確かに、厳重に警備されていた。入り口は限られていて、そこには必ず複数人の兵士が警戒に当たっている。周辺も警邏中の兵士が何人も歩き回っており、近づくだけでも睨まれることは必須だ。

おまけに壁は高く、恐らく分厚い。さらに上部分には、隙間なく敷き詰められた鉄条網。これでは空でも飛べない限り、潜り込むことはできないだろう。

「……素直に業者の人間として潜入するのが一番かな」

「そのようだ。さすがに首都の、秘密研究所と言ったところか……」

やれやれだ、とつぶやいてコーヒーカップを口に運ぶジョージ。

しかしその顔に諦めや恐怖といった色はまったくくない。覚悟を決めた男の顔がそこにあった。

——と。

ふと彼らの耳に、鳥の羽ばたきが聞こえてきた。音に導かれるまま空に顔を向ければ、そこにはハトを襲うタカの姿。

「……なんだありやあ?」

「ハトのほうは恐らく伝書バトだろう。脚に手紙を入れる筒が取り付けられている。タカは……あの様子からして対伝書バト用といったところか」

「敵軍の伝書バトを襲わせるための、つてことか?」

「恐らくな。先の大戦の頃、イギリスは万単位の伝書バトを用いていた。フランスも似たようなものだ。それ対策だろう」

「なるほど……情報は大事だもんなあ」

「そういうことだ。特に空を往く鳥の存在は、電信が発達するまでは最速の通信手段だった。機械も必要ない。俺の所感だが、まだ半世紀近くは現役として使われるだろう」

「それで対策のタカ、か。……ドイツはまた大きな戦争をやらかすつもりなのか?」

「どうかな……政治の話は俺はどうにも苦手だからわからないが……きな臭いものは感じる」

そう言つて改めてコーヒーを口にしたジョージは、空で行われる戦いから意識を外す。

しかしその外した瞬間だった。タカの鳴き声が甲高く響き、ジョージとマリオが囲むテーブルに突然問題のタカが舞い降りてきたのである。

これには二人も驚き、思わず上半身をのけぞらせた。

「な、なんだあ!？」

マリオが声を上げるが、タカはと言えば彼には興味を示さず一瞥しただけ。すぐさまジョージへと身体ごと向き直ると、トコトコと歩み寄る。

そして一定の距離まで来たところでピタリととまると、首を少しだけ傾げてその黒い瞳をジョージの瞳へ合わせた。

「……どうしたというんだ、君は」

しばし沈黙がこの場に満ちたが、とりあえずといった様子でジョージが口を開く。

対するタカはそれに一声鳴いて返すと、ばさりと翼を広げて一つ跳躍。そのままためらうことなくジョージの肩に乗ると、彼のうなじを後ろから凝視する。

「……なんだこれ?」

「俺に聞かないでくれ……」

タカはそのまま微動だにしない。下手に動くこともできない状態のジョージは、マリオの問いに苦笑するしかなかった。

マリオはそんな彼に、仕方ないなとつぶやいて立ち上がる。タカに気づかれないように回り込み、抱き上げ……ようとしたところで、翼でペしりと手をはたかれた。

「おいおい、そんなにこいつが気に入ったのか?」

はたかれた手をさすりながら、マリオは思わず問いかける。

それに対してタカはピューイと一声鳴くと、マリオをはたいた翼の先でジョージのうなじを示して見せた。

あまりにも人間臭いその反応に、思わず固まってしまうマリオ。だが、タカが示す先にあるものが、ジョージの血統を示す星のあざだということに気がつくと同時に、なるほどとも思った。

「お仲間だと思っっているのかねえ」

「何の話だ?」

理由がわからないジョージが当然声を上げる。

「いやな、このタカ……背中に星の模様があるんだよ。お前と同じよ

うにさ」

「……ほう？」

そう言われれば、ジョージのほうも好奇心がうずいた。

彼は元軍人だが、同時にイギリスの名門貴族たるジョースター家の跡取りだった男だ。嗜み程度ではあるがタカにも触れたことがある。

かつての記憶をなぞる形でタカに腕を差し出して見せれば、タカは迷うことなくそこへ飛び移った。

そしてピシリと居住まいを正したタカを眼前に移動させたジョージは、確かにそのタカの背中の羽毛の色が一か所だけあざのように星型になっていることを認めて思わず感嘆の声を漏らした。

「……奇妙な偶然もあったものだな」

「まったくだよ。……ところでそれはいいんだが、そうやってるとお前、どこからどう見ても貴族の旦那様だぜ。もうちよつとうろたえたりなんなりしたほうがいいんじゃないか」

堂々とタカを侍らせるジョージに、マリオが一つため息をつく。

と同時に、研究所のほうから聞こえてくる兵士たちの足音を小さく指で示した。

「……それもそうだな。やれやれ、君、すまないが俺は君の飼い主にはなれないんだ。元の飼い主のところにお帰り」

「ピューイー！」

そしてジョージに促されたタカは、素直に従って翼を広げた。

こちらに向かっていた兵士たちめがけて、そのまままっすぐ飛び上がったタカはためらうことなく先頭にいた兵士の肩にとまる。そこでタカは一度だけジョージに目を向けたが、すぐに兵士に連れていかれたのだった。

ジョージたちとしては、この後ドイツ兵たちから居丈高に問い詰められる羽目になり、踏んだり蹴ったりだったのだが。

ジョージたちが不思議なタカとのわずかな邂逅を果たしていた一方で、救出を待つ側であるジョナサンがどうしていたかというところ。

彼は研究所の一角に押し込められ、ドイツ軍による執拗かつ苛烈な尋問を受けていた。

だが、老いたとはいえ彼は戦士であり、紳士であった。どのような仕打ちを受けようとも決して口を割ることなく（度合いによつてはそもそもダメージにならないものすらあったが）、ただそびえたつ大樹のごとく悠然としていた。

さらには、問われる内容からドイツが自身に何を求めているかを考察する余力すらあった。これらはひとえに波紋使用であるがゆえの余力であったが、それはともかく。

（いきなりドイツまで拉致されたときは何が目的かと思つたものだが……目的はやはり石仮面か……）

狭く暗い独房に、かすかな身じろぎすら許されぬ状態でぶち込まれながらも、ジョナサンは瞑想の心境でひたすら穏やかに思考を続ける。

彼が問われたのは、主に石仮面やそこから生じる吸血鬼についてだ。最初にそれを問われた瞬間から、ヨーロッパでは数少ない中米史を専門とする学者であり、石仮面に関わる文化などについて論文を発表したことがある自身が拉致された理由を彼は正確に把握した。

そしてそれを知つてどうするかも、彼には容易に想像がつく。

（一番あり得るのは、不老不死だろう。次点で軍事転用といったところか。既に石仮面はドイツの遺跡で得ているはずだが……今更になつて僕を拉致したのは、他に情報を得る手段がないのかもしれない）

ジョナサンの推測は、概ね正しい。ドイツと連携している神聖サンタナ王国は、石仮面のこと漏洩することを嫌つてこの件に関しては情報開示を拒んでいるのだ。結んだ技術協約でもこうしたことは除外されており、上層部で当時締結に奔走した閣僚が一部この世から辞

職しているのだが、それはともかく。

だからこそ、ドイツ軍はヨーロッパでもっとも石仮面や吸血鬼に詳しいと言っても過言ではない。ジョナサンを拉致したのである。

裏の事情を知らないジョナサンはそこまで考えが及んでいるわけではなかったが、それでも油断はしない。ここで下手を打つわけにはいかないと、しつかり身構えていた。

石仮面から始まった奇妙な冒険を潜り抜けてきたジョナサンにとって、あの闇の力を世に解き放つわけにはいかなかった。それは絶対の確信を持って断言できることだ。

ただ一つが世に出ただけで、あれほどの悲劇が起こったのである。だがジョナサンがスペインの遺跡で見つけた石仮面は、複数だ。恐らく、ドイツ軍が国内の遺跡で見つけたのも複数だろう。

それらが今、すべてドイツ軍の手の内にある。何かが一歩でも間違えれば、ドイツ軍はおろかドイツそのものが……あるいは世界すら、滅びる可能性が十分にあった。

幸い、時間はジョナサンの味方である。何せジョナサンは、間違いなくイギリスに身分を保証された、由緒正しいイギリス貴族だ。国の要職についているわけではないが、他国に拉致されていい人間でもない。

今頃は外交によつて言葉の戦いが行われているはずだと、己に言い聞かせて彼は耐え続けるのだ。

何より、味方は時間だけではない。

かすかな音を立てて、ジョナサンの独房に一人の兵士が入ってきた。

その忍んだ様子に目を開けたジョナサンは、近づいてくる兵士を見とめてふつと小さく笑う。

「ジョースター卿……お疲れ様です。これ、少ないですけど……」

「ありがとう……君にも立場があるだろうに、すまないね」

「いえそんな。誇り高いドイツ軍人としては、やはりこういうことはよくないと思う次第です……」

ジョナサンに少なくとも食事を与えた青年兵士は、ジョナサンに言わ

れて照れたように笑う。

もちろん、軍規に従って考えれば、彼のしていることこそよろしくないだろう。

しかし彼は若かった。彼視点では何の罪もない他国の人間を拉致してきて、あの手この手であるかどうかともわからないオカルトじみた情報を吐かせようというのは、正しくないと思えたのである。

また、連れてこられてからずっと過酷な環境に置かれているにもかかわらず、人間性を一切損なうことなく威風堂々としているジョナサンの姿は。

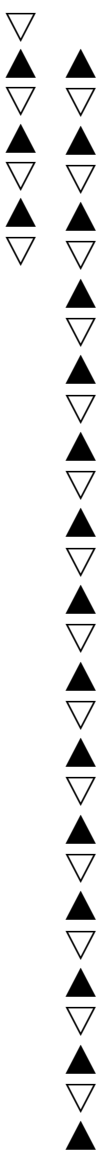
たとえそういうことをされていても、礼儀を忘れない立ち居振る舞いは、青年にとってはある種理想の男の体現にも感じられたのだ。

もちろん、ジョナサンにそんなつもりはなかったのだが。これはひとえに彼の人徳というものだろう。

ともかく敵であるはずのドイツ軍に、はからずも味方を得てしまったジョナサンが焦ることはまったくなかった。

ただただ静かに、時を待つ。

彼はそれに専念し、丁寧に、丹念に呼吸を整えるのであった。



ジョナサンの予測通り、ジョージたちが潜入のためあれこれ準備をしているさなか、決行前夜のドイツ外務省にイギリスの駐独大使が訪問していた。

要件はもちろんドイツ軍に拉致されたジョナサンの返還であり、そのために必要な証拠はしっかりと整えられている。

とはいえ本来であれば、これほど迅速にイギリス政府が動くことはなかっただろう。何せジョナサンはイギリスにおいては、軍の要人を暗殺した女の義父である。そのような男、しかも要人でない男のために無償で動くほど、イギリス政府は優しくない。

ドイツもそう見込んでおり、あまり急ぐことなく構えていた。

S P W財団も同様で、だからこそ国によるジョナサンの救援を待たずして独自に動いていたわけだが……その前提を覆す男がイギリスにはいた。

誰あろう、彼こそルベルクラク伯爵その人である。彼はジョナサン拉致の情報を知るや否や、行動を開始した。自らのイギリスにおける立場をフル活用して、ジョナサン奪還のために動いたのである。

伯爵家は、イギリス国内における運送関係を陸海空の別なく担う大企業を抱えており、一応は戦間期に当たる現在、イギリスの治安維持を大いに支え、軍事費の軽減に寄与する民間軍事会社でもある。

加えて、現在の駐独大使が伯爵の養子の一人ということも大きかった。このため伯爵の要請は、イギリス政府をして無下にできないものであったのだ。

伯爵はさらに、オリンピックを控えているというドイツの国際的な状況や、アルフィーから聞かされている未来の情報から、今のドイツが強硬手段に出ることはまずないという分析も伝えていた。

結果としてどうなったかと言えば、先手を打ったイギリスのほとんど一方的とも言える勝利であった。元々イギリスは外交に長ける国であるが、今回に関してはドイツ側の分が悪すぎたと言っているだろう。

かくしてジョナサンは解放される運びとなり、民間軍事会社としてのルベルクラクが彼の引き取りのため研究所へ踏み込むことになったのだが……これが決定したのは、日付が変わってからのこと。この情報がS P W財団にもたらされるまで、少々の時間差が生じることになった。

また、外交で敗北したとはいえ、ドイツ政府も引き渡しまでに可能な限りの時間を持たせるよう食い下がったこともあって、空白の時間が生じる。

この時間を精一杯使ってドイツ軍はジョナサンから情報を引き出そうと躍起になり、ジョージたちもまた入れ違いとなってしまう……はずだったが。

事態をさらにややこしくする存在が、既に秘密研究所内に潜伏して

いた。

それは二人組の男である。スラブ系の男と、彼に従うゲルマン系の男。スラブ系の男はあからさまに日光を避けていて、口元からのぞく牙が特徴的だった。

……そう、ルージュフィシユーの二人である。

彼らにとつて、ジヨナサンは問題ではない。歴戦の波紋戦士であるため、どちらかと言えば始末したい相手ではあるが、遺跡に眠っていたものすべての回収こそ最大かつ優先すべき目的であり、その目的のためには手段を選ばなかった。

ゆえに最速最短の手段を取った彼らは、最低限の情報だけを集めると、夜を待つて下水施設から力づくで研究所へと侵入した。道行きを阻むものは、文字通り力で破壊しての侵入である。

そして手頃な兵士を屍生人^{ゾンビ}に変え、その案内で研究所内を我が物顔で闊歩して回っていた。周りの兵士からは怪訝な目を向けられることもあったが、研究員に変装したルージュフィシユー一行を阻むほど疑問に思うこともなかった。

かくして研究所に入り込んだ彼らは、遺跡からドイツ軍が押収したものを根こそぎ運び出そうと動いていた。彼らに言われれば、あれらの遺跡は元々かつてのルージュフィシユーたちが未来の同胞のために遺したものだ。つまり自分たちのものなのだ、というわけである。

そして繰り返すが、彼らルージュフィシユーにとつて、ジヨナサンはどうでもいい存在だ。今このときにおいては、遺産の回収が最優先だったが……かといって少人数で運び出すには時間を要するほどの遺産がこの研究所にはあった。

だから彼らは、周囲がにわか騒がしくなってもほとんど気にせず行動していた。遺産の回収に専念していたと言ってもいい。

結果、彼らはこのとき、一つのミスを犯した。それは研究所内が騒がしくなった段階で、一度欲を抑えてジヨナサンが連れ出されるといふ事態の詳細を確認すべきだった、ということである。

これができていれば、彼らは仕事の最中に宿敵とも言うべきルベルクラクと鉢合わせることなどなかったのだから、たった一つとはいえ

大きなミスであった。

かくして、知ることを怠ったルージユフィシユアの思惑をよそに、夜明けとともにルベルクラクがやってくる。完全武装とは行かずとも、要人警護には十分な揃いの装備を身につけた傭兵団が、イギリス駐独大使に伴われて研究所に踏み込んだ。

そんな事態の急変を、SPW財団の監視員が慌てて支部に連絡する羽目になっていた朝。

多くの人にとっては、いつもと変わらない穏やかな一日が始まるはずだったこの日、ベルリンの秘密研究所はわずかなズレの連鎖によって誰もが気づかないまま、混沌のるつぼと化そうとしていた。



複数の鳥の鳴き声が響く中で一つ、もぬけの殻となったケージがあつた。

鳥小屋の奥の奥、最も立派なケージのかんぬきはきれいに外されており、無理やりこじ開けられたわけではないことは一目瞭然だ。

そんな鳥小屋の屋根の上。人間の喧騒などどこ吹く風、ぎらりと鋭い視線を閃かせて、一羽のメスのタカが研究所を睥睨していた。

彼女の黒い瞳が、研究所内で暗躍する吸血鬼の姿をとらえる。
——ピューイ。

ヴァイジョン 小さく響かせた声に応じるようにして、彼女の背後に白い鳥の形の像がズズズ……と浮かび上がった。

その背中には、星の刻印。いまだ明けきっていない薄明の中、一瞬それが黄金の輝きを放った。

SPW財団の監視員がジョージたちの泊まるホテルに駆け込んできたとき、彼らは既に目覚めていた。だがまだ食事の最中で、準備が整っていたわけではなかった。

そのため二人は突然の情報にすぐさま行動することを余儀なくされ、大急ぎで食事を済ませて大慌てでホテルを飛び出すことになったのである。

そうしてやってきた研究所の前は、二人が思っていたよりも静かだった。時間が時間だからか、一般人の野次馬などがほとんどいなかったのである。

とはいえ、人がいないわけではない。入り口となる門の周辺には、揃いの装備をまとった男たちが、いかにも高級そうな車を控えさせて周囲を警戒していた。

彼らの姿に、ジョージは覚えがあつた。もちろん一人一人が知り合いいというわけではない。彼らが背中に負ったカーバンクルを模した紋章が、忘れたくても忘れられるものではなかったのだ。

「あれは……ルベルクラクの傭兵か！」

「あれが噂の……ということとは、イギリス政府が動いたらしいというのは本当かもしれないな」

ルベルクラク伯爵家が経営する企業はいくつもあるが、その中の一つ……というよりも大元と言うべき傭兵組織、ルベルクラク・プライベート・セキュリティ・アソシエーション——通称RPSAは、グループで最も名の知られた企業である。

RPSAは軍事的な警護や、兵站に関する諸々を中心に扱う民間軍事会社だ。彼らはその技術を惜しみなく発揮し、先の大戦ではイギリスに大きく貢献し……だからこそ、その大戦でパイロットとして活躍したジョージにとってとはとてもなじみのある企業でもあつた。

「懐かしいな……当時は世話になったものだ」

「そんなにか？」

「ああ。当時はまだ設立されて日の浅かった空軍では、常に人手が足

りていなかったからな……パイロット以外は多くがRPSAに委託されていた。当時の俺の同僚の4割くらいはその関係者になる」

「それは……なんというか、すごいんだろうな、とは思うが……そうなる」とジョニー」

マリオはそこで一度言葉を切ると、視線をRPSAの兵士からジョージへ移した。さらにその兵士を親指で示しながら、続きを口にする。

「お前、変装してきて正解だったんじゃないか？」

「そうだな……こういうのはパイロットじゃあなくて諜報員の仕事だと思っていたが、念のためしてきてよかった。こういうのを確か、日本では『転ばぬ先の杖』と言うんだったか？」

そう、今のジョージは普段の彼とはかなり異なる格好をしている。服装は流行から一周遅れたくたびれたものだし、つけ髭によってこれまた時代遅れになってきているカイゼル髭が備わっている。

これらは無論、ジョージの身元を特定させないためのものだ。繰り返すが、彼は記録上既に死んでいるのだから。

ただ、本人が口にした通り、念のためでもあった。ジョージの設定上の没年はもう十五年前のこと。誰もそこまで覚えていないだろう、というわけだ。

しかし相手がルベルクラクとなると話は変わってくる。

理由は主に二つ。一つはジョージも言っていたように、RPSAの人間に顔見知りがそれなりにいるから。

そしてもう一つは、

「今の駐独大使、友人なんだったか？」

「ああ……子供の頃、パブリックスクールで同窓だった。同じ年なの幼児のように小さくて、あれこれ世話を焼いたのを覚えている」ということである。

だからこそ、ジョージの顔は苦虫を噛み潰したようであった。せつかく旧友が近くにいるというのに、声をかけるわけにはいかないのだ。無理からぬことだろう。

彼の心境を察したマリオも、どこか気まぎれに肩をすくめるばかり

だ。

「……いずれ顔を合わせる機会が来るといいな」

「そうだな……柱の男たちの一件が落ち着いたら、なんとかかしたいところだ……」

ぼん、と肩に手を置いたマリオに苦笑を返して、ジョージは視線を元通り研究所へ向けた。

思うところはある。けれども、今はまず目の前のことを。ジョージはそう考えた。

そんな彼のありようを、マリオは尊敬している。年下だが、実直で固い意志の男。勇気ある男だ、と。

しかし、それをさらりと口にできるほどマリオは器用ではなかった。だからジョージの肩に置いた手を数回叩いて……けれど、彼にはそれで十分通じた。語らずとも分かり合えるだけの信頼があった。

そうして二人は、研究所の監視を続ける。もちろん監視といっても何かができるわけではないので、無事にジョナサンが出てくるところを確認したら撤収するつもりで。

しかし。

「……！ おいジョニー、今のは」

「銃声だ。それも拳銃じゃあないぞ、ライフルの類だ」

研究所から複数の、しかも連続した銃声が聞こえてきて、どうにも雲行きが怪しくなってくる。研究所の門前で警戒していたルベルクラクの傭兵たちも、何があったのかといぶかしげだ。

だがさらに悲鳴が聞こえてきたことで、事態は雲行きが怪しいどころか不穏な空気が漂い始めた。

何せ、ただの悲鳴ではなかったのだ。何かとてつもなく恐ろしいものを目にしたような……そして今まさに命に危険が迫っているような……。さながら断末魔のような悲鳴だったのだ。

さらにそれに続いて、激しい破碎音が響き渡る。コンクリートか金属か……ともかく、そういった硬いものを無理やり破壊したような、そういう音だ。

「……おいジョニー、嫌な予感がするぞ」

「奇遇だなマリオ、俺もだ」

二人がそう交わした直後。打音とともに、研究所の分厚い門が中からぼこりと膨らんだ。膨らみは明らかに人の形をしていて、しかし誰が見ても下半身がない。

深く考えるまでもない。異常事態だ。

だからこそ、ルベルクラクの傭兵たちは武器を構えて動き出した。一方で、ジョージたちはまだ動かない。表向きの立場が、軽率な行動を許さないからだ。

しかし傭兵たちが閉ざされた門を連携プレーでよじ登り、最初に中を視認したものが緊張の面持ちで声を上げた瞬間、二人は弾かれたように走り出した。

「――屍生人だ！」

その声に応じて、傭兵たちは誰もが乱れることなく銃を構え、高所を取ったまま研究所内に向けて発砲する。

狙いはすべて頭。吸血鬼のような治癒力を持たない屍生人なら、波紋を使わずとも頭を破壊すれば倒すことができるのだ。R P S Aの傭兵たちは、それをちゃんと知っていた。

彼らの狙い通り、そこにいた屍生人たちは多くが頭を撃ち抜かれて活動を停止する。

しかし連射の利かない銃で、しかも決して多くはない人数での射撃では、研究所内の門前に集まり始めていた屍生人たちを一掃することはできなかった。

そして屍生人とはいつても、一部知性を残したものもいる。そういう連中は高所からの射撃を見ると物陰に一度身を隠し、射撃が途切れた瞬間を狙ってそこらにあるものを適当に投げて攻撃を仕掛けてきた。

知識はあっても肉体的には一般人の傭兵たちは、その多くを回避しきれなかった。屍生人がそのような知恵を働かせることも、多くのものにとっては信じられなかっただろう。

「ぐわあ!?!」

「うわーっ!?!」

そして攻撃を受けたものの半分が、門の内側に転落した。彼らのさらに半分は頭から落下したためほぼ即死だったが、残る半分は怪我を負いはしても意識を保ったままとなる。

これはある意味で、不幸と言える。いつそ即死であったほうが、よかつたかもしれない。

なぜなら、生者は屍生人^{ゾンビ}にとつて餌でしかないのだ。意識があるとなると、餌を求めて迫ってくる屍生人^{ゾンビ}を、喰いつかれる苦しみを、死ぬ瞬間まで体感し続けることになる。

逃れたければ、逃げるしかない。だが屍生人^{ゾンビ}の身体能力は、人間を上回るのだ。万全の状態でも逃げ切ることは難しい。ましてや怪我をしているなら、なおさらだ。

だから内側に落ちた彼らに訪れる未来は、ただ一つ。屍生人^{ゾンビ}に喰われるしかない。

「ぎゃあああー!?!」

「たっ、助けて!」

「誰か! あああー!?!」

そうして、その通りになった。生き物が生き物に、文字通り喰らいつく凄惨な音と、それを拒む本能的な悲鳴が断続的に響き渡る。あまりにもおぞましい光景に、多くのものが思わず顔を背けた。

だが、悲劇はこれだけで終わらない。屍生人^{ゾンビ}に喰われたものも、屍生人^{ゾンビ}になるのだ。

結果として、屍生人^{ゾンビ}は加速度的に増えていく。地獄の始まりだ。

「くっ、屍生人^{ゾンビ}を増やすわけにはいかん! やむを得ん、撃て!」
それを知っている傭兵側は、非情の決断を下すしかない。

先頭にいた傭兵が指示を飛ばした——その横を、二つの人影がさっそうと飛び越えていく。

「なっ!?!」

もちろん、それはジョージとマリオである。二人はポケットに忍ばせていた瓶から油を手に出し、波紋を通して門をよじ登ると中へと侵入を果たしたのである。

結構な高所から飛び降りての侵入だったが、二人とも着地の衝撃は

意に介さない。これくらいの高さから下りていちいち痛がつていては、波紋戦士にはなれないのだ。

そんな二人を、今しがた喰いつかれた傭兵だったものも含めた屍生人たちが取り囲む。

「おいお前たち！ 何をしている、死にたいのかッ!？」

当然傭兵がジョージたちを咎めるが……マリオは短く「お気になさらず」と答えるだけ。ジョージに至っては何も語らず、ただ静かに拳を身構えた。

両者の口から、コオオオオ……と、特徴的な呼吸音が響く。

と同時に、屍生人たちが一斉に二人に襲い掛かった。

「クソッ！ 民間人がバカなことをー！」

だからこそ傭兵たちは二人を助けようと、屍生人に銃口を向けるが……。

稲妻のような光がジョージとマリオの身体を覆う。波紋特有の高い音がかすかに鳴り渡り、二人は背中を合わせて屍生人を正面から迎え撃った。

そして二人は、同時に言い放つ。

「波紋疾走!」

刹那、二人の両の拳に宿った黄金の輝きは、そのまま連打となって次々と屍生人たちを打ち据えていく。一発、二発、三発……と数を重ねても動きはいささかも衰えず、むしろ技は冴え渡っていく。

波紋によって上昇した身体能力。弱点そのものである太陽のエネルギー。それらを正面から食らった屍生人たちは次々に吹き飛んでいき、元は兵士で相応以上の体格であるはずのものたちが宙を舞う。

これには知性を持たないタイプの屍生人ですら襲うことを躊躇し、立ち止まる。そうしてわずかだが、この場に静寂が戻ってきた。

このタイミングで、ジョージとマリオもひとまず息を整える。もちろん構えは解かず、油断はしないで。

彼らの姿を見て、助けようと銃を構えたRPSAの傭兵たちはゴクリと息を呑んだ。予想していた結果とはまるで正反対の様子に、引き金を引くことすら忘れて。

そんな彼らに、マリオがニヤリと声をかけた。
「言ったでしょう？ お気になさらず、と」
そこにあっただのは、歴戦の戦士の顔だった。

時間は少しだけ遡る。具体的には、ジョージたちがホテルを飛び出す直前ごろだ。

ジョナサン奪還のため、傭兵たちを引き連れてベルリンの秘密研究所に踏み込んだイギリス駐独大使、ジグムント・ルベルクラクは兵士たちの案内で内部を堂々と闊歩していた。兵士の語る言葉は基本的に聞き流し、ただひたすらにジョナサン救援のためだけに歩く。

名前の通り、彼はルベルクラクの間人だ。それも養子とは言え、現伯爵家の嫡男である。

つまりアルフィーの熱心な信者であり、彼女が指示した赤石の回収は彼にとつて絶対である。また、彼女が特に気に入っているジョナサンについても絶対に救出するという気概を持っていた。

そんな彼だが、案内の兵士たちが目的地への最短経路を通っていないことは早い段階で気づくことができた。彼らの立場なら自分でもそうするし、何よりここが事前に入手していた研究所内の構造からして通る必要がない場所だということは明白だった。

だから、ドイツ側で下手を打ったものをあえて挙げるとしたら、ジグムントを迂回させて案内するように指示した上官と言えるだろう。

なぜならば、彼をまっすぐジョナサンのいる場所へ案内していれば、彼が彼らに出くわすことはなかったのだから。

「……待て、一つ聞かせてくれ。彼らは？」

「は……う？」

先に気づいたのは、ジグムントのほうだ。彼はある地点を通りかかったとき、足を止めて兵士たちに声をかけた。

今まで基本的に無視されていた兵士たちは、突然の呼びかけに一瞬きよんとする。だがすぐにジグムントが視線で示していた先を見て、ああ、と誰からともなく納得の声を（いきなり質問されたということには納得していないにしても）上げた。

そこにいたのは、研究員に変装していたルージュフィッシュの二人だ。ついでに、案内役の屍生人^{ゾンビ}を引き連れている。

そう、彼らは出会ってしまったのである。

「うちの研究員たちですよ……それ以上でもそれ以下でもありません」

「本当にそうか？ 本当にそうなのか？」

しかし兵士がそこまで知るはずもない。彼は至極当たり前に、当たり前のことを答えたのだが……ジグムントの返事はさらなる詰問であった。

当のジグムントはルージュフィシユーの二人から視線を逸らさず、鋭い眼光でもって射竦めている。

その確信を持った態度に、ルージュフィシユー側は内心毒づきながらもこの場をやり過ぎるために頭を下げて殊勝な態度を取った。一時プライドを捨てて頭を下げるくらい、敗者であり続けた彼らにとっては造作もない。

「そうですね……一体何だというんです？」

「……そう思っているのならば、後はないぞ。これ以上時間を引き延ばすような行為は慎みたまえ」

「は……はは、いや、そんなご冗談を」

ルージュフィシユーの対応を見て、ジグムントはひとまずジョナサンを助けることを優先した。そして先に進むことを兵士たちに促す。

兵士たちはしきりに冷や汗を流していたが、相手は国の要人だ。もはやこれ以上はどうしようもなく、言われるまま最短距離での案内を始めた。

そして残されたルージュフィシユーの側は……これを見て、これ以上ここに留まることは危険だと即断した。

「まさかルベルクラクが踏み込んでくるとは……この我輩の目をもつてしても見抜けなかった」

「どうなさいいますか、マスター？」

「どうもこうも……鍵となる赤石は持ったな？」

「もちろんです。石仮面も半分は回収済みです」

「……ならば最低限の目的は果たしていると判断しよう。遺産をほとんど残したままとなるのは業腹だが、撤収だ」

そして大急ぎで侵入口へ取って返したルージュフィシユーたちは、下水施設へ戻る。

だがその直前、彼らは外法をためらわず採用した。

それは吸血鬼の親とも言えるカーズに通じるものだ。一部の人間が聞けば、吐き気を催す邪悪と断じるだろう行為。

「ぐ、えッ!？」

周辺にいた数人の人間から、情け容赦なく血を吸ったのである。ただし吸いつくさず、代わりに吸血鬼のエキスを注入して。

すなわち、

「そうら、これでお前は屍生人^{ゾンビ}となった。この研究所の中で好きなように仲間を増やすといい……クツクツク」

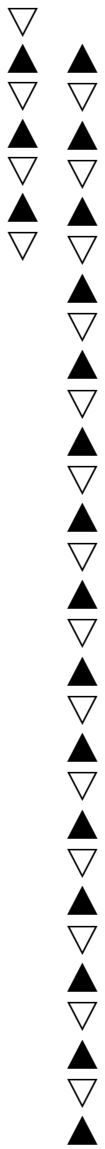
屍生人^{ゾンビ}の作成と、その手綱の放棄である。

かくして、生ける屍たちが研究所内に解き放たれた。彼らは手当たり次第に遭遇した人間に襲い掛かり、仲間を増やしていく。

それに気づいた兵士たちが発砲して対抗しようとするが……頭を破壊されない限り、屍生人^{ゾンビ}はとまらない。撃ち抜かれてもなおとまらず、屍生人^{ゾンビ}によって兵士たちが蹂躪されていく。

悲鳴が上がる。

それらを聞きつけて、入り口に陣取っていたジョージとマリオは飛び出したのだ。



「まさかあんたたち……波紋使いかッ!」

ジョージとマリオの波紋疾走^{オバドレイブ}を見た傭兵が、驚きながらも喜色をにじませて声を上げる。

「いかにも、その通り。たまたま通りかかってね……ここは我々に任せたいだいたいッ」

彼にそう返して、マリオが前に出る。ジョージも同様にだ。

まるで仁王か阿修羅かと言わんばかりの様相に、屍生人^{ゾンビ}たちが怖気

づく。

しかしだからと言って、彼らに容赦はできない。人間と屍生人^{ゾンビ}は、相容れることができない存在なのだ。

直後、ジョージとマリオは同時に地面を蹴った。ぐん、と大きめの音が響いたかと思えば、二人は敵との距離をあつという間に詰めていた。

「ふんッ！」

「せいッ！」

そして拳を振るい、次々に屍生人^{ゾンビ}を駆逐していく。周囲には波紋傷による肉が溶けるような音が響き渡り、その圧倒的な様子に傭兵たちは声も出ない。

だが、彼らも傭兵で、曲がりなりにも戦うことには慣れている。物陰に隠れた知性を残す屍生人^{ゾンビ}が、大きめの石をつかんでジョージに投げつけようとしているのを見て、声を張り上げた。

「ヒゲの旦那！ 投石来るぞ、狙われているッ！」

言われたジョージは、一瞬それが自分に向けて言われていることに気づかなかった。何せ、今の彼は普段蓄えていない髭を持っているのだから。

しかし周囲の状況から、自分が言われていることにすぐ気づく。

もつとも、彼はそれよりも早く既に動いていた。

ぐん、と身体を大きく沈ませる。そのまま地面に両手をついて身体を支えると、すぐ上を石が通り過ぎていくのを確認しつつ、まるでカポエイラのように回転。続く投石から逃れる形で、舗装されていない端の方へと跳び込んだ。

彼はそのさなか、地面に生えていた草を一房引っこ抜いていた。

続いて地面を転がりながら、草へ波紋を流す。波紋を受けた草はピシッと勢いよく伸び、その状態で硬直した。その姿は、さながらナイフかカッターかのよう。

「しッ！」

その草を。ジョージは態勢を整えると同時に、勢いよく投げた。

波紋を受けまっすぐ固まる草は、やはり投げナイフのように飛んで

いき、身体を物陰に隠していた屍生人たちの額にそれぞれ突き刺さった。

波紋は生物にはよく通る。特に内部に導水管を持つ植物とは相性がいい。波紋を用いた即席の飛び道具としては、石よりも優れていた。

「……Thank you very much、ルベルクラクの方」
ゆるりと身構えながらの起立に返礼を乗せて、ジョージはぐつと拳を握り込む。

その超人的な立ち居振る舞いに、改めてルベルクラクの傭兵たちはゴクリと唾を嚙下するのだった。

一方マリオはと言うと、屍生人たちに囲まれながらも危なげなく戦いを続けていた。

とはいえ彼も拳だけではなく、その場その場で状況に応じてどんなものでも使って見せている。

あるときは死体が握っていたライフルを拾い上げると、金属を走る波紋疾走でもって長柄の武器としたり。

あるときは油（食用の植物油である）を取り出してそれを口に含み、かつて父も使った波紋カッターを発射してみたり。

なんならバランスを崩して倒れた屍生人の頭を、波紋の乗っていない普通の射撃で撃ち抜いたりもした。

マリオは現在の波紋戦士としては、最も歳を取ってから入門した男だ。ゆえにその技量は実のところ、ジョージと比べてもやや劣る。

それを自覚しているマリオは、ならばとばかりに使えるものはすべて使うスタイルを築き上げた。もちろん人間として道徳に反しない範囲ではあるが、それでもどんなものでも戦いに組み込む思考や発想は、こういう乱戦のとき特に強みとなる。

元軍人であるジョージもその傾向はあるが、彼は貴族嫡男としての教育を受けているからか、どうしてもその戦い方には素直さがあつた。

「……ひとまずはこんなところか」

「そのようだ。だが油断はできないな」

やがてこの場から、屍生人の姿はなくなった。

ジョージとマリオは一息つくと、乱れた衣服を整えて視線を交わし合う。

「どうする?」

「このまま二人突入するのは避けるべきだろうな。万が一にもここから屍生人を出すわけにいかない、水際ですべて倒さなければ」

「……やはりそうなるか。しかし右も左もわからない場所を、一人で行くのは危険だぞ……」

そう話す間にも、屍生人が二体現れた。

二人は会話を切り上げて、迎撃態勢を取る……が、そこに銃声が鳴り響いた。直後、弾丸が屍生人の頭を破壊する。

音の出どころへ顔を向けた二人は、そこでライフルを構えてにやりと笑う傭兵たちを見た。

「あんたたちは行ってくれ!」

そして彼は、二人に行けと促す。

「しかし」

「この研究所の出入り口はここだけだ! ここさえ死守できればいいんだよ」

「それに波紋が使えない我々では近距離戦の可能性が高まる屋内より、射線の開けたここで構えて、やってきた屍生人どもを撃っているほうがやりやすいし安全だ」

そうだそうだと傭兵たちが声を上げる。

彼らの声に、ジョージとマリオは再度顔を見合わせて数瞬の間考えたが……すぐに傭兵たちに視線を戻して、大きく頷いた。

「すまない、任せた!」

「すぐに片づけてくるからな!」

そうして駆けだそうとする二人に、もう一度声がかかる。

「待ちな!」

なんだ、とばかりに振り返った二人の眼前に大判の紙がふわりと降ってきた。

思わずそれを受け止めて、なんだと首を傾げる二人。

「土産さ！ 持っていきな！」

「うちのジグムント様を頼むぜ！」

二人の手元に投げ渡されたそれは、研究所内の見取り図だった。

「……どこからこんなものを」

「おっと、そいつは企業秘密だぜ」

「だがまあ、俺たちはルベルクラクだからな。それだけであとはわかるだろ？」

「……相変わらず、底の知れない家だ」

ジョージがこぼした言葉に、傭兵たちが「確かに！」とゲラゲラ笑う。少し前までの悲壮な空気は、既に霧散していた。

そんな彼らに改めて礼を言った二人は、地図を手に研究所内へと跳び込んでいく。現れた屍生人^{ゾンビ}たちを、すれ違いざまに行きがけの駄賃とばかりに殴り倒しながら。

二人の姿が消えたのを確認した傭兵たちは、真剣な表情に戻って銃を構え直す。彼らもまた、戦うものであった。

でもいうのか？ 私には出せそうにないな」

「それでもない……と言いたいが、確かにこの辺りは慣れがなければできないかもしれん」

「それに命令することに慣れていている。やはり育ちの違いってのはどうしても出るもんだなあ」

「君だって元を辿れば貴族の家系じゃあないか、ツエペリ男爵？」

「よしてくれ、うちが貴族だったのは親父の代までさ」

軽口を叩き合いながら、再び二人は走る。やはり現れる屍生人^{ゾンビ}を順に倒しながら、地図を確認しつつ奥へ奥へと進んでいく。

とはいえ、彼らはまだジョナサンが具体的にどこにいるか、正確には知らない。だから道中の部屋や施設を無視して行くわけにもいかない。

進んで止まり、止まって進みを繰り返し、少しずつ、しかし確実にジョナサンの居場所を絞り込んでいく。

——と。

「……！ 今のは銃声だな！」

「拳銃の音だ。音からして、複数人が連続で撃ったようだ」

「あっちだな……屍生人^{ゾンビ}と戦っている人間がいる」

「行くぞマリオ」

「もちろん！」

不意に聞こえた銃声を聞いた二人は、進もうと思っていたほうではなく、音が聞こえたほうへと迷わず足を向けた。

そこからしばらく進むと、銃声だけでなく明白な戦闘音も響いてくる。何かを殴打する音、破壊する音、指示する声、応じる声、罵る怒声などが断続的に聞こえてくる。

間違いなく誰かが複数で屍生人^{ゾンビ}相手に戦っている。そう確信した二人は走る速度を速めた。

やがて二人は、決して広くはない部屋の中に多くの屍生人^{ゾンビ}が殺到し籠城戦となっている場所を見つける。

「ふんッ！」

「はあッ！」

そこに、二人は迷わず飛び込んだ。波紋を練り上げ、まずは手近なところにいた屍生人^{ゾンビ}たちを蹴散らし始める。

いい具合に襲っていたのに、急に後ろから襲われた屍生人^{ゾンビ}たちは色めき立った。しかし、連中は意外なほどあっさり動揺を鎮めてジョージたちを迎え撃つ。その動きは秩序立っていて、烏合の衆でないことは明らかだった。

「どこかに司令塔がいるな！」

「間違いない。マリオ、ここは俺が持たせる。あれを頼む！」

「おうとも！」

早くも囲まれた二人。だがマリオは、ジョージの声に不敵に笑って見せ、懐から植物油で満たされた瓶を取り出した。

彼はそれを、迷うことなく床に叩きつける。当然瓶は音を立てて割れ、中身の油が盛大にぶちまけられる。

その油を。

床に広がった油に手のひらを当て、波紋を流す。すると油は波紋の力を受け、液体のまま固まった。形もくの字型へと変じていく。

さらにくつつく波紋を用いて持ち上げられた油を握り込んだマリオは、より多くの波紋を流してそれを強化し――

「波紋ブーメラン！」

――勢いよく投擲した。

風切り音が屋内にこだまする。その音を置き去りにして、波紋で固められた油が勢いよく飛翔した。

それを阻もうとした屍生人^{ゾンビ}の群れは、油に宿った多量の波紋を前に次々と切り裂かれ、倒れながら溶けていく。

そうして多くの屍生人^{ゾンビ}を瞬く間に切り裂いた油は、しかし一定のところでぐんと軌道を変える。大きな弧を描く形で方向転換し、今まで通ってきたところとはまた違う場所を切り裂きながら、マリオ目がけて戻り始めた。

同じ場所を通っていないから、当然更なる屍生人^{ゾンビ}がその餌食になっ
ていく。

その様子を見た屍生人^{ゾンビ}の中には、瞬時に危険と判断して距離を取っ

たりしやがむなどして回避を試みたものもいた。

だがそれらをあざ笑うかのように、油はマリオの下に戻るより早く、破裂した。音以上に派手な飛沫が飛び散り、それらはより離れたところにまで波紋の力を行届かせる。

もちろん、破裂して小さくなつた飛沫程度では、いかに屍生人相手とはいえ致命打にはならない。それでも、触れた部分を溶かしダメーヂを与えるくらいは可能だ。

「グエエエーッ!?!」

「アギヤーツ!?!」

まるで強酸にでも触れたかのように、飛沫を受けた屍生人たちがどよめく。悲鳴をあげるもの、触れた場所を手で押さええるもの、うずくまるもの、痛みへのうち回るもの。

あるいは――そうした屍生人たちを声なり暴力なりで叱咤しようとするもの。

だがその対応の差こそ、マリオの手持ちの油をほぼすべて使い果たしてでもジョージが見たかつたものだ。彼は一連の流れを決して見逃すことなく、自身が倒すべき相手を短時間のうちに見極めた。

「……そこだ!」

「ぐへぽっ!」

するりと死角に入り込んだジョージの拳が、一体の屍生人を打ち砕く。

波紋の輝きがただちに全身に回り、溶融していくそいつを尻目にジョージは次を求めて構え直した。彼の隣に、改めてマリオが並ぶ。

「Good jobだ、マリオ」

「お前もな」

そんな二人に対して、屍生人たちは明らかに強く動揺して見せた。そしてそれを見逃す二人ではない。この機会を逃すまいと、一気に攻勢に出る。

司令塔を失った屍生人の群れは、脆かった。元々ほとんどの屍生人には思考能力があまり残っていない。指示がなければろくに連携もできないのだから、次々に蹴散らされていくのも当然と言えた。

また、屍生人^{ゾンビ}の掃討はジョージとマリオだけで進められることはなかった。襲われていた人たちもジョージたちの活躍を見て奮起し、反撃に出たのだ。

屍生人^{ゾンビ}は吸血鬼と違う。一般人でも戦いようはある。この場所には放棄された銃などもそれなりにあるからして、それを用いて頭を撃ち抜くことさえできるのなら十分な戦力なのだ。

そうして戦うこと、およそ十分。この場の屍生人^{ゾンビ}をすべて討ち果たした面々は、一応の警戒を解いてようやく一息ついた。

そんな中、休む間もなく一人の少年が間を縫って前に出て来る。彼を見て、ジョージは一瞬目を大きく見開いた。

「私はイギリス駐独大使のジグムント・ルベルクラクだ。波紋戦士のお二人には礼を言わせてほしい。ありがとう、おかげで命拾いした」彼の言葉に、ジョージは迷うことなく跪いた。本来の立場であつても、ルベルクラク家はジョースター家より身分が高い。今は一般人を装っているからなおさらだ。

その対応を見たマリオも、慌てて跪く。

まあ、ジョージについては単に、ジグムントに素性を気づかれたくない、という事情もあるのだが。

「楽にしてくれ、今はそういうことを気にしている場合じゃあないからな」

だが彼はすぐにそう言い、ジョージは仕方なく立ち上がる。そうしてみれば、目の前の学友の姿を改めて正面から見ることになって、妙な感慨が湧いてきた。

何せパブリックスクール時代のジグムントと言えば、幼児さながらの少年だったのだ。そんな彼が、十代半ばほどに成長している様はなんともし表しようのない気持ちになった。

似たようなことをジグムントのほうも思ったのか。二人はしばらく、複雑な心境をそのまま顔に浮かべて見つめ合っていた。

「……老けたな、ジョージ」

その沈黙を破って、ジグムントが言う。

「……さて、なんのことでございましょう。自分は閣下とは初対面で

あります」

「ああ、やはりそうなのか。わかった、そういうことにしておこう」
にべもないジョージの言葉に、苦笑するジグムント。だがそれ以上この件について言及することはなかった。

「……腕の立つ波紋戦士の方々とお見受けする。助けてもらった口で言うのもおこがましいが、どうか頼まれていただけないだろうか」
「お聞きいたします」

「この研究所内に、我が国の要人で父の友人でもあるジョナサン・ジョースター卿が囚われている。彼を助けていただけないだろうか」
この状況はもはや政治でどうにかできる状況ではない。そう付け加えて、ジグムントは改めてジョージの目を見据えた。

やはり、ルベルクラクがジョナサンのために動いていた。その確信を得たジョージは、国の素早い動きとそれを成したルベルクラクに感謝する。もちろん、身分は明かせないので内心で。

「謹んでお受けいたします。必ずや」

だからジョージは即答し、頭を垂れる。

「今そなたが手にしているのは、当家が作成したここの地図だな？」

「は。門前に詰めていた傭兵たちに託されました。お返しいたしましょう」

「いや、それには及ばない。ただ、少し貸せ。うむ……これでよし」

ジグムントはジョージが差し出した地図を受け取ると、後ろに控えていた傭兵の一人から鉛筆を受け取り迷うことなく地図に印を書き込んだ。そうして改めて、ジョージへ地図を手渡す。

「……これは？」

「ジョースター卿が収監されている場所だ」

「……なるほど、よくわかりました。ありがとうございます」

「構わない、我々では屍生人^{ゾンビ}はびこるこの場所を奥まで行くことは難しいだろう。外で待っているぞ」

「はっ。では、これにて失礼いたします」

ジョージは再度頭を下げ、踵を返す。貴族的なやり取りをすべて任せ無言を貫いたマリオもこれにならない、一拍遅れて反転した。

そんな彼らの背中に、ジグムントが声をかける。

「会えて嬉しかったぞ。いずれまた会おう」

「……ありがとうございます」

それは間違いなく、長年会えていなかった友人への言葉だった。ジョージは足を止めることはなかったが、その口元は思わず緩んでいる。

返答は簡単なものになったしまったが……しかしそこには、隠しよのない親しさがにじんでいた。今は、それだけで十分だった。

やがて視界からジョージたちが消えるまで、ジグムントは彼の特徴的な痣を探してうなじを見つめていた。

「……まさかここに彼が来ていたとは。驚いたが、運がよかったんだろうな」

「どうなさいいますか？」

ジョージたちが消えた廊下の角を名残惜しそうに眺めていたジグムントに、傭兵が声をかける。

「これ以上死人を出すわけにはいかない。レッドクロスは見つかっていないが、撤収だ、門まで退くぞ」

応えは即であった。

しかしすぐに、もう一度だけジョージたちが消えたほうへふつと顔を向けるジグムント。

「……死ぬなよ、ジョージョ」

この場を後にするジグムントたちの背中を、彼らがここに入った直後から見つめていたものがあつた。

それは白い鳥の形をしたもので、壁から顔を出してジグムントたちの動向をずっと見続けていた。にも関わらず誰もそれに気づかなかつたのは、それが力ある像サイジョンだからだ。

しかしここに来て、それはジグムントたちから目を逸らした。そうして、ズズズ……と壁の中に消える。

もちろん、本当に消えたわけではない。顔を出していた反対側に全身を移しただけであり、それは依然として存在し続けている。

だがそれもまた、くると反転する。そのまま壁という壁をすり抜け、本体の下へと戻っていく。オレンジ色の美しい花を点々と軌跡に残して。

——ピューイ。

どこからともなく、タカの鳴き声が研究所に響き渡つた。



研究所内が騒がしいことに気がついたジョナサンは、その喧騒に思い当たるものがあつて思わず顔をしかめた。

怒声や悲鳴、物音。それはかつて、若かりし日のジョナサンが、血を分けた兄と永遠に別れた日の船内のもものと酷似していたのだ。恐怖が広がり、混乱ばかりが一带を支配していく様が、その場にいないとも手に取るようにわかる。

(まるで屍生人ゾンビが出たかのようだが……まさか、誰かが遺跡にあつた石仮面を使ったのか？　しかしドイツ軍はまだ使い方を理解していなかったはず……だからこそ僕を捕らえたのであつて……)

騒ぎの中で、しかし身動きが取れないために思考を続けるジョナサンは、事態の中に一つ違和感を持った。

仮に、ドイツ軍が石仮面を使ったとして。ここまで派手に惨事になるだろうか、と。

無論、なる可能性はある。だがそれは低いだろうとジョナサンは考える。

吸血鬼が屍生人^{ゾンビ}を作る手段は一つ。生き物の体内に、自らのエキスを注ぎ込むことだ。

しかしそれは、行使者にそうする意図がなければなされない。そして多くの場合、吸血鬼になったものはそもそも真つ当な理性を持ち合わせないから、屍生人^{ゾンビ}を作るよりもただ力に任せて破壊に走るこのほうが圧倒的に多いのだ。

そして仮に理性を残して吸血鬼化したとしても、石仮面は新たにできるようになることを一切——なんならできなくなることをすら——教えない。

つまり吸血鬼化したものは、生まれ変わった自分に何ができて、何ができないのかを先達に教わるか、自ら試して覚えていくしかないのだ。

ドイツ軍が石仮面を使ったなら、ここにいるだろう吸血鬼は間違いなく生まれだて。それが即座に屍生人^{ゾンビ}化を実行できる可能性は限りなく低い。

先の大戦が始まる少し前、神聖サンタナ王国で現地調査をする機会があったジョナサンは、たまたまこうした吸血鬼の事情をある程度知ることができた。だから違和感を抱けた。

当時は、自身がかつて対峙したディオがいかに吸血鬼として突き抜けた存在だったかを知って、人間を辞めてもなお彼は優秀なのかと妙な感慨を抱いたものだが、それはともかく。

今の研究所内で、石仮面が使われた可能性は極めて低い。ジョナサンはそう考える。

ならば、誰が屍生人^{ゾンビ}を作ったのか？

(……外部から持ち込むしかない。屍生人^{ゾンビ}が持ち込まれたのか、吸血鬼が潜り込んだのかはわからないが……)

どちらにせよ、目的のためならば手段を選ばない非道さが透けて見

える。人道に反した振る舞いは、到底許せるものではなかった。

しかし一体、誰がそんなことを……？

疑問がそこまで至ったときだった。ジョナサンは、自身が囚われた部屋の頑丈な扉に、何かがぶつかると音の聞こえて意識を外に戻した。

直後、懇願と混ざり合った張り裂けるような悲鳴が、扉のすぐ向こう側から響いてくる。

「ひっ、いつ、嫌だーっ!! 死にたくない、死にたくない!! 誰か、誰かあ!!」

その声を聞いた瞬間、ジョナサンは自らの全身がかつと熱くなったのを感じた。

すぐさま今の己にできること、すべきこと、諸々を刹那のうちに検討して、一瞬のうちに決断する。

したからこそ。

「ぬ……おおおおおーっ!!」

彼は全身に波紋と力を巡らせて、拘束具を力づくで吹き飛ばした。鎖はどれもこれも引きちぎれ、覆っていた布は甲高い音とともに破れて落ちる。

さらには彼が縛り付けられていた太い柱が大きく揺れ、派手に後ろへ倒れ伏した。

そしてその一連の様子を確認するより早く、ジョナサンは前へ飛び出した。本来の開ける方向とは逆に扉を蹴破り、吹き飛んでいく扉と共に部屋から脱出。

と同時に、今まさに青年を喰おうとしていた屍生人の顔面に、黄金に輝く拳を叩き込んだ。

「ぎゅぶん!!」

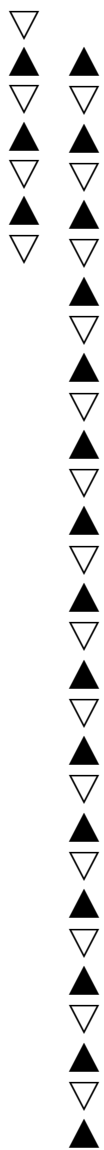
屍生人はただちに消滅した。

その痕跡である軍服を避けて床を踏みしめたジョナサンは、おおよそ顔から出るすべての液体にまみれた顔の青年をかばう形で前に出る。

「恐れる H A V E N O F E A R ! 僕が I A M H E R E !」

「じ、じ……ジョースター卿……!?!」

信じられない、とばかりに硬直する青年は——ジョナサンを助けようとしてくれていた、あの兵士だった。



「父さ……ジョースター卿、ここですか!? ……え?」

「うわ、急に立ち止まってどうしたジョニイ、……は?」

ジョージとマリオがそこにたどり着いたとき、既にすべては終わっていた。

部屋の中には、大量の軍服が（ごく一部に白衣なども）あてどなく転がっている。それだけの人数がここで一斉に脱いでどこかへ行つたというはずがなく、それらはすべて屍生人たちの残骸だ。

そしてその部屋の中央で残心を続けていたのは、捕らわれ助けを待っていたはずのジョナサン。

「あー、二人とも、来てくれたんだね!」

彼は数人の男たちを背に身構えていたが、ジョージたちを見ると表情を和らげて気さくに手を上げて声をかけてきた。それ以外、部屋は静かなものであった。あまりと言えばあまりの光景に、ジョージたちはぼかんとするしかない。

そんな二人に、ジョナサンは説明する。抜け出そうと思えばいつでも抜け出せる拘束であったと。しかし気楽にできるわけではなく、何よりそんなことをしたらドイツ軍を刺激する。それは危険なだけだから、自重していたと。

言われたジョージとマリオは、同時に同じことを思った。そんなバカな、と。

だが、ジョナサンはその気になれば鋼鉄の首輪すら腕力で引きちぎれる男だ。スタンドを使わず生身で、である。実績があるのだ。

何より、修行中にも実際にその瞬間を見たことがある（そのときは鉄格子であったが）二人は、よくよく考えてみればなるほど納得するしかなかった。

その後は会話もそこそこに、研究所から脱出する。生き残ったものたちを連れてのことゆえに行きよりも速度は出せないが、屍生人の数はもうだいぶ減っているようで、足を止める必要はほとんどなかった。

とはいえ、あくまでほとんど、だ。まったく遭遇しないわけではなく、そのたびに三人は拳を振るうことになった。まあ、この三人がいて苦戦するような屍生人はいないので、目に見えて移動が遅れることはなかったが。

そうしてなんとか門周辺まで戻ってきた一行は、無事に脱出していたドイツ軍の将校や、ジグムントらルベルクラクのものたちに迎えられることになる。

しかしジョージとマリオは、あれやこれやと声をかけられる前にこつそりとその場を後にした。何せ二人の身分……特にジョージのそれは偽ったものであるからして、うっかり国の公的機関に引き止められたくなかったのだ。

正確に言えば、ルベルクラク率いるRPSAの傭兵たちは立ち去るジョージたちに気づいてはいた。ただ、この場におけるルベルクラクの顔とも言うべきジグムントが、二人を見逃すよう事前に言っていたため、誰も声をかけることはなかった。ジグムントは、ジョージの置かれていた立場をほぼ正確に理解していたわけである。

かくして、研究所で起きた屍生人事件は一応終了した。後世の記録では、死者数は実に二百名を優に超えるとされる。

ただし、ナチスはオリンピックを控えていることもあって、この件を全力で隠蔽するべく奔走することとなる。この死者はすべて別の要因による行方不明者として、記録されたのである。

まあ戦後にこの件が一部明るみになったときは、詳細を語ってもオカルトにしか思われなかったのだが。しかしだからこそ、ますますナチスの平和に対する罪が重くなる羽目になり、不必要に罪状が増えた将校もいたが……それはまた別の話だ。

だが、まだ事件は完全には終わっていない。なぜなら——
「——やれやれ、なんとか逃げ切れたようだな」

「ええ。しかしマスター、回収してきた遺物をどう持ち出しましたよ
か？ 街の様子を見る限り、しばらくは仮宿から動けそうにありませ
んが」

「うむ……仕方あるまい、ほとぼりが冷めるまでは動かぬほうがよ
ろう」

ベルリン郊外の、格安ゆえにオンボロな一軒家で、二人の男が相対
していた。

彼らの背後には十体ほどの屍生人^{ゾンビ}が控えている。いずれも理性を
残した個体で、屍生人^{ゾンビ}らしからぬ理知的な表情で微動だにしない。

さらには隣の部屋には、ルビーやエイジャの赤石を中心とした宝飾
品が小さいなりに山となつて置かれている。その頂上には、石仮面が
六枚。

その宝の山をちらりと一瞥して、スラブ系の男がニヤリと悪辣な笑
みを浮かべた。

彼の手には赤い宝石が握られている。十字架の形の浮き彫りが刻
まれた宝石だった。

——ピュイー。
と。

どこからか、タカの鳴き声が聞こえてきた。

だが、二人の男の視界にそれらしいものは見えない。どこか遠くの
タカが鳴いたのだろう。二人はそう決めつけた。

実際、タカはこの家の近くにはいない。それでも、タカがその身に
宿す半身は早い段階でこの家を見つけ、定期的に監視を続けていたの
である。

そうして研究所から逃げた二人の男がしばらくは動かないことを
理解したタカは、ばさりと羽ばたき空へと舞い上がる。向かう先は、
とある二人の男の下だ。

タカは知っている。なぜそれを知っているのかは、本人もちつとも
わからなかったが。

ともかく、生まれたときから知っていた。彼らが使った波紋の正体
と、根源。それを修めた人間が背負う宿命を。

だから彼らを呼び寄せることが正しいと……ひいてはそれが、自身がおぼろげながら感じていたなすべきことに繋がると、そう信じて。

タカは風を切って、まっすぐに大空を飛ぶ。

彼女の頭上に輝く太陽は、彼女がかつて名に背負っていた頃と変わらず、燦々と輝いていた。

40. JORGE JOESTAR 7

ジョナサンがジグムントに迎えられ、イギリス大使館へ向かっているさなか。ジョージとマリオは仕事を成し遂げた充足感を胸に、ホテルへの帰路に着いていた。

道中はまだ朝の出勤時間帯で、混み合っている。研究所の周辺とは違った騒がしさが満ちていた。

そう、まだ朝なのである。一連の騒動はジョージたちにとっては濃密な時間だったが、実際には一時間も経過していないのだ。

とはいえ二人は出勤とは無縁だ。立場上もそうだが、どちらかと言えば彼らは退勤という感覚だからだ。

二人は足早に過ぎていくサラリーマンや、騒がしく通り過ぎていく車両を尻目に、のんびりしたものである。

だが、そんな彼らを再び戦いの場へ引き戻す存在が空からやってきた。ハーケンクロイツの小さな帯を首に巻いたオオタカが、ジョージの頭上から舞い降りてきたのである。

「うおっびびっくりした!?!」

「何かと思えば君は先日の。一体どうしたというんだ?」

二人は驚いたが、タカのほうは気にした風もない。マイペースにジョージの肩に乗って、彼の服をくちばしで引っ張ってくる。

ジョージはそんなタカを両手で抱き上げて、目を合わせてみた。漆黒の瞳が彼の視線と重なる。

「ピューイー!」

対してタカは、ジョージの手から羽ばたいて離れ、地面に降りる。そのまま数歩進むと振り返り、さらに進んで、また振り返り……を繰り返した。

「……なんだこいつ。もしかして、付いて来いって言いたいのか?」

「そのようだな……確かにこの後の予定はないが……」

うーん、と顔を見合わせて渋る二人に、タカは急ぎ立てるように一声強く鳴いた。そうして二人の視線をもう一度集めると、その身体から白い猛禽類型の像が浮かび上がる。

スタンド。生命エネルギーが作り上げる、力ある魂の具象体。人ですら稀なそれを、このタカは完全に制御下に置いて使いこなしていた。

だが、ジョージたちがそれに対して反応することはなかった。なぜなら、彼らにはそれが見えていないから。

タカはそれを少しだけ不服そうに瞼を半分下ろして見せたが、すぐに気を取り直してスタンドを動かし始める。自身よりよほど精密に動けるそれに、舗装されていない地面へ文字を書かせようというのだ。

スタンドがオレンジ色の花の像を足下に咲かせながら不格好に、しかし素早く精密な動きで足の爪を振るう。するとそれに応じて、地面に文字が刻まれていく。

その様子を、最初はただ怪奇現象を見るような顔で見ていた二人。だが刻まれていくものがアルファベットだと気づくや否や、顔色を変えた。

彼らの主観では、何もないところにいきなり文字が書き連ねられていくのだから、驚くしかない。ましてや、出てきたものがドイツ語で「吸血鬼」を意味する単語だったのだから、なおさらだ。

「……おいおいおいおいおい、まさか。いやそんな、そんなまさか!?!」

「実に奇妙だッ！信じられないが確かに、勝手に文字が書かれています。ついでにぞ!?!」

「これはこいつが書いているのか!? 一体どーやってッ!?!」

だが返答はない。さらにタカは記し続ける。

そして、実に三行もの文書を書き上げてピリオドを打った彼女が、胸を張って振り返ったとき、既にジョージとマリオは表情を引き締めていた。

『吸血鬼が石仮面を持って隠れています』

『研究所にゾンビを放った吸血鬼です』

『波紋が必要なんです!』

そして、タカはまた一声鳴き声を上げた。

「……どこにいるのか知っているんだな？」

「俺たちに対処してほしいと、そういうことか？」

「ピュイー！」

対する二人の問いに、タカは鳴き声と共に大きく頷いた。

と同時にさらに彼女のスタンドが動く。直前までの文字を白い翼で払って消すと、新たに別の文章が記されていく。

『そこまで案内しますので、協力していただけられないでしょうか？』

クエスチョンマークを書き終え、タカが視線をぐいと上げた。漆黒の瞳には、最初とは異なり期待と懇願が同居しているように二人には見えた。

「……細かいことはよくわからんが。なあ、ジョニー？」

「ああ。もしこれが本当なら、見過ごすわけにはいかない」

二人は短く言葉と視線を交わすと、タカに向き直る。

「案内、頼めるか？」

そして代表してジョージが問えば、タカはまた一声、今度はどこか嬉しそうに鳴いた。

さらにスタンドが機敏に動く。それまでとは異なる明らかに書き慣れた様子の達筆で、文章が追加された。

『あたしの名前はポラリス！ よろしくね！』

どこか快活な、太陽のような少女を思わせる筆跡。

それを見た二人は、どちらからともなくふつと小さく笑みを浮かべた。

「ああ、よろしく頼む。俺はジョニー」

「私はマリオだ」

「ピュイー！」

タカ——ポラリスがふわりと浮かび上がる。スタンドは、既に消えていた。無論、それはこの場の誰にもわからないことだったが。

しかしポラリスは気にすることなく羽ばたくと、ジョージたちを先導し始めた。

一行はそのまま、さほど時間をかけずにベルリン郊外まで辿り着く。少し前まで、ポラリスが自身の能力で監視していた古い家だ。

だが一見しただけでは、人が住んでいるようには見えない。扉はもちろん窓はすべて閉じられ、内側から板が打ちつけられている。郵便受けなど、いつのものかもわからぬ雨水がたまっているほどだ。静まり返っていて、人気もない。

「完全に閉まっているな。この扉、ビクともしないぞ」
「本当にここに？」

もはや疑うことなく鳥と意思疎通をはかるジョージに、ポラリスが頷く。

と同時に、その身体からスタンドがせり上がる。ばさりと一つ羽ばたいて、それは家屋の中へと入り込んで行った。

スタンドは、スタンドでしか触ることができない。それはすなわち、ただのモノなどすり抜けてしまえるということでもある。よほど分厚いものであればその限りではないが、厚いとはいえ木でできた扉をすり抜けるくらいはわけもない。

そうして中に入り込んだスタンドは、扉を閉ざしている門を外した。次いで足でつかんで引っぱり、こじ開ける。

ジョージたちはもちろん、目を見開いて驚いた。彼らの目には、固く閉ざされていたはずの扉がひとりでに開いたように映ったのだから、無理からぬことではあるが。

だがそれもすぐに収まった。なぜなら、扉が開く軋んだ音に続いて、屋内から慌てた様子の声や音が聞こえてきたのだから。

「聞こえたか、ジョニー？」

「ああ。どうやら何者がいることは間違いないらしい」

彼らを尻目に、ポラリスが先陣を切って中に入っていく。二人は短く交わしたのちに彼女を追って屋内へ踏み込んだ。

屋内はほぼ暗黒に包まれていた。光らしい光は入り口から差し込む明かりだけで、ほとんど一寸先も見通せない闇である。

だが、踏み込んだ二人と一羽の感覚は、ロウソクが燃えていたようなほのかな匂いを感じ取った。

その中に混じって、腐敗臭も漂っている。屍生人が発するものだ。仮にこの根源が屍生人でないにしても、なんらかの問題があったとは

推測できる。

と、ジョージが油断なく身構えて懐からライターを取り出した。カチン、と石が鳴って火が灯る。オレンジ色の光が頼りなさげに揺れながら、室内を弱々しく照らし出した。

そのまま彼らは、腐敗臭が漂ってくるほうへと足を向ける。警戒しながら慎重に。

先行するのはポラリスのスタンドだ。使い手以外には認識されない強みを活かして、状況を次々と明らかにしていく。

そして遂に、スタンドが屍生人の痕跡を発見する。

その情報はすぐさま本体であるポラリスと共有される。彼女もまた、即座にジョージたちに情報を引き渡す。

翼の先で示した場所。床下の収納と思しき蓋が、かすかにズレて隙間ができていた。そしてそこから、他よりも強い腐敗臭が這い出てきている。

それを認識したジョージはライターをマリオに手渡し、懐から小さな瓶を取り出した。

ガラスでできたその中には、油が満たされている。その中に、さらに取り出した紐をひたした彼は、波紋の呼吸を整える。すると波紋の力で、紐はしなりながらびしりと固まった。

さながら馬上鞭のようになったそれを、ジョージはためらうことなく足下の隙間に差し込んだ。それこそ刺すくらいの勢いでだ。

「おぼっぱああアアア!？」

すると次の瞬間、文字通りの断末魔の悲鳴とともに、波紋が通ったとき特有の音を響かせて一体の屍生人が大慌てで飛び出してきた。

波紋を帯びた紐はそいつの喉を貫いて刺さっており、控えめに言うて重傷である。

だがそれでも、そいつはジョージを道連れにしようとしたのだろう。ダメージを負いながらも、飛び出す勢いそのままに頭突きを繰り返してきてきた。

しかし、そいつにできたのはそこまでであった。ジョージは焦ることなく空いていたほうの手をかざし、難なく頭突きを受け止めてみせ

た。どころか、そのまま波紋を頭に流し込んでもみせた。

当然、完全なるトドメである。屍生人^{ゾンビ}はもはや悲鳴を上げることすらできず、どろどろに溶けて終わりを迎えた。

そしてその瞬間だった。

「死イイねエエエエーッッ!!」

「ケエエエーイ!!」

様々なものを壊したり吹き飛ばしりしながら、四方八方から屍生人^{ゾンビ}たちが襲いかかってきたのだ!

だがジョージたちにしてみればこの襲撃は予測できたものであり、奇襲としての体をなしていなかった。

一切慌てることなくマリオが身を翻しながら、痛烈な裏拳をお見舞いする。背後から迫っていた先頭の屍生人^{ゾンビ}が顔面に直撃を受け、吹き飛びながら溶け始めた。

と同時に身体をひねり、第二波さながら仲間の死体を乗り越えて攻撃してきた屍生人^{ゾンビ}をさらりといなす。

その先に待ち構えているのはジョージだ。彼はそちらを振り向くことなく後ろ回し蹴りでこれを蹴散らすと、一瞬の間に手元に戻していた紐を振るって前方の屍生人^{ゾンビ}どもを打ち据える。

紐は油をたっぷり吸っている。そして油は波紋伝導率が極めて高い。あとは言うまでもないだろう。

そして中には天井を突き破って急降下攻撃を仕掛けた屍生人^{ゾンビ}もいたが、こちらはポリリスのスタンドによって迎撃されていた。

彼女のスタンドは、近距離戦を得意とするパワータイプではない。しかしそのかぎ爪は侮れない切れ味を誇る。

つまりどうなったかと言えば、華麗に縦回転したスタンドのかぎ爪が、空中ゆえに回避ができない屍生人^{ゾンビ}の身体を開きにしたのである。

真つ二つにはなっていないが、攻撃のために前に出してきていた手は既に離れ離れた。そいつはそのまま、情けない悲鳴を上げながら床にべしやりと墜落した。

「当たり前だな」

「ああ、間違いない。だがこいつらは所詮屍生人^{ゾンビ}だ。吸血鬼はどこだ

？」

警戒を続けながらも、ひとまず一息ついた二人。だがそれはほとんど一瞬のことだった。

彼らはどちらからともなく、弾けるようにして左右に跳んだ。ポラリスも同様に、上へと飛び上がる。

直後、彼らをほぼ一直線に貫く軌跡を描いて、何かが高速で通り過ぎていった。狙いを外したそれは、容赦なく壁を破壊する。

「これは！」

スペースリパー・ステインギアアイズ

「空裂眼刺驚！」

着地、もしくは回転して態勢を整えなおした二人が声を上げる。

そんな二人の視線は、一箇所に集中していた。遅れてポラリスもそちらに目を向ける。

そこには、黒いローブをまとった男が立っていた。顔立ちはスラブ系。機嫌悪く目を怒らせている。

だがそんなことよりもなによりも、噛み締めた口元からのぞく牙が、男を人外だと証明していた。

「……ローマ式波紋道の者どもか。なぜここがわかった？」

男……吸血鬼がぎろりと二人を睨みつける。

だが当然、そんなことで怯むジョージたちではない。

「なに、素敵なお嬢さんが教えてくれたのさ」

肩をすくめながらマリオが軽く答え、

「先に研究所に屍生人を放ったのは貴様か？」

ジョージが毅然と言い放つ。

「質問を質問で返すな、若造ども。フン……まあいい、最初から答えなぞ期待しておらん。そんなことより……見られたからには生かしては帰さんぞ」

だが吸血鬼もまた、動じない。ローブを翻して身構えた。

ジョージたちも同様に。

「それはこちらのセリフだ」

「だな。二人がかりになるが、卑怯だとは言ってくれるなよ？」

そうして戦いが始まったのを、梁の上からポラリスが冷静に眺めて

いた。

生かしては帰さない。そう言ったわりに、吸血鬼の攻撃は比較的大人しかった。

いや、周辺の調度品などは容赦なく破壊しているのだが、それでも家そのものを破壊するような立ち回りはしてこない。

だがこれは無理からぬことだ。何せこの屋内は真っ暗だが、今はまだ太陽が照っている時間なのだ。うっかり外壁に穴を開けてしまつたら、その分吸血鬼にとつては不利になる。それだけは避けねばならないのだった。

とはいえ、だからといって消極的に動いているわけでもない。目からの遠距離攻撃、スペースリパー・ステインギーアイズ空裂眼刺撃は、常に狂いなくジョージたちの頭か喉、あるいは肺ばかりを狙っている。それらは特に窓を開けようとした場合に顕著で、二人はそちらについては一旦諦め攻めることに専念していた。

しかし、光を呼び込むことを断念して最初の駆け引きで、ジョージが作った隙について殴りかかったマリオが利き手を氷漬けにされてしまった。

「ぐっ!? こ、こいつは……ぐはっ!?」

「マリオ!? これは……気化冷凍法! こいつ、デイト級の吸血鬼なのか!」

一瞬の隙を見せたマリオを蹴り飛ばしながら、吸血鬼が嗤う。

しかし慢心はしない。それでロンドンでは手痛い目にあつたのだ。失った手は、背格好の近い男のそれを移植して見た目の上では五体満足だが、まだ完全には馴染んでいない。ちよつとしたダメージをそこに受ければ、すぐに落ちてしまうだろう。

「厄介な……しかしそれがどういうものか、どうすべきかはわかつている」

波紋は基本的に、身体から直接流し込むものだ。そして遠距離攻撃をほぼ持ち得ない。

だが中距離程度であれば、工夫次第でどうにでもなる。

ジョージが選んだのは、先程屍生人相手に武器として使った波紋紐での攻撃。これなら、直接触れることなく戦える。

ただ、これだけでは気化冷凍法を完全には破ることはできない。紐だけなら気化冷凍法を受けないが、気化熱を用いる気化冷凍法は波紋を効率よく流すための油を媒介に冷気を伝達してしまうのだ。いかに油が凍る温度が水より低いとはいえ、超速の瞬間冷却が可能な気化冷凍法の前では誤差でしかない。

「ぐ……じ、ジョニイツ、これを！」

「ああ！」

だからそれを補うため、マリオは痛みを押して、受け取ったままになっっていたライターを投げた。それを見ることなく手に取ったジョージは、紐に火を放つ。

「……やはり伝わっているか。どうやら、ローマ式波紋道にジョナサン・ジョースターが関与しているという噂は本当のようだな」

吸血鬼が眉をひそめる。

気化冷凍法は高温に弱い。それはおよそ五十年前にジョナサンが、そしてつい最近にもジョセフが証明している。

「……貴様、何を知っている？」

だがそれよりジョージは、敵の口から父親の名前が出てきたことに目を細めた。

「お前の知ったことではない」

だが吸血鬼は語らず、返答らしい返答は空裂眼刺驚^{スペースリバー・ステインギアアイズ}だけであった。

それを合図に、戦いが再開される。マリオは蹴り飛ばされたことによる負傷と、いまだ溶けない利き手の凍結により満足に動けない。このためジョージ一人が前に出て殴り合う形となった。

ただ傍目には素手と鞭で殴り合っているようにしか見えないが、両者ともに互いの攻撃の性質を理解しているためか、攻撃はどちらも紙一重でいなされ、痛打すら与えるに至っていない。

互いに小さな傷が積み重なっていく。だからそんな二人が倒れるよりも、この古い家屋が倒れるほうが早いかもしれない。

また、ここまで無言のポラリスもスタンドを用いて援護に回っていたが、彼女のスタンドは決定打になっっていなかった。

不可視の鋭い攻撃は人間相手ならば間違いない致命傷を量産できるのだが、吸血鬼の驚異的な治癒力の前では分が悪いのだ。切れすぎるとゆえに、傷口がすぐにくっついて塞がってしまう。これがいつそノコギリなどのように切れ味の鈍い斬撃なら、もう少し治療にかかる時間を稼げたのだろうか。

仕方ないので、彼女は完全に援護だけに専念して立ち回っている。その辺りの切り替えの判断、切り替えたからにはそれに徹する潔さは、人間の戦士にも劣らないものであった。

吸血鬼側もこれを無視できないと判断し、時折梁の上にいるポラリスめがけて空裂眼刺驚を放つのだが、そのすべてが外されている。

外しているのではない。外されているのだ。

空裂眼刺驚がポラリスに向けられた瞬間、彼女はスタンドの能力を開放する。刹那の時間の中、その視界に複数の七色に輝く軌跡が現れる。

さながらかぎ爪につけられた傷跡のようなそれを、
空裂眼刺驚が迫る中スタンドのかぎ爪がなぞった瞬間。
空裂眼刺驚の軌道は突然逸れるのだ。

それが三度も重なれば、吸血鬼側も尋常ではない力が働いていることは察することができた。

(スタンド……だろうな。畜生の分際で生意気な)

吸血鬼は舌打ちを漏らしつつ、少しずつ後退していく。このまま家屋が倒れて日光を浴びる可能性を危惧したのだろう、戦いの場を移すことを選択したのだ。強すぎる吸血鬼としての力があだとなった形である。

もちろんただでは退がらない。彼が入ったのは廊下だ。長くはないが、直線の廊下である。射線を確認するにはちょうどいい場所と言えよう。

先頭に立って踏み込んだジョージも、すぐにそれを察した。同時に

飛んでくる液体の弾丸を、身を翻してかわす。

すぐさま改めて廊下を伺ったが、吸血鬼はそこからさらに後退したのか姿が見えない。今度はジョージが舌打ちする番だった。

「マリオ、行けるか？」

「ああ、なんとかな……」

「……無理はするなよ」

「しないで勝てるならしないさ」

マリオの傷は、波紋の呼吸を治療に専念したことで早くもほとんど塞がっていた。だが利き手はまだまだ凍ったままで、凍傷になることを覚悟で自身の肌で温めているところだった。

それでも進まないという選択肢はない。二人と一羽は奇襲を警戒しながら廊下を進み、奥まったところの部屋まで辿り着く。

そこには、金や赤い宝石で彩られた品々が小さな山となって置かれていた。山には石仮面も一つ、乗っている。

また、目を引くものももう一つあった。床にぽっかりと空いている穴だ。径は人が一人くぐれるほど。

その中に、

「ふん……来るか、波紋使いども」

吸血鬼はふわりと跳躍し、足から落下していった。

穴の先は地下だろう。あからさまに罠である。悠長にそこから降りれば、下で待ち構えている吸血鬼が攻撃を仕掛けてくることは想像に難くなかった。

なればこそ、

「ピュイー！」

ポラリスが鳴き、床に文字が刻まれた。

『あたしが行く』

速さを重視したためか、その筆跡は乱れていたが。それでもポラリスは怯むことなく、スタンドと共に穴へと飛び込んでいった。

その様はまさに、空中から地上の獲物目がけて急降下する猛禽類だ。人の反射神経で対応するのは難しいだろう。

だが吸血鬼には見てから反応できる程度でしかない。当たり前の

ように、スベリースリパー・ステインギアアイズ空裂眼刺驚が飛んでくる。

しかしそれはポラリスも承知していた。だからこそそのスタンドである。

スタンドが爪を走らせる。ポラリスの視界で輝く、超常の傷跡目がけて。瞬間、ドイツ語の文字が浮かび上がる。

——P e r f e k t .

完璧を意味するその単語が文字通り、完璧な仕事を保証した。

スベリースリパー・ステインギアアイズ

空裂眼刺驚の軌道が、またも急にずれたのだ。まるで弾丸のほうポラリスを避けたかのように。

だが彼女は、後方へ去っていく攻撃を振り返らない。猛スピードで地下に辿り着くと同時に、スタンドを前に出して吸血鬼を強襲した。

「くっ、厄介なやつめ！」

苛立ちを隠そうともせず、吸血鬼が猛烈な勢いで手刀を振るう。

人外の膂力で放たれたそれは、衝撃波とまではいかずとも瞬間的な突風を起こすには十分だった。

鳥であるポラリスは種族柄、身体が軽い。墜落まではしなかったが、大きく体勢を崩しながら吹き飛ばされた。

しかしその直後に、ジョージとマリオが降ってきた。彼らはすぐさま身構え、吸血鬼がポラリスを追うことは不可能になる。思わず、と言いたげな舌打ちがやけに大きく響いた。

「チツ……仕切り直しか。あの鳥のせいでもここまで下がった意味が薄くなってしまうたではないか……」

「下水道だな……正気か？」

「だが外道の死に場所としては相応わしい」

吸血鬼から完全には意識を逸らさず、周囲を確認する二人。

そこは下水道だった。そう、例の研究所に侵入するため、吸血鬼たちが使った場所である。汚水が緩やかに流れる水路を、明らかに当初の設計ではないであろう小さな明かりが寂しく照らしている。

汚水の流れは深くはないが、浅くもない。身長二メートルに迫る巨軀を持つジョージであればそこまですらないだろうが、平均的な男性でも膝上くらいまでは確実に浸かるだろう。

「ピューイー……う？」

そこを見渡しながら、戻ってきたポラリスが首を傾げている。まるでここにいるはずのものがいない、と言いたげに。

彼女の様子をジョージたちはいぶかしんだものの、

「まあいい……ここなら日の光も入るまい。全力で行くぞ！」

大きく跳躍した吸血鬼が吠え、下水目がけて落ちながら拳を叩きつけたことで、否応にもそちらへ意識を向けざるを得なかった。

宣言通り、吸血鬼に出せる全力だったのだろう。大砲もかくや、というほどの轟音が至近で鳴り響いたせいで、思わずジョージたちは耳を塞いでしまう。人間より聴力に優れるポラリスに至っては、悲鳴を上げて地面に落ちてしまった。

さらに、巻き上がった下水が彼らを襲う。気化冷凍法を絡めたのか、それは恐ろしく冷えていた。当然、下水特有の臭気もセツトだ。常人ならばこれだけでやる気を失ってもおかしくない。

「これで終わりだ！ 死ねエー！」

だが攻撃は続く。暗幕のように降り注ぐそれらの影から、スペースリバー・ステインギーアイズ空裂眼刺驚が襲ってきた。しかも丁寧に、声のしたところとは違う方向からだ。

しかし矢面に立つジョージは、音という防ぎようのない先制攻撃に気を取られ、今から回避行動を取ることはもはや不可能であった。しかも狙いは相変わらず適切で、まっすぐ彼の肺に向かってきている。

「……ッ!!」

だから彼は、あえて空裂眼刺驚スペースリバー・ステインギーアイズに向かって踏み込んだ。

脳裏をよぎるのは、父から聞いていた祖父の格言。自身と同じ名を持つ祖父が、幼き日の父に言ったという言葉がこのとき、まさにジョージの生死を分けた。

——逆に考えるんだ。

前後の文脈は今このときは関係ない。必要なはその一点。発想を転換すること。

つまり回避できないなら、回避しなければいい。

「おおおおおおーッ!!」

ジョージが今、咄嗟にできる最大の波紋を練り上げる。その波紋は、くつつく負の波紋を徹底的に除いた、弾ける正の波紋のみで構成されたもの。前に向けて鋭角になるように組んだ両手にそれを集中し、前へ踏み込んだ。

直後、彼の手にスペースリバー・ステインギアアイズ空裂眼刺驚が直撃する。だが、スペースリバー・ステインギアアイズ空裂眼刺驚はそこを始点にして、左右に逸れて行った。

膨大な量の正の波紋が、衝突点に対して鋭角に突き付けた手のひらが、スペースリバー・ステインギアアイズ空裂眼刺驚が液体であるという事実が、そして前に出た際の運動エネルギーが、奇跡的なかみ合わせで避弾経始（装甲を傾斜させて弾丸の運動エネルギーを分散させ、逸らして弾くこと）を実現させたのである。覚悟を決めたジョージの、決して折れない不屈の闘志がつかんだ結果と言えよう。

「……バカな！」

それを目の当たりにした吸血鬼は、吃驚するしかない。

スタンドはおろか道具すら用いず、その身一つで必殺の攻撃を受け切られたのだ。悪人ながらその心境は察して余りある。

ジョセフがいたなら、「相手が勝ち誇ったとき、そいつは既に敗北している」と言っただろうか。驚愕と、それに伴って動くことを一瞬でも忘れてしまったことが、吸血鬼の命運をはっきりと分けた。

もちろん、ジョージとは正反対の方向に。

「次はこちらの番だ……！」

ジョージは、拳を握り締めて前に出る。彼の両手は血にまみれていたが、それだけだ。貫通もしていなければ、惨たらしく肉がえぐられているわけでもない。

いや、無論一般人にしてみれば重傷なのだが、波紋戦士である彼にとってはこれくらい、退く理由にはならないのだ。

その握り締めた拳には、既に次の波紋が練り上げられて集まっていた。

波紋の呼吸音が、下水道にこだまする。

「震えるぞハート！ 燃え尽きるほどヒートツ！ 刻むぞ血液のビートツ!!」

な、こんなところで……ッ！」

波紋傷特有の、焼けるような音が響き始める。吸血鬼の身体が、溶け始めていた。

彼は震える手を、自由の利かない手を、まるで空をつかむかのよう
に天井へ伸ばす。

「し、死ぬ、わけには……いかない……！ 我輩は、まだ……ッ！」

その手が、吸血鬼の首を切断した。いまだ波紋がほとんど至っていない頭部は無傷。身体から離れたことで、波紋がこれ以上流れることもない。

もちろんこのままではいずれ彼の命も尽きるが、それでも数日は余裕で生き抜くことができるのが吸血鬼という生き物だ。

ゆえに彼は、逃げの一手を選んだ。首の切断面から血管を大量に伸ばし、さながら軟体動物のようにならせて下水道の奥へと消えようとする。

だが、それすらも――。

「かッ!」

――遅かった。

マリオの放った波紋カッターが。下水を手のひらで丸め、作り上げた一枚の波紋カッターが飛来し、吸血鬼の頭を左右に両断した。

「だから言ったろ……『正気か?』ってな」

大きなため息をつきながらも、彼はニヤリと笑った。

「ああ……ああ……ああああアアアアアアアッ！ アル……

ファイ……さま……！ わ、我ら、に、も……モット……力……フ……」

返事は……最後まで告げられることなく、昏い下水道の奥へと消えて行った。

42. ルベルクラクとルージュユフィシュー

吸血鬼の消滅を確認したジョージとマリオは、しかし安心した様子は見せず思案顔を見せた。

「おいおい、聞いたか？ さつきのやつ、『アルフィー』と言ったぜ」「ああ、そう聞こえた。今際の際ですがるように絞り出した様子だったか……」

凶悪な吸血鬼が、死ぬ直前にすがつた相手。それがどのような存在かはまるで見えてこないが、それでも推測することはできる。

「つまり……この一件にはまだ裏があると見たほうがよさそうだな、ジョニー？」

「同感だ。そしてその裏で糸を引いているのが、そのアルフィーとやらということだろうか……」

うーむ、と唸りながら、ジョージは顎に手を当てる。
だが、

「ピューイ!! キュアアアアア!!」

「うわっ、なんだなんだ!」

「ど、どうしたんだ?」

考えようとした瞬間、横合いからポラリスが飛びかかってきた。せわしなく羽ばたきながら空中にとどまり、当たるかどうかのギリギリのところは何度もくちばしを向けてくる。

今までわりと大人しかっただけに、その態度は急変と言って差し支えなかった。

「待てポラリス、君は一体何を怒っているんだ?」

なんとか落ち着かせようとジョージが腕を差し出す。

ポラリスはそこに留まると、壁に顔を向ける。同時にスタンドが現れ、壁に向けて爪を振るい始めた。

怒涛の勢いで刻まれていく文字は、今までと違い明らかに乱れている。だがそれは不慣れというものではなく、感情が昂ぶっているからということとは明白だ。

具体的に言えば、それは怒りであった。

『アルフィー様があんな吸血鬼を使うなんてあり得ません！ あの方は石仮面自体に否定的でしたし、ご自身の意思で使うことありませんでした！』

「……何だ？ 何がどうなっているんだ？」

「これは、……ポラリス、君は何を知っている？」

『アルフィー様が自ら石仮面を使ったのは、ただ一度きり！ 家族から永遠に共にありたいと願われたときだけです！ その家族ですら吸血鬼の宿業に屈したときは、引導を下したくらいです！ あんな外道、アルフィー様の名前を勝手に使う不届きものです！』

そこまで文字を刻んだポラリスは、深い呼吸に身体を震わせながら、キツとジョージを睨んだ。

それから、我に返ったように瞬きをしたあと、もう一度……今度は丁寧に文字を書き始めた。

『アルフィー様はお優しい方です。人間の作るものを愛し、少しでも暮らしが良くなるようにと知恵を与えられた。家族に石仮面を使ったことも、後悔されていた。そのような方が、ああいう輩の勝手をお許しになるはずがありません』

「……まさか、ウェールズ神話のアルフィー神のことを言っているのか？ だが、だとしたらそれはカーズたちの……」

「柱の一族ということになるよな。ローマにはいなかったが……既に目覚めているのか？」

『さあ、その辺りはなんとも。あたしも何もかも覚えているわけではないので』

ぴしり、とジョージたちが固まった。

そんな彼らから、ポラリスはふわりと飛んで距離を置く。堂々とした態度で地面に降りると、なおもスタンドを駆使して文字を背後の壁に刻み込んで行く。

その立ち姿は、後ろ暗いものは何も感じさせなかった。ただひたすらに、真摯な献身があった。

『あたしが今も覚えているのは、アルフィー様のことだけ。アルフィー様がどんなお方で、かつてのあたしをどれだけ慈しんでくれた

のか、それだけしか。もちろんただの鳥の妄想と想ってくれても構わないけど……それでもこの記憶はあたしの根源。アルフィー様のこと、どうか悪く言わないでほしい。それと……さつきは熱くなつてごめんなさい』

それはさながら、敬虔な信者のごとく。

彼女の姿と言葉に、ジョージとマリオはしばらく互いの視線を合わせるしかできなかった。

だが、やがて意を決して頷きあうと、二人は視線の高さをポラリスに合わせて声をかけた。

「……わかった、君がそこまで言うなら、父上とも一度情報をすり合わせて精査しよう」

「疑うことは許しておくれよな。神話では、アルフィー神は他の神からしばしば無理難題を押し付けられている。もしかして、ということもあるだろう?」

「ピュルルル……ウーイ」

二人の言葉に、ポラリスは少しだけ不服そうに唸った。しかし理解はできたのだろう。最終的には頷き、了承を返してきた。

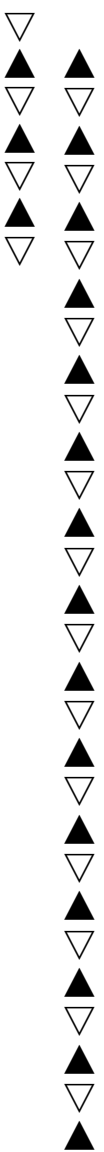
そして既に隔意がないことを示すためか、再びジョージの腕に飛び乗った。次いでマリオの肩にも飛び移り、そこで軽く毛繕いをして見せる。

しかしそれもすぐに打ち切られ、早くここから撤収しろと言いたげに翼で上を示された。

「……そうだった、ここも気にはなるがあ部屋には石仮面があったぞ」

「ああ。誰かに見つかる前にあれだけは破壊しておかねば」

そこでようやく石仮面のことを思い出した二人は、さつきと飛んで上へ戻っていくポラリスを追いかける形で、地下から脱出したのだった。



同時刻。ジョージとマリオが石仮面の破壊に着手したちようどその頃、ベルリンから脱出する一台の車があった。

まるで何かから逃げるようなスピードで走るその車のトランクには、貴金属や赤系統の宝石で飾られた宝飾品が詰め込まれている。

さらに助手席には、十に迫る数の石仮面が束ねられていた。

ハンドルを握るゲルマン系の青年は、ルージュフィシユアの末裔である。上役であるはずの吸血鬼ではなく、彼が脱出する側となったのは、ひとえに今が昼間だからに他ならない。現状では、吸血鬼はろくに外を出歩けない。だからこそ、彼は囹となったのだ。

無論彼は死ぬつもりなどなかったが、こればかりは相手が悪かったとしか言いようがないだろう。

結果として、ルージュフィシユアは再び敗者となった。だが、車を走らせる青年に諦めるという選択肢はなかった。

青年はサチとは異なり、生まれつきのルージュフィシユアだ。吸血鬼に育てられ、アルフィーを始めとした柱の一族への信仰を持つべしと定められて生きてきた。それはもはや洗脳のごとく、彼の人生観を固めてしまっていた。

だが、現実はどこまで行っても慈悲がない。淡々と事実のみを積み上げる。

この世界に、不思議の勝ちはあるとしても不思議の負けはない。それがある種の真理なのだ。

——銃声が響いた。と同時に、青年の運転する車が一気にスピニングする。

タイヤが撃ち抜かれたのだ。彼は必死に車を制御しようとハンドルを動かすが、もはやどうにもならず、車は道から外れて木へ激突した。

「う……っ、ぐ、く、な、何が……！」

ほうほうの体で運転席から出てきた青年。そんな彼の行く手を遮るようにして、複数の人間が現れた。

彼らはぐるりと青年を取り囲むと、冷徹な視線を一斉に注ぎ込む。

「やあ、やあ、何百年かぶりの邂逅じゃな、ルージュフィッシュ」

その中で、先頭の老翁が声をかけてきた。

傍目には齢を推し量れぬほどのしわが刻まれた顔は、もはや余分な肉がない。それは全身も同様だ。肌にも張りはまるでなく、車椅子に腰掛けた姿は今にも天に召してしまいそう。

実際、そのときは近いのだろう。言葉を紡ぎながらも彼は常に眠そうで、瞳にも力が……何より光がなかった。

それでも、今はまだ生きています。今こそが命の使いどころだと理解している。

「ま、イケル、ル、ベル……クラク……!? 生きて……いたのか……!」

「ほっほ、ワシのことを知っておるのか。三代も前のルベルクラクだというのに、若いのに感心なことじゃな。いやはや、光栄じゃ」

ゆつくりと答えながら笑う老翁……マイケル・ルベルクラク。彼こそは十八世紀の後半にルベルクラクを率いていた元当主である。そう、彼はまだ生きていた。

いや、むしろ彼以降の歴代当主も、まだ全員が存命である。ただ表向きには死んでいるだけで。

だがそれはおかしなことではない。なぜなら、ルベルクラク家は半吸血鬼の家系。常人の三倍の寿命を持つ彼らは、百年程度は余裕で生きるのである。

しかしだからといって一人の人間が百年以上あり続けることは、人間社会では健全ではない。だから彼らはほどほどのところで、表舞台から引退するのだ。

代わりに彼らは暗部となる。ルベルクラクの諜報網を率いる、裏の顔となるのだ。表向きには死んだ存在となり、表舞台からは知ることの難しい情報の収集や、時には後ろ暗い手段を使うこともある。

それこそルージュフィッシュのものは規模が違うし、何よりルベルクラクは人間の力を軽視しない。そうやって彼らは生きてきたのだ。

「そんな前途ある若者には申し訳ないがな……それ以上はならん、ならんぞ。アルフィー様は石仮面をお認めにはならん。研究所でやつ

た殺戮など、お耳に入れたら嘆き悲しまれることじやろうて……」
おいたわしや、と続けたマイケルに、青年はぎりりと歯を噛みしめる。

だが、ただの人でしかない彼の身体は、事故によって既にろくに動けなくなっていた。今からできる抵抗などありはしない。

いや、石仮面を使えばあるいは抵抗できるかもしれないが……悲しいかな今は昼である。状況は完全に詰んでいた。

そんな彼に、囲んでいた人間の一人が近づいて懐をあさる。

「……」隠居、ありました。レッドクロスです」

そしてすぐに、赤い宝石を取り出してかざして見せた。十字架が浮き彫りに刻まれた、エイジャの赤石が陽光を反射して美しく輝く。

間違いなく、アルフィーが求める鍵の一つであった。

「うむ、重畳。聖杯の導きはさすがよな。ひいてはそれを百年も早く予見しておられた、アルフィー様の慧眼たるや」

重々しく頷いたマイケルはその宝石を一度触れて確認すると、すぐに後ろで車椅子を押している男に手渡した。

「ぐ……か、返せ……それは、それは我々の……！」

「違うな。これはアルフィー様のものよ。そこを勘違いしてはならんぞ、お若いの」

マイケルに……いや、赤石に手を伸ばす青年に、マイケルはたしなめる。だが、そこにあつたのは慈愛の色。負の感情はいささかも見当たらなかった。

「お前さんはまだ若い……ここで死ぬこともあるまいて。おい、連れて行け。治療してあげなさい。丁重にな」

彼はそう言うと、青年を助けろと命令を下した。

これは最初から予定通りだったのだらう。その場の全員が遅滞なく動き、青年はあつという間に運び出されていく。

「や、やめろ……私に触るな……ッ、殺せ……殺せ……ッ！」

「そうはいかんのう。ルベルクラクもルージュフィシユも、元を正せば同じルブルム商会。すなわち、アルフィー様のしもべじや。アルフィー様の許可なく死ぬなぞ許されん」

神曰く。

——いのちだいじに。

ゆえにそれがルベルクラクの家訓だ。

そう告げられた青年は、がくりと力をなくしてうなだれた。彼はそのまま運ばれていき、この場にはルベルクラクだけが残される。

「石仮面をすべて回収せよ。アルフィー様が戻られたら、その他の宝飾品ともども献上する」

「はっ！」

かくして、およそ六百年ぶりの両者の邂逅は、短時間のうちに終わったのであった。

43. その輝きを手に

伯爵から届いた手紙を読み終わったわたしは、ひとまず安堵の息をついた。

出だしからいきなりジョナサンが誘拐されたなんて書かれてたから目を疑ったし、かなり動揺したけど、ルベルクラクの力で無事に助けられたようでホッとしたよ。鍵になる赤石も回収できたみたいだし。

ただ、ナチスドイツが石仮面をあれこれ調べてるのは気になるし、ルージュフィッシュがそこで派手にやらかしてくれただことについては色々思うところがある。

いくら後世で悪役の定番みたいな扱いを受けるナチスとは言っても、そこで働いてる人たちは今を生きている人たちに他ならない。身勝手に命を奪うなんて、いくらなんでも理不尽がすぎる。

「私の夫が大変申し訳ありませんでした……」

なおその情報を知って、サチさんが土下座してきた。首を差し出す勢いだったからいつものように止めたけど、どうやら今のルージュフィッシュを率いていたのは彼女の夫らしい。あちらも吸血鬼らしく、なるほどそれなら大量殺戮も可能だね。

ただ、彼は別ルートでジョナサンを助けに来ていたジョージとマリオに倒されたらしいので、もうわたしができることはなかったりする。

そりゃあ許されないことをしたとは思うけど、それはそれとして死んだらみんな仏だよ。

いや、この考え方は仏教の原義的にはどうかかなとも思うんだけどね。ただそれはそれとして、悪人だろうとなんだだろうと、死んだ人によってさら悪く言う必要はないって思うし、元二十世紀人としては連座で罪を与えるのは違うって思うの。

「お父さん好きじゃないから、わたしはそんなに」

一方でレナータちゃんもドライだった。よっぽど父親らしいことをされてこなかったんだらう。万華鏡のほうがよほど気になってる

みたいで、ぐるぐる回しながらきやつきやしてる。

なんていうか、こういうとき親がどう接してるかが透けて見えるよね……。自業自得だと思うけどさ。

どちらにしても、わたしがサチさんたちを罰することはない。わたしは彼女たちを有能な人材だと思ってるし、今後とも助けてほしい。あわよくば日本を拠点化したいし。

「ありがとうございます……！ 我らルージユフィシユ、今後は夫に代わり誠心誠意アルフィー様にお仕えいたします……！」

この辺りはちよつと大げさにも感じるけど、ね。

さてともあれ、スーパーエイジャを手に入れるための鍵はこれですべて揃ったことになる。なのでわたしは、大急ぎでヨーロッパに戻ることになった。

できるだけ早く合流したかったから、船がユーラシア大陸に寄港した段階で、一人陸路（一部空路）でヨーロッパに向かうことにした。ほぼ不眠不休で行動できるわたしだけなら、今の時代ならまだこのほうが早い。

サチさんたちには船内にわたしがいるように装ってもらいつつ、後から追いかけてきてもらう形になる。

で、そのままヨーロッパに着いたら電信でルベルクラクに連絡を入れてタイミングをはかり、エジプトの港で伯爵たちと合流した。

伯爵はともかく、ドイツ軍に拉致されていたはずのジョナサンが、普通にピンピンしてたのには笑うしかなかったけどね！

そして翌日の夕方、早速例の遺跡へ繰り出した。

隙間のない大きな扉の前で、わたしたちは鍵となる赤石を用意する。

手が伸びるわたしが二つ持ち、伯爵とジョナサンが一つずつだ。

「こうして四つ揃うとなかなかに壮観ですな」

円陣を組むような形で三人向き合った状態で、伯爵がある感慨深げに微笑んだ。

それぞれが持つ四つの赤石は、太陽、稲妻、雫、十字架の浮き彫りが施された、ダブルカボションカットに統一されている。造られた時

代のことを考えると、これだけで軽く億超えの価値があるだろう。壮観だし、圧巻だよな。

わたしは伯爵に領きながらも、逸る気持ちに押される形で扉を改めて見上げた。無言で二人がそれに続く。

そのままわたしたちは、所定の場所へ赤石をセットした。深い意味はないけど、一応同時に。

けど、特に変化はない。パルプンテで呪文がこだまただけみたいな感がある。

ただこれは想定内。調べた限り、この扉はこの状態の上で、沈みゆく夕陽の光がないと開かない仕組みになってるんだよね。だからこそ、わたしたちは夕方に訪れたのだ。

そのまま待つこと、十数分。その時がやってきた。

掘り下げた遺跡の入り口から、夕陽が差し込んでくる。それは扉全体を照らし、さらには各所にセットされた赤石に光を注ぎ込んだ。

その後の変化は劇的だった。四つの赤石が波紋のような音を響かせながら輝きを放ち、しかしそれはほとんどこちら側に漏れることなく、扉の表面に流れる。

それらはさながら幾何学模様のように扉全体を走り回り、やがて一つの紋章が浮かび上がった。

ルベルクラクの紋章でも、ルージュフィシユの紋章でもない。

斜めに交差する二本の矢。そしてそれらが弓を背負う紋章。

赤い光で描かれたそれは、見間違えるはずもない。かつて地中海沿岸で名を馳せた、ルブルム商会の紋章だった。

懐かしい。素直にそう思う。シヨシヤナやトナテイウが、経営に向いてないわたしに代わって頑張ってくれてたなあ……なんて、ちよつとしんみりしちゃう。

だけど余韻に浸っていられる時間はなかった。すうつと光が消えたかと思うと、すぐに扉が開き始めたからね。

やがてガゴンと一際大きな音を立てて、扉が止まった。

開いたことで遺跡内部には夕陽が差し込んでいるけど、中は真っ暗だ。これから日が沈んでいくことを考えれば、完全なる闇が待っている。

ることは間違いないだろう。

「さーて、鬼が出るか蛇が出るか」

そんな遺跡の中にあるだろう品々に想いを馳せながら、わたしはわくわくした気持ちを胸に中へと踏み込んだ。

わたしに続いてジョナサンと伯爵が入ってくる。さらに、ルベルクラクの傭兵たちが明かりを手に続く。

そうして何百年かぶりに人を迎え入れた遺跡の姿は、場所を考えると明らかにそぐわない。エジプト的なものではなく、イスラム的なものでもない。ローマ的なものでもない。

そこにあつたのは、ザ・仏教遺跡とでも言うべき仏像と宗教壁画だったのだ。

「これは……仏像？ どうしてこんなところに……」

本職の考古学者であるジョナサンが、顎に手を当てて考え込んでいる。

「そうだよね、なんでこんなところについて思うよね。エジプトで仏教が隆盛したなんて話は聞かないもんね。」

ただ、正直わたしには身に覚えがありすぎるんだよなあ。

「まあ普通に考えて、当時のルージュフィッシュがわたしに合わせてくれたんだと思うよ。わたし、仏教徒だからね」

なのでそう答えたら、伯爵とジョナサンが「なにで？」って言いながら顔で同時にわたしを見た。向けられたわたしは苦笑するしかない。

「いやその、ブツダに直接会ったことあるんだけどね。そのときに色々あって……」

「そうか、君はそれだけ永く生きているのだものね。すごいな……僕は仏教徒ではないけれど、素直に羨ましいよ」

「……神話に神と語られる方が仏教徒ですか……当家の記録にそれらしいものは残っていないですが、もしや意図的に削られたのですかな……」

「あー……でも気持ちはわかるよ、わたしだって信じてる神様が実は他の宗教の信徒でした、とかちよつとどうなのって思うし……」

その点については本当に申し訳ないと思ってる。

でも別に後悔してるわけじゃあないし、そもそもの話わたしは日本人なので、やっぱり一番馴染みがあるというか、じっくり来るのが仏教なんだよね。転生してもなおわたしの性格や趣味嗜好はほとんど変化がないので、この点についてもどうしようもないんじゃないかなって……。

「いやしかし、ルージュフィシユールにアルフィー様の記録性で負けるのは悔しいですな……これらはすべて連中の手によるでしょうし……うーむしかし……」

伯爵が悩み始めちゃったぞ。他人事として眺めたかった案件だったみたい。

「しかしこれ、よくよく見るとやはりヨーロッパの影響が強いね。見た目は仏像だし仏教画だけど、技法やタッチは間違いなくルネサンス期のヨーロッパ芸術の特徴があるし」

「あ、確かに。でもルージュフィシユールってフランス基盤でしょ？フランスのルネサンスって他より遅くなかった？」

「ルージュフィシユールが表向き滅んだのは十五世紀だったね。フランスのルネサンスは十六世紀から活発化したというのが定説だけど……その前から萌芽があったのか、あるいはここまで逃げてきたルージュフィシユールがこの地で学んだか……興味深いね！」

「そうだね！でもこれ、世間に発表するのめっちゃ難しい遺跡だよな……エジプトで出てきたルネサンス風味な仏教遺跡とか、どう説明すればいいのやら」

「確かに……普通にしたら造られた背景がまるで見えてこないね。そういう遺跡は有史以前の遺跡には多いけど、西暦が始まって以降となるとね……」

「イギリスのストーンヘンジとかその最たる例だよな。あれが造られた時代、わたしまだアメリカ大陸にいたからなんで造られたのかは見れてないんだよなあ」

「君の幽波紋なら調べられるんじゃないかい？ 幽波紋で引き出した記憶が学説の根拠になるかというところ、また別の話ではあるけれど」

「そうだね！ 今度落ち着いたらストーンヘンジも行きたいなあ」

「お二人とも、そろそろ終着点のようですよ」

「おっと」

歴史談義でうっかり盛り上がってしまったね！ いけないいけない。

伯爵に言われて前に意識を戻せば確かに、そこから先には空気が流れていない。本当に行き止まりのようだ。ここまで本当に仏像と宗教壁画しかなかったけど……。

「何やら祭壇のようだが……」

向けられた光の中に浮かび上がったものを見て、ジヨナサンが首を傾げた。

確かにそこにあつたのは、祭壇のように見える。一段高くなったところにはトーチのような棒が組まれて高々と掲げられているけれど、そこに火は見当たらない。

「それよりも、目を引くものがありますな」

「これは……ミイラ？」

「確かに一見ミイラだけど……」

その祭壇らしきところに、小柄ながら等身大の人の形をしたものが横たわっていた。身体に水分はまるで見当たらず、干からびたか餓死したか、と言った雰囲気だ。

個人的にはミイラというより即身仏のような印象を受けるんだけど、問題はそこじゃあない。

「……この人、まだ生きてるよ」

「なんですと？」

「それは本当かい？」

「うん。……というかこの人、吸血鬼だ。きっと血を吸わないまま、数百年をここで過ごしたんじゃないかな……さすがの吸血鬼も、それだけ断食したらこうもなるよねって感じ」

そう、そこにいたのは吸血鬼だった。見る影もないけど、人外のわたしにはわかる。

しかも死んでない。この状態でよく生きてるなとも思うけど、吸血

鬼だし不可能ではないような気はする。サンタナもこういう方向の調査はしてなかったから、わたしも初めて見る状態だけど。

それと目を引くのはもう一つ。

「アルフィー様、あれを……もしやこのミイラが抱いているのは」

「……スーパーエイジャだ。間違いない」

この干からびた吸血鬼は、さながら祈るような姿勢で胸元にスーパーエイジャを抱いていたのだ。

初めて目の当たりにするそれは、原作で何度も見たあの美しい姿をしていた。わたしが即身仏のような印象を受けたのは、この辺りが原因だろう。

「……どうするんだい？」

「わたしは石仮面をよくは思っていないけど……かと言って石仮面を使っただけの人をすぐに滅ぼせとまでは思っていないんだ。だから」

わたしは祭壇に上がる。そして横たわる吸血鬼のすぐ近くで膝をつくと、その真上に掲げた手首を切った。

当然、わたしの手首から血が滴り落ちる。種族柄、傷はすぐに塞がったけど……それでも間違いなく血は出て、吸血鬼の身体に降り注いだ。

するとどうだろう、みるみるうちに吸血鬼の身体に張りが戻っていく。血肉が満ちていく。まるで時間を巻き戻しているかのように、劇的に人としての姿を取り戻していったのだ。

やがて在りし日の姿を取り戻した吸血鬼の姿は……どこかの聖女と言っても差し支えないほど美しい少女だった。その分、経年劣化した衣服がまるで釣り合っていない。

ところで、なんだかわたしによく似た姿に見えるのは、気のせいかな。銀髪だし、肌が褐色だぞ。目も赤いし、角はないけど。

歳の頃も、レナータちゃんと近いだろうか。つまりわたしとも、見た目の上では近い。かなり幼い時分に吸血鬼へと化したんだらう。

その少女が、茫然とした様子で上半身を起こした。そして、身体の調子確かめるよりも早く、わたしの顔を見とめて驚愕に顔を染めた。

「アルフィー、様？」

彼女の口から出てきたのは、ラテン語だった。

それになるほどと思いつつも、わたしは頷くよりも早く元の姿に戻る。

肌の色は褐色に。髪の色は銀色に。目の色は金色に。そして額からずいっと角が伸びる。

その変化をすぐ目の前で見た少女は――

「おおお……おおおおおお！ アルフィー様……アルフィー様！！ ようやく、ようやくお会いできました……私は、私は遂に、使命を果たせるのですね……！」

――号泣し始めた。

うん……なんとなく想像はつく。きつと何百年も、ここに一人きりだったんだろう。

そりやあそうなるよね。吸血鬼は肉体的にほぼ無敵だけど、精神面はタガが外れるだけであまり人間と大差ない。幼くして吸血鬼化したとなると、その辺りも見た目相応だろうしさぞかしキツかったろうな……。

「うん……よくがんばったね。あなたはよくがんばったよ、おかげでわたしがここまで来れたから」

「ああああああアルフィー様……!!」

彼女はそれからも泣いて泣いて泣き続け、結構な時間が経った。

ようやく我に返ったかと思えば土下座してくるしで、いやはや参ったよ。この辺り、本当にルベルクラクもルージュフィシユーも根っこは一緒なんだなって感じるね！

なおこの間、伯爵もジョナサンも空気を読んで無言でいてくれた。気遣いがあるがたい。

「……アルフィー様。どうぞこちらを」

そうしてようやく落ち着いた頃合い。

吸血鬼の少女は畏まり、わたしの前で跪いた。そして両手で支えたスーパーエイジャを、わたしに向けて恭しく差し出してきた。

「我らルージュフィシユー、このスーパーエイジャを二千年の長きに

渡り守り抜いて参りました。すべてはあなた様にこれをお渡しする、今この時のために」

——どうぞお受け取りください。

彼女はそう告げて、頭を垂れた。

まさかこうなるとは思わなかったけど……ともあれ、これは応えなきやあいけないだろう。

およそ六百年前、ルベルクラクとの戦いに敗れたルージュフィシューたちはきつと、このためだけに今まで積み重ねてきたものすべてをこの子に継がせたんだろうから、ね……。

今のわたしにとって六百年はわりとすぐだけど、生身の人間のまま六百年間一人孤独に過ごせなんて言われたら、発狂する自信しかないよ。

だからそれを耐え切った彼女には、素直に敬意を表したい。いや本当に、わたしにはとてもできない。

「……確かに受け取ったよ。ありがとう」

「はい……」

だからわたしは、彼女の手から素直にスーパーエイジャを受け取った。後ろから投射されている明かりがそれを照らして、美しい赤い輝きが周囲に満ちる。

わたしの言葉にまた感極まったのか、同時に少女がぐすぐすと嗚咽を漏らし始めた。

「……何かほしいものはない？ あなたの献身に報いてあげたいんだ」

その姿に、わたしは思わず声をかけていた。だって、たった一言だけで報われるなんて思えないんだもの。わたしにできることがあるなら、耐え続けてきた彼女に報いてあげたい。そう思っ

だから声をかけたんだけど……。

「であれば……一つ、お願いしたき義が。どうか私を食べていただけませんか」

返事がそんなで、わたしは絶句するしかなかった。

だけど彼女の目は暗く淀んでいて……なのに希望と期待に満ちて

いて、彼女の胸の内を察してしまえて、わたしは悲しくなったよ。

わたしは知っている。この目を前世で知っている。これは……生きることに疲れ、死ぬことを唯一の希望と見てしまった、末期の人間の目だ。

そしてどうせ死ぬなら、その死を意味あるものにしたいというのは人間なら誰だって思うことだろう。だからこそ、わたしに食べてもらいたいという結論に至ったんだろう……。

「……本当にいいの？」

「はい。歴史の中に沈んだ泥船が、あなた様の血肉となれるならばこれ以上の喜びはございません」

問い直したけど、返事は即答だった。

ああ、これは崩せない。この強固な意志は崩せない。

さすが、何百年もの孤独に耐えただけのことはある、と思うけれど……その鋼の意志は、あなたの、あなただけの人生のために使ってしまったな……。

「……わかったよ。あなたをいただくね。あなたの血も、肉も、命も、魂も。余すことなくわたしの中で……わたしと一緒に、永遠に生きていこう」

仕方なく覚悟を決めたわたしは、少女の前で手を広げる。おいで、と呼びかける。

彼女は少しだけためらっていたけど、すぐにわたしの腕の中に収まった。その暖かい体温を感じながら、わたしは最後に一つだけ問いかける。

「最後に教えて？ あなたの名前はなんていうの？」

「……それは」

なぜか少女は、今までで一番うろたえた。

何かあっただろうか、と思っただけ……。

「……あ、アルフィー。私の名前は、アルフィーと申します。あの、お、恐れ多くもあなた様のお名前を、お借りして……」

ああ、なるほど。神様の名前を名乗るのは、さぞ畏れ多いだろう。キリスト教で言うなら、イエス・キリストを名乗るようなものだ。

原理主義者を相手にしたら殺されるかもしれない。

でもわたしはそういうの、気にしない。だってわたし、神様なんて柄じゃないもん。

あとは、わりと今世の名前は気に入ってるんだよね。だから全然気にならない。

「そっか、じゃあお揃いだね」

なので思わずにっこり笑ってしまった。

彼女は少しだけぽかんとしたけれど、でもどこか嬉しそうに「はい」と言っただけに「はい」

——そんなアルフィーちゃんを。

「……じゃあ、いくね?」

「はい、よろしくお願いします」

「……いただきます」

わたしは。

一思いに、全身で。

一気に食べ尽くした。

「……………」

ずぶり、とわたしの体内に消えていくアルフィーちゃんを見送って、わたしは手のひらを眺めながら握ったり開いたりする。

なんだか不思議と、いつもよりエネルギーが身体に満ちているような気がした。

なんでだろう? 同じ名前だったからだろうか。それともある種の自己暗示? あるいは単純に、何千年かぶりの捕食だから?!

……たぶん、最後の正しいような気はする。わたしはブツダと出会う前から、ほとんど人間(吸血鬼含む)を食べてない。初期の頃と、それから彼と出会ってからは皆無だ。全部人間と同様の食事で賄ってきた。

要するに、わたしは日常的に栄養不足だったりする。その分食べる量を増やして賄ってはいるけど、紀元前の世界ではどうしても限界があった。

現代でも毎回満腹まで行くのは難しいんだけど……いやはや、吸血

鬼の捕食がここまでエネルギー効率がいいとは。

でも、なあ。

せっかく同じ名前の、わたしから生まれた組織の末裔を取り込んだんだもの。ここはもつと精神的な理由で、みなぎってるんだと信じた
いよね。深仙脈疾走ディースペースウォーバードライヴ的なさ。

もちろん、今まで捕食してきた人をないがしろにしてきたつもりはない。全員のことを覚えてるし、名前を知る機会があった人のことは名前も全部覚えてる。

だけど、彼女のことは……なんだか特別に、受け継いだような気がしたんだ。

言つてしまえばただのロマン主義なのかもしれないけど、さ。

「……これも一種の人間賛歌だったりするんだろうか」

……なんて言つたら、ツエペリさんに怒られるかな。

怒られないにしても、歴代のジョジョたちが受け継いできたものに比べればちっぽけだろうな、とも思う。

でもさ、確かに勇気をもらえた気がするんだよ。同じ名前の彼女に恥じないよう、行動しないとなつて思うもの。

何より、彼女たちがここまで守り通してきたスーパーエイジャは、確かにわたしに受け継がれたのだ。

原作とは違う歴史を辿つたこの世界で、これほどのものが無事に現代まで残るなんて奇跡だろうに。悠久の時を越えて、ここまで受け継がれてきたんだ。

だから、これを無駄にはしない。長年の仲間に対する反逆者の身ではあるけれど……そのことについての覚悟は既に決めている。カーズ様にどう罵られようが、あるいは殺されようが、構わない。必ずこのスーパーエイジャで、人間の歴史を守ろう。

わたしはスーパーエイジャを静かに握つて、決意を新たにす。

それを汲み取ってくれたのか、ジョナサンと伯爵が不敵な笑みを浮かべて大きく頷いてくれた。

——かくして、わたしから生まれた赤い宝石の一族を巡る物語は、一応の決着を見る。

この後、サチさんたち現代に生き残っていたルージユフィシユールベルクラクに合流し、一つに戻ったのだ。

もちろん、二つに分かれておよそ二千年だ。相応以上の断絶はある。

それでも、彼らにはわたしへの信仰という共通点がある。そしてわたしは、何事もなければ今この世にいる彼らよりも確実に長生きする。それなら、手を携えることはできるはずなのだ。

逆に言えば、戦闘潮流を終えても死ぬわけにはいかない、ともいうんだけど。

そもその話、それくらいの気概があったほうがいいのかもしれない。死ぬ気でやれ、とは言うけど……残されたほうがたまったものじゃないもんね。

まあ、ここに星の一族が加われば、怖いものなんて何も無い。こっちにはジョセフだけじゃあない、ジョージ二世やジョンナサンだっているんだ。

なんとかなる。絶対大丈夫だよ。

……反逆の時間は、もう間もなく。

彼らが目覚めるまで、あと——

Part 2・エピソード：ルベルクラク

完

Part 2 終了時点のキャラ紹介／原作キャラ編

◆ ジョナサン・ジョースター

原作第一部「ファントムブラッド」の主人公であり、皆さんご存知初代ジョジョ。

1868年4月4日生まれと公式に設定されているため、本作の現時点では67歳。

つまり原作三部におけるジョセフとほぼ同い年くらいだが、本作のジョナサンははまだ四十代くらいの姿をしている。

・ 原作との違い

そもそもからして、彼がこの時代に生存していることこそ最大の違い。アルフィーのバタフライエフェクトに強く影響された人物の一人である。

67歳で外見年齢が四十代、で察していただけると思うが、本作におけるジョナサンは、五十年以上波紋の修行を継続した「もしものジョナサン」であり、はつきり言って人間の枠を大幅に超えた超人である。

二人分の波紋力を腐らせず磨き続けた波紋戦士とか、弱いわけがないんだよなあ。

また、本作では双子の兄がいた、という設定になっている。このため嫡男としての教育を受けておらず、最初は原作よりダメな人だった……のだが、その辺の描写をするはずのファントムブラッド時系列はカットするしかなかったため、お蔵入り。

まあ、歳を重ねたことでそこら辺はちゃんと改善されているのだが。

ちなみに柱の男たちについては、自身の研究の過程でサンタナ王国に赴き、奇妙な冒険を経て存在を知った。そのため、実はサンタナ王国からは石仮面などの国家機密を知っている個人として、要注意人物扱いされていたりする。

・ その他補足とか

作者最推しのジョジョの一人。

それに加えて、作者の想定を上回る超人になってしまったので、戦闘シーンになると制御するのにめっちゃ困る。

暴れ馬どころじゃない。放っておいたらRXみたいなことになる。研究所のシーンとか、あんな風にはならないはずだったんだけど、おかしいなあ。

でも鍛え続けたジョナサンならこれくらいできるよね、みたいな根拠のない信頼がある。

前作主人公を特にひねりもなく普通に次世代主人公と並べたらこうなるでしょ、みたいな。

でもこれでスタンドに目覚めたらマジどうなっちゃうんだ。立場的に前々作の主人公なのに、承太郎とか差し置いて成長しまくりそうでもとてこわい。

いや、ジョナサンの最期は既に決めてるし、よほどのことがない限りそのプロット君は不死身なんですけどね。過程がね……。

◆ジョージ・ジョースター二世

ジョナサンとエリナの一人息子で、原作では初代と二代目の間を繋ぐミツシングピース的ジョージョ。

1890年1月生まれ。生年月日が公式で設定されてないので、そういうことにした。

なので、本作におけるジョージ二世は現在45歳ということになる。

・原作との違い

ジョナサン同様、生きていることが最大の違いである。

ただ、基本的には原作通りの人物。修行はしてなかったが波紋の才能があり、イギリスで最初の空軍パイロットの一人であり、空軍司令に収まっていたゾンビを探って殺されかけた。

しかし本作では、この事件から辛くも生還している。具体的にはジョナサンから断片的だが諸々の話を聞いており、そのおかげで咄嗟の機転を利かせることができた。そして致命傷を免れたところでリサリサが間に合った形。

このときジョージが「ある程度でも知っていた」からこそ生き延び

たことで、ジョナサンは「心配だからと家族に何も言わず、自分一人で背負い込むようなことはしないほうがいい」という考えを持つに至っており、これが今後地味に響いてくる。70年後とかに。

ともあれ事件後、ジョージは無事に回復して以降はエア・サプリーナ島に身を寄せ、波紋の修行に入る。現在では一人前以上の波紋戦士に成長した。

・その他補足

舞城氏作の小説「JORGE JOESTAR」における設定のほとんどは、本作には反映されていない。ただ、一人称が口と思考で異なるというのは実はちよつと採用してたりする。表明するシーン出せなかったけど。

あとこれも出す機会なかったけど、偽名のフルはジョニイ・ジョー
ンズ。

言うまでもないだろうけど、ジョニイは七部主人公のジョニイ・ジョースターから。ただ今の彼は表向き死んだことになってるので、ジョースターは使えない。なので代わりにジョーンズというわけ。

それと実は本作第二部のいわゆるジョージ編とも言うべき一連の物語は、当初の予定では「インデイ・ジョーンズ〜最後の聖戦〜」を思いつきりパロろうと思ってた。

ジョナサンがヘンリーポジション、ジョージがインデイポジションのつもりだったんだけど、そもそもこの二人別に関係悪くないし、何より先述の通りジョナサンが大人しくナチスに捕まってくれなかったので、大幅に換骨奪胎することになったっていう。

偽名の姓がジョーンズなのはその名残だったりする。

いずれにせよ、彼もまた黄金の精神を持つジョージョである。

◆ジョセフ・ジョースター

原作第二部「戦鬪潮流」の主人公であり、二代目のジョージョ。別名「ジョセフ以外はな」。

1920年9月27日生まれ。そのため本作では現時点で14歳ということになる。

・原作との違い

祖父母も両親も健在ということと、既に波紋の修行をしていることが異なる。

ただ両親が家にいないことは変わらないので、性格面は原作とほとんど変わらない。

一方で波紋については既にほぼ一人前であり、具体的に言うとな原作でヘルクライムピラーを登りきった直後くらいの力量がある。

また、両親の身に起きた出来事や吸血鬼などのことも大体知っている。このため、実は滅多に会えないがちゃんと両親と顔を合わせたりしている。

ついでに言えば、その流れで実は既にスージーQやシーザーとは面識がある。

この辺りは先述した通り、ジョナサンが知らないより知っていたほうが良いと考えたから。

・その他補足

ジョナサンと並んで、作者最推しのジョジョ。この二人に順位をつけるのは難しい。

だからだろうか。サポートキャラがいたとはいえ、14歳で普通に吸血鬼を圧倒してしまう辺り、ジョナサン同様超人化してしまうのではないかという懸念がある。

ちなみにジョースター家のメインどころ三人は、全員スタンドには目覚めていないし、視認できるところにも至っていない。

あのジョナサンですらまだ。でもまあ、これについてはうっかり目覚めると連鎖的に目覚めってしまう可能性あるし、仕方ない部分がある……。

ところで、曲がりなりにも次は彼が主人公を務めた「戦闘潮流」なので、物語の視点はジョセフにも多く置かれることになると思います。予定ではアルフィーと半々くらい。またアルフィーの出番減るとか言わない。

せっかく主人公を務めるんだから、ジョセフの視点は一人称で書くかなあと思ったりもするんだけどどっちがいいだろう。正直、原作キャラの一人称は色々恐れ多いのだけでも。

◆マリオ・ツェペリ

一部のツェペリことウィルの息子であり、二部のツェペリことシーザーの父。

ジョージ二世同様、二つの物語の間を埋める人物であり、荒木先生が謝罪文を掲載する羽目になった元凶の片割れ。

1885年4月生まれ。ということにした。なので本作においては現時点で50歳ということになる。

・原作との違い

生きていることが（ry

発端として、子供達を置いて石仮面対策に乗り出したあと、巡り巡ってジョナサンと出会っている。

これをきっかけにして波紋を習い始め、結果本編中に描写された通り、原作ではカーズに取り込まれて死んでいるところを、本作では生き延びている。

このときシーザーとは和解しているため、親子の共演が今後見られる予定である。

なお、シーザーの他の兄弟はSPW財団経由でちゃんと保護している。が、他の兄弟からは今のところ許してもらえてないし、顔すら合わせてもらえてない。その辺もあって、自分がいなくなったあとの家族の顛末には本気で心を痛めている。

波紋の修行年数で言えば、現状一番短い。このため実力としてはそこまで高くない。

ただ父の波紋の才能は受け継いでいるため、戦闘潮流が始まる頃には追いついてくると思う。

・その他補足

原作でほとんど出番がないので、ぶっちゃけほぼほオリキャラみたいなもの。

でも同じ条件のジョージは描写の助けになるような設定が結構あるのに対して、マリオは本当に少ないので、実は書いて一番困った。

本編中、やたらジョージを名前で呼んでいたのは、会話をわかりやす

くするための苦肉の策だったりする。

ところでツエペリのおっさんもシーザーもアントニオをミドルネームに持つてるけど、これって一族共通なの？

いやまあ、ミドルネームってわりと大雑把だから気にしなくてもいいんだらうけどさ。

ある程度以前の時代だと洗礼を授けた神父の名前を取ったりすることも結構あるから、ツエペリの家系に代々アントニオが入っててもおかしくはないし。

それで行くと、マリオにもやっぱリアントニオってつけたほうがいいんだらうか。マリオ・A・ツエペリとか。

◆アヌビス神

原作第三部「スターダストクルセイダース」に登場する敵スタンド。十五世紀後半に制作された刀に宿っており、本体は既に死亡している。

本作第二部「エピソード：ルベルクラク」におけるミスター不憫。

・原作との違い

所在地がエジプトからイギリスに変わっていたことと、目の見たタイミングがおよそ50年ほどずれていた。

それこそが最大の違いなのだが、このせいで初陣を本作のスーパージョナサン相手に飾る羽目になり、危うく死にかけたザ・不憫。

ジョナサン同様、アルフィーによるバタフライエフェクトを強く受けた原作キャラだが、彼の場合直撃したと言ってもいいだろう。

ただその結果として、アルフィーの手に渡ってより強くより美しく打ち直された上、味方側として部をまたいで登場することが確定している。

また、このまま行けばナイル河の底に沈んで放置されるという未来は回避される可能性が高いので、長い目で見ればプラスかもしれない。

生まれ変わったザ・ニューアヌビスの詳細は次章「戦闘潮流」にて。

・その他補足

作者の推しスタンドの一つである（ディアボロの大冒険的な意味で

DI Oの骨を何度ナイル河に沈めたかは覚えていないが、それはそれとして強くて使い勝手のいい君のことは大好きだったよ。

それはさておき、万年生きられるジョジョオタがあの世界に転生していて、未来に布石が打てるならこいつにはまず手を出すでしょ、という発想のもと大幅に早い登場となったスタンド。

また、その性質からカーズ戦に連れて行きたいと考えていたので、構想のかなり早い段階から味方側にすることを決めていた。その過程でなぜか斬魄刀にクラスチェンジすることになったけど、せっかくの二次創作だしやりたいことやっちゃえって思いましたまる

なお出すに当たって、実体のあるスタンドゆえに一般人でも対抗可能（実際できるかどうかはさておき）という特性から、わりと悩むことなくジョナサンをぶつけよう、となったんですがね。

なったんですが、いやほんとすまんアヌビス神。感想欄でもかなり不憫扱いだっただけど、作者は反省も後悔もしてない。

ちなみに本体の打ち直し後の号である「冥刀・神狼姫」には深い意味はないです。シンプルに「アヌビス神Ⅱ冥界の神」＋「名刀」で「冥刀」、「アヌビス神Ⅱ神」＋「アヌビス神Ⅱジャツカル頭↓漢字がないので少しひねって狼」＋「申し訳程度のアルフィー要素Ⅱ性別↓姫」で「神狼姫」。

◆ エリナ・ジョースター

◆ エリザベス・ジョースター

◆ ロバート・E・O・スピードワゴン

◆ シーザー・A・ツェペリ

◆ ストレイツォ

ちらっと出てきはしたけど、そこまで物語に関わったわけではないのでひとまとめで。

ただ、今のところ彼ら彼女らは原作とほとんど変わらないので、さほど語ることもなかったりする。

ただまありサリサは息子とたまにだけ顔会わせられるし、夫は生きてるし、波紋の師範としてもジョナサンがいるしで、原作ほど冷徹ではないと思う。

あとストレイツオだけど、ナチスに連行されたままなのでそこは違うと言えば違う。

ただこのままフェードアウトはしません。戦闘潮流でのスト様の活躍にご期待ください。

Part 2 終了時点のキャラ紹介くオリキャラ編く

《めっちゃ登場したオリキャラたち》

◆アルフィー

年齢：約1万6000歳（なんかもうここまで来るとただの数値ですよね）

出身地：アメリカ大陸のどこか、闇の一族の集落

身長：約130センチ（角込みで約140センチ）

体重：約98キロ（太ってないです！ ほら食後なのでね!?!）

外見：銀髪、金眼、褐色肌が揃った合法ロリ。額からは太めの角が一本

胸ランク：無（……………）

好きな色：キラキラ光る赤

好きな食べ物：甘いもの全般、和食

趣味：歴史、文化、風俗の勉強、研究、収集、写経、史跡巡り

性格：ビビりのヘタレだが好奇心は強く、好きなものにはとことんのめり込む。喜怒哀楽もかなりはつきりしているため、見た目もあつて子供っぽい。最近ちよつとだけ改善したような、してないような？
流法：^{モト}如意転変、自身の姿を任意でかなり自在に変えられる（これにより身長を1mく2mの範囲で変えられる）

スタンド：コンフィデンス（スターシップ、センド・マイハート、ネヴァーフエード）

作者解説：なんかところどころ霊圧が消えてた主人公がいるらしい。お前や！

驚くことに本作第二部43話中、実に13話も未登場である。それでいいのか主人公。

え？ いい？ 主人公はジョジョ？ そう……。

実は世界的規模で順調に神様扱いが進みつつある。

ルベルクラク代々の故地であるウェールズ周辺は、史実においてもケルトの文化や言葉を現代まで残している。この世界だと、そこに根付いた長寿な半吸血鬼どもがわりとガチめに記録を残してるので、本

人の知らないところでかなり普通にアルフィー信仰が根付いていた
りするのだ。

本編でもちらっと触れたけど、アーサー王物語で王にエクスカリ
バー授けるのもアルフィーになってるしね！

これに加えてサンタナ王国でも似たように信仰を寄せられている
し、中米の雄であるかの王国は白人が来るまでの間、せつせとアメリ
カ大陸にサンタナおよびアルフィーへの信仰を輸出していた。

コンキスタドールおよびその後のヨーロッパ支配でその信仰はか
なり崩れているが完全ではなく、知名度はもはや下手な神格よりよほ
ど高い。

キリスト教でも、土着の信仰から取り込まれてちゃっかり入り込ん
でいたりする。その手の神格は大体の場合悪魔として取り込まれて
いるのだけど、アルフィーは主の教えに感銘を受けて改宗した悪
魔、というポジションである。

悪魔でありながらキリスト教に帰依した、という設定ゆえに他の悪
魔より扱いがいい。ルネサンス期の絵画には、ちよくちよく「主の威
光に触れて改心する悪魔アルフィー」というモチーフの絵が出てく
る。大英博物館の表向きの展示物にその手のものがなかったのは幸
か不幸か。

ちなみに「エピソード：ルベルクラク」のラストでスーパーエイジャ
の守り手として同名の人物が登場したが、これは作劇上の都合でもあ
るのだけど、この世界ではアルフィーという名前は由緒正しく、ま
たわりと見かける名前になっているからでもある。

理由は前述の通り、知名度の高い神格であるから。ヨーロッパ圏
で、大天使ミカエルの名前がよくある名前として定着しているのと同
じような感じ（英語のマイケルとかフランス語のミシェルがこれ）。

この辺のことをアルフィーが知ったら間違いなく取り乱すだろう
けど、そもそもの話、わりと無自覚によく使われる如意転変がかなり
致命的な信仰対象ということに、本人だけが気づいていない（人前では
ルベルクラクの関係者の前でしか使っていないよね、って思っ
てる）。

これに加えてスタンドの内訳が亜空間転移に強力な治癒、さらにはサイコメトリーと、どう見ても神様なラインナップである。これらを引っさげて人間を助けに来るんだから、お前はそろそろ諦めたほうがいいと思うよ（他人事）

ちなみにコンフィデンスに端を発する各種能力の矢は、今後あと三つは生える予定だったりする。神様扱いからはたぶん二度と逃げられない。知らぬが仏とはよく言ったものである。

◆テイトオ・ルベルクラク

年齢：122歳

出身地：イギリスウエールズ地方、首都カーディフ

身長：約176

体重：約71キロ

外見：コーカソイドの中でもかなり色白。金髪碧眼の壮年男性

好きな色：赤

好きな食べ物：じゃがいも

趣味：射撃（ただし下手）

性格：子供好きのおじさん。他意はない。わりとリアリストなところがあり、信仰心より実益を取ることも。

スタンド：なし

作者解説：作中で一度たりとも名前を呼ばれなかった……どころか開示されることすらなかった上、ロリコン疑惑をかけられたかわいそうな伯爵。

ウエールズ地方に領地を持つ由緒正しい伯爵家の当主であり、時代を大幅に先取りした民間軍事会社の長であり、その他にもたくさんの関連企業を統括するルベルクラクグループのリーダー……と、肩書きを列挙すると、エピローグまで来たなろう主人公みたいだな。

当初の予定では、この辺の功績は「ファントムブラッド」後アルフィーからの助言でなした、という形にして、なんならアルフィーによる内政ものとして章一つ使ってがっつりやるつもりだったんだけど、ご存知の通り歴史がしつちやかめつちやかになるのでお蔵入り。

結果、予言があったとはいえ、歴代の努力があったとはいえ、それ

らを成し遂げたやべー手腕の持ち主ということになった。

おかげで作中では「大体ルベルクラクに任せとけばなんとかなる」みたいなことになったけど、まあアルフィー的にも作者的にも楽をさせてもらえたのでヨシ！

たぶん、今後も超便利な裏方キャラとしてあちこちで使い倒されるんだらうなあって。

名前の由来は、ジャクソン5の次男ティト・ジャクソンより。

ちなみにルベルクラク直系の名前は全員ジャクソン5から取られており、伯爵の嫡男でジョージの同級生として出てきたジグムントは、長男ジャッキー・ジャクソンの本名より。

最後においしいところを持っていった三代前の当主、マイケルは六男にしてご存知「キング・オブ・ポップ」マイケル・ジャクソンより拝借している。

名付けと長幼の順番が逆なのは、ちよつとひねりたかったから。特に深い意味はない。

また、ファミリーネームの「ルベルクラク」は、ぷよぷよ、ひいてはその源流である魔導物語において、主人公アルルの相棒兼作品のマスコットでもある、カーバンクルの額に着いている赤い宝石の名前から。

ルベルクラク家の紋章がカーバンクルなのもそこ由来だが、別に紋章のカーバンクルは黄色でうさぎみたいな耳があつてぐーぐー鳴いて……とかではない。

◆サチ・ルージュフィシユー

年齢：67歳（ジヨナサンと同じ年）

出身地：日本、下総国佐野藩（栃木県佐野市周辺）

身長：約150センチ

体重：約46キロ

外見：純日本人。ただし和服は着ておらず、基本洋装

胸ランク：大

好きな色：赤、薄い青

好きな食べ物：少年の血

趣味：子育て

性格：モンスターペアレント。ただしアルフィーには頭が上がりないので、一緒にいる作中のシーンではわりとまともに見える

技：催眠術、スベースリパー・ステインキープアイズ空裂眼刺驚、気化冷凍法、血管針攻撃、血液操作

スタンド：なし

作者解説：ルベルクラクにとっては長年の敵だけど、アルフィーにとってはルベルクラクとなんら変わらない味方という、ちよつと複雑なポジションのキャラ。

男二人組に反して、この親子は最初からアルフィーの部下として扱っただけ。扱いの差に関しては自覚してるけど、ジョジョ、特に三部以前のジョジョって女性の戦闘要員がまったくないじゃないですか。なのでオリキャラで男女比を均そうという魂胆からこういう配置に。

ぶっちゃけてしまえば、第二のショシャナポジションを企図した造形をしている。ただしタガの外れた感情はすべて娘に向いているし、アルフィーも今後二千年は眠らないので、あんな悲劇は起きないと思う。アルフィーも起こさせない勇気。

実はわりと重い過去持ち。寒村の生まれで、明治維新直後のゴタゴタと貧困で身売りされ、地方の程度の低い遊郭へ安価で売り払われる。

その後、安い労働力を探しに日本に来ていたルージュフィッシュに買われ、ロシアに渡る。そのまま今回の話までおよそ半世紀、一度も故郷の土を踏んでいなかった。

ロシアでは安い労働力兼性欲の発散道具扱いで、流産や赤ん坊を取り上げられる、子供の夭折などを経験してきている。

三十代始めの頃にそのしぶとさに目をつけられ、半吸血鬼増産の駒として使われる。

吸血鬼化後は、攪乱や情報操作に向いた催眠術に特に高い才能を発揮し、一気にルージュフィッシュ内の立場を上げる。

娘が生まれながらのスタンド使だったこと、しかもそれが光を操

るものだったこともあり、ナンバーツーにまで上り詰め今に至る。

こういった経緯から娘をことさら溺愛していて、彼女に何かあったらわりと冗談抜きで発狂すると思う。歪んだ愛情ではあるけれど、確かに彼女は娘を愛しているし、彼女にとって娘は世界である。

アルフィー相手であつても、何か無体なことをすれば即座に反逆するだろう。もちろんアルフィーにそんなつもりはないので、上下関係は安定している。

名前の由来は特にない。昔の日本っぽい名前を適当に、って感じ。なお漢字で書くと幸。

◆レナータ・ニキーティチナ・ルージュフィシユー

年齢：31歳

出身地：ロシア、ウラジオストク

身長：約127センチ

体重：約26キロ

外見：日本人とロシア人の混血。全体的にロシア系の要素が多く、またアルビノのように肌が白い。目は薄い青。

胸ランク：微（A氏「嘘でしょ!？」 もうわたしよりあるの!？」）

好きな色：メタリックな色全般

好きな食べ物：ちよつとだけ血を混ぜたぶどうジュース。最近は和食も好き

趣味：小動物を愛でること。猫派。

性格：色んなことに興味津々なお年頃。それなりに活発で、敬語覚えたての小学生みたいなどころがある

スタンド：ホーリー&ブライト

作者解説：幼女不足で禁断症状が出たので出しました（真顔

いやまあそれはともかくとして、キャラを出した背景などは基本サチと同様。ただレナータはそれに加えて、波紋勢とカーズ勢のバランスを取るために、スタンド使いとして用意した経緯がある。

つまりレナータは柱の一族に特攻を持ち、しかし同時にカーズをスムーズに究極生命体に移行させるための鍵でもあつたわけです。ついでに食われるなりして、カーズの非道つぷりを強調する役目もあつ

た。

その辺の調整のため、どちらかが一方的に不利になっても相手方に刺さるよう、スタンド能力も光を操るものとして設定したわけなんだけど……そのプロット君は死んだ。もういない、二度と帰ってはこないんだ。

でもあいつは帰ってこなくていいんだ……だつてあいつが帰ってきたらそれはつまり、親子ともどもカーズに喰われて犬死エンドが待ってるからね。

名前の由来は母親同様特になく、語感で可愛い感じのロシア人名をチョイスした。ニキーティチナは、ロシア人の命名規則に従っただけで特に意味はない。

名字の「ルージュフィシユー」は、「ルベルクラク」のフランス語形。と言ってもそれはわりと強引なもので、ルベルクラクの元ネタが正直よくわからなかったんでねつ造してるんですよ。

ルベルの部分は恐らくルビー同様の意味合いで、ルブルムが語源だろうとは思いますが、クラクってなんぞよ……？

という経緯で、クラクは無理くり「クラック(ひび)」と解釈。赤いひび、をフランス語に変えて「ルージュフィシユー」という名前が出来上がりましたとさ。

そしてスタンド名はドラマ「西遊記2」のエンディングテーマで、ゴダイゴの「ホーリー&ブライト」から。

能力から逆算して名付けたものの、歌詞も光にまつわるものなのでピッタリだろうなど。

《ちよい役だったオリキャラたち》

◆ニコラス・ジョースター

ちよい役どころか冒頭以外名前しか出てないんだけど、これがまたかなり重要なキャラなのでこちらにて。

本作オリジナルのジョースターで、本作を原作と乖離せしめる要素の一つ。ジョナサンの一卵性双生児の兄で、ジョースター家の元嫡男。

ジョナサンよりほぼすべての面で能力が高い上位互換で特に射撃

がめちやくちや得意だったが、波紋に関しては才能が乏しい。

そのため本作世界での「フロントムブラッド」は実質ダブル主人公で、互いの短所を補い合う双子の物語でもあった。

最期はジョナサンをかばい、原作のジョナサン同様の死を迎える。つまりその後死体がどうなったかはお察しである。

なおこの船、ダブルハネムーンで兄弟揃って夫婦で乗っていたわけだけど、ニコラスの奥さんは現在、独身を貫いてジョースター家でメイド長をやっています。ジョナサン夫妻と異なり子供はできなかったのも、ニコラス系統のジョースター一族はいない。

ちなみに読者の皆さんは大体わかっていると思うけど、20世紀に辿り着いた人間n回目の人である。その元を辿ると誰であったかは、お分かりいただけていると思う。

名前の由来も大体お分かりいただけていると思うけど、原作第七部「ステイルボールラン」の主人公、ジョニイの兄ニコラスより。

そちらと違ってこちらのジョージ一世はちゃんと兄弟平等に扱ったので、ジョナサンがこじれることはなかった模様。

まあ、そこらへんはニコラスが人間の経験が他より多い上に、生まれたときから大人同様の思考ができたからでもあるんですけどね。

◆ニキータ・イヴァノビッチ・ルージュフィシユール

誰だ？ って聞きたそうな顔してるんで紹介させてもらおうがよ！

要するにルージュフィシユールの吸血鬼男である。スラブ系の男、と連呼されてた人。

この人も伯爵同様一度たりとも名前が出てこなかったけど、こちらは完全に悪役だったのでまあ、うん、って感じがしてる。

当代のルージュフィシユール代表としてかなり悪どいこともやっていて、ただその分ルージュフィシユールをここまで再興した立役者であることは間違いない。

彼が各所に築いたものは、アルフィーちゃんが美味しくいただくと思えます。

というか実際、偶然とはいえアルフィーの故郷である日本にゴツイ

財閥を作っていたのはあらゆる意味でめっちゃファインプレーである。

あんなことせず、素直にアルフィーの前に出て事情を説明すれば普通に重要な部下として扱われただろうに、ルベルクラクに勝とうとするから……。

名前の由来は特になく、適当。ニキータもイヴァンもよくあるロシア人の名前だし。

ただ、先にレナータのミドルネームを決めていたので、ロシア人の命名規則から彼の名前はニキータに（ロシアでは親の名前をミドルネームにすることが多い）。

レナータのフルネームは後書きで書いていたので、ラストでこの人が彼女の父親と開示された段階でファーストネームはわかるようになってた……んだけど、我ながら重箱の隅をつつくような仕込みだったなと思う。

◆アルセーヌ・ルパン二世

ある意味でクロスオーバーキャラクター。クロスオーバー先はご存知「ルパン三世」。

ただしルパン三世の主要人物ではなく、ルパン三世の父親を作者なりに想像して落とし込んだ存在であるため、クロスオーバーキャラと言いつけるほどではないかも？

説明不要、言わずと知れた天下の大泥棒、アルセーヌ・ルパンの息子。

引き継ぐタイプのスタンドを引っさげて華々しくデビューしたものの、吸血鬼案件に引っかけ九死に一生を得たものの、黄金体験という新たなお宝を得た人。

赤石の鍵を集めるといふ展開になったあと、流れを考える過程で「イギリス王室に盗みに入るにはルパンくらいの腕がいるやろ」って発想で登板した。

幸いといえるかなんというか、冒頭でカリオストロ公国に言及してたおかげで、この世界が微妙にルパン三世時空と繋がってることは示唆されていたので、ならば使わねば損とばかりに駆り出された。

ちなみに当初のプロットでは、ルベルクラクとも柱の一族とも関係ないただの敵の予定だった。そこでヴィクトリア（本作の世界におけるエリザベス2世に当たる人）と交流を深めて「カリオストロの城」におけるルパン三世とクラリスみたいな関係に……みたいに考えてた。それがなぜ一時とはいえ味方になったかと言えば、そのシーンにアルフィーはもちろんルベルクラクもルージュフィッシュもジョースターも一切関係のないお話になってしまったただの蛇足になると気づいたから。

このお話のタイトルは？ そう、「エピソード：ルベルクラク」です。無関係のやつを無関係の場所で活躍させるのは趣旨に合わない。

というわけで最終的に、初代ルパンとルベルクラク伯爵ティトオが面識があつて、借りがあつたからそれを返すために依頼を受けた、という形に落ち着いた。

名前の由来はもちろん天下のルパンからなのだけど、本名は実は考えてない。元々匿名みたいな存在だし、無理につけなくてもいいかなつて。

スタンド名はテレビスペシャル版「ルパン三世・Princess of the breeze」隠された空中都市」のエンディングテーマ、「Treasures of Time」より。「カリオストロの城」の主題歌、「炎のたからもの」の英語版カバーである。

また、経験をスタンド能力に変える能力によって具現化した各種能力の名前と効果は、いずれも「快盗戦隊ルパンレンジャーVS警察戦隊パトレンジャー」に登場するルパンコレクションより。

なお、スタンド「トレジャー・オブ・タイム」のデザインや機能も、ルパンパトに登場するルパンコレクションアルバムがモデル。

◆二枚屋刀語

ある意味でクロスオーバーキャラクター。クロスオーバー先はジャンプ史に燦然と輝くオサレ代表「BLEACH」。

ただしBLEACH主要人物ではなく、名前と一部の設定を作者なりに混ぜて落とし込んだ存在であるため、クロスオーバーキャラと断言するのはちよつと違う。

死神が住む町、米花町在住の刀鍛冶。伝説級の鍛冶師、宮本包則の史実に存在しない最後の弟子。

ぶっちゃけて言えば、スタンドを利用して斬魄刀を作ってたやべーやつ。たぶんこのあと数十年かけて、日本にいくつかの斬魄刀が流通する。

登場した経緯としては、アヌビス神を作り直すキャラを用意する必要に駆られたから。

ただ、今までクロスっぽいキャラ出してきたしどうせ出すならここでも、ということとでただのオリキャラではない要素が加わった。

クロス先として、数ある鍛冶師キャラの中からどうしてBLEACH関係を選んだかと言えば、物語の舞台が米花町だったから。

後書きでもちよつと述べた通り、そもそも死神博士を出したくて、じゃあ死神に由来のある街を用意しよう！ が先にあつて。

そこから米花町なら死神がガチにいてもおかしくない！↓どうせなら他にも死神由来のキャラを出そう！ ……という流れで、無事アヌビス神が斬魄刀へクラスチェンジすることに。

ちなみに、打ち直されたアヌビス神を受け取りに行ったとき、帰りがけに斬鉄剣を打ってもらったため隕鉄を持った十一代目石川五三門とすれ違う、という流れを組んでただけど、冗長になるしこのあと絡んでくる予定もなかったのでカットしました。

ただこれ、カットしただけで抹消はしてないので、この世界の斬鉄剣は斬魄刀です。能力的には鞘伏みたいな感じですかね。解号はたぶん「燃えよ斬鉄剣」。

名前の由来は「BLEACH」におけるすべての斬魄刀の祖である死神、二枚屋王悦の名字と、刀が重要なファクターとなる作品「刀語」のタイトルから。まさに刀のために存在すると言っても過言ではない名前である。

スタンド名はアニメ版「BLEACH」のオープニングテーマの一つ、ポルノグラフィティの「アニマロッサ」より。

◆ 蒔田すずゑ、小田原要

オリジナルキャラクター。杜王村編の敵役。

レナータと戦うための敵役として登場させたのだけど、現実で医療に従事している方々には本当に申し訳ないキャラ造詣になった。でもその、ジョジョの敵としてはらしいんじゃないかなとね……。

こいつらのキャラ造詣に関しては、同時期に考えていたオリジナル作品（ロリコンが少女とえっちしたくて強くなつたけど、かわいそうなのは盛り上がらないので社会の改善からやったら名君になるっていう勘違いもの）の主人公とヒロインのそれをスライドさせた形。世界が違えばきつとこんなことには……。

なお当初、スタンドの持ち主を医者にするか看護師にするかで悩んでたんだけど、ロリコンでレスビアンのドMのほうが敵としてはインパクトあるかなって思ってこっちになりました。

まあうん、全体的に少女にえっちなことをしたくて作った連中ですね（真顔）

名前の由来は吉良家の分家である蒔田家から。吉良家に冤罪をかけたかった。下の名前は適当。大正時代っぽいんじゃないかなって。

もう一人の犯罪者である小田原要は、全部適当。なんかその場でふっと思いついた名前。

スタンド名はスクエニの名作SRPG「ファイナルファンタジータクティクス」のBGM、「The Pervert」より。

ルカヴィ（つまりボス）戦で流れる曲なんだけど、意味するところは「変質者」。同じタイミングで登場したホーリー&ブライト同様、能力ありきでつけたネーミング。

◆バカラシン・イイノデビッチ・ゾル、イワン・タワノビッチ
クロスオーバーキャラクター。クロスオーバー先はどちらも日本が誇る特撮ヒーロー、「仮面ライダー」。

二人とも物語と物語の合間を繋ぎ合わせるために用意されたキャラクター。出番はちよつとだが、実は本作の設定の結構重要な部分を担っていたりする。

仮面ライダーの敵組織ショッカーは、その前身がナチスドイツ軍である（公式設定）。そして仮面ライダーは1970年代後半の物語。

つまりショッカーのメンバーは年齢的に言っても1930年代に

は存在する人は存在するわけで、それなら1930年代の情景描写として用いるにはただのオリキャラより通りがいいだろう、という判断である。

そして彼らが存在する世界ということは、彼も……。

名前の由来はそのまんま、シヨツカーの大幹部「ゾル大佐」と「死神博士」の本名である。ひねりは何も無い。

シヨツカーの幹部と言えども一人地獄大使がいるが、彼が今後出てくるかどうかはちよつとわからない。

死神博士ことイワン・タワノビツチのスタンド名は、2013年に開催された仮面ライダーイベント「シヨツカーの秘密基地」のメインテーマソング、KAMEN RIDER GIRLS（本曲に限りSHOCKER GIRLSだが）の「SSSS Shock Shock」より。

ちなみにゾル大佐は本作では生まれつきのスタンド使いではないので、そういうのは持ってません。今のところはただの人です。今のところは。

あと、シヨツカー幹部の原典での登場順と本作での登場順が同じなのは偶然である。

◆ポラリス

オリジナルキャラクター。ジョージ編とも言うべき一連の話における助っ人。

ジョージ編にて、彼らの手助けおよびアルフィーの弁護をさせるために、そして何より20世紀に辿り着いているのはニコラスだけではないと表明するために登場。

人間ではなく動物のスタンド使いとなったのは、彼女たちが背負うことになった業の通過点は人間だけではない、と説明するため。

つまり彼女たちは20世紀に至るまでのおよそ2000年間、人間だけでなく動物や虫なども経験している。

彼女たちの記憶が欠落しているのはそのため。欠落した量に差があるのは、二人が経た高等な生物の数が違うから。

なので、彼女が扱うスタンドが彼女のものに酷似しているのは当然

である。なぜならその本質は変わっていないから。つまり、彼のほうも……。

ちなみにタカになった理由は深い意味はなく、単にナチスドイツの施設にいてもおかしくない生き物だったから、という程度である。

ハトや犬もその候補には入るのだけど、ほら、タカつてかつこいじゃない？

名前の由来は、現在の北極星である恒星ポラリスより。背中の星型の模様からこの命名。

さらに言うならば、コナミの音ゲー「jubeat」シリーズで初代から実装されている楽曲「Polaris」も由来になっている。

スタンド名はやはり、コナミの音ゲー「jubeat sauce r fulfill」より実装された楽曲「Scars of FANA」より。

彼女のスタンドは当初から音ゲー縛りなので、こちらもこのネーミングとなった。

↑ To Be Continued…

Part. 3 戦闘潮流

1. かくして叛逆の旗が翻る

1938年、10月1日。わたしはイタリア、ローマの地下にいた。柱に埋まる形で今なお眠っているカーズ様たちを見上げて、いよいよ始まる戦闘潮流に想いを馳せている。

彼らの目覚めは近い。もう間もなくだろう、ということが感覚的にわかる。こればかりは人間にはわからないだろうけれど。

だけど、どちらにしても「この日！」と目覚めるタイミングが正確にわかるわけじゃない。あくまでそろそろ、としかわからない以上、これから起こるだろう一連の事件……あるいは冒険が、わたしの知る通りに流れていく保証は一切ない。

むしろ、同じように推移するなんてもう思わないほうがいい。何せジョースター家はジョナサン以下全員が健在だし、ツェペリ家にしたって似たようなもの。波紋戦士の数も層も原作より充実しているうえに、わたしやその仲間たちだっている。

それでもなお安心できないのが、柱の一族という生物だ。何が起きてもおかしくないし、何をしてきてもおかしくない。

けれどわたしはもう、それに怯えて唯々諾々とカーズ様に従ってはられない。わたしの良心は、人間だったこの魂が、彼に従うことを良しとしないのだから。

だから——わたしは戦う。今回ばかりは逃げたりしない。

大丈夫、そのためにこの二千年間、いろいろと準備をしてきたんだ。スタンドだって、また少し成長した。大丈夫、なんとかなる。絶対大丈夫だよ。

……でも、まあ、それはそれとして。

「まだもう少しとだけ眠ってほしいな……」

具体的には、原作同様に1939年の1月30日までは寝てもらいたい。いや本当、冗談抜きで。

いやだって、まだ完全には準備できてないんだもの。

何せサンタナがまだ起きてないんだ。最低でもあの子を起こして戦力としてこちらについてもらうまでは、なんとしてでも眠つてもらいたいところだ。

「……よし。行くか」

わたしはくるりと踵を返す。行き先はアメリカ大陸だ。

途中、イギリスに寄ってジョンサンと合流してから向かう予定になっている。ジョセフとエリナさんは先にアメリカに渡つてるみたいだね、ジョンサンは手続きとか色々あったみたい。

何はともあれ、彼との移動はさぞ楽しいに違いない。推しと二人で船旅と考えると、心が躍る。食うか食われるかの冒険が間もなく始まるんだから、これくらい役得は許容してほしいな。

……待つてねサンタナ。お姉ちゃんが迎えに行くからね！

神聖サンタナ王国は、偉大なる神サンタナが創り上げた千年王国の末裔である。その首都であるテノチティランはローマに並ぶほどの歴史を持つ由緒正しい古都だが、しかしその風景はローマほど歴史情緒に包まれてはいない。

居並ぶビルはいずれもただのコンクリート製で、歴史的建造物などは一見すると見当たらない。ニューヨークには及ばないまでも、摩天楼をいくつも抱える姿は古都という単語とは結びつくとは思えないだろう。

だが、それは無理からぬことだ。何せサンタナが眠りに着いて以降、この地域では長く戦乱の時期が続いた。歴史で言うところの中米戦国時代は何百年も続き、結果としてかつての繁栄を今に伝える遺構は多くが残らなかつたのである。どこかの女神扱いされる人物は、それを知って心底嘆いたという。

しかし、である。

それでもすべての遺産が、遺跡が、この土地に残らなかつたのかと言えば否だ。テノチティランの中心部、ヨアリ王宮が鎮座する区画

の地下には、今もなお神がいた時代のものが多く残っている。

そして神もまた、そこにいる。

半ば柱に同化し、二千年の時を眠り続ける神。彼を祀り、彼に祈る半吸血鬼たちが聖地とするこの遺跡に今、初めてヨーロッパの人間が足を踏み入れた。

先頭に立つのは、大柄ではあるがやせぎすのゲルマン人。彼の隣には、この地域伝統の衣装に身を包んだ王が並んでいる。

そして彼らの後ろに、最新の装備で身を固めた兵士たちが続く。王の後ろ、兵士たちを率いる位置には金髪を特徴的な髪型に整えた偉丈夫がいる。彼に従う兵士たちの四分の三ほどは武器を持っておらず、いわゆる工兵だ。

「さあ皆のもの、ここが我々の聖地だ」

「おお……ここが……」

王直々に案内されてやってきた男……王への対応のため、ヒトラー直々に派遣された文官の男は、二千年前の遺跡にしてはいささか洗練されすぎている広間に立ち、思わず感嘆の声を漏らした。

無理もない。二千年前、今のドイツと呼ばれる地域は辺境も辺境のド田舎であり、文明的な遺跡はほとんど存在しない。

だというのに、ここはどうだ？　ローマの地下遺跡どころではない。それよりももっと洗練された、現代でも通用しそうな完成度を誇っていたのだ。

一切歪み、傾きのない壁や床。それらには繋ぎ目がない。いや、あるにはあるが、肉眼ではよくわからないほど丁寧に隠されている。

居並ぶ柱は人工物だろうか。それにしてもあまりにも健在であり、欠けたところもひび割れたところもほとんど見受けられない。

周辺にはどこからか引かれた導水管によって、ささやかではあるが美しい池がたたえられている。そこに繁茂する植物は生憎と素人にはわからないものだが、それでも目で見て楽しめるほどには美しいものばかりだ。

「ここは……まだ生きていますな」

だから男は、そう言った。放棄されていないのだと。いまだにここ

を修繕して、実際に使っているのだと。

しかし返答は、彼の予想と異なった。

「それは是であり否でもあるな。確かに、我ら王家は代々この遺跡を聖地として維持してきたが……それは最低限だ。大半のものは、かつてサンタナ神が手ずから造り上げた当時からほとんど手が加えられていない」

それはゲルマン人こそ世界最優の種族であり、世界に冠たるべきであるとするナチスドイツの人間にとっては面白い話ではなかった。

しかし、彼はそれを口にせずただ飲み込む度量もあつた。

何より、これからの世界情勢においては、サンタナ王国との同盟に悪影響が出るようなことはできなかつた。そこはさすがに、外交目的で派遣された文官である。

だから男は、ぐつと我慢して王へと身体ごと向き直つた。

「……素晴らしい。さすがは新大陸で長き歴史を脈々と受け継いできたサンタナ王国！……しかしなればこそ改めてお聞きしたいのだが……本当によろしいのですかな？」

「無論だとも」

彼のその問いに対しての答えは、即であつた。

王はニヤリと笑い、半吸血鬼特有の白い肌の顎をさすりながら、広間の最奥、玉座のように設えられた柱で眠る神に横目をくれる。

男は彼の視線に、その態度に、神に対する敬意などかけらも見出せなかつた。

「我々は我々として、生きていける。我々の行きたい方向を示さぬ神など、もはや不要！」

続けられた言葉に、男は内心鼻で笑う。その神が残した予言に従っていたからこそ、現代まで生き延びることができた一族が何を言うのかと。

しかしもちろん、そんなことは口にしない。繰り返すが、彼はそうした自制のできる男だ。

「素晴らしいお言葉だ！ 我らが総統閣下もまったく同じ意見であらせられる……やはりサンタナ王国は、我らドイツにとっては良き友で

あると改めて確信いたしましたぞ！」

そして彼は、外交的なパフォーマンスをできる限り維持しながら、改めて問うた。

「……では陛下、よろしいですか？」

「もちろんだとも。それは我々の総意でもある」

再度の即答を得て、男は鷹揚に頷いた。

それから控えていた部下たちに目を向け、号令を下す。

「では……シュトロハイム少佐、行動を開始しろ。手筈通りに頼むぞ」

「お任せください、閣下！ ……やるぞお前たち！」

『ハッ!!』

シュトロハイムと呼ばれた偉丈夫が声を張り上げると、すぐさま兵士たちは動き出した。各々道具を手にした工兵が、いまだ眠りのうちにある神を柱ごと引き？がさんと殺到する。

そんな兵士たちに取り決め通りに指示を出すシュトロハイムはしかし、なぜか言い知れぬ不安を拭い去れないでいた。

だがそれは、眠っているサンタナが今にも目を覚まし、襲ってくるのではないかという直近の不安ではない。もっと根源的な不安……サンタナのさらに先にあるものへの不安だ。

何か恐ろしいことが始まろうとしている……恐るべき歴史の流れが、潮流が、猛然と自分たちを飲み込もうとしているのではないか。そんな風に思われてならなかったのだ。

(……ええい、あれこれ考えても仕方なからうが！ 我がドイツの科学力は世界一イイ！ どのような化け物であれ、御せぬはずがなアイ！)

それでも彼は不安を飲み込んで、仕事に従事する。その姿は、理想とされるゲルマン人の手本のようなであったという。

しかし彼の不安は、正しい。今まさに、世界の歴史は時代の転換点に差し掛かったのだ。

決して歴史の表舞台には語られることのない、奇妙な冒険譚……その幕が、遂に上がった。

同日、同時刻。アメリカの商都、ニューヨークの裏路地にて。

一人の若者が、トラブルに巻き込まれた一人の若者を助け出していた。

助けられた若者は、この時代のアメリカで強い差別にさらされていたネグロイドだ。居丈高で性根の悪いコーカソイドの警官に絡まれた若者自身スリであったので、声かけ自体は間違っていないのだが――所持金を巻き上げられていたところだった。

手を差し伸べたのは、砕けたクイーンズイングリッシュを使う筋骨隆々の大きな若者。彼は買ったばかりのコーラに黄金の輝きをまわさせて暴発させ、弾き飛ばした王冠で警官の指をへし折るといふ離れ業を披露した。

誰がどう見ても過剰防衛である。彼もそれは自覚できたのか、ハツとなったあとは大慌てで、助けた若者を半ば引きずるようにして現場を後にした。

そのやり方、態度はお世辞にも紳士的とは言えず、とてもイギリス人とは思えないものであった。しかし助けられた若者にとっては、スリの自分を後先考えず助けてくれた若者に悪感情など抱きようがなかった。相手の事情はまるでわからなかったが、それでもその気安い態度には親近感も覚えた。

だから、

「あんたは盗人で黒人のおれに対して『その財布はくれてやったものですよ』と言ってくれた。あんたに借りを作っちゃったな……」

追手を完全にまいたところで、彼は改めて助けてくれた相手に……大きな身体を持ったイギリス出身の青年に、素直に礼を言うことができた。

「おれの名前はスモーキー・ブラウン。名前を聞かせてくれよ」

そしてそう続けた彼……スモーキーに対して、若者は不敵に微笑みながらも、はつきりとした声で名乗りを上げた。

「ジョースター。ジョセフ・ジョースター。J O J O っと呼んでくれ」

2. 押し寄せる潮流

十月下旬。イギリスからアメリカに向かう船の中で、わたしはジョナサンと同じ船室に泊まっていた。

伯爵たちは留守番……というよりは、戦いの舞台になる予定の場所周辺における準備や、秘密兵器の開発を進めてもらっているところだ。

一応单身ではないけれど、わたしの側仕えは三年前と変わることなくサチさんとレナータちゃんです。十分だからこれでいい。

そんな二人の給仕を受けながら、ジョナサンと今後の計画について話し合う。

「サンタナが今どういう状態なのかはわからないけど、どっちにしてもまずは王国の人たちの目をくぐり抜けないとね」

「彼らにとっては最高神だからね、警備は厳重だろうなあ。まあ現国王以下、王家に近い人たちの多くはそうは思っていないみたいだけれども」

「正直気持ちはわかるんだけど、そこは置いてくとして……とりあえず、サンタナには予定通りわたしが会いに行くから、ジョナサンはスツピーの説得をお願いね」

何を説得するかって、スピードワゴンSPW財団とサンタナとルベルクラク家を繋ぐことだ。わたしが対カーズ様用に想定している秘密兵器の完成が、予想よりもだいぶ遅れているんだよね。

元々ルベルクラク家は科学技術方面はそこまで得意じゃあないから、仕方ないと思う。他にも二次大戦や戦後を見据えて、あちこちで少しずつ動いてもらってるしね。それでももしかして間に合うかも、と思う程度には進んでるからダメってわけでもないんだけどさ。

ただテコ入れは必要そうだな、とも思うわけで……ここはSPW財団の科学力と人材、そして何より人間より色んな点で優れた身体スペックを持つ上、そっち方面に理解と才能があるサンタナに協力してもらいたいのだ。

サンタナはわたしが説得すればなんとかなると思うから、SPW財

団へはジョナサンから当たってもらおうわけだね。スッピ―は彼に任せておけば大丈夫なはずだ。

「任せてくれ。……しかし、何度聞いてもそのニックネームは笑ってしまうなあ」

八十近い老爺に対するニックネームとしては、かわいすぎるとはわたしも思う。

ただこう、なんていうかこれはもう完全に癖というか。一度うっかりジョナサンの前で言っちゃってからは、開き直ってるんだけど、まだスッピ―本人には言ったことがない……というか会ったことすらないから、今から気をつけないとなってると思う。

……なお、そのジョナサンは四年前からまったく変わってなくて、ナイスミドルで通じる見た目だ。そりゃあある程度歳を取ったら数年なんて大した変化は起きないけど、にしても変わらなさすぎ。波紋ヤバイ。

「ちなみに潜入は大丈夫なのかい？」

「うん、そこは大丈夫。最初の頃は変身してくか配管の中を抜けてくかどっちかって思ってたけど、スタンドが成長したからね」

この三年のうちに、わたしのスタンド「コンフィデンス」は全体的に成長した。したというか、させたというか。

うん、色々がんばって修行したんだよ。どれだけできることがあってもカーズ様相手となると安心できなくて、たぶん今までで一番の集中とペースでガッツリ修行したと思う。今回ばかりはクソ長い寿命と、休眠期以外睡眠が必要ない身体に感謝だ。

色々と育ったわたしのスタンドだけど、中でも特に「スターシッポ」はそれが顕著だ。なにせ出入りする地点を、スタンド空間の中からある程度動かすことができるようになったんだからね！

これはとてもでかい。つまり疑似的とはいえ通り抜けフープができるんだから！

数メートル動くだけでも疲れるし、下手を打つと*いしのなかにいる*羽目になるからあんまやりたくはないけど……それでも狭く細い配管の中を通るよりはマシだ。

ちなみに何がどう作用したのかはわからないんだけど、出入り地点を動かすための操縦桿とモニターがスタンド空間内にできたのには笑った。もちろん喜ぶべき変化ではある。何せスタンド空間から外の様子が見れるようになったわけだし。

でもそれはそれとして、あまりにも脈絡がなさすぎたしあまりにも不意打ちに出現したものだからさ……。そんなことある？　って思わず言っちゃったよね。

ま、これで名実ともに、「スターシップ」になったわけだ……。なんてね。

他にも成長したところはあるけど、それはまたの機会に。

「いいなあ、僕はいまだに君の幽波紋が見えない。もつと修行したらたどり着けるだろうか……」

しなくてもあと五十年頑張つて生き続ければ勝手に生えてくると思うよ、とは言わないほうがいいんだろうな。

「……サンタナと合流したあとは、予定通りに？」

「うん。そこからわたしは一旦カーズ様に合流するから、しばらく話はできなくなる」

「となると、アメリカからヨーロッパに戻ってくるときが最後の打ち合わせポイントかな。計画に変更が出ないといいんだけど」

「こればかりはね。どんなに完璧に見えても穴は出てくるものだし、臨機応変に行こう」

ただまあ、カーズ様たちが起きるまではそこまで大きな変化はないとも思う。サンタナ王国っていう原作とのド派手な乖離はあるけど、サンタナの行動そのものにはさほど影響を与えないだろうからね。

問題はカーズ様たちだけ……彼らが目覚めるタイミングによってはかなり計画が変わってくる。だけどこれをおおきくかする方法はないから、わたしはもはや祈りの境地だ。おおブツダ、迷える衆生をお導きください。

まあ何はともあれ、今はこれ以上考えてもどうにもならない部分も多い。わからないことをわからないままあれこれ考えても不毛なだけだから、次第にわたしたちは雑談へと移っていった。

わたしたちの雑談のメインはなんと言っても歴史だ。わたし自身が好きなのもそうだけど、何よりわたしは紀元前の生き証人なので、本当に盛り上がるんだよね。

いやあ、スケッチとか当時の道具とか残しててよかったなっつづくと思うね！

その中のいくつかは、ジョナサンやルベルクラク家を通して大英博物館に寄贈したりもしてる。スタンド空間のスペースも有限だから、ちよつとした断捨離ってところかな。

ん？ あくまで理解のある人に譲っただけだよ。ただ捨てることを断捨離と言うなんて、あまりにも短絡的じゃあないか。

そんなこんなで、船旅は続く。少ししたらまたとんぼ返りするわけだけど、趣味の合う人、しかも前世の推しとの会話だ。今この瞬間を精一杯楽しもう。

ドイツの首都、ベルリンの郊外にある秘密研究所。かつてゾンビによる事件が起きたところとはまた別の施設で、かの事件と似たような事態が起きていた。

深夜の闇の中、人工の光で照らされた研究所の中に兵士や研究者たちの悲鳴や怒号が響いている。彼らの大半は何かから必死に逃げていて、立ち向かうものはほとんどいない。

その数少ない例外も、立ち込める粉塵に撃ち込んだ弾丸が意味を成していないことに気づくや否や、顔色を変えて逃走の列に加わることになる。

「なんとかしろ！」

「無茶言うな！ あんな化け物相手にどうしろっついうんだ！」

叫びながら走る兵士たち。屈強な男たちが半泣きでわめいている姿は哀れみを誘うが、人知を超えた化け物相手では致し方ないことだろう。

やがて動く人間がいなくなり、静かになった研究所の廊下を人影が

一つ、粉塵を押しよける形で現れた。

腰近くまである黒い髪をたたえた、若い美丈夫。しかし肉体は見事に鍛え上げられていて、彼を顔だけの男だとみなすものは一人とていないだろう。

そんな彼の手には、干からびた死体が突き刺さっていた。比喩ではない。右手の五指が的確に死体の首に刺さっているのだ。

彼はその死体を無造作に、しかし勢いよく扉の一つに叩きつける。轟音と共に、頑丈そうな扉がひしゃげて奥へ倒れた。

「やつと見つけたぞ……ここにあつたか」

開放された部屋に踏み込んで、男は薄く笑う。

そこは物置だった。雑多なものが無秩序に並べられた様子は、物置と言うよりも掃き溜めに近いかもしれないが、それでも。

彼はその中であつた、かつて身につけていた衣服を手にとると、手早く身につけていく。既に四年近く着ていないものだったが、同じものを五十年以上も使っていたのだ。身体はしっかりと使い方を覚えていた。

そうして身支度を整えた男は、やはり壁を破壊してその場を後にする。歩く挙動に合わせて、長いマフラーがなびいてふわりと舞った。

彼はそのまま悠々と研究所を後にしようとしたが、さすがに素通りとはいかなかった。ドイツ軍の、彼が使い方を教えた特別兵たちが立ちほだかつたのだ。

「おのれ化け物め！ ここから外には行かせんぞー！」

先頭の兵士が吠える。彼は……いや、彼以外の全員から、コオオオオ……という独特の呼吸音を漏らしながら。

しかし吸血鬼と化した男は、それを鼻で笑う。

「ふん、軍事的な好奇心と野心から私をその化け物に変えたのはどこの誰だ？ 自分たちのしたことを棚に上げてよくも言えたものよ」

「黙れ！ 大人しくしていればいいものを……どのみち貴様から搾り取れるものははやない、ここで処分してくれるわー！」

対する兵士たちも鼻で笑った。

「行くぞ、やつを始末しろ！」

そして号令がかかり、兵士たちが一斉に男へと襲いかかる。

彼らの動きは常人離れしていた。並外れた瞬発力と豪腕、そして何より呼吸によつて生み出されて黄金の輝きが男に殺到する。

だが男はそれを避ける仕草を見せなかった。ただ鋭くなつた犬歯をのぞかせて、笑うだけで。

—が。そうこうしているうちに、いくつもの拳が男の身体に叩き込まれる

「な!?!」

「ば、バカな?!? 吸血鬼は波紋で死滅するはずでは!?!」

特に何も起こらなかった。呆然とする兵士たち。

彼らは気づかない。何も修行をしていなくとも、波紋の性質への理解とそれなりの観察眼さえあれば、十代の若者でも気づくはずの現象に気づかない。男の衣服が、アースのように波紋を散らしていることに。

だから男は、そんな間抜けに対して躊躇しない。その中の手近な二人に手を伸ばす。

「クッククク……馬鹿者どもめ。たかだか数年の、片手間の修行で波紋を身につけたと思ひ上がりおつて。片腹痛い!」

「あぐつ!?!」

「ぎつ!?!」

遅滞なく、遠慮もなく、男の爪が、指が、二人の兵士の首に突き刺さる。

そして次の瞬間、凄まじい勢いで二人の身体が干からび始めた。彼らの体内から、水分が……より正確に言えば血液が、猛烈な速度で吸い上げられているのだ。

「き、貴様……!」

「波紋の歴史は四千年! お前たちごときが極められるものではないと知るがいい!」

そして男は声を張り上げる。と同時に、もはや抜け殻の兵士二人を他の兵士たちに叩きつけた。

もちろんそれだけで終わるはずがない。男は投げると同時に動き、

投擲に巻き込まれない位置にいた兵士たちを蹴りで一斉になぎ倒す。

残る兵士たちもかなり早く意識を戻して身構えたが……もはやどうにもならなかった。彼らは攻撃されることに気づくよりも先に、意識を失っていった。

「ば……バカな……わ、我らナチス精鋭波紋部隊が……い、一分も保たずに……ぜん、めつめつめつ……!!?」

「このストレイツォ、容赦せん!」

「ぐぺっ!!」

そして最後に残った一人も、頭を蹴り砕かれ死亡した。

男……ストレイツォはそれでも油断なく気を配りながら、再び静かになった研究所から脱出する。

生まれ変わった己の身体の具合を確かめるように、拳を握り、開きを繰り返しながら。

「……これが吸血鬼の力。素晴らしい。何より、衰えぬ肉体の素晴らしいさよ」

視線を前に戻した彼は、妖しく微笑みながらひとりごちる。

「フフ……ナチスどもにされたのだから、誰も文句は言えまい。私の意思ではないのだからな」

だが、と彼はそこで一度言葉を切った。しかし足はとめることなく、夜空を仰ぎ見る。

今宵は曇天のようだ。けれども、雲間からかすかにのぞく一等星の輝きは、隠しきれていなかった。

その星の輝きは、かつて肩を並べて戦った男の顔をストレイツォに想起させた。

「……ジョナサン。あなたは私をとめるのだろうか。彼の係累も……ジョセフのことは詳しくないが、ジョージ……それにエリザベスも、か。敵は多いな」

白い光にわずかに照らされた彼の顔は、いつの間にか穏やかな……どことなく死を迎え入れるような、悟りを開いた色を帯びていた。

だがそれも一瞬。

「……フン、それもまた一興か。既にこの身は悪に堕ちた……老いさ

らばえて死ぬよりも、一瞬とて若返った喜びを抱いて死ぬなら本望」
悪魔のようにニヤリと笑い、彼は地面を蹴った。吸血鬼の膂力は、その身体を容易く屋根の上へ連れて行く。そうして彼の姿は、夜の闇の中へと溶けていった。

この日、ドイツは初めて石仮面とそこから生まれる吸血鬼の本領を、本当の意味で知った。しかしその代償は大きく、石仮面の研究を行っていた施設は半壊。人員も大半が干からびて死ぬことになった。もちろん軍、および政府の関係者は戦慄した。

邪悪な石仮面と吸血鬼に対してではない。それらを作り、餌にする柱の男たちに対してである。

そしてその情報を小出しにしてきた提携相手に、ほのかな敵愾心を抱いたが……今はそれを外交に影響させるべきではない。

何せドイツは、柱の男たちを既に見つけてしまっているのだから……。

3. 始まりの戦い

ドイツでまたも騒動が起きてから数日後。イタリアはローマの街を、二人の青年が連れ立って歩いていった。

時間は夜。周りに負けず劣らず賑やかな雰囲気を漂わせており、両者の友好が深いことをうかがわせる。

「そうかくく、せっかく彼女ができたつてのに国外勤務なんてマルクもツイてないなあ!」

「本当さ! ……でもしようがない、一応これでも軍属だしね。それに何もかもがツイてないわけじゃあないぜ、なんせシュトロハイム少佐の部隊はサンタナ王国まで飛ばされたんだ。上からの命令で急いだぞ? それに比べたらイタリアはマシさ。フツーに手紙でやり取りできる距離だからね」

「何イーッ、突然大西洋を渡らされたヤツもいるのか!? 確かにそいつらに比べたらマシだな!」

「だろ? それに、こうして休みの日にシーザーと会えるんだ。これ以上は文句は言わないよ」

——ま、できれば君のいるヴェネツィアに行ってみたいところだけどね。

そう付け加えて肩をすくめたマルクに、シーザーは嬉しそうに破顔すると、その野太い腕で半ば強引に肩を組んだ。

「なんだア、嬉しいこと言ってくれるじゃあないかこいつめ!」

「わっ、それは苦しいからやめてくれよ! 君の逞しい身体で手加減してくれなかったら死んでしまう!」

「そんなことで兵士が務まるのかア? ンン?」

「波紋戦士の君と一緒にほしくないなあ!」

ワハハと笑い合うマルクとシーザーの二人。国籍は違えどどこにでもいそうな、仲のいい若者と言った様子である。

かたやナチスドイツの兵士、かたや波紋戦士であるが……どんな人間であろうと日常というものは存在するのだ。

「しかしあんまり長く留守にしたら、彼女にフラれちまうかもなあ—

？」

「ちよ、それは思っても言いつこなしだよシーザー！」

そうして仲良く街を歩く二人。

しかしあるとき、フツとシーザーの顔が鋭くなった。その変化に、マルクも気がつき首を傾げる。

そんな彼に、シーザーは問わせずそれまでの空気を維持するよう努めろと小さく伝える。

そのまま二人は騒ぐ若者の体を表面上は崩すことなく歩き続け、程なくしてマルクの所属する部隊の詰所へと辿り着く。

「……シーザー？」

「俺の勘違いかもしれん。そうだといいいんだが……吸血鬼がいた」

途端に室内が、シンと音を失った。

「本当なのかい、シーザー!？」

「……まさか？」

「数日前、ベルリンから一体が逃げたとは聞いたが……」

「このローマになぜ？」

だがすぐに、マルクを始めとした兵士たちが殺到した。

「少なくとも俺はそう感じた。勘……みたいなので、根拠があるわけじゃあないんだが……」

兵士たちをなだめるように、手をかざしながら言うシーザー。彼は途中で一度言葉を切ったが、すぐに鋭い視線を外に向けて続きを口にした。

「……少なくとも、ここまで尾けてきたやつがいるのは間違いない」

それを聞いた兵士たちは、再び静まり返った。誰かが唾を飲む音が、やけに大きく響く。

彼らはシーザーの言を信じていないわけではない。むしろかなりの確度で信びよう性があると、ほぼ全員が感じていた。

なぜならここ数年、ドイツ軍は波紋を科学的に究明する過程で、人間としての限界を波紋戦士がやすやすと上回るとおおむね理解しているのだ。

拳銃くらいであれば、持ち前の体力と技であしらえるのが波紋戦

士。そうでなくとも、超能力と評して余りある波紋は、生半可な覚悟と修行では身につかない。

それを若くして使いこなすシーザーに対して、多くの兵士たちは一定以上の尊敬を寄せているのだ。その傾向は特に、マルクのようなシーザーと年の近い……すなわち若い兵卒たちに顕著であった。

だから、というわけでもないのだが。沈黙したドイツ兵たちに向けて、シーザーは不敵に笑って見せた。

「狙いが誰なのか、何なのかはわからんが……吸血鬼の相手は波紋戦士にしか務まらん。ここはこのシーザーに任せてもらおう」

「ま……待ってくれシーザー！ そんなことしたら君がどうなるか……」

「なーに、心配するな。俺だって既に免許皆伝はもらっている！ 吸血鬼の一体くらい、わけもないさ！」

言うや否や心配そうに言い募ってきたマルクをなだめながら、シーザーは笑って見せる。

しかしそんな彼の脳裏をよぎるのは、何もできなかったかつての痛い記憶だ。好奇心で首を突っ込んでもいいことは何もないと、彼は学んでいる。

だが今のシーザーは力なき一般人ではない。むしろ力あるものとして、やらなければならぬことがある。だからこそ彼は、素直に二の句を継ぐことができた。

「……吸血鬼をなんとかするのは波紋戦士の役目だ。君たちを巻き込むわけにはいかないんだ。わかってくれ、みんな」

「……シーザー」

「大丈夫、無理はしないさ。俺が死んだら悲しむ、お嬢さんがたくさんいるからな」

それでもなお案じるマルクにそう言うと、シーザーは茶目つ気たつぷりにウインクをしてみせた。その姿は、まさにイタリアの伊達男と言わんばかりの男ぶりであった。

さて、そうと決まればシーザーはすぐさま動ける男だ。さも友人を送っていったという体で詰め所を後にする。そうして陽気な態度を

表面上は維持したまま、ローマの街並みを歩き始めた。

向かう先は決めているが、ルートは決まっていない。気分任せで、けれど人気は少しずつ少なくなっていくように、慣れた足取りでゆるゆると。

道中、酒屋に立ち寄ってワインを購入する。お土産の体裁に包装を整えてもらってであるが、もちろんただの贈り物ではない。波紋使用にとってワインは……というより液体は、重要なアイテムなのだ。

(……やはり来ているなッ)

ワインを腋に挟む形で抱え、口笛を吹きながら歩きつつも、シーザーの感覚は尾行者をはつきりと認識していた。

だが、だからこそ彼にはわかった。相手もシーザーから認識されていることを承知の上で、尾行を継続しているということが。

ならば目当ては自分ということか……と考えたところで、目的地に着いた。コロッセオ……かつてシーザーが、父と再会した因縁の地下遺跡を密かに抱える場所だ。

既に周辺に人はいない。それを確認して、シーザーはゆつくりと振り返った。

そこにはもはや隠すことなく、一人の男が佇んでいた。長い黒髪的美丈夫。歳の頃はシーザーより確実に上だが、それでも三十路には届いていないであろう。

身体つきはひらひらとした衣服とマフラーで隠れているが、シーザーにはわかる。鍛え抜かれた肉体がそこに隠れているということが。

だが、シーザーにとってそれらはさほど気になるものではなかった。何よりも彼の注意を引いたのは、男の顔。

「……やあシニョール、どこかで会ったかな？」

そう、なぜか見覚えがあつたのだ。しかし、実際に顔を合わせて会話をしたような記憶はどうにも持ち合わせていない。

だからあくまで陽気なイタリア人の態度を崩さず、問いかけてみた。

「……………」

だが返答はなかった。ただ、にやりとした笑いが向けられただけで。

しかしその笑いのうちに垣間見えた、男の口の中……そこからのぞく鋭い歯に、シーザーは一気に警戒のレベルを跳ね上げた。

佇む気配からしてそうだとほぼ確信していたが、これで間違いない。あのような長い歯の人間は、存在しない。少なくともシーザーが知る限りはゼロのはずだ。

けれども彼の警戒は、この場合逆効果だった。一瞬とはいえ彼は確かに態度を、気配を、そして何より態勢を変えてしまった。

だからこそ。

「ふむ……偶然若い波紋使いを見かけたから、どれほどのものかと思っただが……」

相手の男は、言いながら殴りかかってきた。

常人であれば、到底認識できない速度での一撃。しかしそれを、シーザーは培った経験から見抜いてすんでのところ回避する。

と同時に、カウンターを放つ。カウンターに対するカウンターを警戒し、蹴りは使わない。ワインボトルを抱えていないほうの手を握り、顔めがけて裏拳を見舞う。その拳には、もちろん波紋の輝きが煌めいていた。

「……存外やるな小僧。きちんと鍛えていなければできない反応だ」

のけぞってそれをさらりと回避した男は、ふわりと後ろに跳躍。空中で一回転して柵の上に着地すると、そう言っただけ。

妙に上から目線の発言に、少々イラつきながらもシーザーは身構える。今度こそ確実に、戦うための構えだ。

「少なくとも、ナチスの小僧どもとは比べ物にならない仕上がっている……免許は皆伝と言ったところか！ いいぞ、相手にとって不足はない！」

「貴様……何者だツ？」

「そう言いながら、既に察しているだろう？」

「吸血鬼ツ。そんなことはわかってる！ その上で、どこの誰だと聞いているんだ！ 質問を質問で返すなスカタンツ」

舌鋒鋭く言い放ったシーザーに対して、男はなおも笑う。

いや、これは嗤っているのか。その態度に、元々そこまで気の長いほうではないシーザーは、怒りを露わにする。

「知りたければ私を倒してみるがいい、若き波紋使いよ！」

「……ッ、お望み通りにしてやろうじゃあねーかッ！」

そうしてシーザーは、地面を蹴って前に出た。波紋の呼吸に乱れはなく、基本を着実に積み上げたことが見てわかる、美しい輝きが黄金のエネルギーとなって迸る。

男……吸血鬼はその様子に一瞬だけ、嬉しそうに目を細めた。彼が少し前に見た紛い物とは異なる、正当かつ見事な波紋だった。

「食らえ吸血鬼ッ！」

シーザーはまず、手にしていたワインに勢いよく波紋を流し込んだ。すると瓶の中のワインが激しく膨張し、コルクがライフルを思わせる速度で発射される。それに続く形で、波紋を大量に帯びたワインが水鉄砲のように噴き出した。

「甘いな」

だがそれを、吸血鬼は見てからでも余裕とばかりに回避する。横でも後でもない。前にだ。最小限の動きでコルクとワインの軌道から逸れた彼は、そのまま鋭い手刀を突き出す。

「甘いのは……どちらだッ!？」

対するシーザーは、ワインボトルを大きく振り払った。すると噴射されていたワインが、波紋の力によって一定の固さを得ていたワインが、鞭のようになつて吸血鬼に襲い掛かる。

しかしそれすらも、吸血鬼はニヤリと笑って回避した。今度は跳躍し、シーザーの頭上を通過する形で。

さらに通過する途中……跳躍の頂点に達したところで、縦に回転しながらシーザーの脳天めがけて踵を振り下ろす。

「ぐッ!？」

かろうじて左腕で防いだシーザーだったが、吸血鬼の膂力によって放たれた一撃はすさまじい重さであった。シーザーにとつて今まで受けた最大の物理的衝撃はジョンサンのタックルであったが、それを

優に上回る衝撃が彼に襲い掛かる。

直撃ではなかったにもかかわらず当たり前のように骨がきしみ、折れたときのような音が響いた。

「ぐ……くッ、なんのこれしきー」

だがその程度の痛みは、波紋の呼吸で軽減できる。治癒力を底上げする波紋があれば、骨折すらハンデにはならない。

ゆえにこそ、シーザーはひるむことなく波紋を帯びたワインの鞭を振るう。しかし既にそこに吸血鬼はおらず、空振りに終わった。

「フフ……言っただろう、甘いな、と」

少し離れたところで腕を組み、にやにやと笑う吸血鬼。完全に遊ばれている。

またもシーザーの頭に血が上る。

しかし、彼が突撃することはなかった。なぜなら、彼が一步前に踏み出した次の瞬間に、大量の銃声が響き渡ったからだ。

そして彼の目の前で、吸血鬼の身体に無数の弾丸が四方八方から殺到し、蹂躪し始める。

一瞬何が起きたのかわからなかったシーザーだが、すぐに気がついた。マルクたちが助けに来てくれたのだ、と。

無抵抗に弾丸を受け続ける吸血鬼をよそに、彼が闇の奥へ視線を向ければ……果たしてそこには、武装したドイツ軍が複数並んでいた。

とはいえそれを嬉しく思う反面、なぜ助けに来てしまったのだ、とも思う。下手すれば彼らの中から、誰かが死んでしまうかもしれないというのに。

（だが……俺が彼らの立場なら、同じことをしていただろう……まったく、お人よしのやつらだぜ！）

それでも思わず口元が緩むのを感じてしまう。彼らの心意気が、身に染みだ。

しかしそれで油断するわけにはいかない。シーザーは一瞬逸らした視線を、吸血鬼へ戻す。

その吸血鬼は相変わらず無抵抗のようで、なおも執拗に弾丸を浴びせられていた。しかし、シーザーにはそれが妙に気にかかった。防御

する姿勢は見せているが、回避しようという気配が微塵も感じられないのだ。

これにはきつとわけがある……シーザーがそう思ったとき、ちょうど射撃が止んだ。

「……やったか？」

マルクではない、誰かの声が聞こえてきた。

だからシーザーは、思わず応じていた。

「いやー！」

そしてその通りになった。

倒れていた吸血鬼が、ほどなくゆらりと起き上がったのだ。全身には銃創がいくつも空き、相応の血が流れている。しかし、それでもなお……。

「フ……フフ、フフフフ……」

吸血鬼は笑っていた。

そして立ち上がると同時に、身体を勢いよくよじって、体内に入り込んでいた弾丸を軒並み外へはじき出してしまう。

地面に落ちた弾丸が、むなしく金属音を響かせる。そしてその頃には、早くも全身の銃創は閉じ始め、流血も止まっていた。その姿から、死はまるで感じられない。

「ば……バケモノだ……！」

まさしく化け物であった。ドイツ軍の誰かの言葉に、吸血鬼はさらに笑いを上げる。

「これが……これが吸血鬼か……！」

シーザーもまた、怪物の実態を初めて目の当たりにして息を呑んでいた。

知識としては知っていた。どういう攻撃が有効で、あちらが習得し得る特殊な攻撃も、しつかり聞いている。だが……やはり、見ると聞くとは大違いであった。

しかし、だからといって戦いを諦めることにはならない。気圧されてはいるものの、及び腰にはなっていない。

目の前で起きた現象から目を背けることなく、状況を把握しよう

努め……そしてふと気づいた。

(……あれだけ弾丸を食らったのに、頭にだけは一発も入っていない？ 何をした?)

「……ディオの失敗は、自分の能力を楽しんだことだった」

だが思考を始めたシーザーをよそに、吸血鬼は早くも傷口がふさがった身体で拳を握り締め、誰にともなくつぶやき小さく空を仰いだ。

「奴は実験し、自分の能力の限界を知りたがった……そこにスキが生まれ、ジョナサンに敗北した」

その言葉に、シーザーは今度こそ驚愕で固まった。

「なんだと？ 貴様ツ、ジョナサン師範の何を知っている!? デイオの部下か!?!」

「ほう？ ジョナサンを師範と……ということは、お前は正式なローマ式波紋道の弟子か。だとすると……もしやお前、シーザー・ツエペリか？」

「……!?!」

突然名前を言い当てられ、シーザーは無意識のうちに身構える。

だが吸血鬼は攻撃をせず、なぜか立ちっぱなしで自嘲気味に笑っていた。

「……やはりそうか。そうか……ツエペリさんの孫か……」

「貴様……ツ、じいさんのことを知っているのか……!?!」

「ああ、知っているとも。恐らくはお前よりもな。……彼は良き兄弟子だった。才能も、人望もあつた……どうやら彼のそれは、確かに孫に受け継がれたようだな。少々……羨ましいものがある」

先ほどまでと異なり、穏やかな表情を見せた吸血鬼は、シーザーを……次いで銃を構えて狙いを付けているドイツ軍人たちを見渡して笑った。

これまたあざ笑うような笑い方ではなく、嬉しそうな……あるいは楽しそうな、そんな笑い方で。

その陰の取れた顔を見たシーザーの脳裏に、あるものが浮かんだ。それは写真だ。それぞれが一人の赤子を抱えた、若き日のジョース

ター夫妻。その傍らに立っていた二人の男の片割れ……今とほぼ同じ衣装を身にまとった、今とほぼ同じ顔立ちの男の姿が脳裏に……。

「まさか……まさかあなたはッ!？」

「ほう、気づいたか。頭もいいようだ……ジョナサンもエリザベスも、良き弟子に恵まれたらしい」

シーザーが思いついた答えを聞かずとも、吸血鬼は肯定して見せた。あり得ないと思ったシーザーに、しかしそれが現実だと突き付けるように。

「私こそチベット式波紋道の継承者、ストレイツオである！」

そうしてようやく名乗った男……ストレイツオのあまりに堂々とした態度に、シーザーは啞然とするしかなかった。

なぜなら彼は……シーザーが敬愛する師匠の一人、リサリサの師匠なのだから。

4. ストレイツオVSシーザー 上

シーザーにとって、ストレイツオという人物は近しい人物ではない。けれども、では遠いかと問われれば彼はノーと答えるだろう。

何せストレイツオという人物は、ジョナサンの戦友だ。ディオとの戦いのあともジョナサンとストレイツオの縁は切れておらず、時折連絡を取り合っていた。

その縁が巡り巡って、リサリサ……エリザベス・ジョースターの波紋の師匠というところまで続くのだから、世の中何が起こるかわからないものだ。

そしてシーザーは、そんなリサリサの弟子の一人。あまり過去のことは語らない彼女だが、師匠であるストレイツオのことはたまに口にしたものである。

だからこそ、シーザーにとってストレイツオは決して遠い人物ではない。直接会ったことはないけれども、イタリアとは別の地域に根差すもう一つの波紋流派の指導者だ。何より、シーザーの祖父ウィル・A・ツエペリの弟子でもある。一定の敬意を持っていた。

だというのに、そのストレイツオが吸血鬼となって今、シーザーの前にいる。彼が受けた衝撃は、並大抵のものではなかった。

「ば、バカな……!! なぜあなたが!! 行方不明になったとは聞いていたが、なぜッ!」

「ふむ? なぜ行方不明になったかまでは聞いていないのか。いいだろう、教えてやろう」

含むように笑いながら、ストレイツオは応じた。視線を固唾を呑んで様子を見守っていたドイツ兵士たちに向けながら。

「四年前のことだ。私はナチスドイツに拉致された」
「な!?!」

だがストレイツオの口から出てきたのは、シーザーにとって信じられないものだった。

「不老不死を望むのは人の常というもの。彼らは波紋を利用しようと目論んだのだ。それから私はベルリンの研究所に幽閉され、波紋の研

究に付き合わされていたのだよ……つい先日、倫理観のない研究者が実験と称して石仮面を使うまでな」

「な……なッ、バカな!」

「真実だ。徹頭徹尾な」

「……ま、マルクツ!」

余裕ある態度を崩さず、揺れることもなく佇むストレイツオの態度に、シーザーはこらえきれず親友のほうへ顔を向けた。

だがそんな彼に返って来たのは、彼と似たような愕然とした表情でひたすらに首を振るマルクの姿。周囲にいるマルクと同僚も似たようなものだ。

「……どうやら末端には知らされていないようだな」

「く……!　だが、仮にそれが真実なら……!　波紋の指導者であるあなたが、俺を攻撃するのはなぜです!?　その必要はないでしょう!」

「なぜ?　これは異なることを」

シーザーの問いに、ストレイツオは鼻で笑った。そして妖しく瞳をぎらつかせる。

「私は言ったはずだぞ。不老不死を望むのは人の常、と」

「ま……まさかッ!」

「私とて人間だったということだ。若い頃は思わなかったが……歳を重ねて老いていけばいくほど、かつて見たデイオの圧倒的なパワーに惹かれていった……若返りたいと思うようになった!　だからこそ……だ、シーザー。だからこそ、シーザー・ツェペリ——」

ごくりと生唾を呑んだシーザーに、ストレイツオははっきりと断言する。

「——石仮面が使われたことは!　私にとってただ幸運以外の何物でもないのだ!」

その宣言に、シーザーは頭を鈍器で殴られたような衝撃を覚えた。だがそれでも揺れる心を懸命に抑えながら、彼は重ねて問う。答えを半ば確信しながら。

「ならば……ならば……なぜあなたはここに……!」

「知れたこと。現代で石仮面のことを知るものは多くない……その一部である波紋使いは、私のために死んでもらわねば困るのだよ。お前たちを抹殺し、私の命を脅かすものはすべて排除せねばな！」

果たして、返答はシーザーの予想した通りのものであった。邪悪な笑みを浮かべての答えに戦慄する。

だが何より、無差別の殺戮を自ら肯定するような物言いに、シーザーは怒りを覚えた。

確かに、望んで吸血鬼化したわけではないのかもしれない。それまでの過程も、同情する。しかし、だとしても。いや、だからこそ。

「だとしたら……」

「……？」

「だとしたら！　かつてあなたがいかに偉大な波紋使いだったとしても……俺はそれをとめねばなるまいッ！　他ならぬ我が祖父、ウィル・A・ツエペリに代わってッ！」

そして啖呵を切ったシーザーは、強大な力を持つ吸血鬼目がけて臆せず攻めかかった。

一見すると愚策に見える動き。だが対するストレイツオは、シーザーの行動に嬉しそうに哄笑した。

「ふふふふははははは！　いいぞ、それでこそツエペリの男だ！……だがこのストレイツオ、容赦せん！」

しかし一転、ギラリと凶相を浮かべると、ためらうことなく破壊の力を解き放った。

「ぬおおおっ!?!」

ストレイツオの両目から高速で発射された体液が、閃光さながら二筋の軌跡を描く。それはいずれも一直線にシーザーの急所を狙っており、彼は急遽身体をねじって回避行動に移った。

そうしてぎりぎりのところで回避に成功したシーザーだったが、完全にはかわしきれず、首の横と肩を切り裂かれてしまう。ついでとばかりにワインボトルも破壊され、彼は武器も失った。

「く……っ、それが顔回りだけ銃撃が入っていなかった理由か！

ジヨナサン師範の兄君を殺害した技と見たッ！」

「いかにも……高圧で体液を発射する、名づけて空裂スベースリパー・ステインギーアイズ眼刺驚！

よくぞかわした！　しかし、しかしだ若きツエペリよ、甘いな！」

「何を……」

「ぎゃあああーっ!!」

「!？」

にじり寄ってくるストレイツオから目を離さず、そろそろと体勢を整えようとしていたシーザーは、問答の途中で後ろから聞こえてきた悲鳴に思わずそちらに目を向けてしまった。

そこには顔に風穴の空いたドイツ兵が二人、血を噴出させながら倒れており、マルクをはじめとした兵士たちが青い顔で支え起こそうとしているところだった。

「……まさか！　今のは俺でなく彼らを狙って!？」

「違うな。お前も、あれらも、両方狙った。どちらに当たってもいいようにな」

「く……っ、なんとということを一！」

「だから甘いと言っているのだ、シーザー・ツエペリ。言っただろう？

このストレイツオ、容赦せんとな！」

(なんとということだ……！　既に彼の中に人としての心は残っていないのか!?　いや……恐るべきは、こうも簡単に人の心を塗り替えてしまふ石仮面か……！)

あざ笑うように、上からものを言うストレイツオに歯噛みするシーザー。

やはり彼らがここに来てしまったことは間違いだったのだろう、と後悔が募る。巻き込むわけにはいかないと決意したにもかかわらず、出てしまった犠牲に彼はもつと強くとめていれど。

だが彼は同時に、なぜ父マリオが家族を捨てる形を取ったのかを、頭ではなく魂で理解した。確かにこんな連中を相手にするとすれば、家族の存在は泣き所になりかねない。

まあ、だからと言って当時の父の選択が正しかったとは思えないのは、シーザーに人生の伴侶がいらないからだろうか。あるいはそれこそ若きと人は言うのかもしれない。

「……マルクツ、みんな！ 急いでここから離れるんだ！ ここは俺がなんとかする、必ず仇は取るッ！」

その若さに任せて、シーザーは声を張り上げた。これ以上ここに波紋を使えない人間がいては、いたずらに被害が増えるばかりだ。

また、自身の力量では、彼らを守りながら一切の犠牲を出さずに終わらせる自信はなかった。負けるとは思わないが、巻き添えになる人間は出るだろうと考えられる程度には、まだシーザーは冷静だったのだ。

「ごめんよシーザー、任せた！」

だから彼は、去っていくマルクたちドイツ兵を守る形で立ちふさがり。そうして見せた構えは、ローマ式波紋道伝統の攻めの型だ。

その意図を察したストレイツォが、再び笑う。

「準備はいいようだな。では死ねい！」

「断るッ！」

かくして始まった二度目の激突は、ストレイツォのスペースリバー・ステインキープアイズ空裂眼刺驚から幕を開けた。的確に急所を狙う二撃がシーザーを襲う。

この場合の急所とは、頭、喉、もしくは肺となる。いずれも言うまでもない急所だが、呼吸によって力を得る波紋使いにとって、喉と肺は特に致命的な急所だ。

しかし空裂眼刺驚はあまりにも速く、見てから回避することスペースリバー・ステインキープアイズは困難だ。ゆえにシーザーは、まず射線から外れることを選んだ。

最悪の急所は、いずれも頭から縦に並んでいる。横に跳べば、一気にそれらから外れるという判断だ。

だがその動き、ストレイツォにはお見通しだった。彼は攻撃と同時に動き始めており、シーザーの逃げる先を完全にふさいでいた。

（やはりこの程度は読まれている！）

しかし、お見通しだったのはシーザーも同様。だから彼はただの横ではなく、前に出ながら横に……すなわち斜め前に跳んでいた。彼はスペースリバー・ステインキープアイズ空裂眼刺驚がマシンガンのような連射はできない技と読み、回避しながらも前に出たのだ。

これでストレイツオまでおよそ十メートル。吸血鬼なら一瞬で詰められる距離だが、波紋戦士とは言え人間のシーザーには簡単にはいかない（できないとは言わない）。

（だからこそ、正念場はここだ！ 次の空裂眼刺驚がどこに来るか、どうかわすかで決まる！）

回避した先の足でさらに地面を蹴り、前に出るシーザー。そこに、「やるなー」

どこか楽しげに、三度目の空裂眼刺驚が放たれる。今度は顔を動かしながら。

すなわち、二つの射線がやや斜めにズレている。このまま何もしなければ、シーザーは眉間と左の肺を撃ち抜かれるだろう。

もちろん、黙ってそんな未来を受け入れる彼ではない。

「秘技……！」

刹那の間に、パシン、と両の手のひらが合わされる。そして手が離れると、そこには透明な膜が展開された！

「ぬう!?」

「シャボンバリアー！」

シーザーの手から現れた膜は、まさにシャボン液の膜であった。だが、こんな土壇場でただのシャボン液を展開するはずがない。

シャボン液は、既にたつぷりと波紋で満たされていた。ゆえに引き伸ばされ膜となったシャボン液は高エネルギーを湛えた攻防一体の障壁となり、ストレイツオの前に立ちはだかつたのである。

また、波紋で満たされたシャボンの壁……バリアーは、シャボンとしての元々の性質を失っていない。

そのため空裂眼刺驚がぶつかった瞬間、波紋が弾ける音を響かせながらシャボンバリアーはたわみ、しかし割れることなく柔らかかくぼんでいく。空裂眼刺驚はその表面を瞬く間に滑つていき、最終的にはストレイツオ目がけて反射されたではないか！

正確な狙いにはならなかったが、必殺の一撃と自認していた技を返されたストレイツオは目を丸くし、けれども慌てることなくゆらりと動いて回避する。

「……驚いたぞ。そのグローブ、シャボン液を仕込んでいるのか？
粋な男よ！」

「まだだ！」

回避を終えたストレイツォがニヤリと笑う。

だがシーザーはそれを意に介することなく、追撃に打って出た。再度手のひらを合わせると、すぐさま前に向ける。すると、そこから大量のシャボン玉が勢いよく斉射された！

「必殺！ シャボンランチャー!!」

大小様々に放たれた無数のシャボン玉は、そのすべてが多量の波紋を宿した特別製だ。もちろん簡単に割れるような代物ではなく、さらに言えば当たれば人間でも吹き飛ぶだけの威力も秘めている。常人であれば気絶の一つもするだろう。

これほどの至近距離から放たれたシャボンランチャーを回避するなど、いかな吸血鬼と言えど不可能だ。

——そのはずだった。

ストレイツォは動じることなく、かすかに煌きながら殺到するシャボン玉を一瞥すると、広げたマフラーで前方をなぎ払った。

「な!? バカな！」

すると波紋入りのシャボン玉は、あっさりと割れてしまった。今度はシーザーが、必殺の一撃を破られた驚愕で愕然とする番だった。

「フッフ、シャボン玉すら武器にするのはいかにもローマ式と言った趣だが、ともかく使いどころは多そうだな。良い技だ……しかし相手が悪い」

そう言つてマフラーを整え直すストレイツォを見て、シーザーは絡線を理解する。

一瞬だが、確かに見えたのだ。マフラーに触れた波紋がかき消えた様が。

そしてその現象を、シーザーは見たことがある。

「そのマフラー……!! リサリサ先生のマフラーと同じ！ サティポロジアビートルの！」

「いかにもその通り。私は四千年の歴史を持つチベット式波紋道の後

継者、ストレイツオだ。波紋のことは長短いずれも熟知している……
知り尽くした上での戦いだ。ディオとは違う」

「く……い！」

波紋が通らないとなると、吸血鬼相手に打てる手段は激減する。それは膂力で劣るシーザーにとって、あまりにも不利だ。

どうすべきか。苦々しく顔を歪めながら、しかしシーザーに「逃げる」という選択肢はなかった。

彼は状況を打開すべく、考えることをやめてはいなかった。

5. ストレイツオVSシーザー 下

そもそもの話だが。シーザーは、彼が指摘した通り波紋が効かない衣料の存在を知っている。なぜなら、師の一人であるリサリサが武器として用いるものこそ、それであるからだ。

これの起源は遠く共和政ローマの時代、地中海沿岸を中心に展開していたルブルム商会が開発したもので、までさかのぼる。神の託宣によつて作られたと言われるこの衣料は、東南アジアに生息するサティポロジアビートルという昆虫の腸の筋を撚り合わせて作られる、大変貴重なものだ。

その特徴は、驚異的な波紋伝導率だ。人体よりも遥かに高い伝導率を誇るために、衣服として身に着けると身体に波紋が流れるより早く波紋を散らしてしまう。つまりは、雷に対するアースのような現象が起こるのだ。

かつてのローマ波紋の戦士たちはこの性質に目をつけ、武器として使い始めた。その伝統を今に受け継ぐリサリサもまた、この衣料から作ったマフラーを武器に使う。波紋を流し、硬化させたマフラーはシーザーのシャボンバリアーと同じく、マフラーとしての性質も併せ持つため攻防一体の武器となるのだ。

そしてそんな師匠を持つために、シーザーは対処法を知っている。正確には、彼女と本気で戦うことになったときはどのような対処すべきかずっと考え続けてきた、と言うべきだが。

ともかく、シーザーはどうすればいいのか、大まかにだが答えを持っている。問題はそれを使うタイミングだ。

「ふんー」

シーザーの機先を制して、ストレイツオが仕掛けてくる。剛腕がうなり、シーザーの肺を一直線に襲う。

これに対してシーザーは、後ろに跳んで回避する。いつでもシャボンバリアーを展開できる体勢でだ。これにより、ストレイツオはスーパーリバー・ステインキープアイズ空裂眼刺驚を撃つわけにはいかなくなる。

しかしシャボンバリアーで防げる範囲はそこまで広くない。せい

ぜいが、シーザーの上半身の一部くらいだ。

ゆえに、ストレイツオの追撃は足払いとなった。鋭い蹴りがシーザーの足元をすくう。

文字通り石畳に刺さるほどの勢いで放たれたそれを、再び小さな跳躍で避けたシーザーは、避けながらもシャボンバリアアの体勢から流れるようにランチャーへ移行する。先程は一旦消したが、本来バリアーはそのままシャボン玉の弾幕を放つ砲台になるのだ。そうして無数のシャボン玉が、一気にストレイツオへ襲い掛かる。

だがシャボンランチャーは、足払いによつて巻き上げられた石畳の破片で蹴散らされてしまった。破壊されてはいないが、完全に軌道が逸れている。

このため、シーザーとストレイツオの間に空白ができてしまった。そしてこれを見逃すストレイツオではない……

「……ち、やるな。破片程度で払えるくらいの弾幕にとどめたのはそういうことか」

が、彼は空裂眼刺驚を撃たなかった。撃とうとしたが、シャボンランチャーを放つてなお残っていたシャボンバリアーを見て、キャンセルしたのだ。

ならばと殴りにかかるが、わずかな間のうちに用意された火炎瓶を投げつけられ、目を見張る。

「小癩な！」

ここで炎を繰り出してきた意味を正確に悟ったストレイツオは、的確に火炎瓶を打ち払った。

それを阻止しようとシーザーはシャボンランチャーで追撃するが、健闘虚しく火炎瓶は離れた場所に落ちて割れた。闇の中に一つ、炎が燃え上がる。しかしそれは、夜にあつてはいかにも頼りない。

要するにマフラーを燃やして無効化しつつ、あわよくばストレイツオの身体も焼いてその再生力を無駄遣いさせようとしたシーザーの思惑は、露と消えたのである。思わず舌打ちが漏れる。

しかしこれも想定内だ。なぜなら、火炎瓶を払う一手は間違いなく、ストレイツオの行動をワンテンポ遅らせたのだから。

その隙間を縫い、遅れて放たれたストレイツオの拳をかくぐつたシーザーは、波紋に満ちた拳をストレイツオの胴体へと思いつき叩きつける。

「これでどうだ！ オーバードライブ 波紋疾走！」

だが、

「狙いはよかったぞ！ 狙いはな！」

「くっ、マフラーだけでなくその服までも!？」

ストレイツオの衣服はマフラー同様、波紋を容赦なく散らしてしまった。結果、シーザーが与えることができたのは、ただのパンチになっってしまう。

そしてそんなものが、吸血鬼に効くはずもない。

「覚えておくといい！ サティポロジアビートルの原産地は東南アジア……そして私はチベット式波紋道の継承者ストレイツオ！ ローマ式波紋道と違って入手は容易いのだよ！」

ストレイツオが邪悪な笑みを浮かべ、勝ち誇る。

「そしてこの距離！ もはやかわせぬぞシーザー！ 喰らえい！」

「がはあ……っ！」

遂にストレイツオの拳が、シーザーの身体を完全にとらえた。とつさに身をねじって左腕を盾にしたが、激しい打撃音と骨折音と共にシーザーの身体は大きく飛ばされ、あろうことか炎へ向かって投げ出される。先ほど、シーザー自身が作り出した炎の中にだ。

彼は一応受け身を取ったが、それでも吸血鬼の一撃は間違いなくその身体機能を麻痺させた。おまけに左腕は、既に一度盾にしている。完治まではしていなかった左腕は、これで当分動かさないだろう。少なくともこの戦いが終わるまでは、満足に動かせるとは思えない。

そしてこれに伴う全身を襲う激痛と突然の大量出血が、シーザーの身を苛む。簡単には炎の中から脱出できそうになかった。

「うぐ……く、うう……！」

そうしてあがくシーザーを、ストレイツオはくつくつと笑いながら見下している。

「このストレイツオ相手にお前はよく戦った……お前が優れた波紋戦

士であることは私が保証しよう」

「ぐ……！」

「だが、まだ青い。未熟だ！ ……とはいえ、だからこそ今ここでお前を始末できる幸運に感謝せねばな。お前が私と同じ歳になったとき、どれほどの戦士になっているかは私でも想像できん」

ここでようやく、シーザーは炎から抜け出ることができた。ランチャー用に身体のおちこちに仕込んだシャボン液のおかげか、ほとんど火傷にはなっていない。それでも炎の熱を完全に防げたわけではない。満身創痍だった。

「ではこれで終わりとしよう……さらばだ！」

だが、ストレイツオがとどめを刺そうと大きく瞠目した瞬間。

突如として、甲高い音と共に真つ赤な光線が槍衾のごとくストレイツオに襲いかかった。

スベリースリバー・ステインギアアイズ

空 裂 眼 刺 驚とは異なる、真正銘の光線である。いかに人間より優れた身体能力を持つと言えども、光速で放たれたそれはさすがに回避できず、ストレイツオは正面からほぼまともに受けてしまう。

「MMMMMMOOHHHH!!」

そしてそのすべてが、か細くも確かな破壊力を持っていた。ストレイツオの身体は未舗装の路上さながらに凸凹となり、しかもそのすべてが治る気配を見せない。

これにはたまらず、苦悶に身体を震わせるストレイツオ。何が起きたかわからず、痛みを堪えながら光線が放たれたほうへ憎々しく目を向ける。

そこにあるのは、小さな炎だ。先ほどシーザーが投げた火炎瓶の成れの果て。波紋の媒介となる植物油で作られたそれは、小さくも今なお燃え続けている。

そんな炎の、傍らに。子供の手のひらに収まるくらいの小さい石が転がっているのを、遅まきながらストレイツオは気がついた。

石は、赤かった。炎が放つ赤々とした光とは関係なく、元より赤く。透き通った佇まいはむしろ宝石のそれ。

そんな石に、炎の光が今も少しずつ吸い込まれていて――

「——バカな！ エイジヤの赤石だと!? なぜこんなところに！」

ストレイツオがその正体に気がついた瞬間、石は——エイジヤの赤石は、再度赤い光線を乱射した。

慌てて地面に身体を委ね、転がったストレイツオだったが、それでもまだ遅かった。彼の背中を、いくつかの光が引き裂いていく。

「ぐおおおおお!!」

「あの、お調子モンの言葉を引用するのは……ちよいとばかりシヤクだが……!」

それをよそに、シーザーが呼吸を整えながら立ち上がる。赤石を拾い上げながらだ。

「……相手が勝ち誇ったとき、そいつは既に敗北している……ッ、らしいぜ」

シーザーはそう言って、ニヤリと笑った。

そう、これが彼の策だった。火炎瓶も、腹への波紋疾走も、すべてはここに繋げるための布石である。

いや、もちろんここまで来る前の段階で有効打を与えられればなおよかったのだが、念には念を入れたというわけだ。そしてその判断は正しかった。

……本来ならあり得ないことだが。この世界では、エイジヤの赤石の価値はそこまで高くない。もちろん、下手な宝石よりよほど高価なものであることは間違いないし、シーザーが使った石は小さい上にスーパーエイジヤの足元にも及ばない低品質なものだ。

それでもアルフィーが起こした蝶の羽ばたきは、二千年の間に巨大な波紋となり、大きな変化をもたらしていた。すなわちルブルム商会、ひいてはルベルクラク、さらにはルージュフィッシューによって、赤石は幻の宝石ではなく、実在する宝石としてヨーロッパ市場ならば多少なりとも流通しているのである。

またルベルクラクが溜め込んでいた赤石の多くは、目覚めたアルフィーからジョナサンを経て、イタリアの波紋戦士たちの手に渡った。波紋増幅器としての使い方でもある。

シーザーが持っていたのはそのうちの一つでしかない。なんなら

使い捨てにしてもいいくらいのものだ。

つまり、もはや今のローマ式波紋道において、エイジャの赤石は切り札ではあるものの、出し惜しむほどのものではなくなっていたのである。

だからこそシーザーは今この時、適切なタイミングで切り札を切ることができた。炎の光であつても増幅し、天然のレーザーと化す赤石を使い、ストレイツオの対波紋装備を貫通させたのだ。

もつとも、品質の問題で光線は多方向へバラバラに乱射されており、ゆえに半分近くはストレイツオとは関係ないほうへ飛んだが。この辺りは今後の課題であろう。

「覚悟はいいか、ストレイツオ……!」

「ぐ、ぬ、くうううおおおー!」

至近まで詰め寄ったシーザーに、ストレイツオが悪あがきのスベスリバー・ステインキープアイズ
空 裂 眼 刺 驚 を 放 つ。

だが遂に視線から射線を見切ったシーザーは、最低限の動きで攻撃を潜り抜ける。

握り込んだその右手には、波紋の輝き。

黄金ではない。握り込んだ赤石によつて、増幅された赤い輝きと混ざり合い、橙へと変わった光。

それすなわち――

「――茜色サンセットオレンジオーバードライヴの波紋疾走ツツ!!」

まさに日没を思わせる輝きの奔流が、ストレイツオの腹へ……今度こそ散らされないようレーザーが空けた服の穴から、体内へ注ぎ込まれていった。

波紋の音が鳴り響く。まるで分厚い鉄の板に銃弾が当たったような、独特の音が夜の闇の中に響き渡る。

間違いなく致命の一撃であつた。ストレイツオの身体は大きく吹き飛び、抵抗なく石畳を転がっていく。

彼の身体はやがてとまったが、身体の崩壊はとまらない。ストレイツオは、これから死ぬのだ。

「く、くく、ふ、ふふふふ……見事……実に、見事だ、シーザー……」

ツエペリの波紋、確かに……見せてもらったぞ……」

だからこれは、断末魔の悲鳴のようなものだ。死にゆく悪鬼の、末期の恨み節。

……そう、思っていたのに。

「……ツ、な!? そ、それは、まさか……!?」

「最期の……我が生涯の最期を飾るに、相応しい……戦いだつた……。これで、安心して、死ぬことができる……」

「そんな！ なぜ！ なぜ今ツ！ このタイミングでツ！」

ニヤリと、ストレイツオが笑う。

嘲笑ではない。憐憫でもない。満足と、達成感に満ちた……言うなれば、希望にあふれた顔で……その口から、独特の呼吸音が響いてくる。

——コオオオオ……と。その意味を、シーザーがわからないはずもなく。

「……なぜ！ なぜここで波紋の呼吸をツストレイツオオオーツツ!!」

そう、ストレイツオは波紋の呼吸をしていた。太陽と同じエネルギーを生む、波紋の呼吸を。

吸血鬼がそんなことをすれば、どうなるかなど深く考えるまでもない。体内で生成された波紋のエネルギーによって、内部から死ぬに決まっている。

実際、ストレイツオの身体は体内から崩壊が進んでいた。シーザーオーバードライブの波紋疾走を受けた腹部より、体内から進む崩壊のほうが目に見えて早かった。

「ふ、フフフ……この、ストレイツオ……痩せても、枯れても……チベット式波紋道の継承者……！ 犬死は、せぬ……波紋のなんたるかを解さぬ連中の、虜囚としてではなく……！ 戦士として……！ 後世に続く、若き戦士たちの、礎として……誇りある死を……！」

「す……ストレイツオッ！ まさか、俺に実戦を経験させるために……!?」

「いいや……私は今宵、嘘は、一つも言っていない……そう、一つも

……一つも、だ……シーザー・ツエペリ……私は……邪悪な、力で……
若返った、ことは……何も後悔していないぞ……！」

「バカな！ ならば……ならばその顔は、一体なんだと言うんだツ!?」
慌ててシーザーが駆け寄る。

だが、時は既に遅い。

「フフフ……。シーザー……ツエペリ……我が、兄弟子の……孫よ
……。世界を……柱の、男たちを……任せたぞ……！」

それだけを言い遺して——穏やかに。

どこまでも凧いだ、透明な笑みを見せたストレイツオは、塵となつ
た。

「う……うおおおー!!」

風に乗って、いずこかへ消えていくストレイツオの面影。その顔に
向けて、シーザーは吼えた。

そんな彼の姿を、夜空の彼方から月だけが見守っていた。

6. テノチティトランのジョセフ・ジョースター 上

十一月の半ば。わたしとジョナサンは無事にアメリカに到着した。入った港は、もちろんニューヨーク港。接岸少し前に自由の女神像の前を横切ったときは、思わずテンションが上がって写真を撮りまくってしまったよね。キャツスル・クリントン（この時代は名前も用途も違うけど）のときも同じくだよ。

歴史で言えばそこまで古いものじゃあない。アメリカ自体が歴史の浅い国だから、そこは仕方ないところ。

けれど、それが貴賤を決めることにはまったくならない。そんなことには関係なく、アメリカの歴史を眺めてきたものたちが立派な文化遺産であることは疑いの余地がないんだからね。

だからこそ、わたしはテンションを上げるわけだよ！ 二十一世紀にも残るこの文化遺産を、この時代で見られるなんて心どころか身体だってびよんびよんするに決まってるよ！

……おほん。

そこはともかく、ね。わたしたちは無事にアメリカに着いたわけだよ。入国審査でも特に何の問題もなく、さりと終わった。

そうして審査を受けた場所から外にでたところで、

「あなた」

「ジョースターさんッ！」

二人の老人がジョナサンを出迎えに来ていた。

方や淑女の一つの完成形を体現するかのようなおばあさん。方やカタギとは思えない顔つきのおじいさん。

つまり、エリナさんとスツピーだ！

「エリナ！ それにスピードワゴンも！」

そしてジョナサンは、歩み寄ってきたエリナさんに同じく歩み寄り、優しく抱きしめる。そんな二人を、ニッコニコの笑顔で後ろから見守るスツピーの図……。

うおおおお、尊い……！ ジョナサンが生きてて、エリナさんとうして二十世紀の街で向かい合う構図の、なんと尊いことか……！

このまま尊みで死ぬる……！

うう、よかったなあ、本当によかったなあ……！ 語彙力も死ぬ……死んだ……。

いや、ぶつちやけジョナサンの生存にわたしはまったく関与してないんだけどさ。それはそれだよ。原作で死んでいたはずの人物が生存している世界……きつとわたしはこのために転生したんだなって……！

……ただ、そんな光景を離れた物陰から顔だけ出して、ぐすぐす泣きながら眺めてるわたしの図は不審者以外の何物でもない。しようがないじゃない、だって尊いんだもん。

あとはあれだよ、エリナさんやスツピーとはなるべく顔を合わせないで行くつもりだったからさ。表向きの立場はあるから問題ないだろうけど、戦闘潮流が一段落するまでは念のため……ね。

だから今出るのはちよつと、予定から外れるわけだよ。だからこの状態は仕方ないんだよ……うん……。

うん、だからサチさんもレナータちゃんも、今のわたしに無理に信仰を見出そうとしなくていいから……素直にドン引きしてくれていいから……。

「……あれ？　ところでエリナ、ジョセフはどうしたんだい？」

熱い抱擁を終えたジョナサンが、ふと声を上げた。

……言われてみれば、ジョセフだけ見当たらない。何かあったのかな。

「それなんです……あの子ったら、スピードワゴンさんが拉致されたという話を聞いて飛び出して行ってしまったんです」

……は？

「え？　いや、でもスピードワゴンはどこに……」

「そうなんですよジョースターさん。わたしはそのとき、ちょうどサントナ王国に商談があつて出張してたんですがね……どうも妙な行き違いがあつたみたいなんですよ」

「……………」

「……………」

わたしとジョナサンは、同時にフリーズした。

これは……きな臭くなってきたぞ……!?

急いで打ち合わせ再開しなきゃ……!

神聖サンタナ王国の首都、テノチティトラン。そのヨアリ王宮のゲートルームで、一人の青年がくつろいでいた。

彼の名前はジョセフ・ジョースター。ジョナサンの孫であり、ジョースターの血を継ぐ者である。

ただし、彼は連れてこられたと言っても拘束されてはいない。確かにスモーカーを人質に取られたし、スピードワゴンの無理やり拘束されている写真も見せられた。無理やり連行されてきたことは間違いない。

しかしここに着いてからはただ部屋から出られないだけで、多少窮屈ではあつても不自由はなかった。

ジョセフとしては、こんなところに連れてきやがってふざけんなどいう気持ちだ。おまけにスピードワゴンの写真は、財団が関係している遊園地の視察に赴いた際、職員によって無理やり絶叫マシンへ乗せられているシーンのものだったので、なおのこと。

とはいえ家族や友人は約束通り無事らしいので、じゃあ気にしても仕方ないかと開き直っている。ゆえにくつろぎながら、厳格な祖母の目のないところでハメでも外してやる所存であった。ついでにこの国の財政を少しでも傾けてやろう、という魂胆で。

具体的には、高級な飲食や暇つぶしのコミックなどを要求しまくりに、さながら物語の中の貴族のような豪遊を楽しんでいた。神が作つたとされる調味料を用いた王国の伝統料理はかなりウマかったし、換骨奪胎されてはいるものの、サンタナ神話のコミック（絵本に近い体裁ではあったが）はなかなか面白く、飽きが来ない。この男、まるで緊張感がなかった。

要求される側としてはたまったものではないのだが、実のところ彼

の表向きの待遇は国賓なので、いかんともしがたかったりする。

と、そんなとき、部屋の扉がノックされた。

「へいへい、開いてますよーっと」

ジョセフはそれに、ソファに寝転がってコミックを読みながら応じた。彼としては、無理やり連れてきたやつに払う礼儀なんてねーよという心境である。

だが、部屋に入ってきた——そしてくつろぎまくっているジョセフを見て思わず固まった——男を見て、ジョセフは「おや」と眉を上げた。

なぜなら、入ってきた男はコーカソイドだったからだ。サンタナ王国はモンゴロイドの国だ。もちろん、要人はすべてモンゴロイドが占めている。ならばこの男は一体？

「あ、あー、そのままで構わんよ。そのままで」

一度咳払いをして口を開いた男。その言葉は、ドイツ訛りの英語だった。

「……へえ？ ナチスのお偉いさんがこんなところでなーにしてんのかなア？」

それに少々興味をそそられたジョセフは、コミックから目を外して男に顔を向けた。ただし、ニヤニヤと小馬鹿にした笑みを浮かべてだ。

男は苦い顔をしたが、それでもジョセフに言い募ることはなく、マナーのお手本通りにジョセフの対面に腰掛けた。

「まずは自己紹介しておこう。私はベルンハルト・レーデラー。ヒトラー総統の命を受け、こちらに派遣された特務大使だ」

「ほーう？」

隠さないんだな、と内心でつぶやくジョセフ。

しかしそれだけで他にリアクションはしない。名乗りに応じる義理は感じていないのだ。敬愛する祖父母の教えとて、従えないときはある。

「現在、我々ドイツ軍はとある任務を帯びている」

「ハン、どーせ軍事同盟だろ？ ドイツが戦争したがってるって話は

ちらほら聞こえてくるしなア」

「それも間違いではない。しかし最大の目的は……これだ」

だが結構呑気していたジョセフも、ベルンハルトが胸元から石仮面を取り出したのを見るとさすがにぎよつとして身体を起こした。

「てめー、それ……！」

「石仮面。すなわち永遠の命だ。総統閣下の悲願はその先にある」

「ふぎけんじゃあねー！ お前、それがどんなモンか知ってて言ってるんだろーな!？」

「わかっているとも。これは恐ろしい道具だ……」

「……!？」

そして彼は、ベルンハルトから無抵抗に石仮面を取り上げることができたことに、さらにぎよつとする。

「二週間ほど前のことだ……ベルリンで石仮面と波紋について研究していた施設が壊滅した。所属していた人員がほとんど皆殺しにされたのだ。彼らが試しに作った吸血鬼によってな」

「てめー……！」

「いや、いい、言わんでくれ。わかっている。あれは完全に、先走った研究者の暴走だった。総統閣下はもちろん、主だったものはみなまだ早いと言っていたのだがな……。案の定、代償は大きかったそうだが……それほどのものなのだ、吸血鬼は」

「その吸血鬼はどーしたんだ、え？」

「偶然……吸血鬼と行き合った波紋戦士が倒してくれた。ジョセフ・ジョースター、お前も知っている男だよ」

「俺も……？ まさか……シーザーの野郎じゃあねーだろうな？」

「……それはともかく、我々は知識の上でなく、本当の意味であれを正しく知ったのだ。あれは制御できるものではない。少なくとも私はそう思った」

そこでベルンハルトは、深いため息をついてうなだれた。

彼の様子に、さすがのジョセフも少し同情気味に顔を背ける。

「わかりやあいーんだよ、わかりやあ！ こんなのはよーッ、ろくなもんじゃあねーんだ！ ケツ」

「その通りだ……ましてや、それを作った神などどうにかなるはずもない……」

「……は？」

ジョセフはぼかんとした。絶句こそしなかったが、顔は完全に呆けていた。そうするしかなかった。

この男は今、なんと言った？　神？　石仮面を作っただと？　それを、なんだった？

「君の祖父から聞いていないか？　石仮面を作った存在。太古の昔から生き続ける超生命のことを」

知っている。聞かされていた。アメリカに引越す直前に、一人前になったからと教えられたのだ。

だからこそ、

「……オイオイオイオイ、オイオイオイオイ！　ウソだろツ!?　マジかツ!?　てめーらマジなのか!?!」

ジョセフは信じられないとばかりに声を張り上げ、勢いよくテーブルに両の手のひらを叩きつけた。バシンと大きな音が鳴る。

「てめーらツ！　柱の男たちをなんとかしようって言うてんのか!?!　波紋もなしで!?!　頭パープリンなのかアアーツツ!?!」

恫喝も同然のジョセフに、しかし対するベルンハルトはうなだれたまま、

「ハハ……それどころか、なんとかした上で、その超寿命と知識の秘密を手に入れる気満々なだからある意味では大人物だよ、この国の国王陛下はね……」

そう返してきたものだから、ジョセフは今度こそ絶句するのだった……。

7. テノチティトランのジヨセフ・ジョースター 中

ベルンハルトはそのまま淡々と語り始めた。

「……我々が総統閣下から受けた命令は、この国に協力してこの地に眠る柱の男……サンタナの解析と殺害の遂行だ」

「……マジにマジなんだな。頭どーかしてるぜッ」

「否定はできんが、連中を放っておいたらどうなるかは、君たちのほうが詳しいだろう？ 我々は人類のために動いているのだッ、ということとはわかっていただきたい」

それを言われると、ジヨセフも口をつぐむしかなかった。まさにその通りだったからだ。長年連中を研究している祖父ジョンナサンは、基本的に柱の一族とは分かり合えないと言っていた。

だが黙らされるのは、なんだか負けた気がしたジヨセフ。彼は一瞬考えて、少し別件で切り返してみることにした。

「柱の男たち、つてえことは、ローマの地下でこそそそやってたのはてめーらか」

「その通りだ。我々は既に、ローマの地下で三体の柱の男を発見している。サンタナも合わせて全部で四体。総統閣下はそのすべてをつまびらかにし、石仮面の上にある不老不死を手に入れんとされたが……それに待ったをかけたのが、君の祖父が書いた論文だった」

「おじいちゃんのオ？」

「そうだ。世間には未発表だった彼の論文には、吸血鬼や石仮面について色々と書いてあったのだよ。だから以前彼を我々の研究所に招いたときに詳細をお聞かせいただきたかったのだが……残念ながらほとんど得られたものはなかったよ」

「てめーふざけんなよ!？」

太々しいベルンハルトの発言に、ジヨセフの手が出た。野太い腕が素早く動き、ベルンハルトの胸元をつかんで手繰り寄せる。

「あれはてめーらがおじいちゃんを拉致監禁したんじゃあねーかッ！

盗人猛々しいとはこのことだぜーッ!!」

「ぐ……っ、く、き、気持ちはわかるがね……この件に、関しては……

私からはそう言うしかないのだよ……」

顔をしかめながら、ベルンハルトはジョセフの腕を何度も叩く。

あまりにも弱い弱い反応に、ジョセフは弱い者いじめをしているような気分になって、ふてくされながらもベルンハルトを開放した。突き飛ばすようにはあつたが。

ソファに背中から倒れ込む形になったベルンハルトは、少しの間せき込んで呼吸を整えていた。が、すぐに気を取り直すと、再びジョセフに正面から向き合った。

「ともかくそういうわけで……我々はジョナサン氏の論文からで柱の男たちの素性や吸血鬼の性質を、わずかだが理解した。その手の負えなさもだ。だから慎重にやっていたのだが……ちようどこちらの陛下がたが、その気になっているということだったのでね。手を貸すと持ち掛けたわけだ」

「……フン、それで殺しに来たってか」

「その通り。我々としてはまずサンタナを解析し、他の柱の男との戦いに活かそうという魂胆だ。三体同時よりは一体相手のほうができることも多いだろう、というわけだよ。もちろん、不老不死を諦めたわけではないがね。今のところ、メインは解析のほうさ」

だが、とそこでベルンハルトは言葉を切った。そのまましばし黙り込む。

やけに沈黙するな、とジョセフは思ったが、ちらと目を向けた先のベルンハルトは、思い出したくないものを脳裏に思い浮かべているのか、顔色が悪い。

それでも彼に遠慮するジョセフではないので、「さつきと話せよこのタコが」と無慈悲に切って捨てたが。

「……目的が一致したのだ、サンタナ王国とは。もちろん、最終的に目指すところは少々違うが」

「結局のところ私欲だろうーに、なーに言っただか……」

「見解の相違だな。ともかく話を続けるぞ。」

今この国の主流は、復活を間近に控えたサンタナを殺して人の世を築き上げるという現国王派だ。彼は本気でサンタナを殺すつもりで

いるぞ。殺し、その首を民衆の前で掲げて見せることで、時代は変わったと思わせたいようだ……不老不死を解析し、その成果までひっさげていけば民衆は諸手を上げて喜ぶかもな……」

「俺が言うのもなんだけどよー……その王サマとんでもなく不敬なヤローだよな。よくクーデター起こされねーな？」

「さて、そこらの詳細は知らない。だがともかく、この国はそういう潮目になっている。だからこそ今後を見据え協力関係をより強固にする意味も込めて、私や技官を中心とした部隊が派遣されたのだ。」

まあ、情報の対価として派遣されている部隊のほうは場合によつては殺されることも任務に含んでいるのだが……おっと、これは言つてはいけない情報だったな」

悪い顔色のまま、薄ら笑いを浮かべたベルンハルトにジョセフは今まで以上に顔をしかめる。

聡い彼は、ベルンハルトの意図が理解できたのだ。できてしまった。

だからこそジョセフは、ベルンハルトに嫌悪感を募らせる。もちろん、石仮面などの情報の対価として人の命を簡単に差し出せるヒトラーのほうに都合は上だが……それでも、機密情報をあえて部外者に漏らし、協力を引き出そうするベルンハルトにも賛同はできない。

つまりベルンハルトは理解しているのだ。基本的に軽薄で、ノリの軽いお調子者のジョセフの心根にあるものを。理解した上で、ジョセフを引きずり込もうとしている。

だからこそ、ジョセフはここから話される内容に、されるだろう依頼に、否と言えないと理解してしまった。なぜならジョセフが否と言えば、恐らくこのベルンハルト以外のドイツ軍兵士たちは全滅するだろうから。

軍事的定義上の全滅ではない。文字通りの全滅だ。何も知らないまま、祖国のため人類のためと思つて働く善良な人たちが、サンタナか吸血鬼かはわからないが、ともかくそうした化外の連中の餌食となる。それはいくらなんでも許せない。

事実かどうかはわからない。ただのハツタリかもしれない。だが

事実であればこの推測は確実に現実のものとなるし、そもそも事実を確認できない時点でジョセフには一つしか選ぶ道がなかった。

そんなジョセフの気づきを見抜いて、ベルンハルトは言葉が続ける。してやったりという表情を、思い出す恐怖へのそれに溶け込ませながら。

「……サンタナは、いまだ眠りに就いている。だが、それでも我々はあれを殺せていない。王国はもちろん、我がドイツも多くの兵器を投入したが、できなかったのだ……」

ベルンハルトは、きつとその光景を生涯忘れないだろう。

ダイナマイトを設置しようと、石像化していたサンタナに触れた工兵たちが文字通り吸収された様子を。吸収されながら、恐怖に歪めた顔を隠そうともせず悲鳴と嗚咽を漏らす彼らの姿を。

無数の弾丸を撃ち込まれたにも関わらず、弾丸のほうに負けて弾かれた様子を。至近距離の爆発を受けてもなお、破壊されなかった様子を。

そして、その際に出たかすかな破片たちですら、無差別に周囲の人間の血肉をむさぼろうとした様子を。用が済んだあと、それらの破片が本体に吸い寄せられるかのように戻っていき、何事もなかったかのように本体が修復された様子を……。

「……眠っているサンタナに手を出しただけで、我々は十七名の兵士を失った。ならばあれが目覚めたとき、どれほどの被害が出るか想像もつかない……」

「……………」

その語りは、さすがのジョセフも絶句するしかなかった。

シーザーの父、マリオがローマの柱の男に取り込まれて死にかけて顛末は聞いている。それでも、ただ石像化して眠っているだけの古代人など、やりようはいくらでもあると思っていたのだが……柱の男とこののはもつととんでもない存在だということは正確には理解できていなかった。

(なるほど、あのおじいちゃんが最大限に警戒するわけだぜ……)

ジョセフが知る限り、この世界で最強の生き物は間違いなく祖父

ジヨナサンである。機関車どころか、戦車にたとえてもなお過言にはならない祖父だと思っているし、その山のような雄々しい立ち姿に、背中に、密かに憧れ尊敬している。

そんなジヨナサンが、柱の男に対しては過剰なほどに警戒を見せるのだ。

いわく、彼らは吸血鬼と同じく太陽光に弱いが、浴びても死なず石化するだけで生き延びる。

いわく、彼らは全身で生き物を捕食する。石化していても捕食する。波紋が使えないものは、触れるだけで死ぬ。

いわく、彼らはそれぞれに固有の能力を持っている。波紋を持っていても、それに触れることなく即死の反撃が可能な技がある。

いわく、彼らの身体は見た目通りに稼働しない。手首を百八十度以上回転させられるなど、関節はあつてないようなもの。

いわく、彼らの身体能力は吸血鬼を凌駕する。パンチの数発で家を破壊できるのが吸血鬼なら、彼らはパンチ一発で家を破壊できる。

いわく……。

ジョセフはそうした警告を、祖父がちよいとばかりフカしているのではと実はちよっぴり思っていたのだが、どうやらほぼ事実らしい。むしろ、まだ他にもとんでもないものを隠しているのではないかと警戒を強めざるを得なかった。

「今の人類なら柱の男も殺せると踏んでいた国王陛下も、これには尻込みしたようだよ。だがもはや後には引けぬ。慌てて別のアプローチを探し始めた」

「……大丈夫かよ、その王さまは。サンタナがいなくつても普通に滅びそうじゃあねーか、この国？」

「ハハ……それは言わないお約束だよ。……まあともあれそういうわけで、君に白羽の矢が立ったわけだ。ジョセフ・ジョースター。ストレイツオから聞いて知っている……君は現代に生き残った波紋使いの中でも、突出して優秀な戦士だと。だから、君の力を借りたかったのだ。……アメリカでは、強引なことをしてすまなかつたとは思っている。だが、どうしても君の力が必要なのだ」

その前で、ベルンハルトは躊躇なく頭を下げてきた。

誠意は感じる態度……だが、それでもジョセフはその程度にしか彼を思えなかった。

「てめー、やっぱり頭がパープリンだな？ ふざけんじゃあねーツ、なんで俺なんだ？ ストレイツオさんから話を聞いたってんなら、知ってるはずだぜ！ 最強の波紋戦士は俺じゃあないツ、てことをな！」だから、再度ベルンハルトの胸倉をつかんで引き寄せた。今の己にできる最大の威圧を視線に込めて、至近距離で睨みつけてやる。

それでも、ベルンハルトが怯えることはなかった。彼が彼なりに、国に命を捧げる覚悟のできた政府高官だから、というのもあるだろうが……恐らく、ジョセフがすごい様よりもっと恐ろしいものを知ってしまったから、というほうが大きいのだろう。

彼は笑った。口元だけで、にやりと。

「もちろん……かの御仁を御せる自信がまったくなかったからだから……。だがまだ十代の君なら……と、思った……の、だが……」

そして出てきた言葉に、今度こそジョセフはキレた。

歴戦の勇者であるジョナサンを御せる自信がない、など当たり前だ。そんなことができる人間など、この世にはいない！（とジョセフは信じて疑わない）

だが、それとこれとは話が別だ。

祖父が無理なら、代わりに。経験豊富な戦士が無理なら、代わりに。十代の青二才なら、御せる。そう思っている傲慢。何より、その程度の人間だと思われている、ということ自体が。

ジョセフの堪忍袋の緒を、予備まで含めてすべてまとめて引きちぎった。

「波紋疾走ウーーツ!!」

次の瞬間、黄金の輝きを宿した強烈な拳のラッシュが、ベルンハルトの全身に叩き込まれた。

ただでさえ体格のいいジョセフのパンチに、波紋疾走オーバードライヴが乗っているのだ。ベルンハルトは抵抗もできず、凄まじい衝撃に打ちのめされた。それだけにとどまらず、衝撃をこらえきれなかった身体は大きく

投げ出され、壁に激突する。

ずるり、と床に落ちた彼の下にのしのと歩み寄ったジョセフは、鋭い視線はそのままにしゃがみ込み、もう一度その胸倉をつかんで顔を引き寄せた。

「それはこれからためーがする話を受ける代金の前金ってやつだぜーッ、おっさん！」

あまりにも物騒な物言い、しかし死にかけているベルンハルトはろくに返すことができない。血反吐を吐き、弱弱しく頷くことしか。

だが、どうだろう。そうこうしているうちに、彼の身体はどんどん治癒していくではないか！

「今の波紋オーバードライブ疾走に使った波紋は全部治すために必要なところにしか流してねーし、そのために調整した特別製だ……死ぬくらいクソ痛えー思いをした直後にキレーサツパリ治る、おじいちゃんもできねー俺だけの秘技だぜ……。あんだだけコケにされてもちやあんと五体満足に戻してやるんだから、俺ってば優しいなあ〜、そう思わねーかア〜？」

なおこの技、学校で陰湿ないじめをしていたやつにキレて制裁してやったら投獄される羽目になったジョセフが、証拠を残さないと制裁を加えるためにはどうするか悩んだ結果生まれた技だったりする。それだけががんばることになった理由が、やらかした際に毎行われるジョナサンのシゴキを受けたくなかったから、というのも併せて秘密だ。

この技があつたため、実はこの世界線のジョセフは四回しか投獄されていいない。放校処分も受けていなかったりする。アルフィーのバタフライエフエクトは様々なところに及んでいるのであった。

それはともかく。

ジョセフがすごんでいるうちにもベルンハルトは元通りになっていき、半ば呆けながらも普通に立ち上がれるまでに回復する。

そんな彼に改めて睨みながら、ジョセフは最後のつもりで問いかける。

「で。結局ためーはどうしたいんだよ、おっさん」

「……波紋の力を借りたい。サンタナを、君の力で打倒してほしい。これはドイツと王国、双方からの依頼だ」

完全に予想通りの答えにジョセフは鼻を鳴らして、けれど渋々首を縦に振った。

「やるだけやってみるけどよぉ……あのおじいちゃんが最大限警戒する相手だ、どうなっても知らねーからなッ！ クソがッ！」

8. テノチティトランのジョセフ・ジョースター 下

「あ~~~~、ちくしょオオー！ ふぎけやがってあんニャロー!!」
ベルンハルトが退室し、再び一人となったジョセフはソファの上に座り、膝を抱えるような姿勢で頭を抱えていた。

「そりゃあ俺は免許皆伝もらってるがよオオ~~~~！ だからって俺一人で柱の男をブツ倒せなんて、無茶振りつてもんだぜーッ！ せめてシーザーがいるならまだしもよーッ！」

そして愚痴を吐き続けていた。

元よりジョセフは、努力や頑張るということが好きではない。本来の世界線のように一番嫌いとはまでは言わないが、一番でないだけで嫌いなものは嫌いなのである。

ついでに言えば、面倒ごとを背負いこんでそのうえで頑張るなど、なおのこと遠慮願いたいというのが本音だった。

しかし彼があえて騒ぐような真似をするのは、下手に考え込んでも暗くなるだけだという考えがあつてのことでもある。

ふさぎ込むことはいつでも、誰でもできることだから。ならば自分は、そんなときでもなるべく面白おかしく、賑やかに。

彼の中では、お調子者であることと真摯であることは両立することなのだ。

「わかってるぜ……ここで俺がふんばらねーと、あいつらどころかこの国の人たちまで危ねーってことはわかってる……だから俺がやらねーといけねーってことはよー……！」

実際、すぐに方向転換ができる。突然の理不尽を目の前にしても、それに立ち向かう気概はちゃんと持ち合わせているのだ。

やりたくないと言いつつ、ガラじゃないなどと言いつつ、それでもやるときはやる。彼以降のジョースター家がなんだかんだで代々受け継ぐそんな気質は、間違いなく彼の中で熱い炎となって燃え滾っていた。

「あん……っ！」

だがそのとき、突然部屋の扉が開いた。何の脈絡もなく。

思わずジョセフがそちらに目を向けると、誰もいなかった。すわ心霊現象か、と思つたものの、視線を下けたところに小さな頭が見えた。「……なんだア？ おい嬢ちゃん、ここは立ち入り禁止……って、オイオイマジか」

そこには、幼い女児がいた。明らかにティーンには遠い見た目。目算だが、八歳に届いていればいいところだろう。

だが、その幼女がまもつている服装は明らかに普通ではない。デザインが、というわけではなくその品質が、である。いや、そのデザインもアメリカやイギリスでは見ないものなのだが。

一応は貴族であるジョセフは、その手の審美眼には多少の自信がある。目の前の幼女がまとう服装はサンタナ王国の伝統的なデザインで、ヨーロッパ人には多少エキセントリックに見えるが、それでも高級のもので作られたものだろう。

よくよく見れば、頭髪もよく手入れされている。肩甲骨くらいまで伸ばされた豊かな髪は美しい緑の黒髪で、気品を損なうことなく直線を描いている。

肌も、コーカソイドのジョセフ視点では白いとあまり思えないが、モンゴロイドとして見れば異例なほどに白い。誰がどう見ても箱入りのお嬢さんだ。

そんな子供がただの一般人なはずはない。そしてここは宮殿の中にあるゲストルーム。であれば、推測は容易い。この幼女はきっと王族だ。

そう当たりをつけたジョセフは、それまでの態度を改めて幼女の前で膝をついて見せた。

「……どうなさいましたか、レディ」

「おにーちゃん、だあれ？」

だが、そうした紳士然とした完璧な態度も、幼女にはさほど通用しなかった。ジョセフ自身は己の容姿にかなり自信があるのだが。

ガキには俺の魅力はまだ早いつてこつたなー、などと軽く自己弁護しつつ、それでもジョセフは態度を崩さず応じて見せる。

「ジョセフ・ジョースターと申します。ゆえあつて、こちらにお招きい

「たきました」

本当なら、無理やり連れてこられて迷惑こいてるとでも言いたいところだが、それは堪える。こんな子供にそんなことを言っても仕方ないし、そもそもこんな幼児が関与しているなどさすがにありえないだろうから。

「ふーん……」

まあそれすらも少女には理解しづらいことだったのか、興味なさげだ。しかし部屋の中には興味があるのか、周りをきよときよと見渡している。

一方で、無視されたことにジョセフはちよつぱりカチンと来た。

（ニヤロツ、このクソガキ！ この俺を無視するたあい度胸じゃあねーか！）

そして涼しい表情のまま、しかし目元口元を怒りでひくつかせた彼は、報復を決意する。

（いいぜ……そつちがそのつもりなら、こつちにも考えがあるツ！）

そして彼は、懐からロープを取り出した。

「……？」

突然の、しかも黙ってなされた行為に、少女はこてりと首傾げながらもジョセフをガン見した。正確には、ジョセフの顔の手前にあるロープをだ。

視線を独り占めしたことを確認したジョセフは、手にしたロープを何度も彼女の前で翻して見せる。真意はたった一つ。種も仕掛けもございません、だ。

そうして少女の意識を完全に引き寄せると、続いて懐からはさみを取り出……そうとして、その手のものは没収されていたことを思い出して内心で舌打ちする。

だが、はさみがないなら他の物を使えばいい。代用できるものならいくらでもある。そう、この身一つあれば、たかがロープごとき楽勝だ。

というわけで、ジョセフはロープを二つ折りにしたあと、右手から人差し指と中指だけを立てて指刀とする。そのまま指刀をロープの

曲げた部分に差し込むと……コオオオ、と波紋を練り上げて勢いよく振り抜いた。

波紋によって強化された指は、ほとんど抵抗なくロープを切断する。ジョセフとしては、火を見るより明らかな結果である。

だが、指二本ごときでロープを切るというのは、普通はそう簡単にできることではない。ましてや幼女の身体なら当然で、彼女はいきなりのことへの驚愕もあって目を見開いた。

しかしジョセフはそちらに介することなく、さっさと次に移る。真ん中から切れて二本になったロープを、結び合わせてもう一度一本のロープにする。

そしてその結び目部分を、大きな手で覆う。

開く。当然、そこには結び目がある。

覆う。開く。結果は同じ。

三度、覆った。だが次は、結び目を覆ったままの手を、ロープに沿ってスライドさせていく。

この時点で、実は既に尋常ではないことが起こっている。結び目の位置が移動するなど、普通ならばあり得ない。

だが幼女がそれに気づくことはなかった。まだそこまで世間を知らないのだろう。

しかしさすがの彼女も、ジョセフが覆った手をロープから抜き、そこから結び目が消えていたことには……ロープが元通り、一本の正常な姿に戻っていたことには気がついた。

「えっ!? えっ、えっ、なんで!? どーして!？」

そしてそのあり得ない現象に、目を白黒させながらもロープとジョセフの顔を交互に見つめる。

狙い通りのリアクションを得たジョセフはにんまりと笑う。これこれ、こーいうの、と思いつながら。

だがこんなものではない。彼はまだまだ、と言わんばかりににやつと笑うと、ロープをもう一度幼女に見せる。見せてから、自分の手首に巻き付けきつく縛り上げる。

幼女の視線がそこに向けられる。今度は何が起こるのか。そんな

期待が透けて見える目だった。

そんな彼女の目の前で、ジョセフは縛っていないほうの手で指を三本立てる。

「スリー、トゥー、ワン……」

そのまま、数字を上げていく。同時に立てた指を順に折っていきながら。

「……ゼロー」

そして最後の数字を言うと同時に、手首を縛っていたロープを思い切り引っ張る。手首とは垂直の方向にだ。

すると、

「えー!? なんぞえ!? どうしてー!?」

そのロープは、縛っていたときそのままジョセフの手首から抜けていた。つまりロープは彼の手首を貫通したことになる!

しかしジョセフはさらに、その縛った形のロープを、結ばれている部分を中心にして手の中に握り込んだ。ぎゅっぎゅと、さながらおにぎり握るときのようにもみ込んでいく。

そうして手を開くと、そこには……。

「あれえ!? きえちやった!?」

そう、何もなかった。あるはずのロープはどこにもない。少女は行方を捜すようにジョセフの手を両手でつかんでぐいと開いた状態で固定すると、その手のひらをじーっと見つめる。

だがそれでロープが出てくるはずもなく、何も起こらない。

「……すごい! おにーちゃん、まほうつかいな!?」

それを遅まきながら理解した少女は、ぱっと顔を上げてジョセフを見た。

「フッフッフ、実はそうなのですよ」

キラキラとしたルビー色の瞳を真正面から受けて、ジョセフはにんまりと笑う。

どうだ、とばかりに胸を張る。子供の相手は割かし得意なのだった。

「すっごーい!! ねえねえ、もつとまほうみせてー!」

だが、子供特有の押し強さは苦手だ。何せ理屈が通らないから。しかしジョセフが顔をしかめるより早く、部屋の扉が再び開いた。そうして、何やら中年の男が入り込んでくる。

「見つけましたぞ姫様！」

「げーっ、じい！」

その男を見るや否や、少女は思いつきり顔をゆがめてジョセフの後ろに逃げ込んだ。

「姫様！ お客様の部屋に押し入るだけでなく、ご迷惑をおかけするとは！ なりませんぞ！」

「べーっ！」

男は腰に手を当てて声を張り上げるが、少女も負けていない。ジョセフの影からひよっこり顔だけを出すと、思いつきり舌を出して見せた。

「このおにーちゃんはまだまほうつかいなんでもん！ じいなんてけちよんけちよんだもんね！」

「ああもう……本当、本当にもう、申し訳ありませんお客様……うちの姫様にご迷惑を……」

「あー、いや、それは別に構わねーが……」

巻き込まれる形になったジョセフは、苦笑する。

どうやらこの少女はこの国のお姫様らしい。するとこの男は、じいと呼ばれていたし守役か何かなのだろうが、この手の人物が苦労するのは洋の東西を問わないらしい。

何せジョセフも、幼少期は似たようなことをしてジョナサンたちを困らせていたのだから。まあ、ジョセフは当時から波紋が使えて、それをいたずらに悪用しまくっていたので、このお姫様のようにかわいげはなかったかもしれないが。

「ほら、やっちゃっておにーちゃん！ まほうで！ バシーっで！」

ただ、ふてぶてしきは当時のジョセフとどっこいのようだ。お姫様は悪びれることなく、堂々と男に人差し指を向けた。さながら名將軍のようだ。

そして生来ノリのいいジョセフは、ノせられるままに拳を掲げて見

せた。

波紋の輝きが宿るそれを見て、男がうつとひるむ。お姫様のほうは、突然起こった太陽の輝きにご機嫌だ。

だが彼も引けないのだろう。すぐに気を取り直すと、ぱんぱんと手を鳴らして見せた。

すると、どやどやと兵士たちが部屋の中に入ってくる。全員が銃で武装していて、動きは機敏。スキもない。明らかに訓練された精鋭だ。

おまけに多勢に無勢となれば、ジョセフもさすがに簡単には手が出せない。思わず両手を上げて、ホールドアップだ。

「あーっ、じい、ひきようー！」

「なんとでも仰ってくださいませ。姫様をご立派に育て上げるという使命がありますので。太后様もそれをお望みでございます！」

「うやー！ おばーさまのバカーー！」

そうしてお姫様は、ドナドナと連行されていった。

「おにーちゃん！ また来るねー！」

去り際にキスをよこしてきたお姫様に手を振って、ジョセフは彼女たちと別れたのであった。

やれやれとソファに腰を落とした彼は、そのまま身体を背もたれに預けて天井を仰ぐ。少し前まで多少なりとも彼を縛っていた後ろ向きな気持ちは、きれいさっぱり消えていた。

「……仕方ねーなア……。あんな小っこい姫様がいるとあっちゃあ、頑張るしかねーじゃあねーか」

そしてつぶやく。

ここまで見越していたとしたら、あのベルンハルトという男は大層な策士だと思いなから。

……サンタナが目覚めるまで、あと少し。

9. 中米の神・サンタナ 1

テノチティトランから東へ十数キロ。周囲に人家のない荒野の真ん中に建つ、やたら堅牢な建物こそサンタナ王国の機密施設である。この地下に、テノチティトラン地下遺跡で眠っていたサンタナは移送されていた。

もちろん何重にも閉ざされた鉄壁で囲まれており、万が一にも脱走することは不可能になっている。

そんな隔離空間を観察できる部屋にこの日、王国の要人が集まっていた。現国王を筆頭に、ドイツからやってきたベルンハルト、彼の麾下にて部隊を率いるシュトロハイム、そして目下最終兵器と目されているジョセフだ。

「陛下たちからお教えいただいた情報によれば……吸血鬼の跳躍力は五メートルから八メートル！ 発揮できる破壊力は厚さ四センチの鋼鉄板ですら耐えられるかどうか！ しかしイイイ……！」

そんなそうそうたるメンバーを前に、シュトロハイムがオーバーリアクションで手を振っている。

「この隔壁はツ！ 十センチの鋼鉄板が五枚重ねられた、計五十七センチ！ 高さも二十五メートルを確保しましたツ！ 百パーセント安全だと確信しておりますツ！」

「よし……準備は万端だな」

彼の説明に、ベルンハルトが頷いた。

王もまた頷き、しかしジロリとジョセフに目を向ける。

「さて……いよいよそなたの出番というわけだなジョースター。一昨日はとんだ期待外れだったが……」

「何度も言ったがよオ……波紋は対生物用の技術で、石化したヤツになんて効くわけがねーんだよ！ 何回言ったら理解するんだてめーわ？ もしかして頭の中身がカラッポなのか？」

「相変わらず口の減らんやつだ……その調子づいた態度がいつまで続くか見ものだな」

「そのセリフ、リボンつけてそっくりそのままお返しするぜ！ ケツ

！」

「そこまでにしておけよ、ジョースター……陛下の邪魔は遠慮願おう
じゃあないか」

険悪なムード全開の両者の間に、シュトロハイムが割り込んだ。だが口調に反して、その目は「頼むからこれ以上ややこしくしないでくれ」と雄弁に語っていた。

ジョセフもバカではない。ジョセフに対しては強権的で、やたら圧の強い言動を繰り返すシュトロハイムだが、ここに着任してから今に至るまでこのスカポントンな王サマを相手にして相当疲れているんだろう、と推測するのはあまりにも容易だった。なので、あまり彼に対しては大きく出る気になれないジョセフである。

「差し出がましいことを申しました！」

「よい。そなたはよくできた軍人だ、大目に見ることも王の器というもの」

そしてシュトロハイムは王に頭を下げ、王はあくまで上から目線で満足げだ。

対するジョセフは、二人のやり取りを白けた目で眺めている。彼はここ数日で、「親父には悪いが軍人には死んでもならねー」と決意するに至っていた。仮に自分がシュトロハイムの立場だったら、何回上役をぶん殴っているかわからないから。

「では少佐、準備を開始したまえ」

「ハッ！……やれッ！」

だがそんな茶番もここまでだ。王が指示を出し、シュトロハイムが応じれば、室内が緊張で満たされた。

さらにシュトロハイムから指示を受けた兵士たちが、壁際に設置された装置を操作する。すると、隔壁内へ血液が注入され始めた。

血液は張り巡らされた細い配管を通り、眠ったままのサンタナへと注がれる。だが周囲が血で満たされることはなく、そのすべてはサンタナが吸収していた。

そうして血を与え続けること、十数分。サンタナがくっついていたり柱にヒビが入った。同時にそこから、血が噴き出し始める。

「血が！ 血が噴き出しました！」

「飽和したようです！ 恐らくこれで目覚めが始まるかと！」

「そんなことは見ればわかる！ ええい、このままでは血で室内が見えなくなる！ シャワーで洗い流せ！」

「は、はい！」

シュトロハイムに報告を上げたドイツ兵たちに、上下関係を無視して言いつける王。シュトロハイムはこれを複雑な顔で追認する。

兵士たちは顔色を悪くしながらも命令に従い、それまでとは別の操作を行おうとした。

だがそれが完了するよりも早く、隔壁内の変化は進んでいく。柱のヒビがサンタナにまで達し、遂に彼の身体が柱から分離したのである。

と同時に、その身体の色が変わり始めた。完全に石そのものだった外観が、床に近づくとつれて肌色へ……コーカソイドとよく似た白色へ。同じく石でしかなかった頭髮も金色へ変わっていく。

そして着地したとき、彼は完全に元の姿を取り戻していた。遂にサンタナが覚醒したのだ。

その身体は、ややほっそりとしたフォルムでありながら、しっかりと筋肉がついている。それでいて、間違いなく均整が取れている。

金髪からのぞく角は黒い。それが短くも二本、確かに存在を主張して天を衝くかの如く。

ギラリと鋭い眼光もまた、余人では持ちえぬものだ。そこに多分に含まれた剣呑な雰囲気は、間違いなく吸血鬼との関係を思わせる。

かくして目覚めた彼の姿は。遅ればせながら注がれ始めたシャワーの中で立つ彼の姿は、さながら美を追求した彫像のようであった。

「い……石のような肌だったのが、つやつやと光沢と血色がついていきます！」

「生き物です！ 人間と変わらない生き物です！」

ドイツ兵が二人、交互に声を上げる。

だがそんな当たり前な内容の報告に応じるものは、もはやこの場に

いなかった。誰もがサンタナの姿に注視していた。あるものは観察するように、あるものは単なる好奇心から。またあるものは警戒を強め、ごくりと生唾を嚥下していた。

一方、人間たちの心境などどこ吹く風で、サンタナはゆっくりと立ち上がった。もったいぶるような緩慢な動作だ。

彼はそのまま立ち尽くすかのように、ぼんやりと天井を仰ぐ。そこから、やはりゆっくりと周囲に目を向けていく。同時に首を傾げつつ、鼻を鳴らして……まるでその姿は、犬が見知らぬ場所に放り込まれたときのような警戒っぷりであった。

「ク……ッ、くくく……」

その様子を見て、王が笑いを漏らした。

「なんだ？　これが我々が崇めていた神だと言うのか？　信じられない！　クンクンにおいをかぐところなど、まるで原始人ではないか！」
彼はやがて我慢できんとばかりに笑い出し、彼の配下たちも追従して（引きつった顔で）笑って見せたが、ベルンハルト、シュトロハイム、そしてジョセフ以下、ヨーロッパ大陸組は全員が揃って「こいつ正気か？」と白い目を向けていた。

確かに今のサンタナに、神や究極の生物などと思われるような要素はない。それらしい服を纏っておらず、ほぼ全裸であることも拍車をかけているだろう。目を引くような行動をしたわけでもない。

それどころか、ほどなくしてサンタナは身じろぎ一つしなくなってしまう。まるで蠟人形のように固まってしまい、動かなくなったのである。恐ろしい力の持ち主だと聞いていたのに、やけに大人しいのだから確かに勘違いしてもおかしくはない……かもしれない。

ジョセフなどは逆に気味の悪さを感じていたのだが、人間そこまで警戒し続けることは難しい。彼以外の人間から少しずつ緊張感が抜けていき、次第に楽観的な空気が漂い始めた。

そしてサンタナが動かなくなると、少し。遂にこらえきれなくなつたのか、王が退屈そうに声を上げた。

「おいおいなんだと言うんだ？　あまりにも理解が及ばなくて固まってしまったのか？　思考が追い付いてこないのか？　……フン！

どうやら主神サンタナというのも御大層な肩書でしかないようだな！ どう見ても大した知能があるようには見えん！」

王は周りに構うことなく、あざ笑った。

彼の言葉に対してドイツ人とイギリス人は「絶対違うと思う」と心を一つにしていたが、口にしない言葉が伝わることはない。

「まあいい……相手がアホならそれだけやりやすいというものよ。おいジョースター、何をボサツとしている。準備をして配置につけ」「へーへーわかりましたよつと……つたく」

居丈高に言われて、ジョセフはため息混じりに部屋から出た。これから彼は、あの隔壁内に入ってサンタナと対峙しなくてはならない。しかし王の言い方に、やる気がどうにも出てこないのも事実であった。

だが、事態は王が考えているより遥かに早く進んでいた。

「おいジョースター！ 戻れ！」

「はあ!? 行けつつつたり戻れつつつたり、なんなんだよ!?」

後ろから走り寄ってきた別の兵士に、いきなり戻れと言われて困惑するジョセフ。

だが、部屋に戻ってみれば一応納得はあった。

何せ、あれこれとしている間にサンタナが隔壁内から消えてしまっていたのだから。

「バカな!? 一体どこへ消えたのだ!？」

思わず、と言った態度で極小の監視窓にかじりついている王。彼は戻ってきたジョセフに気がつくつと、やはり居丈高に声を張り上げた。

「戻ったかジョースター！ いいかそなた、しつかり余を守るのだぞ！」

その言葉にやはりため息混じりに眺めつつ、ジョセフは「ダメだこいつ、早くなんとかしないと」と本気で思った。

同時に、せめて武器になるものを持ち帰るべきだったなど内心で舌打ちする。あそこは兵士たちに逆らつても、強引に油やロープを回収すべきだったかもしれない。

だがサンタナがどこにいるかわからない現状、下手に兵士たちをお

使いにやるわけにはいかないだろう。かといって、ジョセフが取りに行こうというのはこの王が許さないうちに違いない。今年は何年かもしれないぞと、ジョセフはわりと本気で思った。

一方ジョセフたちをよそに、中間管理職のシュトロハイムはこの状況でも職務を遂行するため指示を飛ばしている。

「いいか、ハッチは絶対に関けるなよ！ どこか我々からは見えないうところに潜んでいるに違いない！ ……それから酸素の供給をストップしろ！ 苦しくなって出てくるのを待つのだ！」

「は、はい！」

「そして貴様！」

「はい!？」

「記録のためにカメラを回していたはずだな！ 即座に現像してフィルムを持ってこいッ！ 我々が目を離れた数秒のうちに、何が起こったのか記録されているはずだ！」

「なるほど!? 了解いたしました少佐殿！」

「急げよ！ 大至急だッ！」

「な、なるほど。さすが少佐、いい目の付け所だな！」

きびきびとした、しかも切れ目のない指示にジョセフも唖る。なるほど、いけすかないやつだが軍人としては間違いなく優秀なのだ、とはつきりわかるやり取りだった。

だが、それでも足りないと言った。きつとこの先一時間にも満たないわずかな間にとんでもないことが起こる、という確信すらあった。それは超生物である柱の男…神とも称されたサンタナへの、ある種の信頼とも言えるだろう。

とはいえ、それをただ座して見ているわけにもいかない。放っておいたらこの施設だけでなく、外にも被害が出るだろう。あの小さいお姫様も、もしかしたら犠牲になってしまいかもしれない。

(それだけは許しちゃうよなア〜！)

だからこそ、ジョセフはこのあとのことに備える。引き受けざるを得なかったこの依頼だが、それでもやると決めたのは己なのだから。ならばそれを貫かねばなるまい。

ジョセフはそんなことを考えながら、待つことしかできない時間をひたすら波紋の呼吸を整えることに費やすのだった。

10. 中米の神・サンタナ 2

サンタナが姿を消してしばらく。暗い雰囲気漂う中、案の定武器の回収はさせてもらえなかったジョセフは、なぜここに至ってもなおサンタナが姿を見せないのかと考えていた。

単に道に迷っている、などという希望的観測はしない。恐らく何か意図がある。あえて姿を見せない明確な理由があるはずだ、と。

(まずは相手の立場になつて考えてみる……おじいちゃんのインスタラクション・ワンだぜ。「もし自分が敵なら」と相手の立場に身を置く思考！ 俺が奴なら……)

伝承では、サンタナ神は二千年に一度眠りに就き、その後の二千年を眠つて過ごすという。もしそうなら、今のサンタナはまさに寝起き。寝て起きたら見知らぬ部屋に閉じ込められていた、となれば……。

(そりゃあ状況を確認しようとするよなーッ。そこがどこかはさして重要じゃあないぜ……問題は閉じ込められていること！ 普通、何の理由もなしに監禁なんてするか？ しない！ そこを知りたいと思うのは当然の心理つてやつだぜ！)

だとしたら？

今、サンタナが不自然なまでに沈黙を守っているのは……。

(……観察している？ こちらの様子を見ているのか？ だとしたら、あのアホ王の言うような簡単なやつじゃあ断じてねーぜ……ちやんと思考ができるやべー相手だぞ！)

「おいッ！ フィルムの現像はまだか！」

だがジョセフの思考を遮って、王が声を上げた。遂に我慢ができなくなつたらしい。

しかしシュトロハイムが彼に応じるより早く、兵士たちが慌ただしく室内に飛び込んできた。

「ただいま現像が完了しました！」

「来たか！」

「よおーし！ すぐさま映写しろ！ 準備はできておる！」

「はっ、ただちに！」

そうしてシユトロロハイムの号令一下、映像が壁に投影され始めた。全員がそこに視線を向ける。

誰もが食い入るよう見つめる中、始まった映像の中にはもちろん、少し前のサンタナがいる。微動だにしていなかった頃のサンタナだ。

しかし彼はある瞬間、一瞬だけ上を見たかと思うと、突然壁に向かって走り出した。

「……なんだ？　壁に向かって走っていくぞ？」

理解不能、とばかりに王がつぶやく。

しかしジョセフと、それからシユトロロハイムはサンタナの行動に思い当たるものがあつた。サンタナが向かつている方向は確かに壁があるが、それ以外にも存在するものがあるのだ。

たとえば、張り巡らされた配管などが……。

「あ!？」

映像の中で、サンタナが床を蹴つた。跳躍する。そしてまっすぐに壁に飛び込んでいく形になるが……次の瞬間だ。

彼の身体がグシャリと折りたたまれた。横に二つ折りになって細長くなった身体は腕を前と後ろに伸ばされてさらに細長くなり、次いで床を蹴つた足を起点にもう片方の足がぐるりと巻き付いていく。

最後にすべての骨という骨がバラバラにズレていき、形状が整えられない。それは頭蓋骨も例外ではなかった。

そうしてサンタナの身体は、ほんの一瞬の間に平べったい布のようになつてしまつたのだ。

だからこそ、

「ああああああれはッ!？」

「空気供給管にーッ!!」

彼は壁にわずかに空いていた空気供給管の中へと消えて行くことができた。

「折りたたんで入っていったーッ!」

「あんな隙間にッ!？　ほんの四センチ×二十センチ程度しかないはず

なのに！」

室内は騒然となる。

その中で、ジョセフだけがサンタナの身体に何が起きたのか、正確に理解していた。

（あれは関節を外した程度でできることじゃあねーッ！ あのヤロー骨格をバラバラにしてねじって自分の身体を変形させやがった！ これがおじいちゃんと言ってた「身体は見た目通りには稼働しない」ってことかッ！）

と同時に、彼はハツとなる。

「おい……おい待て、シュトロハイム！ やベーぞー！」

「そんなことはわかっとなる！ 貴様は備えておけジョースター！」

「違う！ そういうことじゃあねーッ！ いやそれもあるが……！」

サンタナの野郎、あれからどこにも出てきてねーんだぞ！ するつてえと奴は！ この建物の空気供給管内のどこかに潜んでいることになるッ！ どこから出てきてもおかしくねーぞッ！」

「!!」

ジョセフに指摘され、シュトロハイムもハツとなる。彼らの後ろで、ベルンハルトが既に白い顔でゼーゼーと荒い呼吸をついていた。

彼を気遣う余裕はシュトロハイムにも既になかったが、それでも軍人だ。うろたえない。ドイツ軍人はうろたえないのだ。

「貴様らッ！ 我々ドイツ軍だけではない、この場の全員だ！ 全員、空気供給管から離れるッ！ あの隔壁内からここまで繋がっている可能性が……」

「ぎゃあああーっつ!!」

「!!」

シュトロハイムの命令の途中で、雑巾を引き裂いたような野太い悲鳴が上がった。

全員の視線が、そちらに集中する。そこには……なんと、空気供給管からはい出てきた平べったいものが、近場に立っていた王国兵の目から体内へズムズムと侵入しているところだった！

「う……っ、うわあああーっつ!!」

「で、出たアーツ!!」

場は騒然を通り越して混沌となり、けれどもサンタナが入り込んだ兵士から全員が一齐に距離を取る。このとき、どさくさに紛れてジョセフを盾にするように下がった王に、ジョセフは心底イラツとしたがそれどころではない。

ぐりん、と兵士の首が九十度曲がり、こちらに顔が向いた。

だがそこに、既に目はなかった。潰されたのではない。眼窩が空洞になっていたのだ。

「ああああ〜…：…な、何にも見えない…：…見えないよオオ〜…：…！
明かり…：…明かりはどこですかアア〜」

兵士は震える声を上げながら、よろよろと歩き出した。両手を前に出し、それこそ暗闇の中を身一つでさまようかのように。

そんな彼を見て、ジョセフは前に出る決意をする。波紋を流せば、まだ間に合うはずだと踏んで。そりゃあ目はもはやどうにもならないが、少なくとも命は助かるはずだと。

しかし、彼よりも早く動いたものがいた。王である。

「え…：…ええええーい！ 撃て！ 構わん殺せツ！ あいつの身体ごと撃って撃って撃ちまくれ！」

「は!? おい待てこのマヌケ…：…」

王の命令は、近衛兵にとつて絶対だ。日ごろの訓練で身体に刷り込まれた習慣に基づいて、彼らは一斉に銃を構え、ためらうことなく弾丸を発射する。

「やッ！ やめろツッ！」

ジョセフは手を伸ばすが、もはや遅かった。轟音が何発も連続し、無数の弾丸が哀れな兵士に殺到する。

「アアア〜」

兵士の身体が吹き飛び、壁にぶつかった。普通なら、確実に死んでいる。

だが…：…。

「オー…：…オー…：…オオオ〜…：…く、す、ぐ、つた、いいイイ〜」

兵士は生きていた。身体に力は入らないようだが、それでも這い

ずって王のほうへ近づこうとしている。

あまりにも非現実な光景だ。さながら映画のよう。だが、間違いなくグロテスクなどの規制もかかるだろう。

それを目の前で見る羽目になった一同は、全員が程度の差こそあれドン引きした。

「ヒイ！ な、なんだこやつは！ なぜ死なん!？」

そして王が悲鳴に近い声を上げる。

しかし、なぜ、と言われても誰も答えられない。答えられるはずがない。人知を超えたおぞましい何かの影響としか言いようがなかった。

「いいや、この者は既に死んでいる……」

「!？」

だが、そんな彼に答えるものがいた。

這いずりながら、ゆっくり、ゆっくり……機械じみた動きで立ち上がった兵士が、声を発した。それまでとは明らかに異なる口調で。

「俺が中から操っているだけ……言うなれば、人形を繰り糸で操るのと同じことだ……」

そしてなおも話す兵士の声が、少しずつ変わっていく。兵士の声から、もつと重厚で、太い、響く声へ。

「ま……まさか!」

「俺は悲しいぞ……。二千年前、あれほど固く俺の未来を誓った我が巫女の末裔が……よりもよって俺を殺そうとするとは、な……」

「ば、バカナ……! 英語! 英語を話しているツ!」

「こいつ……! やはりただ黙って隠れてたわけじゃあないツ! 学習していたんだツ! 空気供給管の中で!」

「し、しかしジョースター、一時間も経っていないんだぞ! その程度で未知の言語が覚えられるはずがないツ!」

「バカヤローツシュトロハイム! 今日の前で何が起きたかも忘れたのかスカタンツ! こいつらを人間の尺度で語るなツ! それくらいできてもおかしくねーだろーが!」

動揺がさらに広がっていく。さながら、波紋のようにゆるゆると

……しかし確実に。

その中で、操られた兵士が腕を前へ掲げた。手は親指と人差し指がピンと起こされていて、あとはたたまれている。それはさながら、ピストルのようで……。

「俺は悲しい……二千年前、あれほど目をかけたものの末裔が、叛逆するなど——」

ドン！ と銃声のような音が鳴り響いた。

音源は、今まさに掲げられた指先。そしてそれと同時に、指先の肉を突き破って何かが発射された！

「うわあーッ」

「う、撃ってきた!? そんな!?!」

「先ほどの弾丸だ！ 雨あられと撃ち込んだ弾丸を、体内で集めて撃ち返してきたのだ！」

シュトロハイムが言う。

だがそれと同時に、兵士はさらに両手を前へ突き出して見せた。すべての指が立てられている。そしてすべての指先が、こちらを向いていて……。

「——ッ！ ジョオオオースタアアー!!」

危機を察知した王が声を張り上げ、しかしそれよりも早くジョセフは先頭に躍り出た。

同時に王の頭をつかみ、その頭髪をごとそり引き抜きながら。王の声は、「なんとかしろ」ではなく「いきなり何をする」という意味だったのだ。

「ちよいとばかり多めに髪の毛をもらったただけだ、ガタガタ騒ぐんじやあねーッ！」

そして整えられた波紋の呼吸の音が響くと同時に、兵士の身体が弾け飛んだ。周囲に肉片が雨のように散乱する。

その中から、明らかに兵士よりも大きな男の姿が浮かび上がった。直前までの兵士と同様の、両手を前に突き出した姿勢で。

ややウェーブのかかった金髪。たくましくも均整の取れた肉体の、堂々たる偉丈夫。

サンタナ。このアメリカ大陸において、一時期最も信仰を集めた神。アメリカ大陸を代表する神格そのものが、まさに降臨した瞬間である。

「――俺は悲しい！」

「名づけるとしたら……波紋へアアタツクツ！　つてところかア〜〜！」

彼の前で、ジョセフは手にしていた王の髪を一齐にばらまいた。波紋が通り、極太の針と化した髪の毛が、しかし髪の性質はそのままにふわりと滞空する。

直後に、再び銃声に似た音が生じる。併せてサンタナの指という指から、一齐に弾丸が放たれた。先ほどぶち込まれた弾丸すべてを、同じように乱射して返す魂胆だ。

だが、それらの多くはジョセフが展開した髪の毛によって防がれた。空中で不規則に、かつ大量に漂う髪の毛は、いずれの弾丸も弾いて軌道を逸らしていったのだ。

しかし、それでもジョセフの顔色は切った啖呵に反して芳しくない。

なぜなら、すべてを防げたわけではないからだ。弾丸が通らなかつたのは髪の毛が展開された場所から後ろだけで、それ以外の場所に飛んだ弾丸はそこにいたものたちを遠慮なく射殺してしまった。

生き残ったのは、おおよそ半分くらい。だがこの瞬間に死んだものはいずれもサンタナ王国の兵士たちか、要人ばかりで……それは間違いないなく、狙いすました行動だとジョセフには確信できた。

「……………」

そしてそんな生き残ったものたちを、サンタナは観察するような目でじろりと睨んだのであった。

11. 中米の神・サンタナ 3

観察するような目だ、とジョセフは思った。近距離で面と向かい合ったことで、そうだと確信できるほど様子がよくわかった。

しかし探るような色合いだが、決して出方を伺うような……言うなれば戦うことを主眼とした色ではない。あれはどちらかと言えば、絵を写生するときのような、列をなすアリの群れを眺めるような、そんな……。

「……そちらのお前たちは、俺の民ではないな。その肌の色……顔つき……ローマのものたちか？」

そのサンタナが、改めて口を開いた。先頭に立つジョセフと目を合わせ、やはり観察するような視線を隠すことなく問うてきた。

この問いに、一切返すことなく殴りかかるのもアリなのは、とジョセフは一瞬考えたが……予想以上に話ができそうな雰囲気、ひとまず応じることにした。

応じながら背中その後ろで手を動かして、逃げろと後ろの面々に伝える。もしこのまま戦いになったら、間違いなく巻き添えが出る。それだけは避けたかった。

あの王様も助かることになるだろうが、いくらアホとはいえ目の前で死ぬのは気が引ける。それに、この際恩でもなんでも売っておけという打算もないわけではなかった。

「……正確にはノーだぜ、神サマ。俺たちはローマの末裔さ。ローマはとつくの昔に滅んじまつてる。大雑把に言つて1500年くらい前にな」

幸い、歴史の話は得意だ。祖父が本職の考古学者だし、祖母もその影響か歴史をよく語ってくれたからだ。

だが、答えながらもジョセフには一つ気になることがあった。

それは、サンタナの発言。なぜこの男はローマの存在を知っているのだ？ アメリカ大陸とユーラシア大陸の間で交流ができたのは、たかだか500年くらい前のことなのに！

「滅んだ？ そうか……人類史に冠たる金字塔、歴史の定礎と断言で

きる大帝国だと聞いて興味があったのだが……それでも二千年は保たなかったのか……」

答えはわりとすぐに出た。

聞いて。今この男は、間違いなくそう言った。つまり、ユーラシア大陸の情報を伝える存在が他にいるということになる。

そして紀元前の時代にそんなことが可能な存在など、ジョセフには一つしか思いつかない。サンタナの同族……すなわち柱の男だ。知れば知るほど化け物だなど、彼は驚きながらも内心に澁面を押し込めた。

「相変わらず、人間とは儂い生き物だな。二千年経つてもなお、俺が導いてやらねばならんか……」

「……どうかな。案外その必要はねーかもしれんぜ?」

「……ほう?」

ぴくりと動いたサンタナの眉を見て、ジョセフはここが仕掛けどころだと腹をくくる。やけに敵意のないこいつなら、あるいはと思いがら。

そう、サンタナには少なくとも人間への明確な興味がある。彼の視線や態度はそういうものだと感じた己の審美眼を信じて、ジョセフは両手を広げて周りの機械を大げさに示して見せた。

「見ての通り、俺たちはあんたが眠りこけてる間に随分発展したんだ。平均寿命だって延びてきてる……案外次に寝るまでの間に、そこら辺が解決する……かも、しれねーぜ?」

「ふむ……確かにその兆候はありそうだ。この眩しい光は、火でも日でもないな……人工的なものか? 一定の光度を保ったまま、長時間照らし続ける技術は二千年前はどこにもなかった……初めてお目にかかるな……。仕組みが気になる……分解したい、が……してしまつたら人間の目では見えない暗さになりそうだな」

(よし、釣れた!)

好奇心を煽るような言い方をしたジョセフに、サンタナは目を細めながら、周囲を見渡してそう返してきた。

これでさらに時間が稼げる、とジョセフは内心で拳を握る。なんな

ら和解だってできるのではと、今までにない期待も湧いてきた。

そんなジョセフの前で、サンタナは視線を足元に落とす。ライフル銃がいくつも転がっている。先ほど絶命した近衛兵たちが持っていたものだ。彼はそれを、無造作に拾い上げた。

「これも……眠りに就く前はなかった武器だ。見たこともない……不思議だ」

そしてそのライフル銃を、しばらくあちらこちらから、ためつすがめつ眺めていた。

が——ほどなくして。

「……これほど多くあるのなら、一つくらい分解してしまっても構わないだろう。どれ……」

彼は銃身をなでたかと思うと、迷うことなく、いとも容易く、そして実に滑らかかつ正確な動きで、完全に分解してしまった。

「な……!?!」

「あ、あんなにスムーズに分解を……!」

「あれを覚えるのに数時間かの訓練が必要だというのに……!」

その光景に、一同は戦慄する。

やはりサンタナは、非常に高い知能の持ち主なのだ。それは言語の習得に一時間もかからなかったこともそうだが……手先の器用さも、異次元だった。

「……なるほど、大体わかった。衝撃によって何かを瞬間的に爆発させ、その勢いで金属片を発射する仕組みか……。この筒で軌道を絞ると同時に、動きを安定させているようだな……む？ 筒の中にあるこの束のような線は……そうか、ジャイロ効果を企図したものか。うむ……実に合理的だ……」

しかも完全に銃を理解している。してしまった。この一瞬で！ 人類がここまで到達するのに、数百年を要したというのにだ！

「それであるの威力というわけだな。うむ……人間も進歩するのだな。だが人間同士で使うには過剰な気も……ああいや、そうか。なるほど……こんなものをこれほど量産できるのであれば、俺に対する反感を抱いてもおかしくない、か……」

理解を終えた彼はそのまま、やけに物分かりのいいことを言いながら王に……いや、王の背中に目を向けた。

王は、今まさに部屋から出ようと扉を開いたところだった。ジョセフのジェスチャーはしっかりと伝わっていた。王に続いて、生き残った要人たち、さらには近衛兵たちも逃走し始めている。

しかしそれは遅かった。いや……あるいは最初から無駄だったのかもしれない。

「だが——お前は駄目だ」

なぜなら次の瞬間、今まで前評判に反してやけに穏やかだったサンタナの雰囲気、剣呑なものに変わったからだ。しかしぎりりとした鋭い視線は、王にのみ注がれている。

刹那、銃声が響いた。音源は、なんとサンタナの右手の中。そこから硝煙がうつつすらと上がっていた。彼はいつの間、にやら手にしていた未使用の弾丸を、手の中で起動したのだ。弾丸の背を指で、人間には不可能な動きと勢いで叩いて。

ジョセフは発射の直前に察知したが、もう間に合わない。音速の弾丸はジョセフを無視して、あっけなく王の膝を撃ち砕いた。

「ぐああああーっ!？」

「陛下アアー!!」

王の悲鳴が上がり、どさりと倒れこむ。ほとんど一瞬の出来事だった。

「ライフル弾!? そんな、一体どこから!」

「先ほど分解したときだ……! やつめ、弾倉から抜き取っていたのだ……!」

「弾丸を手で発射するとか……! やっぱ化け物だぞこいつ!!」

シユトロハイムの解説に、兵士たちが恐慌状態に陥りかける。

しかし、サンタナはそちらには目もくれず、王だけを睨んでいた。「お前たち人間のことはよく知っている。その心理も、完全ではないがそれなりに理解している……だからこそ、俺の民が俺に叛逆したことはこれ以上問うまい。赦そう。殺しにかかったことも……特に赦す。たとえ殺意があったとて、殺すに足るものではなかったしな。見

過ごしてやろう。二千年の不在に加えて、そう思つて仕方ないだけの進歩があつたようだしな……だが」

サンタナが前へ出る。ゆっくりとだが、確かな足取りで。

「お前は赦さない。お前は王だろう？ 俺とこの時代を約束した巫女本人ではないが、それでもお前が、今この国の長なのだろう？ ならば、叛逆した責任は取れ。取つて死ぬがいい。それが組織の上に立つものの責務だ。特に人間の社会ではな」

そうして手をかざしつつ、サンタナは断言する。

彼の直球な物言いに、王との付き合いがそれなりに長かつたドイツ人の心は一つになつた。そりやそうですね、と。

おまけにサンタナの言葉は、確かに人間の理屈だつた。それは周りの人間に、サンタナがハツタリで「理解している」と言つたわけではないことを理解させるには十分だつた。

だが、それでもとジョセフは思う。思つたから、彼は両者の間に改めて割り込んだ。せつかく穩便に話を進めてきたのに、無駄にするのかと自問自答しながらも、彼はそれをやめる気にはなぜかなれなかつた。

「どけ、ローマの末裔よ。これはお前には関係のないことだ。俺と、俺の民の問題だ」

「そーね、ま〜………つたくないね。正直、その王サマなんざいなくなつてくれてもいいと思つとる……」

「それを理解していながら、なぜ俺の前に立つ？」

「まつたください………実のところ俺もよーわからん。だけどサンタナ神さんよ……いきなり殺すこたあねーと、そうも思うワケよ」

「……………」

「悪いことしたら罰する！ これ当たり前ね。そのとーり。でも罰にもちようどいいやつ悪いやつがあると思わねーか？ この王サマがやったことは、いきなり死なすほどの大罪なワケ？」

「……………」

「あ〜つまりなんだ………要するに、俺が言いたいののはだ……」

オーバーリアクションで、ジョセフは話し続ける。後ろでシユトロ

ハイムとベルンハルトが、バカと勇者の間で反復横跳びするような向こう岸の存在を見るような目でそれを見ているが、ジョセフだってそれは覚悟の上だ。

何せ、ここまでなんとか戦わずに会話が成立しているが、そもそも相手は柱の男なのだ。

ここに来た以上、既にサンタナと戦うことは最初から織り込み済み。たまたまサンタナが穏当に接してきたから当初の予定通りになっっていないだけで、戦うことになったならそれは予定通りというだけだ。

もちろん、決して余裕があるわけではない。それらしいことを述べているのは、自分の考えをまとめるためでもあるからという意味が強い。

だが、彼は自分の行動が無駄だとは欠片ほども思っていない。なぜなら、そうして話している間にすっかり考えがまとまったからだ。

「……そーだな、あれだよ。やっぱ、どんな裁判でも弁護士って必要だと思うんだよなア俺。有罪確定だとしても、死刑間違いナシだとしてもだよ、そこは守ってやらにやならんだろーってな……ま、こいつの弁護なんてやりたくなかったが、それでも償う余地は与えてやってほしーなど、そう思ったわけだな、ウン」

ジョセフは、やはり思うのだ。どんなに愚かな人間だろうと、償う余地は残すべきだと。

さすがに神殺しが成功していたらジョセフも弁護できないが、現実としてサンタナは無傷だ。彼自身も人間の殺意など歯牙にもかけていないし、殺そうとしたこと自体もはや不問と述べている。

ならば未遂として、多少の減刑は与えてもいいのではないか。それが彼の主張だった。

「ふむ……なるほど、一理ある」

そしてその主張は、大方の予想を裏切り好感触を得た。誰もが嘘だろと言いたげな顔で、サンタナに目を向けた。王もである。

王のリアクションにジョセフ、やっぱ弁護しなくてもよかったかなと思わなくもなかったが……まあ、あそこでただ黙って殺されるのを

見過ごすのは俺じゃあねーよなとも思うのであった。

「……よかろう。この場で殺すことはやめておこう」

そしてそのときは訪れる。人間が柱の男に対して、弁舌で譲歩を得た。それはサンタナが目覚めるまで、誰もが考えていなかった結末であった。

「……俺が言うのもなんだがよー、マジでいいのかサンタナ神さんよ？」

「当たり前だろう。俺は傲慢かつ狭量なギリシヤの神とは違う。人間のすべてが無知蒙昧ではないことなど承知しているし、俺たちには及ばずとも人間とてやるときはやるものだ」と知っている。そう教えてもらい自分でも納得しているのだ。ならば、その諫言を容れることも吝かではない」

堂々とした答えであった。そのありよう、立ち居振る舞いは、ジョセフですらなるほどこれは神様だと唸る。

千年もの間人々を保護し、導いてきたという神話に偽りはなさそうだと。そう感じるには十分だった。

……だからなのか。それまでとは異なり、場には穏やかな雰囲気か漂い始めていた。

それが油断だったのだろうか。

「海を隔てた彼方より来りし、ローマの末裔よ。この俺を恐れることなく諫めたお前の名が知りたい」

「ん？ おお……そーいや名乗ってなかったつけねエーツ」

そうしてジョセフは、大きく腕を動かし、己の顔を親指で示して大見得を切って見せたのだが……、

「俺アジョセフ・ジョースター！ 大西洋の海の向こう、イギリスからあんたに会いに来た男だぜエーツ！」

それを聞いた瞬間、サンタナの気配が再び変わった。今までとは明らかに異なる戦意が昇り竜のごとく吹き上がり、全員が「えっこの流れで!？」と泣きそうになりながら再び逃げ始める。

「ジョースター……ジョースター、だど？」

そんな神様を見て、どうにかしようと思うものなどいようはずもな

く。ここに至って、遂に室内はジョセフとサンタナだけになった。

「その名前……よもやこんな寝起きに聞くことになろうとは！ だがッ！ お前が本当に姉さんが予言した男ならば！ 俺とお前は戦わねばならん！」

「なんでエーッ!?」

パーフェクトコミュニケーションだったじゃんよ！ とわめきながらも、ジョセフは身構えた。サンタナの言葉が理解できず、顔を歪めながらではあるが。

「ジョセフとやら！ お前の力を見せてみろ！ この俺に勝てんようでは、他の誰にも勝てんぞ！ いわんやカーズをや！」

「……ッ、はーん、そーゆーこと……大体わかった、わかっちゃったぜ……。そーゆーことなら、言われなくとも！ あんたで色々試させてもらおうじゃあないの！」

だが、直後の言葉でその謎も解けた。

ゆえに。

今、遂に神による人への試練が幕を開けた。

12. 中米の神・サンタナ 4

「そんじゃあ行くぜエエー！　まずは一発……！」

ジョセフが駆ける。その勢いを乗せて、鋭く拳をお見舞いする。だがサンタナの眼前に迫った瞬間に、彼は慌てて攻撃をやめた。そして両腕を両サイドに掲げて防御の姿勢を取る。

無理もない。何せ、サンタナのあばら骨が一気に膨張、拡大して展開され、ジョセフを挟み潰そうと迫ってきたのだから。

「うおおおーッなんだアー!？」

あばら骨はさながら刃のようであった。アルフィーが、前世の知識から露骨リブス・ブレードな肋骨と呼ぶ攻撃だ。骨の一本一本が自由自在に回転し、四方からの攻撃を可能とする。

最大圧力は、一平方センチメートルに対して825キロ。並の人間ではろくに耐えられず、全身を雑なサイコロステーキに加工されるだろう。

しかし、ジョセフには波紋がある。これによつて超人的な力を発揮できる彼は、なんとか露骨リブス・ブレードな肋骨を受け止めることに成功した。

瞬間、波紋が弾けてスパークする。だが、露骨リブス・ブレードな肋骨は骨だ。骨は血肉と異なり波紋伝導率があまりよろしくない。このため、防御と同時に波紋を流し込むことはできなかった。

ジョセフは防御が間に合ったわずかな猶予を生かして、後ろへ距離を取る。

「あ……つぶねーなア！　どんな骨してやがんだそれ……気色ワリーッ！」

尋常ならざる迎撃に冷や汗を流しつつも、状況は悪くとも、軽口は欠かさない。それがジョセフの戦い方だ。

一方のサンタナは、いまだに観察する姿勢を残している。今しがた目の前で起きた波紋のスパークに、興味津々のようだ。

「なるほど……今のが波紋か。初めて見たが、実に興味深い」

「……チッ、波紋まで聞いてやがんのか。あんたのねーちゃんともねー情報通だなオイ」

「その通りだ。姉さんは多くのことを知っている」

「……知恵と夜の女神アルフィーか？」

「ほう？ やはり姉さんほどの存在ともなると、海をまたいで名前が伝わっているのか。さすがだな」

対峙しながらの会話でサンタナの情報源に当たりをつけカマをかけてみたジョセフだったが、当のサンタナはジョセフの言葉をごまかすことなく、真正面から頷いて見せた。

これは少々予想外だったが、ジョセフにしてみればそんなことより推測が当たったことのほうが問題だった。

何せサンタナは肯定したのだ。中米、およびウエルズを中心に名前が伝わり、それどころか結構な広範囲で一定の信者すら存在するアルフィー神こそ自らの姉であると。

柱の男であるサンタナがこれを是としたのであれば、アルフィー神もまた彼とは同族ということになる。となれば、ローマの地下で眠る他の柱の男たちとも。

（ウツソだろーっ!? 柱の男が四体もいて、一体と戦うだけでもプレッシャーしんどいのに、まだ一体いるのかよッ!? しかもこいつらと違って情報がねエー! どこにいるかもわからねーときやがる! サイアクツ!）

サンタナはやけに姉を誇らしげに語ったが、ジョセフはそれどころではない。もう一体、まだ見ぬ柱の一族がいると確定してしまったのだ。悪夢も同然であった。

まあ、その五体目の柱の一族ことアルフィーは全力で人間の味方であり、普通に今もジョナサンと一緒に行動していたりするのだが。なんなら四年前、ジョセフともニアミスと言える程度には接近したことがあるのだが、彼がそれを知る由はない。

「……そのねーちゃんはどこにいやがるんだ？」

「さあ、どこだろうな……最後に会ったのは二千二百年ほど前だから、俺は知らん」

「チツ……知ってるよなあ〜。他の連中共々博物館に飾ってやろーと思っただのによお〜!」

それでもジョセフは内心を隠してサンタナを煽る。先ほどの口ぶりからして、姉についてつつけば反応するだろうという魂胆だ。

こういう口八丁で、相手の冷静さを失わせるのもまたジョセフの戦い方である。本当に知らないのかどうか、確かめたいという思惑もあるが。

しかし、それは悪手であった。

「……その冗談は笑えんな」

今まで遊ぶような空気すらあったサンタナが、一気に殺気を膨らませたのだ。

瞬間、ジョセフは己の失策を悟った。どうやら中米の偉大な神様は、かなりの姉バカらしい。

「いやすまん、今のは撤回する。マジで、今のは俺が悪かつ……」

「姉さんを侮辱することは許さん！」

サンタナが腕を大きく後ろに引いた……かと思うと、次の瞬間すさまじい勢いで拳が放たれた。彼の腕は勢いのままにぐんぐんと伸び、距離を取っていたはずのジョセフに難なく迫る。

「うおーッ!?!」

ズームパンチの数倍にもなる長く強烈なパンチに、ジョセフはオーバリアクション気味にのけぞって回避する。

そのまま仰向けに倒れ込み、手を床についてカポエイラの要領で足を蹴り上げる。腕が伸び切ったところに蹴りを食らわせ、波紋を注ぎ込んでやろうという魂胆だ。

だが、

「ふん！」

「そつちもかよ!?!」

今度はサンタナの足が、逆立ち状態のジョセフの腕を薙ぎ払わんと、床スレスレのところを切り裂くようにして迫ってきた。

アルフィーならゴムゴムの鞭とか言いそうな攻撃を、ジョセフは空中に逃げて回避した。腕の筋肉を振り絞り、床を押しした反動で逆立ちの状態で跳んだのだ。

空中でぐるりと回転して態勢を整えて、着地に備えるが……サンタ

ナノ猛攻は続いていた。空中のジョセフに、再び伸びる拳が迫ってきたのである。それも複数！

「喰らえー！」

「ちィー！」

空中では踏ん張れない上に、向きを変えることができない。仕方なしにジョセフはそれを……アルフィーならゴムゴムのガトリングとか言いそうな攻撃を迎え撃つ。

身体を縮めて被弾する場所を減らしつつ、顔を隠した肘でだ。

「波紋肘支疾走！」

「むっ！」

肘は骨が外に近い分、硬さによる攻撃力を得られる部位だ。おまけに人体の中では先端でもあるので、波紋を放つにも具合がいい。そこで防御することで、多少のダメージは覚悟しつつもこちらも返すことができる。攻防一体の波紋疾走だ。

サンタナの拳がいくつもジョセフに刺さる中、肘にぶつかって骨と骨が衝突する音が特に大きく響く。さらに、踏ん張れないジョセフは大きく後ろに吹き飛ばされ、壁に背中から激突した。

（くっそ……い・四階か五階から叩き落とされたみてーに強烈！ 致命傷は避けられたが……）

最も重要な腕と肺は問題なく守れたが、他の打撃はなかなかのダメージだ。波紋があってもなお、すっかり落ち着いて呼吸を整えなければ治しきれないレベルである。明らかに吸血鬼とは格が違った。

一方のサンタナは、遂に波紋を受けた拳を眺めその感触を確かめていた。興味を惹かれるのか、殺気は多少収まっている。

「ヌウ……これが波紋……なるほど、確かにこれは太陽と同質のエネルギー……！ よくぞ見つけたものだ……。やはり人間も侮れんな」

しかしサンタナの身体が崩れることはなかった。確かに波紋が流れた拳はやや灼けていたが、それだけだ。軽微な波紋傷以外にダメージらしいものは見えず、無傷ではないがまだ余裕は十分ある。

それを見て、ジョセフは盛大に舌打ちをした。

（……確かに波紋疾走は当たった！ なのにあの程度かよ!? 吸血鬼

より格段に波紋に強えーでやんの！)

吸血鬼なら、しつかり波紋疾走オーバードライブが入れば致命傷になる。全身に回る前に患部を切除すれば助かるが、放置することは絶対にできない。

だというのに、このサンタナは普通にぴんぴんしている。これでは倒すために何発拳を叩き込まねばならないのか、見当もつかない。

(ただ殴るだけじゃダメだ……！　けど武器になるモンは結局ナシのままだし……ったくあのアホ王はろくなことしやがらねーぜ！

だがないなら仕方ねー、なんとかして弱点を作るしかねーか……！)

「波紋とは、確か……『呼吸』……か……『血液』で生じるエネルギーだったな……？　と、いうことは……」

ひとまずサンタナが傷を観察しているうちに少しでも呼吸を整え、傷を癒す。痛みも和らげたところで、目先の策は決まった。

まずは目に見えるだけの十分な傷を与えなければ。表面がダメなら中からだ。

そう考えたジョセフはサンタナから視線を外すことなく、床に転がっていた死体の腰からナイフを引き抜いた。多くの兵士が装備している銃剣用のものだ。あわせてライフル銃も拾い上げ、しつかり銃剣とする。

使えるものは何でも使い、相手を打倒する。それが仙人の技として発展したチベット式波紋道とは異なり、兵士の技として発展したローマ式波紋道の特徴だ。

「おりゃあああー！」

床を蹴り、ジョセフが突撃する。その姿はさながら、中世騎士のランスチャージだ。

突き出した銃剣には、まだ波紋は流さない。気づかれているかもしれないが、それでも物質に波紋を流し帯びさせる技術はまだ隠しておきたかった。

これをサンタナが迎え撃つ。彼はジョセフの手にした銃剣を見て、攻撃を受けるつもりのようなうだ。

ジョセフとしては「余裕こいてんじゃあない！」と言いたいところだが、相手が油断してくれているなら好都合だ。あえてそこを指摘し

てやるほど彼はお人好しでもない。ナイフで身体に穴を開け、そこから波紋を流し込む作戦に変わりはない。

そして両者がぶつかり合う。巨漢と言って差し支えないジヨセフの突撃は凄まじい威力を持って、サンタナの腕に刃を突き立てることに成功した。

だが、刺さった瞬間にジヨセフはダメだと悟る。

「なんだアーこりやアーツ!? まるでゴムみたいに身体に包み込みやがったッ!」

何せ、まるで手応えがなかったのだ。切っ先はサンタナの腕をなら傷つけられないまま、その中にぶよんと沈み込むだけ。まるで沼に棒を突き刺すような徒労感だけが感触として伝わってくる。

サンタナはこうなることをわかっていたからこそ、攻撃を敢えて受けたのだ。彼の余裕な態度は決して慢心でも油断でもなく、当然の反応だったのである。

けれども、実は原作のそれよりは深く刺さっている。全身を用いた突進があつたからこそ、少しだけ……ほんのちよっぴりだが体内深くまで至つたのだ。

だが銃剣は無視して、サンタナの蹴りが放たれる。蹴るにはあまりにも不向きな体勢のまま、おまけに関節を無視した蹴りが、しかし風切り音すら響かせながらの強烈な蹴りがジヨセフの肺近辺を襲う。

「甘いぞ。呼吸に依るものなら……ここは急所だな?」

「ぬおおおおあー!」

これを無防備に喰らうわけにはいかないと、後ろに跳んだジヨセフ。ギリギリのところまで回避に成功したが、サンタナの脚はやはり伸び、鞭のようになつて追い打ちをかけてくる。

「ぐ……りゃあーっ!!」

その攻撃を、引き戻した銃を盾にしてかろうじて防ぐ。秘められた威力は相当なもので、銃は斜めに折れてしまった。

「……む?」

だがサンタナは、そこから追撃をせずに足をとめた。銃剣の刺さっていた腕から、先ほどと同じような焼ける痛みが走つたのだ。

「……チクショー！ 行けると思ったがこの程度かよーッ！ どんだけ頑丈なんだ柱の男つてのはよおおく〜！」

それを見てニヤリと笑うのはジョセフだ。台詞だけ見ればうまくいかないことへの悪態だが、彼は確かに攻撃に成功していた。

つまり彼は、後ろに退がる直前に波紋を流し込んでいたのだ。銃剣を媒介に、サンタナの腕にだ。

「……波紋とは、この手の物質を伝導するののか」

サンタナもそれにすぐ気がついた。

そう、ジョセフが行った技こそ、金属を通して波紋を流し込むもの。
メタルシルバーオーバードライヴ
銀色の波紋疾走である。

だが複数のパーツに分かれる上、肝心の短剣部分も媒介の銃にしてみれば外付け。お世辞にも技と言えるほどの量は流れなかった。

おまけに金属を伝わることに気づかれてしまった。これですますやりづらくなつたと、ジョセフは頭をかく。

「そーいうこと。俺としちゃあもうちよいいーとこで使いたかったんだがな……あなたの足技をこれ以上食らうのは勘弁だったし、仕方ねーとするぜ」

それでも彼は悲観しない。少なくとも体内からはちゃんと波紋が通じることがわかったのだ。このままガンガン戦うと決意を新たに、攻撃を再開する。

途中、やはり床に転がっていた死体から新しくライフル銃と、さらに血塗れの軍帽を狙って拾う。ただの布製なので波紋伝導率は高くないが、ジョセフほどの使い手なら、これだけの血を吸っていれば問題ない。

彼は軍帽に波紋を流し込むと、フリスビーの要領で投げつけた。もちろんフリスビーとは比べ物にならないほどの速度と威力を込めて。

対するサンタナは、そこに宿る波紋を見て回避を選択。そうしながら腕を伸ばし、しならせ、再び鞭さながらの攻撃を見舞った。

これを、やはり再び拾った銃で防御したジョセフ。しかしその瞬間、銃で防がれた腕……というよりは手。その中の人差し指と中指がさらに伸びて、ジョセフの喉へ殺到する。

アルファイなら、間違いなく流星指刺スターフィンガーとか言うだろう。

「ど……ここまで伸びるんだあんたの身体はよオオーツ!?」

ギリギリであった。ギリギリのところ、彼は防御の直前に拾っていたもう一つの軍帽が間に合った。

波紋を宿した軍帽はさながら、小型のラウンドシールド。サンタナの指を弾き、致命傷を防いだ。

と同時に、ジョセフはこの軍帽を二投目のfrisbeeとした。勢いよく飛び出したそれを見送り、戻っていくサンタナの腕を波紋を通した銃で薙ぎ払おうとするが……これは間に合わなかった。

しかしそれでも、彼はニヤリと笑う。最初に投げた軍帽が、ぐるりと向きを変えてサンタナの背後から襲おうとしていたからだ。

「無駄だ、俺の耳の良さを忘れたか」

が、当然のようにノールックでかわされた。ただ回避するだけでなく、サンタナもまた拾った銃で軍帽を殴りながらだ。

殴られた軍帽は、さながらバツターに打たれたボールのように勢いを増してジョセフを襲う。

「忘れるもんかよ！ それはただの布石ってやつだぜ！」

こちらにもまた、軍帽を銃で殴り返すジョセフ。彼の場合は銃に波紋を流していたため、軍帽はさらに威力を増してサンタナへ返っていく。

そして同時に、二投目の軍帽がやはりサンタナの背後に迫る。

「言ったはずだ、無駄だと」

サンタナは前から迫る軍帽を銃で叩き返しつつ、背後から迫る軍帽には傷を負った腕から血液を飛ばして迎撃した。

軍帽には、普通ならその程度は吹き飛ばせるだけの威力があったが、そこは人外の血だ。軍帽に宿る波紋はこれを滅するため浪費され、普通の帽子に戻ってぱたりと床に落ちた。

「ぐぬ……！ く……っ、く、単純に腕力の差か！」

一方、ジョセフも打ち返された軍帽をもう一度殴り返そうとしたが、先ほどまでよりも明らかに威力を増した軍帽を完全には叩き返せず、銃が弾かれてしまった。

結果として軍帽は明後日の方向へフアウルとなったが、膨大な力を逃し損ねたジョセフの体勢は崩れてしまっている。

そこにサンタナが猛然と迫り、怪我を負っていないほうの腕で強烈なエルボーをぶちかましてきた。

「うぐう!?!」

今度こそ回避できなかったジョセフは、両腕を盾としてこれを受け止め……ようとしたがしきれず、サンタナの豪腕に吹き飛ばされ床を転がった。肘は間違いなくジョセフの胸に入っており、ガハツ、と血反吐を吐く嗚咽のような声が漏れる。

彼はそのまま死体の中に転がり込んだ。それでも戦意は衰える様子を見せないが、直撃による怪我は重く、なかなか立ち上がれない。

そこをサンタナが見下ろした。悠然と歩み寄りながら。

「どうした……もう終わりか?」

「て……てめーの次のセリフは……『姉さんに予言されるほどの男が、まさかこの程度か?』だ……!」

「姉さんに予言されるほどの男がこの程度か……、ツ……!?!」

だが次の瞬間、わりとあっさり身体を起こしたジョセフに指差されて、ハツとなる。

その間に片膝の状態まで身を起こしたジョセフは、しっかりと笑っていた。身体の怪我也、サンタナが想定したほどではなかった。

ジョセフはエルボーを受ける瞬間、その衝撃に逆らわず流されるように跳んでいたのだ。確かに攻撃は受けたが、それによって致命的なダメージには至らなかったというわけである。

いや、一般人なら既に救急搬送されるレベルの怪我なのだが、そこは波紋戦士。高い回復力と痛覚緩和ゆえに、まだまだ十分行動可能だ。そうしているうちにも、ゆっくりとだが怪我は回復し続けているのだから。

「この程度?」んなワケねーだろマヌケツ! てめーの足下をよーく見てみな……お前は既に俺の策にはまっているのよーツ!」

言われて足下に目を向けたサンタナ。しかしそこには何も無い。ただ、周りの死体から流れ出た血だまりがあるだけで……。

——血だまり？

「……ッ、まさか！」

「そのままさかだッ！ 俺は最初っから、ここに連れて来られるのを待ってたんだぜッ！」

だがサンタナがジョセフの意図に気づくより早く。既にジョセフの攻撃は始まっていた。

「届け！ 俺のインディゴブルーオーバードライブの波紋疾走！」

膨大な波紋が血だまりを通して床を走り、曼荼羅のような波紋を描きながらサンタナに足下から襲いかかった。

13. 中米の神・サンタナ 5

黒ずみ始めた赤の上を、インディゴブルーオーバードレイブ藍色の波紋疾走の青い光が疾る。波紋はそのままサンタナを捉えた。

「ぬおおお……ッ!？」

下半身からの激痛に、サンタナが苦悶の声を上げる。効いている。間違いない。

事実、結果としてサンタナの動きは止まり、波紋傷特有の煙が下半身からもくもくと上がり、がくりと膝をついた。下半身が溶け始めていた。

……が、そこまでであった。そこまででとまってしまった。

そもそも、インディゴブルーオーバードレイブ藍色の波紋疾走は元々威力はそこまで高くない技なのだ。水鉄砲は穴が小さいほうが勢いよく遠くまで飛ぶ、その原理の通りである。広大な大地を媒介とするため、どうしてもエネルギーが口スが出てしまうのだ。

だがジョセフもそこは考えている。サンタナに射殺された大勢の兵士から流れた大量の血の上まで、サンタナを誘導して見せた。そうしてこの血を媒介にすることで、床と血の波紋伝導率の差を利用して指向性を持たせてサンタナへの一撃としたのである。

おまけに、普通よりも気合と量を込めた。これで間違いなく、行けるはずだと踏んだのだが……問題は床のコンクリートである。これが想定よりも波紋伝導率が高かった。

これにより、波紋は直接の媒介とした血液だけを通らず、床にも拡散してしまったのである。その結果が今の光景だ。サンタナは大ダメージを負いはしたが打倒には至らず、下半身も溶けかけたところにとまってしまった。

「ハアハア……っ、くそ、なんでここのコンクリ、こんなに通りが良いんだ……!？」俺としたことが、見誤ったぜ……!」

対して、ほとんど一瞬のうちに膨大な波紋エネルギーを一気に使ったジョセフは、久方ぶりに呼吸を乱し始めていた。ティーンになつてからは滅多になかった感覚に、思わず顔をしかめる。

あそこは下手に波紋を流し続けるのではなく、一度切り上げて別の技を仕掛けるべきだった。そう思うが、覆水は戻らない。

「ま……まだだ……！　俺は……俺は！　まだ動けるぞ、ジョセフ・ジョースターアアー!!」

おまけにサンタナは、まだ試練を終わらせるつもりがないらしい。歯を食いしばりながらも立ち上がり、なおも攻撃を仕掛けてきた。大きく振りかぶった腕が、たわんで遠心力を伴ってハンマーのように振り下ろされる。

「くっそ、このままじゃあヅリ貧だぜ……！」

横に跳んでこれをおかわすが、叩きつけられたサンタナの拳は容赦なく床を破壊し、破片を巻き上げた。

もはやサンタナの攻撃に先ほどまでの威力も速度もなかったが、それでも並みの吸血鬼程度には強力なので、冗談にもならない。

巻き上がった破片すら、今のジョセフには危険だ。サンタナから受けたダメージや波紋の消耗からして、正面から殴り合うにはもはや難しい状況なのだ。

だがいつも使っている武器は、ここにはない。銃や刃物が効かないことは証明されている。

そしてこの場にはもう、他に使えそうなものはない。

ならば取れるのは最後の手段しかない。

そう判断したジョセフは……

「やっつけられっかチクシヨール!!」

背中を向けて逃げ出した！

幸いジョセフの立ち位置は、先ほどの回避で出入り口の近くに移動していた。扉も開け放たれたままになっていたので、一直線で部屋から離脱できた。

その背中を、サンタナの槍のような貫手がかすめて壁に突き刺さる。

「ぬう、待てー！　貴様、この期に及んで逃げるつもりか！」

ある意味で潔い行動に、サンタナは追いかける。壁に突き刺さった腕はそのままに、身体をそちらに向けて戻す形で高速移動する。

そう、追いかけてしまった。

(かかった！ そのまま追いかけてこい！)

計画通りと、背を向けたままでジョセフがニヤリと笑う。

(へッ、ドイツ野郎の手を借りるのはシヤクだし正直気は進まねーが……使えるもんはなんでも使うのがローマ式だぜーッ！)

だから彼は、地下から地上に向かう長い階段を猛スピードで駆け上がっていく。

呼吸は乱れ気味だが、完全に疲弊しているわけでもない。常人なら不可能な走りだ。時折壁をちらちらと横目で見ながらも、地下深くから地上へ、地上へ近づいていく。

サンタナも同様に息を切らすことなく駆け抜けるが、こちらの場合最も重傷なのが下半身である。そのため通常なら確実に距離を詰められるはずだが、今回ばかりは両者の距離は縮まらない。

ただ、使えるものならなんでも使うというのは、何もジョセフの専売特許ではない。追いかけているながら、サンタナは壁を這う配管を無造作に引きちぎって投げてきた。

「ぬうん!!」

「うおーッあつぶねーッ!」

人外の膂力で放られたそれは、風切り音を響かせながらジョセフの背中に襲いかかる。

彼はこれをかろうじて回避するが、それは運によるところが大きいい。その後も同じことが続けられるとかなり危ういだろう。

だが、その心配はもう必要なさそうだった。

階段を登りきった彼は、その先にある外へ繋がる階段を無視して、その階層の奥へと足を向けたのだ。再び投擲された配管を、再びすんでのところで回避して走るスピードを上げる。

外へ出るための階段は他にないため、一見すると袋小路に自ら飛び込んだように見えるが……もちろん、そんなつもりは微塵もない。むしろ袋小路に入ったのはサンタナのほうだと、ジョセフは断言できた。

そうしてジョセフは、居並ぶ部屋の一つへと飛び込む。

「こいつを使え、ジョースター！」

と同時に飛んできた油瓶とロープを受け取りながら、扉に門を叩き、さらに周りにあったものをとにかく扉の前に重ねて重しとする。

一通りの作業を終えたあと、一息ついて汗を手でぬぐう。そのまま扉のほうを向いたまま壁際へ後退する……が、すぐに追いついてきたサンタナが扉を叩く音が聞こえてきた。

「来たな……！」

そうしてジョセフが、自身とは反対の壁際に視線を送ると、壁が門や重しごと吹き飛んだのは同時であった。

「ここまでだな、ジョセフ・ジョースター！」

瓦礫と共にサンタナが入ってくる。とても重傷とは思えない威圧感に、しかしジョセフは鼻で笑って見せた。

「そうだな、ここまでだ……あんたがなアーツ！」

彼が手を挙げた。

その瞬間であった。

「喰らえエエエい！」

突然サンタナの背後から……つまりジョセフが先ほど視線を送った方向から、男の声が放たれた。

併せて光が灯され、白熱灯とはまた異なる光彩がサンタナめがけて放たれる。

「ぬう!? こ、これは……！」

「これぞ！……これぞこれぞこれぞオツ！ 我がドイツ軍が誇る秘密兵器ツ!! 我らゲルマン民族が作り上げた、人類の叡智の結晶ツ!! その名も……紫外線照射装置イイイツ!!」

声の主は、シュトロハイムであった!

彼の横には、ずらりと並んだ大きな装置。それらにはみな様に光球がいくつも備えられており、またそれらすべてが尋常ではない光を……紫外線のことさら多く含んだ光を照射している!

「フウウハハハアーツ! 最大出力が五基だツ! 逃げきれると思ふなよオオオオ!!」

「ぐううううう!! ば、バカな! こ、こんなことが……！」

放たれた紫外線は、レーザーさながらにサンタナを貫いている。

物理的な威力はない。だが光が当たっている場所から、彼の身体が少しずつ石化し始めているではないか。

サンタナは慌ててこの場から離れようとするが、

「おーっと、ここは一方通行！ もう出られねーぜサンタナさんよお
く〜！」

いつの間にか入り口を封鎖するように仁王立ちしたジョセフが、それを許さない。

手には一瞬のスキをについて用意されたロープ。油と波紋でコーティングされたそれは、もはや強靱な鞭だ。もちろん、打ち据えられたサンタナはたまったものではない。

「グアアア！ ぐ、くくっ、おのれ……！ た、ただの人間に……人間の道具に、俺が……この俺が……！」

せめてとばかりに、紫外線照射装置へ拳を伸ばそうとするサンタナだが、既に負傷していた彼の拳は五つあるそれらを破壊しきれない。

既に大ダメージを受けていた下半身が砕けて、サンタナの攻撃は半ばで終わる。紫外線照射装置を一つだけ破壊したところで、彼の上半身がぼたりと床に倒れ伏した。

先に装置を破壊しにかかっていたら、あるいは間に合ったかもしれない。しかしサンタナは、まずこの場を脱することを考えてしまった。恐らくワムウならば、逆に考えて状況の打破を企図したはずだ。こういう咄嗟の判断力の差こそが、カーズやエシデイシがサンタナを見下す最大の原因だったりする。

「おおおおおお……！ オオオオ……こ、この……結末は……予想、して、いなかっ……た……が……み、み……ご……、……」

やがて打つ手を失ったサンタナは、天井を仰ぐようにして手を伸ばし——その状態で完全に石となった。

「……フウウウー……や、やっと終わったか……力を見せるどころか、倒しちまったが……」

だがともあれ終わったと、ジョセフは今度こそほっと息をついた。それはシュトロハイムも同様で、やれやれとばかりに胸をなでおろ

している。だがすぐに姿勢を正し、高慢にジョセフを見る。

「ご苦労だったなジョースター！俺の伝言がちゃあんと伝わっていたようで何よりだ……あまりに遅いんで、くたばったかと思っていたところだ！」

「ケツ、やかましイーわドイツ野郎め！美味しいところだけ持っていきやがってコノヤロー！」

「フン、礼の一つも言えんのかなアアーイギリス人はああ〜!?

貴様の武器を持ってきたのも！ 奴にとどめを刺したのも！ 全え〜ン部、我々ドイツ軍のおかげではないのか……なアアーツ!?!」
「ニヤニをーーツ言わせておけばこのキャベツ野郎ツ！」

そうして安堵したところで、言い合いを始める二人。

「……てゆーかシュトロハイム！ てめー俺がドイツ語わかったからよかつたものの、読めなかつたらどーするつもりだったんだよ、アアン？」

「フン、考えが足らんなあ〜！ 忘れたか？ サンタナは既に英語を理解していたではないか！ せっかく秘密兵器のあるここまで誘導させるのに、英語で書いてはやつにも伝わってしまうかもしれんだろうー！」

「話してただけだろーが！ 文字と言葉は別モンなんだから、行けたに決まってるアア！ 俺はヒヤリングはできるが、リーディングはまだ不完全なんだよ！」

……そう、ジョセフがここまで来たのは、シュトロハイムの申し出があつたからだ。彼は逃げる直前、持ち込んでいた紫外線照射装置を思い出し、そこへ来るよう血文字を床に残していたのである。

いわく、「必殺の秘密兵器がある」と。そして、「没収されていた武器も取り戻しておくから来い」とも。そうして言葉通り、ジョセフがサンタナと戦っている間に準備を整え、装置を起動して待ち構えていたというわけだ。

もちろんこの秘密研究所の内装をジョセフが知るはずもないので、ヒントも残してきた。階段の壁に少しずつ記していたのである。万が一伝わらないよう、こちらドイツ語で。ジョセフが登りながらち

らちらしていたのは、これを読んでいたからだ。

ちなみになぜ紫外線照射装置がここにあるのかと言えば、原作と異なり吸血鬼や柱の一族に関する情報が早めにドイツに流れていたためである。原作でもシュトロハイム隊の壊滅からさほど間を置かず完成しているの、早まったことでサンタナ戦に間に合ったというわけだ。

「……とゆうーかだなア、おめーこんな隠し球があつたならなんで最初っから使わなかつたんだよ？」

「あの王様が半分も許可しなかつたからに決まつとろーが！ 『そんな危険極まりない兵器を我々の前に出すな、殺す気か』だどッ！ 許可されていたなら俺とて最初から持ち込んでおつたわーッ！」

「あ、うん、そうだな……そうだよな。すまねーな、なんか。大変だつたら、あれの相手……」

「……何も言うな、ジョースター。それ以上はナシだ。イギリス人の貴様からの同情なぞいらん……！」

何かを堪えるように上を向いたシュトロハイムに、ジョセフは色々と察した。あまりにも苦勞が偲ばれる立ち姿に、釣られて目頭が熱くなる。

「あの……少佐？ お話中申し訳ありませんが、コレ、どーします？」
「……どうしような」

そこに割り込んだ兵士に、シュトロハイムは復活しつつも頭をがしがしとかいた。

「いや、こいつ俺らのことはまったく殺す気なかつたみてーだし、戻してやってくれよオ。さっきの戦いも、よーするに神様人間を見る試練だったしよーッ」

「正気かジョースター!?!」

擁護してはみたが、案の定受け入れてはもらえなかつた。そりやあそうだ。サンタナとの戦闘の意味を理解しているのは、最後まで会話できたジョセフだけだ。

しかしシュトロハイムたちの気持ちは理解できるので、異なる心境ながらも特に抵抗はせず、頭をかきながらサンタナに目を向けるジョ

セフ。

石化している。当たり前だが。

それでも、この状態で捕食が可能なことはこの場の全員が知っている。既存の携行できる兵器では、破壊ができないこともだ。

さらに、石になつている以上波紋も通らない。通るようにするには紫外線の照射をやめなければならぬが、そうすると当然サンタナは復活するだろう。

ジョセフはそうしたいのだが、それは今しがたドイツ軍に拒否されたばかりだ。

波紋があれば運ぶことは可能だが……、

「重ッ!? いや重いつて言うか、持ちづらッ!」

不安定な形状で石化しているサンタナは、持ち運びにあまり適していなかった。

「ジョースター! 今世界の平和は貴様の手にかかっているぞッ!

早いところこいつを運び出すのだッ!」

「うるせー! この国の片棒担いだてめーらにんなこと言われる筋合いはねーぞコラア!」

かくして、波紋使いが一人しかいない現状では手詰まりに陥りかけたのだが……そこに穏やかな声が響いた。

「ここは僕に任せてもらえないだろうか?」

その声に、この場の全員が入り口に目を向ける。

いつの間に現れたのか、そこには筋骨隆々な偉丈夫が立っていた。しかしその表情、瞳は柔らかく、春の日の陽だまりのよう。

そんな彼を、ジョセフは知っている。

「……おじいちゃん!」

そう、ジョナサン・ジョースターその人であった。

14. 合流

ジョセフ、中米に向かうの報を聞いたわたしとジョナサンは、大慌てでそれを追いかけた。

そしてあれこれと情報を集めた上で、彼が今どこで何をしているのかを知って……これまた大慌てで現場に踏み込んだとき、既にサンタナは死にかけていた。けど死んではいなかったの……。

……セーフ！セーフ！セーフ！ 危ない！ 本つ当にギリギリのタイミングだった!!

決着のついた場所が屋内だったり、シュトロハイムが健在だったり、ドイツ軍の被害が少なかったりと、原作と異なる点多々あったけど……まあね、セーフだよセーフ。

ジョナサンはサンタナが死にかけてたことに関して、ジョセフにしっかりと説明しておけばこんなことにはならなかったはずだと地味に凹んでたけど。あとあと聞いた感じ、二人が戦った最大の理由は昔わたしがちらつとこぼした予言(笑)のせいらしいし、ジョナサンは悪くないよ。

……うん、わたしが悪い…… (震え声)

ともかくそこからジョナサンがドイツ軍を説得して、サンタナの回収がなされた。移送先はテノチティトランのSPW財団支部で、より具体的に言うならその研究所だ。

シュトロハイムがめちやくちやごねたけど、そもそもドイツ軍は原作と違ってサンタナ王国内に独自の拠点を持っていない。波紋使いのジョナサンとジョセフが財団側についていることもあって、最終的には渋々認めた。

そんな彼ですら、サンタナ王国側の施設に運び込むことは大反対してた。なんか彼的に、王様の相手はもう嫌だったのもあるみたいだけど、何があったのやら。

ちなみに原作と違いシュトロハイムには上官がいたらしいけど、ゴタゴタに巻き込まれて重傷らしい。なんか、焦って階段から転げ落ちたのかなんとか。そのため、原作同様現在の中米方面における代表者

はシュトロハイムになるようだ。

……で、諸々あつてから三日後。SPW財団の研究所にて、報告会があつた。財団の研究者たちを中心に、サントナについてわかつたことが話し合われるのだ。

オブザーバーとして、財団のトップであるスッピーと、波紋使いのジョナサンとジョセフ。あと、ドイツからシュトロハイムが参加している。

王様は抜き。彼らを入れるとややこしくなるからというのは、ジョセフとシュトロハイムがまさかの同意見だつた。本当によつぽどのがあつたんだな……。

ただこの話し合いの直前、サントナ王国の王様が色々と難癖をつけてきたんだけど……わたしがサントナに扮して私室に現れてみたところ、護衛の皆さん含めて泣きながら土下座された。サントナを殺そうとして逆に殺されかけたみたいだから、まあ気持ちはわかる。

もう二度としませんと、エンディシもびつくりの大号泣で誓つてきたけど、でもとりあえず保留にしておいた。これはサントナが決めるべきだろうからね。

それはともかく、これ以外は原作の流れと大体一緒だ。行われてる場所とメンツは違うけどね。あと、わたしからジョナサン伝いに情報が流れてるからか、原作よりは詳細に話された。

サントナはこのまま調査対象として紫外線を浴びせ続け、生物としての柱の男の肉体について研究していくことになったのも一緒。まあ、それは表向きで復活させるけどね。

ただしシュトロハイムがいることと、彼が五体満足ということもあつて、ローマに柱の男がまだ三体いる情報も開示されている。実際の対処にはジョナサンたち波紋戦士がこれに当たるわけだけど……シュトロハイムがドイツも援助する用意があると明言してくれた。これは大きい。

あとは、どこにいるかまったく情報がないわたしについても話題に上がっていた。手掛かりはないのか、目覚めているのか、そもそも生きているのか……などなど。

これはジョナサンが詳しいどころか、普通に一緒に行動までしてるから彼は事情を話せるわけだけど……ここではまだ話さないでおいてもらう。彼に嘘をついてもらうのは心苦しいんだけど、わたしのことを知る人間はできる限り少なくしたいって二人で一致してるからしようがない。

そしてそんな彼の話を聞いた人間の反応は、二つ。何か隠してるんじゃないかと言い募るか、隠していることは察した上であえて黙ってるかだ。なんていうか、ジョナサンに嘘をつく才能がなさすぎる……紳士だからね、仕方ない。

とはいえ、この場はなんとかスツピーがなだめてくれたので、一応は乗り切ることができた。財団トップとしての権限で反論をぶった切ったとも言えるけど……。

「……で、おじいちゃんはアルフィーとかいうやつ、何を隠してるんだ？」

そして話が不完全燃焼気味に終わったあと。サンタナを遠巻きに眺められる部屋に残ったジョナサンに、ジョセフがズバリ切り込んできた。

と同時に、スツピーが入り口のカギをかけて部屋を封鎖する。息が合ってるようで何よりだよ。

まあでも、この二人には話してもいいって、事前に話し合ってた。スツピーの口の堅さは信頼できるし、ジョセフに至っては完全に当事者だもんね。

「……わかってる、人払いされるのを待ってたんだ。二人には話すよ」

なので、ジョナサンは静かに語り始めた。

既に自分は最後の柱の一族……つまりわたしと会っていること。

わたしに人類と敵対する意思はないこと。

わたしがカーズ様と敵対する意思を固めていること。

今日までに活かしてきた情報のほとんどは、わたしからもたらされたこと。

なんならエイジャの赤石や、スーパーエイジャの搜索と回収もわた

しと同行していたこと。

それでもなお、わたしがそれらをジョナサンに委ねたこと……。

「僕はね、彼女は信頼できると思ってる。彼女に言葉を尽くして自身の想いを語ってもらって、それで信じられると。そう彼女を信じたんだ」

「ジョースターさん……」

「……どうだかなア。おじいちゃんはいいい人だけだよおおく、人もいいから騙されやすいところあるっておばあちゃんがぼやいてたぜ。だから家業の貿易商だって、人の手に渡ることになったってさアーツ」

「それについては本当、何の反論もできない……」

ジト目で厳しい事実を突きつけるジョセフに対して、ジョナサンは後ろ頭をかきながら苦笑した。祖父に対してあんまりな言い方ではあるけど、事実だからこればかりはわたしもあんまり擁護できない。

けど、ジョナサンはそれでも揺るがない。

「だけどね、ジョセフ。僕はそれでも信じると決めたんだ。だから何があっても僕は、僕だけは、彼女を最後まで信じるよ」

信念の人、ジョナサン・ジョースター。彼はとても証明できるはずのないわたしの話を、受け入れ信じると断言してくれた。それどころか、最後まで信じるとさえ。

こんなに嬉しいことがあるだろうか？ 推しにこれほどまでに信じてもらえるなんて、嬉しすぎて死にそう……！

「……これだもんなア、おじいちゃんは」

「J.O.J.O、お前ジョースターさんに対してそんな……」

「わーってるよスピードワゴン、みなまで言うな。わかっただよ。確かにおじいちゃんは嘘もヘタツピで、騙されやすいお人よしだけど……騙される才能は天下一品よ。騙したほうがだんだん申し訳なくなっただよ、最後は自白しちゃうくらいに人をまっすぐ信じちゃうんだ。それは俺にはない才能だと思ってる」

だから、とジョセフが言う。今までと違い、真剣な顔でジョナサン

と向き合ってただ。

「なら、俺はおじいちゃんを信じるぜ。おじいちゃんが信じる、そのアルフィーってやつを信じるとするぜ」

「ジョセフ……うん、ありがとう。僕の孫は、本当に立派な若者に成長してくれたみたいだ。嬉しいよ」

「……よせやい」

真正面からの称賛に、ジョセフが顔を逸らした。

うん、そういうところだぞ、ジョナサン。あなたはなんていうか、本当に太陽みたいな人だよなあ……。そういうところに、わたしがどれだけ救われてることか。現在進行形だよ、ホントにもう。

「……わしも同感です、ジョースターさん。五十年前から……あの日オウガーストリートで会ったときから、わしはあなたを信じると決めとります。なので、わしはこれ以上何も言いませんよ」

そしてスツピーも同意して、にんまりと笑った。

文字にすると二部の彼らしい落ち着いたものだけど、その顔つきは一部みたいなちよい悪なものだ。うん、彼はこういう雰囲気はやっぱり似合うな。

「二人とも、本当にありがとう」

そんな彼らに、やはりまっすぐにそう言えるジョナサンは聖人君子か何かだよなあ。

「それで……実はね、今回も僕は彼女と同行している。ここにも一緒に来ているんだ」

「マジかよ!?!」

「ジョースターさんッ! あんた今なんて!?!」

まあ、その直後に特大の爆弾を投下できるくらいには、ジョナサンも人生経験を積んでいるんだけどね。こういう茶目っ気は、歳を取ってから身に着けたものだろうなあ。

ともかく、この爆弾発言にはスツピーもすっかり一部当時のようなリアクションをしてしまったし、ジョセフなどは臨戦態勢を取って周囲に目を配り始めた。

だけどどれだけ探しても、わたしの姿は捉えられない。何せわた

し、王国到着からここまでの間、基本「スターシップ」の中に隠れてたからね。時間切れのときと王様にお話しに行ったとき以外は、大体ここで様子見だった。今回の会話もここから見ている。

いや、だつてわたしが普通に出てたらパニックになるのは間違いないし……。変身していったとしても、ジョナサンならともかくこの馬の骨ともわからないやつを、国の機密に関わることに簡単に触れさせるわけもないだろうし……。それならいっそ「スターシップ」から見ての方がスムーズでしょ？

うん、出入口の移動ができるようになって、外の様子がわかるようになって、本当に諜報がやりやすくなったなっと思う……。ものすごく便利……！

ともあれ、これでわたしも外に出られる。

「じゃあ、行ってくるね」

「はい、行ってらっしゃいませ」

「ませー！」

サチさんとレナータちゃんの見送りを受けて、わたしは自分を「スターシップ」の中から取り出した。次の瞬間、ジョナサンたちのど真ん中にわたしが出現する。

「うおオオ!？」

「なんと……!？」

もちろん、それまで何もなかった、気配すらなかったところに突然現れたものだから、みんな驚いた。驚いてないのは「スターシップ」を見聞きしているジョナサンだけだ。

わたしとしては、解説王スツピーに色々と言つてほしかったと思わずにはいられないけど……。完全に脈絡なかったから、さすがにこの状態じゃあ無理かな。

ちなみに今のわたしの格好は、スツピーとニアミスしたときとはだいぶ違う。あときは人前だったから、表向きの顔であるイギリス貴族的な服装だった。

けれど今は、柱の一族伝統の衣装を着こなしている。すなわち肌の露出がやたら多い、だけど隠すべきところは隠しているという……。その

……見る人（シヨシヤナとか）が見ればかなりえっち度の高く見えるやつ。

幼児体型のわたしじゃあそのステータスは上がらないはずだけど、一部の人間（シヨシヤナとか）には興奮されたので、ローマ以降はあんまり着けてなかったたっていういわくがある。でも現代の人間の衣装とは一線を画したものだから、柱の一族らしさが出るかなと思つて。

加えて今回は完全に元の姿なので肌は褐色だし、髪は銀だし、目は金だ。角だつて隠すことなく出したまま。これでどこからどう見ても、わたしが柱の一族だつてことはわかるだろう。

「こんにちは」

そんな二人に、わたしは声をかける。

「そして初めまして。わたしの名前はアルフィー。よろしくね？」

さらに、ペこりと一礼してにこりと笑う。よし、完璧だ。かまなかったぞ。

それでもしばらくは沈黙がこの場を支配していたけど……最初に復活したのはやはりというかなんというか、ジョセフのほうだった。

「な、なんだよ……女神なんて言われてるからどんなナイスバデーなネーちゃんかと思つてたら、ちんちくりんのガキンチョじゃあねーか！」

「神話じゃあ『幼い少女いとけなのような』とか『とても小さな』を枕詞にして書かれまくってるんだから、その期待は約束された敗北だったね……。大人のおねーさん風に描いてくれてる人も結構いるけど、こればかりはルベル強火の原作クラクが正解だよ。これでもサンタナより四千歳は年上なんだけどね」

「よ……ッ!? ババアじゃん!!」

「ババアはババアでもロリババアと言つてほしいなあ！」

おっと、ロリータが世に出てくるのは二十年くらいあとだったかな？

まあそんなことはいいんだ。わたしは発育と引き換えに日光耐性を手に入れたんだから、それはいいんだよ。もういいの。だからこの

話はこれでおしまい！

「そんなことより……表向きはアルフィー・ルベルクラクで通ってるから、人前で話すときはそれでよろしくね。変装もしてるよ……こんな風にね」

言いながら、わたしは肌の色を白く、髪の色を金に、目の色を赤に変え、しゅるると角を頭の中に収納した。これでどこからどう見てもコーカソイドの少女だ。

この劇的な変化に、ジョセフとスッピーが啞然とする。

「る……ルベルクラク？ まさか、あの伯爵家の？ 本当に？」

今度は先に復活したスッピーが、それでもなお信じられないと顔にありありと出したままで、恐る恐る声をかけてきた。

「うん、そのルベルクラクだよ。記録の上では、現伯爵ティトオ・ルベルクラクの末娘ってことになってるね。少し前にちよつとだけ報道もされたんじゃないかな？」

「な……!? で、では、ルベルクラク家は……」

「あそこは二千年以上前からわたしのシンパだよ。信者って言ってもいい。そういう意味ではサンタナ王国と似たようなものだね」

わたしがそう告げると、スッピーは絶句してしまった。

まあね、イギリスに深く根付いている伝統的な貴族が実は柱の女、一の信者の集団とかどんな冗談だっけと思うよね……

「待って待って、あんたもうそこまで人間社会に馴染んでやがんのか!?」

「ルベルクラクの先祖に当たるルブルム商会は、わたしが設立した組織だからね。それが多少形を変えながらも現代まで残ってた、だから伯爵は最初からわたしに協力してくれてるってわけ。わたしも元々、人間好きだからね。昔からわたしは人間社会の中で生きてきたから」

ついでに言えば、ルベルクラクの敷地内で眠ってたし、伯爵も必ずしも従順ってわけでもないけど……そこは無理に言わなくてもいいかな。

ジョセフはそれよりも、最後の言葉のほうが気になったらしいし。

「人間が大好きイイ〜…？ ハッ、信じられねーなア！」

「ホントなんだよ！ わたしはね、人間の作るものが好きなんだ。特に人間の歴史が好きなの。連綿と受け継がれていく人間の意思と精神、それが宿ってるものが好きで…だから、それを作り上げることが出来る人間が大好きなんだよ！」

そうは言っても、なかなか信じるって顔をしてくれないジョセフ。この辺は、のちの不動産王というかなんとか…単純には人を信じないところが出てくる感じするなあ。

「…ま、そこはそういうことにしといてやるよ…それよりも、だ
「ん」

「てめー、本当に他の柱の男と戦うのかよ？ 同族のはずなのに？」

それまでのおちやらけた感じから一転して、鋭いことを言ってきたジョセフに、わたしは背筋が伸びる思いがした。

15. 罪ありき、ゆえに

「J O J O、お前……」

「あ、いや！ 違うんだスピードワゴン！ おじいちゃんのこととは信じてるぜ!?!」

ジョセフの言葉に、スッピィが少しチベスナ顔で突っ込んだ。

これにちよっぴり慌てた様子で……というよりは、いつものノリに戻ったジョセフが言葉を繋ぐ。

「だからこれは、単なる好奇心ってやつだぜ！ だってあの柱の一族が、人間の味方するって言ってるだぞ？ なんてそうしようと思ったのか、聞きたくなるのが人情ってえもんだろーッ!?!」

その態度に、思わずくすりとしてしまう。

ただ、わたしが人間の側に立つ理由は自分本位というか、立派な理由があるわけじゃあないんだよね。ジョセフの性格から言って、怒りそうではあるけどそれで我を忘れることはないだろうし、言うのは構わないけど……。

言うなら言うで、できる限り想いが伝わるよう真剣に話をしないといけないだろうな。それがわたしが見捨ててきた人たちへの、最低限の礼儀だろうし。

ちら、とジョナサンに目を向ける。彼は心配そうにわたしを見ていた。

ああ、ありがとう。でも大丈夫だよ。あなたのその気遣いだけで、わたしはがんばれる。

「……わたしはね。人を殺すのが嫌なんだ。単純にね」

まあそれでも、わたしに言えることは、かつて伯爵やジョナサンに語ったことだけだ。わたしの心境を説明するためにはそうするしかない。陳腐かもしれないけど、今のわたしの原点はつまるところそこだから。

だから同じことを語る。カーズ様といると、人を率先して殺さなければいけないこと。それを強要されてきたこと。殺されたくなくて、実際にそうしてきたこと。それをすべて今でも正確に記憶している

こと。

それらに耐えられないのだと。ずっとそれに悩んできたのだと。そして……ブツダに諭されて、初めて前を向くことができたのだと。

「わたしね、人間として生きていたいんだ。身体を変えることはできないから、それっぽく振舞うことしかできないけど……でも、なれなくっても、人間と一緒に生きていたい。だから……だからわたし、カーズ様を倒すんだ、って……そう決めたの」

そう締めくくって、わたしはジョセフの顔を改めて見た。

彼は最初と違って、とても渋い顔をしていた。想像と違ったんだらうな、つてことがよくわかる。視線は怒気を感じるくらいには鋭く、視線だけでも怪我をしまいそうだ。

でもどっちかっていうと、これが人間として当たり前の反応な気がする。むしろ、最初からわたしのすべてを見抜いて受け止めてくれたブツダ、利用しようとする考えた伯爵、寄り添うような優しさを分けてくれたジョナサンが普通じゃないんだろう。

「あんたが思ってた以上に真面目に答えてくれたから、俺も今回ばかりはそれなりに茶化さず言うけどよ……なんつーか、納得できねーなア……」

そして、少しの沈黙を挟んでジョセフがため息をついた。そこにはやはり、怒りの気配が含まれている。

「あんたも大変だったんだな……つてことはわかった。色々……そんな中で、よくぞ人間の側についてくれたなっと思うぜ。そこは素直にすげーと思う……」

「……っ？」

けれどその怒りの向いている先が、なんだかわたしの思ってたのと違うような気がして、思わず目をぱちくりさせる。

「ただこう、仕方ねーことも、あんたがこっちに来てくれただけでも御の字ってことも、わかっちゃあいるんだがよオー。それでも、なんでブツダ以外、あんたを導いてあげられなかったんだ、つてな……そんな風に思っちまったんだよなーッ。そうすりゃあ、まだ今よりはみん

な納得してここまで来られたらうにって、思っちゃったんだよなア
くく……」

普段の明るい様子がほとんど見えない複雑そうなジョセフに、わたしは何とも言えない。ただ、なんとなく若いな、とは思ってしまった。この辺りは、年の功だろうか。そういえば、ブツダも伯爵もジョナサンも、わたしの話を聞いた時点で結構な年齢だったな……。

「だってよおおくく、神話じゃああんた、知恵やら知識やらの神って言われてるじゃあねーか。所詮神話だ、実際は全知全能じゃあないにしてもよ、そう言われてるってことは近い何かがあんだろ？ あの手タナですら、あんたのことは偉大なねーちゃんって扱ってたしなア。」

だからもつといい出会いがあんたにありやあーよ……あんたもそこまで苦労せんでもよかつたらーに、つて……まあ、予想に反してめちゃくちゃ人間臭いお人だったからそう思うのかもしれないけどよ……そういうあれやこれやに納得しきれてねー自分の未熟さに、他ならぬ俺自身が納得できねーんだよなア……ッ！」

そりゃあ、元人間だし。

なんて、思わず頭によぎった。

だけど、ジョセフから目を背けるわけにはいかない。彼は納得いつてない自分に納得いつてないみたいだけど、ふと抱いてしまったというその気持ちは要するに……そういうことなはずで。ならそれは、間違っていないと思うから。

だってわたし、一万年以上もの間、カーズ様に反抗するどころか、備えようとすら思わず生きてきたんだよ。おまけにカーズ様がどういう人で、彼が何をするかを最初から知っていた上に、実際そういう人だつてところを見つけてきた。

にもかかわらず見て見ぬふりをして、あまつさえ手を貸してきた。その間にわたしが関係した人の死は、万じゃあとても足りない。

「……ジョセフは何も間違つてないよ。だって、わたし……怖かったんだもん。わたしにあつたのはそれだけで……わたしは小心な臆病者で、ずっと逃げてたんだ。自分でもわかつてるんだ、なんでもつと

早く決心できなかったんだって……」

でもその問いに対する答えは、怖かったから、以外に答えられないから……。

「いやー……まあその、あんたは元々の立場の中ですげーやってきたと思うぜ俺あよオ」

「そう思ってくれるのは嬉しいけど……でも、結局のところ物事は良し悪しのどっちかに押し込めるしかなくって。それならやっぱり、わたしのそれは間違いない悪しなんだよ。言い訳のできない……。だからあのとき……ブツダに諭されて自分の生き方を定めたときに。わたしは……わたしの罪から逃げも隠れもしないって、そう決めたの」

「逃げも隠れもしない……？」

「うん。できる限り、人を死なせない。わたしの手が届く限り、理不尽に人を死なせない。そのためにわたしは、まだ十万年はある残りの寿命を使う……そう決めたんだ。それがわたしの償いだって」

「………ッ」

ぎり、とジヨセフが齒噛みする。渋い顔だ。まだ納得できてない、のかな？

まあ、これはきつと、人によっては一生納得できないだろう。今まで理解のある人にしか会ってこなかったから、こんなに態度に出して、それどころか面と向かってぶつけてくる人は初めてだ。

ただ再三言うけど、彼は何も間違っていない。でもって、何が悪いってそれはわたしだ。

それなら、わたしは納得してもらえように行動するだけだ。それでもやっぱり、納得してもらえないにしても。わたしはわたしにできる範囲でやり続けるしかない。そうしなければならぬ。わたしがやったことは、それほど罪なのだから。

「その言葉に……嘘はねーだろうな……！」
「ないよ」

そのつもりだ。だから即答した。

「……ッ！ チィ……わーった、わかったよ……クソッ！ あーもう、

むしゃくしやすんなあ〜！」

それを受けて、ジョセフは頭を掻きむしりながらも矛を収めてくれた。

もつとも怒りが消えたわけではまったくなくて、表に出さないよう努力はしているけど、隠せていない。

「……ジョセフ？ 納得してないなら、遠慮なく殴ってくれてもいいんだよ。見た目こんなんだけど、わたしは普通に大人だし」

実際、彼も自覚はあるんだろう。そそのかすように言ったわたしに改めて向き直ると、わたしの眼前に波紋が宿った拳を突き付けてきた。

「違えーんだよ、俺が納得してねーのはそういう方向の話じゃあなくってだなーッ！ なんであんたはそうやって……クソッ、チロっただけで殴りてーって思っちゃまったじゃあねーか！」

？ よくわかんないけど。

殴りたいなら別に、殴ってくれていいんだけどな。わたしには断る資格なんてないんだし。

そもそも、「納得」はすべてに優先する！ じゃない？

「ま……待った、待つんだアルフィー君。それはいくらなんでもやりすぎだよ！ 君はもう十分償っている！ これ以上自分を軽視しないでくれ！ 何より、ジョセフをそう焚きつけないでほしい。このままだとジョセフだけが後悔するじゃあないか！」

「え……え、あ、あー……ひよっとして、ジョセフが納得いかないのって、わたしを案じて……？」

「そうだよ！ 遅えーよ、せつかく俺がガラにもなくちよっぴり心配したってーのにあんたってやつは！ つっーかよ、あんた仮にも知恵の神サマじゃあねーのかよ!？」

「いやー、その……それは完全に名前負けしてる肩書で……四年前起きてから知って、白目剥いたくらいには自分でも『ない』って思ってた……」

「だからって、君はそういう周りを巻き込んだの自罰的な態度は改めたほうがいいと思うよ、僕は……」

そうかな、わたしそんなに自罰的かな……。

……そう、かもしれない。

自分ではそんな風に思っていないけど、ジョナサンが言うならきつとそうなのかも……。

ぐるぐると思考が嫌なほうに回り始めた。若いとか年の功とか言ってたの、どこのどいつでしたっけ。ハハッ……。

と、そのとき。目の前のジョナサンが何かに気づいたように、ハツとした。

「……いや、待てよ。まさかアルフィー君……今までそうした話は、しないようにしていたけれど……まさか君は……」

——今まで、一度たりとて裁きや罰を受ける機会がなかったのかい？

彼のその問いに、わたしは身体が跳ねた。跳ねてから、身体がそうなったことに気がついた。

「……そういうことか。君がたまに自罰的なふるまいをするのは、そういう……」

納得した様子で、ジョナサンが言う。

そんな彼に目を向けると……彼は、とても悲しい目をしていて。憐れむような色じゃあなくて。もっと、根源的な……心を寄せるような、悲しみの色。

「……んんん……？ どーいうことだ、スピードワゴン……」

「フム……こういうタイプの話は、さすがのお前もまだわからんか。つまりじやな、J O J O……。彼女は根が真面目すぎるんじやよ。目の前のことをとにかく正面から受け止めてしまう。それをあとあとまで引きずって、あのときこうしておけばよかった、あれはまずかった、そう考えすぎてしまう性質なんじやろうな」

「あー……大体わかった。要するに、良心の呵責がありすぎて誰にもそんなこと言えずにここまで来て。だからこそ、それを罰してくれる人が今まで誰もいなくて、それが悪い形でループしてんだな？ だからここで俺たちに」

「うむ……どんな形でもいいから、殴られても……いやあるいは、最悪

死ぬことになったとしても、けじめをつけてほしいと、そう思っておるんじゃない？」

……知らなかった、そんなの（素

いやでも、そうやって文字にされるとよくわかる。たぶんそうだ、って思う。

……たぶんじゃないな。わたし、本気でそう思ってる。

そりゃあ心の内を明かしてこなかったわたしも悪いけど。でも、わたしの心境を語ったところで、「そんなこと気になさらずとも」って返されるのがオチな状況にしかいなかったからな……。

「……本人が一番、目から鱗って顔してんのが腹立つなア……」

「しようがないでしょ！　だって、みんなわたしのこと神様扱いするんだもん！」

あ。……あー、そうか。

わたしが神様扱い、立派な人扱いされるのが苦手なのって、それが大きいのか。

前世、ただの一般人で、モブだったわたし。そんなわたしが偉そうな扱いされるのが苦手、ってのもあっただろうけど……それ以上に。大きな罪を重ねたわたしが、周りから賛美されるのが嫌だったんだ。きつと。

「反論しながら目から鱗出すの、やめねえ!？」

「だってだって!？」

……なんかぐだぐだしてきた。

いや、そりゃあ暗い雰囲気にいるよりはこっちのほうがいいし、わたし好みではあるけど。

それはそれとして、本題から少しずれてきてるぞ。

「……確認しようか、アルフィー君。君は、罰してほしいんだね?」

こういうとき、スパンと本題に戻せるジヨナサンの対応力よ。

本当にいつもいつも頼りになる人だな……それでこそわたしの推しだ。

「……うん……」

自分でも驚くほど小さい声が出た。蚊の鳴き声かな？

我ながら小者すぎて、笑えてくる。笑えないけど。

けどそれについてジョナサンが言及することはなく、彼はただ、真剣な顔でわたしの顔を見ていた。

彼はしばらくそうしていたけれど……やがて、ふう、と一つため息をつくど、拳を握りながらわたしの前で身構えた。

「……こういうのはどうかな」

その状態で、ジョナサンが言う。

彼に、この場の全員の視線が集中する。わたしは数拍遅れたけど。

「これから行うのは、検証だ。そういうことにしよう」

「検証？」

「そう、検証だよ。柱の一族相手に、オーバードライブ波紋疾走一発でどれくらいのだメージになるのか、そのための。君はその正確なデータをはかるため、立候補してくれた……そういうことでどうだい？」

「ジョースターさん……」

「うん、詭弁だよ。けれど、僕はやはり、女性を殴るなんてことはしたくないんだ。けれど君はそうではなく……しかしこのままじゃあ話が進まない。だから、落としどころとして、だ。どうだい？」

彼の気遣いが窺える言葉。重ねられるそれに、わたしは……、

「う……うん。それで……お願いします」

こくりと頷いて、大きく息を吸い込んだ。

覚悟は決まったぞ。

「よし……それじゃあ」

「ま……待った、待った待った！」

が、そこにジョセフが割り込んできた。

「おじいちゃん！ おじいちゃんの覚悟はわかったぜ。だからここは俺に任せてくれよな！」

「ジョセフ……？」

「おじいちゃんはやっぱりお人よしだぜ……自分から泥被りに行くんだもん。けどよーッ、検証っつーんならア、ここは俺の出番だと確信できるねッ！ 何せ俺ア、サンタナと戦って何度かオーバードライブ波紋疾走を喰らわせたからなーッ！」

ニヤリと笑って、ジョセフがジョナサンに見得を切る。

「こーゆーのはさア〜、同じ人間が、同じレベルで、同じ量、同じよーにやってこそ、初めてデータとして意味が出てくるモンじゃあねーか？ なアー！」

……なるほど、確かに。

彼の言うことは一理ある……どころか、情報整理をする上では守らなきゃいけない前提だ。完全に正論だ。

これにはジョナサンも、とっさに反論が思いつかなかったんだろう。ぐ、と口をつぐんでしまった。

そしてジョセフは、そうこうしているうちにジョナサンを押しつけて、わたしの眼前に立つ。

「そーゆーわけでよお〜……おじいちゃんに代わってこの俺が！

これからあんたに、刑を執行するぜツ！ 覚悟はできてるよな、アルフィーちゃん様よオーツ！」

けどわたしに向けられた顔は、セリフに反して彼らしい……どこかいたずら小僧のような、けれど芝居がかった真剣な笑みで。

彼の性格から言って、この態度は文字通り芝居なんだろう。きつとジョナサンに手を上げさせたくなくて、自分がってことなんだろうな。自分から泥を被りに行ったお人よしはどっちなんだか。

でも、そんなジョセフの態度にわたしが口を挟むのは、お門違いだろう。なら、わたしは彼の厚意を受け取るのがこの場合は正しいはず。

だからわたしも、ふつと笑って彼に応じる。

「もちろんだよ。……まあその、ラッシュでやってくれても、わたしは一向に構わないけどね？」

「そいつはさすがにお断りだ……行くぜ？」

「うん」

ジョセフが拳を握り、しかと身構えた。そのときにはもう、彼の顔に笑みはなく、形容しがたい内心がにじみ出たものになっていて。

——コオオオオ……、と、波紋の呼吸音が室内に響き渡る。

なおジョナサンはここまで来てはもうどうしようもあるまいと、肩

をすくめながらもジョセフに譲ってわたしたちから距離を取った。

「はあああああッ！」

ジョセフが声を張り上げた。波紋が一気に膨張する。

「一発行くぜ、波紋のビートッ！」

そしてあえて身構えていなかったわたしの身体に、黄金の輝きが叩きつけられた――。

16. 結果と反省と再会と

……結論から先に言おうと。わたしの身体は、どうやらジョセフレベルの波紋にも普通に耐えられるらしい。あの量の波紋を受けるのは初めてだったから、これにはわたし自身も驚いてる。

いや、もちろんかなり痛かったし、波紋を受けた箇所はそれなりに溶けたよ。けどそれどまりで、骨が露出することすらなく終わってしまった。それすらも半日も経たずに治りきったんだから、なんとさえばいいものやら。

罰というか、けじめというか、そういうつもりだったから、あえて無防備に受けたんだけどな……。見た目的にもかなりの波紋量だったはずなんだけどね……。

「あんたが人間側についてくれてよかったと、今ようやく心の底から思ったぜ……」

「うーむ。赤石で増幅して、それでようやくまともに戦えるようになる、といったところだろうか」

とは、結構な波紋傷が半日も経たずに完治したのを見たジョジョ二人の感想だ。神妙な顔だったから、わたしは恐縮するしかなかったよね。

「あ、でも、受けた感じから言って、一番威力の高い山吹色なら、ラッシュ受ければさすがに生死の間を彷徨うくらいはすると思うな、って……」

「なるほど、そりゃあ確かに行けるだろうなあ〜、難易度がエンパイアステートビルみてーにクソ高いってことを無視すりゃあだだよおお〜〜!」

「そうだね……戦闘の真つ最中に、間違いなく抵抗も防御もしてくるだろう格上を相手に、全力の乱打を打ち込むことはとても難しいだろう」

「ですよね!!」

すいませんでした。

どうやらわたしの日光耐性は、わたしが思ってるよりもかなり高い

らしい。

あるいは、長年昼間から行動し続けてたことで、知らないうちに耐性が増してるとか……?」

「そういえば、限界時間をしつかりと計ったことってなかったな……。そこら辺含めて、ヨーロッパに戻る船の上で確かめてみてもらいかもしれない。」

まあそれはともかく。

「……まあでも、これで一つわかったことがありますな」

そんな形で検証を終えたわたしたちに声をかけるのは、部屋の隅のほうで控えていたスツピーだ。

「そうだね。アルフィー君は、柱の一族でも最大の日光耐性を持つという。それならば、赤石を使わずとも彼女にダメージを与えられるジョセフなら、他の柱の男とも問題なく戦えることになる」

「俺が行けるなら、親父やお袋も行けるなーッ。もちろんおじいちゃんも当然として!」

ちよつと自慢げなジョセフに、思わずほっこりしそうになる。

「マリオ君やシーザー君は少し危ういかもしれないな……。まあ、それも赤石がそこそこあるから、さほど気にしなくていいかな」

「二年前、いきなりジョースターさんに赤石を組み込んだ服やらグローブやらを大量に発注されたときは、何事かと思いましたがねえ」
茶目っ気たつぷりに言葉を挟んだスツピーに、場の雰囲気は少し和やかになる。

「そういえばそんなことあったね。ルベルクラクが持ってた赤石をそこそこ、決戦用にプレゼントしたんだよね。」

おかげでこの世界の波紋使いは、原作よりもめちやくちや強化されてたりする。ジョセフはサンタナ戦に持ち込めなかったみたいだけど、ヴェネツィア在住の人たちはみんな持つてるみたいだし、原作よりだいぶ有利なんじゃないかな。

「ここまでやればカーズ様にも勝てるでしょ、とは思っただけ……。……」
ジョジョの敵陣営って、主人公たちと同じく成長し続けるからなあ……。これでもなお安心できないのは、わたしが小心者だからだけで

はない……はずだ。

ともあれ検証はそうして終わったわけだけど……。

「罪を犯した自覚のある人は、それが裁かれなかったり罰されなかったりする」と罪悪感に押し潰されてしまおうと聞いたことはあったけれどね……。実例を見た気分だよ」

「はい……すいませんでした……」

わたしは改めて、ジョナサンにお説教されていた。床の上に正座というジャパニーズスタイルでだ（自発的

内容を大雑把に言うのと、もつと自分を大事にしろ、ということになるだろうか。

ただその言い方がとても穏やかで、ゆつくりと諭すような語り口なので、感情に任せてガミガミ言われるよりよっぽど堪える。推しに説教させている、というのも相まって余計だ。

「本当にごめんなさい……二人とも……特にジョセフには、迷惑かけてしまつて……」

「……俺はもう気にしてねーよ。むしろそーやってうだうだされるほうが面倒だ」

「僕も迷惑をかけられたとは思っていないよ。あれは君なりの謝罪と、覚悟の示し方だったんだらう？」

ジョナサンはなんでもお見通しだなあ……。

ただ、あれはなんとというか、勘違いから始まったと言いますかですね。

ジョセフの「納得できない」を、わたしは「どうしてももつと早く決心できなかつたんだ」とか「何人見殺しにしてきたんだ」とか、そつち方面で「納得できない」んだと思つたんだよね。自分で言つた通り、自分でもそう思うことは何度もあつたからさ。

だからこそ、「納得できない」つて言つたジョセフに、それならわかりやすく罰してもらえばいいんだつて思つた。今までそうやってわたしに怒つた人がいなくなつたからか、怒つている（ときっきのわたしは思つてた）人に会えて、ちよつと嬉しいまであつたくらいだ。

だからつて色々とすつ飛ばして「殴つてもらおう」つて発想になつ

たのは、今にして思えば冷静じゃあなかったけど……ともかく、実際は思ってたのと全然違ったわけだ。

ジョセフはあくまで、「もっと早く救われてほしかったのに」とか、「残りの人生全部を償いだけに使うのはどうなんだ」とか、そっち方面で「納得でき」てなかったようで。だからこそ、わたしの自罰的な発言に声を荒らげたわけだね。

彼はあ有的时候、後ろ向きというか受動的というか……そういうやり方はやめろって言ってたんだろぅけど。我ながら察しが悪いというか、行間が読めないというか……。

何が知恵の神様だよ。本当、名前負けも甚だしい。一刻も早く大層な肩書なんて捨てて一人の人間になりたいよ。

……それはともかく、そんな流れだったことを考えると、今回の最大の被害者はジョセフと言えるだろう。

一見すると検証として殴られたわたしのほうがダメージを負ったように見えるけど、わたしが無理やり彼に殴らせたようなものだ。

もはや何度目かもわからないけど、まったく我ながら器が小さい。まるで成長していない……本当、一万六千年以上も生きて何をしてるんだか……。

「あんた、本当にそこら辺の人間みてーな人だな……まったくよおくく。気にしてねーつつつとろーが」
「あてっ」

デコピンをされた。言うほど痛くはなかったけど、なんとなく。

「俺はあんたたちの種族の生態には興味ねーから、細かいことはわからんが……少なくとも、人間には失敗しねーやつなんて一人もいねーんだよ。そーゆーのは一気にできるもんじゃあねーだろーに」

「ジョセフの言う通りだよ。誰だつて転んで、けれど立ち上がって、少しずつ前に進んでいくんだ。きつと君たちはそのスパンが長いから、僕たち人間の尺度で見たら成長していないように見えるだけなんじゃあないのかい?」

「……そう、だといいなあ」

はあ、とため息をつきながらも苦笑する。

でもまあ、確かに。いつまでも失敗を引きずってたつてしようがない。たまに後ろを向くことはあっても、前は向いて歩いて行かないといけないよね。

「よし」

ぺしん、と自分の頬を叩く。

うん。

反省した！ うじうじアルフィーちゃんはここまで！

今からはがんばるって感じのアルフィーちゃんだ！

「ごめんね、無駄な時間取らせちゃって」

「構わないよ。それじゃあ、これに関してはこれで終わりにしよう」

ぽんぽんとジョナサンが手を軽く鳴らしながらそう言ったので、わたしも頷いて表情を引き締める。傍らのジョセフも同様だ。

これから何が始まるって？

そりやあもちろん、サンタナを起こすのさ！

「……では、開けますぞ」

ジョナサンの視線を受けて、スッピィが何かの機械を操作した。

すると、まず壁に設けられていたガラスが床下に下がっていく。そ

ちらに目を向ければ、石になったままのサンタナが。

次いで、彼の周りに満たされていた紫外線がすうっと潮騒のように引いていく。

代わりに投射されたのは、よくある白熱灯だ。スポットライトのように差し込んだその中で、石化したサンタナの姿が浮かび上がる。

紫外線は、わたしたち一族や吸血鬼の天敵である日光の中でも、特に害となる中心的な要素だ。それがある限り、わたしたちの身体は石化を余儀なくされるけれど……なくなつた、ということとは。

文字にするなら——メギャン、が適当だろうか。そんな様子を見せて、サンタナの身体の色がゆっくりと元に戻つた。

けれどジョセフとの戦いで下半身を失っているのです、立ち上がることはできない。原作だと両腕も失っているのです、それよりはマシだけれど。

それでもこの状態で特にどうということもなく、生命活動が可能な

のがわたしたちという生き物だ。サンタナは腕を使つて身体を起すと、周囲を見渡して状況を確認し始める。

彼の視線はやがて、ジヨナサンとジヨセフに向けられた。しかしすぐに、隣のわたしに移つて目を丸くする。

わたしはそんな彼ににこりと笑いかけると、周りの三人の許可を改めてもらつてから、隔壁内に駆け込む。

「サンタナ！ 久しぶり！ 迎えに来たよ！」

「姉さん！」

「うん、わたしだよ！ よかつた……また会えたね！」

少し呆けた様子のサンタナの身体をゆっくり起こして、そのまま正面から抱擁する。

わたしより少し体温が低いのか、ひんやりしている。けれど、かすかに漂う彼の匂いに。身体の奥から確かに聞こえてくる拍動に。ああ、彼が生きてるんだと確かに感じられて、嬉しくなった。

「ごめんね、着くのが遅くなって……本当にごめん。こんなになつちやつて……」

「気にしていいない。必要な戦いだったし……何よりこれくらい、すぐに治る怪我だ」

「それでも、痛かつたでしょ？ 心配なんだよ。だつてわたし、お姉ちゃんだもん」

ぎゅつとサンタナを抱きしめる。わたしはそのまま、彼の首筋に顔をうずめた。

「……心配なのは俺もなのだがな。ここまで大事なかつたか？」

「う、あー……その……小……いや、中くらいはあつたかもだけど。でも、大丈夫だよ。本当に……もう、大丈夫だから」

「本当にそうだといいいのだがな……」

う、これはもしかしなくても、さつきまでのお説教と根を同じくする心配だよな。

でも姉弟なんだし、当然か。気をつけないとなあ。

そう改めて自分に言い聞かせつつ、わたしはサンタナを抱き上げて、えつちらおつちらと隔壁から外に出る。

「……ジョセフ・ジョースターがいる、ということは。姉さんは連中と既に繋ぎがあるのか？」

「まあね。正確には彼の祖父ジョナサンのほうで、ジョセフとはここ数日だけだ」

「ジョナサン、か。うむ……どうやら凄まじき男のようだ。万全の状態で挑んでも、俺では勝てるかどうか……」

「ええと、お褒めに与り恐縮だよ。改めて、ジョナサン・ジョースターだ。よろしく」

「恐れることなく握手を求めるとは……本当に大した男だな」
「応じてくれる君もだと思っただけだね」

うーん……ジョナサンとサンタナの握手シーン……なんてあり得ない光景なんだ……。いやなつとるやろがいつて話なんだけども。

「……フーン。こうして見ると、あんたら柱の一族にもちやあんと家族愛つっのはあるんだなあ……」

一方、ちよつと違う視点から言葉をこぼしたのがジョセフだ。頬杖をついてこちらを見ている。なんだかちよつと気恥ずかしい。

でも、一つ訂正はしておかないとね。

「そりゃあるよ。そもそもサンタナはわたしが育てたんだし。というか、その手の情がないカーズ様がやっぱり普通じゃあないんだよ」
「……なあアルフィーちゃん様。気になったんだが、もしかしてそれ、無意識なのかア？」

「ん？ どれ？」

と思つたら、なんかよくわからない指摘をされた。

「いやな、俺は思うわけだぜ……あんたは長いこと、カーズにかなり理不尽に扱われてきたじゃあねーか。自分の意志に反することをやらされるのは、相当つらいことだぜ。なのにだ、なんであんたはいまだに『カーズ様』なんだア？ なあ、そこんとこどーなんだよ実際？」
「……え、あ、あー……そういえば……」

思わず首を傾げてしまったけど、言われてみれば納得だった。確かに、わたし普段から完全に無意識でカーズ様って言ってるや。

でもこれはなんていうか、前世から染みついた癖って言うか……。

ほら、無性に様つけて呼びたくなるキャラっているじゃない？　これはそういうやつっていうか……。

「……………」

あつ、ジョセフの後ろに「シラケ〜」って効果音が見える！

「あんた、本当にあんだけ神話でヨイシヨされてるアルフィー神なのかア……？　マジにそこらへんのガキンチョ相手してるみてーな気分だぜ……………」

「むー、そりゃあ神話が盛りすぎなのは事実だけど、一応それっぽいことはできるんだよ？　波紋より迅速にケガとか治せるし！」

「そーゆーことじゃあねーんだよなあ……。もしかして柱の一族って、人間換算すると一万歳が五歳程度だったりすんのか？」

むくれながら返したら、やれやれとか言い出すジョセフである。あなたがそれ言うのと、どこぞのキヨンが脳裏にちらつくんだけどな……………」

「姉さん、そこまでにしよう」

「ん？　うん、そうだね……………」

少なくとも、サンタナを抱きかかえたまますることじゃあなかった。

「J O J Oよ……改めて、よくぞ俺を倒した。俺にああまで言っておきながら、他人の手を堂々と借りるとは思っていなかったがな」

「俺はあんたらと違ってか弱あく〜い人間なんでね……人間らしく、力を合わせて立ち向かったただけだぜーッ。あの状況じゃあできることがあんまりなかったのも事実だしなーッ」

「ふふふ、人間らしく力を合わせて、な……確かに、群れることは人間の強みの一つだったな」

「ぶっちゃけて言えば、あんまし借りたくはなかったんだぜ俺だってよおお〜！　けど武器がなんもなかったし、あいつらはあいつらで『必殺の秘密兵器がある』なんて書き残してたから、これは賭けてみてもいいんじゃないかと思っただよ」

「だが見当はつかなかったのだろうか？　分の悪い賭けとは思わなかったのか？」

「五割くれーは行けると踏んでたぜ？ なんせドイツの科学力は今の人類でも頭一つ抜けてるところあつからよーッ、カラー写真みてーなマジでとんでもねー発明とかあるしな！」

「ほう……？ なんだそれは、とても興味深い」

あ、なんかサンタナが楽しそう。なんだろう、戦ったことで友情が芽生えたんだろうか。ジャンプ的だなあ。

そんな二人を、ジョナサンがなんだか微笑ましく見守っている。こうしていると、彼もちゃんとおじいちゃんしてるなっって感じた。

と、そのジョナサンが、頃合いを見計らって声を上げた。

「それじゃあ、そろそろ本題に入ろうか。これからのことについてね」
「ああ……と、その前にまずは下半身を治したいのだが、適当な下半身はないか？ 男であれば死体でも構わないのだが」

「ええ……そんなことできんの……」

「ジョセフ、これが柱の一族の生体だよ」

ドン引きするジョセフに、何かを悟ったような無表情でジョナサンが首を小さく振った。

……うん。まあ、ね。気持ちはわかるよ、うん。

死体でもくつつけておけば、それでばっちり結合してすぐ元通りになるとかわけわかんないよね。三部のデイオが知ったらどう思うことやら。

「とはいえサンタナ君、それは少し待ってもらえないかな。君にとっては当たり前のことなんだろうけど、少なくともそれは現代の人間の多くには心情的に受け入れがたいことでね……」

それに死体と言っても、彼らは元々この世界のどこかで普通に生きていた人たちなんだ。僕は彼らを五体満足で家族の下に返してあげたいんだよ」

「……………ふむ。仕方ない、か」

サンタナはジョナサンの言葉を受けて、しばらく目を瞑って思考したあと、大仰に首肯した。

……したけど、納得した顔じゃあない。今のままじゃあ反撃できないから仕方ない、って雰囲気がちよつとある。

あ、いやでも、当てはあるって感じでもあるな。たぶん、あとでこの王国の誰かから下半身をもらうんだろう。サンタナ信仰自体はわりと根強く残ってるみたいだから、喜んで生贄になる人も探せばいそうだし。

時代的に生贄は無理って可能性もあるけど、サンタナ王国は立憲君主制ではあるものの王権がわりと強い法律してるから、なんとかするんだろうな。

あの王様はこれから大変だろうけど、わたしのかわいい弟を殺そうとした人だ。仕事で忙殺される程度なら、「ザマミロ&スカツとサワヤカ」の笑いが出るだけで助けようとは思えないかな。

「え、ええと、じゃあサンタナ、とりあえずテーブルの上に載せる、ね？」

「ああ、頼む。あまり気は進まないが、ここは現代の人間のやり方に合わせてやろう」

「これが上から目線ならぬ神様目線ってやつか……」

わたしに応じながら、真顔で堂々と上から目線の言い方をするサンタナ。

そんな彼に、ジョセフが「うえー」とでも言うような顔で舌を出していた。

17. 打ち合わせ

「まずは確認をさせてほしい。サンタナ君。カーズ打倒のため、君ならば力を貸してくれるとアルフィー君から聞いているけれど、その認識で構わないかい？」

「そのつもりだ。俺とヤツは目指すところが異なる敵だ。しかし俺一人では逆立ちしてもヤツには勝てん。そのためには戦力が必要だ。その点、姉さんが見込んだ勇者とあらば俺が手を組む相手としては十分だし、ジョセフにその資格があることは確認している。お前は試すまでもなく、俺より強いしな」

何はともあれそういうことで、話をする土台はできた。わりと突貫工事な気はするけど、置いといて。

「じゃあ今後のことについて、話し合おうか」

ジョナサンが音頭を取って、主にわたしが今後想定される流れとそれへの対応を説明していく。

とはいえその内容は、ここに来る前の船内でジョナサンと話したことと大体同じだ。

カーズ様たちが目覚めると思われるタイミングは、年明け前後だと予想される。念のため年内にはイタリアに入っておきたいところだ。目覚めた彼らがまずすることと言えば、食事だ。そこは人間と変わらない。次いで、昔と変わらずスーパージェット探しに動く。

これは間違いないはずだ。二千年で人間社会がどう変わったかを調べる時間は取るだろうけど、彼らの頭脳ならそれに手間取ることはないだろう。

そんな彼ら相手に、どうするか。

まず、わたしがスパイとして合流する。そうして彼らに適当な情報を流しつつ、動きをある程度制御して分断。しかる後に波紋戦士たちに各個撃破してもらう、というのが作戦の骨子となる。

サンタナにはその前に、ルベルクラク、SPW財団と協力してもらって秘密兵器の完成を急いでもらおうと思ってる。これが完成すれば、一般人でもわたしたち柱の一族に大ダメージを与えられる。し

かも遠距離から一方的に。なんなら量産がなかった暁には、手出しする暇すら与えず倒せるかもしれない。

さすがにそれは皮算用かもだけど、せめて一つだけでもなんとかして間に合わせてもらいたいところだ。実のところ大まかな形はできていて、あとは小型化と省エネを進められればという状態なので、サンタナの手にかかれば大丈夫だと思うんだよね。

「いいだろう。姉さんが立案し、進めているその秘密兵器とやら……興味深い。楽しみだ」

ニヤリと笑うサンタナ。彼が一番、原作からかけ離れたなつて思った瞬間だった。

なんていうか、だいぶ技術者というか、研究者に寄ったよねえ。わたしが色々教えこんだからなわけで、違和感はもうないんだけど。元の世界の読者がこのサンタナを見たらびびっくりするだろうな。

ああそれと、カーズ様たちを分断するために、それぞれを誘導する場所を用意している。これはルベルクラクが既に取りかかっている、もうほとんど完了していたりする。

誘導するのはわたしだ。「この場所にスーパーエイジャがあるらしいですよ！ いやーでも候補がたくさんあるですよねー！ 困っちゃったなー！」とあることないこと吹き込んで、それぞれに単独行動させる想定だ。わたしがいない原作でも彼らはほぼ同じことをしていたし、この世界でも紀元前当時にはしていたから、この作戦はいけるはずだ。

「けどよーッあんたら二人でなんとかなんねーのかよ？ 柱の一族なんだから、俺らががんばらなくてもいけるんじゃないか？」

とジョセフに言われたけど、残念ながらそんなことはない。

「……己の恥を晒すことになるがそれでも言う、俺は生き残った一族の中では最弱だ」

「……マジ？ アルフィーちゃん様よりも？」

「本当だ。俺は他の誰にも勝てた試しがない」

渋い顔のサンタナの肯定に、ジョセフは信じられないって顔でこっちを見てきた。

残念ながら本当に嘘偽りない事実なので、わたしは頷くしかない。「そしてわたしも、他の三人には勝てなくてね。わたしの場合、技術とか心構えの問題もあるんだけど、一番の問題は攻撃力不足だよ。ダメージ通せないんだ。見た目通り非力だからさあ」

普通の攻撃でも、威力を上げれば柱の一族に致命傷を与えることは可能だ。けどそれは、波紋と違ってわたしたちの身体の自己治癒力を阻害しない。つまり即死させない限り、柱の一族同士の戦いは泥沼になるんだよね。

だからこそ、わたしでは彼らには絶対に勝てない。何せスタンドですら大したダメージにならないのに、素手でどうにかできるわけがないんだよなあ……。

「……俺が持ち運ぶのに苦労したサンタナをひよいひよい運んでなかつたか？」

「そりゃあ人間と比べたらあるほうだよ……」

こう見えても、一応素手で家を破壊できるんだぞう。でもやっぱり、体格と性別の差は大きいよね。

「じゃ、じゃあみんな寝起きを襲うのはどーよ？ 全員でタコ殴りッ！ ってやつだぜーッ！」

「いや。大人数で一斉にかかったら、逆に不利だと思うぞ。特にワムウのやつが相手では」

「そうだね。あの子、十人以上の波紋戦士を同時に相手取って同時に全滅させたことあるし……」

あのとときの波紋戦士はジョナサンたちと違って当代随一の使い手だったわけではないけど、それでも一定以上の水準にはあつたはずなんだけどねえ。

まあそもその話、ワムウの流法モードは一度に大勢を相手取るときこそ真価を発揮する。風はそれだけ広く影響を及ぼすのだ。

おまけに風はほぼ目に見えないからね。真空波や竜巻まで行けばまあ、見えなくはないけど……そこまで行くと超スピードだし威力が高くて、どっちみち対応は難しい。

ワムウはそんなのを吹き荒らすことができる。自然のそれよりは

規模は小さいけど、そんなの気休めにしかならない。

あの子自身が正々堂々の一騎打ちを好むタイプだから、そんなことは普段やらないけど……それなり以上の使い手たちに一斉に襲われて、広範囲殲滅をしないほどお人よしでもない。

そしてもしもそうなたとき、最初に耐えられなくなるのは他の誰でもなく、地下遺跡とか周りの街だと思っただよね……。

「あー……そりゃあ、なるほどだな……」

ちなみに、カーズ様もフィールドの破壊という点では一級の力を持つ。斬鉄剣ばりになんでも切っちゃうから、遺跡で大乱闘したら大変なことになること請け合いだ。誰もが壁や盾として使うだろう柱は、まず間違いない機能しなくなると思う。そうすれば崩落は待ったなしだ。街中でやつたらなおヤバイ。めっちゃや人が死ぬ。

なぜ彼らがわざわざローマの街中で眠ってるかって、そこら辺もあるんだと思ってる。街なら寝起きに食べられる人間も多いしね。もしも敵が待ち受けていたなら、人質にも使える。カーズ様の性格からいって、そういう判断なんだろうなって。

というわけで、やっぱり三人を引き離しての各個撃破が理想だと思うわけです。一人を二、三人のチームで迎え撃つんだ。そうすればかなり勝ち目があるはず。

誰を誰に当てるかは、ジョナサンたちで決めてもらう予定だ。わたしはその中で、戦力的に一番不安なところに入るつもりでいる。

わたしは一人じゃあカーズ様たちに勝てないけど、足手まといにはならないはずだからね。サンタナの開発が間に合えばさらに戦力は増えるし、勝率はもつと上がるはずだ。

「彼らが単独行動しなかった場合はどうするんだい？」

「二人と二人に分かれるなら、基本は同じでいいんじゃないかな」「姉さんと組んだやつをみなで迅速に倒し、次いで残る二人に向かう形だな。このとき姉さんには悪いが、片方をしばらく姉さん一人で抑えてもらうことになるだろう」

「アルフィーちゃん様が引きつけてる間にもう一人をタコ殴りにして、最後に全員で残りをフクロにするって寸法だな」

「それ」

わたしだつてそのときのために準備してきたんだ。切り札は二つほどあるし、勝てないにしても、時間を稼ぐくらいならできるはずだ。めちやくちやしんどいだろうけど、そこはがんばるべきところだからね。

「全員まとまつての団体行動を取られた場合は……んー、スーパーエイジャをダシにして、一対一で戦うように交渉、かなあ」

可能性は低いと思うけど、そうなったときは原作を踏襲する方針が妥当に思う。リサリサがやったみたいにな、一度スーパーエイジャをチラ見せした上で、同じ土俵での戦いを申し込む形。

で、受けないなら破壊する、と脅すわけだね。こうなったらカーズ様としては受けざるを得なくなる……はずだ。

これらの案に、ひとまず否は出なかった。なので、とりあえずこの流れで行くことになった。

「ちなみに、予想よりも連中が早く目覚めたらどーすんのよ？」

「そのときはおびき出す予定の場所を囿にして、時間を稼ぐつもりでルベルクラクには動いてもらつてるよ。ただそれすると、おびき出して戦える場所が減つてあとあと難しくなるし、細かいこと考えてる時間がないだろうから、シンプルに団体行動のときと同じように持つていくのが無難かなあ」

「まったく想定外の動きをされたら？」

「……最後の手段を使うしかない。あれ、使うだけで下手したら死人がたくさん出るから、使いたくはないけど……」

「……臨機応変に行くしかなさそーだな」

ちなみに、レナータちゃんはこの作戦には参加させないつもりだ。彼女のスタンドはとても強力だけど、もし万が一彼女の存在がカーズ様に露見したら……あの人のことだ、間違いなく利用しにかかる。夜中でも特に道具を使わずに……下手したらそれこそスーパーエイジャすらなしにスーパー石仮面を起動できる可能性が高いから、彼女の存在はカーズ様には知られたくない。

サンタナは使えるものは使うべきだと言つただけど、わたしを殴

るのでさえ躊躇したジヨジョ二人はやはり紳士と言うべきか、声を揃えて否とした。わたしも同感だ。

だってあの子、まだ子供だもの。子供を守るのは大人の仕事なんだから、あまり巻き込むのはちよつとね……。

本当にどうしようもなくなったらそのときは、とも思うけど……逆にそこまで行ったときこそ、レナータちゃんの出番はないかもしれない。

特に、もしも「そのとき」が究極生命体カーズ様との戦いだった場合。

他人のスタンドを見るだけでコピーしてくる可能性あるし……。

打倒カーズに向けて、ジョースター一族と柱の姉弟が話し合いをしてから数日後。その姉と弟が王国のゴタゴタに手を取られている頃、イタリア、ローマの地下に眠る古代遺跡の奥にて。

壁と一体化している三人の男、そのうちの一人……一番下段で眠っていた男の額が、緩やかに開かれた。

ボシユウウ……というようなかすかな音と共に開いたそこから、勢いよく角が出現する。長く雄々しい角が天を衝き、同時に男の身体が変化していく。石同然だった肌が、褐色のそれへと。

やがて男は眼を開き、静かに壁から離れる。音もなく床に降り立つと、周囲へと視線を配った。

「……無人か。だが、人間の気配がないわけではない。この大きなモノは……人間の設置したものか……？」

男がラテン語でひとりごちる。彼の視線の先には、紫外線を多分に含んだ光を煌々と放つ五基の大きな機械が鎮座ましましている。ナチスドイツ軍が設置していた紫外線照射装置だ。

しかしその中であっても、男——ワムウは死ぬどころか怪我もなく、動きが鈍る気配すらなかった。

これはサンタナとは違うというよりは、寝起きとはいえワムウが万

全の状態に近いからだ。サンタナも、ジョセフとの戦いで相応の負傷をしていなければ耐えられただろう。

「……これは、足跡だな。比較的最近までそれなりの人数がいた様子がある……」

その場にしゃがみ込んだワムウは、足下にあつた軍靴の形跡に目を細める。またその鋭敏な嗅覚もまた、かすかに空気中を漂う大勢の人間の匂いをとらえていた。

「残念だ。もう少し長くここにいたなら、この場でカーズ様たちに血を捧げることができたのだが」

本当に心底残念そうにつぶやいて、彼は後ろを仰ぎ見る。そこには、いまだ壁と同化し眠りのうちにある主たちの姿が。

しかし彼らの周囲には、眠る直前まであつたはずの石仮面の姿はなかった。

「……石仮面が消えている？ 人間どもが持ち出したのか。面倒だな……食料は数で補うしかないか」

そうしてワムウは、小さくため息をつきながらも悠然と遺跡を後にする。

入り組んだ遺跡をまるで経路がわかっているように最短距離で脱出した彼は、夜のローマの街並みを眺めて、先ほどとは異なりかすかながら感嘆の息を漏らした。

人間という生き物自体には大した進歩など見られなかったが、彼らが生み出すものは大層様変わりしていたからだ。その様子に、変わり者の姉なら喜ぶだろうなという感想を抱く。

「姉上のお姿は見えなかったが、既に目覚められているのだろうか？ 目覚めているのだとしたら……またさぞかし楽しんでおられるのだろうか」

ふふ、とワムウは微笑んだ。

彼の記憶の中にある姉の立ち居振る舞いは子供のようであるが、特に好きなことを語るときはそれが顕著だった。

だが、そんな姉のありようは嫌いではなかった。戦士として尊敬はできないが、弟として敬愛はしているから。

「さて……では、軽く狩^{ハンティング}りに行くか」

だが、ワムウはどこまでも人間ではなかった。この星の生態系、その頂点に立つ存在として当然のようにつぶやいた彼の視線は、しっかりと人間に向けられていた。

18. 風の武神・ワムウ 1

ワムウが目覚め、ローマの街に出てきたところを目撃した人間は、実はそれなりにいる。だがそれは、全員が目撃するべくしてしたものたちだ。偶然彼を見かけたものは一人もいない。

そのうちの約半数はドイツ軍、それ以外はルベルク^Rラク^P民間軍事会社^LAに属している。彼らはそれぞれの組織の目的のために柱の男たちを監視しており、しかし目覚めた直後に殺される可能性の高さから、遠巻きに見張るに留めていた面々である。

ワムウを目撃した彼らの行動は一致する。相手を刺激しない、感知されない範囲での監視の継続だ。

そしてもう一つ。両者は同じ行動を取っている。すなわち、シフトを組んでこの街に常駐している波紋戦士への連絡である。

そう、このローマには常に二人は波紋戦士がいるよう、ヴェネツィアから派遣されていた。万が一原作よりも早く、柱の男たちが目覚めてもいいように。そしてそのとき、不必要に死者を出さないように。だからこそ、その日ローマにいた二人の男が打って出ることになったのも、自然なことと言えよう。

もちろん、彼らがそうするまでの間にも被害は出始めている。ドイツ軍もR P L Aも、全滅を避けて下手な刺激をしなかったために原作のような事態にはならなかったが、代わりに民間人……それも警官たちに被害が出たのだ。

丸腰の一般人が襲われず、多少なりとも武装している警官が襲われたのは、ひとえにワムウの性格と言えよう。柱の男らしく人間を喰らうし、寝起きで空腹ではあるが、さりとてまったく戦えない人間を襲うことはワムウにとってはあまり喜ばしくなかった。それを原作の被害と比べて、どちらがいいかを論じることは難しいだろうが。

ただいずれにしても、波紋戦士にとっては同じ犠牲。それを見過ごせない二人は、ヴェネツィアへの連絡もそこそこに出陣したのだった。

やがて彼らの気配を、ワムウは感じ取る。しかし一向に姿を見せな

い相手に、一瞬小さく怒りを覚えた……が。

どうやら誘導するように……さながら手招きをするようなあからさまな気配に、一転して口元をぐいと上げて見せた。

ならばよかろう、とワムウは頷く。強者との戦いこそが生きがい、自身と張り合える勇者こそを尊敬する彼にとつて、相手方の迷惑はどうあれ戦いの気配がする誘いに乗らない選択はない。

恐らくは不利な状況で戦うことになるだろうが、それすらも一興。どのような手を使われようと、正面から粉碎してみせる気概と自信がワムウにはあった。

そうして狩りを中断した彼が誘導されたのは、ローマの街の郊外。ほとんど人の気配はなく、代わりに野生動物の気配が感じられる雑木林だった。

「……ほう」

森の入り口で立ち止まったワムウの前に、二人の男が現れる。奇襲はなかった。堂々としたその態度に、彼は思わず感心する。

二人が奇襲を選ばなかったのは、前情報からワムウならある程度話が通じるだろうという推測ゆえ。

そして何より、ウェールズ神話で武神と伝わるワムウが機嫌を損ね、ローマの街中で無遠慮に力を放つことを嫌ったためだ。

「……お前たちは」

そんな二人を見て、ワムウは表情を崩すことなく察した。鍛え抜かれた身体に加えて、確かに波紋の呼吸音が聞こえたのだ。

「驚いた……この短時間で既にイタリア語をマスターしたってのか」

男の一人……マリオ・ツェペリが目を丸くする。

「とんでもない頭脳の持ち主という言い伝えは本当のようだな」

もう一人の男……ジョージ・ジョースター二世は眉を寄せながら、つぶやくように口にする。

そしてそれだけあれば、ワムウには大体の事情を察することが可能だ。

「その口ぶり……何よりその呼吸。まさしく波紋の一族の末裔だな。生き延びていたとは」

「おかげさまでな」

「お前たちにしてみれば、残念なことだろうが」

二人の言葉に、ワムウは思わず笑う。

挑発の類ではない。純粹に、楽しくなってしまうただけだ。

「カーズ様のお耳に入れば叱責は免れまいが……それでも俺は少し嬉しいぞ。この時代、もはや俺と戦える強き者はいないだろうと思っただけだ」

その返しに、二人は顔をしかめた。

しかし同時に、ワムウの性格が伝え聞いている通りだとわかって、わずかながら緊張がほぐれたのも感じていた。

「……お前がワムウで間違いないな？」

「いかにも！　そこまでわかっているなら話は早い……行くぞ！」

かくして、およそ二千年ぶりに因縁の戦いが始まる。

初手はジョージとワムウが同時だった。躊躇いなく踏み込み寸分違わず喉を狙うワムウと、やはり躊躇いなく踏み込みなおも前へ出ながら拳を叩き込むジョージ。

種族の差を考えれば、圧倒的にジョージが不利だ。しかし彼の拳は波紋の輝きに……オレンジの光に満ち溢れていて、ワムウをして下手に受けるわけにはいかないほどの威力があった。

ゆえにか、二人の腕が交差した瞬間。互いの攻撃が持つ衝撃によって互いの軌道は逸れ、両者の攻撃は互いの狙いとは異なる場所へと入った。ワムウの攻撃は左肩に。ジョージの攻撃はワムウの腹巻に入った。

ワムウは一撃をしっかりと刺し、また素の腕力差から来る交差した瞬間の衝撃に分が。ジョージは服の上からとはいえ、一応は波紋疾走オーバードライヴが命中したことによる分がある。

双方がこの一瞬でダメージを与えあった。ゲーム的に数値で表すならば、同程度のダメージ。互角のクロスカウンターだったと言える。

しかし、やはり種族の差が大きな壁だ。たとえ受けたダメージは同じでも、あらゆる面で人間は柱の一族に劣る。先のゲームのたとえに

ならうならば、最大HPに差がありすぎる。ゆえにジョージのほうが不利と言えた。

「パウツ！」

とはいえ、まだジョージが敗北したわけではない。何より、彼は一人ではない。

二人の初撃が終わる直前、高速で回転する刃物……のように形成された酒が、ワムウに殺到したのだ。その数は優に十を超え、そのいずれもが多量の波紋を帯びてオレンジ色に輝くカッターであった。

攻撃が終わった直後のわずかなスキを突く形で調整されたタイミングに、ワムウはニヤリと笑う。この程度はしてもらわなくては。そう顔に書いてあるようであった。

これに応じて、ワムウの後頭部から何本ものワイヤーが現れる。それぞれの先端には小さな刃物がついており、何かしらの武器であることは誰にでもわかる。

「ふん！」

ワムウが首をひねり、ワイヤーを勢いよく動かす。するとそれぞれの刃物に風がまとわりつき、極小の竜巻が発生した。

それらは風特有の音を響かせながら、殺到する波紋カッターを迎撃していく。

無論、ワムウがそれだけにかかりきりになることはない。彼は刃物を扱う動作に連動させて上半身もグニヤリと動かし、ジョージに向けてクロスチョップをお見舞いした。

「うおおおおーっ！」

ジョージはこれを、人間の可動域限界に身体をひねってギリギリの回避。次いでカウンターとして、臆することなくワムウの顔面へ手刀を向けた。

波紋カッターを放ち終わっていたマリオも、インディゴブルーオーバードライヴ藍色の波紋疾走でこれに続く。波紋カッターは既にみな迎撃されてしまったが、彼はこの攻撃に合わせて迎撃を終えた竜巻の残りをしっかり回避している。

「やるな！」

だがワムウも負けていない。奇妙な体勢から放たれた攻撃の勢い

をそのままに、身体をその場で上下反転させた彼は、側転の要領でジョージたちから距離を取った。途中で地面を押すことで、拡散する形で放たれた藍色の波紋疾走を回避することも忘れない。

「俺の技を初見でよくぞ避けたな！ 伝わっていたか見抜いたかは知らんが、いいぞ！ そう来なくては！」

そうして姿勢を戻しながら、ワムウは構えを整え直し胸部から管を露出させる。

「やらせん！」

「させるか！」

それが意味する能力を人伝いながら理解している二人は、同時に攻勢に出た。ジョージは再度肉薄するため地面を蹴り、マリオは再び波紋カッターを大量に放つ。彼が手にしていた酒瓶は既に空で、それもついとばかりに投擲された。

「ならばこれはどうだ？」

しかしワムウが怯むことはない。両腕が勢いよく後ろへ押し伸ばされた。さながら弓矢を引き絞るような状態だ。

同時に彼の身体から顔を出した管に、空気が吸い込まれていく。それは彼の体内で何倍にも圧縮され、脇腹周辺の管から排出され始めた。

そして排出されると同時に、ワムウの両腕が勢いよく前に押し出された。限界までエネルギーを溜め込んだ腕は、まさに放たれた矢のごとく音を立てて彼の前面へ。

この際に、圧縮されていた空気を巻き込んで、さらなる力が生み出される。

「伏せろマリオーッ!!」

ここまでの動作にかかった時間は、一秒程度。

それでもワムウの行動の意味を漠然とだが察したジョージは、前へ出る勢いを上げていつその前のめりに倒れ込んだ。そうして声を張り上げながらも、地面を転がりワムウの正面から横へずれる。

「風の流法、風神閃！」

直後のことだ。猛烈な力をまとったワムウの両腕が彼の前面で交

差し、横一文字の風が放たれた。

ただの風ではない。あらゆるものを切断するほどの威力が込められた、凄まじい真空波である。遅れて、音に迫る速さが空気を叩く音が鳴り響く。

切断力に加えソニックブームに近い暴力を持った一閃が、伏せたジョージの上を通り過ぎる。

だが、マリオにはそうする時間がなかった。今からそんなことをすれば、彼の身体は伏せる途中で前と後ろの真つ二つになるだろう。

後ろに退がることも意味がない。上半身と下半身で真つ二つになる。横であろうと似たようなものだ。

(間に合わない？ 死……)

そうしたヴィジョンが、マリオの脳裏をよぎる。一瞬の間に彼の思考は加速していた。だが死の淵にあつて高速で回る思考は、無慈悲に死を予言し続けている。

だが、

(い……いや！ こ、こおおおれだああアツ!!)

マリオは咄嗟に、大きく跳躍した。それも前方に向けてだ。彼は死中に活を求めたのである。

跳び上がりながら、懐からロープを引つ張り出す。材質は一般的なものだが植物油に浸してあり、波紋伝導率はほぼ百パーセント。

これに波紋を流し込み、より強く、硬く、柔軟にしなる鞭とする。「喰らえワムウ!!」

そうして彼は波紋ウィップとでも言うべき一撃を、腕力のみならず位置エネルギーを加えてワムウへ振り下ろす。

凄まじい攻撃を放ったがゆえに、多少の隙をさらしていたワムウにはこれを万全に防御する手段はなかった。圧縮した空気も使い切っている。

回避は可能だが、既にジョージが身体を起こして動き始めている。どこに向かおうと、彼が追撃してくれるだろう。完璧だった。

だった、はずだった。

「そう来ると信じていたぞー！」

だが、ワムウもまた前へ出ながら跳躍した。死中に活を求めたのは、何もマリオだけではなかったのだ。

「なー！」

思わず吃驚するマリオ。

その彼の前方で、ワムウは跳躍の反動を用いて上下逆さまになっていた。そして上を向くことになった彼の足は。脚は。

「ぐあああッ!？」

種族特有の理不尽な伸びを見せ、マリオの身体を……特に肺の周辺を、強烈に打ち砕いた。

サ・マ・ソ・ル・ト・キ・ツ・ク。人間の世界であればただのパフォーマンス、魅せ技とでも言うべき技。ワムウはそれを、見事な決め技として使って見せたのである。

「俺の風神閃を見てから回避するなら、跳躍しかない……その通りだ。前に向けて跳び、攻撃に繋げるのも見事。しかしなればこそ、対処は容易いというもの。それ以外に取り得る選択肢がないのだからな」

蹴り抜いた反動を利用して縦にクルリと半回転し、足を地に向けたがらワムウが言う。

「あああああああッ!!」

「マリオオオオーッツ!!」

マリオは大きく吹き飛ばされた。先に通り抜けた一閃により、大量に切り倒されていた木々の中へと落ちて消える。

ジョージの声に反応はなく、彼の声は夜の闇に溶けて消えた。

「さて、次は貴様だな」

着地を終え、悠然とワムウがジョージに向き直った。

19. 風の武神・ワムウ 2

「く……っ！　だがここでへこたれるわけにはいかない……我々人類の未来のためにも……マリオのためにも！」

ジョージが吼える。波紋の呼吸を振り絞る。生み出された波紋は彼の全身を覆い、オレンジ色の輝きを伴って迸った。

これを見て驚いたのはワムウだ。

「なんと……！　これほどの波紋を練り上げることができる人間がこの時代に！」

ジョージがまとった波紋の輝きは、ワムウですら初めて見るほどの量だったのだ。あまりにも膨大な波紋が体内に収まりきららず、可視化されたエネルギーとして吹き上がる様子は尋常ではない。

しかしワムウが驚いたのは、わずかな間だけだった。

「……二千年前の波紋戦士たちは、いずれも同じようなセリフを吐いて我々に挑んだものだ……。『腕の一本や二本や眼が見えぬぐらいでへこたれるか』『よくも友の命を奪ってくれたな』と……だが！」

彼はすぐさまニヤリと笑うと、喜びを隠すことなく声を上げる。

「貴様はその手のセリフを吐くだけのことはある、真正銘の猛者のようだ！　ならばこのワムウ、全身全霊で応えねば勇者への礼を失するというもの！」

ワムウが身構える。もはやこの先、どのような技であろうと、細工であろうと、一切を見逃すまいとする態度で。

「改めて名乗ろう！　我が名はワムウ！　貴様の名をお聞かせ願おう！」

「……ジョージ！　ジョージ・ジョースターツ！　だツツ!!」

ワムウに応じながら、ジョージが地面を蹴る。

その速度は、先ほどよりも明らかに上がっていた。膨大な量の波紋によって、身体能力が増幅しているのだ。アルフィーが見たら、界王拳とか言うに違いない。

「はあッ！」

「ぬうん！」

二人の拳が交錯する。ただのパンチが並みの波紋疾走オーバードライブほどに昇華された威力を秘めて、ワムウの腹を狙う。

ワムウの拳もまた普通ではなく、風を纏ったものだった。身体の管から放たれた風をまとった、重く鋭い拳。砲弾のごとく放たれたそれは、人間に向けるには過剰なもの。

それらが、お互いに叩き込まれた。生物がぶつかるにはあまりにも派手で激しい音を響かせて、両者はかみ合わない磁石のように弾けて離れる。

「ぐううううっ！」

「ちいっいいいっ！」

当然、その瞬間は凄まじい衝撃が生まれる。ジョージの身体は血を噴き出しながら吹き飛び、地面に転がった。

一方、波紋を腹に受けたワムウは吹き飛びこそしなかったものの、たたたらを踏んで数歩分後退させられる。

そのさなか、ワムウは驚いていた。攻撃を受けたことにはない。攻撃を当てた己の拳にも波紋が流れたことに驚いたのだ。それはすなわち、ジョージが全身をそれほどの波紋で覆っているということに他ならない。

つまりワムウは、ただ直接攻撃を当てただけでも反撃を受けることになる。それを恐れる彼ではないが、けれどももかつてない逆境であることは間違いなかった。

「ぐぬ……っ、く、喰らえ……！ 波紋リーフカッター！」

そして、ジョージが挫けることもなかった。彼は地面を転がりながら、周囲の落ち葉を拾って波紋を通していった。

既に木から離れているため青葉に比べれば波紋の通りはよくないが、そこは量でカバーだ。そうして刃物と化した数枚の落ち葉を、勢いよく投擲した。転がっていた勢いを利用して起き上がりながらだ。

対するワムウは、これを身体の管から風を放つことで蹴散らす。

それと同時に、風を片腕に纏わせ先ほどと同様に身体の後ろへ引き絞った。

「風神閃！」

再び放たれた横一文字の真空波。これを見て、ジョージは一瞬だけ四つ足の獣となった。跳躍することなく前へ出るために、身をかがめてその状態で駆け出したのだ。

かくして風をかくぐつた彼は、その瞬間にかすかな違和感を覚えながらもワムウに攻撃をしかける。

手にはかがんで四つ足となった一瞬のうちに拾った枝。これもまた波紋によって強化されており、さながらレイピアのようになつてワムウの喉を狙う。

「ふっ！ はあ！」

だがワムウは、上半身だけを横にスライドさせることでこれを回避した。

さらに、スライドした上半身を元の位置に戻す勢いを利用して、ジョージの頬に強烈な肘打ちを見舞う。

「ぶぐっ!」

「むう……!」

ジョージは見事に一撃を受けまた吹っ飛んだが、ワムウの表情は優れない。

やはり、攻撃をただ当てただけで波紋が返ってくる。ダメージと言うには細やかだが、それでもあまり何度も受けていては確実に不利になるほどの量。ましてやジョージに諦める気配はなく、完全に意識を落とすか、命そのものを奪うまでとまることはないだろう。そこまで行くまでに少しでも手間取れば、あるいは……。

とはいえ、ワムウにはただ殴る蹴る以外にも取れる選択肢はいくつもある。

「はッ！」

吹っ飛んだジョージに向けて、再びの真空波。と同時に地面を蹴り、真空波に追隨する。

そうしながらも、真空波を連続して放っていくワムウ。弾幕のように重なったそれらは、ジョージがどう動いても数発は当たるだろう絶妙な位置に散らばっている。

おまけに、トリとしてワムウ本人が控えている。ジョージにしてみ

れば、風の弾幕を仮に回避できたとしてもすぐにワムウに追撃される形だ。

「……………、だあアアーツ！」

そんな中でジョージが取った選択は、なんと突撃であった。回避するような足さばきを見せながらも、臆することなく真空波の弾幕へ突っ込んだのである。

これにはワムウも驚く……………ことはなく、感心したように笑っていた。

ワムウには、ジョージの意図がわかっていた。すなわち、この弾幕には穴がある、ということに。

「せりゃあアーツ!!」

ジョージは手にした枝を、やはりレイピアのように扱う。その過程で数発の真空波を受けたが……………しかし彼の身体が切り裂かれることはほとんどなく、ほとんどは突風程度に揺さぶられただけ。

彼はそのまま、あまり勢いを落とすことなく枝の先をワムウに合わせてきた。

「やるな！ この短時間で我が風神閃の仕組みを理解したか！」

応じながら、ワムウは裏拳でレイピアをいなす。やはり波紋がじわりと侵入してきたが、それは無視。いなした勢いのままジョージに膝を合わせ、攻撃を逸らされ泳いでいる彼の腹に一撃を加えた。

しかしジョージもさるもの。向かってきた膝に肘をぶち当て、最低限のダメージでしのぎ切った。この肘はもちろん、波紋肘リーバックフオーバードライブ支疾走だ。しっかりとワムウへのカウンターとなった。

そうして二人は交錯した。当初とは立ち位置を入れ替えた両者は、改めて向かい合う。

だが、どちらが優勢であるかは火を見るより明らかだ。負傷はあれどワムウはいまだ余裕を見せているが、ジョージは既に満身創痍。傍目にはわからないが、内臓や骨にもダメージが入っており、身体からは血が滴る様はどうみても重傷患者だ。

「貴様の風神閃とやら……………一秒にも満たないわずかな時間だが、それでも『溜める』時間が必要なのだろうか？ その量に応じて、威力やス

ピードが変わる……そういうことだな！」

けれども、ジョージの心は折れていなかった。重傷ながらも、むしろ戦意はよりみなぎっている。全身を覆う波紋の輝きも、当初こそ減りはしたが健在だ。

その彼の指摘に、ワムウは満足げに頷いた。

そう、先ほどの真空波の弾幕を受けて、ジョージがバラバラにならなかったのはそのためだ。

彼は二度目の攻撃が、一度目のそれより威力が弱いことを回避しながら感じ取っていたのだ。それが彼の覚えた違和感だった。そうして弾幕を見た瞬間、その違和感の正体を察したのである。察して、威力の弱いものだけを選んで当たりながら前に出たのだ。

「だが……それを理解したとて、コンマ何秒の世界の差を認識することとは人間には困難。あの一瞬で、よくぞそこまでこなしたものだ。見事だ！」

しかし、ワムウが言う通り。察したところで、普通の人間がどうこうできることではない。

ゆえにこそ、ワムウはジョージのなしたことを素直に称賛するのだ。これをあの一瞬で、咄嗟にやってのけた人間は、かつてローマの時代にもいなかったのだから。

とはいえ、それがわかったところで戦況が有利になるわけではない。それをどう今後に生かすかが大事だが……ワムウが待つはずもない。

「ならば、次はこうしてみるとしよう！」

「……ッ!？」

後ろに跳んだワムウが拾い上げたものを見て、ジョージは息を呑んだ。

「どうやら貴様を殴ると波紋が返ってくるようなのでな。俺も工夫せねばならん……ふふふ、戦いの最中に試行錯誤を強いられるなど、何千年ぶりだ？ 俺は嬉しいぞ！」

ワムウが手にし、槍や棍のような形で構えたもの。

それはやや細身ながらも、間違いなく、切り倒されたばかりの木で

あった。

「ぬううん!!」

ワムウはそれを。

思いつきり、勢いよく振り抜いた。

瞬間、突風が吹き荒れる。ただ振り抜いただけではなく、風の流法モールドの合わせ技だ。光の巨人ですら揺らぐほどの風が吹き抜け、あおられた土と砂、そして落ち葉が舞い上がる。

ジョージは身をかがめて影響を最小限にしようと努めたが、いかんともしがたかった。一秒ほど耐えはしたが、結局こらえきれずに地面を転がされてしまう。

「くうううう……っ！ くっ……い！」

そんな中でも、少しでも早く復帰するべく身体を動かすジョージ。やがて吹き飛ぶ勢いを利用して身を起こして、着地した。

が……彼が見ることができたのは、雑木林の惨状だけであった。

「な……!?!」

目の前から、ワムウの姿が消えていた。烈風を巻き起こすと同時に、早くも次の行動に移っていたのだ。

横からワムウが迫ってくる。ジョージは構えを万全にしつつ、これを迎え撃つべく前に出……ようとして。

横に長い影が差してきたのを察して、慌てて身を引いた。

「ぬううう……っ！」

空から、木が降ってきたのだ。それは先ほど、ワムウが振るった木だ。しかけると同時に、上からの攻撃に利用したのだ。

ワムウがその木を再び手に取ることはなかったが、落ちたそれを蹴り飛ばしてジョージへの攻撃には使った。横に長い、しかも地面を這うように、されど猛スピードで転がってきた木を、ジョージは跳ぶ以外に回避できなかった。

そしてその状態は、もはやワムウにとってただの的でしかない。

「風神閃！」

後ろに引き絞られた腕が、一気に前へ出て交差する。

すると先ほどの弾幕のどれよりも苛烈な真空波が巻き起こり、

ジョージを襲う。

「うおおおおおーっ!!」

それでも、黙って攻撃を受けるといふ選択肢はありえない。

ジョージは懐から、植物油に浸されたロープを取り出していた。焦ることなく、しかし大急ぎで展開されたそれに波紋を通し、振るう。

鞭と化したロープが空気を切って、宙を踊った。そうして、ロープは直前にワムウが蹴り飛ばした木のわずかな出っ張りに巻き付く。

と同時に腕の力を込め、木を手繰り寄せる……が、いまだに転がり続けている木を引き寄せることはかなわず、ジョージの身体は逆に木のほうへ引き寄せられていく。

そうしてかろうじて、彼はワムウの攻撃から逃げきったのだ。ワムウの攻撃の勢いが、彼を危険地帯から離脱させたのだ。

「そうするしかなかろうな!」

しかし、ワムウの攻撃はまだ終わっていない。彼はそれすらも読んでいた。

後ろ半身に集中して表出させた管から、猛烈な勢いで風を噴射したワムウ。そのまま地面を蹴れば、彼はジェット機さながらの加速を實現。あつという間もなく、ジョージの隣までたどり着いてしまう。

「な!」

並ばれたジョージの明晰な頭脳と観察眼は、ここまでワムウが行った一連の行動をほぼ正確に察していた。

察してはいたが……ここからワムウの攻撃をかわすことは、もはや不可能だった。

20. 風の武神・ワムウ 3

——回避ができない？ だからどうした。

ワムウが必殺の一撃を放とうと腰を落とす様子を、間延びした感覚の中で見ながらジョージはそう思った。

確かに今のこの体勢では、このあとの攻撃を防御することも回避することもできない。それでも、諦めるという選択肢だけは彼の中にはなかった。

考えろ。思考を回せ。今の状態から、何ができる？ 何をすれば逆転の一手となる？

(まずは！)

手を放す。自身を空中へ誘った、直前までは回避の一手であったロープ。木にくくりついていたそれから、手を放す。

ただ漫然と離すだけではない。力を込めて、身体的位置取りを少しでも変えられるように腕ごとしなせながら。

そうすることで、ジョージの体勢はさらに崩れる。だがこれでもいい。これによって、ワムウの正面から逸れるような軌道で空を切った。これで真空波の直撃は免れた。

(波紋！)

次いで崩れるままに身を任せ、しかし地面に墜落する寸前に手を突き出す。片腕一本でバランスを取って、逆立ちの体勢。そこからバク転の要領でさらに距離を取らんとする。

ジョージのこの一瞬の動きを、ワムウは両腕を回し始めながらも感心して見ていた。ここでもまだ勝負を諦めず、己に立ち向かう気概を忘れない姿。これぞまさに勇者だと思いつながら……しかし、もはや遅いとも思いつながら。

ワムウが今から放つ技は、広範囲を巻き込む文字通りの必殺技だ。かすった程度でも致命傷となる一撃は、どれほどあがいたところでこの至近距離から避けられるものではない。

たとえジョージがこの一瞬のうちに生命磁気への波紋疾走で落ち葉を集め、盾にできたとしても。

「秘技！」

ワムウが吼える。遂に風が荒れ始める。

——だが、彼からジョージに向けて攻撃が放たれることはなかった。

なぜなら、突如として雑木林全体が真昼のように輝きだしたのだから。

「ぬう!？」

光はいずれも、波紋の輝きであった。放っているのは地面に生える草、そして木々だ。

今は冬。にもかかわらず、彼らは春を迎えたかのように生き生きと躍動していた。芽が生え、花が咲き……それらはいずれも、波紋が持つ生命力の活性化がなせるものだ。

——そう、ジョージとマリオが戦う場所をここに選んだのは、何よりこれが一番の理由だった。

もちろん、ここなら他に被害者が出ないだろうというのものもあるが。何よりも、雑木林という環境そのもの。波紋を流し、武器にも防具にもできるものが溢れている……人工ではあっても、それらが自然界として機能している雑木林という環境。それそのものが彼らの切り札だったのだ。

そしてさしものワムウも、これにはひとたまりもない。

「SHHHYYYYAAAHH!!」

大技を出そうとしたところに不意を打たれ、悲鳴を上げる。周辺に満ち溢れる生命の躍動。そのすべてから放たれている黄金の輝きが、ワムウの身体を焼き払っていた。

「ぐふ……っ、ど、どうだ……! こ、これで……!」

第三者の声が続く。

声の主は、先ほどワムウに吹き飛ばされたマリオだった。彼はいつの間にか木々の中から脱出し、この場まで戻ってきていた。

そう、彼は重いダメージを負ってもなお諦めず、雑木林に波紋を注ぎ続けていたのだ。そしてワムウが完全にジョージのみに意識を集中させたところを突いたのである。

もつとも、立ち上がって戦場を睥睨してはいるが、彼の身体はポロポロだ。特に肺周辺は酷い有様で、呼吸もままならない状態にある。通常であれば、これほど大規模な波紋を扱うことは不可能だ。

しかし、彼には赤石がある。波紋を増幅する、エイジャの赤石。戦うために衣服のあちこちに仕込んでいたそれらを十全に活かしきり、不可能を可能にしたのである。

そう、この戦い。彼らがワムウ相手に真つ向からこれほどまで戦えた最大の理由は、エイジャの赤石にあったのだ。

「好機！」

そしてそれは、ジョージも同じこと。

彼はこうなることを理解していた。地面からじんわりと伝わってくる波紋を、ずっと感じていたから。相棒が諦めることなく、波紋を練り続けていたことに気が付いていたから。

だからこそ、この一瞬のスキに体勢を整え攻勢に転ずることができた。呼吸を振り絞り、全身に計画的に配された赤石を通じてそれを増幅。渾身の力を込めて、ワムウへ一撃を見舞う！

「はああああーッサンセットオレンジオーバードライヴ茜色の波紋疾走ッッ!!」

「——AHHH……」

それを。

「OOOHHHHH——」

無視して。

「——おおおおおッ!!」

ワムウは両手を、足下に向けて叩き込んだ！

「な!?!」

「バカな!?!」

二人が驚愕する。

意味のないことをしたからではない。ワムウの両手が、凄まじい勢いで回転していたからだ。そしてその意図も理解できてしまったから。

そして二人はここに至って、本当の意味で伝承の意味を理解した。ウェールズ神話において武神と称されるワムウが、なぜその名を冠さ

れているのか。その理由を今身体で、そして魂で理解した。せざるを得なかった。

……ワムウは確かに、ジョージには攻撃を放たなかった。しかし、一撃をやめるつもりはさらさらなかったのである。波紋を全方位から浴び、目の前に敵と致命の攻撃が迫ってもなおひるむことはなく、とまることなく必殺技を続行した！

なぜならば、これこそがこの圧倒的に不利な状況をくぐり抜けるために必要なことだと、刹那のうちに理解していたから！

——ゆえに。

右腕を、関節ごと右回転。

同じく左腕を、関節ごと左回転。

猛烈な勢いによって、その二つの拳の間には真空状態が生まれる。何物もない……ただ、そこに入り込んだものすべてを砕く、無の世界。その破壊力は地球上のどの生物にも追従を許さず、空間そのものが死をもたらす圧倒的破壊空間として、ワムウの両手から展開されている。

「神砂嵐ッッ!!」

そんな歯車的小宇宙が。

大地を盛大に破壊した。

地面がえぐれ、めくれあがり、石と砂と土が轟音と共に大量に巻き上がる。巻き込まれた草木は圧縮され、あるいは切り裂かれ、瞬く間に塵と化す。そうしてワムウの足下は、ズタズタになった不恰好な二連結クレーターが出来上がった。

しかしその衝撃は、それだけに留まらない。クレーターを中心にして地面に亀裂が入り、周囲に広がる。地球がかすかに軋む。

それを追うような形で真空に引きずりこまれた空気が暴風となり、最初に犠牲となった倒木たちを吸い込み始める。

「ぐわあああ!」

「くうう!!」

そこに一拍遅れて、宙に巻き上がっていた土砂が、驟雨もかくやとばかりに降り注いだ。

ジョージもマリオも、もはやワムウどころではない。倒木や土砂もろともクレーターに向けて吸い寄せられていく。

このままでは二人とも生き埋めになってしまおうが、しかしこの状況ではろくに身動きを取ることもしかない。何せ土砂が降り注ぐ間にも、地面ごと足元をすくう形で暴風が吹き荒れているのだから。

そして何より。

「はーわ……ワムウー」

それを、ワムウが見逃すはずもなく。

吸い寄せられるところを待ち構えていた彼の腕が、神砂嵐の余韻のまま回転していた腕が、ぐうんと伸びて二人それぞれの身体を捕捉する。

「ぬううん!!」

かくしてドリルのように回転する拳が、ジョージとマリオを真正面から歓迎して――。

――砂煙が漂っていた。

地面は適当かつ強引に耕したかのようにぐちゃぐちゃで、軽く雑にミキサーにかけたように、樹木や草花が雑多に混ざり合つてところどころに露出している。

その中には、身体半ばまで埋まった二人の男も含まれていた。

かすかに生きてはいるが……もはや虫の息であり、意識も既に落ちて
ている。

そんな二人を、さながら慈しむかのように見下ろす男が一人。こちら
らも瀕死の状態で、全身から血を流して片膝をつき、荒い呼吸をつき
ながら、ところどころが石になりかかっている。

しかしその目だけは、賞賛の一色のみに満ちていて。間違いなく、
埋まりかけている男たちにのみ向けられていた。

「み……見事、だ……」

男――ワムウは、讚える。自らをここまで追い込んだ真の勇者に対

して、惜しむことなく。

「よもや……よもや、森そのものを波紋の空間にしてしまう、とは……二千年前の、波紋戦士では、絶対に不可能な技だった……何より……」
まずはマリオを。そののち、視線をジョージに移して。

「あの、瞬間で……刺し違えんとした貴様の覚悟……見事な戦士ぶりであった……！」

そう。ワムウもまた、その腹部に重度の波紋傷を負っていた。特有の煙が全身から吹き上がり、下手に動けない状態にある。

最後の一撃を加える直前、ジョージによって与えられた最新の傷。そして、この戦いでワムウが負った最も大きな怪我であった。

しかし、それでも二人からの応えはない。

「もし……もし、俺の流法モードが場そのものを瞬時に破壊できる『風』でなかったなら……！ この『風』のワムウでなかったなら……ツ！ ハア……ハア……ハアア……！ この状況をどう切り抜けていたか、わからぬ……！」

ただ一人、ワムウの常からは信じられないほどのか細いつぶやきだけが、この場に響いている。

「そしてもし……！ そしてもし……『風』の流法モードを使わないカーズ様やエシデイシ様が、このワムウより先に……ここにいたなら……！」

最初に目覚めたのがこのワムウでなかったなら……！ 負けるはずはないにせよ……俺以上の苦戦を強いられたら……！」

そこには修飾も何もなかった。しかし言ったことへの反感もない。それだけワムウにとって、嘘偽りない本心であった。

彼はそうして、しばしの間勇者との戦いの余韻に浸っていた。呼吸を整え、傷の回復に努め……しかし怪我は重く、波紋傷は一向に治らない。

無理もない。彼らの中で最も太陽に強いアルフィーであっても、渾身の波紋疾走から回復するのに数時間を要した。戦いのさなかにそれに匹敵する攻撃を何度も受けたワムウは、人間で言うところの絶対安静とも言うべき状態にあった。

それでもなお、ワムウは歯を食いしばって立ち上がった。

自身の傷すら名誉として、これを与えたものたちに不甲斐ない姿はさらすまいと。踵を返して二人に背を向けて、ローマの街に足を向けたのだ。そうすべきだと、彼の心が叫んでいた。

そしてこれほどの怪我を負ってなお、倒した相手を喰らおうとしないのはワムウの矜持ゆえだ。

彼にとって、強い戦士こそが真理。勇者こそ友であり、尊敬する者。心底そうだと認めた相手を喰らうことは、己が貫くべき生き方ではない。彼はそう理解していた。

「まさに……見事であった……。ジョージ、そしてマリオ……貴様たちの名前……このワムウ、永遠に記憶の片隅に、留めておくぞ……。俺が、生きてきたこの一万二千年……最も勇敢なる戦士であった二人のことは……永遠に」

背を向けた彼の、その遅々とした道行に風が吹く。まるで鎮魂歌のような、しかし旋律にもなり切らない哀しげな音を響かせて。

「さらばだ——」

——ジョージ・ジョースター二世、およびマリオ・ツエペリ。

敗北。

21. 風雲急を告げる

サンタナ王国での後片付けを終えて、わたしたちは再びヨーロッパへ戻ることになった。今回はサンタナやジョセフも一緒だ。

さらに、スツピーも同行している。彼は伯爵と合流してもらってから、財団のヨーロッパ支部にサンタナを連れて行ってもらおう予定になってる。秘密兵器の開発は、そこで合同でやってもらおうつもりだ。

シュトロハイムたちは、一足先にドイツに戻った。戻り次第、原作同様に紫外線照射装置の小型化に勤しむみたいなので、その点に関してはルベルクラクも協力していけたらと思ってる。

……シュトロハイムが健在だから、さすがに彼はもう前線に来ることはないかな？ 五体満足の人をあの不死身めいたサイボーグ状態にするのは、さすがのナチスも躊躇するだろうし。

……するよね？ さすがにするよね？ そこまでアレじゃあないよね？

ま、まあ、話は戻すけどさ……王国のゴタゴタについてなんだけど。例の王様は強制退位・幽閉のコンボを決められた。親サンタナ派閥にクーデター起こされたんだよね。そこにわたしとサンタナは軽く巻き込まれたわけだよ。

まあわたしたちはカオスになってる現場に踏み込んで、一喝してまとめるっていう水戸黄門みたいな役をしただけなんだけどさ。復活した神様に従うことを良しとする一派がこれで勢いづかないはずがなく、またサンタナもそうするつもりだったみたいで、その後の流れはスムーズだった。

あとあと聞いた話では、彼らは元々サンタナが目覚めるタイミングで動こうとしてたみたいだ。あの王様の統治には不満が多かったようで、虎視眈々と狙ってたらしい。

後釜にはあの王様の義兄が入ったらしいけど、個人的には親サンタナ派閥の黒幕は信仰がどうこうというより、新王様を王位につけることが至上命題だったんじゃないかって思う。元王様は太後の実子

らしいけど、新しい王様は元王様が生まれる前に分家から養子として王家に入ってたって話だし。

南部家かな？ わたしとしては、半吸血鬼でもお家騒動ってあるんだなって感じだけどさ。

なおこの即位の際、サンタナはいつの間にか下半身が復活していて、元王様は体調不良で式典欠席だったので、わたしは色々と察した。たぶん一、二年ほどしたら病死って発表されるんだろうなって……。

まあそんなこんなで、イギリスに戻ってきたわけだけど。

「大変ですアルフィー様！ カーズたちが目覚めました！」

どうやらわたしは、年明け早々覚悟を決めなければならぬらしい。

「は!? ストさ……んが吸血鬼にされたって!？」

順を追って話を聞いていると、わりと初っ端から寝耳に水な事態で草も生えない。

ストレイツオがドイツのどこかに監禁されてること自体は、わたしも知ってた。ただ行方を探すだけの時間がなかなか取れなかつたし、結果として原作みたく暴走して吸血鬼化できる状況じゃあないと思っただけ優先順位下げたのに!

波紋の達人で、吸血鬼や柱の一族と渡り合える人をなんで吸血鬼にしてしまったの……その選択は間違いなく致命的なミスでしょ……。

聞けば研究者の暴走らしいけど……これだからマッドってやつは……。

「シーザー君がとめてくれたのか……彼には感謝しなくては」

「フン、あのキザヤローならそんなくらいやってのけるだろーよ!」

ジョジョ二人のリアクションがいかにもな感じではあった。ジョセフの反応はいかにもなツンデレで個人的には微笑ましかつたですね……。

「親父が……ワムウに……!？」

まあ、その数十秒後には特大の凶報で曇らざるを得なかったんだけどね……。

「……ジョージは……」

「ギリギリのところまでロギンズ氏とメツシーナ氏が間に合ったのとことで、かろうじて助かりました。当初は意識不明の重体でしたが、今は何とか……。しかし、下半身は不随になってしまったようで……。それを抜きにしてもいまだ重傷であることには変わりなく、絶対安静の状態です」

「……ッ」

「そしてマリオ氏も……。もう戦線に立つことは不可能でしょう。ジョージ氏ほど重傷ではありませんが、肺を手ひどくやられてしまっていて……。波紋の呼吸ができなくなっているとのことですよ」

「……なんてことだ」

いや本当、なんてことだだよ！

わたしはジョースター家三代とツェペリ家二代の揃い踏みを正面から見たかったのに！ 原作では死んでる二人が生存してるから行けると思ってたのに！ 持ち上げてから落とすのやめてえ……！

いやまあ、死んではいらないんだけど……。それは不幸中の幸いではあるけど、戦力的な意味でも開戦前に二人が離脱するのはすごく痛い！ 「あのワムウと戦って瀕死の重傷を負わせただけでなく、生還した……だと……!?!」

そしてサンタナの驚愕ポイントはちよつとズレてる！ それも間違いないじゃないけども！

「と……とりあえず、だ。僕たちは急ぎリサリサたちと合流しよう。アルフィー君の癒しの力を借りたいところだけど……。ひとまず生きるか死ぬかわからないような状況でないのであれば、ジョージたちの優先順位は下げざるを得ないだろうから……。アルフィー君はカースを」

ジョナサンが、渋い表情ではあるけれども決意の色もにじませて、わたしに言う。

自分の息子のことだ。思うところはたくさんあるはず。

それでもわたしの力を回復ではなく、カーズ様を抑えるために使えるという判断はさすがというかなんというか。周囲に波紋使いがいるならわたしがいなくてもある程度まではなんとかできるはずだから、彼の判断は正しいとわたしも思う。

何せ、

「既に人的被害は広がり始めています……二千年前のように街一つとかそういうのは今のところないようですが……」

というわけだよ。そりゃあ、目覚めて何するかって、食事だよね……。あとは、手駒用に吸血鬼も増やしてるんだろうな……。

何が怖いって、そこらへんの正確な数字が、優秀すぎる諜報網を持つルベルクラクをもってしてもはつきりとはわからないってことだよ。それだけカーズ様やエシデイシは鮮やかに、かつ正確無比に、証拠を残さずに行動しているのだ。

「……ッ」

そこはわたしだけでなく、もちろんジョセフだってわかっている。彼はジョナサンの判断に何か言いたそうな顔をしてはいたけど、理性はちゃんと働いている。普段は多弁な彼が黙したまま、静かに目を燃やしていた。

「そ、そうだね！ わたしも大急ぎでカーズ様と合流するよ！」

「動向の誘導、よろしく頼むよ。気をつけてくれ、アルフィー君」

「うん！ そっちも気をつけてね、突然のエンカウントとかに！」

「ああー！」

というわけで、わたしは大急ぎで伯爵と連絡を取って、カーズ様を追いかけることになったのだった。

ああもう、本当にうまくいかないなあ……！！

「なんと!? 奴らが!？」

任務を終えて故国ドイツに戻ったシュトロハイムを待っていたのは、柱の男たちの復活とある部隊の全滅という特大の凶報であっ

た。

サンタナ王国での報告を終えるや否や呼び出された彼は、恐怖を覚えながらもそれを飲み干し、上官の前で直立不動を貫く。

「うむ……例のアレが、な……完成したのだ。故に、自信を持って勝てる戦いだと思われていたのだが……」

「敵わなかった、と……」

「そうだ。王国で貴官が得たこれらの情報があれば、私ももつと強く反対できたのだが……いや、それは言っても仕方ないことか」

上官の渋い表情に、シュトロハイムも同じ表情で応じる。

全滅した部隊は、まさに選り抜かれた精鋭たちだった。誇り高く、何よりこの世界で最も優れた肉体を持つ者たちだった。

それが失われた。軍事的、政治的にはもちろん、感情的にも受け入れがたい。

「……それで、今後はいかように？」

「当面は、ルベルクラクと水面下で手を取る。だがこちらから手を出すことはしない、ということだ。あれは波紋戦士たちに当面は任せると」

「それが良いでしょう」

そう答えて、しかしシュトロハイムは違和感を覚えて眉をひそめた。

「……当面は？」

「そうだ。部隊の全滅を受けて、目下急ピッチでアレの改良を行っている。それが完了次第、我々も動く予定だ」

「……正気ですか准将殿!？」

「案ずるな、矢面には立たん。君の資料は見た……我々の技術はまだ拙く、たとえアレの改良が首尾よくできたとしても波紋戦士どもには及ばないだろう。癩なことだが……それでもアレが更に発展すれば、連中との連携もしやすくなるだろうからな。少なくとも、ルベルクラクの連中と違い柱の男どもにいきなり喰われることはなくなるはずだ」

「……ですか」

返事に、シュトロハイムは素直にホツとする。彼はこれ以上、同胞を絶対に勝ち目のない戦いに放り込んで死んでほしくなかった。

「……ところでシュトロハイム少佐、これは提案なのだが」

「なんででしょうか？」

話の節目を迎え、上官が話題を変えた。

同時に差し出された書類をひとまず受け取りながら、シュトロハイムは上官に目を向ける。

「君、ゾル中佐に代わって例の部隊を率いるつもりはないかね？」

「……は？」

「いやなに、例の部隊は彼を残して全滅してしまっただけだから……。責任は、柱の男どもの戦力を甘く見ていた我々にあつてしかるべきなのだ。自分が責任を取ると言つて聞かないのだ。それはそれとして、負傷もしている」

特に左目がひどい、という上官の言葉にシュトロハイムは得心した。

「ああなるほど……中佐殿は硬骨漢であらせられますからな……」

「そういうことだ。無論、この提案を受けるのであれば君は昇進するが……その分、死の危険も増す。断つてもらつても構わない。これはそれほどの任務になる。我々もそこは承知している」

「……………」

上官の言葉に、シュトロハイムはしばし言葉を失う。そうして頭の中で、あれこれと思考を走らせる。

しかし、答えはわりとすぐに出た。

なぜなら、シュトロハイムの脳裏には一人の男の姿がよぎったからだ。あいにくと国も、心を捧げる先も違うが、シュトロハイムは誇り高い勇気があるならば、そのようなことは関係なく敬意を表することのできる男だった。

ゆえに、

「准将殿、自分は——」

彼は、己のまさに人生がかかった選択に答えたのだった……。

「ここもハズレか……」

無人の遺跡を一通りさらい、出てきた男……カーズは苦々しい表情を隠すことなく呟いた。

「どうやら我々は細かい情報収集を、便利だからとアルファイ一人に任せすぎたようだ。そう反省する。」

何せ彼女がいるといたないのでは、収集力に雲泥の差が出るのだ。戦力という意味では半端な彼女だが、こと人間の使い方については恐らく随一。そう認めてやらねばならぬだろうと。

特に今のよう目覚めた直後のタイミングでは、そのノウハウの有無で大きな差が出る。今回は、ワムウが短期間ながらも療養が必要なほどの大怪我を負ったこともあって、普段より効率が落ちている。

そうしたことを、しかしカーズは口には出さず、内心で省みながらも足を街のほうへ向けた。

「あのアホめが……どこで何をしている」

剣呑な光を瞳に宿し、夜空を仰ぐ。文字だけで見るならば、まるで恋い焦がれる男のようでもあるが、そんな甘いものではないことは誰の目にも明らかだ。

「そうして辿り着いた街の、公衆電話の受話器を取る。」

「エシデイシか？ ああ、私だ……どうだ？ ……そうか。うむ……こちらもハズレだ。まったく腹立たしい」

電話の向こう……エシデイシのややイラついた声に逆に気持ちを落ち着けつつ、カーズは考える。

「何かがおかしい。行く先々でこうも何も得られないというのは、かつてなかった。」

いや、無駄足だったことは何度もあったが、そうした常とは異なる違和感があった。まるで何かが自分たちを阻んでいるような、見えないう糸に絡め取られているような、そんな不快感が。

「……ああ。うむ、次の手がかりを調べてそこでも何も無いようなら、一度合流しよう。ワムウの容体も気にかかるしな。そこでお前たち

の所感も聞いて、情報を精査する。うむ……ではな。次こそは何かつかめると期待しよう」

ガチャン、ツーツーツという音を置き去りに、カーズは電話から離れる。

空には月。今宵雲はなく、黄金に輝く夜の女王はそのさやかな光でカーズの顔を照らす。

彼はその光に穏やかな目で応じ……視線を下に戻せば、そこには甘えた声を上げる野良猫が、足下にじゃれついていた。

その猫に、気まぐれに菓子を投げてくれてやる。猫は狂喜して食事にありついた。

だが猫があつという間に食べ尽くし、さらなるおねだりをしようと顔を上げたとき。そこには既に、カーズの姿は影も形もなかった。

残された猫は、化かされたようにきよとんとするばかりであった……。

2.2. 光の邪神・カーズ 1

わたしは焦っていた。その上で、全力で走っている。
なぜかって？

それはね、ずばりね……。

カーズ様にルベルクラクが存在が露見したからだよ！

裏にわたしがいることまでバレてるかどうかはまだわかんないけど、仮にバレてなかったとしてもバレるのは時間の問題と見ていいだろう。

ルベルクラクの忠誠心を疑っているとか、そういう話じゃあない。人体の構造を熟知しているカーズ様の手にかかれば、人間の意に反して口を割らせることなんて容易いだけだからだ。

だからわたしはそうなる前に、カーズ様と合流したかったんだけどね……完全に行き違いになりましたね。わたしがドーヴァー海峡を渡って大陸に移るのと時を同じくして、カーズ様がイギリスに渡ったものだからもうほんと、ほんともうね……。

「これは……」

そうしてわたしは、ルベルクラク家の本拠地とも言えるカーディフ。その伯爵本家の敷地までやってきた。

伯爵と一緒に来たわけだけど、そこは既に地獄絵図だった。周りには大量の血の跡と、匂い。「ネヴァアーフェード」をするまでもなく、ここでカーズ様が大暴れしたことは間違いない。

「……アルフィー様」

「……わかってる。どうにかしてカーズ様をとめるしかない」

カーズ様のところへ向かいながら、伯爵と会話する。

カーズ様の居場所は、調べるまでもなくすぐにわかる。だって悲鳴とか、破壊音とか、そういうアレな音が聞こえてくるからね。

「私は……アレの準備を整えておきます。これだけ人死にが出て、これほど血が周りにあるのです。彼らの死を無駄にしないためにも、もはや使わないという選択肢はありませんまい」

「……そうだね、それがこの状況じゃあ最善かもしれない」

「起動したら、合図を飛ばしますので……」

「わかった。それまでなんとかする！」

そうやって手短かに話を交わして、わたしは伯爵と分かれた。

わたしはカーズ様が暴れている場所へ。伯爵は、ルベルクラク家が二千年近くの間、切り札としてきたアレが保管されている場所へだ。

正反対の方向へ向かう伯爵を見送り、ルベルクラク本邸に踏み込む。

思えば四年半前、目覚めたわたしを迎え入れてくれたルベルクラクの家。その後も、年の節目とかでちよくちよく来る機会があつた場所。

そんな場所が、今まさに滅ぼうとしている。それは、それだけは受け入れられなくて、わたしは走る。

邸内の様子は、完全にスプラッターホラーだった。どこもかしこも血だらけ、あるいは破壊されまくり。これはルベルクラクの人たちが生き残ったとしても、ほぼ全リフォームは確定だろう。

中には壁が丸ごと崩れ落ちているところもあつた。そしてその崩壊の大元だろう場所は、コルク栓を抜いたようなきれいな切り口になっている。まず間違いなく、カーズ様が斬つた痕跡だろう。

抵抗した形跡はそれなりにある。大口径の銃や、あるいは機関銃などが使われたと思われる痕跡が。

けれど、その周辺にあるのは切り裂かれた、あるいは先端が潰れた弾丸で……ああ……効かなかつたんだなあ、というのが嫌でも理解できてしまう。

そんな状態なものだから、あちらこちらに遺体が転がっていた。そのほとんどが身体はどこかを欠損している。中には右半身だけとか、首だけがどこにもないとか、そういう痛ましいものもたくさんあつた。

五体満足なものもあつたけど、そういう遺体はすべてがミイラさながらにしおれていた。そしてそういう、いわゆる食べられた類の遺体はそんなに多くはなかった。

カーズ様は合理主義者だ。寝起きならいざ知らず、これだけの人間

をすべて食べるという選択は頭になかったんだろうな……。なんていうか、食べるよりもとにかく殺す、根切にする、という意思が透けて見えるやり口だ。よほど自分を組織的に妨害したルベルクラクが癪に障ったらしい。

わたしはカーズ様を追いかけながらも、そんな邸内を軽く見まわった。そうして、亡くなった方々に祈りを捧げつつ、地下へ向かう。そこから声が、音が、聞こえてくるのだ。

そこはきつと、わたしが目覚めた場所だろう。そんな確信があった。

果たしてわたしは、地下礼拝堂に踏み込んだ。扉を勢いよく開けて、響き渡るほどの足音を出しながら。

最初に目に飛び込んできたのは、椅子やら調度品やらが派手に蹴散らされた光景。碎かれ、あるいは切り裂かれたものが、不規則に散らばっている。

そんな中に。

「――カーズ様！」

「……アルフィーか」

カーズ様が立っていた。腕から生やした刃に二人を団子状に突き刺し、さらに一人を足で踏みつけながら。

周囲には、似たような仕打ちを受けたんだろう。十人以上がこと切れ、しおれた状態で倒れ伏している。

そのすべてが半吸血鬼だ。顔も名前も覚えてる。いずれもルベルクラクの暗部……。カーズ様たちを相手に、情報を絞って行く先を操作すべく奮闘していた人たちだ。

けれどそれだけじゃあない。カーズ様を遠巻きに、礼拝堂の奥のほうに数人が身を寄せ合って震えている。まだかろうじてカーズ様の手にかかっていない彼らは、けれどそのほとんどが子供で……。だけど子供だからって、カーズ様が手加減するはずもなく。

そんな彼らを視界に収めたわたしは、ごくりとつばを飲み込んでから前が出る。暴れそうになる心臓と、逸りそうになる気持ちを可能な限り抑え込んで……。ゆつくりとカーズ様へ近づいていく。

「……遅く、なりました」

「まったくだ」

わたしが絞り出した言葉に、カーズ様は気負うことなく頷いた。同時に腕を振り、刺していた二人をまるで埃か何かのように飛ばす。

次いで、踏みつけていた人を躊躇なく踏み潰した。思わず目を背けなくなっただけ……がんばって耐えた。これはわたしの罪だ。逸らすわけにはいかない。

「どこで何をしていた？ お前のほうが先に目覚めたはずだろう」

「その、サンタナに会いに、アメリカ大陸まで出かけていました……」
「サンタナにイ……？ ハッ」

本当のことを全部言うわけにはいかないから、必要な情報を削ぎ落した真実を答えたら、鼻で笑われた。本当にカーズ様はサンタナを重要視していないんだってのがわかる態度だ。

まあ、サンタナを軽視していることは今更だし、そのサンタナが製作中の秘密兵器を見たら目の色変えるはずだから、それについては何も言わない。

問題はここからだ。カーズ様の意識を、周りに向かせないでここから出るように促さなきゃならない。なんて難題なんだ……。

「まあヤツのことはいい……。それより、状況はわかっているな？」

「……はい。情報が錯綜しているみたいですね」

「その通りだ。そしてその原因の大半がこの連中だ」

すぐそばまで来たわたしをよそに、ギロリとカーズ様が周りの人たちを睨んだ。

ああ……やっぱめちやくちや怒ってるな、これ……。

「私たちの情報を、後生大事に二千年も残してきたようだな。そうして私たちが目覚めるのを、手ぐすね引いて待っていたというわけだ」

「自分たちに有利な場所に誘い込むために、ですか……」

「それもあろうが……最大の目的は時間稼ぎだろう。この時代にも波紋戦士が生き残っていること、そして連中と連携していることは確認したからな。だが連中はワムウと戦って大打撃を受けている。ワムウは相手の生死を確認しなかったようだが……いずれにせよ、立ち直

るまでに相応の時間を要することは間違いあるまい」

「な、なるほど、その時間稼ぎ、ですか……」

やべーよ！ やばいよ、ほとんど完全に見抜かれてる！

やっぱりわたし程度の考えることなんて、カーズ様にはお見通しだよなあ……！ 思考、考察する頭脳もそうだけど、情報を集める手腕だってあるんだからそりゃあこうもなる……！

こうなってくると、彼らの後ろにわたしがいることだって気づいてる可能性も十分あるぞ……!?

「人間や半吸血鬼どもが、これほど大規模な組織として我々と敵対するとは思っていなかったが……しかしそれも無駄なあがきでしかない」

内心で冷や汗脂汗がダラダラのわたしをよそに、カーズ様が言う。

「ここは滅ぼす。あとは波紋戦士どもの本拠地を探し、攻め入って終了だ。いずれも一匹残らず、駆除してくれるわ」

「……………」

ですよねー！！

くそう、どうしよう、本当にどうしよう！

こうなったカーズ様を言葉でとめるなんて不可能だ。わたし自身、彼の立場で考えるならそうしたほうがいいって思ってしまったてる。

何より、今後のことを考えるならカーズ様をとめるわけにもいかない。これから彼の近くでスパイをするなら、彼の考えに反することはできるだけ避けるべきだし……。

「話は終わりだ。アルフィー、手伝え。ここにいる連中を駆除するぞ。徹底してだ。生まれてきたことに意味を見出せぬよう無駄死にさせられるわ」

「……………」

カーズ様が前に出た。ゆつくりと、恐怖をあおるような態度で子供たちへと迫っていく。前世のわたしなら、それだけで失禁する自信がある威圧感だ。

うん……。

あれに？

あれに割って入って、あまつさえとめる？

そんなことをしたら、序列の低いわたしが無事で済むはずが……。

「……………」

「……………」

そのとき目が見えた。

恐怖に歪み、涙で濡れた目。そんな目からの視線が複数、わたしに向けて集まっていた。

それだけ。彼らがそれ以外に何かをしたわけじゃあない。

だけど……目は口ほどにものを言う、とはよく言ったもので。

彼らは間違いなく、言っている。わたしがここに来たときからずっと。今に至るまで、ずっと。

——助けて、アルフィー様。

彼らはみんな、そう言っている。

「——ッ!!」

ああ。

——その目は裏切れない。

「……………なんのつもりだ、アルフィー?」

気づけばわたしは、カーズ様の前に立っていた。両腕を広げて、子供たちをかばう形で。

「か……………カーズ様……………」

上ずった声が出た。自分でも笑えるくらい、震えている。がちがちと歯がぶつかり合って、かすかに鳴っている。

呼吸が荒い。今世では一度も経験したことのないほどに、息が乱れている。人間の身体なら、過呼吸一步手前くらいには、乱れている。全身の震えもとまらない。まるで生まれたての小鹿だ。我ながら、なんて無様な恰好だろう。

……改めて思う。わたしは一体何をしてるんだ、って。

だって、今ここで彼らをかばうことに、戦略的な意味はほとんどないのに。スパイするんでしょうに。

なのに、わたしは何を。

けれど、同時にわかってる。ここで彼らを助けなかったら、絶

対わたしは一生後悔する。

わたしを信仰している子たちを、わたしという存在を信じている人たちの、ヘルプコールに応えずして、何が神か！

たとえその称号が、わたしには重すぎるものであっても。

たとえその称号が、わたしにとってあまり喜ばしいものじゃあないにしても……！

それでも！

わたしは！

間違いない、彼らにとつては神様で！

そんな彼らの祈りを裏切るなんて、できるわけないじゃあないか……！

そんなことをしたらきつと、わたしはもう、二度と彼らと……星を戴く一族の隣には並べなくなる！

だから……だから！

怖いけど、死ぬのは本当に怖いけど！

「カーズ様……こ、これ以上は……やめて、あげて、ください……！」
わたしは初めて顔を上げて、カーズ様と真正面から対峙した。

「……何を言いだすかと思えば……」

カーズ様が嗤う。

「お前の人間鼻肩も、筋金入りだな。正気の沙汰ではない。平時なら笑い話にもなるろうが……」

「……っ」

「今この場でするには、まったく笑えんなあ……」

鋭い眼光がわたしに突き刺さる。彼が放っていた殺気は今、わたし一人だけに向けられていた。

怖い。

わかってはいたことだけど、本当に怖い。

今すぐ膝を折って、頭を垂れてしまいたい。

でも、だけど……！

「……ッ！」

自分の荒い呼吸音を聞きながらも、わたしは歯を食いしばった。

泣きそうになるのを堪えながら、視線は逸らさない。たとえそこに、なんでも切つてしまう刃が掲げられていても……。

「……ほう……？」

そんなわたしを見たカーズ様の顔が、さも意外だと言いたげに崩れた。

そうして彼にしては意外なことに、数秒の静寂が提供される。

彼がその間にどういう思考をしたのか、わたしにはわかるはずもない。

だけど。

「ならば、もはや我らは相容れぬ」

カーズ様が、攻撃を仕掛けてきた。

その事実には、間違いはなかった。

23. 光の邪神・カーズ 2

——知らぬ間に成長したではないか。

アルフィーが向けてきた目を見て、カーズは一瞬、素直にそう思った。

人を殺すたびに憔悴し、何かあるたびに自分やエシデイシに怯えていた小娘とは思えない目だったのだ。

今も間違いなく怯え、軽い一押しでもあれば屈してしまいそうな有様ではあるが。

しかしそこにあつたのは間違いなく、折れない心を宿した目だった。

だが、だからこそ。

それを見抜いたからこそ、カーズは理解する。そこにいるのは柱の女アルフィーではなく、人類種の守護者アルフィーであると。

ゆえにこそ、カーズはこのとき初めてアルフィーという女を見た。彼女が太陽を克服した先に望むものも、また。

「ならば、もはや我らは相容れぬ」

だから、そう告げるまでの時間の意味を彼は語らない。

かくして、親友以外で自らに賛同した最初で最後の女に対して、カーズは一万六千年を斬り捨て刃を向けた。

カーズ様の腕から生えた刃が、一直線にわたしの首を狙って来る。一般人ならまず間違いなく対処できないスピード。それでもわたしなら一応回避できるくらいには、まだ手が抜かれている攻撃だ。

けれど、これを回避するわけにはいかない。

なぜって、カーズ様のことだ。わたしがこれを避けたら、その勢いのままわたしの後ろにいる子たちから手にかけていくはずだもの。

カーズ様にしてみれば、彼らとわたしはその程度のものだと思う。半吸血鬼だろうとわたしだろうと、どっちも等しく自分に及ばないモ

ブでしかないはず。

だからまずわたしがすべきことは、彼らを一人残らず避難させることだ。それができるまでは、カーズ様との戦いに専念することはできない。

……まあ、それがもう初っ端から難易度が高いんだけどね。カーズ様の攻撃をなんとかしつつ、戦闘力のないメンツを避難させろって、相当だよこれは。

だけど……不思議なことに、カーズ様が殺気に闘意を乗せた瞬間、わたしの身体から震えは消えていた。

ただ殺すというだけじゃあなくて、戦う相手として多少なりとも意識が割かれているからだろうか。

あるいは単純に、わたしが本番に強い……いや、これはないかな。うん。きつと開き直ったんだと思う。もうどうにでもなーれの心境なんだろう。

ともあれ、そういうわけでわたしは意外なことに、わりと平常心に近い状態でカーズ様を迎え撃つことができた。

それでわたしが選んだ対応は、

「見様見真似……なんちゃって輝彩滑刀！」きさいかつとう

同じく腕から刃を出し、正面から受け止めることだった。

「ムー」

ただし、わたしのそれはカーズ様のと違って不出来だ。大きさも小さいし、素の筋力にも差がある。

だからこそ、わたしは最初から刃の機構を稼働させて出した。すなわち、刃部分……サメの歯のような微小で鋭い爪で構成された刃部分を高速で動かし、光を放つほどに走らせて、だ。

ゆえに、見様見真似の輝彩滑刀。きさいかつとう 本家本元の足元にはまったく及ばないけれど……発光状態……つまり切れ味を上げていない状態に比べれば、切断力では勝る！ ……はずだ。

カーズ様の戦闘力の源泉は、やっぱりこの刃。これを少しでも折ることができたら、戦いはわたし有利に傾く！ ……はずだ。

「ふん」

「つぐえい!？」

「ただカーズ様は引つ掛からず、刃での攻撃を寸前でとめると同時に蹴りを放ってきた。」

「カーズ様の刃を受け止めることに気を配っていたわたしはそれがかたせず、モロに鳩尾に喰らってしまう。まったく遠慮のない一撃に、吐き気がこみ上げてくる。」

「直前までの行動を普通にキャンセルしてさらつと違うこととしてくるとか、相変わらずの動体視力と身体能力だよ……！」

「でもこれでいい。護衛対象がある中で、カーズ様と真つ向勝負をしようなんて思っていなかった。」

「だからわたしは、カーズ様の攻撃を受けて距離を取ることまで織り込んでいたのだ！」

「【スターシップ】！」

「吹き飛びながらもスタンドを出して、タイミングを見計らったわたしは後ろに向けて星の意匠が施された矢を放つ。」

「直後に弓だけを消し、さらには刃を出していないほうの腕を伸ばして床をつかむと、そちらに身体を寄せて追撃をギリギリで回避した。」

「ええいつー！」

「さらに、足を伸ばしてカーズ様の肘を蹴り上げる。わたしの身体能力じゃあダメージを与えることはできないけど、彼の攻撃を逸らす程度の威力は出せる。」

「こうしてわずかに泳いだ彼の身体に向けて、わたしは再び出した弓を全力で引き絞った。現れた矢は、六本。一本は【スターシップ】として飛び回っているから、今はこれで全力だ。」

「その【スターシップ】は連続で子供たちを貫いていき、スタンド空間に送り続けている。もちろん手動だ。」

「これに加えて六本の矢を同時に放つのはなかなかにしんどい。何せ、スタンド空間への転送を行ったあと矢をさらに動かして連続収納を行う技は、最近になって身に着けたものだ。並列思考だけでもしんどいんだけど、慣れてない分余計に難しいし疲れるんだよね。」

「それでも身に着けた甲斐は、使うだけのことは、間違いないよ。」

これにて無事、第一段階はクリア。ここからは戦闘に専念できる。

「【コンフィデンス】！」

そして、【コンフィデンス】を放ったのは至近距離だ。これだけ近ければ、わたしの矢による攻撃は軌道进行操作する必要はない！ 威力も十分！

「……むうー！」

全力で放ったわたしの矢は、カーズ様の胸に殺到する。ワンチャンと思つて股間を狙ったんだけど、これは外されたみたいだ。さすがに柱の一族でも金的は警戒するらしい。

……カーズ様はスタンドが見えないはずなんだけどな。……見えてないんですね？

「少しはやるようになったではないか」

おまけに、矢は三本は直撃したはずだったんだけどな。それでもカーズ様は倒れたり床を転がったりすることはなく、数メートルほど後ろに後退しただけだった。

うーん、理不尽の権化。相変わらず生き物として無茶苦茶だよなあ……。

「……………」

ここからどう攻めようか……と考えながら、腰を落として身構える。その状態で、如意転変の流法モードを発動させた。まずはこれだろう。

わたしの流法モードは転。かなりの自由度で身体を操作し、思うままに肉体を変じさせる技。

普段は変装に使うことがもっぱらのこれは、けれどそれだけの技じゃあない。これがあるからこそ、わたしはカーズ様の輝彩滑刀きさいかつとうをマネできる。だけどそれは、何も輝彩滑刀に限った話じゃあない。

「ほう……それはワムウの」

「見様見真似風神閃っ！」

わたしが再現したのは、体内から外へ伸びる管。そう、ワムウが流法モードを十全に使うために用いるものだ。

そしてわたしも、基本的に用途は同じ。空気を取り込み、体内で圧縮したものを放出し、自らの腕力を組み合わせることで放つ真空波

を、ワムウ同様に放って見せた。

もちろんその威力や速度はワムウには遠く及ばない。さらに言うなら、カーズ様はこの技のことをよく見知っているから、ここから飛び込んできたカーズ様にサマソする戦法が通じるはずもない。

「ただそれは承知の上。この管を用意した最大の目的は、攻撃じゃあなくて回避だから。」

「ふん！ 片腹痛いわー！」

案の定、カーズ様は正面から突っ込んできた。わたしにできる最大威力で攻撃したはずだけど、カーズ様の身体には一筋赤いラインが走っただけで蹴散らされてしまった。

その傷も、わたしに肉薄したときには既に癒えている。わたしが言うのもなんだけど、この体質は敵に回すとあまりにも厄介だ！

「死ねい！」

「嫌ですっ！」

逆袈裟に振るわれた刃を、わたしは横に跳んで回避する。

「ただどカーズ様の攻撃は初撃よりも断然鋭く、後先考えない勢いで動かないと回避できないものだった。おかげでわたしの身体はバランスを崩し、スキを思いつきりさらしてしまう。」

「カーズ様が見逃すはずもなく、無駄のない動きで体勢を入れ替えながら斬撃のような蹴りが飛んできた。」

「わたしはこれを、管から空気を放つことで、瞬間的に空中を横に飛んで回避！」

「そう、これこそ回避のための風の流法^{モード}。ワムウは管の位置をそんなに自由には変えられないのと、筋骨隆々の身体が大きな空気抵抗を生むせいで、この使い方はできなかつたけど……如意転変によって身体の構造を変えられるわたしには可能な荒業だ。」

「これは、この一点だけは、見様見真似なわたしが唯一ワムウに勝る点。この技を使うことで、わたしは巨人退治もかくやな立体機動を空中で実行できる！」

「空気抵抗の少ない身体からは目を背ける！ 知らないそんなの！
ともかくそうして空中で体勢をばっちり整えたわたしは、再び矢を

つがえ……ようとしたところで、空振ったはずのカーズ様の足からギャアアアンと刃が出現し、距離を詰めてきた。

「……ッ！」

回避したはずの攻撃が、わたしの腕を切り裂いた。現れた刃によって、蹴りは文字通りの斬撃になったのだ。

血が滴る。だけど切れ味が鋭すぎるからか、痛みはそこまで感じない。さっきの鳩尾アタックのほうがよっぽど痛かったほどだ。これなら我慢できるぞ。

だからわたしは、攻撃を受けながらも攻撃を続行した。

ダメージを受けたことには変わりなくて、出していた管は消えてしまったし、出せた矢は三本だったけど。これだって至近距離だ、有効打にはなるはず！ 管はすぐに出せば……。

「甘ん！」

「い……っ!?!」

だけどカーズ様は、足から伸ばした刃を今度は収納する動きを利用して、わたしの腕を挟み込んで拘束してきた！

刃はまるでトラバサミのようにガッチリわたしの腕を挟んでいて、絶対に離さないという強い意思すら感じる。

こ、この状態、まずいぞ。とつてもまずいッ！

「ふん！」

「いぎッ!?!」

拘束されていたせいで、矢はあさつてのほうへ飛んでしまう。直後に、わたしの腕は切断というよりも無理やり引きちぎられ、おまけに凄まじい威力の裏拳によってわたしは派手に吹き飛ばされた。

大量の血飛沫が周りに飛び散る。そんな中、床を転がるわたしと、空中でくるくると回るわたしの腕。

「う……く、くうー！」

痛みにもめきながらもわたしはその腕に、無駄に終わりかけた矢を向かわせる。三本の矢は重力に囚われたばかりの腕を突き刺し、勢いそのままにわたしの下まで誘導してくれた。

「むん！」

「あ——つぶなあ?！」

転がる中、矢に運ばれてきた腕をキャッチ。それと同時に向かって来たカーズ様の、床を砕きながらの激しい蹴りを今まさに生やし直した管の空中機動で回避する。

しながら腕の患部をくつつけて、身体能力のゴリ押しで癒合させた。

そうしてバラバラになった床板が降り注ぐ中、傷口を押さえながら乱れた息を整える。そのままカーズ様なら一步で詰められる程度の距離を置いて、わたしたちは睨み合った。

ガンガンに痛覚が身の危険を訴えてきてるんだけどね! かついて、ここから逃げるわけにはいかない。

……正確に言えば、「スターシップ」の操縦があれば逃げることはたぶんどできる。カーズ様にとって、「スターシップ」はまだただの収納能力って認識だろうし。ダイナマイトも念のため持ち込んでるから、ここに生き埋めにしちやえば逃げるだけならできるはず。

だけどわたしの離反とルベルクラクという大規模な敵対組織を知られてしまった以上、カーズ様には取れる手段なんていくらでもある。何せ勝てばよかろうなのだの人だし。

ならばもういつそ、ここでカーズ様は倒すしかない。

まああれだよ、「別に倒してしまっても構わんのだろう?」ってやつだよ。フラグってのは言いっこなしだ。それくらいの気概がないと、カーズ様を倒すどころか伯爵がアレを起動する時間稼ぎだってできないやしないだろうからね!

「器用な真似をする。相変わらず逃げることだけは上手いな」

「あ、りがとう、ございます……」

カーズ様の言葉に思わずふへっと笑みが漏れる。こんな状況で出た誉め言葉なんて、百パー嫌味だろうにね。

でも昔から戦闘ではいいとこなしだったわたしは、この件で褒めてもらうことってほとんどなかったからなあ……。嫌味でも、ちよつと嬉しい。

「だがそれだけだ」

「くう……！」

カーズ様が距離を一気に詰めてきた。同時に、腕の刃が閃く。彼の刃は、ただの剣じゃあない。身体の一部が刃状になったものだ。だからこそ、ただの剣では到底できない複雑な剣閃を奔らせることができる。瞬きをするほどの短時間に、何重にも連なった斬撃がわたしを襲う。

少しでも気を抜いたら、バラバラにされるだろう攻撃。だけどそんな中でも、わたしは少し懐かしい気分を覚えていた。だって、昔……まだ一族が無事だった頃、こうやってカーズ様から稽古を受けていたもの。

あの頃に比べればカーズ様の動きは洗練されて、鋭くなっているけど……基本は同じだ。見たことのある攻撃だ。

だからこそ、わたしはなんとか致命傷を避け続けることができた。身体にはいくつも小さな裂傷が生まれていくけれど、その程度のキズはすぐに癒えていく。

そして、わたしだって。

わたしだって、あの頃よりは成長しているんだ！

「たあーっ！」

「……！」

猛烈な攻撃のわずかな隙間を縫って、わたしはスタンドで攻撃を加える。矢を使ってじゃあない。弓の鳥打部分でもって、殴りつけたのだ。

わたしのイメージがそうさせるのか、この攻撃は打撃ではなく斬撃になる。もちろんこれだって致命傷にはならないし、なんだったら多少でも戦闘に支障をきたすほどのキズすら与えられない。それだっであつという間に治っていく有様だ。

だけどそれでいい。わたしが狙ったのは、カーズ様じゃあなくてカーズ様の腕から伸びる刃だから！

ガギン、と鈍い金属音が響く。カーズ様の刃が折れた音だ。くるくると回転しながら、刃が離れた床に突き刺さる。

「ぐ、うう……！」

けれど、そこに達成感なんてほとんどなかった。

なぜなら、わたしの身体の前面に、斜めに交差する大きな刀傷が大量に刻まれていたから。

「お前のやることなどお見通しだ」

カーズ様の肋骨が飛び出して、わたしを斬りつけていた。

これは、リップス・ブレード露骨な肋骨……！ サンタナの、力で強引に叩き切るようなものとは違う。肋骨の一本一本が古今東西の名剣名刀に匹敵する凄まじい切れ味で、相手を正面からバラバラにする本家本元！

「あぐ、く……っ！」

前面に大量の血が溢れる。

寸前で攻撃の起こりに気がついて、後ろに飛んだから即死には至らなかったけど……！

「ふんー」

もちろんそれでカーズ様がとまるはずなんてなく。情け容赦のない追撃がわたしを襲った。

後ろに飛んだ状態だったから、この勢いのままさらに後ろに飛ぼうと思っていたけれど。来た追撃は、足から刃を出しながら伸ばして鞭のようにしならせるもので……要するに、追撃はわたしの背中に直撃した。

「が……は……っ」

刃が、わたしの背中から胸にかけて貫通する。傷口から、さらには口からの血が出た。

「ふん、他愛ない。所詮猿真似……この私どころか、ワムウの足元にも及ばん」

「う……う……」

わたしを刺した状態でもう片足をとめて、カーズ様は片足立ちのままでわたしを掲げて見せた。

痛い。死ぬほど痛い。ただでさえ刃が刺さってるのに、その状態で吊られてるから重力がわたしの身体を苛んでいる。

「……ま、だ……っ！」

だけど、まだまだ。この程度で、この身体は戦闘不能になったりしな

い。致命傷を与えられない限りは、戦い続けられる。

わたしは生まれて初めて、戦闘方面でこの身体に感謝する。人間だったら、とつくに死んでいただろうから。

まさか、戦えることに感謝する日が来るなんて思わなかったぞ！

「ほう……まだやるつもりか？　だが無駄だ……ここからお前がやりそうなことなど子供でも分かる」

「いぎ……っ！」

わたしを刺している刃を折ろうと腕を動かした瞬間、その腕を刃で飛ばされた。

せつかくくつついたばかりだっていうのに、ぼどりと床に落ちる腕。

「う、あ……」

それをわたしは、青ざめた顔で見送るしかできなかつた。

「無駄だと言っただろう」

カーズ様がせせら笑う。

「お前はこれから死ぬのだ」

そうしてカーズ様は、無慈悲に宣告した。

24. 光の邪神・カーズ 3

直後、わたしとカーズ様を取り巻く周囲の景色が一変した。

薄暗い地下の礼拝堂から、昼の室内程度の明るさが保たれた書齋のような空間へ。

そう、ここはわたしの世界。わたしのスタンドが作り出す、星の船。カーズ様の刃を折ろうとしたのはブラフだ。青ざめてたのは、単に血の気の問題。つまりガチだったとも言うけど、ともあれ。

わたしは大きさに刃を狙う一方で、もう片方の手でスタンドを出していたのだ。弓のほうじゃあない。矢だ。

そして選んだ矢はご覧の通り、「スターシップ」。星が刻まれた矢を取り出して、自らの太ももに突き刺し今に至る。

「むっ！」

「スターシップ」！ カーズ様を外へ！」

そうして直後、わたしの意思によってカーズ様だけを外へ取り出す。

……「スターシップ」は、矢で刺したものとそれが触れているものをスタンド空間に収納する能力。重さやサイズの上限に引掛かったものはついてこないけど、それでもカーズ様と接触していたわたしを収納すれば、カーズ様だつてついてくる。

けど、この空間はまさにわたしの世界。この中にあるすべてのものは、わたしの意思一つで外に取り出すことができる。そしてその行動に、時間は必要ない。これはそれらの性質を利用した、緊急エスケープ技だ。

まあ生き物から内臓だけとか、首だけを切り離すのはできないから、攻撃には使えないんだけどね。

それに例外もある。今回の状況でもしもわたしが人間だった場合、カーズ様の刃がわたしの身体と同化していたらどうから、カーズ様だけ取り出すってのはたぶんできなかつたんじゃないかな。そういう意味では、今だけは同族で本当によかつたと思う。

「はーっ、はーっ、あ、つぶなかつた……！」

「アルフィー様！」

カーズ様が消えたことで、わたしはほとんど床に落ちた。そこに、避難させていた子供たちが血相を変えて群がってくる（なおサチさんたちはサンタナのサポートのために別行動中）。

彼らの動きを残った手で制しながら立ち上がり、わたしは壁に立てかけてあったものを迷わず手に取った。

子供たちの気持ちは嬉しいけど、まだだ。まだ終わってない。伯爵からの合図はまだ来てないんだ。それまでは、なんとかカーズ様を釘付けにしておかないといけない。可能なら倒してしまいたい。

そしてそれができる可能性があるのは、わたしだけだから……！

「……お待たせ。出番だよ、神狼姫！」

だからわたしは、それを。

この四年間、ほぼ肌身離さず持ち歩いていた刀を腰に差し、外へ出る。

『ようやくか！ 待ちわびたぜーッ!!』

それを抜くのに、両手は必要ない。

なぜって、それは……この「冥刀・神狼姫」は！

スタンドの本体として生まれ変わった、世界にただ一つの意思持つ刀！

わたしが戦う意志を持って呼びかければ、彼女はひとりでに鞘走り、この手の中に納まるのだから！

「えやああああーッ!!」

「ぬうッ!？」

外へ出ながら、刀を抜きながら、二人で力を合わせての居合切りをカーズ様に放つ！

そうしながらわたしは空気を後ろに勢いよく噴射して、ジェットさながらに空中を移動。カーズ様とすれ違い、同時に腕の断面から血管を複数伸ばして落ちていた腕を回収した。

「せいー やあーッ!!」

さらに槍状にした足を床に突き刺し、そこを軸に高速スピンの回転する勢いのままに刀を振るい、そこから風神閃を連続して飛ばす。刀

と回転の勢いが加わったことで、先ほどより威力も速さも数も増した真空波がカーズ様の動きをけん制する！

「ふー……っ」

「貴様……」

「ふ、ふふふふ……まだですよ、カーズ様……わたし、まだやれます……！」

イラついた顔でわたしを睨んだカーズ様に、わたしは口角を上げながら応じる。冷や汗と脂汗はそのままだから、どう見てもやせ我慢だろうけど。

ああそれでも、なんだか不思議な気分だ。あのカーズ様が、今まで絶対にわたしには向けなかった表情を向けている。取るに足らない雑魚が相手なら、絶対にしないだろう怒りの顔。それがなんとも言えない。

……いや、これは不意を衝いて気分がいいとか、勝ち目が見えたから大丈夫だとか、そういうイキった感情じゃあない。そもそもここまでの二撃は、カーズ様へのダメージにはなっていないもの。

じゃあなんだって聞かれれば、うまく言えない。

でもあえて言うなら……そうだな。まるで、今まで見向きもしてく
れなかった人が対等の存在として視線を向けてくれたときのような
……。

「……武器を手にしたところで、貴様ごときに何ができる？」

「カーズ様こそ、人間をなめないでくださいよ……この刀は、人間が造った世界最高の刀なんですからね！」

そうこうしているうちに、腕が癒合した。これで十全に神狼姫を振るうことができる。

「ふん……所詮はただの金属武器。だがまあ、一万六千年は共に過ごしたよしみだ。試したいというのならば試させてやろうではないか」
「そう言えるのも今のうちですよ……行きます！」

あえて宣言して、わたしは前へ出る。

今までなら絶対にできなかった行動。新しい要素を見たカーズ様が、何はともあれ様子見を選択したからこそできる。

……だけじゃあない。

なぜなら、

「^{さば}裁け——【神狼姫】！」

「……ッ!？」

アヌビスは。いや、神狼姫は！

このときのために用意していた、わたしの切り札の一つなのだから！

「裁け——【神狼姫】！」

解号は告げられた。

その事実には、彼は——否、彼女は。生まれ変わったスタンド【アヌビス神】は歓喜する。

いや、この表現は正しくない。

もはやこの意思は【アヌビス神】だけのものではなく、本体となった麗しき刀もまた、歓喜に打ち震えたのだ。

そう、両者は既に表裏一体。冥刀・神狼姫は【アヌビス神】であり、【アヌビス神】は冥刀・神狼姫なのだ。

けれども、変わらぬものもある。

あらゆるものを斬る。

あらゆるものを超越する、最強の剣。

それこそが、彼女を最初に鍛えたキャラバン・サライの望んだもの。生まれ変わってもなお、託されたその想いが潰えることはなく。ゆえに彼女は、世界最強の生物を斬る機会に歓喜した。

かくして現れたのは、狼頭はそのままに、豊満な獣身の美女へと像ヴァイジョンを変えたスタンド【アヌビス神】。彼女は、持ち手となったアルフィーの傍らに現れ本体を委ねる。

赤い宝玉と、黄金によって彩られた夜着のごとき衣装を漆黒の身に纏い、局部などは黄金のアンクのみが守るといふ扇情的な姿。それらを惜しげもなくさらしながらも、彼女は意に介することなくアル

ファイと意識をリンクさせた。

すると彼女の身体はアルファイのそれと重なり、併せて本体……冥刀・神狼姫の姿も変化する。

巨匠最後の弟子が鍛え直した刀身は、大きさやデザインこそは変わらずとも、スタンド像同様の漆黒へ。

やはり匠の手で整えられた柄は、包帯を思わせる白い布で覆われ二重に保護された。

カーバンクルを思わせる紋様を施されていた鍰は、やはりスタンド同様の黒い毛並みに包まれたが……テーマとも言うべきカーバンクルの姿は消えることなく、赤く煌めいて毛並みの中に残留した。

「……ッ!？」

その物理法則を無視した変化に、さしものカーズも息を呑む。

そうだ、それでいい。神狼姫は、【アヌビス神】は、牙をむき出しにして好戦的に笑う。

『今から俺たちは——神を斬る!』

「でやあー!」

神狼姫を戦闘形態（最初見たとき思ったけど、これって斬魄刀では？）に移行させたわたしは、そこに宿るスタンド【アヌビス神】の影響を受けて身体のキレや刀剣に関わるスキルが向上している。

おかげで移動中に急激に速度を増したわたしの身体は、あつという間にカーズ様まで到達。そして力と技がしっかりとみ合った神速の斬撃をお見舞いすることに成功する。

「ぐぬ……っ!」

カーズ様が、思わずといった様子でうめいた。彼の胸に、深々と刀傷が刻まれたのだ。遂に、カーズ様に明確なダメージを与えたぞ!

だけでももちろん、それで手を緩めるはずなんてなく。わたしたちは容赦なく攻撃を続行する。

人間ではあり得ない肉体可動域を持つわたしが、人体の構造を無視

できる剣術を操る【アヌビス神】の補佐を受けて行う攻撃は、変幻自在の剛剣だ。

おまけに日本でも有数の鍛冶師が鍛え直した神狼姫の切れ味は、柱の一族すら難なく切り裂くほどの恐ろしい仕上がりになっている。ひとたび触ればカーズ様と言えどひとたまりもなく、怒涛の攻撃によつてどんどんキズを負っていく。

先ほどまでとは逆の展開だ。わたしたちが刀を振るい、カーズ様は回避に専念。けれどかわしきることはできず、キズが増えていく。

一見すると、わたしたちが押している。けれど、焦っているのはわたしのほうだという確信があった。

何せカーズ様、初撃以外すべての攻撃をちゃんとさばいている。そもそも無傷ではない程度のキズは、柱の一族にしてみればないも同然。おまけに種族柄、ありえない挙動で攻撃を回避することができるわけだから、ありえない方向からの攻撃にも普通に対処できるんだけど……。

なんといつてもこの人、見てから動いているんだよなあ！ どんな動体視力をしているんだか！

そして学習能力が高いカーズ様のことだ。初見だからこそそのアドバンテージを失った瞬間、わたしは再び劣勢を強いられるだろう。だからその前になんとかしたい……！

「むんー！」

「……………」

ほらなあ！

今、攻撃直前の一瞬に柄を握る軸となるほうの腕を軽く押し出され、攻撃そのものをキャンセルされた。と同時に、腕の刃が横一文字に襲ってきた！

誰が鍛えたわけでもないのに、カーズ様の刃もまた神狼姫に劣らぬ切れ味の代物だ。そして神狼姫は金属の武器だけど、切れ味に特化した刀。攻撃を受ける形の防御に向けたものじゃあない。

仕方なしにわたしは横に跳ぶ。同時に管からの空気噴射を組み合わせて床を蹴り、さらにカーズ様が振り抜いた腕を土台にして回転し

ながらの再跳躍。

空中でくるりと縦に回って、カーズ様の後頭部に刃を向ける……が。

「それはわかっていたぞー！」

意外ツ！ それは髪の毛ッ！

切り裂いていないはずの頭巾から一斉にあふれた長髪が勢いよく踊り、ヘビの群れのように神狼姫を絡め取ってきたのだ！

「ぐっふ……！」

「何……!？」

そしてその瞬間、後ろ向きのハイキックが伸びてきて鳩尾に一撃をもらう。ちよつと吐いた。

けど直前、確かに頭に一撃を入れたぞー！ 布も髪の毛もすり抜けて、間違いなく一太刀浴びせた！

そう、「アヌビス神」の物質を透過して攻撃する能力は失われていない。だからこそその攻撃だった。

そしてこの能力を利用して、神狼姫は絡め取られることなくわたしの手の中のまま。鳩尾への一撃の対価としては、それなりの駆け引きになったんじゃないだろうか。

「貴様ア……やっつけてくれたな……！」

怒りの表情を浮かべたカーズ様が、猛然と向かってくる。後ろ向きに動きながら、途中で首、上半身、下半身の順番で百八十度回転させるといふ、ホラー映画も真っ青な方向転換をしつつ。

そうしてクロスチョップ（片方は刃つき）がわたしを襲う。

直前、カーズ様の顔に血が滴り流れている様が見えた。あれはすぐに治るような軽傷ではないだろう。だけど、治癒にそこまでの時間がかかるほどのものでもないのも間違いないはず。まったく、とかく柱の一族同士の戦いは不毛だ。

だけどわたしだって、負けるつもりでここにいるわけじゃあない。相手の手数が多いなら、こっちだって増やせばいいだけのこと。

そう、わたしは何も神狼姫だけで戦っているわけじゃあない。わたしにはわたしのスタンドがある！

というわけで、少し後ろに下がりながら「コンフィデンス」を出す。左右に三本ずつと、別口で一本の計七本。全力全開の矢を同時に放ち、クロスチョップを挟み込む形で矢を突き立てる！ ダメージにならないのはわかってるけど、こうすれば衝撃が伝わって、攻撃の打点がズレるといふ寸法！

そしてわたしは攻撃の体を半ば失ったクロスチョップを蹴って着地、体勢を整える。

「相変わらずちよこまかと……！」

そこに襲い掛かる、カーズ様の攻撃。神狼姫を出す直前にされたのと同じような、複雑かつ猛然とした、隙間のない斬撃が次々に襲ってくる。たまに露骨リップス・ブレードな肋骨も。

カーズ様の刃は、身体の一部だ。刀剣を扱う場合にどうしても必要な、刃の向きを合わせたり振り払ったあとに引き戻すといった動作を最小限に抑えることができる。

なぜって、身体の一部であれば自在に動かせるのが柱の一族。腕から飛び出た刃は、上下左右、自在に動くわけで……これをさばくのは不可能だ。

「コンフィデンス」プラス「アヌビス神」……ッ！」

普通なら。だけど今のカーズ様には、片腕にしか刃がない。あばらからくる露骨リップス・ブレードな肋骨も、あるとわかってるならなんとかできる。

そして何より、今わたしにはなんとかできそうな技がある。右手に神狼姫、左手に「コンフィデンス」の弓を手にして、これに対応するのだ！

「アヌビス神」の思考リンクを駆使しての、「シルバーチャリオッツ」＋「アヌビス神」達人二刀流の再現だ。これによって手数を稼いで一つ一つの斬撃をさばいていく！ そう、弓は斬撃武器……！

「ふん！ 我が刃を受けて、どれだけその刀が耐えられるだろうなあ！」

けれど、どうやらカーズ様の直近の狙いは武器破壊のようだ。雨あられと襲い掛かる斬撃の弾幕は、確かにときに受けることも必要。それを繰り返せば、いかに神狼姫が素晴らしい刀であったとしてもいず

れは壊れてしまうだろう。

だけど……実のところ、それは想定範囲内だったりする。

——【センド・マイハート】！

真正面からの斬り合いが始まる直前に、わたしは第三の矢を放っていた。向かう先はわたしの身体と重なっている【アヌビス神】だ。

そうしてハートの紋様が描かれた矢を受けた【アヌビス神】は、わたしの生命エネルギーを注がれることでわたし同様の自己治癒力を一時的に獲得した。

加えて、外からエネルギーの供給を受けたことでスタンドパワー自体も向上し、動きや攻撃力に磨きがかかる。実のところ、達人二刀流はこれがないと使えない荒業だ。

けれど、このコンボ最大の強みはそれじゃあない。

なぜなら、二枚屋さんによる打ち直しによって、スタンド【アヌビス神】の本体はキャラバン・サライではなくなっているのだ。

今や彼女の本体は、この刀たる神狼姫。すなわち、今の【アヌビス神】は通常のスタンド同様、「本体とスタンドのダメージを共有する」という法則が正常に働いている。

これは神狼姫が破壊された場合、【アヌビス神】もまた同様に再起不能となることを意味する。だけどそれは、「スタンドが回復すれば本体も回復する」ということでもあるツ！

……言ってるわたしもそんなバカなっちゃよっと思っけど、他ならぬ神狼姫ができるって思ってるんだからできるのだ！ 当然だと思ってるならスタンドはそうなるんだろう！ きつと！

そう、つまり【センド・マイハート】とのコンボは！ ただでさえ強力な武器である神狼姫に、自動修復機能を与えることに他ならない！

「……バカな!」

どれほど刃を叩きつけても、刃こぼれしない（正確にはした端から修復される）神狼姫に、カーズ様が目を剥く。

さしものカーズ様と言えど、この瞬間にわずかながらスキができることは避けられなかった。わたしたちは、そこを見逃さない！

「そ……こ……だあーっツ!!」

25. 光の邪神・カーズ 4

前へ踏み込む。けれど踏み込みと床を蹴る挙動を悟らせないよう、体重移動を駆使して。いわゆる縮地というやつだ。

同時に背後に向けて管から空気を勢いよく噴射し、ジェットさながらの推進力を得る。

柱の一族としての力と、人間としての技術をここに乘せて、わたしは一気に攻め込んだ。「コンフィデンス」は一旦消して、神狼姫を両手で握る。

「葬剣・盟神太刀!!」

放ったのは、わたしたちの全能力を込めた一撃だ。致命となる急所のみを斬り裂く攻撃である。この技の前では、どんな防御もすり抜けて意味をなさない。

また、十分な力と技が合わされば、ただすり抜けるだけでなく防御を軒並み破壊しながら本命の急所をも攻撃可能という、シンプルに強力な技だ。

ゆえに相手がこれに対処できるのは、攻撃を受ける瞬間だけというなかなか凶悪な技なのである。

……と、言えば聞こえはいいかもしれないけど、要は「アヌビス神」の能力を用いて全力で斬りかかっただけだ。まあ、その能力をフルで、しかも極めて慎重かつ繊細に扱うことでできるようになる技だから、「だけ」ってのはあまり言いたくないんだけどね。

それにもちろん、対処ができないわけじゃあない。わたし自身は別にすり抜けないから、つまるところわたしを狙えば防ぐことは可能だ。

けれど今はスキをついたところ。これなら行けるはず……!

と思う一方で、カーズ様ならきつと超えてくるだろうなというある種の信頼もあった。

間違いなくスキをついた致命の攻撃であるにもかかわらず、これでも終わらない可能性が高いとわたしの中の冷静なわたし……それと柱の女としてのわたしが、告げていた。カーズ様は、そういう男だと。

「――輝彩滑刀!」

実際、そうなるうとしていた。

カーズ様は一声吼えるとともに、全身から強烈な光を放ったのだ。『光』の流法、輝彩滑刀。その本領が、遂に発揮されたのである。

この仕組みは、少し前にわたし自身が述べた通り。だけどカーズ様のそれは、わたしがやった見様見真似なんかとは文字通り格が違う。

「う……ッ!」

放たれた光は真昼の太陽にも匹敵するかのごとき、鮮烈な閃光。そんなものをこの至近距離で浴びせられてしまえば、目を閉じていても失明してしまうのではないかというほどの光!

そんな凍てつく輝きを浴びせられたわたしは、種族ゆえに失明はしない。だけど瞬間、完全に目をやられたことも事実だ。わたしたちは失明しないわけじゃあない。目が潰れても、それがすぐに再生するだけなのだ。つまり一瞬は失明し得る。

だからこそ、突然襲ってきた暗黒に対して、わたしの動きはどうしても乱れてしまう。

……つていうか、こんなにえげつないレベルの光出せたんですかあなた! 聞いてないんですけど!!

『とまるなアアーツ!! 攻撃は続行するウウーーツ!!』

神狼姫が思考リンクを用いて、乱れた動きを途中から補正。技はほとんど遅滞なく続けられたけれど……カーズ様にとっては、その「ほとんど」さえあればよかったのだろう。

急所を捉えた、と感触から察知した、その瞬間だった。

キーン、と甲高い音が響いた。神狼姫の刀身が、斬り飛ばされた音だった。

『うげえーッ!』

「なん……だと……!」

……そんなバカな! わたしを狙って防ぐならともかく、神狼姫を狙って防いだ!? それは急所を捉えられたにもかかわらず、一切動じることなく……しかもそのわずかな時間を的確に狙って、刀身に斬りつけたことになる! そんな、そんな大胆かつ繊細なこと……!

……できそうだなあ。カーズ様だもんなあ。どんな神業だよ……いやまあ神様みたいなもんだけどさ……。

と、そうこうしているうちにわたしの視力は回復したけれど……どうやら、カーズ様はいまだに全身から強く発光した状態らしい。これでは目を開けるわけにもいかない。

……さっきの攻撃で、どれくらいダメージを与えられただろうか。失敗したとはいえ、少なくとも切っ先は確実に体内まで入ってたはずだ。まさかノーダメってことはないと思うけど……。

「く……っ！」

ともかく今は、ワムウのマネをして風を感じて周囲を観察しよう。種族柄、目が見えなくてもわりと周りの様子はわかる。ここに風の感知を加えれば、だいぶマシになるはずだ。

あくまで見様見真似だから、大した助けにはならないだろうけどね。やらないよりはいい。

と、神狼姫が斬られてからここまで、約一秒。にもかかわらず、わたしの五感の間違いなく横から襲い来る攻撃を察知した。

慌ててしやがみこれを回避、次に正面から来る攻撃——これは蹴りかな——は覚悟を決めて身を丸め、身体で防御する。

蹴られた衝撃を利用してサツカーボールのように後ろに吹っ飛び、跳ね回る。さらに空気噴射で姿勢を制御。同時に、気配のする方へ「コンフィデンス」を斉射した。

これで稼げる時間も、一秒がせいぜい。わたしは意識を集中させると共に、神狼姫の誘導を受けて先ほど斬り飛ばされた刀身のほうへ走る。

そして走りながら、今まで試していた閃光対策がようやく完成する。如意転変により、目をサングラスのように光を軽減する膜で覆ったのだ。

よし見えるぞ……って!?

「シィッ！」

「……………オー！」

いつの間にか横に並んでいたカーズ様が、再び斬撃を見舞ってくる

ところだった。

それに神狼姫のはばきを合わせ、防御する。狙った先は当然、刃ではなくカーズ様の腕そのもののほうだ。そちらの勢いを削ぐことで攻撃を防いだ。

とはいえ、すぐさま刃がぐりと動いてわたしの首を刎ねようと迫ってくる。相変わらず、わけのわからない可動域の刃だ。

「む……!?」

わたしはそれを、「アヌビス神」本来のすり抜け能力を利用することで回避した。カーズ様の腕に当たっている神狼姫を透過させて、彼からの反発を無視して倒れ込んだのだ。

「……やはり、物質を透過する刀か」

あまりにもわかりやすい使い方を目の前でしたことで、ごまかしようがないほど【アヌビス神】の能力は見抜かれてしまったけれど……神狼姫を斬られたときにはもうほぼ見抜かれてたっぽいし、ここは割り切る。

倒れ込みながら、「コンフィデンス」を再展開。先ほど同様、七本の矢を同時につがえて斉射する。

狙う場所は、バラバラだ。一つでもいいから、当たりさえすれば牽制になる。全部当たったとしたら、それはラッキーってだけ。

ただし、当たったかどうかを確認する余裕まではない。わたしは走っていた勢いそのままに倒れ、ギャグマンガみたい派手に転がって周囲の調度品を諸共吹き飛ばしたからだ。

「無駄だー」

そして当然のように、スタンドの矢を蹴散らすように突っ込んでくるカーズ様。ホントもう……人間ならこれだけで再起不能になってもおかしくない威力のはずなんだけどな……。

ともあれ、どうにか折れて飛んでいったほうの刀身は確保できた。今は左手で刀身を手にした状態で、片膝をついて立ち上がろうとしているところ。カーズ様との距離は、数歩分ほどだ。

一瞬で詰められる距離でしかない。そして輝彩滑刀きさいかっとうはしっかりと続行しているので、ありとあらゆるものを切り裂く準備は万端だろう。

一応光量は落ち着いたみたいだけど……逆に言えばそれは、きつきのスタングレネードも真つ青な目潰し発光を使うタイムミングをはかっているということでもあるはず。目の保護は外せなさそうだ。

そんな中、刀身の折れたところを合わせて癒合させる。「センド・マインハート」の効果があつてもさすがに折れた刀身をそっくり生やすなんて芸当は不可能だから、折れたらこうしないと直せない。これでも十分すぎるほどに破格だけど。

「……なるほど。どうやら確かに、すさまじい剣のようだ」

かくしてすつかり治り^直、問題なく空気を切り裂く神狼姫を見て、さしものカーズ様もうなつた。

「それを鍛えたものが人間とはな……我が一族に、それほどのものを打てる鍛冶師などついぞ現れなかった」

「……そうでしょう？ 人間だつて、やるときはやるんですよ」

目を細め、わたしを射竦めるカーズ様に思わず胸を張る。

別にわたしが打ったわけじゃあないし、そもそも神狼姫の妖刀つぷりはわたしたちのスタンドのなせる技だ。わたし以外が扱っても、ここまで常軌を逸したことはできないだろう。

ただ人間に加勢している身としては、あのカーズ様が多少でも人間を見直すような発言をしたことが、なんだか無性に嬉しかったのだ。

「だがそれと貴様を殺すことは矛盾しない」

「……………」

「貴様はこの私を裏切つたのだ……私の手にかかつて死ぬることを光栄に思うのだな」

構えたカーズ様を見て、わたしも神狼姫を構える。

……今さらながらに思う。面と向かつてそう言われるのは、やつぱりつらいものがあるなつて。自分でこの人を裏切ると決めたのに、そう思ってしまうわたしはなんて中途半端なんだろう。

だけど、決めたことだ。わたしは人間として生きる。たとえ「太陽を克服する」という一点においてわたしたちが同志だとしても、その過程、そして目的を果たしたあとに目指すものが違う以上、わたしたちは最初からこうなるよう定められていたんだろう。

だから、思うだけだ。わたしはもう迷わない。つらくても、カーズ様との戦いをやめたりなんかしない！

「ここまで戦って……貴様の成長ぶりはよくわかった」

「……え？」

「どうやら……確かに今の貴様は、悔むことのできぬ相手。認めよう」

「か、カーズ様……」

あのカーズ様が……わたしを認めた……!?

嘘でしょ。カーズ様にとつてわたしなんて、最後の最後まで道をふさぐ邪魔な石程度にしか思われなれないと思ってた。

くそっ、彼にそういう気持ちなんかなくてわかってるのに、今は敵対して戦ってる真っ最中だっけ言うのに、褒められて喜んでるわたしがいる！ そういうのもっと早く言っただけよかった！

「かくなる上は、もはや手加減はすまい。正真正銘、全力だ……」

「……!？」

カーズ様の、全力……!?

原作でもまったく見せなかった全力……だと……？ い、一体どんなことをしてくるんだ……!?

……いや。いや、待て。落ち着け。そう言いつつ意識を硬直させるブラフって可能性も……。

「アルフィー。俺の全力でもって、貴様を抹殺するッ！」

凄まじい殺気を放ちながら、カーズ様が距離を詰めてきた。腕から伸びる、光り輝く刃があまりにも眩しい。

光度は、今のところ変わる様子はない。目の前まで来た瞬間にピカッ！ というのもあり得るだろうけど、それより差し迫った死の危険をなんとかしないとだ！

神狼姫を握る手に力が入る。

しかし、次の瞬間だ。彼の身体がぐにやりとブレた。と同時に、彼の動いた軌道を縫うように、彼の身体がいくつも現れる。

「んっ!？」

いくつもの分身が現れ、わたしを取り囲み始める。

これは……マンガやアニメではよく見る分身だ！

けれどそうわかっている、実際にそれと向かい合うことになったわたしには本物がわからなかった。

身体能力は聴覚や嗅覚なんかも含め、何もかもが前世より高いはずなのに。実際、何もなければ背後の人の動きを気配で察するくらいは、今のわたしにはできるのに。

それなのに、カーズ様の動きがまるであからない！ どこにいるかもわからない！

「……ッ、お、落ち着けわたし……この手の攻撃には——」

——お約束がある！

『右だッ！』

そう思った瞬間だった。神狼姫から警告が来た。

と同時に、ぞわり、と横から強烈な寒気を感じて、わたしは思わず後ろに全力で跳んだ。

直後わたしの目の前で剣閃が踊り、今思わずで動かなかったら上半身と下半身が分かれていただろうと理解する。喉の奥で、「ひえっ」と情けない声が鳴った。

「よくぞ避けた……だが、それがいつまで続くかな？」

奇妙なことに、いくつも折り重なった声があちらこちらから聞こえてくる。何か特殊な発声でもしているんだろうか。

いや違う、それは考えるな！ 惑わされるだけだ！

見た感じ、これはルパイニアアタックや肢曲なんかと同じタイプの技だ。恐らく、輝彩滑刀きさいいかとうによる光を用いた幻術。どこぞの忍者がやる影分身の術じゃあない、質量を持たない分身だ。質量を持った分身なんて、この世界じゃあスタンドなしにできるものではないはずだもの。

ならば、必ず攻撃の起こりはどう始まるうと一つのはず。どれだけたくさんに見えていたとしても、攻撃だけはカーズ様本人が直接するしかないはずだ！

見た目や声に惑わされることなく、カーズ様を感じるんだ。そうして、攻撃してきたところを迎え撃つことが正解のはず——

「——くっ!?!」

危ない！ 鼻先を刃がかすめた！

「——っ!!」
「ただ、今ので少し感覚はつかんだぞ。次はもっとうまくや——」

かがむ! 上を通り過ぎていく刃!

だけどその瞬間、足を刈られたらしい。わたしはぐるんと回転し、受け身をする間もなく背中を床に打ち付けられる。

くそっ、かがむのは悪手か! 覚えた!

そうして回避に専念すること、しばし。四回の攻防を繰り返したところで、遂にそのときは来た。

『あーもしもし、アルフィーさん? 伯爵さんから伝言だよ! 準備できたって!』

聞き覚えのない、あまりにも場違いなふわふわした男性の音が、わたしの頭の中に直接響いた。

落差が激しすぎて気が抜けそうになったけど、つまりこれがルベルクラクの切り札が起動した合図ってことなんだろう。もう少し他になかったのかとも思うけど……。

とはいえ、今まさにギリギリの攻防をしてる瞬間に言われても、すぐに動けるわけないんだよなあ!

それに確かに離脱はしたいけど、ここでうまくやればカーズ様にダメージを与えられる可能性だってあるわけだし……。

『後ろから来るぞッ!』

「だね……!」

来た。五回目の攻撃だ。斜め後ろから、殺意しかない斬撃が猛スピードで襲ってくる。

今回は比較的早く気づけた。これなら返せる。最低限の動きで回避しながら振り向きざま、カウンターを決め——

『——な!?!』

ようと思ったのもつかの間、わたしたちは揃って驚愕した。

なぜなら、わたしたちが感知した攻撃の正体は、回転しながら飛んでくる刃だったのだから。

「かかったな」

直後、真横からカーズ様の声が聞こえてきた。

思わず視線がそちらに泳ぐ。もちろん、そこにはカーズ様が潜り込んできていて。

「あゝいゝ……っただあああーッ!?」
やられた。

わたしは神狼姫を握っていた両腕を、諸共ズバンと斬り落とされた……!

26. 光の邪神・カーズ 5

「い、う……い……ううう……く……っ！」

輝彩滑刀きさいいかつとうが光る仕組みは、チェーンソーに近い。無数の爪が高速回転している形だ。

だからか、光っていないなかったときに受けた傷よりも格段に痛かった。思わず悲鳴を上げてしまうくらいには。

もちろん出血も今までの比ではなく、まるで噴水。脂汗もどつと溢れてとまらない。

それでも歯を食いしばりながら足を動かし、カーズ様を蹴り飛ばす。その衝撃を利用して距離を取る。移動の瞬間、神狼姫を握ったままの両腕が風船のように軽い様子で舞い上がっていくのが見えた。

『神狼姫！』

『わかっている、すぐそっちに戻るッ！』

だけどカーズ様にはお見通しだったのか、まったく堪えることなく追撃にやってきた。

これを回避する余裕は、もうわたしにはなかった。如意転変はダメージを受けると解除されてしまう。わたしの身体にはもう管がなく、慌てて作り直したけれど手遅れだ。

「とどめッ！」

脳天めがけて放たれた一撃。喰らえば間違いなく死ぬだろう。

もちろん諦めるつもりなんてない。なんとか首から上を動かして、かろうじて回避する。

「ぎ……ッ！」

ただどその瞬間、それすらもわかっていたと言いたげに嗤ったカーズ様の蹴りが、わたしの胸に叩き込まれた。

まずい。本気でまずい。冗談抜きでこのままだと死ぬ。自然界ではまず聞くことのない凄まじい破裂音が響いたのもさることながら、蹴りと同時に足の刃が裂けながら体内に入り込んだのが見えたもの。

そのせいでわたしの上半身はぐちゃぐちゃに破壊され、ズタズタのまま床に投げ出された。おまけに刃は体内に残ったみたいで、異物感

がすごい。

……仮にも地球上の生物が、生身の身体でダムダム弾を再現しないで!? なんて非人道的な!!

「が……ッ、ハア、ハ……ッ、ひ、ぐ……!」

なんて言ってる場合じゃあない。喉から大量の血がこみ上げてきてとまらない。

本当にヤバい。身体に力が入らない。呼吸もうまくできなくて、血が絡まった喘鳴しか漏らすことができない始末だ。

そのくせ意識だけははつきりしている。全身をさいなむ痛みと苦しみ、それに倦怠感や脱力感が、わかりやすく命の終わりを突き付けられているようだ。

くっそ……カウンターが決まれば、とか考えてたけど……やつぱり、カーズ様はそんな甘い人じゃあなかった……。謎の声が聞こえた瞬間、逃げるべきだったかな……。

「これまでだな」

仰向けに転がったわたしの頭上に、光に満ちたカーズ様が見せる。ぱつと見は神々しいけど、神だとするならそこにいるのは邪神だ。わたしをはつきり見下しながら、折れていた刃をその根元に取りつけくつつけている。

……ああ、なるほど。そういうことか。

さっきのあの攻撃は……後ろから来た攻撃は、わたしが最初に斬って飛ばした輝彩滑刀きさいかっとうの刃だったのか。

わたしが分身に気を取られている間にそれを拾って、最適なタイミングで投げてきた……そういうわけか。殺気だけに気を取られてちやあ、ダメだったなあ……。

「さらばだ、アルフィー」

次はもつとうまくやらないと。覚えたぞ。

そう思いなおしたわたしの眼前に、死神の刃が向けられた。だけど、そうして振り下ろされる直前。

「貴様のことは、嫌いではなかったぞ」
ぽつり、と。

つぶやくようにこぼしたカーズ様の姿に、わたしの心の中で何かがカチリとかみ合ったような気がした。

そうか、わたし――

「――わ、たし……」

血にまみれてうまく出せない声を、振り絞る。

「わたし、も……カーズ様のこと。嫌いじゃあ……ないです、よ」
きつと、そういうことなのだ。

わたしがいつまで経ってもカーズ「様」だったのは、読者として、様とつけたくなるようなキャラだから、じゃあなく。

……いや、きつと始まりはそこなんだろうけれども。少なくとも、今は違うんだろう。

だって一万六千年、この人と一緒に過ごしてきた。わたしの今世は、この人と共にあつたと言っても過言ではない。自分でも気づかないうちに色んなものが積もり積もって、いつの間にか自然と敬意を向けるようになっていったんだろうな。

実際、カーズ様の見習うべきところが多い。目的に向かって挑戦し続ける心、どれほど失敗しても諦めない心……それらの土台となる類まれな頭脳とカリスマ。こんな傑物、早々いるものじゃあない。

だからきつと……わたしはこうやって決定的な決裂をしてもなお、カーズ様を嫌いになれないのだろう。

DVな男から離れられない女みたいだなんて、自分でも思うけど……でもこれ、そう間違ってもいけない気がする。

だって、さつきカーズ様に認められたとき、わたしとても嬉しかった。些細なことでも、嫌味で放たれたものであっても、彼の誉め言葉に喜んでしまうくらいには。

もつと早く……それこそ一族を滅ぼす前からお互いの見るべきところをしつかり見てたら、もしかして、と思うくらいには……。

でもそうはならなかった。わたしたちはついぞ同じ方向を見ないまま、ここまで来てしまった。殺し合いをしてようやく認め合えたとしても、もう遅い。

目的のためなら手段を選ばない、最短距離を行くのに壁だろうが家

だろうが全部ぶっ壊していく生き様は、わたしにはとてもできないし、受け入れられない。目指すものも自らの核になるものも、わたしたちはあまりにも違いすぎるのだ。

だから、好きだなんて言おうとはまったく思わない。けれど、嫌いとも断言できない。

では憎いかと聞かれれば、そこまで気持ちを高ぶらせることもできず。

かといってこれ以上仲良くできるかと言えば、絶対にノーだ。これから先、わたしたちが顔を合わせたらすることは、互いの目指すものを賭けた命のやり取りくらいのもだろう。

我ながら、面倒で複雑な気持ちを持ってしまったなあ、なんて……死にかけている瞬間にも関わらず、場違いにも思ったりしたわたしだ。

「
そんなわたしの言葉に、カーズ様の目が緩やかに見開かれたのが見えた。

驚いてくれたんだろうか。彼も何か思うところがあつたりするんだろうか。もしそうだったら……うん、それもちよつと嬉しいなつて。

……でも、だからつて刃を振り下ろすのを一切ためらわないところは、実にカーズ様だなんて思う。そういうところだぞ、カーズ様！

ワンチャン、告白っぽいことを言い返したらためらつてくれないかなつて思ったけど、別にそんなことはなかったぜ！

まあそりゃあそうだろうな！ わたしたちの間にあるのは甘酸っぱいあれやこれやではなく、もつと血なまぐさい拳と刃の応酬だけだ！ いやカーズ様のこと今でも嫌いじゃあないつてのは事実だけども！

それはともかく、こういうときに頼れるのはやっぱり自分だけだ。ポルナレフの選択肢で言えば、一番！ 自分で自分をなんとかするしかないッ！

だからわたしは、遂に振り下ろされた刃を前に、

『神狼姫、来てー!』「それと……っ!」【スター……シッポ】……ッ!」
最後の手段に打って出た。それが今、矢となってまさにわたしの身体から放たれる。

普段のそれと比べれば遅く、不確かなそれ。手段と言うには、まだ不完全でか細いものだ。けれど、出たことには間違いない。

そう。わたしの最後の手段とは、ずばり【コンフィデンス】の矢の、ノーモーション発射だ。

当初【コンフィデンス】に属する矢は、弓を用いて撃たなければならなかった。わたしの成長に伴って、途中からは矢だけを取り出し扱えるようになった。

そして目覚めてから今日までの四年間で、わたしは遂に弓も、腕力も使うことなく矢を発射し操れるようになっていたのだ。

今まで戦闘で使わなかったのは、弓を使わないと矢は放てないという先入観を与えるため、というのが一つ。そうしておけば、こういうとき不意を打てるから。

あとは、あくまで発射だから自分に向けて使うには発射後に軌道を曲げる分タイムラグが生じる、という欠点も使わなかった理由だ。威力も速度も全然出ないという欠点も。

だから、戦闘に用いるにはまだまだ修行が必要で……できればこれを使うつもりはなかったんだけど。

けれどもはやこの状況、できることはすべてやらなきゃ死あるのみだ。できないかもしれない、とかそんな悠長なことを言ってる場合じゃあない。

やるかやらないか。

それしか選択肢がないなら、もちろんわたしはやるほうを選ぶぞッ!

そ・し・て・ッ!

『ウオオオオオー!!』

「何ッ!?!」

ここでようやく、神狼姫がわたしたちの間に割り込んできた。

そう、彼女は! わたしの呼びかけに応じたときのみ、自立行動が

えていた。「スターシップ」のタイムリミット、あるいはしびれを切らしたわたしが外に出るのを待っているんだろう。

……ごめんね、カーズ様。「スターシップ」、もう二千年前とは性能が違うんだ。

「みんなごめん、ダイナマイト使うから少し離れてくれる?」

というわけで、子供たちをモニターとは反対の壁際に移動させ、一方でわたしは今日のために持ち込んでいた箱を拾い上げる。

そこに刻印されているのは、ダイナマイトに関するあれやこれや。それを裏切ることなく、中身はばっちりダイナマイトだ。全部で二十四本入ってる。

わたしはそのすべての導火線に、ためらうことなく火をつけた。

何が目当てか、もうおわかりだろう。

「耳はちゃんとふさいでてね。モニターも見ないように」
指示を出しつつ。

わたしは、導火線がなくなりダイナマイトが爆発する、まさにその寸前に。

空間内のすべてのダイナマイトを、コンマの時間差で順に外へ取り出した。

するとどうなるか。答えは一つしかない。

——大爆発だ。

地下礼拝堂は完全に崩壊。瓦礫の山が次から次へと雪崩のように落ち込んできて、あっという間に埋まってしまっていた。カーズ様もその巻き添えを喰らって、生き埋めになったようだ。

……そう、生き埋めだ。つまり死んでない。あれだけの爆発に巻き込まれても死なないんだから、この時空の地球さんは生命の育成をだいぶ失敗した感じがある。

まあ、もしかしたら爆発しなかったやつもあるかもだけど……それはともかく、だ。

「ここから離脱するよー!」

わたしはモニターの前に座って、操縦桿を握る。

そうして桿を操作すれば、モニターの映像が流れ始めた。緩やかに

上昇し、土砂やがれきを貫通していく。速度としては、子供が歩く程度でしかない。それでもわたしたちは今、確かにありとあらゆるものを無視して移動していた。

やがて映像は地上に移る。どうやら先ほどの大爆発で地下礼拝堂が埋没したようで、周辺一帯が少し崩れてるっぽい。伯爵にはあとでしっかり謝っておかないとなあ……。

だけどその前に、カーズ様が出てくる前に、一刻も早く伯爵と合流しないとだ。

ただ正直この操縦、スタンドパワーをめちやくちや使うから、死にかけた今となつては本当に死ぬほどキツイ。さっき飲んだ血が、焼け石に水になつてない。

だからある程度距離を稼いだら、外に出て走ることにする。これもぶつちやけ相当にキツイけど、「スターシップ」を操縦するよりはだいぶマシだ。怪我のほうは少しずつ治つてはいるしね。

「アルフィー様！ こちらですー！」

体内に残つてる刃が相変わらず邪魔な状態で、ひーこら言いながら走ることしばし。

横合いから現れた車の運転席から顔を覗かせた伯爵が、こちらに手を振っているのが見えた。

周りに気を配る。カーズ様は来ていない。ヨシ！

「飛ばしますよー！」

そうしてわたしが瀕死にもかかわらず、対面から走ってきた車に乗り込むというハリウッドも真つ青なアクションを見せたのと、伯爵がアクセルを全開にするのはほとんど同時だった。

「ご無事でなによりです」

「……これが無事に見え……いやうん、そうだね……生きてるだけでも無事だよね……」

後部座席で横になって、わたしは乾いた笑いを上げる。

そうして、ようやく実感が湧いてきた。

わたしはガチのカーズ様と戦つて、どうやら死なずに済んだらしい。がんばった……がんばったよ、わたし……！

「お疲れのところ申し訳ありませんが、聖杯に何をどう願うか、一緒に考えていただけませんか」

「わかってる……」

それでも、まだ完全には終わっていない。伯爵もそれがわかっているからこそ、この状態のわたしであつても急かすのだ。

わたしもそれはわかっているので、満身創痍の身体に鞭を打って起き上がり、

「……それで、聖杯は今どこに……」

と言いかけたところで、助手席から心配そうにこちらを眺めていた男性と目が合つて固まることになる。

27. ベロニカ

別に見知らぬ男性がいたからって、それで驚いたり怯えたりするなんて今さららない。そりゃあその人がスタンド使いで、敵対している可能性も考えればまったく気を抜くことはできないけれど……だからといって、味方の伯爵が連れてきている人に対してそういうことはあまり考えないし。

だからわたしがその人を見て固まったのは、それとは別のところで心底驚いたからだ。

だって、その人を見て驚かない人間なんて、きつと一人たりともいないはずだもの。少なくとも一般的な学校教育を受けて、キリスト教に関する最低限の知識を持つてる人なら、間違いなく驚く。

なぜって？

なぜならね、それはね、わたしを心配そうに眺めているその人の格好が……どこからどう見てもイエス・キリストだからだよ!!

だって細身で！ 黒の長髪で！ その頭に茨でできた冠をかぶつてて！ ちよつとカリブの海賊役の役者に似てるとか！

これでイエスじゃなかったらなんなのってレベルだよ！ コスプレにしたって完成度が高すぎる！

「……ね、ねえ、伯爵……」

「なんででしょう？」

「こ、この人……どなた？」

わたしが我に返って、なんとかそう問いかけられるまでわりと時間を必要としたのも無理はないと思うんだ！

だけど伯爵の返事は、わたしの予想を裏切ることになる。

「えっ？」

「えっ？」

彼はルームミラー越しに、きよとんとした顔を向けてきたのだ。

それはまるで、隣にいる人の姿を認識できていないよう……。

そう思った瞬間だった。

『わあ!?! もしかして私の姿が見えるの!?!』

「!?」

イエスっぽいその人が、喜色満面を浮かべてわたしにずいと顔を寄せてきた。

座席シートを思いっきり貫通して、だ。ホラー以外の何物でもない。

だけどその現象、わたしには思いっきり心当たりがある。この世界ならこれも説明がつく。

「スタンド……!?!」

それ以外に考えられない。

けど、完全に人の姿をしたスタンドが? そんなスタンドが存在しうるのか?

しかもよりによって、イエスの姿をしてるって……。

『! 私の正体までわかってくれるなんて……!』

わたしをよそに、当のイエスらしきスタンドはなぜか嬉しそうな顔だ。なぜ。

「その……アルフィー様? 一体何と会話しておられるのです?」

一方、伯爵は怪訝な顔だ。まあ、気持ちはわかる。

とはいえ彼のこの反応こそが、イエスの姿をしている男性がスタンドだってことを証明しているも同然だ。

『ほらね?! ほとんどの人が私に気づいてくれなくてさ……滅多に呼び出されることなんてないのに、毎回これだからいつも困ってたんだよ』

ああ……ここまで完全な自我を持つてゐるなら、気づかれないってのは確かに寂しいかもしれない。スタンド使い、もしくはそこまで行かずともスタンド使いの素養のある人間なんて、そうそういるもんじゃあないし。

……いやでも、待てよ? 滅多に呼び出されない……?」

それでいてこの姿……もしかして。

「あなた……もしかして聖杯に宿ってるスタンド? まさかとは思いますが、イエス・キリストのスタンドが死後独り歩きしてる感じ……?」
『えっ、この短時間でそこまでわかるの!?! うわあ、さすが知恵の神様

だねえ！ あ、でもすたんど、つていう名称も確かアルフィーさんが名づけたんだし、そりゃあわかつちやうよねえ』

「う……っ、いや、知恵の神つてのは完全にわたしの関与してないところでついたやつだから……あだ名で呼ぶならせめて夜の女神のほうでお願いしたく……」

仮にもイエスの姿をしてる人に、知恵の神様とか畏れ多すぎるから！！

それにこれに関しては、そうだと仮定すれば、ルベルクラクが切り札にしてきた聖杯という存在の謎が色々説明つくんだよ！

だってこの聖杯って、ドラゴンボールほどではないにしろ、F a t e 的な願望器に近い効果がある謎の神器って扱いだったもの！

人間の三倍の寿命を持つルベルクラク家の人間が、大して怪しまれることなく今日まで存続できたのはこの効果を定期的に使って周辺の意識を改変してきたからだからね！

どういう仕組みでそんなことができるのか話を聞いたときからずっと疑問だったけど、スタンドだって言うなら納得しかないもの！

「な、なるほど……？ 聖杯にそんな秘密が……？」

伯爵がとんでもないものを見たような顔してるのは、どういうことだろう。もしかして、わたしがこれを見越してイエス関係のアイテム集めろって指示出したって思ってる……？

いや違うよ、わたしは単に歴史的なアイテムをできる限り後世に残したかっただけで！ そりゃあ謎の多いキリスト教初期、特にイエス関係のものはできるだけ残してほしくてシヨシヤナやトナティウに念押ししてお願いしたけども！

ブツダがそうだったことを思えば、イエスもまあスタンド使いだろうなとは思ってたけど、まさかここまでとんでもないのが後世に残るなんてまったくの想定外だからね！！

『あつ、そういえば私まだ自己紹介してなかった。私の名前は【ペロニカ】。お察しの通りイエス様のスタンドをしていたんだ』

「……アルフィーです……コンゴトモヨロシク……」

文字だけで見ると、言動も名前も妙にかわいいなこの人……。見た

目は完全にイエスだから、別にそんなことはないんだけど……。と、とりあえず、だ。

もし彼が本当にイエスを本体としていたスタンドだって言うなら、当時のことをぜひとも色々聞きたいところだけど……。今はそれは我慢しよう。

彼がスタンドで、聖杯の中心的機能そのものであるなら、まず彼にお願いしないと話は進まないはずだ。

「それで、えーと、わたしたちはついさつきまで、聖杯の意思が願いを叶えるものだと思ってたんだけど……」

『ああうん、それ私だね。私の能力。奇跡を起こすんだよ。そこだけ見たら、確かに願いを叶える魔法のアイテムって思われても仕方ないかも』

「奇跡を起こす能力……。なんて規格外な……。さすがイエスって言えばいいのやら」

『ただねえ、普通の人には私の姿は見えないから……。だから今までテレパシーでなんとか意思疎通してたんだよ』

「ああ……。さつき戦闘中にわたしのほうに飛んできたのはそういう……」

本当にスタンドとしてはめっちゃくちや高性能だな……。

「えつと、じゃあ早速で悪いんだけど、願いを叶えてもらいたいんだけど……」

『え、もう？。いいじゃないもう少しくらいおしやべりしても！ 普段私に気づいてくれる人いないから退屈だし、私起こすのに結構な量の血肉が必要になるせいであんまり起こしてももらえないんだもの！』
「気持ちはとてもよくわかるんだけど、わりと今シヤレにならないくらい急いで……。でも大丈夫、わたしの寿命まだ十万元以上残ってるから、会話する機会はちゃんとあるから……！」

『じゅ……。!? いやあすごいねえ、神様は伊達じゃないってことだね！』

少なくとも、地球が産んだ動物の一つで、神ってことはないはずなんだけどね……。

というか、仮にもイエスのスタンドがそう神様神様って、父なる神以外をそう言うのは……あいや、初期を知るからこそ他の神様に寛容なのかな……？

『うーん、そういうことならしようがないか。よし、十二使徒以来久々に私のことがわかる迷える子羊だからね！ 私今日は気合い入れちやうよ！』

……十二使徒って、もしかしてスタンド使いの集まりだったの？

それが基準で選ばれた弟子だったりするのか……？　く、詳しく聞きたい……！

い、いや、今はそれはともかく。

むん、と両こぶしを握って気合いを入れるスタンドに、わたしはおほんと小さく咳払いをして続きを促す。

『それで、君の叶えてほしい願いは何かかな？　私にできる範囲で、どんな願いでも叶えてあげるよ！』

問題はここだ。

何せ伯爵から伝え聞く聖杯の機能……願いを叶える機能は、どんなものでも叶えられるわけじゃあない。少なくとも死者を蘇らせるとか、無から有を作ることとはできないらしい。

そういうのでなくとも、起動時にどれだけ血肉を捧げることができたかで可否範囲が変わるらしくて、今回起動した聖杯……もとい【ベロニカ】がどこまでできるかで、こっちも動きが変わってくるんだよね。

今こうやってスタンドだとわかって考えれば、既に本体を失ってる【ベロニカ】が活動するには外からスタンドエネルギーの代わりになるものを用意する必要があるってことなんだろう。そして能力の行使は、すべてそのエネルギーで賄われている……と。

まさに本人も「できる範囲で」と言った通り、制限はあるってことで。その範囲内で、今の状況を切り抜けるにはどういう風に願いを整えるかを考えないといけない。

……外からのエネルギー供給がなくなるとも普通に活動していた【アヌビス神】って、実はとんでもない存在なんじゃあ……という考えが脳

裏をよぎったけど、それは考えないでおこう。

それはともかく、エネルギー量以外にも制限はあるらしく、そこもクリアしないといけないみたいなんだよね。

「……まず事前に聞いてた情報の確認をさせてほしいんだけど、あなたの能力で他者を害する願いは叶えられない、つてのは本当？」

『うん、それは正しい情報だね。特に殺すタイプの願いは断固拒否だよ。そんなことは主がお許しにならないよ！』

「まあ、言わんとすることはわかる……わたしもそういうの好きじゃない、し……それに……」

それに、カーズ様との決着をつけるのはジヨナサンかジョセフであってほしいし。

わたし？ いや、今となつてはわたしも自分であの人とやりたいなと思わなくもないんだけど、不思議なことに。

でもそれはそれとして、人類の安全のためには確実にカーズ様を倒さないといけないから、そこはね。うん。別に悔しくなんか……うん。

ともあれ、「ベロニカ」にカーズ様を直接アレしてもらうつてのはやっぱり無理らしい。まあ、これについては伯爵もわたしも最初から無理だろうつて思ってたし、ワンチャン程度のものだ。諦めよう。

なら第二案だ。というかこれが実質本命になる。こうなることはわかってたから、伯爵と相談してこれなら、という案を事前に用意していたんだよ。

「……ある人と、ちよつとした行き違いがあつて。それで……その人と……な、仲直り……したくて、だから……ええと、認識を、少しだけズラしたいんだけど……」

ただなあ、これ言うのめっちゃ恥ずかしいんだよなあ！

確かにカーズ様とは行き違つたけど、ちよつとしたどころか盛大に行き違つてるし、なんならかなり初期の段階から行き違つてるから、今となつては完全に違うほうにしか向いてないんだけどね！

でも仕方ないじゃないか！ 伯爵いわく、こうやって事実をある程度隠して核心に近いところを提示することが、「ベロニカ」……聖杯

に狙い通りの願いを叶えさせるために必要なことらしいんだもの！
べ、別にわたしはそんな、そういうアレじゃあないんだからねっ!!
『仲直り……うん、そういうことなら喜んで！　それで、私は具体的に
どうすればいいのかな？』

本当に快諾してくれた……やっぱりノウハウの蓄積があると違う
ね……。この場合、ちよろいとか言っただけはいけないだろうな。

「えっと……カーズ様の認識を、『わたしではなく謎のスタンド使い
と戦い、勝利した』『ルベルクラクは壊滅させた』という風に、ズラし
てほしいんだ」

本当なら、わたしのことは死んだと思わせたいところなんだけど
……伯爵曰く、その手の願いはかなり洩られるらしい。今回みたいな
状況だと、「なんでそんな悲しいことを！　生きてるんだから、まずは
話し合おうよ！」みたいな感じで。

イエスだけでなく、スタンドのほうもアガペーで生きてるらしい。
要するに、害する類の願いは基本的にNGってことらしいんだ。

だからこそ、戦った相手を誤認させる方向で妥協することにした。
何分急ぎなので。

ルベルクラクもカーズ様がすっかり壊滅させたんだって思っても
らわないと困るから、それも込みにはなるけど……【ベロニカ】の能
力はドラゴンボールと違って、願いを叶える回数に制限があるわけ
じゃあないらしいし、これで行けるはず！

『なるほどねえ！　よーし、任せてよ！　私ばっちり叶えちゃうから
！』

よし、行けた。内心で思わずガッツポーズする。

『それじゃあ……「主よ、天にまします我らの父よ。願わくば御名を
……」』

するとそれまでの軽めな態度が一転して、厳かなものに変わった。
【ベロニカ】はその場に膝をつき、両手を組んで目を閉じて……そして
これ、あれですね。アラム語ですね？　まさか二十世紀になってアラ
ム語を聞くことになるとは。

なるほど、主の祈りは原語だとかこういう感じなのか……また一つ、

歴史の真実を知ってしまった。思わぬ役得だ。あとで文字に書き起こさない。

……いやそれはともかく。

そうこうしているうちに「ベロニカ」は祈りを捧げ終わり、言葉はアーメンで締めくくられた。

そして直後だ。彼の身体から強烈な、しかしなぜか眩しいと感じられない光があふれて天に昇っていき、いずこかへと飛んでいった。その方向は、まさにルベルクラク邸があったほうなので……たぶん、カーズ様のほうに飛んでいったんだろう。

『……これでよし、と。君の願いは叶えられたよ、アルフィーさん！』
「……ありがとうございます」

彼を信じていないわけじゃあないけど、カーズ様に再合流するのはうまくいったかどうかを念のため見極めてからかな。

何せカーズ様は人間じゃあないし。精神攻撃……つまりは魂に働きかけるタイプのスタンドは、生物の種を問わず有効に作用するはずだけど、わたしたちはちよつと身体の規格が違うからね。念のためだ。

……どつちにしろ、身体が治るまでは下手に動けないけど。

『お？ これだけやってもまだ私のエネルギーは尽きてないみたい。どうする？ まだ何か叶えちゃう？』

わたしにそう問うてきた「ベロニカ」だけど、尽きてないだけで結構消耗しているのは間違いないだろう。さっきまでと違って、姿が透けている。

なるほど、こうなるのね。本当、スタンドって色んなものがあるなあ。

と、それはさておき……まだ叶えられるのであれば、そうなったとき用に考えてた願いを叶えてもらおうかな。

「えーと、わたし今見ての通り重傷患者なんだけどき。身体の中に、回復を阻害してる物体が入り込んで取れないんだよね」

言うまでもなく、さっきの戦いでカーズ様にぶち込まれたダムダム弾的な彼の刃の一部だ。この刃が残ってる地点を中心に、やたらと傷

の治りが遅いんだよさつきから。暗黒闘気じゃああるまいし、勘弁してほしい……。

「だからその中に入り込んだままのやつを抽出してほしいんだ」

『それは大変だ！ 任せて！ すぐに治しちゃうから！』

この手の治す系の願いは、はりきってやってももらえるというのも本当らしい。

なので、そういうことになった。

『またいつでも呼んでね……！』

そしてこの摘出で【ベロニカ】はエネルギーを使い果たしたようで、まるでイエスが天に召されるかのようなやたら荘厳なエフェクト（天使みたいなのまで見えた）と共に穏やかに消えて行った。

「……扱いの難しいスタンドだったなあ」

感想としては、それが何よりも先立つ。願いを叶えてくれるのはいいけど、そのためにクリアしないといけない条件がめんどすぎる。

あれ、イエスの生前はどんなスタンドだったのやら。その頃から完全な自我を持って行動していたんだろうか。少なくとも、今の【ベロニカ】は確実にイエスの影響があるんだろうけど。

それにしてもあの性格……あれもイエスを模してるんだろうか。でもなあ、イエス本人とまったく同じ性格とは思えないけど、全然違うとも思えない。

でもブツダと並ぶガチの聖人であるイエスが、ああいうほんわかした兄ちゃんみたいなテンションしてるのはなんか違う気がするし……うーん。

まあいいか。何はともあれ、わたしたちは切り札を切った。ひとまずこの場の戦いは終わりと見ていいはずだ。

そう判断したわたしは、改めて後部座席に横になった。そのまま仰向けになって、手にしていたものを天井に向けてかぎす。

そこにあつたのは、銅あかがね色に冷たく輝く正六角形のもの。

「……それ、どうなさるおつもりで？」

「ん？ んー……」

飾りも何もない、金属板をただ型抜きしたかのような形状のそれ

は、わたしの体内から摘出されたカーズ様の刃……だったものだ。わたしの身体が治る過程で何かが混ざり合ったのか、もはやわたしの身体でもカーズ様の肉体でもない何かに変貌している。「ベロニカ」の能力も影響しているかもしれない。

そんな……不思議な物体を両手でそっと包み込んで、わたしは勲章のように胸の上に乗せる。

「……せっかくだし、「スターシップ」の中に飾っとくよ。トロフィーみたいな感じで」

なぜか、それを捨てる気にはなれなかった。